國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 1995
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

毗曇部十五

木村泰賢
西義雄譯
坂本幸男

目次

阿毘達磨大毘婆沙論（全二百巻中 自巻第百五十五(續) 至巻第百七十三）〔三二一―三六一九〕（本 丁）……（通頁）一

巻の第百五十五（續）（第六編　根蘊）……〔三二一―三三〇〕……一

第五章　心と一起・一住・一滅する法と、心との相應等に關する論究……一

第一節　心と一起・一住・一滅する諸法と、心との相應・所緣關係（附、隨心轉の十義）……一

第二節　心を離れざる色法と、心との離・不離關係に就きて……三

第三節　眼根乃至意根の修・不修に就きて……四

第四節　學根を成就せずして學根を得するものに就きて……七

第五節　無漏根を捨して無漏根を得するものに就きて……八

第六節　一切の未知當知根は皆、四諦現觀するや不やに就きて……一三

第七節　盡智と無生智と無學の正見との五門分別……一五

第八節　初の盡智・無生智とその等無間、並びに初の盡智・無生智の所緣に就きて……一八

巻の第百五十六（第六編　根蘊）……〔三三一―三九六〕……二二

第九節　無學の正見・正思惟・正勤・正念・正定・正解脫・正智の相互相應關係に就きて……二七

第六章　二十二根の成就・不成就、並びに三性根を因と爲す根に關する論究……三〇

第一節　二十二根の隨一を成就するものは、二十二根の幾くを定んで成就し、及び成就せざるやに就きて……三〇

第二節　二十二根の隨一を成就するものは、三世の二十二根の幾くを定んで成就し、及び成就せざるやに就きて……三四

第三節　二十二根の隨一を成就せざるものは二十二根の幾くを定んで成就せず及び成就するやに就きて……四〇

第四節　二十二根の隨一を成就せざるものは三世の、二十二根の幾くを定んで成就せず、及び成就するやに就きて……四三

第五節　善・不善・無記の諸根は夫夫、善根・不善根・無記根を因と爲すやに關する論究……四六

第七章　根の因緣と所緣緣とに關する論究……五二

第一節　根の因緣と所緣緣との三世分別……五二

第二節　根の因緣と所緣緣との三性分別……五五

第三節　根の因緣と所緣緣との三界繫分別……五八

第四節　根の因緣と所緣緣との三學分別……六一

第五節　根の因緣と所緣緣との三斷分別……六三
第六節　根の因緣と所緣緣との四諦斷分別……六五
第七節　根の因緣の四諦斷と所緣緣の八智斷との關係……六八
第八節　根の因緣と所緣緣との八智斷分別……七四
第九節　根の因緣の八智斷と所緣緣の四諦斷との關係……八〇

卷の第百五十七（第七編　定蘊）……〔三九七―三二六〕……八七

第一章　得等に關する論究……八七

第一節　特に、得論の序說としての過・未無、現在無爲說及び成就・不成就非實有說の評破に就きて……八七
第二節　特に、得論に關する大綱論……九〇
第三節　三世の得と三世法・離世法との三世分別……九三
第四節　能得と所得との三性分別……九五
第五節　能得と所得との三界繫分別……九六
第六節　能得と所得との三學分別……九七
第七節　能得と所得との三斷分別……九八
第八節　特に、三世の非得と三世法・離世法との三世分別……九九
第九節　特に、非得と不所得法との三性分別、……一〇二
第十節　特に、非得と不所得法との界繫分別、……一〇三
第十一節　特に、非得と不所得法との三學分別、……一〇五
第十二節　特に、非得と不所得法との三斷分別、……一〇五

卷の第五十八（第七編　定蘊）……〔三三一七——三三三四〕……一〇七
第十三節　特に、得・非得に關する諸問題……一〇七
第十四節　特に、見・修・無學道所起の得及び四諦の得に關する論究……一一三
第十五節　特に、離繫得に關する論究……一一五
第十六節　特に、得論に關する諸問題……一二〇
卷の第五十九（第七編　定蘊）……〔三三三五——三三五二〕……一二五
第十七節　三性心と俱起する無色の三性分別……一二五
第十八節　三界心と俱起する無色の界繫分別……一三三
卷の第百六十（第七編　定蘊）……〔三三五三——三三七二〕……一四三
第十九節　三界心と俱起する無色の界繫分別（續）……一四三
第二十節　三學心と俱起する無色の三學分別……四一六
第二十一節　三斷心と俱起する無色の三斷分別……一五二
第二十二節　染靜慮の支に關する論究……一五八
卷の第百六十一（第七編　定蘊）……〔三三七三——三三八九〕……一六五
第二十三節　味相應の定に入出する等に關する論究……一六三
第二十四節　入定の次第に關する論究……一六七
第二十五節　入定せずして其の處に生ずるに就きて……一六九
第二十六節　下定を得するも上定を得せざるものの生處に就きて……一七一
第二十七節　特に、初靜慮乃至無所有處に依りて諸漏を盡すの經文に就きて……一七六

第二十八節　特に、定を因と爲す法と定の果との關係に就きて……一七七
第二十九節　特に、定地の心の捨・得と滅・起等に關する論究……一七七

卷の第六十二（第七編　定蘊）……〔三三九〇――三四一三〕……一八〇

第三十節　四無量と及びその等無間緣との行相に就きて……一八〇
第三十一節　無量・淨定・解脫・勝處・遍處の斷結に就きて……一八一
第三十二節　八智及び三三摩地の斷結に就きて……一八五
第三十三節　無量・淨定・解脫・勝處・遍處・智の異熟果を受くる處に就きて……一八七

第二章　八等至に於ける味應と淨と無漏との等至に關する論究……一九二

第一節　八等至と三等至とに就きて……一九二
第二節　初靜慮の三等至の成就・不成就に關する論究……一九五
第三節　初靜慮の三等至の得と捨と退とに關する論究……一九八
第四節　第二靜慮乃至無所有處の三等至の成・不成・得・捨・退に關する論究……二〇三

卷の第百六十三（第七編　定蘊）……〔三四一四――三四二六〕……二〇四

第五節　特に、順四分定に關する論究……二〇四
第六節　特に、修の種類及びその意義に關する論究……二〇六
第七節　淨の初靜慮と無漏の初靜慮との習修・得修に關する論究……二〇八

卷の第百六十四　（第七編　定蘊）……〔三四三七—三四四一〕……二一七

第　八　節　淨の初靜慮と無漏の初靜慮との習修・得修に關する論究（續）……二一七

第　九　節　淨の第四靜慮と無漏の第四靜慮との習修得修に關する論究……二二〇

卷の第百六十五　（第七編　定蘊）……〔三四四二—三四六二〕……二二三

第　十　節　無漏定に初めて入る時の所得の未來の無漏の心々所法の諸門分別二二三

第十一節　味相應と淨と無漏との靜慮・無色の相緣論……二三五

第十二節　定の順次順超・逆次逆超、特に超定の加行と成滿との論……二四八

卷の第百六十六　（第七編　定蘊）……〔三四六三—五四七九〕……二五三

第三章　等至と十想との相攝等に關する論究……二五三

第　一　節　十想論提起の緣由に就きて……二五三

第　二　節　十想の界地等の諸門分別……二五六

第　三　節　十想の中の轉と隨轉とに就きて……二六二

卷の第百六十七　（第七編　定蘊）……〔三四八九—三四九八〕……二七〇

第　四　節　十想は四靜慮・無量乃至八智・三三摩地の幾くを攝するやの論究……二七〇

第　五　節　靜慮乃至三摩地は靜慮乃至三摩地の幾くを攝するやの論究……二七五

第　六　節　十想乃至三三摩地は靜慮乃至三摩地の幾くを攝するやの論究……二八二

第　七　節　十想は四靜慮乃至三三摩地の幾くと相應するやの論究……二八三

第　八　節　靜慮乃至三摩地は靜慮乃至三摩地の幾くと相應するやの論究……二八四

巻の第百六十八（第七編　定蘊）……〔三四九九——三五二五〕……二八九
第九節　初靜慮を成就する者は、靜慮と無色との幾くを成就し幾くを成就せざるやの論究……二八九
第十節　初靜慮を成就する者は、八解脫・八勝處・十遍處の幾くを成就し、幾くを成就せざるやの論究……二九三
第十一節　初靜慮を成就する者は、八智と三三摩地との幾くを成就し、幾くを成就せざるやの論究……三〇三
第十二節　第二・三・四靜慮を成就する者は、靜慮乃至三摩地の幾くを成就し、幾くを成就せざるやの論究……三〇五
第十三節　七補特伽羅の味相應等の靜慮・無色の成就不成就論……三〇五
巻の第百六十九（第七編　定蘊）……〔三五二六——三五四八〕……三一六
第十四節　味相應と淨と無漏との四靜慮相互の成就・不成就の七句分別……三一六
第十五節　味相應と淨と無漏との四無色相互の成就・不成就の七句分別……三一九
第十六節　味相應と淨と無漏との四靜慮の得・捨に關する七句分別……三二〇
第十七節　味相應と淨と無漏との四無色の得・捨に關する七句分別……三二三
第十八節　味相應と淨と無漏との四靜慮・四無色の退に關する七句分別……三二四
第十九節　淨と無漏との靜慮等の退と、得・捨に關する種々なる場合の論究……三二五
第二十節　六十五等至の幾くが自地乃至一切地を緣ずるや……三二七
第二十一節　等至にして八等至を因緣となすものと等無間緣となすものと

の關係……………………………………………………三二八
第二十二節　等至にして八等至を因緣と爲すものと所緣緣と爲すものとの
關係に就きて……………………………………………三三四

卷の第百七十（第七編　定蘊）…………〔三五四七——三五六三〕

第二十三節　等至にして八等至を因緣と爲すものと所緣緣と爲すものとの
關係に就きて（續）………………………………………三三七
第二十四節　等至にして八等至を等無間緣と爲すものと所緣緣と爲すもの
との關係……………………………………………………三四一
第二十五節　種々なる場合に於ける等至の得・捨に就きて…………三五一
第二十六節　三乘各自は六十五等至中の幾くを成就するや…………三五二

卷の第百七十一（第七編　定蘊）…………〔三五六四——三五八四〕…………三五四

第二十七節　味相應と淨と無漏との四靜慮の頓得・頓捨と漸得・漸捨とに就きて三五四
第二十八節　味相應と淨と無漏との四無色の頓得・頓捨・漸得・漸捨に就きて…三五七
第二十九節　身語の表・無表は何の定に依りて滅するやの論究…………三五八
第　三　十　節　三惡行・三妙行・三不善根・三善根は何の定に依りて滅するや
に就きて……………………………………………………三六一
第三十一節　四非聖語と四聖語、及び四生と四種入胎と四識住とは總じて
何の定に依りて滅するやに就きて………………………三六二
第三十二節　特に、四非聖語及び四聖語論と、定に依る彼等の滅に就きて……三六二

第三十三節　特に四生は何の定に依りて滅するやに就きて……三六八
第三十四節　特に、四種入胎論と定に依る彼等の滅に就きて……三六八
第三十五節　四識住各自は何の定に依りて滅するやに就きて……三七二

巻の第百七十二（第七編　定蘊）……〔三五八四——三六〇二〕……三七四

第三十六節　五蘊・五取蘊・五趣・五妙欲・五學處は總じて何の定に依りて滅するやに就きて……三七四
第三十七節　特に、五蘊と五取蘊及び定に依る彼等個々の滅に就きて……三七四
第三十八節　五趣の總論……三七五
第三十九節　㮈落迦趣に就きて……三七七
第 四 十 節　傍生趣に就きて……三八二
第四十一節　特に、鬼趣に就きて……三八四
第四十二節　特に、人趣に就きて……三八六
第四十三節　天趣に就きて（附、阿素洛論）……三八七
第四十四節　一般民間信仰の諸神の五趣分別と、五趣の定に依る滅に就きて……三九〇

巻の第百七十三（第七編　定蘊）……〔三六〇三——三六一九〕……三九三

第四十五節　特に、五妙欲論と、定に依る彼の滅に就きて……三九三
第四十六節　特に、五學處と、定に依る彼の滅に就きて……三九七
第四十七節　六内處等の種々の六法門は何の定に依りて滅するやに就きての論究……三九八
第四十八節　七識住・八世法・九有情居・十業道は總じて何の定に依りて滅

するやに就きての論究……四〇〇
第四十九節　特に、七識住各自は何の定に依りて滅するやに就きて……四〇一
第五十節　特に、八世法と、定に依る彼の滅に就きて……四〇一
第五十一節　特に、九有情居と十業道とは何の定に依りて滅するやに就きて……四〇六
第五十二節　四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處は何の定に依りて滅するやに就きて……四〇七
第五十三節　他心智と世俗智とは何の定に依りて滅するやに就さて……四〇八

（根蘊第六中、一心納息第五之二）

[一]第五章　心と一起・一住・一滅する法と、心との相應等に關する論究

[二]第一節　心と一起・一住・一滅する諸法と、心との相應・所緣關係（附、隨心轉の十義）

【本論】　諸法にして心と一起・一住・一滅するものなれば、彼の法は心と相應するや。

[三]是くの如き等の章及び解意の義は既に領會し已れるをもて、當に廣く分別すべし。

問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、相應は實に非ずと說くものの意を止め――乃至廣說――んと欲するが故に、斯の論を作すなり。

【本論】　[四]諸法にして心と一起・一住・一滅するものなれば、彼の法は心と相應するや。答ふ、若し法にして心と相應するものなれば、彼の法は心と一起・一住・一滅す。謂く、一切の心所法なり。

【本論】　有る法は、心と一起・一住・一滅するも、彼の法は心と相應するに非ざるものあり。謂く、[五]隨心轉の色と、心不相應行となり。

此の中、起とは生を謂ひ、住とは老を謂ひ、滅とは無常を謂ふなり。

【本論】　[六]諸法にして心と一起・一住・一滅するものなれば、彼の法は心と同一所緣な

【一】　本章の內容を發智の頌文にて示せば次の如し。

「相應ト緣ト不離ト
不修ト修ト得スルトテ根ト
捨シスルト得ト未知根ト
五門辯ノ三智ト
初ト盡・無生智ト
盡・無生トノ所緣ト
七正ニ互スルト相應
此章願具說」

此の中、「相應」とは、心と一起・一住・一滅する諸法と、心との相應關係を明すなり。「緣」とは、心と一起・一住・一滅する諸法と心とが所緣を同じくするや否やを明すなり。「不離」とは、心と倶起する色法が心を離れざることを明すなり。「不修修」とは、眼等の六根を修せずと言ひ、或は修すると言ふは如何なる意なりやを明すなり。「得根」とは、學根を成就せずして學根を得するものに就きての論究をいふ。「捨得」とは、無漏根を捨して無漏根を得するものに就きての論究なり。「未知根」とは、未だ現觀せざ

りや。答ふ、若し法にして心と同一所緣なるものなれば、彼の法は心と一起・一住・一滅するなり。

謂く、一切の心所法なり。

【本論】有る法は心と一起・一住・一滅するも、彼の法は心と同一所緣に非ざるものあり。謂く、[七]隨心轉の色と心不相應行となり。

[八]問ふ、何が故に、復、此の論を作すや。答ふ、所緣は實に非ずと說くものの意を止め――乃至廣說――んと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[九]隨心轉の義に十種有り。謂く、一起と一住と一滅と一果と一等流と一異熟と、善なれば則ち善なると、不善なれば則ち不善なると、無記なれば則ち無記なると、墮一世中となり。一果とは離繫果を謂ひ、一等流とは等流果を謂ひ、一異熟とは異熟果を謂ひ、墮一世中とは、同一世の攝なるを謂ふ。此は總相を說くものなり。

[一〇]若し別說すれば、[一一]有漏の斷結道の中に、八隨轉の義有り。謂く、一起と一住と一滅と一果と一等流と一異熟と是れ善なると墮一世となり。[一二]有漏の加行と解脫と勝進との道の中と、及び餘の有漏の善心品とに、七隨轉の義有り。謂く、一起と一住と一滅と一等流と一異熟と是れ善なると墮一世となり。

[一三]無漏の斷結道の中にも亦、七隨轉の義有り。謂く、一起と一住と一滅と一果と一等流と是れ善なると墮一世となり。[一四]無漏の加行と解脫と勝進との道の中に、六隨轉の義有り。謂く、一起と一住と一滅と一等流と是れ善なると墮一世となり。

[一五]不善心品に七隨轉の義有り。謂く、一起と一住と一滅と一等流と一異熟と是れ不善なると墮一世となり。[一六]無記の心品に六隨轉の義有り。謂く一起と一住と一滅と一等流と是れ無記なると墮一世となり。

る四諦を一切の未知當知根は皆現觀するや否やを明すなり。

「五門辯三智」とは、盡智と無生智と無學の正見との三智の智分別等の五門分別をなすをいふ。

「初盡・無生智」とは、最初の盡智及び無生智とその等無間との關係を明すなり。

「盡・無生所緣」とは、盡智と無生智との所緣の同異を明すなり。

「七正互相應」とは、無學の正見乃至正智の相互相應關係を明すをいふ。

【二】本節は心と一起・一住・一滅する法と心とが相應するや否や、又所緣を同じくするや否やに關する論究をなし、その謂はば傍論として隨心轉の十義に就きて論ずる段なり。

尙、隨心轉に關しては、婆沙十六―七（毘曇部七）の俱有因の項を參照すべし。因みにこは發智論の頌文の「相應緣」に相當する段なり。

【三】論起の因由。

【四】心と一起・一住・一滅する法は心と相應するや否やに就きて、

因みに一起・一住・一滅とは同時に起り、同時に住し、同時に滅するの義なり。

【五】茲に、隨心轉の色とは、

一七 又、心心所法を展轉相望むるに、五因緣に由りて說きて隨轉と名く。謂く、所依の故にと所緣の故にと行相の故にと果の故にと異熟の故にとなり。心と隨心轉の色と心不相應行とを展轉相望むるに、二因緣に由るが故に說きて隨轉と名く。謂く、果の故にと異熟の故にとなり。隨轉の義を廣く說くこと、一八 雜蘊の如し。

一九 **第二節 心を離れざる色法と、心との離・不離關係に就きて**

【本論】 諸法にして、心と俱起し心を離れざるものなれば、彼の法は心と俱住し俱滅し心を離れざるや。乃至廣說。

二〇 問ふ、何が故に、復、此の論を作すや。答ふ、二一 前納息中、心、心所法等の刹那滅を明せりと雖も、未だ色等を辯ぜざるをもて、今、之れを辯ぜんと欲するが故に、斯の論を作すなり。又、三刹那論沙門の執を遮止せんが爲めの故なり。謂く、沙門有り、諸の色法は三刹那住すと說き、心心所は刹那にして則ち滅すと說くなり。彼れに復、二種あり、一は雜生論にして、二は次第論なり。二二 雜生論者は、是くの如き言を作す「初の眼根に依りて初の眼識を生ずるとき、彼れ等、俱生し已りて眼根は住するも眼識は滅す。第二の眼根に依りて第二の眼識を生ずるとき、彼れ等俱生し已りて眼根は住するも、眼識は滅す。第三の眼根に依りて第三の眼識を生ずるとき、彼れ等俱生し已りて、眼根は住するも、眼識は滅す。當に知るべし、卽ち、此の眼識は、初の眼と俱滅することを」と。問ふ、彼れに何の過有りや。答ふ、彼の初の眼識は所依生ずること有るも、所依滅すること無く、第二の眼識も亦、爾り。第三の眼識は所依生ずること有り、所依滅すること有りと雖も、而も是は他の所依なり。是れを彼の過と謂ふなり。識は所依に隨つて生滅有るが故に。二三 次第論者は是くの如き言を作す「初の眼根に依りて初の眼識を生ずるとき、彼れ俱生し已りて眼根は住するも、眼識は滅す。次に復、彼れに依りて第二の眼識を生ずるとき眼根は住するも、眼識は滅す。後復、彼れに依りて、

道共戒・定共戒の身・語業の無表色を謂ひ、心不相應行とは得と、生・住・異・滅の四相とを謂ふ。而して此等俱有法が、心と相應せざるは、心所法に非らざるを以て相應の義なければなり。

【六】 **心と一起・一住・一滅する法は心と同一所緣なりや否やに就いて、**

【七】 隨心轉の色と心不相應行法とは共に緣慮の法に非ざるを以て所緣を有すること無し。故に心と同一所緣に非ざるなり。

【八】 **論起の因由。**

【九】 **隨心轉の十義の總說。**

【一〇】 **隨心轉の十義の別說。**

【一一】 有漏の斷結道中の八隨轉の義――

【一二】 有漏の、加行・解脫・勝進道中と善心品との七隨轉の義――因みに茲に一果の義無きは、これは斷道に非ざるを以て離繫を得するの義なければなり。

【一三】 無漏の斷結道中の七隨轉の義――因みに茲に一異熟の義無きは、これは無漏なるを以て、異熟果を招かざればなり。

【一四】 無漏の加行・解脫・勝進道中の六隨轉の義――

【一五】 不善心品の七隨轉の義

第三の眼識を生ずるとき、此の識は眼と倶時に滅するなり」と。問ふ、彼れに何の過有りや。答ふ、彼の初の眼識は所依、生ずること有るも、所依滅すること無く、第二の眼識は所依生ずること無く、所依滅することも無し、第三の眼識は所依生ずること無きも所依滅すること有り。是れを彼の過と謂ふ。識は所依に隨つて生・滅有るが故に。又、彼の二論に餘の共過有り。謂く、人趣より[二四]歿して地獄に生ずる時、人趣を未だ捨し已らざるに、地獄を得するなり。是くの如くなれば、則ち趣雜亂し身雜亂す。趣雜亂すとは、謂く彼の有情は是れ地獄趣にして亦、是れ人趣なり。身雜亂すとは、謂く彼の有情は地獄身を有し、亦、人身を有す。卽ち大過と爲るなり。[二五]彼の論の意に依れば、若し無想定滅盡定に入る時は、諸根の大種は心と倶起し心を離れざるに、然かも、彼れは心を離れて而も住し、心を離れて而も滅するなり。彼の執を遮せんが爲の故に、斯の論を作すなり。

【本論】[二六]諸法にして心と倶起し心を離れざるものなれば、彼の法は、心と倶住し倶滅して心を離れざるや。答ふ、欲・色界の有情にして無想定、滅盡定に住せざるものなれば諸根の大種は、心と倶起し心を離れず、心と倶住し、倶滅して心を離れず。若し無想・滅盡定に住するものなれば、彼れは便ち心を離る。問ふ、云何んが心を離るるや。答ふ、彼れは心を離れて起り、心を離れて住し、心を離れて滅す、心心所は彼の相續を斷ずるが故に。

[二七]第三節　眼根乃至意根の修・不修に就きて

【本論】說くが如し「眼根乃至意根を修せず」と。云何んが、眼根を修せざるや。

——乃至廣說。

修に四種有り。謂く、得修・習修・對治修・除遣修なり、具さに辯ずること[二八]智蘊の如し。今は後の

【一六】無記心品の六隨轉の義

【一七】隨轉と名くる因緣に就いて、一、心心所相望の時は五因緣に依る、二、心と、隨轉色・心不相應行法と相望する時は二因緣に依る。

【一八】雜蘊とは、雜蘊第一中、智納息、第二（發智論、卷第一、大正・二六・頁九二〇下、婆沙論卷第十六―七、毘曇部七、頁三一五以下）參照。

【一九】本節は、心と倶起して心を離れざる色法、卽ち諸根の大種は、心と倶住し倶滅し心を離れざることを明し、以て、或る心と倶起せし色法が、その心を離れて住し又、滅することありと主張する所謂三剎那論者の異執を破するをその目的とす。

因みにこは發智論の頌文「不離」に當る段なり。

【二〇】論題提起の理由と、三剎那論者の評破。

【二一】前納息とは、根蘊第六中、等心納息第四（婆沙百五十一卷毘曇部十四、頁三二一三）を指す。

【二二】特に雜生論者の色三剎那住說と其の評破。

【二三】特に次第論者の色三剎

二修に依りて論を作すなり。

二九 問ふ、眼等の根を、云何が修せざるや。復、云何んが修するや。答ふ、乃至眼等の諸根の對治道が未だ生ぜざるを根を修せずと名く。此は對治修に依りて說くなり。又、乃至、眼等を緣ずる所有の煩惱を未だ斷ぜずまだ遍知せざるを、根を修せずと名く。此は除遣修に依りて說くなり。若し眼等の諸根の對治道が已に生ぜば、名けて根を修すと爲す。此は對治修に依りて說くなり。又、眼等を緣ずる所有の煩惱を已に斷じ已に遍知せば、名けて根を修すと爲す。此は除遣修に依りて說くなり。是れを此處に略毘婆沙と謂ふ。

【本論】三〇 云何んが、眼根乃至身根を修せざるや。答ふ、若しくは眼根に於て、未だ貪を離れず、未だ欲・潤・憙・渴を離れざると、又、無間道は能く色貪を盡くすに、彼れは此の道に於て、未だ修せず未だ安ぜざるとをいふ。眼根を修せざるが如く、耳・鼻・舌・身根を修せざることにつきても亦、爾り。

三一 若しくは眼根に於て、未だ貪を離れずとは、眼に於て、未だ愛を離れざるを謂ひ、未だ欲を離れずとは、愛の欲に於て未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ひ、未だ潤を離れずとは、愛の潤に於て未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ひ、未だ憙を離れずとは、愛の憙に於て未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ひ、未だ渴を離れずとは、愛の渴に於て未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ふ。又、無間道は能く色貪を盡くすとは、無間道は能く色界の愛を盡くすを謂ひ、彼れは此の道に於て未だ修せず未だ安ぜずとは、未だ修習せざると及び未だ安息せざるとを謂ふ。修とは習修を謂ひ、安とは、得修を謂ふなり。又、起を修と名け、滅を安と名く。又、已生を修と名け、已滅を安と名く。應に知るべし、此の中、若しくは眼根に於て未だ貪を離れず等とは、對治修に依りて說き、或ひは除遣修に依りて說くことを。又、無間道は能く色貪を盡くす等とは、除遣修に依りて說き、或ひは對治修に依りて說

那住說と其の評破。

【二四】 歿は大正本に沒とあるも、三本に從つて歿と改む、(但し縮藏の校訂に據る)

【二五】 若し色の三刹那住說を認むれば、二無心定に入る直前一刹那の心と俱起せし諸根の大種は、三刹那住せざるべからざるに、第二刹那に、無心定に入れば心は滅して起らざるを以て、其の時の諸根の大種は、心を離れて住し、心を離れて滅すといふことに爲るなり。

【二六】 **心を離れざる法と心との俱住・俱滅の關係に就きて、**

【二七】 本節は對治修・及び除遣修の立場より眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を修せず、或は修すとは如何なる義なりやに就いて其の解說を試みるを其の課題とす。因みに發智の頌文の「不修修」に相當する段なり。

【二八】 智蘊とは、智蘊第三中、他心智納息第三、(婆沙百五卷、毘曇部十二、一頁、一一二)を指す。

【二九】 **眼等の六根の修・不修に關する略毘婆沙。**

【三〇】 **眼・耳・鼻・舌・身根の不修に就きて、**眼根等の不修に關する發智論の說明文の毘婆沙師の解釋に五說あり。

くことを。

三一有るが説く「若しくは眼根に於て未だ貪を離れず等とは、眼根を縁ずる愛を未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ひ、又、無間道は能く色貪を盡くす等とは、眼根を縁ずる餘の煩惱を未だ斷ぜず未だ遍知せざるを謂ふなり」と。

三三有るが説く「若しくは眼根に於て未だ貪を離れず等とは、未だ繫の得を斷ぜざるを謂ひ、又、無間道は能く色貪を盡くす等とは、未だ離繫得を證せざるを謂ふなり。未だ繫の得を斷ぜざると、未だ離繫得を證せざるとの如く、是くの如く、未だ過失を損減せざると未だ功德を修習せざると、未だ下劣を棄てざると未だ勝妙を證せざると、未だ無義を捨せざると未だ有義を得せざると、未だ有愛の熱惱を除かざると未だ無愛の快樂を受けざるとも應に知るべし亦、爾ることを」と。

三四有るが説く「若しくは眼根に於て未だ貪を離れず等とは、無間道が未だ作用を起さざるを謂ひ、又、無間道は能く色貪を盡くす等とは、解脫道が未だ作用を起さざるを謂ふ」と。

三五有るが説く「若しくは眼根に於て未だ貪を離れず等とは、未だ欲界乃至第三靜慮の染を離るること能はざるを謂ひ、又、無間道は能く色貪を盡くす等とは、未だ、第四靜慮の染を離るること能はざるを謂ふなり」と。

眼根を修せざるが如く、餘の四根を修せざることにつきても亦爾り。

【本論】三六云何んが、意根を修せざるや。答ふ、若しくは意根に於て、未だ貪を離れず、未だ、欲・潤・憙・渴を離れざると、又、無間道は能く無色の貪を盡くすに、彼れは此の道に於て未だ修せず、未だ安ぜざるとをいふなり。

若しくは意根に於て未だ貪を離れずとは、意に於て未だ愛を離れざるを謂ひ、餘の句は前の如し。又、無間道は能く無色の貪を盡くすとは、無間道が能く無色界の愛を盡くすを謂ふ。未だ修せず、

【三一】第一説――

【三二】第二有説――

【三三】第三有説――

【三四】第四有説――

【三五】第五有説――

【三六】**意根の不修に就きて** これにも亦、五説あること前の眼根不修の場合の如し。

未だ安せざるといふにつきては前説の如し。應に知るべし、此の中、若しくは意根に於て未だ貪を離れず等とは、對治修に依りて説き、或は除遣修に依りて説くことを。又、無間道は能く無色の貪を盡くす等とは、除遣修に依りて説き、或は對治修に依りて説くことを。

次に三説有ること、前の如く應に知るべきなり。

第五の有説は「若しくは意根に於て未だ貪を離れず等とは、未だ欲界乃至無所有處の染を離るることを能はざるを謂ひ、又無間道は能く無色の貪を盡くす等とは未だ非想非非想處の染を離るること能はざるを謂ふなり」と。

【本論】 説くが如し「眼根乃至意根を修す」と。三七 云何んが眼根乃至身根を修するや。答ふ、若しくは、眼根に於て、已に貪を離れ、已に欲・潤・憙・渇を離るゝと、又、無間道は能く色貪を盡くすに、彼れは、此の道に於て已に修し已に安ずるとをいふなり。眼根を修するが如く、耳・鼻・舌・身根を修するにつきても亦、爾り。

三八 云何んが意根を修するや。答ふ、若しくは意根に於て已に貪を離れ、已に欲・潤・憙・渇を離るゝと、又、無間道は能く無色の貪を盡くすに、彼れは此の道に於て已に修し已に安ずるとをいふなり。

此の諸の文句は應に前の不修と相違して廣説すべきなり。

三九 第四節　學根を成就せずして學根を得するものに就きて

【本論】 諸の學根を成就せずして、學根を得するもの――乃至廣説。

四〇 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、退に愚なるものが退は有に非らずと執するをもて、彼の意を遮し、退は實有なることを顯はさんが爲めの故に斯の論を作すなり。

【三七】 眼・耳・鼻・舌・身根の修に就きて

【三八】 意根の修に就きて、

【三九】 本節は學根を成就せずして學根を得する者に、異生より聖者になる者と、阿羅漢果より退する者とあることを明かす段にして、これを發智論の頌文に當嵌むれば「得根」に當るものなり。

【四〇】 論起の因由としての退非實有説の破斥。

【本論】[四一]諸の學根を成就せずして學根を得するもの、彼の一切は正性離生に入るものなりや。答ふ、若し正性離生に入るものなれば、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するものなり。有るは、學根を成就せずして學根を得するも、彼れは正性離生に入るに非ざるものあり。謂く、阿羅漢果を退する時なり。

彼は諸の學根を先に捨し、今、得すればなり。

【本論】[四二]諸の學根を成就せずして學根を得するもの、彼の一切は、世第一法の等無間なりや。答ふ、若し世第一法の等無間なれば、彼の一切は學根を成就せずして學根を得するものなり。有るは學根を成就せずして學根を得するも、彼れは世第一法の等無間に非ざるものあり。謂く、阿羅漢果を退する時なり。

彼は諸の學根を先に捨し、今、得すればなり。

問ふ、何が故に、復、此の論を作すや。答ふ、前には入正性離生の自體を顯示せりと雖も、而も未だ彼れに入る等無間緣を顯示せざりしをもて、今、之れを顯はさんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

第五節[四三]　無漏根を捨して無漏根を得するものに就きて

【本論】[四四]諸の無漏根を捨して無漏根を得するもの、彼の一切は果より果に至るや。答ふ[四五]、若し果より果に至るものなれば、彼の一切は、無漏根を捨して無漏根を得す。

謂く、預流者が、一來果を證する時、預流果に攝する無漏の諸根と及び勝果道の無漏の諸根とを捨して、一來果に攝する無漏の諸根を得す。果より果に至るものとは、預流果より一來果に至るをいふ。一來者が不還果を證する時と、不還者が阿羅漢果を證する時とも、應に知るべし、亦、爾るこ

【四一】**學根を成就せずして學根を得するものは、入正性離生者なりや否や。**

【四二】**學根を成就せずして學根を得するものは世第一法の等無間なりや否や。**

【四三】本節は無漏根を捨して無漏根を得するものに、(一)果より果に至るものと、果より果に至らざるもの(卽ち現觀邊の道類智を起す時と練根する時)とあることと、(二)無漏根を捨して無漏根を得するものは一切皆、無漏根を滅し無漏根を起すや否やに就きて四句分別をなすこととの二種の問題を取り扱へる段にして、こは發智の頌文の「捨得」に當るものなり。

【四四】**無漏根を捨して得するものは、果より果に至るや否や。**

【四五】無漏根を捨して得するものにして果より果に至る場合――これに果を證する場合と、果より退する場合との二種あり。

とを。

果を證する時の如く、果より退する時も亦、爾り。

【本論】[四六]有るは無漏根を捨して無漏根を得するも、彼れは果より果に至るに非ざるものあり。謂く現觀邊の道類智を起す時と、若しくは時解阿羅漢が、練根して不動と作る時となり。

問ふ、[四七]道類智を起す時は爾るべきも、時解脫阿羅漢が練根して不動と作る時は、云何にして爾るべきや。答ふ、此の文は但、應に現觀邊の道類智を起す時のみを說くべく、應に餘を說くべからざるに、而も餘を說くは、此の中、但、異類の果より異類の果に至ることを說くものなることを顯はさんと欲するなり。時解脫阿羅漢が練根して不動と作る時は、[四八]性類は別なりと雖も、果類は別ならざるが故に、果より果に至ると名けざるなり。

【本論】[四九]諸の無漏根を捨して無漏根を得するもの、彼の一切は、無漏根を滅し無漏根を起すや。答ふ、應に四句を作すべし。

[五〇]（一）有るは無漏根を捨し無漏根を得するも、彼れは、無漏根を滅し無漏根を起すに非ざるものあり。謂く、阿羅漢と不還と一來との果を退する時と、及び世俗道を以つて一來・不還果を得する時となり。

爾の時、無漏は現前せざるが故に。

【本論】[五一]（二）有るは無漏根を滅し無漏根を起すも、彼れは、無漏根を捨し無漏根を得するに非らざるものあり。謂く、已に得の無漏根を現前して滅し起すものなり。

卽ち、先に已に得せし一切の果と向との無漏の諸根を相續して起し滅するときには、彼れは得す

【四六】無漏根を捨して得するも果より果に至らざる場合——

【四七】現觀邊の道類智を起す時は、見道位所攝の無漏根を捨して、修道位所攝の無漏根を得し、而も初めて得果するが故に、果より果に至るに非ざるなり。

【四八】玆に性類は別なりとは、時解脫阿羅漢は退性なるに、不動阿羅漢（不時解脫）は退性に非ざるをいふなり。（俱舍二五）。

【四九】無漏根を捨して得するものは、無漏根を滅し起すや否や。これに四句分別あり。

【五〇】第一單句——

【五一】第二單句——

るにも非らず、曾得道を起して現在前するが故に。亦、捨するにも非ず、聖道は唯、三時にのみ捨するに、彼れは此の時に非ざるが故に。——一に退時、二に得果時、三に練根時なり。

【本論】[五二](三)有るは無漏根を捨し無漏根を得し、彼れは亦、無漏根を滅し無漏根を起すものあり。謂く、現觀邊の道類智を起す時と及び無漏道を以つて、一來・不還果を得する時と、阿羅漢果を得する時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作る時となり。

現觀邊の道類智を起す時、無漏根を捨すとは、見道所攝のものを謂ひ、無漏根を得すとは、修道所攝のものを謂ひ、無漏根を滅すとは、道類忍と倶生する品を謂ひ、無漏根を起すとは、道類智と倶生する品を謂ふ。

無漏道を以つて一來果を得す時、無漏根を捨すとは、預流果に攝するものと及び勝果道とを謂ひ、無漏根を得すとは、一來果に攝するものを謂ひ、無漏根を滅すとは、第六無間道に攝するものを謂ひ、無漏根を起すとは、第六解脫道に攝するものを謂ふ。

無漏道を以つて不還果を得するも、應に隨つて亦、爾り。

阿羅漢を得する時、無漏根を捨すとは、不還果に攝するものと及び勝果道とを謂ひ、無漏根を得すとは、阿羅漢果に攝するものを謂ひ、無漏根を滅すとは、金剛喩定と倶生する品を謂ひ、無漏根を起すとは、初盡智と倶生する品を謂ふ。

時解脫阿羅漢が練根して不動と作る時、無漏根を捨すとは、時解脫道に攝するものを謂ひ、無漏根を得すとは、不時解脫道に攝するものを謂ひ、無漏根を滅すとは、[五三]第九無間道に攝するものを謂ひ、無漏根を起すとは、第九解脫道に攝するものを謂ふ。

餘位の練根につきては略なるが故に說かざるなり。

【本論】[五四](四)有るは無漏根を捨するにも無漏根を得するにも非ず、彼れは亦、無漏

【五二】第三倶是句——

【五三】有學が練根する時は一無間道、一解脫なるに、無學が練根する時は九無間道、九解脫なるが故に、並に第九無間道、第九解脫道と云へるなり。(倶舍二五)。

【五四】第四倶非句——

根を滅するにも無漏根を起すにも非ざるものあり。謂く、前相を除くものなり。

[五五] 此の中、相の聲は、名ざす所に依りて轉ず、即ち、前三句に攝せざる所の法を第四句と爲すなり。此は復、云何ん。謂く、[五六]諸の異生位乃至増上の忍位は、無漏根に於て、捨するにも非ず、得するにも非ず、滅するにも非ず、起すにも非ざるなり。世第一法に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ずして、而して[五七]得し、滅するに非ずして、而して起すなり。

[五八] 若し諸の聖者にして苦法智忍乃至道法智に住する時は、無漏根に於て捨するに非ざるも、而も得し、亦、滅し亦、起すなり。道類智忍に住する時は、無漏根に於て、亦は[五九]捨し亦は得し亦は滅し亦は起すなり。

[六〇] 預流果より一來果を證する時、世俗道を以つてするものが、若し無漏道を加行と爲し加行道に住する時は、無漏根に於て、[六一]捨するに非ざるも而も得し、滅するも而も起すに非ざるなり。若し世俗道を加行と爲し、加行道・五無間道・五解脱道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するにも非ず起すにも非ざるなり。第六無間道に住する時は、無漏根に於て、亦、捨し亦得し、滅するにも非ず起すにも非ざるなり。無漏道を以つてするものが、若し世俗道を加行と爲し、加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ざるも而も起す。若し無漏道を加行と爲し、加行道・五無間道・五解脱道に住する時は、捨するに非ざるも而も得し、亦、滅し、亦、起すなり。第六無間道に住する時は無漏根に於て、亦、捨し亦、得し亦、滅し亦、起すなり。

[六二] 一來果より不還果を證するにつきては、應に隨つて亦、爾り。

[六三] 不還果より阿羅漢を證するものにつきて、初靜慮の染を離るる時、世俗道を以つてするものが、若し無漏道を加行と爲し、加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅す

【五五】 以下の文に就きては婆沙九十四巻、(毘曇部十一、頁二六二)の「四通行の得捨に就きて」の文と及び婆沙百七巻、(毘曇部十二、頁、一五二)の「八智の習修・得修に就きての補特伽羅分別」の文とを比較參考すべし。

【五六】 **異生は無漏根に於て捨・得・滅・起すること無し。**

【五七】 茲に「得す」とは、世第一法は唯、一刹那にして次刹那には必ず苦法智忍を起すが故に、其の點にて無漏根を得すと云へるものなり、「起す」に就きても亦、爾り。因みに世第一法には無漏智の未來修無きなり。

【五八】 **見道位の聖者の無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて。**

【五九】 茲に捨すとは見道所攝の無漏根を捨するを謂ひ、得すとは修道所攝のものを得するをいひ、滅すとは、道類智忍品を滅するをいひ、起すとは道類智品を起すをいふ。

【六〇】 **預流果より一來果を證するものの、無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて**

【六一】 茲に「捨するに非ず」とは、未だ一來果を得せざるが故に預流果所攝の無漏根を捨せざるをいひ、「而も得す」とは、未來に無漏智を修する

るも而も起すに非ず。若し世俗道を加行と爲し、加行道・九無間道・九解脫道に住する時は、無漏根に於て捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ず、起すに非ざるなり。無漏道を以つてするものが、若し世俗道を加行と爲し、加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ざるも而も起すなり。若し無漏道を加行と爲し加行道・九無間道・九解脫道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、亦、滅し亦、起すなり。初靜慮の染を離るゝが如く、乃至無所有處の染を離るゝも亦、爾り。非想非非想處の染を離るゝ時、若し世俗道を加行と爲し、加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ざるも而も起すなり。若し無漏道を加行と爲し加行道・八無間道・八解脫道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、亦、滅し亦、起すなり。第九無間道に住する時は無漏根に於て、亦、捨し亦、得し、亦、滅し亦、起すなり。

六四 信勝解が練根して見至と作る時、若し世俗道を加行と爲し、加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ざるも而も起すなり。若し無漏道を加行と爲し加行道に住する時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、亦、滅し亦、起すなり。六五 無間道に住する時は、無漏根に於て、亦、捨し亦、得し亦、滅し亦、起すなり。

六六 時解脫阿羅漢が練根して不動と作る時は、非想非非想處の染を離るゝ說の如し。

六七 雜修靜慮の初刹那の時は無漏根に於て、六八 捨するに非ざるも而も得し、滅するも而も起すに非ず。第二刹那の時は無漏根に於て捨するに非ざるも而も得し、滅するに非ざるも而も起すなり。第三刹那の時は、初刹那の說の如し。

六九 若しくは七〇 五通を引發する五無間道・七一 三解脫道の時、若しくは七二 無量・世俗の解脫・勝處・遍處・不淨觀・持息念・世俗の念住・世俗の無礙解・無諍・願智・邊際定・空空・無願無願・無相無相・入滅定

をいふ。

「滅す」とは、無漏の加行道所斷の根を滅するをいひ、「起すに非らず」とは無間道が有漏なるを以つて無漏根を起さざるをいふ。

【六二】一來果より不還果を證するものの、無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて。

【六三】不還果より阿羅漢果を證するものの、無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて。

【六四】信勝解が練根して見至となる時の無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて、

【六五】有學が練根する時は、一無間道・一解脫道のみなれば、茲には單に無間道とのみ云ひて、無學の場合の如く八無間道と第九無間道とを區別せざるなり。

【六六】時解脫が練根して不動と作る時の無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて。

【六七】雜修靜慮時の無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて、

因みに雜修靜慮とは、阿羅漢或は上流般不還が先づ第四靜慮に入り多念の無漏を相續して現前し、之より多念の有漏を引生し、後に復、多念の無漏を現前す、是くの如く旋還して後後に漸く減じ、最後に二

の想・微細等を起す時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、滅するにも非ず、起すにも非ざるなり。若しくは無漏の他心通を起す時、若しくは、無漏の念住と無漏の解脫と無漏の無礙解等とを起す時は、無漏根に於て、捨するに非ざるも而も得し、亦、滅し亦、起すなり。若しくは、[七三]微微心を起す時、若しくは、[七四]聞・思慧等を起す時は、無漏根に於て捨するにも非ず、得するにも非ず、滅するにも非ず、起すにも非ざるなり。

是くの如き等の差別位中に於て、其の所應に隨つて、第四句を爲すをもて、是の故に略して「前相を除く」の言を説くなり。

第六節[七五] 一切の未知當知根は皆、四諦現觀するや不やに就きて

【本論】 諸の未知當知根――乃至廣説。

[七六]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、疑者をして、決定を得せしめんが爲めの故なり。[七七]品類足論に説くが如し、「云何んが未知當知根なりや。答ふ、未だ已に見諦せず、未だ已に現觀せざる者の諸の學の慧と慧根と、[七八]若しくは諸根の、隨信・隨法行のものにして未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するものとなれば、是れを未知當知根と名く」と。彼の文は但、現在の和合し能く荷擔し作用有るもののみを未知當知根と説くも、過去・未來のは非らざるをもて。「唯、現在の和合し能く荷擔し、作用有るもののみは是れ未知當知根なるも、過去・未來のは非らず」との疑を生ずること有ること勿れ。彼の疑をして決定を得せしめんが爲めの故に、三世に在るは皆、是れ此の根なることを顯はすなり。故に斯の論を作すなり。

【本論】[七九] 諸の未知當知根の彼の一切は、現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するや。

答ふ、應に四句を作すべし。

（一）有るは未知當知根にして、彼れは未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するに

の無漏、次に二念の有漏を引生し、無間に二念の無漏を生ずるを雜修靜慮の加行成滿と名け、次に、唯、一念の無漏より一念の有漏を引起して現前し、無間に復、一念の無漏を生ずるを雜修靜慮の圓成と名くるなり。而して、前の無漏と有漏との二刹那は無間道に似、第三刹那の無漏は解脫道に似ると稱せらる。（俱舍二四）。

【六八】 茲に「捨するに非ざるも而も得す」とは、雜修靜慮の初刹那は、得果・退果・練根の三時に非ざるが故に無漏根を捨すること無く、又未來に無漏を修するが故に、「而も得す」といふなり。次に「滅するも而も起すに非ず」とは、雜修靜慮の初刹那には無漏心が現前し、第二刹那には有漏心が現前するが故なり。又、第二刹那の場合は、第二刹那には有漏心が現前し第三刹那には無漏心が起るが故に、「滅するに非ざるも而も起す」となり。（婆沙百七卷、毘曇部十二、頁一五六參照。）

【六九】 **五遍乃至聞・思慧を起す時の無漏根に於ける捨・得・滅・起の關係に就きて、**

【七〇】 五通とは、神境智證通(ṛddhi-viṣaya-jñāna-sākṣātkriyābhijñā) 天眼智證通 (di-

非ざるものあり。謂く、未知當知根の過去、或は未來に在るものなり。

彼れには未知當知根の相有るが故に、亦、未知當知根と名く。然かも未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するに非らず、過去のは作用已に息み、未來のは作用未だ起らざるが故に。

【本論】(二)有るは未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するも、彼れは未知當知根に非ざるものあり。謂く、諸の非根法にして未だ現觀せざる四聖諦に於て、能く現觀するものなり。

此は復、云何ん。謂く、[八〇]想・思・觸・作意・欲・勝解・慚・愧・無貪・無瞋・輕安・捨・不放逸・不害・尋伺・[八一]隨心轉の色、心不相應行、是くの如き諸法は未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀すと雖も、而も未知當知根に非ず、[八二]九根を合して以つて此の根と爲すが故に。

【本論】(三)有るは未知當知根にして、彼れは亦、未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するものあり。謂く、未知當知根にして未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するものなり。

即ち現在の和合し能く荷擔し作用有る未知當知根なり。

【本論】(四)有るは未知當知根にも非ず、彼れは亦、未だ現觀せざる四聖諦に於て能く現觀するにも非ざるものあり。謂く、前相を除くものなり。

即ち前の三句に攝せざる所の法を第四句と爲す。此は復、云何ん。謂く、三世の未知當知根の自性と、及び現在の此の根と相應し俱有する非根性とを除く諸餘の過去・未來の此の根と相應し俱有する非根法と、及び已知根・具知根と俱生する品と、一切の有漏の心心所法と、餘の色と、心不相應行と、及び無爲とは、皆、是の第四句なり。故に前相を除くと言ふなり。

---

vya-cakṣuḥ-j.) 天耳智證通(divya-śrotra-j.) 他心智證通(paracetaḥparyāya-j.) 宿住隨念智證通(pūrvanivāsānusmṛti-j.) を云ひ、此の中、神境通等の四は唯、世俗智の攝にして他心智は有漏・無漏智に通ず。皆、解脫道の攝なり。詳しくは婆沙百四十一卷(毘曇部十四、頁、一四二)を參見すべし。

【七二】 玆に三解脫道といへるは、五通中より眼・耳識と相應する無記の慧たる、天眼・天耳の二通を除く他の三通の解脫道を指す。天眼・天耳の二通は無記なるが故に、修すること無きを以て之を除くなり。(婆沙百七卷、毘曇部、十二頁一五六參照。)

【七三】 無量(apramāṇa)とは、慈・悲・喜・捨の四無量をいひ、皆、世俗智と俱なり。詳しは、婆沙八十一卷(毘曇部十一、頁、一)を參照せよ。
解脫(vimokṣa)とは、八解脫をいひ、就中、前三無色解脫は有漏・無漏に通ずるも、他は皆、有漏のみなり。婆沙八十四卷(同、頁五一)參照。
勝處(abhibhāyatana) とは八勝處をいひ、こは皆、世俗智と俱なり。婆沙八十五卷、(同、頁六六)參照。
遍處(kṛtsnāyatana)とは、十

未知當知根の如く、已知根・具知根も其の所應に隨つて廣說すること亦、爾り。

第七節　盡智と無生智と無學の正見との五門分別 (八三)

【本論】　盡智は當に盡智乃至道智なりと言ふべきや。(——乃至廣說)——當に有尋有伺乃至無尋無伺なりと言ふべきや。當に樂根乃至捨根と相應すと言ふべきや。當に空乃至無相と相應すと言ふべきや。當に欲界繫を緣じ乃至不繫を緣ずと言ふべきや。

盡智の如く、無生智と無學の正見とも亦、爾り。

問ふ、何が故に、此の中に三智を分別するや。答ふ、是は本論師の意欲爾るが故なり。乃至廣說。

【本論】　答ふ、(八四)盡智は當に盡智なりと言ふべし。

謂く、盡智とは自から我れ已に苦を遍知し、我れ已に集を永斷し、我れ已に滅を證し、我れ已に道を修せりと了知するをいふなり。

【本論】　或は法智なり。

謂く、自から我れ已に欲界繫の苦を遍知し、我れ已に欲界繫の集を永斷し、我れ已に欲界繫の諸行の滅を證し、我れ已に欲界繫の諸行の道を修せりと了知するをいふなり。

【本論】　或は類智なり。

謂く自から、我れ已に色・無色界繫の苦を遍知し、我れ已に色・無色界繫の集を永斷し、我れ已に色・無色界繫の諸行の滅を證し、我れ已に色・無色界繫の諸行の道を修せりと了知するをいふなり。

【本論】　或は苦智なり。

謂く、自から我れ已に三界繫の苦を遍知せりと了知するをいふなり。

【本論】　或は集智なり。

遍處をいひ、皆世俗智と俱なり。婆沙八十五卷(同、頁七三)參照。不淨觀(aśubhabhāvanā)は世俗智と俱なり。婆沙四十卷(毘曇部八、頁三四九以下)參照。持息念(ānāpānasmṛti)は世俗智と俱なり、婆沙二十六卷(同、頁、六五)參照。念住(smṛty-upasthāna)とは、身・受・心・法の四念住をいひ、こは有漏・無漏に通ず。婆沙百八十七卷、參照。無礙解(pratisaṃvid)とは、法・義・詞・辯の四無礙解をいひ、就中、義と辯とは有漏無漏に通ずるも他は唯、有漏のみなり。詳しくは婆沙、百八十卷參照。無諍(araṇāsamādhi)とは、阿羅漢が自已を緣じて他の有情の煩惱を起すことを恐れて、「此の方便に由りて他の有情をして已身を緣じて貪瞋等を生ぜざらしめん」との如き相の世俗智を引發するをいふ。詳しくは、婆沙百七十九卷を見よ。願智(praṇidhijñāna)とは、邊際定より、願を以て先と爲し、妙智を引起し願の如く了ずる世俗智をいふ。婆沙百八十卷參照。邊際定(prāntakoṭika dhyāna)とは、無諍・願智と詞を

謂く、自から我れ已に三界繋の集を永斷せりと了知するをいふなり。

【本論】 或は滅智なり。

謂く、自から我れ已に三界繋の諸行の滅を證せりと了知するをいふなり。

【本論】 或は道智なり。

謂く、自から我れ已に三界繋を斷ずる諸行の道を修せりと了知するをいふなり。

八五 問ふ、何が故に、盡智は他心智に非ざるや。答ふ、盡智は見を自性とするに非らざるに、他心智は是れ見を自性とするが故なり。何が故に、世俗智に非ざるや。答ふ、盡智は是れ無漏なるに、世俗智は是れ有漏なるが故なり。

自性を顯すこと已れるをもて、當に地を顯すべし。

【本論】 八六 或は有尋有伺なり。

謂く、未至と初靜慮とに依るものなり。

【本論】 或は無尋唯伺なり。

謂く、靜慮中間に依るものなり。

【本論】 或は無尋無伺なり。

謂く、上三靜慮と下三無色とに依るものなり。

地を顯すこと已れるをもて、當に相應を顯すべし。

【本論】 八七 或は樂根と相應す。

謂く　第三靜慮に依るものなり。

【本論】 或は、喜根と相應す。

除く三無礙解及び留捨壽行の六をその體となす、世俗智と倶なり、婆沙百八十卷參照。空空・無願無願・無相無相の三重三摩地は皆、有漏なり。詳しくは、婆沙百五卷（毘曇部十二、頁一一五を參照せよ。入滅定の想・微細は有頂の心なるが故に有漏なり、詳しくは婆沙、百五十二卷、（毘曇部十四、頁三五六）を參照せよ。

【七三】 入滅定の微微心を起す時は、現在と未來とは唯、世俗道のみを修し、無漏道を修せざるを以て玆に無漏根に於て捨するにも非らず乃至起すにも非らずと云へるなり。

【七四】 聞・思慧は唯、有漏智にして、自類のみを修し、他類を修せざるが故に、無漏根に於て、捨・得・滅・起すること無きなり、（尙、精しくは婆沙四十二卷、毘曇部九、頁四以下參照）

【七五】 本節は、未知當知根が三世にあることを先づ示し、次に未だ現觀せざる四聖諦を一切の未知當知根が現觀するや否やを明にせんとする段にして、こは、發智論の頌文の「未知根」に相當するものなり。因みに、本節に就きては婆沙百四十二卷、（毘曇部十四、頁一六三の特に三無漏根に就きての項）を參照するを便とす。

謂く、初二靜慮に依るものなり。

【本論】 或は捨根と相應す。

謂く、未至と靜慮中間と第四靜慮と下三無色とに依るものなり。

相應することを顯すこと已れるもて、當に行相を顯はすべし。」

【本論】 八八或は無願と相應す。

謂く、十行相なり。

【本論】 或は無相と相應す。

謂く、四行相なり。

八九問ふ、何が故に、盡智は空と相應するに非ざるや。答ふ、九〇空は是れ勝義にして勝義に涉るに、盡智は是れ勝義にして世俗に涉るが故なり。「我が生已に盡く」と了知すと說くが如きは、我の解に涉るが故に、空と相應するに非ず。

行相を顯はすこと已れるをもて、當に所緣を顯はすべし。

【本論】 九一或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣ず。

此は苦・集を緣ずるを謂ふなり。

【本論】 或は不繫を緣ず。

此は滅道を緣ずるを謂ふなり。

【本論】 盡智の如く、九二無生智も亦、爾り。

然るに差別有るをいへば、無生智は當に無生智と言ふべし。謂く、自から我れは復び苦を遍知せず、復び集を永斷せず、復び滅を證せず、復び道を修せずと了知するを謂ふなり。

【七六】 論題提起の因由として未知當知根が三世に在ることを顯す。

【七七】 茲に品類足論とは、同論卷第八、(大正・二六・頁七二三、中)の「未知當知根云何。謂已入正性離生補特伽羅諸學慧慧等根 由此諸根隨信隨法行、於未現觀四聖諦、能現觀 是名未知當知根」を指すものの如し。

【七八】 若しくは諸根の隨信、隨法行のものにしてとは、未知當知根の九根中より慧根を除く他の意等の八根をいふ。(婆沙百四十二卷、毘曇部十四、頁一六三參照)。

【七九】 一切未知根は未現觀の四諦を現觀するや否やに就きて。之に四句分別あり。

【八〇】 想・思・觸乃至尋・伺は未知當知根の相應法にして、隨心轉の色と心不相應行とは未知當知根の俱有法なり。故に此等は四諦を現觀すれど、而かも根法に非らざるが故に未知當知根に非ざるなり。

【八一】 茲に隨心轉の色とは、心道俱戒等の無表色をいひ、心不相應行とは、得と生等の四相とをいふ。

【八二】 九根とは意・樂・喜・捨・信・勤・念・定・慧の九根をいふ。

【本論】[九三]無學の正見は當に無學の正見と言ふべし。

謂く、[九四]四行相を以て五取蘊を知り、四行相を以て五取蘊の因を知り、四行相を以て五取蘊の滅を知り、四行相以て五取蘊を斷ずる道を知るをいふなり。

【本論】或は法智なり。

謂く、欲界の四諦を知るをいふなり。

【本論】或は類智なり。

謂く、色、無色界の四諦を知るをいふなり。

【本論】或は他心智なり。

謂く、他の無漏の心・心所法を知るをいふなり。

【本論】或は苦・集・滅・道智なり。

謂く、三界の四諦を別に知るをいふなり。

問ふ、何が故に、無學の正見は世俗智に非ざるや。答ふ、此は無漏なるに、彼れは有漏なるが故なり。……

【本論】[九五]或は有尋有伺、或は無尋唯伺、或は無尋無伺なり。或は樂根と相應し、或は喜捨根と相應す。或は空と相應し、或は無願・無相と相應す。或は欲界繫を緣じ、或は色・無色界繫を緣じ、或は不繫を緣ずるなり。

自性を顯はすこと已る。地等の四問は前說の如し。差別あるをいへば、此れは亦、空とも相應す。亦、空・非我の行相とも作りて轉ずるが故に。

[九六]第八節　初の盡智・無生智とその無間、並びに初の盡智・無生智の所緣に就きて

【八三】本節は、盡智(Kṣaya-jñāna)無生智(Anutpāda-jñāna)無學の正見(Samyagdṛṣṭi)の三智の一一に就きて、(一)自性(智)(二)地(尋・伺)(三)相應(受根相應)(四)行相(三摩地相應)(五)所緣の五門分別をなすを其の課題とす。此は發智の頌文の「五門辯三智」に相當する段なり。因みに、無學の正見は見にして智なり。(婆沙九十五卷、毘曇部十一、頁二九一參照)。

【八四】盡智の智(自性)分別――盡智は盡智、法智、類智、四諦智の七智の攝なり。

【八五】特に盡智が、他心智及び世俗智に非ざる理由に就きて、

【八六】盡智の尋伺(地)分別。

【八七】盡智の受根相應(相應)分別。

【八八】盡智の三摩地相應(行相)分別。

【八九】特に盡智が空と相應せざる理由に就きて。

【九〇】空が勝義なることに就きては婆沙七十七卷(毘曇部十、頁三二九)を參照すべし。

【九一】盡智の所緣分別。

【九二】無生智の五門分別。

【九三】無學の正見の五門分別

【九四】茲に四行相とは、苦・空・非常・非我の四行相をいひ、

【本論】 諸の最初の盡智は——乃至廣說。

[九七]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、前に三智を明すも、未だ等無間及び所緣の差別を辯ぜざるをもて、今、之れを辯ぜんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

【本論】 [九八]諸の最初の盡智の彼の一切は、無間道の等無間なりや。答ふ、是くの如し。

初の盡智は必ず、金剛喩定より等無間に起るを以ての故に。

【本論】 設し無間道の等無間なれば、彼の一切は盡智なりや。答ふ、是くの如し。

金剛喩定の等無間に必ず盡智を起すを以ての故に。

【本論】 [九九]諸の最初の無生智の彼の一切は、盡智の等無間なりや。答ふ、是くの如し。

最初の無生智は必ず盡智より等無間に起るが故に。

【本論】 設し盡智の等無間なるものなれば、彼の一切は無生智なりや。答ふ、或は盡智なり。

謂く、[一〇〇]時解脫の場合なり。

【本論】 或は無生智なり。

謂く、[一〇一]不時解說の場合なり。

【本論】 或は無學の正見なり。

謂く、[一〇二]時解脫の場合なり。

【本論】 [一〇三]諸の彼れを緣ずる無間道起れば、則ち彼を緣ずる初の盡智起るや。答ふ、若し生を緣ずる無間道起れば、則ち彼れを緣ずる初の盡智起る。若し生を緣ずる無間

次の四行相とは、因・集・生・緣の四行相をいひ、次の四行相とは、滅・淨・妙・離の四行相をいひ、最後の四行相とは道・如・行・出の四行相といふ。

【九五】 茲の本論文は發智論より補譯せるものなり。

【九六】 本節は發智の頌文の、「初盡・無生智、盡無生所緣」に相當する段にして、

一、最初の盡智は金剛喩定の等無間なりや否や、

二、金剛喩定の等無間なれば盡智なりや否や、

三、最初の無生智は盡智の等無間なりや否や、

四、盡智の等無間なれば無生智なりや否や、

等の初の盡智・無生智とその等無間との關係を明にし、次に、盡智と無生智との所緣の同異を論究するをその課題とす。

【九七】 **論起の所以。**

【九八】 **初盡智と金剛喩定の等無間との關係、**

一、最初の盡智は金剛喩定の等無間なり。

二、金剛喩定の等無間なれば盡智なり。

【九九】 **初無生智と盡智の等無間との關係、**

一、最初の無生智は盡智の等無間なり。

二、盡智の等無間なるものは、

道起らざれば、則ち彼れを緣ずる初の盡智起らざるなり。

謂く、金剛喩定の六智と相應するものをいふ。則ち、滅・道の法智と及び四類智となり。[一〇四] 最初の盡智は二智の所攝にして則ち苦・集類智なり。若し金剛喩定の苦・集の類智と相應するものなれば、卽ち初の盡智と所緣の境を共にす。俱に非想非非想處の四蘊を緣じて生ずるを以ての故に。彼の四蘊を生と名く。生死の攝なるが故に。若し金剛喩定の滅・道の法・類智と相應するものなれば、卽ち初盡智と所緣の境を異にす。彼れは三界の滅・道を緣ずるに、此は有頂の苦・集を緣ずるが故に。

【本論】[一〇五] 諸の彼を緣ずる盡智が起れば、則ち彼れを緣ずる無生智が起るや。答ふ、是くの如し。設し彼れを緣ずる無生智が起れば、則ち、彼れを緣ずる盡智が起るや。

答ふ、是くの如し。

此の二智は俱に[一〇六] 十四行相を以つて四諦を緣ずるが故に。

(イ)盡智なり(ロ)或は無生智なり(ハ)或は無學の正見なり。

【一〇〇】時解脫は鈍根なるが故に、金剛喩定の等無間に盡智を引生し、盡智に流注して長時相續し、盡智より出でて或は無學の正見を起し或は世俗心を起すも、無生智を起さざるなり。(婆沙百二卷、毘曇部十二、頁五九參照)

【一〇一】不時解脫は利根なるが故に、金剛喩定及び盡智は唯、一刹那のみにして、無生智に流注し長時相續し、無生智より出でて、或は無學の正見を起し、或は世俗心を起す。

【一〇二】前の二註によりて知らるるが如く、盡智の等無間に起し得る無學の正見は時解脫の場合に限るなり。

【一〇三】**初盡智と金剛喩定との所緣に就きて、**金剛喩定が(一)生(苦・集、卽ち有頂の四蘊)を緣ずる時は所緣を共にす、(二)滅道を緣ずる時は所緣を異にす。

【一〇四】最初の盡智が苦類智、或ひは集類智なることに關しては婆沙、百二卷(毘曇部十二、頁五九)を參見すべし。

【一〇五】**盡智と無生智との所緣に就きて**

【一〇六】十四行相とは十六聖行相より、空・非我の二行相を除くものをいふ。此の二智は勝義の攝なりと雖も、世俗に涉るが故に、空・非我の二行相とならざるなり。(婆沙本卷註八九、俱舍二六參照)

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百五十五

（根蘊第六中、一心納息第五之二）

第九節　無學の正見・正思惟・正勤・正念・正定・正解脫・正智の相互相應關係に就きて[一]

【本論】[二]諸法にして無學の正見と相應するもの、彼の法は無學の正思惟と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、無學の正見は一切地に得べきに、[三]一切の無漏心には非ず。無學の正思惟は一切の無漏心に得べきも、[四]一切の地には非ず、是の故に大の四句を作すことを得るなり。

【本論】[五]（一）有る法は無學の正見と相應するも、無學の正思惟とには非ざるものあり。謂く、無學の正見と相應する正思惟と、及び無學の正思惟と相應せずして無學の正見と相應する法となり。

無學の正見と相應する正思惟とは、無學の正見聚中の正思惟を謂ふ。此は但、無學の正見とのみ相應するも無學の正思惟とには非ず。[六]自體は自體と三因緣に由りて相應せざるが故に。一に二の自性は俱起すること無きが故に、二に前後の刹那は並ばざるが故に。三に諸法は自體を觀ぜず、他の與めに緣と爲るが故に。

及び無學の正思惟と相應せずして無學の正見と相應する法とは、靜慮中間と上三靜慮と下三無色との無學の正見と相應する法を謂ふ。此は無學の正思惟と相應するに非ず、彼の地には、正思惟無きが故に。

【本論】[七]（二）有る法は無學の正思惟と相應するも、無學の正見とに非ざるものあ

【一】　本節は發智論の頌文の「七正互相應」に當る段にして、無學の正見・正思惟・正勤・正念・正定・正解脫・正智の七無學法の相互相應關係を明にするを其の課題とす。

【二】　**無學の正見相應法と無學の正思惟との相應に關する四句分別。**

【三】　「一切の無漏心には非ず」とは、盡智・無生智が正見に非ざるをいふ。

【四】　正思惟は、尋と地を同じくするを以て、一切の地に遍かざるなり。

【五】　第一單句――

【六】　**特に自性が自性と相應せざる三因緣。**

【七】　第二單句――

のり。謂く、無學の正思惟と相應する正見と、及び無學の正見と相應せずして無學正思惟と相應する法となり。

無學の正思惟と相應する正見とは、無學の正思惟聚中の正見を謂ふ。此は但、無學の正思惟とのみ相應するも、無學の正見とには非ず。自體は自體と三因緣に由りて相應せざるが故に。

及び無學の正見と相應せずして、無學の正思惟と相應する法とは、謂く、未至と初靜慮との盡智・無生智聚中の正思惟と相應する法なり。此れが無學の正見と相應するに非ざるは、彼の聚中には正見無きが故なり。

【本論】〔八〕(三)有る法は無學の正見と正思惟とに相應するものあり。謂く、無學の正見と相應する正思惟を除き、及び無學の正思惟と相應する正見を除く、諸餘の無學の正見・正思惟と相應する法なり。

謂く、此の聚中、二の自體を除く餘の心心所は、二と相應す。此は復云何ん。謂く〔九〕九大地法と十大善地法と心と及び伺となり。

【本論】〔一〇〕(四)有る法は無學の正見と正思惟とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正見と相應せざる正思惟と、無學の正思惟と相應せざる正見と、及び前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

無學の正見と相應せざる正思惟とは、盡・無生智聚中の正思惟を謂ひ、此れが無學の正見と相應するに非ざるは、此の聚中には正見無きが故なり。亦、無學の正思惟とも相應するに非らざるは、自體は自體と相應せざるが故なり。

無學の正思惟と相應せざる正見とは、靜慮中間と上三靜慮と下三無色との無學の正見を謂ひ、此

〔八〕第三俱是句――

〔九〕玆に九大地法とは、十大地法中より正見の自性たる慧を除く餘の九大地法を指す。

〔一〇〕第四俱非句――

れが正見と相應するに非らざるは、自體は自體と相應せざるが故なり。亦、無學の正思惟とも相應するに非らざるは、彼の地中には正思惟無きが故なり。

及び前に攝せざる所の心心所法とは、靜慮中間と上三靜慮と、下三無色との盡、無生智聚との心心所法と、及び一切の學と有漏との心心所法となり。

并びに色と無爲と心不相應行とは當に知るべし、皆、是れ第四句なることを。

【本論】[一二] 諸法にして無學の正見と相應するもの、彼の法は無學の正勤と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、無學の正見は一切地に得べきも、一切の無漏心には非ず。無學の正勤は一切地と一切の無漏心とに得べし。是の故に、中の四句を作すことを得るなり。

【本論】[一三] (一)有る法は無學の正見と相應するも、無學の正勤とに非ざるものあり。謂く、無學の正見と相應する正勤なり。

此は無學の正勤と相應するに非ず。自體は自體と相應せざるが故に。

【本論】[一三] (二)有る法は、無學の正勤と相應するも、無學の正見とに非ざるものあり。謂く、無學の正見と及び無學の正見と相應せずして無學の正勤と相應する法となり。

無學の正見とは、自體は自體と相應せざるが故なり。

無學の正見と相應せずして無學の正勤と相應する法とは、盡・無生智聚中の正勤と相應する法を謂ふ。此れが正見と相應するに非ざるは、彼の聚中には、正見無きが故なり。

【本論】[一四] (三)有る法は無學の正見と正勤とに相應するものあり。謂く、無學の正見と相應する正勤を除く諸餘の無學の正見と相應する法なり。

【一二】 無學の正見相應法と無學の正勤との相應に關する四句分別。

【一三】 第一單句――

【一三】 第二單句――

【一四】 第三俱是句――

正勤は多きが故に、此に於て偏へに除く。然かも此の聚中、二の自體を除く、餘の心心所は皆、二と相應す。此は復、云何ん。謂く[15]九大地法と九大善地法と心と及び尋と伺となり。

【本論】[16]（四）有る法は無學の正見と正勤とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正見と相應せざる正勤と、及び前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

無學の正見と相應せざる正勤とは、盡・無生智聚中の正勤を謂ひ、此れが正見と相應するに非ざるは、彼の聚中に正見無きが故なり。亦、正勤とも相應するに非ざるは、自體は體と相應せざるが故なり。

及び前に攝せざる所の心心所法といふにつきては、此の中、餘の無學の心心所法にして前に攝せざる所のもの無し。但し、一切の學と有漏との心心所法は有り、是れは前に攝せざる所なり。幷びに色と無爲と心不相應行とは當に知るべし、皆、是れ第四句の攝なることを。

【本論】[17]正勤に對するが如く、正念・正定・正解脱に對するも亦、爾り。

此は皆、中の四句を作すことを得るが故に。

【本論】[18]諸法にして無學の正見と相應するもの、彼の法は無學の正智と相應するに非ず。諸法にして無學の正智と相應するもの、彼の法は無學の正見と相應するに非ず。

此の二法は、倶起せざるを以ての故に。

【本論】[19]諸法にして無學の正思惟と相應するもの、彼の法は無學の正勤と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

【一五】茲に九大地法とは、十大地法中より慧を除く餘の九を指し、九大善地法とは十大善地法中より、勤を除く餘の九を指す。

【一六】第四倶非句——

【一七】無學の正見相應法と無學の正念・正定・正解脱との相應に關する四句分別。

【一八】無學の正見相應法は無學の正智と相應せず——無學の正見・正智は共に慧を自性となすが故なり。因みに無學の正智とは、盡智・無生智をその體とす。（倶舍二十五）、

【一九】無學の正思惟相應法と無學の正勤との相應に關する四句分別。

此の中、無學の正思惟は一切の無漏心に得べきも、[二〇]一切の地には非ず。無學の正勤は一切の地、一切の無漏心に得べし。是の故に亦、中の四句を作すことを得るなり。

【本論】[二一](一)有る法は、無學の正思惟と相應するも、無學の正勤とに非ざるものあり。謂く、無學の正思惟と相應する正勤なり。

(二)有る法は無學の正勤と相應するも、無學の正思惟とに非ざるものあり。謂く、無學の正勤と相應する正思惟と、及び無學の正思惟と相應せずして無學の正勤と相應する法となり。

(三)有る法は、無學の正思惟と正勤とに相應するものあり。謂く、無學の正思惟と相應する正勤を除く諸餘の無學の正思惟と相應する法なり。

(四)有る法は、無學の正思惟と正勤とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正思惟と相應せざる正勤と、及び前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

[二二]文は正見を正勤に對して說けるが如し。

【本論】[二三]正勤に對するが如く、正念・正定・正解脫に對するも亦、爾り。

[二四]諸法にして無學の正思惟と相應するもの、彼の法は無學の正智と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、無學の正思惟は、一切の無漏心に得べきも、一切の地には非らず、無學の正智は一切の地に得べきも、[二五]一切の無漏心には非ず。是の故に亦、大の四句を作すことを得るなり。

【本論】[二六](一)有る法は、無學の正思惟と相應するも、無學の正智とに非らざるもの

【二〇】一切地には非ずとは正思惟は未至と初靜慮との二地のみ得べければなり。

【二一】玆の本論文は發智論より補譯せるもの。

【二二】文とは直前の發智論より補譯せる本論の文を指す。婆沙は、之を略示するが故に、かく言へるなり。以下准之。

【二三】無學の正思惟相應法と無學の正念・正定・正解脫との相應に關する四句分別。

【二四】無學の正思惟相應法と無學の正智との相應に關する四句分別。

【二五】無學の正智はその體、盡智・無生智なれば、無學の正見と異る。故に無學の正智は一切の無漏心に遍ぜざるなり。

【二六】玆の本論文は發智論より補譯せるものなり。

あり。謂く、無學の正思惟と相應する正智と、及び無學の正智と相應せずして無學の正思惟と相應する法となり。

（二）有る法は無學の正智と相應するも、無學の正思惟とに非ざるものあり。謂く、無學の正智と相應する正思惟と、及び無學の正思惟と相應せずして無學の正智と相應する法となり。

（三）有る法は無學の正思惟と正智とに相應するものあり。謂く、無學の正思惟と相應する正智を除き、及び、無學の正智と相應する正思惟を除く、諸餘の無學の正思惟・正智と相應する法なり。

（四）有る法は無學の正思惟と正智とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正思惟と相應せざる無學の正智と、無學の正智と相應せざる無學の正思惟と、及び前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

文は正見を正思惟に對して說けるが如し。

【本論】[二七] 諸法にして無學の正勤と相應するもの、彼の法は無學の正念と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、無學の正勤と正念とは俱に一切の地と一切の無漏心とに得べし。是の故に小の四句を作すことを得るなり。

【本論】[二八]（一）有る法は無學の正勤と相應するも、無學の正念とに非ざるものあり。謂く、無學の正念なり。

此れが無學の正勤と相應するも正念とに非ざるは、自體は自體と相應せざるが故なり。

【二七】 無學の正勤相應法と無學の正念との相應に關する四句分別。

【二八】 第一單句——

【本論】[二九](二)有る法は無學の正念と相應するも、無學の正勤とに非ざるものあり。謂く、無學の正勤なり。

此れが無學の正念と相應するも、正勤とに非ざるは、自體は自體と相應せざるが故なり。

【本論】[三〇](三)有る法は無學の正勤と正念とに相應するものあり。謂く、無學の正勤と正念とを除く諸餘の無學の正勤と正念とに相應する法なり。

謂く、此の聚中より二の自體を除く餘の心心所は、二と相應す。此は復、云何ん。謂く[三一]九大地法と、九大善地法と心と及び尋と伺となり。

【本論】[三二](四)有る法は無學の正勤と正念とに相應するに非ざるものあり。謂く、前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

此の中、餘の無學の心心所法にして前に攝せざる所のもの無し。但し、一切の學と有漏との心心所法有り。是れ前に攝せざる所なり。

幷びに色と無爲と心不相應行とは當に知るべし、皆是れ第四句の攝なることを。

【本論】[三三]正念に對するが如く、正定・正解脫に對するも亦、爾り。

此は皆、小の四句を作すことを得るが故に。

【本論】諸法にして[三四]無學の正勤と相應するもの、彼の法は無學の正智と相應するや。答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、正勤は一切の地と一切の無漏心とに得べく、正智は一切の地に得べきも、一切の無漏心には非ざるをもて、亦、中の四句を作すなり。

【本論】[三五](一)有る法は無學の正勤と相應するも、無學の正智とに非ざるものあり。

【二九】第二單句——

【三〇】第三俱是句——

【三一】茲に九大地法とは、十大地法中より正念の自性たる念を除くものをいひ、九大善地法とは十大善地法より正勤の自性たる精進を除くものをいふ。

【三二】第四俱非句——

【三三】無學の正勤相應法と無學の正定・正解脫との相應に關する四句分別。

【三四】無學の正勤相應法と無學の正智との相應に關する四句分別。

【三五】茲の本論文は發智論より補譯せり。

謂く、無學の正智と、及び無學の正智と相應せずして無學の正勤と相應する法となり。

(二)有る法は無學の正智と相應するも無學の正勤とに非ざるものあり。謂く、無學の正智と相應する正勤なり。

(三)有る法は無學の正勤と正智とに相應するものあり。謂く、無學の正智と相應する正勤を除く諸餘の無學の正智と相應する法なり。

(四)有る法は無學の正勤と正智とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正智と相應せざる正勤と、及び前に攝せざる所の心心所法と、並びに色と無爲と心不相應行となり。

文は正思惟を正勤に對して說けるが如し。

【本論】[三六]正勤の如く正念・正定も亦、爾り。

[三七]諸法にして、無學の正解脫と相應するもの、彼の法は、無學の正智と相應するや。

答ふ、應に四句を作すべし。

此の中、無學の正解脫は一切の地と一切の無漏心とに得べく、無學の正智は一切の地に得べきも、一切の無漏心には非ざるをもて、亦、中の四句を作すなり。

【本論】[三八](一)有る法は、無學の正解脫と相應するも、無學の正智とに非ざるものあり。謂く、無學の正智と、及び無學の正智と相應せずして無學の正解脫と相應する法となり。

(二)有る法は無學の正智と相應するも、無學の正解脫とに非ざるものあり。謂く無學の正智と相應する正解脫なり。

【三六】無學の正念・正定相應法と、無學の正定等との相應に關する四句分別。

【三七】無學の正解脫相應法と無學の正智との相應に關する四句分別、因みに、無學の正解脫とは、無學の有爲解脫、即ち無學の勝解をいふ。(俱舍二十五)

【三八】以下の本論文は發智論より補譯せるものなり。

（三）有るは無學の正解脫と正智とに相應するものあり。謂く、無學の正智と相應する正解脫を除く諸餘の無學の正智と相應する法なり。

（四）有る法は無學の正解脫と正智とに相應するに非ざるものあり。謂く、無學の正智と相應せざる正解脫と、及び[三九]前に攝せざる所の心心所法と並びに色と無爲と心不相應行となり。

文は正勤を正智に對して說けるが如し。

【三九】大正本には「前所攝心心所法」とあるも、八犍度論卷第二十二、（大正・二六・頁八七八上）には「諸餘心心法」とあり、且つ法相上よりも「前所不攝心心所法」とあるべき筈なれば、斯く訂正せり。

[一]第六章　二十二根の成就・不成就、並びに三性根を因と爲す根に關する論究

（根蘊第六中、魚納息第六）

[二]第一節　二十二根の隨一を成就するものは、二十二根の幾くを定んで成就し、及び成就せざるやに就きて

【本論】若し眼根を成就せば、彼れは二十二根に於て幾くを成就し、幾くを成就せざるや。

是くの如き等の章、及び解章の義は既に領會し已れるをもて、當に廣く分別すべし。

[三]問ふ、此の納息を何が故に、魚と名くるや。答ふ、多位に轉移して執取すること難きが故なり。何を多位と謂ふや。謂く、具根・不具根位と、無形・一形・二形位と、有心・無心位と定・不定位と、生・界・地の差別位と、斷善・不斷善位と、離染・未離染位と、善・染・無記心位と、異生・聖者位と、見道・修道・無學道位となり。此等の位に於て、二十二根の成と不成とは轉移して定まらざること、魚の執へ難きが如し。故に此の名を立つるなり。

【本論】若し眼根を成就せば、彼れは二十二根に於て、幾くを成就し幾くを成就せざるや。乃至具知根を問ふも亦、爾り。

答ふ、[四]若し眼根を成就せば、彼れは定んで五を成就し、餘は不定なり。

五を成就すとは、謂く、眼・身・命・意・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十七根を或は成就し或は成就せざるをいふなり。謂く、耳・鼻・舌根と、*具するものなれば則ち成就するも、具せざるもの

【一】本章の内容を發智論の頌文を以て顯示せば次の如し。
「總三世、成就、不成就亦然、善等根爲因、此章願具說」
就中、「總三世成就」とは、二十二根の各々一を成就するものは、二十二根中の幾くを定んで成就し、定んで成就せざるや。又、三世の二十二根中の幾くを定んで成就し成就せざるやを明すものなり。
「不成就亦然」とは、二十二根の各一を成就せざるものが、二十二根中の幾くを定んで成就し、定んで成就せざるや。又三世の二十二根中の幾くを定んで成就し定んで成就せざるやに就いて論ずるものなり。
「善等根爲因」とは、諸根の善・不善・無記なるものは、各々、夫夫、善根・不善根・無記根を因となすや否やに就きて論ずる段なり。
因みに本章を魚納息と名くる所以につきては註三の項を見よ。

【二】本節は眼根乃至具知根の二十二根の一一に就いて、その隨一を成就するものは、定んで二十二根中の幾根を成就し、幾根を成就せず、幾根は不定なりやに就いて、謂はば

なれば成就せず。女根・男根は、若し一形なれば隨つて一を成就し、若し二形なれば、倶を成就し、若し無形なれば、倶を成就せず、謂く、本より得せざると、或は得し已るも、[五]漸に命終するに由り、或ひは餘緣の故に失するなり。樂根は、若しくは遍淨及び下に生ずるものと、若しくは聖者にして第四[六]靜慮に生ずるものとなれば則ち成就するも、若し異生にして[七]第四靜慮に生ずるものなれば則ち成就せず。苦根は、若し欲界に生ぜば成就するも、若し色界に生ぜば、則ち成就せず。喜根は、若しくは極光淨及び下に生ずるものと、若しくは聖者にして第三・第四靜慮に生ずるものとなれば、則ち成就するも、若し異生にして第三・第四靜慮に生ずるものなれば、則ち成就せず。憂根は、若し未離欲染なれば則ち成就するも、若し已離欲染なれば則ち成就せず。信等の五根は、若し不斷善なれば、則ち成就するも、若し斷善なれば成就せず。未知當知根は、見道に住すれば則ち成就するも、餘なれば則ち成就せず。已知根は修道位に住すれば、則ち成就するも、餘なれば則ち成就せず。具知根は無學位に住すれば、則ち成就するも、餘なれば則ち成就せず。是の故に、餘は不定なりと說くなり。

【本論】　眼根の如く、耳・鼻・舌根も亦、爾り。

皆、色界にては定んで成就するも、無色界にては定んで成就せず、欲界にては不定なるが故に。

【本論】　[八]若し身根を成就せば、彼れは定んで四を成就し、餘は不定なり。

四を成就すとは、謂く身・命・意・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十八根を或は成就し、或ひは成就せざるをいふなり。眼根は眼根を具見するものなれば、則ち成就し、具せざるものなれば、則ち成就せず。餘の十七根は前說の如し。

【本論】　[九]若し女根を成就せば、彼れは定んで八を成就し、餘は不定なり。

八を成就すとは、謂く女・身・命・意・樂・苦・喜・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十四根を或は

總括的に論ずる段なり。因みに、こは發智論の頌文の「總成就」に相當する段なり。

【三】　魚納息と名くる理由に就きて、

【四】　眼根を成就するものの、根の成就不成就に就きて、耳根・或は鼻根、或は舌根を成就するものも亦、同じ因みに二十二根の成就に關しては、婆沙九十卷、(毘曇部、十一、頁一六七、四十二章の成就・不成就論)を參考すべし。

※具の上に、諸本には一樣に「身根」の二字あるも、眼根を成就する者なれば身根は之を必ず成就するが故に、不定の部類に入らず。故に今は之を除く。

【五】　欲界にて漸に、命終するものは、最後に身・命・意・捨の四根を捨するを以て、此の位には既に女・男根は捨せるなり。

【六】　樂根は第四靜慮以上に生ずるも、聖者なれば皆成就す、然し、無色に生ぜば眼根を成就せざるが故に茲にそを說かざるなり。

【七】　有漏の樂根は上地に生ずれば、之れを捨するを以て、異生にして第三靜慮の有漏の樂根を成就するものも、第四靜慮に生ずれば捨するなり。

成就し、或は成就せざること前の如く應に知るべきなり。

【本論】　女根の如く、男根も亦、爾り。[一〇]若し、男女の二根を成就せば、彼れは定んで十五根を成就す。謂く　男・女・身・命・意・五受・信等の五根なり。定んで三根を成就せず、謂く[一一]三無漏根なり。餘は不定なり。

前の如く應に知るべきなり。

【本論】　[一二]若し命根を成就せば、彼れは定んで、三を成就し、餘は不定なり。

三を成就すとは、謂く命・意・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十九根を或は成就し、或は成就せざるをいふなり。謂く、眼・耳・鼻・舌根は色界に生ずれば則ち成就し、無色界に生ずれば、則ち成就せず。欲界に生ずれば或は成就し或は成就せざること、前說の如し。身根は欲。色界に生ずれば則ち成就し、無色界に生ずれば則ち成就せず。女根・男根は色・無色界に生ずれば則ち成就せざるも、欲界に生ずれば或は成就し、或は成就せざること、前說の如し。樂根は、若しくは遍淨及び下に生ずるものと、若しくは聖者にして上に生ずるものとは則ち成就するも、若し異生にして上に生ずるものなれば則ち成就せず。苦根は若し欲界に生ずれば、則ち成就するも、若し色・無色界に生ずれば、則ち成就せず。喜根は、若しくは極光淨及び下に生ずるものと、若しくは聖者にして上に生ずるものとは、則ち成就するも、若し異生にして上に生ずるものなれば則ち成就せず。餘は前說の如し。

【本論】　命根の如く、意根・捨根も亦、爾り。

皆、三界の有情は定んで成就するが故に。

【八】身根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【九】女根を成就するものの、根の成就不成就に就きて、男根を成就するものに就きても亦同じ。

【一〇】男・女の二根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【一一】二形者は意志薄弱なるが故に大加行を起すこと能はず、從つて三無漏根を得ること能はざるなり。

【一二】命根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、意根或は捨根を成就するものに就きても亦、同様なり。

【本論】[一三] 若し樂根を成就せば、彼れは定んで四を成就し、餘は不定なり。

四を成就すとは、謂く、樂・命・意・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十八根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[一四] 若し苦根を成就せば、彼れは定んで七を成就し、餘は不定なり。

七を成就すとは、謂く、身・命・意・四受——[一五]憂を除く——なり。餘は不定なりとは、餘の十五根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[一六] 若し喜根を成就せば、彼れは定んで五を成就し、餘は不定なり。

五を成就すとは、謂く、命・意・樂・喜・捨根なり。餘は不定なりとは、餘の十七根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[一七] 若し憂根を成就せば、彼れは定んで八を成就し、定んで一を成就せざるも、餘は不定なり。

八を成就すとは、謂く身・命・意・五受根なり。一を成就せずとは、謂く[一八]具知根なり。餘は不定なりとは、餘の十三根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[一九] 若し信根を成就せば、彼れは定んで八を成就し、餘は不定なり。

八を成就すとは、謂く、命・意・捨根と信等の五根となり。餘は不定なりとは、餘の十四根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】 信根の如く、[二〇]精進・念・定・慧根も亦、爾り。

[二一]若し未知當知根を成就せば、彼れは定んで十三を成就し、定んで二を成就せざるも、餘は不定なり。

【一三】 樂根を成就するものの、根の成就不成就に就きて、

【一四】 苦根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて。

【一五】 苦根は欲界の有情は乃至佛も亦、成就す。されど憂根は已離欲染のものは成就せず、憂根は分別に由りて起るを以つてなり。詳しくは婆沙九十卷（毘曇部十一、頁一七二）を參見すべし。

【一六】 喜根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【一七】 憂根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【一八】 具知根を成就するものは、無學なるに、憂根は離欲染のものは之を成就せざるを以つてなり。

【一九】 信根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【二〇】 精進根、或は念根・或は定根、或は慧根を成就する場合に就きて。

【二一】 未知根を成就するものの、根の成就、不成就に就きて。

十三を成就すとは、謂く身・命・意・四受――[二二]憂を除く――、信等の五・未知當知根なり。二を成就せずとは、謂く、已知・具知根なり。餘は不定なりとは、餘の七根を或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[二三]若し已知根を成就せば、彼れは定んで十一を成就し、定んで二を成就せざるも、餘は不定なり。

十一を成就すとは、謂く、命・意・樂・喜・捨・信等の五・已知根なり。二を成就せずとは、謂く、未知當知根と、具知根となり。餘は不定なりとは、餘の九根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

【本論】[二四]若し具知根を成就せば、彼れは定んで十一を成就し、定んで三を成就せざるも、餘は不定なり。

十一を成就すとは、謂く、命・意・樂・喜・捨・信等の五・具知根なり。三を成就せずとは謂く憂根と前の二無漏根となり。餘は不成なりとは、餘の八根を、或は成就し或は成就せざること、前の如く應に知るべきなり。

[二五]第二節　二十二根の隨一を成就するものは三世の二十二根の幾くを定んで成就し及び成就せざるやに就きて

【本論】若し眼根を成就せば、彼れは三世の二十二根に於て、幾くを成就し、幾くを成就せざるや。乃至、具知根につきて問ふことも亦、爾り。答ふ、若し[二六]眼根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く、命等の[二七]八無記根は唯、現在のもののみを成就し、過去・未來のは非らず。勢羸劣なるが故に。

【二二】未知根を成就するものには、已離欲染者もあるが故に、憂根を成就すること不定なり。故に茲に之を除く。

【二三】已知根を成就するものの、根の成就・不成就に就きて、

【二四】具知根を成就するものの、根の成就、不成就に就きて。

【二五】本節は、二十二根の隨一を成就するものが三世の二十二根に於て、幾くを定んで成就し、幾くを定んで成就せざるやに就きて論究するをその課題とす。因みにこは發智の頌文の「三世成就」に當る段なり。

【二六】眼根を成就するものの、三世の根の成就不成就に就きて。

【二七】八無記根とは眼・耳・鼻・舌・身・女・男・命の八根をいふ。

【本論】 定んで過去・未來の二と現在の三とを成就す。

過未の二とは、謂く、意・捨根なり。此は現在に於ては必ずしも定んで成就するに非らず、彼れは或は無心位に住するを以つての故に、現の三とは、謂く、眼・身・命根なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】 眼根の如く、耳・鼻・舌も亦、爾り。[二八]若し身根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く、命等なり。

【本論】 定んで、過去・未來の二と現在の二とを成就す。

過・未の二とは、意と捨とを謂ひ、現の二は、身と命とを謂ふ。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[二九] 若し女根を成就せば、彼れは定んで、過去・未來の八を成就せず。

謂く、命等なり。

【本論】 定んで過去・未來の五と現在の三とを成就す。

過未の五とは、謂く意と、四受——憂を除く——となり。現の三とは、謂く、女と身と命となり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】 女根の如く、男根も亦、爾り。

【二八】 身根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【二九】 女根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

[三〇] 若し男・女の二根を成就せば、彼れは定んで、過去・未來の八と三世の三とを成就せず。

過・未の八とは、謂く命等なり。三世の三とは、謂く、三無漏なり。

定んで過去・未來の九と三世の二と現在の四とを成就す。

過・未の九とは、謂く四受と信等の五となり。三世の二とは、謂く意と一受となり。現在の四とは、謂く男と女と身と命となり。

餘は不定なり。

前說の如し。

西方師の言く『應に說くべし、「過去・未來は定んで十を成就す」と。謂く、五受と信等の五となり。「三世は定んで一を成就す」と。謂はく意なり。受の名は不定なるが故に。』と。迦濕彌羅國の諸の論師の言く「名は不定なりと雖も、而も數は則ち定まる、必ず有る一受が現在前するが故に。此の中、數を說きて名を說かざるなり」と。

【本論】 [三一] 若し命根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く命等なり。

【本論】 定んで過去・未來の二と現在の一とを成就す。

過去の二とは、謂く、意と捨となり。現在の一とは、謂く、命なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】 命根の如く、意・捨根も亦、爾り。

[三二] 若し樂根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く命等なり。

【三〇】 男・女の二根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三一】 命根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三二】 樂根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【本論】定んで過去・未來の二と、未來の一と、現在の一とを成就す。

過・未の二とは、謂く意・捨なり。未の一とは謂く樂なり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[三三]若し苦根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く命等なり。

【本論】定んで過去・未來の五と、現在の二とを成就す。

過・未の五とは、謂く意と四受——憂を除く——となり。現在の二とは、謂く身と命となり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[三四]若し喜根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く、命等なり。

【本論】定んで過去・未來の二と、未來の二と、現在の一とを成就す。

過・未の二とは、謂く意と捨なり。未の二とは、謂く樂と喜となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[三五]若し憂根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八と、三世の一とを成就せず。

過・未の八とは、謂く命等なり。三世の一とは、具知なり。

【三三】苦根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三四】喜根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三五】憂根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【本論】 定んで過去・未來の四と、三世の二と、現在の二とを成就す。

過・未の四とは、謂く四受なり。三世の二とは謂く、意と一受となり。現の二とは、謂く身と命となり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

健駄羅國の諸論師は說く『此の文は應に言ふべし、「過・未は五を成ず」と、謂く五受なり。「三世は一を成ず」と。謂く意なり。受の名は不定なるが故に』と。迦濕彌羅の諸論師は說く、「名は不定なりと雖も、數が定るを以つての故に、應に前說の如くなるべきなり」と。

【本論】 [三六]若し信根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八を成就せず。

謂く命等なり。

【本論】 定んで過去・未來の七と現在の一とを成就す。

過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。現在の一とは、謂く命なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】 信根の如く、精進・念・定・慧根も亦、爾り。

[三七]若し未知當知根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八と、三世の二と、現在の二とを成就せず。

過・未の八とは、謂く、命等なり。三世の二とは、謂く已知と具知となり。現在の二とは、謂く、[三八]苦と憂となり。

【三六】 信根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三七】 未知根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【三八】 未知根を成就するものは、現に未知根を滅・起しつつある見道位の聖者なり。而るに未知根は意根と信等の五根と樂・喜・捨の三根とより成る。就中、樂・喜根は歡行相轉なるを以て慼行相轉なる苦・憂根とは相應せず、故に茲に現在は苦・憂根を成就せずといふなり。

【本論】 定んで三世の七と、過去・未來の三と、未來・現在の一と、現在の二とを成就す。

三世の七とは、謂く意と一の受と信等の五となり。過・未の三とは、謂く[三九]三受なり。未・現の一とは、謂く未知當知なり。現の二とは、謂く身と命となり。此の中の二説は前の如し。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[四〇] 若し已知根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八と三世の二とを成就せず。

過・未の八とは、謂く命等なり。三世の二とは、謂く餘の二無漏なり。

【本論】 定んで過去・未來の七と、未來の三と、現在の一とを成就す。

過未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。未の三とは、謂く樂と喜と已知となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】[四一] 若し具知根を成就せば、彼れは定んで過去・未來の八と、三世の三とを成就せず。

過・未の八とは、謂く命等なり。三世の三とは、謂く憂と餘の二無漏なり。

【本論】 定んで過去・未來の七と、未來の三と、現在の一とを成就す。

過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。未の三とは、謂く樂と喜と具知となり。現の一と

[三九] 三受とは、樂・喜・捨の三受根なり。

[四〇] 已知根を成就するものの、三世の根の成就、不成就に就きて。

[四一] 具知根を成就するものの三世の根の成就、不成就に就きて。

は、謂く命なり。

【本論】　餘は不定なり。

前説の如し。

[四二]第三節　二十二根の隨一を成就せざるものは二十二根の幾くを定んで成就せず及び成就するやに就きて

【本論】　若し眼根を成就せざれば、彼れは二十二根に於て、幾くを成就せず、幾くを成就するや。乃至具知根につきて問ふことも亦、爾り。

答ふ、若し[四三]眼根を成就せざれば、彼れは定んで一を成就せず。

謂く眼なり。

【本論】　定んで三を成就す。

謂く、命と意と捨となり。

【本論】　餘は不定なり。

前説の如し。

【本論】　眼根の如く、耳・鼻・舌・女・男根と三無漏根とも亦、爾り。

[四四]若し身根を成就せざれば、彼れは定んで十を成就せず。

謂く、七色と苦と憂と[四五]未知當知となり。

【本論】　定んで八を成就す。

謂く、命と意と捨と信等の五となり。

【本論】　餘は不定なり。

【四二】　本節は二十二根中の隨一を成就せざるものは、二十二根中の幾くを定んで成就せず、幾くを定んで成就するやに就きて論究する段にして、次節と共に發智論の頌文の「不成就亦然」に當るものなり。

【四三】　眼根を成就せざるものの根の成就・不成就に就きて。

【四四】　身根を成就せざるものの、根の成就・不成就に就きて。

【四五】　未知根は必ず欲界身によりて得するが故に、身根を成就せざれば未知根を成就せざるなり。

前說の如し。

四六 若し男・女根を俱に成就せざれば、彼れは定んで二を成就す。

謂く男と女となり。

定んで三を成就す。

謂く命と意と捨となり。

餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】四七 命・意・捨根を成就せざるもの無し。

若し 四八 樂根を成就せざれば、彼れは定んで九を成就せず。

謂く、女と男と四受——捨を除く——と三無漏となり。

【本論】定んで八を成就す。

謂く命と意と捨と信等の五となり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】四九 若し苦根を成就せざれば、彼れは定んで五を成就せず。

謂く、女と男と苦と憂と未知當知となり。

【本論】定んで八を成就す。

謂く命と意と捨と信等の五となり。

【本論】餘は不定なり。

【四六】男・女根を俱に成就せざるものの、根の成就、不成就に就きて。

【四七】命・意・捨根を成就せざるものは無し。

【四八】樂根を成就せざるものの根の成就、不成就に就きて、こは異生にして第四靜慮以上に生ぜしものの場合なり。

【四九】苦根を成就せざるものの根の成就、不成就に就きてこは色・無色界に生ぜしものの場合なり。

前説の如し。

【本論】[五〇] 若し喜根を成就せざれば、彼れは定んで八を成就せず。

謂く女と男と苦と喜と憂と三無漏となり。

【本論】 定んで八を成就す。

謂く、命と意と捨と信等の五となり。

【本論】 餘は不定なり。

前説の如し。

【本論】[五一] 若し憂根を成就せざれば、彼れは定んで一を成就せず。

謂く、憂なり。

【本論】 定んで八を成就す。

謂く、命と意と捨と信等の五となり。

【本論】 餘は不定なり。

前説の如し。

【本論】[五二] 若し信根を成就せざれば、彼れは定んで八を成就せず。

謂く信等の五と三無漏となり。

【本論】 定んで八を成就す。

謂く、身と命と意と五受となり。

【本論】 餘は不定なり。

前説の如し。

【五〇】 喜根を成就せざるものの根の成就、不成就に就きて、こは異生にして第三靜慮以上に生ぜしものの場合なり。

【五一】 憂根を成就せざるものの根の成就、不成就に就きて、こは已離欲染者の場合なり。

【五二】 信根を成就せざるものの根の成就、不成就に就きて、こは斷善根者の場合なり。

【本論】 信根の如く、精進・念・定・慧根も亦、爾り。

[五三] 第四節 二十二根の隨一を成就せざるものは三世の二十二根の幾くを定んで成就せず及び成就するやに就きて

【本論】 若し眼根を成就せざれば、彼れは三世の二十二根に於て、幾くを成就せず、幾くを成就するや。乃至具知根に就きて問ふことも亦、爾り。

答ふ、[五四] 若し眼根を成就せざれば、彼れは定んで三世の一と、過去・未來の七とを成就せず。

三世の一とは、謂く眼なり。過・未の七とは、謂く命等の七なり。

【本論】 定んで過去・未來の二と、現在の一とを成就す。

過・未の二とは、謂く、意と捨となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】 眼根の如く、耳・鼻・舌・女・男根も亦、爾り。

[五五] 若し身根を成就せざれば、彼れは定んで三世の十と、過去・未來の一とを成就せず。

三世の十とは、謂く七色と苦と憂と未知當知となり。過・未の一とは、謂く命なり。

【本論】 定んで過去・未來の五と、三世の二と、現在の一とを成就す。

過・未の五とは、謂く信等の五なり。三世の二とは、謂く意と捨となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】 餘は不定なり。

前說の故し。

【五三】 本節は二十二根中の隨一を成就せざるものが、三世の二十二根の幾くを定んで成就せず、定んで幾くを成就するやに就きて論ずるを其の課題とす。

【五四】 眼根を成就せざるものの三世の根の成就不成就に就きて。

【五五】 身根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。

[五六]若し男・女根を俱に成就せざれば、彼れは定んで三世の二と、過去・未來の六とを成就せず。
三世の二とは、謂く男と女となり。過未の六とは、謂く五色と命となり。
定んで過去・未來の二と、現在の一とを成就す。
過・未の二とは、謂く意と捨となり。現の一とは、謂く命なり。
餘は不定なり。
前說の如し。

【本論】　命・意・捨根を成就せざるもの無し。

[五七]若し樂根を成就せざれば、彼れは定んで三世の九と、過去・未來の六とを成就せず。
三世の九とは、謂く女と男と四受――捨を除く――と三無漏となり。過・未の六とは、謂く五色と命となり。

【本論】　定んで過去・未來の七と、現在の一とを成就す。
過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】　餘は不定なり。
前說の如し。

【本論】[五八]　若し苦根を成就せざれば、彼れは定んで、三世の五と、過去・未來の六とを成就せず。
三世の五とは、謂く女と男と苦と憂と未知當知となり。過・未の六とは、謂く、五色と命となり。

【本論】　定んで過去・未來の七と、現在の一とを成就す。
過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。現の一とは、謂く命なり。

【五六】　男・女根を俱に成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【五七】　樂根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【五八】　苦根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【本論】餘は不定なり。
前說の如し。
【本論】[59]若し喜根を成就せざれば、彼れは定んで三世の八と、過去・未來の六とを成就せず。
三世の八とは、謂く女と男と苦と憂と喜と三無漏となり。過・未の六とは、謂く五色と命となり。
【本論】定んで過去・未來の七と、現在の一とを成就す。
過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。現の一とは、謂く命なり。
【本論】餘は不定なり。
前說の如し。
【本論】[60]若し憂根を成就せざれば、彼れは定んで、三世の一と、過去・未來の八とを成就せず。
三世の一とは、謂く憂なり。過・未の八とは、謂く命等なり。
【本論】定んで過去・未來の七と、現在の一とを成就す。
過・未の七とは、謂く意と捨と信等の五となり。現の一とは、謂く命なり。
【本論】餘は不定なり。
前說の如し。
【本論】[61]若し信根を成就せざれば、彼れは定んで三世の八と、過去・未來の八とを成就せず。
三世の八とは、謂く信等の五と三無漏となり。過・未の八とは、謂く命等なり。

【五九】喜根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。
【六〇】憂根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて、
【六一】信根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて。

【本論】定んで過去・未來の四と、三世の二と、現在の二とを成就す。

過・未の四とは、謂く四受なり。三世の二とは、謂く意と一受となり。現の二とは、謂く身と命となり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】信根の如く、精進・念・定・慧根も亦、爾り。

[六二]若し未知當知根を成就せざれば、彼れは定んで三世の一と、過去・未來の八とを成就せず。

三世の一とは、謂く未知當知なり。過・未の八とは、謂く命等なり。

【本論】定んで過去・未來の二と、現在の一とを成就す。

過・未の二とは、謂く意と捨となり。現の一とは、謂く命なり。

【本論】餘は不定なり。

前說の如し。

【本論】未知當知根の如く、已知・具知根も亦、爾り。

第五節 [六三] 善・不善・無記の諸根は夫夫、善根・不善根・無記根を因と爲すやに關する論究

【本論】[六四]諸根にして善なるもの、彼の根は善根を因となすや。設し、根にして善根を因となすものなれば、彼の根は善なりや。答ふ、諸根にして善なるもの、彼の根は善根を因となすなり。

謂く、[六五]八根の善と、及び六根の少分となり。此は、善根を以って三因と爲す、卽ち相應と俱有と

【六二】未知根を成就せざるものの三世の根の成就、不成就に就きて、已知・具知根の場合も亦然り。

【六三】本節は、(一)善なる諸根は無貪・無瞋・無癡の三善根を因と爲すや否や、(二)不善なる根は、貪・瞋・癡の三不善根を因と爲すや否や、(三)無記なる根は、愛・慧・無明の三無記根を因を爲すや否や、(四)三性根を因と爲さず。又無因にも非らざる根ありや否やに關する論究をその課題とし、最後に迦濕彌羅師の愛・慧・無明の三無記根說と、西方師の愛・見・慢・無明の四無記根說を紹介し、且つ決判を與ふるなり。因みにこは發智の頌文の「善等根爲因」に相當する段なり。

【六四】善なる根は、善根を因と爲すや否や。

【六五】八根の全とは、三無漏根と信等の五根との全をいひ、六根の少分とは、憂根が善、不善に通じ、意根と四受根とが三性に通ずる中、その善なるものを取るなり。

同類となり。

【本論】 有る根は善根を因となすも、彼の根は、善に非ざるものあり。謂く、善根所引の異熟生の根なり。

卽ち善根所引の異熟の命等の八根と、及び意と樂と喜と捨との根となり。此は善根を以つて一因と爲す、謂く異熟因なり。此の中、無貪・無瞋・無癡を、因となす善根と名くるなり。

【本論】[66] 諸根にして不善なるもの、彼の根は不善根を因となすや。設し根にして不善根を因となすものなれば、彼の根は不善なりや。答ふ、諸根にして不善なれば、彼の根は不善根を因となすなり。

謂く、[67]六根の少分なり。此は不善根を以つて四因と爲す、卽ち相應と倶有と同類と遍行となり。

【本論】 有る根は不善根を因となすも、彼の根は不善に非ざるものあり。謂く、不善根所引の[68]異熟生の根なり。

卽ち不善根所引の命等の八根と及び意根と苦根となり。此は不善根を以つて一因と爲す。謂く異熟因なり。

【本論】 及び欲界の有身見・邊執見と相應する根なり。

此は不善根を以つて二因と爲す。謂く[69]同類と[70]遍行となり。此の中、貪・瞋・癡を因となす不善根と名くるなり。

【本論】 諸根にして[71]無記なるもの、彼の根は、無記根を因となすや。設し根にして無記根を因となすものなれば、彼の根は無記なりや。答ふ、應に四句を作すべし。

[72]迦濕彌羅國の毘婆沙師は說く「無記根に三有り。謂く、無記の愛と慧と無明となり。無記の愛と

【六六】 不善なる根は不善根を因と爲すや、否や。

【六七】 茲に六根の少分とは、意根と五受根との中の不善なるもののみを指すなり。

【六八】 大正本には、異熟一生とあるも、宮本に從つて異熟生と改む。

【六九】 不善が無記の爲めに同類因となること婆沙、十七卷(毘曇部七、頁三三二)に見ゆ、往見すべし。

【七〇】 茲に遍行因となる不善根は癡根なり。

【七一】 無記なる根は無記根を因と爲すや否やに就きての四句分別。

【七二】 特に三無記根に就きて、

は、謂く色・無色界の五部の愛なり。無記の慧とは、謂く有覆無記の慧と無覆無記の慧となり。有覆無記の慧とは、謂く欲界の有身見・邊執見と、及び色・無色界の五部の染汚の慧となり。無覆無記の慧とは、謂く威儀路と工巧處と異熟生と變化との心と俱生する慧なり。無記の無明とは、謂く欲界の有身見・邊執見と相應する無明と、及び色・無色界の五部の無明となり。此の中、無記の貪と相應する心は、三無記根に由るが故に有根心と名け、所餘の有覆無記心は、二無記根に由るが故に有根心と名く。謂く、無記の慧と無明となり。一切の無覆無記心は、一無記根に由るが故に、有根心と名く。謂く、無記の慧なり。」と。此れに依りて以つて四句の義を釋せば。

【本論】(一)有る根は無記なるも、彼の根は、無記根を因となすに非ざるものあり。謂く、[七三]無緣根なり。

即ち[七四]命等の八根なり。此の根は無記にして、而も無記根を以つて因と爲さざるなり。

【本論】(二)有る根は無記根を因となすも、彼の根は無記に非ざるものあり。謂く不善根なり。

即ち六の少分なり。此の根は不善にして而も、無記根を以つて二因と爲す。謂く[七五]同類と[七六]遍行となり。

【本論】(三)有る根は無記にして彼の根は亦、無記根を因となすものあり。謂く、無記の[七七]有緣根なり。

即ち[七八]五の少分なり。此の根は無記にして亦、無記根を以つて四因と爲す。謂く相應と俱有と同類と遍行となり。

【本論】(四)有る根は無記にも非ず、彼の根は亦、無記根を因となすにも非ざるも

【七三】無緣根とは、心心所法に攝せざる根、即ち色或は不相應行に攝する根をいふ。

【七四】命等の八根とは命・男・女・眼・耳・鼻・舌・身の八無記根をいふ。

【七五】無記が不善の爲めに同類因となること婆沙十七卷、(毘曇部七、頁三三二)に見ゆ。

【七六】遍行因は、苦諦下の五見・疑・無明と集諦下の二見(邪見・見取)・疑・無明との十一種にして、これを三界に配すれば三十三となる。而して今は不善根の因なるものが故に、欲界の遍行因なり、而かも玆にてはそは無記ならざるべからざるを以つて、苦諦下の有身見・邊執見の二のみなり。即ち此の二は有覆無記の慧と無明との二無記根によりて有根心となるなり。

【七七】有緣根とは心・心所法に攝する根をいふ。

【七八】五の少分とは、意根と、憂根を除く餘の四受根との無記なるものをいふ。

のあり。謂く善根なり。

即ち八の全と、六の少分となり。此の根は無記にも非ず亦、無記根を以つて[七九]因とも爲さざるなり。

【本論】[八〇]頗し有る根にして、善根を因となすにも非ず、不善根を因となすにも非ず、無記根を因となすにも非ざるものにして、彼の根は無因にも非ざるものありや。答ふ、有り。謂く無緣根なり。

即ち命等の八根をいふ。

【本論】[八一]色・心不相應行を以つて因と爲すなり。

此は三性の根を因と爲すに非ずして、而も色・心不相應行を以つて三因と爲す。謂く、倶有と同類と異熟となり。

[八二]西方の諸師は說く「無記根に四有り。謂く無記の愛と見と慢と無明となり。無記の愛とは、謂く色・無色界の五部の愛なり。無記の見とは、謂く、欲界の有身見、邊執見及び色・無色界の五見なり。無記の慢とは、謂く色・無色界の五部の慢なり。無記の無明とは、謂く欲界の有身見・邊執見と相應する無明と、及び色・無色界の五部の無明となり。此の中、無記の貪と相應する心は、二無記根に由るが故に有根心と名く。謂く無記の愛と無明となり。無記の見・慢と相應する心も亦、各二無記根に由るが故に、有根心と名く。謂く卽ち彼れと及び無明となり。所餘の有覆無記心は、一無記根に由るが故に、有根心と名く。謂く無記の無明なり。」と。

彼れに依りて以つて四句の義を釋せば、此の文は應に此の說に作るべし。

[八三](一)有る根は無記なるも、彼の根は無記根を因となすに非ざるものあり。謂く、[八四]無覆無記の根なり。

【七九】善と無記とは、異類なるが故に相應因・倶有因無く、又善と無記との間には同類因な無く、記は異熟因とならず、こは亦、隨眠に非ざるを以て、無記根を以つて遍行因となすことなきなり。

【八〇】**善・不善・無記根を因となさず、無因にも非ざる根に就きて。**

【八一】この本論は發智論には「因色・不相應行」とありて、婆沙論中の本論の「以色・不相應行爲因」と少しく文字の配列を異にす。

【八二】**特に四種の無記根に就きて、**この說は、無記根の數に於て增せるも、その範圍に於て減ぜり、何となれば無覆無記心と倶生する慧、卽ち無覆無記の慧根なきを以つてなり。

【八三】**無記なる根は無記根を因と爲すや否やに就きての四句分別。**

【八四】茲に無覆無記根とは命等の八根と意と四受との五根中の無覆無記なるものとをいふ。前の第一句の場合が命等の八根に限りしに、更に五根の少分を增加せしは、西方師は無覆無記の慧を根と立てざるが故なり。

此の根は無記にして而も（八五）無記根を以つて因と爲さざるなり。

(二)有る根は無記根を因となすも、彼の根は無記に非ざるものあり。謂く不善根なり。

此の根は無記に非らずして、而かも無記根を以つて二因と爲すなり。謂く、同類と遍行となり。

(三)有る根は無記にして彼の根は亦、無記根を因となすものあり。謂く有覆無記の根なり。

此の根は無記にして亦、無記根を以つて四因と爲す。謂く、相應と倶有と同類と遍行となり。

(四)有る根は無記にも非らず、彼の根は亦、無記根を因となすにも非ざるものあり。謂く、善根なり。

此の根は無記にも非らず、亦無記根を以つて因と爲さざるなり。

（八六）頗し有る根にして、善根を因となすにも非ず、不善根を因となすにも非ず、無記根を因となすにも非ざるものにして、彼の根は無因にも非ざるものありや。答ふ、有り。謂く無覆無記根にして、色・心不相應行等を以つて因と爲すものなり。

此は三性の根を以つて因と爲さずして、而も色・心不相應行・無覆無記の心心所を以つて四因と爲す。謂く相應と倶有と同類と異熟となり。此は卽ち總說なり。然も相應根には具さに四因有るも、不相應根は唯、三因のみにして相應因を除くなり。

（八七）問ふ、何が故に、西方の諸師は、慢を立てて無記根と爲すや。答ふ、彼れは說く「力の堅强なる義、是れ根の義なるに、慢の力は堅强なるが故に立てて根と爲すなり。謂く、瑜伽師が百千の善品を退失する所以は、皆、慢力に由ればなり」と。

（八八）問ふ、何が故に、此の國の諸師は、立てて根となさざるや。答ふ、此れは說く「下の義、是れ根の義なるに、慢は心をして擧げしめ、下に於て順せ（八九）ざ不らしむるが故に根と立てざるなり」と。

（九〇）問ふ、何が故に、此の國の諸師は、無覆無記の慧を立てて無記根と爲すや。答ふ、此れは說く「依

【八五】大正本には無記爲根因とあるも三本宮本に由り、無記根爲因と訂正せり。

【八六】善・不善・無記根を因と爲さず、無因にも非ざる根に就きて。

【八七】慢を西方師が無記根と立つる理由。

【八八】慢を無記根と立てざる理由。

【八九】不は大正本に下とあるも不の誤植なり。

【九〇】無覆無記の慧を無記根と立つる理由。

因と爲るの義、是れ根の義なるに、無覆無記の慧は依因と爲ること勝るが故に、立てて根と爲すなり」と。

九一 問ふ、何が故に、西方の諸師は立てて根と爲さざるや。答ふ、彼れは說く「力の堅强の義、是れ根の義なるに、無覆無記の慧は勢力羸劣なるが故に、根と立てざるなり」と。

九二 問ふ、何が故に、此の國と彼の國との師は、倶に疑を立てて無記根と爲さざるや。答ふ、倶に說く、「定住の義、是れ根の義なるに、疑は定住に不ず、二門に轉ずるが故に。故に根と立てざるなり。」と。

九三 如是說者はいふ、「善と不善との根に倶に九四三種有るが如く、無記根も亦、爾り。又、不善の慢を不善根と立てざるが如く、無記の慢も亦、應に爾るべきなり。故に無記根は唯、三者のみとするを善とす」と。

【九一】 無覆無記の慧を西方師が無記根と立てざる理由。

【九二】 疑を無記根と立てざる理由。

【九三】 無記根を三に限る理由。

【九四】 三種とは無貪・無瞋・無癡の三善根と、貪・瞋・癡の三不善根をいふ。

第七章[一]　根の因緣と所緣緣とに關する論究

（根蘊第六中、因緣納息第七）

第一節[二]　根の因緣と所緣緣との三世分別

【本論】　諸根の因が過去なるもの、彼の根の緣は過去なりや。

是くの如き等の章及び解章の義は、既に領會し已れるをもて、當に廣く分別すべし。

三 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、去・來の二世を撥無し、及び、因緣を撥無するものの意を止めんが爲め——乃至廣說——の故に斯の論を作すなり。

四 此の中、二緣に依りて、論を作す。謂く因緣と所緣緣となり。問ふ、何が故に、餘の二緣に依りて論を作さざるや。答ふ、等無間緣は唯、一刹那のみなり。又、增上緣は一切法に通ずるをもて、若し彼れに依りて論を作せば、則ち文義は五倶に婉博ならず。故に。此は但、二緣のみに依りて論を作すなり。

六 此の中、應に略毘婆沙を作るべし。謂く、二十二根中、十四は有所緣にして八は無所緣なり。有所緣中、五識身と相應する品は、過去なれば過去を緣じ、現在なれば現在を緣じ、未來の生法なれば未來を緣じ、不生法なれば三世を緣ず。意識身と相應する品は、隨つて何の世に在るも、若しくは生なるも不生なるも、皆三世と及び無爲法とを緣ず。

又、七 見苦所斷と見集所斷との根は、通じて五部を緣じ、見滅所斷と見道所斷との根は唯、自部と及び不斷とのみを緣ず。修斷と不斷との根は通じて、五部と及び不斷とを緣ず。

又、八 欲・色界繫と及び不繫との根は、通じて三界繫と及び不繫とを緣じ、無色界繫の根は、唯、色・無色界と及び不繫とのみを緣ず。因と緣との差別も亦、應に准じて知るべきなり。是れを此の中に

【一】　本章の內容を例に依りて發智論の頌文にて、示せば次の如し。

五ノ三ト四ト四ト八ト
八ト八ト八ト四門トノニヨリナ
辯ニ根因所緣一トヲス
此章願具說」

就中、「五ノ三」とは、根の因緣と所緣緣との間に於ける關係を、（一）三世、（二）三性、（三）三界繫、（四）三學、（五）三斷の五門に依りて三種に分別するをいひ、「四」とは、根の因緣と所緣緣との間の關係を、四諦斷によりて明にせんとする段にして、「四八」とは、その關係を、因緣は四諦斷により所緣緣は八智斷によりて、分別するをいひ、「八八」とは、其の關係を、因緣と及び所緣緣とを倶に八智斷によりて分別するをいひ、「八四」とは、其の關係を因緣は八智斷により、所緣緣は四諦斷によりて分別するをいふ。「辯ニ根因所緣一」とは、根の因緣と所緣々との關係を辯ずるなり。

【二】　本節には、發智論の頌文の「五ノ三」の中の一ノ三に相當する段にして、

（一）(a)根の因緣が過去なる時その根の所緣緣は、過去、未

略と謂ふなり。

【本論】[九] 諸根の因が過去なるもの丶、彼の根の縁は過去なりや。答ふ、諸根の因が過去なるもの丶、彼の根は或は縁が過去なり、或は縁が未來なり、或は縁が現在なり、或は縁が無爲なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が過去なるもの丶縁は過去なり」とは、謂く、根が過去にして、縁は過去なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は過去なるとなり。「因が過去なるもの丶縁は未來なり」とは、謂く根が過去にして縁は未來なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は未來なるとなり。「因が過去なるもの丶縁は現在なり」とは、謂く根が過去にして縁は現在なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は現在なるとなり。「因が過去なるもの丶縁は無爲なり」とは、謂く根が過去にして縁は無爲なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は無爲なるとなり。「因が過去なるものにして、無所縁なり」とは、謂く、無縁根の因が過去なるなり。

設し[一一]根の縁が過去なるもの丶彼の根の因は過去なりや。答ふ、諸根の縁が過去なるもの丶彼の根は或は因が過去なり、或は因が未來なり、或は因が現在なり。

「諸根の縁が過去なるもの丶因は過去なり」とは、謂く根が過去にして縁は過去なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は過去なるとなり。「縁が過去なるもの丶因は未來なり」とは、謂く根が未來にして縁は過去なるなり。「縁が過去なるもの丶因は現在なり」とは、謂く、根が現在にして縁は過去なると、及び根は未來なるも

來、現在、非世の何れなりやの所謂三世分別をなし、次に(b)、逆に根の所縁縁が過去なる時其の根の因縁は過去なりや、未來なりや、現在なりや等の三世分別をなし、更に斯くの如き組織にて、(二)未來、(三)現在に就きて論述するは本節の課題なり。

【三】 論起の因由。

【四】 因縁、所縁縁の二縁にて作論する理由。

【五】 俱の字は大正本に無きも三本、宮本によりて補へり。

【六】 本章の略毘婆沙。

【七】 意と喜・樂・捨とは、見・修・非斷の三斷に通ず。憂根は、見・修所斷なり。七色根と命根と苦根とは唯修所斷なり。信等の五根は修所斷非斷に通ず。三無漏根は非斷なり。

【八】 欲界繫なるは三無漏根を除く十九根なり。色界繫なるは、三無漏根と男女と憂と苦とを除く十五根なり。無色界繫なるは、意と命と捨と信等の五根となり。不繫なるは三無漏根なり。

【九】 以下の本論は、婆沙論に省略され居るを以つて、發智論より補譯せり。

【一〇】 根の因が過去なる彼の根の所縁の三世分別。

【一一】 根の所縁が過去なる彼

因が現在にして、縁は過去なるとなり。

[一二] 諸根の因か未來なるもの、彼の根の縁は未來なりや。答ふ、諸根の因が未來なるもの、彼の根は或は縁が未來なり、或は縁が過去なり、或は縁が現在なり、或は縁が無爲なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が未來なるもの、縁は未來なり」とは、謂く根が未來にして縁は未來なり。「因が未來なるもの、縁は過去なり」とは、謂く根が未來にして縁は過去なるなり。「因が未來なるもの、縁は現在なり」とは、謂く根が未來にして縁は現在なるなり。「因が未來なるもの、縁は無爲なり」とは、謂く根が未來にして縁は無爲なるなり。「因が未來なるものにして無所縁なり」とは、無縁根の因が未來なるなり。

[一三] 設し根の縁が未來なるもの、彼の根の因は未來なりや。答ふ、諸根の縁が未來なるもの、彼の根は、或は因が未來なり、或は因が過去なり、或は因が現在なり。

「諸根の縁が未來なるもの、因は未來なり」とは、謂く根が未來にして縁は未來なるなり。「縁が未來なるもの、因は過去なり」とは、謂く根が過去にして縁は未來なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして縁は未來なるとなり。「縁が未來なるもの、因は現在なり」とは、謂く根が現在にして縁は未來なると、及び根は未來なるも因が現在にして縁は未來なるとなり。

[一四] 諸根の因が現在なるもの、彼の根の縁は現在なりや。答ふ、諸根の因が現在なるもの、彼の根は或は縁が現在なり、或は縁が過去なり、或は縁が未來なり、或は縁が無

の根の因の三世分別。

【一二】根の因が未來なる彼の根の所縁の三世分別。

【一三】根の所縁が未來なる彼の根の因の三世分別。

【一四】根の因が現在なる彼の根の所縁の三世分別。

爲なり、或は無所緣なり。

「諸根の因が現在なるもの丶緣は現在なり」とは、謂く根が現在にして緣は現在なると、及び根は未來なるも因が現在にして緣は現在なるとなり。「因が現在なるもの丶緣は過去なり」とは、謂く根が現在にして緣は過去なると、及び根は未來なるも因が現在にして緣は過去なるとなり。「因が現在なるもの丶緣は未來なり」とは、根が現在にして緣は未來なると、及び根は未來なるも因が現在にして緣は未來なるとなり。「因が現在なるもの丶緣は無爲なり」とは、根が現在にして緣は無爲なると、及び根は未來なるも因が現在にして緣は無爲なるとなり。「因が現在なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が現在なるなり。

[一五]設し、根の緣が現在なるもの丶、彼の根の因は現在なりや。答ふ、諸根にして緣が現在なるもの丶、彼の根は或は因が現在なり、或は因が過去なり、或は因が未來なり。「諸根の緣が現在なるもの丶因は現在なり」とは、謂く根が現在にして緣は現在なると、及び根は未來なるも因が現在にして緣は現在なるとなり。「緣が[一六]現在なるもの丶因は過去なり」とは、謂く根が過去にして緣は現在なると、及び根は未來・現在なるも因が過去にして緣は現在なるとなり。「緣が現在なるもの丶因は未來なり」とは、謂く根が未來にして緣は現在なるなり。

[一七]第二節　根の因緣と所緣緣との三性分別

【本論】[一八]諸根の因が善なるもの丶彼の根の緣は善なりや。答ふ、諸根の因が善なる

【一五】根の所緣が現在なる彼の根の因の三世分別、

【一六】大正本には根在とあるも現在の誤植につき訂正す。

【一七】本節は發智論の頌文の「五ノ三」中の第二ノ三に當る段にして、(一)(a)根の因緣が善なる時、その根の所緣緣は善なりや、不善なりや、無記なりや、等の所謂る、三性分別をなし、次に、(b)、根の所緣が善なるときその根の因は善なりや不善なりや無記なりや等に就きて論じ、斯くて、(二)(a)、根の因緣が不善なる場合、(b)、根の所緣緣が不善なる場合、(三)(a)、根の因緣が無記なる場合、(b)、根の所緣緣が無記なる場合、に就きて夫夫論究するをその目的とす。

【一八】根の因が善なる彼の根の所緣の三性分別。

もの、彼の根は或は縁が善なり、或は縁が不善なり、或は縁が無記なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が善なるもの、縁は善なり」とは、謂く根が善にして縁は善なると、及び根は無記なるも因が善にして縁は善なるとなり。「因が善なるもの、縁は不善なり」とは、謂く、根が善にして縁は不善なると、「又、根は無記なるも因が善にして縁は不善なるとなり。「因が善なるもの、縁は無記なり」とは、謂く根が善にして縁は無記なると、及び根は無記なるも因が善にして縁は無記なるとなり。「因が善なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が善なるなり。

一九 設し根の縁が善なるもの、彼の根の因は善なりや。答ふ、諸根の縁が善なるもの、彼の根は或は因が善なり、或は因が不善なり、或は因が無記なり。

「諸根の縁が善なるもの、因は善なり」とは、謂く、根が善にして縁は善なると、及び根は無記なるも、因が善にして縁は善なるとなり。「縁が善なるもの、因は不善なり」とは、謂く根が不善にして縁は善なると、及び根は無記なるも因が不善にして縁は善なるとなり。「縁が善なるもの、因は無記なり」とは、謂く根が無記にして縁は善なると、及び根は不善なるも因が無記にして縁は善なるとなり。

二〇 諸根の因が不善なるもの、彼の根は縁が不善なりや。答ふ、諸根の因が不善なるもの、彼の根は、或は縁が不善なり、或は縁が善なり、或は縁が無記なり、或は無所縁なり。

【一九】 根の所縁が善なる彼の根の因の三性分別。

【二〇】 根の因が不善なる彼の根の所縁の三性分別

「諸根の因が不善なるものの縁は不善なり」とは、謂く根が不善にして縁は不善なると、及び根は無記なるも因が不善にして縁は不善なるとなり。「因が不善なるものゝ縁は善なり」とは、謂く根が不善にして縁は善なると、及び根は無記なるも因が不善にして縁は善なるとなり。「因が不善なるものゝ縁は無記なり」とは、謂く根が不善にして縁は無記なると、及び根は無記なるも因が不善にして縁は無記なるとなり。「因が不善なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が不善なるなり。

【二】根の所縁が不善なる彼の根の因の三性分別。

二 設し根の縁が不善なるものゝ彼の根の因は不善なりや。答ふ、諸根の縁が不善なるものゝ彼の根は或は因が不善なり、或は因が善なり、或は因が無記なり。

「諸根の縁が不善なるものゝ因は不善なり」とは、謂く、根が不善にして縁は不善なると、及び根は無記なるも因が不善にして、縁は不善なるとなり。「縁が不善なるものゝ因は善なり」とは、謂く根が善にして縁は不善なると、及び根は無記なるも因が善にして縁は不善なるとなり。「縁が不善なるものゝ因は無記なり」とは、謂く根が無記にして縁は不善なると、及び根は不善なるも因が無記にして縁は不善なるとなり。

【三】根の因が無記なる彼の根の所縁の三性分別。

三 諸根の因が無記なるものゝ彼の根の縁は無記なりや。答ふ、諸根の因が無記なるものゝ彼の根は、或は縁が無記なり、或は縁が善なり、或は縁が不善なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が無記なるものゝ縁は無記なり」とは、謂く、根が無記にして縁は無記なると、及び根は不善なるも因が無記にして縁は無記なるとなり。「因が無記なるものゝ

緣は善なり」とは、謂く、根が無記にして緣は善なると、及び根は不善なるも因が無記にして緣は無記なるとなり。「因が無記なるもの、緣は不善なり」とは、謂く根が無記にして緣は不善なると、及び根は不善なるも因が無記にして緣は不善なるとなり。「因が無記なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が無記なるなり。

[二三] 設し根の緣が無記なるもの、彼の根の因は無記なりや。答ふ、諸根の緣が無記なるもの、彼の根は、或は因が無記なり、或は因が善なり、或は因が不善なり。

「諸根の緣が無記なるもの、因は無記なり」とは、謂く根が無記にして緣は無記なると、及び根は不善なるも因が無記にして緣は無記なるとなり。「緣が無記なるもの、因は善なり」とは、謂く根が善にして緣は無記なると、及び根は無記なるも因が善にして緣は無記なるとなり。「緣が無記なるもの、因は不善なり」とは、謂く根が不善にして緣は無記なると、及び根は無記なるも因が不善にして緣は無記なるとなり。

第三節　根の因緣と所緣緣との三界繫分別 [二四]

【本論】[二五] 諸根の因が欲界なるもの、彼の根の緣は欲界なりや。答ふ、諸根の因が欲界なるもの、彼の根は、或は緣が欲界なり、或は緣が色界なり、或は緣が無色界なり、或は緣が不繫なり、或は無所緣なり。

「諸根の因が欲界なるもの、緣は欲界なり」とは、謂く根が欲界にして緣は欲界なるなり。「因が欲界なるもの、緣は色界なり」とは、謂く根が欲界にして緣は色界なるなり。「因が欲界なるもの、緣は無色界なり」とは、謂く根が欲界にして緣は無色界なる

【二三】根の所緣が無記なる彼の根の因の三性分別。

【二四】本節は、發智論の頌文の「五の三」中の第三の三に相當する段にして、根の因緣と、その所緣緣との間に於ける三界繫關係を前節と同樣の組織の下に論究せるものなり。

【二五】根の因が欲界なる彼の根の所緣の三界繫分別。

なり。「因が欲界なるもの、縁は不繫なり」とは、謂く根が欲界にして縁が不繫なるなり。「因が欲界なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が欲界なるなり。

二六 設し根の縁が欲界なるもの、彼の根の因は欲界なりや。答ふ、諸根の縁が欲界なるもの、彼の根は、或は因が欲界なり、或は因が色界なり、或は因が不繫なり。

「諸根の縁が欲界なるもの、因は欲界なり」とは、謂く根が欲界にして縁は欲界なるなり。「縁が欲界なるもの、因は色界なり」とは、謂く根が色界にして縁は欲界なるなり。「縁が欲界なるもの、因は不繫なり」とは、根が不繫にして縁は欲界なるなり。

二七 諸根の因が色界なるもの、彼の根の縁は色界なりや。答ふ、諸根の因が色界なるもの、彼の根は、或は縁が色界なり、或は縁が欲界なり、或は縁が無色界なり、或は縁が不繫なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が色界なるもの、縁は色界なり」とは、謂く根が色界にして縁は色界なるなり。「因が色界なるもの、縁は欲界なり」とは、謂く根が色界にして縁は欲界なるなり。「因が色界なるもの、縁は無色界なり」とは、謂く根が色界にして縁は無色界なるなり。「因が色界なるもの、縁は不繫なり」とは、謂く根が色界にして縁は不繫なるなり。「因が色界なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が色界なるなり。

二八 設し根の縁が色界なるもの、彼の根の因は色界なりや。答ふ、諸根の縁が色界なるもの、彼の根は、或は因が色界なり、或は因が欲界なり、或は因が無色界なり、或は因が不繫なり。

〔二六〕根の所縁が欲界なる彼の根の因の三界繫分別。

〔二七〕根の因が色界なる彼の根の所縁の三界繫分別。

〔二八〕根の所縁が色界なる彼の根の因の三界繫分別。

「諸根の緣が色界なるもの、因は色界なり」とは、謂く根が色界にして緣は色界なるなり。「緣が色界なるもの、因は欲界なり」とは、謂く根が欲界にして緣は色界なるなり。「緣が色界なるもの、因は無色界なり」とは、謂く根が無色界にして緣は色界なるなり。「緣が色界なるもの、因は不繫なり」とは、謂く、根が不繫にして緣は色界なるなり。

二九　諸根の因が無色界なるもの、彼の根の緣は無色界なりや。答ふ、諸根の因が無色界なるもの、彼の根は、或は緣が無色界なり、或は緣が色界なり、或は緣が不繫なり、或は無所緣なり。

「諸根の因が無色界なるもの、緣は無色界なり」とは、謂く根が無色界にして緣は無色界なるなり。「因が無色界なるもの、緣は色界なり」とは、謂く根が無色界にして緣は色界なるなり。「因か無色界なるもの、緣は不繫なり」とは、謂く根が無色界にして緣は不繫なるなり。「因が無色界なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が無色界なるなり。

三〇　設し根の緣が無色界なるもの、彼の根の因は無色界なりや。答ふ、諸根の緣が無色界なるもの、彼の根は、或は因が無色界なり、或は因が欲界なり、或は因が色界なり、或は因が不繫なり。

「諸根の緣が無色界なるもの、因は無色界なり」とは、謂く根が無色界にして緣は無色界なるなり。「緣が無色界なるもの、因は欲界なり」とは、謂く根が欲界にして緣は

【二九】根の因が無色界なる彼の根の所緣の三界繫分別。

【三〇】根の所緣が無色界なる彼の根の因の三界繫分別。

無色界なるなり。「縁が無色界なるもの、因は色界なり」とは、謂く根が色界にして縁は無色界なるなり。「縁が無色界なるもの、因は不繫なり」とは、謂く根が不繫にして縁は無色界なるなり。

第四節　根の因縁と所縁縁との三學分別 [三一]

【本論】[三二] 諸根の因が學なるもの、彼の根の縁は學なりや。答ふ、諸根の因が學なるもの、彼の根は、或は根が學なり、或は縁が無學なり、或は縁が非學非無學なり。

「諸根の因が學なるもの、縁は學なり」とは、謂く根が學にして縁は學なると、及び根は無學なるも因が學にして縁は學なるとなり。「因が學なるもの、縁は無學なり」とは、謂く根が學にして縁は無學なると、及び根は無學なるも因が學にして縁は無學なるとなり。「因が學なるもの、縁は非學非無學なり」とは、謂く根が學にして縁は非學非無學なると、及び根は無學なるも因が學にして縁は非學非無學なるとなり。

[三三] 設し根の縁が學なるもの、彼の根の因は學なりや。答ふ、諸根の縁が學なるもの、彼の根は、或は因が學なり、或は因が無學なり、或は因が非學非無學なり。

「諸根の縁が學なるもの、因は學なり」とは、謂く根が學にして縁は學なると、及び根は無學なるも因が學にして縁は學なるとなり。「縁が學なるもの、因は無學なり」とは、謂く根が無學にして縁は學なるなり。「縁が學なるものの因は非學非無學なり」とは、謂く根が非學非無學にして縁は學なるなり。

[三四] 諸根の因が無學なるもの、彼の根の縁は無學なりや。答ふ、諸根の因が無學なるも

【三一】本節は、發智論の頌文の「五ノ三」中の第四の三に相當する段にしては根の因縁とその根の所縁縁との間に於ける關係を學・無學・非學非無學の三學の立場より論ずるものにして、其の組織は全く前三節と同じ。

【三二】根の因が學なる彼の根の所縁の三學分別。

【三三】根の所縁が學なる彼の根の因の三學分別。

【三四】根の因が無學なる彼の根の所縁の三學分別。

の、彼の根は或は緣が無學なり、或は緣が學なり、或は緣が非學非無學なるなり。
「諸根の因が無學なるもの、緣は無學なり」とは、謂く根が無學にして緣は無學なるなり。「因が無學なるもの、緣は學なり」とは、謂く根が無學にして緣が學なるなり。「因が無學なるもの、緣は非學非無學なり」とは、謂く根が無學にして緣は非學非無學なるなり。

三五 設し根の緣が無學なるもの、彼の根の因は無學なりや。答ふ、諸根の緣が無學なるもの、彼の根は或は因が無學なり、或は因が學なり、或は因が非學非無學なり。
「諸根の緣が無學なるもの、因は無學なり」とは、謂く根が無學にして緣は無學なるなり。「緣が無學なるもの、因は學なり」とは、謂く根が學にして緣は無學なると、及び根は、無學なるも因が學にして緣は無學なるとなり。「緣は無學なるもの、因は非學非無學なり」とは、謂く根が非學非無學にして緣は無學なるなり。

三六 諸根の因が非學非無學なるもの、彼の根の緣は非學非無學なりや。答ふ、諸根の因が非學非無學なるもの、彼の根は、或は緣が非學非無學なり、或は緣が學なり、或は緣が無學なり、或は無所緣なり。
「諸根の因が非學非無學なるもの、緣は非學非無學なり」とは、謂く、根が非學非無學にして緣は非學非無學なるなり。「因が非學非無學なるもの、緣は學なり」とは、謂く根が非學非無學にして緣は學なるなり。「因が非學非無學なるもの、緣は無學なり」とは、謂く根が非學非無學にして緣は無學なるなり。「因が非學非無學なるものにして

【三五】根の所緣が無學なる彼の根の因の三學分別。

【三六】根の因が非學非無學なる彼の根の所緣の三學分別。

無所緣なり」とは、謂く、無緣根の因が非學非無學なるなり。

三七 設し根の緣が非學非無學なるもの、彼の根の因は、非學非無學なりや。答ふ、諸根の緣が非學非無學なるもの、彼の根は、或は因が非學非無學なり、或は因が學なり、或は因が無學なり。

「諸根の緣が非學非無學なるもの、因は非學非無學なり」とは、謂く根が非學非無學にして緣は非學非無學なるなり。「緣が非學非無學なるもの、因は學なり」とは、謂く根が學にして緣は非學非無學なると、及び根は無學なるも因が學にして緣は非學非無學なるとなり。「緣が非學非無學なるもの、因は無學なり」とは、謂く根が無學にして緣は非學非無學なるなり。

三八 第五節　根の因緣と所緣緣との三斷分別

【本論】 三九 諸根の因が見斷なるもの、彼の根の緣は、見斷なりや。答ふ、諸根の因が見斷なるもの、彼の根は、或は緣が見斷なり、或は緣が修斷なり、或は緣が不斷なり、或は無所緣なり。

「諸根の因が見斷なるもの、緣は見斷なり」とは、謂く根が見斷にして緣は見斷なるなり。「因が見斷なるもの、緣は修斷なり」とは、謂く根が見斷にして緣は修斷なると、及び根は修斷なるも因が見斷にして緣は修斷なるとなり。「因が見斷なるもの、緣は不斷なり」とは、謂く根が見斷にして緣は不斷なるなり。「因が見斷なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が見斷なるなり。

【三七】 **根の所緣が非學非無學なる彼の根の因の三學分別。**

【三八】 本節は、發智論の頌文の「五ノ三」中最後の三に相當する段にして、根の因緣とその根の所緣緣との間に於ける關係を見所斷・修所斷・非斷の所謂る三斷門の立場より攷究せるものにして、其の組織は全く前四節に同ず。

【三九】 **根の因が見斷なる彼の根の所緣の三斷分別。**

〔四〇〕設し根の縁が見斷なるもの、彼の根の因は見斷なりや。答ふ、諸根の縁が見斷なるもの、彼の根は、或は因が見斷なり、或は因が修斷なり、或は因が不斷なり。

「諸根の縁が見斷なるもの、因は見斷なり」とは、謂く根が見斷にして縁は見斷なるなり。「縁が見斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は見斷なるなり。「縁が見斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は見斷なるなり。

〔四一〕諸根の因が修斷なるもの、彼の根の縁は修斷なりや。答ふ、諸根の因が修斷なるもの、彼の根は、或は縁が修斷なり、或は縁が見斷なり、或は縁が不斷なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が修斷なるもの、縁は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は修斷なるなり。「因が修斷なるもの、縁は見斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は見斷なるなり。「因が修斷なるもの、縁は不斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は不斷なるなり。「因が修斷なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が修斷なるなり。

〔四二〕設し根の縁が修斷なるもの、彼の根の因は修斷なりや。答ふ、諸根の縁が修斷なるもの、彼の根は或は因が修斷なり、或は因が見斷なり、或は因が不斷なり。

「諸根の縁が修斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は修斷なるなり。「縁が修斷なるもの、因は見斷なり」とは、謂く根が見斷にして縁は修斷なると及び根は修斷なるも、因が見斷にして縁は修斷なるとなり。「縁が修なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は修斷なるなり。

〔四〇〕根の所縁が見斷なる彼の根の因の三斷分別。

〔四一〕根の因が修斷なる彼の根の所縁の三斷分別。

〔四二〕根の所縁が修斷なる彼の根の因の三斷分別。

四三 諸根の因が不斷なるもの、彼の根の縁は不斷なりや。答ふ、諸根の因が不斷なるもの、彼の根は或は縁が不斷なり、或は縁が見斷なり、或は縁が修斷なるなり。

「諸根の因が不斷なるもの、縁は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は不斷なるなり。「因が不斷なるもの、縁は見斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は見斷なるなり。「因が不斷なるもの、縁は修斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は修斷なるなり。

四四 設し根の縁が不斷なるもの、彼の根の因は不斷なりや。答ふ、諸根の縁が不斷なるもの、彼の根は或は因が不斷なり、或は因が見斷なり、或は因が修斷なり。

「諸根の縁が不斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は不斷なるなり。「縁が不斷なるもの、因は見斷なり」とは、謂く根が見斷にして縁は不斷なるなり。「縁が不斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は不斷なるなり。

四五 第六節　根の因緣と所緣緣との四諦斷分別

【本論】 四六 諸根の因が見苦斷なるもの、彼の根の縁は見苦斷なりや。答ふ、諸根の因が見苦斷なるもの、彼の根は或は縁が見苦斷なり、或は縁が見集斷なり、或は縁が見滅斷なり、或は縁が見道斷なり、或は縁が修斷なり、或は縁が不斷なり、或は無所縁なり。

「諸根の因が見苦斷なるもの、縁は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は見苦斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は見苦斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は見集斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は見集斷なると、及

【四三】根の因が不斷なる彼の根の所緣の三斷分別。

【四四】根の所緣が不斷なる彼の根の因の三斷分別。

【四五】本節は發智論の頌文の「四」に相當する段にして、根の因緣と所緣緣との關係を見苦斷・見集斷・見滅斷・見道斷の所謂四諦斷により、次の如き組織の下に明にせるものなり。即ち(一)(a)、根の因緣が見苦斷なるときその根の所緣緣は見苦斷なりや否や、(b)、根の所緣緣が見苦斷なる時のその根の因は見苦斷なりや否や。乃至、(二)見集斷、(三)見滅斷、(四)見道斷の場合も之に準ず。

【四六】根の因が見苦斷なる彼の根の所緣の四諦斷分別。

び根は見集斷なるも、因が見苦斷にして縁は見集斷なるとなり。「因が見苦斷なるものゝ縁は見滅斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は見滅斷なると、及び根は見集・見滅斷なるも、因が見苦斷にして縁は見滅斷なるとなり。「因が見苦斷なるものゝ縁は見道斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は見道斷なると、及び根は見集・見道斷なるも因が見苦斷にして縁は見道斷なるとなり。「因が見苦斷なるものゝ縁は修斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は修斷なると、及び根は見集・修斷なるも因が見苦斷にして縁は修斷なるとなり。「因が見苦斷なるものゝ縁は不斷なり」とは、謂く根は見滅・見道斷なるも因が見苦斷にして縁は不斷なるなり。「因が見苦斷なるものゝにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が見苦斷なるなり。

[四七] 設し、根の縁が見苦斷なるものゝ彼の根の因は見苦斷なりや。答ふ、諸根の縁が見苦斷なるものゝ彼の根は或は因が見苦斷なり、或は因が見集斷なり、或は因が修斷なり、或は因が不斷なり。

「諸根の縁が見苦斷なるものゝ因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は見苦斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるものゝ因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして縁は見苦斷なると、及び根は見苦斷なるも、因が見集斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるものゝ因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は見苦斷なるなり。「縁が見苦斷なるものゝ因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は見苦斷なるなり。

【四七】根の所縁が見苦斷なる彼の根の因の四諦斷分別。

四八 見苦斷の如く、見集斷も亦、爾り。

四九 諸根の因が見滅斷なるもの丶彼の根の緣は見滅斷なりや。答ふ、諸根の因が見滅斷なるもの丶彼の根は或は緣が見滅斷なり、或は緣が修斷なり、或は緣が不斷なり、或は無所緣なり。

「諸根の因が見滅斷なるもの丶緣は見滅斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして緣は見滅斷なるなり。「因が見滅斷なるもの丶緣は修斷なり」とは、謂く根は修斷なるも因が見滅斷にして緣は修斷なるなり。「因が見滅斷なるもの丶緣は不斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして緣は不斷なるなり。「因が見滅斷なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が見滅斷なるなり。

五〇 設し根の緣が見滅斷なるもの丶彼の根の因は見滅斷なりや。答ふ、諸根の緣が見滅斷なるもの丶彼の根は、或は因が見滅斷なり、或は因が見苦斷なり、或は因が見集斷なり、或は因が修斷なり、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が見滅斷なるもの丶因は見滅斷なり」とは、謂く根の因が見滅斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるるもの丶、因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は見滅斷なると、及び根は見集・見滅斷なるも因が見苦斷にして、緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして緣は見滅斷なると、及び根は見苦・見滅斷なるも因が見集斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は見滅斷

【四八】見集斷の場合——

【四九】根の因が見滅斷なる彼の根の所緣の四諦斷分別。

【五〇】根の所緣が見滅斷なる彼の根の因の四諦斷分別。

なるなり。「縁が見滅斷なるもの丶因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁が見滅斷なるなり。

五一 見滅斷の如く、見道斷も亦、爾り。

五二 第七節　根の因縁の四諦斷と、所縁々の八智斷との關係

【本論】五三 諸根の因が見苦斷なるもの丶、彼の根の縁は苦法智斷なりや。答ふ、諸根の因が見苦斷なるもの丶、彼の根は或は縁が苦法智斷、或は縁が苦類智斷、或は縁が集法智斷、或は縁が集類智斷、或は縁が滅法智斷、或は縁が滅類智斷、或は縁が道法智斷、或は縁が道類智斷、或は縁が修斷、或は縁が不斷、或は無所縁なり。

「諸根の因が見苦斷なるもの丶縁は苦法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は苦法智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は苦法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶縁は苦類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は苦類智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は苦類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶縁は集法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は集法智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして、縁は集法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶縁は集類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は集類智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして、縁は集類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶縁は滅法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は滅法智斷なると、及び根は見集、見滅斷なるも、因が見苦斷にして縁は滅法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶縁

【五一】 見道斷の場合——

【五二】 本節は發智論の頌文の「四八」に相應する段なり。こは、(一)(a)、根の因が見苦斷なるときの彼の根の所縁は苦法智斷なりやとて所縁の八智斷分別をなし、次に(b)、根の所縁が苦法智斷なるときの彼の根の因は見苦斷なりやとて因の四諦斷分別をなし、更に(c)、根の因が見苦斷なるときの彼の根の所縁は苦類智斷なりやとて、所縁の八智斷分別をなし、更に復た、(d)、根の所縁が苦類智斷なるとき彼の根の因は見苦斷なりやとて四諦斷分別をなす、斯くの如くして、(二)集、(三)滅、(四)道の場合に就きて夫夫論ずるなり。而して要之、因に就きては四諦斷分別をなし、所縁に就きては八智斷分別をなすを「四八」といふなり。因みに茲に八智斷といへるは苦法智忍斷乃至、道類智忍斷のことなるも、忍は智の眷屬なるが故に、八忍斷を八智斷といへるなり。

【五三】 根の因が見苦斷なる彼の根の所縁の八智斷分別（其一）。

は滅類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は滅類智斷をなると、及び根は見集・見滅斷なるも因が見苦斷にして、緣は滅類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は道法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は道法智斷なると、及び根は見集・見道斷なるも因が見苦斷にして、緣は道法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は道類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は道類智斷なると、及び根は見集・見道斷なるも、因が見苦斷にして緣は道類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は修斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は修斷なると、及び根は見集・修斷なるも因が見苦斷にして緣は修斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は不斷なり」とは、謂く根は見滅、見道斷なるも、因が見苦斷にして緣は不斷なるなり。「因が見苦斷なるものにして、無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が見苦斷なるなり。

五四 設し根の緣が苦法智斷なるもの丶彼の根の因は見苦斷なりや。答ふ、諸根の緣が苦法智斷なるもの丶彼の根は、或は因が見苦斷、或は因が見集斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が苦法智斷なるもの丶因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は苦法智斷なると、及び、根は見集斷なるも因が見苦斷にして、緣は苦法智斷なるとなり。「緣が苦法智斷なるもの丶因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして緣は苦法智斷なると、及び根は見苦斷なるも、因が見集斷にして緣は苦法智斷なるとなり。「緣が苦法智斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は苦法智斷なると

【五四】根の所緣が苦法智斷なる彼の根の因の四諦斷分別

なり。「縁が苦法智斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は苦法智斷なるなり。

五五 諸根の因が見苦斷なるもの、彼の根の縁は苦類智斷なりや。答ふ、諸根の因が見苦斷なるもの、彼の根は或は縁が苦類智斷、或は縁が苦法智斷、或は縁が集法智斷、或は縁が集類智斷、或は縁が滅法智斷、或は縁が滅類智斷、或は縁が道法智斷、或は縁が道類智斷、或は縁が修斷、或は縁が不斷、或は無所縁なり。

「諸根の因が見苦斷なるもの、縁は苦類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は苦類智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は苦類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は苦法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は苦法智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は苦法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は集法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は集法智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして縁は集法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は集類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は集類智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして、縁は集類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は滅法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は滅法智斷なると、及び根は見集・見滅斷なるも、因が見苦斷にして縁は滅法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁は滅類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は滅類智斷なると及び、根は見集・見滅斷なるも因が見苦斷にして縁は滅類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの、縁

【五五】根の因が見苦斷なる彼の根の所縁の八智斷分別（其二）。

は道法智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は道法智斷なると、及び根は見集・見道斷なるも、因が見苦斷にして緣は道法智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は道類智斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は道類智斷なると、及び根は見集・見道斷なるも、因が見苦斷にして緣は道類智斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は修斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は修斷なると、及び根は見集・修斷なるも因が見苦斷にして緣は修斷なるとなり。「因が見苦斷なるもの丶緣は、不斷なり」とは、謂く根は見滅・見道斷なるも因が見苦斷にして緣は不斷なるなり。「因が見苦斷なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が見苦斷なるなり。

五六 設し根の緣が苦類智斷なるもの丶彼の根の因は見苦斷なりや。答ふ、諸根の緣が苦類智斷なるもの丶彼の根は、或は因が見苦斷、或は因が見集斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が苦類智斷なるもの丶因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は見集斷なるも因が見苦斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は見苦斷なるも因が見集斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は苦類智斷なるなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は苦類智斷なるなり。

【五六】根の所緣が苦類智斷なる彼の根の因の四諦斷分別。

五七 苦に於けるが如く、集に於けるも亦、爾り。

五八 諸根の因が見滅斷なるもの丶彼の根の緣は滅法智斷なりや。答ふ、諸根の因が見滅斷なるもの丶彼の根は或は緣が滅法智斷、或は緣が滅類智斷、或は緣が修斷、或は緣が不斷、或は無所緣なり。

「諸根の因が見滅斷なるもの丶緣は滅法智斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして緣は滅法智斷なるなり。「因が見滅斷なるもの丶緣は滅類智斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして緣は滅類智斷なるなり。「因が見滅斷なるもの丶緣は修斷なり」とは、謂く根は修斷なるも、因が見滅斷にして緣は修斷なるなり。「因が見滅斷なるもの丶緣は不斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして緣は不斷なるなり。「因が見滅斷なるものにして無所緣なり」とは、謂く無緣根の因が見滅斷なるなり。

五九 設し根の緣が滅法智斷なるもの丶彼の根の因は見滅斷なりや。答ふ、諸根の緣が滅法智斷なるもの丶彼の根は、或は因が見滅斷、或は因が見苦斷、或は因が見集斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が滅法智斷なるもの丶因は見滅斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして、緣は滅法智斷なるなり。「緣が滅法智斷なるもの丶因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして緣は滅法智斷なると、及び根は見集・見滅斷なるも因が見苦斷にして緣は滅法智斷なるとなり。「緣が滅法智斷なるもの丶因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして緣は滅法智斷なると、及び根は見苦・見滅斷なるも因が見集斷にして緣は滅法

【五七】 集の場合——

【五八】 根の因が見滅斷なる彼の根の所緣の八智斷分別（其一）。

【五九】 根の所緣が滅法智斷なる彼の根の因の四諦斷分別。

智斷なるとなり。「縁が滅法智斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は滅法智斷なるなり。「縁が滅法智斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は滅法智斷なるなり。

六〇 諸根の因が見滅斷なるもの、彼の根の縁は滅類智斷なりや。答ふ、諸根の因が見滅斷なるもの、彼の根は或は縁が滅類智斷、或は縁が滅法智斷、或は縁が修斷、或は縁が不斷、或は無所縁なり。

「諸根の因が見滅斷なるもの、縁は滅類智斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして縁は滅類智斷なるなり。「因が見滅斷なるもの、縁は滅法智斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして縁は滅法智斷なるなり。「因が見滅斷なるもの、縁は修斷なり」とは、謂く根は修斷なるも因が見滅斷にして、縁は修斷なるなり。「因が見滅斷なるもの、縁は不斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして縁は不斷なるなり。「因が見滅斷なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が見滅斷なるなり。

六一 設し根の縁が滅類智斷なるもの、彼の根の因は見滅斷なりや。答ふ、諸根の縁が滅類智斷なるもの、彼の根は、或は因が見滅斷、或は因が見苦斷、或は因が見集斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の縁が滅類智斷なるもの、因は見滅斷なり」とは、謂く根が見滅斷にして、縁は滅類智斷なるなり。「縁が滅類智斷なるもの、因は見苦斷なり」とは、謂く根が見苦斷にして縁は滅類智斷なると、及び根は見集・見滅斷なるも因が見苦斷にして、縁は

【六〇】根の因が見滅斷なる彼の根の所縁の八智斷分別（其二）

【六一】根の所縁が滅類智斷なる彼の根の因の四諦斷分別。

滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は見集斷なり」とは、謂く根が見集斷にして緣は滅類智斷なると、及び根は見苦・見滅斷なるも因が見集斷にして緣は滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は滅類智斷なるなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は滅類智斷なるなり。

六二 滅に於けるが如く、道に於けるも亦、爾り。

六三 第八節　根の因緣と所緣緣との八智斷分別

【本論】六四 諸根の因が苦法智斷なるもの、、彼の根の緣は苦法智斷なりや。答ふ、諸根の因が苦法智斷なるもの、彼の根は或は緣が苦法智斷、或は緣が苦類智斷、或は緣が集法智斷、或は緣が集類智斷、或は緣が滅法智斷、或は緣が滅類智斷、或は緣が道法智斷、或は緣が道類智斷、或は緣が修斷、或は緣が不斷、或は無所緣なり。

「諸根の因が苦法智斷なるもの、緣は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は苦法智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は苦法智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は苦類智斷をなるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は集法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は集法智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は集法智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は集類智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷に

【六二】 道の場合——

【六三】 本節は發智論の頌文の「八八」に相應する段にして、根の因緣とその根の所緣緣との間に於ける關係を、八智斷の立場より考察せるものなり。

【六四】 根の因が苦法智斷なる彼の根の所緣の八智斷分別。

して縁は集類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は集類智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は滅法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は滅法智斷なると、及び根は集・滅法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は滅法智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は滅類智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は滅類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は滅類智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は道法智斷なり」とは、根が苦法智斷にして縁は道法智斷なると、及び根は集・道法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は道法智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は道類智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は道類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は道類智斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は修斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は修斷なると、及び根は集法智斷修斷なるも因が苦法智斷にして縁は修斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、縁は不斷なり」とは、謂く根は滅・道法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は不斷なるなり。「因が苦法智斷なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が苦法智斷なるなり。

六五 設し根の縁が苦法智斷なるものの彼の根の因は苦法智斷なりや。答ふ、諸根の縁が苦法智斷なるもの、彼の根は或は、因が苦法智斷、或は因が集法智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「縁が苦法智斷なるもの、因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は苦

【六五】根の所縁が苦法智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

法智縁なると、及び根は集法智断なるも、因が苦法智断にして、縁は苦法智断なるとなり。「縁が苦法智断なるものゝ因は集法智断なり」とは、謂く根が集法智断にして縁は苦法智断なると、及び根は苦法智断なるも因が集法智断にして縁は苦法智断なるとなり。「縁が苦法智断なるものゝ因は、修断なり」とは、謂く根が修断にして縁は苦法智断なるなり。「縁が苦法智断なるものゝ因は不断なり」とは、謂く根が不断にして縁は苦法智断なるなり。

六六 諸根の因が苦類智断なるものゝ彼の根は、或は縁が苦類智断なりや。答ふ、諸根の因が苦類智断なるものゝ彼の根は、或は縁が苦類智断、或は縁が集類智断、或は縁が滅類智断、或は縁が道類智断、或は縁が修断、或は縁が不断なり。

「諸根の因が苦類智断なるものゝ縁は苦類智断なり」とは、謂く根が苦類智断にして縁は苦類智断なると、及び根は集類智断なるも因が苦類智断にして縁は苦類智断なるとなり。「因が苦類智断なるものゝ縁は集類智断なり」とは、謂く根が苦類智断にして縁は集類智断なると、及び根は集類智断なるも因が苦類智断にして縁は集類智断なるとなり。「因が苦類智断なるものゝ縁は滅類智断なり」とは、謂く根が苦類智断にして縁は滅類智断なると、及び根は集・滅類智断なるも因が苦類智断にして縁は滅類智断なるとなり。「因が苦類智断なるものゝ縁は道類智断なり」とは、謂く根が苦類智断にして縁は道類智断なると、及び根は集・道類智断なるも因が苦類智断にして縁は道類智断なるとなり。「因が苦類智断なるものゝ縁は修断なり」とは、謂く根が苦類智断に

【六六】根の因が苦類智断なる彼の根の所縁の八智断分別。

して緣は修斷なると、及び根は集類智斷・修斷なるも因が苦類智斷にして緣は修斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの丶緣は不斷なり」とは、謂く根は滅・道類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は不斷なるなり。

六七 設し根の緣が苦類智斷なるもの丶彼の根の因は苦類智斷なりや。答ふ、諸根の緣が苦類智斷なるもの丶彼の根は或は因が苦類智斷、或は因が苦法智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「緣が苦類智斷なるもの丶因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は集類智斷なるも、因が苦類智斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は苦法智斷なるも、因が集法智斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして緣は苦類智斷なると、及び根は苦類智斷なるも因が集類智斷にして緣は苦類智斷なるとなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は苦類智斷なるなり。「緣が苦類智斷なるもの丶因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は苦類智斷なるなり。

六八 苦に於けるが如く、集斷に於けるも亦、爾り。

【六七】根の所緣が苦類智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

【六八】集の場合——

六九 諸根の因が滅法智断なるもの丶彼の根の縁は滅法智断なりや。答ふ、諸根の因が滅法智断なるもの丶彼の根は或は縁が滅法智断、或は縁が修断、或は縁が不断、或は無所縁なり。

「諸根の因が滅法智断なるもの丶縁は滅法智断なり」とは、謂く根が滅法智断にして縁は滅法智断なるなり。「因が滅法智断なるもの丶縁は修断なり」とは、謂く根が修断なるも因が滅法智断にして縁が修断なるなり。「因が滅法智断なるもの丶縁は不断なり」とは、謂く根が滅法智断にして縁は不断なるなり。「因が滅法智断なるものにして無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が滅法智断なるなり。

七〇 設し根の縁が滅法智断なるもの丶彼の根の因は滅法智断なりや。答ふ、諸根の縁が滅法智断なるもの丶彼の根は、或は因が滅法智断、或は因が苦法智断、或は因が集法智断、或は因が修断、或は因が不断なり。

「諸根の縁が滅法智断なるもの丶因は、滅法智断なり」とは、謂く根が滅法智断にして縁は滅法智断なるなり。「縁が滅法智断なるもの丶因は苦法智断なり」とは、根が苦法智断にして縁は滅法智断なると、及び根は集・滅法智断なるも因が苦法智断にして縁は滅法智断なるとなり。「縁が滅法智断なるもの丶因は集法智断なり」とは、根が集法智断にして縁は滅法智断なると、及び根は苦法智断、滅法智断なるも因が集法智断にして縁は滅法智断なるとなり。「縁が滅法智断なるもの丶因は修断なり」とは、謂く根が修断にして縁は滅法智断なるなり。「縁が滅法智断なるもの丶因は不断なり」とは、

【六九】根の因が滅法智断なる彼の根の所縁の八智断分別。

【七〇】根の所縁が滅法智断なる彼の根の因の八智断分別

謂く根が不斷にして緣は滅法智斷なるなり。

〔七一〕諸根の因が滅類智斷なるもの、彼の根の緣は滅類智斷なりや。答ふ、諸根の因が滅類智斷なるもの、彼の根は、或は緣が滅類智斷、或は緣が不斷なるなり。

「諸根の因が滅類智斷なるもの、緣は滅類智斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は滅類智斷なるなり。「因が滅類智斷なるもの、緣は不斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は不斷なるなり。

〔七二〕設し根の緣が滅類智斷なるもの、彼の根の因は滅類智斷なりや。答ふ、諸根の緣が滅類智斷なるもの、彼の根は、或は因が滅類智斷、或は因が苦法智斷、或は因が苦類智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が滅類智斷なるもの、因は滅類智斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は滅類智斷なるなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は滅類智斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は滅類智斷なると、及び根は集・滅類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして緣は滅類智斷なると、及び根は苦法智斷なるも因が集法智斷にして緣は滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして緣は滅類智斷なると、及び根は苦・滅類智斷なるも因が集類智斷

〔七一〕根の因が滅類智斷なる彼の根の所緣の八智斷分別。

〔七二〕根の所緣が滅類智斷なる彼の根の因の八智斷分別。

にして緣は滅類智斷なるとなり。「緣が滅類智斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして、緣は滅類智斷なるなり。「緣が滅類智斷なるものの因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は滅類智斷なるなり。

[七三]滅に於けるが如く、道に於けるも亦、爾り。

[七四]第九節　根の因緣の八智斷と所緣緣の四諦斷との關係

[七五]諸根の因が苦法智斷なるもの、彼の根の緣は見苦斷なりや。答ふ、諸根の因が苦法智斷なるもの、彼の根は、或は緣が見苦斷、或は緣が見集斷、或は緣が見滅斷、或は緣が見道斷、或は緣が修斷、或は緣が不斷、或は無所緣なり。

「諸根の因が苦法智斷なるもの、緣は見苦斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見苦斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は見苦斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は見集斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見集斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は見集斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は見滅斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集、滅法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は見道斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見道斷なると、及び根は集、道法智斷なるも、因が苦法智斷にして緣は見道斷なるとなり。「因が苦法智斷なるもの、緣は修斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は修斷なると、及び根は集法智斷・修斷なるも因が苦法智斷にして緣は修斷なるとなり。「因が苦法智斷なる

【七三】　道の場合——

【七四】　本節は、發智論の頌文の「八四」に相當するものにして、根の因緣とその根の所緣緣との關係を、因緣に就きては八智斷によりて分別し所緣緣に就きては四諦斷によりて分別して、以つて其の間の關係を明にせんとしたる段なり。

【七五】　根の因が苦法智斷なる彼の根の所緣の四諦斷分別。

もの、縁は不斷なり」とは、謂く根は滅・道法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は不斷なるなり。「因が苦法智斷なるものにして、無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が苦法智斷なるなり。

七六 設し根の縁が見苦斷なるもの、彼の根の因は苦法智斷なりや。答ふ、諸根の縁が見苦斷なるもの、彼の根は、或は因が苦法智斷、或は因が苦類智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の縁が見苦斷なるもの、因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして、縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの、因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は集類智斷なるも因が苦類智斷にして縁は見苦斷なるとなり。「見苦斷を縁ずるもの、因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は苦法智斷なるも因が集法智斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの、因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は苦類智斷なるも因が集類智斷にして、縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの、因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は見苦斷なるなり。「縁が見苦斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は見苦斷なるなり。

七七 諸根の因が苦類智斷なるもの、彼の根の縁は見苦斷なりや。答ふ、諸根の因が苦類智斷なるもの、彼の根は或は縁が見苦斷、或は縁が見集斷、或は縁が見滅斷、或は縁

【七六】根の所縁が見苦斷なる彼の根の因の八智斷分別。

【七七】根の因が苦類智斷なる彼の根の所縁の四諦斷分別。

が見道斷、或は緣が修斷、或は緣が不斷なり。

「諸根の因が苦類智斷なるもの、緣は見苦斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見苦斷なると、及び根は集類智斷なるも因が苦類智斷にして、緣は見苦斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの、緣は見集斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見集斷なると、及び根は集類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は見集斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの、緣は見滅斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集・滅類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの、緣は見道斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見道斷なると、及び根は集・道類智斷なるも[七八]因が苦類智斷にして緣は見道斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの、緣は修斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は修斷なると、及び根は集類智斷・修斷なるも因が苦類智斷にして緣は修斷なるとなり。「因が苦類智斷なるもの、緣は不斷なり」とは、謂く根は滅・道類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は不斷なるなり。

[七九]設し根の緣が見苦斷なるもの、彼の根の因は苦類智斷なりや。答ふ、諸根の緣が見苦斷なるもの、彼の根は、或は因が苦類智斷、或は因が苦法智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が見苦斷なるもの、因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見苦斷なると、及び根は集類智斷なるも因が苦類智斷にして、緣は見苦斷なるとな

【七八】發智論は各本共に「因苦類智斷」を脫せるも、今、八犍度論（卷第二十四、大正、二六、頁八八六中）に據りて之れを補足せり。

【七九】根の所緣が見苦斷なる彼の根の因の八智斷分別。

り。「縁が見苦斷なるもの丶因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は集法智斷なるも因が苦法智斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの丶因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は苦法智斷なるも因が集法智斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの丶因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして縁は見苦斷なると、及び根は苦類智斷なるも、因が集類智斷にして縁は見苦斷なるとなり。「縁が見苦斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして縁は見苦斷なるなり。「縁が見苦斷なるもの丶因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして縁は見苦斷なるなり。

八〇 苦に於けるが如く、集に於けるも亦、爾り。

八一 諸根の因が滅法智斷なるもの丶彼の根の縁は見滅斷なりや。答ふ、諸根の因が滅法智斷なるもの丶彼の根は、或は縁が見滅斷、或は縁が修斷、或は縁が不斷、或は無所縁なり。

「諸根の因が滅法智斷なるもの丶縁は見滅斷なり」とは、根が滅法智斷にして縁は見滅斷なるなり。「因が滅法智斷なるもの丶縁は修斷なり」とは、謂く根は修斷なるも因が滅法智斷にして縁は修斷なるなり。「因が滅法智斷なるもの丶縁は不斷なり」とは、謂く根が滅法智斷にして縁は不斷なるなり。「因が滅法智斷なるものにして、無所縁なり」とは、謂く無縁根の因が滅法智斷なるなり。

八二 設し根の縁が見滅斷なるものの彼の根の因は滅法智斷なりや。答ふ、諸根の縁が見

【八〇】 集の場合――

【八一】 根の因が滅法智斷なる彼の根の所縁の四諦斷分別。

【八二】 根の所縁が見滅斷なる彼の根の因の八智斷分別。

滅斷なるもの丶彼の根は、或は因が滅法智斷、或は因が滅類智斷、或は因が苦法智斷、或は因が苦類智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が見滅斷なるもの丶因は滅法智斷なり」とは、謂く根が滅法智斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は滅類智斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集・滅法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集・滅類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は苦・滅法智斷なるも因が集法智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は苦・滅類智斷なるも因が集類智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は見滅斷なるなり。

〔八三〕諸根の因が滅類智斷なるもの丶彼の根の緣は見滅斷なりや。答ふ、諸根の因が滅類智斷なるもの丶彼の根は、或は緣が見滅斷、或は緣が不斷緣なり。

【八三】根の因が滅類智斷なる彼の根の所緣の四諦斷分別。

「諸根の因が滅類智斷なるもの丶緣は見滅斷なり」とは、謂く根の因が滅類智斷にして緣は見滅斷なるなり。「因が滅類智斷なるもの丶緣は不斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は不斷なるなり。

八四 設し根の緣が見滅斷なるもの丶彼の根の因は滅類智斷なりや。答ふ、諸根の緣が見滅斷なるもの丶彼の根は、或は因が滅類智斷、或は因が滅法智斷、或は因が苦法智斷、或は因が苦類智斷、或は因が集法智斷、或は因が集類智斷、或は因が修斷、或は因が不斷なり。

「諸根の緣が見滅斷なるもの丶因は滅類智斷なり」とは、謂く根が滅類智斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は滅法智斷なり」とは、謂く根が滅法智斷にして緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は苦法智斷なり」とは、謂く根が苦法智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集・滅法智斷なるも因が苦法智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は苦類智斷なり」とは、謂く根が苦類智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は集・滅類智斷なるも因が苦類智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は集法智斷なり」とは、謂く根が集法智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は苦・滅法智斷なるも因が集法智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は集類智斷なり」とは、謂く根が集類智斷にして緣は見滅斷なると、及び根は苦・滅類智斷なるも因が集類智斷にして緣は見滅斷なるとなり。「緣が見滅斷なるもの丶因は修斷なり」とは、謂く根が修斷にし

【八四】根の所緣が見滅斷なる彼の根の因の八智斷分別。

て緣は見滅斷なるなり。「緣が見滅斷なるもの、因は不斷なり」とは、謂く根が不斷にして緣は見滅斷なるなり。

[八五] 滅に於けるが如く、道に於けるも亦、爾るなり。

所說の義を文に隨つて廣く釋すること理の如く應に知るべきなり。中に於て、一切の[八六]初翻は因は略にして緣は廣く、一切の後翻は緣は略にして因は廣し。此の中、諸の忍を智の名を以つて說く。智の眷屬なるが故なり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百五十六

【八五】道の場合——

【八六】茲に初翻とは、「諸根の因……」の文を指し後翻とは「設し根の緣……」の文を指す。即ち初翻とは根の所緣を分別する場合にして、後翻とは根の因を分別する場合なり。

卷の第百五十七（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、得納息第一之一）

第一章[一]　得等に關する論究

第一節[二]　特に得論の序說として過・未來・現在無爲說及び成就・不成就非實有說の評破に就きて

【本論】　諸の過去法を得する彼の得は過去なりや。

是くの如き等の章及び解章の義は、既に領會し已れるをもて、應に廣く分別すべし。

問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、他の宗を止め己が義を顯はさんと欲するが故なり。謂く或は有るが[三]過去・未來は是れ無なりと執し、而も現在は是れ無爲法なりと說く。彼の執を遮して過去・未來は有にして現在は無爲に非ざることを顯はさんが爲めの故に、斯の論を作すなり。所以は何ん。若し過去・未來が無しとせば、應に有情にして彼の法を成就するものと、及び成就せざるものと無かるべけん。第二頭・第三手・第六蘊・第十三處・第十九界等を成就するものと成就せざるものと有ること無きが如し。然るに過去・未來を成就するものと成就せざるものと有るが故に、過去・未來は實有なることを知るなり。

[四]或は復、有るが執す「成就は實有の法に非ず」と。譬喩者の如し、是くの如き論を作す「諸の有情類が彼の法を離れざるを說きて成就と名くるも、此れは實の體無きなり。但、是れ觀待を分別して假立せるのみなり。五指の合する之れを名けて拳と爲すが如し。離るれば卽ち拳に非らず、故に實有に非らず。是くの如く有情の彼の法を離れざるを說きて成就と名け、離るれば卽ち不成就なり。故

【一】　本章の內容を發智論の頌文によりて示せば次の如し。
「五得四起支　味入生無量
　斷結受果處　此章願具說。」
就中、「五ノ得」とは、得と所得の法との關係を、三世・三性・三界・三學・三斷の五方面より考察せるもの。
「四起」とは、三性・三界・三學・三斷心と俱起する無色法の三性・三界・三學・三斷分別を取り扱へるもの。
「支」とは、染靜慮の支及びその數に關する論究。
「味」とは、味相應の定の入出に關する論究。
「入」とは、入定の次第に關する論究。
「生」とは、入定せずしてその處に生ずるものと及び、下定を得し上定を得せざるもの、生處とに就きて論ずるもの。
「無量」とは、四無量の行相とその等無間緣の行相とに關する問題を取扱へるもの。
「斷結」とは、無量・淨定・解脫・勝處・遍處・八智・三三摩地の斷結に就きて論ずるもの。
「受果處」とは、前述の無量乃至智（世俗智・他心智）の異熟果を受くる所處に關する論究を取扱へるもの。
右の外、婆沙論は婆沙論獨自の立場より得・非得に關する

に體は實有に非ざるなり。」と。

五 問ふ、彼れは何が故に、此の論を立つるや。答ふ、契經に依るが故なり。契經に說くが如し、「轉輪王有り、七寶を成就す」と。若し此の成就が是れ實有なれば、應に、他身及び非有情數を成就すべけん。謂く彼の輪王が若し輪寶と神珠寶とを成就せば、則ち法を壞す。亦、是れ有情數の法にして亦、是れ非有情數の法なればなり。若し象寶と馬寶とを成就すれば、則ち趣を壞す。亦、是れ人趣にして亦、傍生趣なればなり。若し女寶を成就せば、則ち身を壞す。亦、是れ男身にして亦、是れ女身なればなり。若し主藏臣寶と兵將寶とを成就せば、則ち業を壞す。亦、是れ王にして亦、是れ臣なればなり。此の過有ること勿れ。故に成就は實有に非ざるなり。彼の宗を止め、成就の體は是れ實有なることを顯はさんが爲めの故に而も斯の論を作すなり。

六 若し成就の體が實有に非らざれば、便ち經說に違はん。經に說くが如し「有學は八支を成就し、漏盡阿羅漢は十支を成就す」と。若し成就が實に非されば、彼の聖者が有漏心を現前するときと、及び無心時とには、便ち三世の聖道を成就せざるに、云何んが八支・十支を成就するや。支は皆、是れ無漏法なるを以つての故に。又、若し成就が實有に非ざれば、復、餘の經に違はん、餘の經に說くが如し「此の補特伽羅は善法と及び不善法とを成就す」と。若し成就が實有に非されば、彼れが善法を起す時は應に不善法を成就せざるべく、不善法を起す時は、應に善法を成就せざるべく、無記法を起す時は應に俱に成就せざるべけん。又、若し成就が實有に非ざれば、復、餘の經に違はん。餘の經に說くが如し「若し苾芻にして七 七妙法を成就せば、現法中に於て多く喜樂に住せん」と。彼れは應に一妙法を成就し、或は成就せざるべけん。謂く、七妙法の隨一が現前する時は、彼の苾芻は但、一のみを成就す。七妙法は皆、慧を以つて性と爲すに、尙、二慧すら俱起すること無し。況んや當に七有るべけんや。若し餘法を起して現在前する時は、則ち七妙法は皆、成就せざるなり。

諸種の論究を始め、其の場合に應じて、種々の論述をなせり。

【二】本節は次節以下得に關する論究をなすに當つて先ず其の序論として、(一)過未無現在無爲說を破し、次に(二)成就非實有を主張する譬喩者の說とその論證を揭げて、之れに對して評破を加へ、且つ、成就性實有の論證を試み、更に(三)不成就非實有說を破し、最後に(四)相と所相とが同一世・同一剎那なるが如く、得と所得とが同一世・同一剎那のみならんとの疑を起すものに、その疑網を斷ぜしむる段なり。

【三】**過・未無、現在無爲說とその破斥**とは本論題提起の理由第一なり。因みに此の說に關しては婆沙九十三卷、(毘曇部十一、頁、二四〇)を參照すべし。

【四】**以下成就性非實有に關する譬喩者の主張とその破斥**とは本論題提起の理由の第二なり。以下譬喩者の主張は既に婆沙九十三卷(毘曇部十一、頁二四〇)に紹介され居れり。字句の說明註釋は該處に讓る、往見すべし。

【五】**特に成就性非實有說の論證。**

【六】**成就性實有說の論證、**

又、若し成就が實有に非ざれば、復、餘の經に違はん。餘の經に說くが如し「如來應正等覺は十力を成就す」と。彼れは應に但、一力のみを成就し、或は成就せずと說くべきなり。謂く、若し隨つて一力を起して現前せば、餘の九は身を離るゝをもて便ち成就せざればなり。十力は皆、慧を以つて體と爲すに、二慧は倶起すること無きが故に、若し餘法を起して現在前する時は、是れ則ち十力を皆、成就せざるなり。又、若し成就が實有に非ざれば、復、餘の過有り。異生も應に離三界染と名くべく、諸の阿羅漢も應に異生と名くべけん。謂く、諸の異生が善心と無覆無記心とを起すときと、及び無心の時とには、身中に現に煩惱無く、復、過去・未來を成就せざるをもて、豈、名けて離三界染と爲さざらんや。諸の阿羅漢にして有漏心を起すときと及び無心の時とには、現に聖道無く、復、過去・未來を成就せざるをもて豈、異生に非ざらんや。聖法無きが故に。若し爾らば、便ち大過と爲らん。是の故に、成就は決定して實有なるなり。

八 問ふ、若し成就が是れ實有なれば、譬喩者所引の經を云何んが通ずるや。答ふ、彼れは自在を說きて名けて成就と爲せるなり。謂く、轉輪王は自の七寶に於て攝御すること自在なるをもて假に成就と說くも、學の八支等を成就するといふが如きには非ざるなり。

九 或は復、有るが執す「成就には實に體有りと雖も、而も不成就には實體有ること無きなり」と。彼の執を遮して不成就にも亦、實體有ることを顯さんが爲めの故に、斯の論を作すなり。若し不成就に實體無しとせば、成就にも亦、實體無けん、不成就を觀じて成就を說くが故に。夜を觀じて晝を立て、闇を觀じて明を立つるに皆、實に體有るが如く、此れも亦、是くの如し。又、不成就は是れ成就の近對治なるをもて、更互に相違すること、貪と無貪、瞋と無瞋、癡と無癡、定と亂等の如し。若し實體無くば、何の相違する所にか近對治を成ぜんや。又、不成就に若し體無くんば、應に諸の煩惱を斷ずることを施設すべからざらん。謂く、聖道が起りて諸の煩惱を斷ずるは、刀を以つて物

婆沙九十三卷（毘曇部十一、頁二四一）には玆の文と殆んど同じもの揭げられ居れり。註釋は全部該處に讓る。

【七】 七妙法は又七善法と名けられ、好義・好法・好知時・好知足・好自攝・好集衆・好分別人の七をいひ、詳しくは毘曇部十一、頁二四一、註一四を參見すべし。

【八】 譬喩者所引の契經の會通。

【九】 不成就性非實有說の評破

本論題提起の理由の第三なり、因みに此の說は旣に婆沙論卷第九十三に揭げられたり。

を割り石を以つて物を磨くが如きには非ずして、但、繫の得を斷じ、離繫得を證し、諸の煩惱の不成就をして起らしむるを說きて名けて斷と爲すなり。故に實に不成就性の有ることを知るなり。[10]

或は復、疑網を斷ぜんと欲するが爲めの故に、而も斯の論を作すなり。謂く、[11]雜蘊に「過去法の生・老・住・無常は當に過去なりと言ふべきや、乃至廣說」と說けり。「相と法と世を異にせず刹那を異にせざるが如く、得と法とも亦、爾り。得と法とに世を異にすること有り、刹那を異にすること有るが如く、相と法とも亦、爾り」と疑を生ずること勿れ。此の疑をして決定を得せしめんが爲めの故に、相と法とは定んで世を異にせず刹那を異にせずして、而も得と法とに同有り異有ることを明すなり。謂く三世法の一一に各、三世の得有るが故に。

問ふ、何が故に相と所相とは、世と及び刹那とが決定して異ること無きに、得と所得とは或は同、或は異なりや。答ふ、相と所相とは、必ず同一果にして相隨行し、不相離にして前後無く、同聚法に於て棄捨すること能はざるに、得と所得とは同一果ならず、定んで相隨ふにも非ず、不相離にも非ず、或は前後有り、同聚法に於て或は能く棄捨すること、諸の樹皮は性として樹を離るるが如し。是の故に、他の宗を止め己が義を顯はし、及び疑者をして決定を得せしめんが爲めの故なり。設ひ他を止め己れを顯はし疑をして決定せしめずとも、但、法相と相應する義の中に於てのみ、應に所明を顯はすべきが故に斯の論を作すなり。

第二節[12]　特に・得論に關する大綱論

【本論】　諸の過去法を得する彼の得は、過去なりや。

[13]此の中の得の言は、何の所顯を欲するや。謂く獲と成就となり。云何んが然るを知るや。施設論に說くが如し、「得(prāpti)とは云何ん、謂く獲と成就となり。獲(pratilambha)とは云何ん。謂く得と成就となり。成就(samanvāgama)とは云何ん、謂く獲と得となり。得と獲と成就とは聲に別有り

【一〇】　**得と法とは相と所相との如く、世と刹那とを異にすることと無からんとの疑網を斷ず、**こは本論題提起の理由の第四なり。

【一一】　茲に雜蘊とは發智論卷第二、(大正・二六、頁、九二六上)を指す。婆沙論卷第三十八は此の部分を省略せり。毘曇部八、頁、三二三には之れを發智論より補譯せり。

【一二】　本節は次節より得論の本論に入るに際して先づ、その準備として、得の定義、所得の法の分類、所得の法と三世の得との關係を大綱的に示す段にして、こは所謂略毘婆沙に相當する段なり。

【一三】　**得の意義。**

と雖も、而も義には異り無きなり」と。

[14]所得の法の類に十一種有り。欲界に四有り、謂く善と不善と有覆無記と無覆無記となり。色界に三有り、不善を除くをいふ。無色界も亦、爾り。及び無漏法なり。欲界の善と不善と無覆無記との各は五蘊を具し、[15]有覆無記には唯、四蘊のみ有り。[16]色界の三の各は五蘊を具し、無色界の三の各には唯、四蘊のみあり。無漏法は[17]五蘊と及び擇滅と非擇滅とを具するも、虚空無爲を除く。所得の法に非ざるが故に。

此の中、[18]欲界の[19]善と不善との色には、若し過去に在るものなれば、三世の得有り、若し未來に在るものなれば、未來の得有り、若し現在に在るものなれば二世の得——謂く未來と現在となり——有り。善と不善と有覆無記との四蘊と、及び[20]無覆無記中の通果心と俱生する品の四蘊との彼の得は、世雜り、刹那雜る。謂く過去・未來・現在に在るものには、皆、三世の得を具するが故なり。

[21]無覆無記の一切の色蘊と異熟生の四蘊と及び威儀路・工巧處の多分の四蘊との彼の得は、世も不雜、刹那も不雜なり。即ち若し過去に在れば得も亦、過去なり、若し未來に在れば、得も亦、未來なり。若し現在に在れば得も亦、現在なり。威儀路の四蘊中、善く串習する者、例せば、佛と[22]馬勝と及び餘の有情所の善く串習するものとの如き、幷びに工巧處の四蘊中、善く串習する者、例せば、佛と[23]妙業天子と及び餘の有情所の善く串習するものとの如き、彼れ等の得も亦、皆、世雜り刹那雜るなり。謂く、三世に在る各には三世の得有るが故に。

[24]色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と俱生する品の四蘊との彼の得は、世雜り刹那雜る。謂く三世に在る各には三世の得有るが故に。[25]不定の善の色蘊は、欲界の善と不善との色蘊の說の如し。一切の[26]有覆無記と無覆無記との色蘊と、及び威儀路と異熟生との四蘊との彼の得は、世も不雜、刹那も不雜なり。隨つて彼の世に在れば卽ち唯、彼の世の得のみ有るが故に。

【一四】 **所得の法の十一種。**

【一五】 有覆無記の四蘊とは、有身見・邊執見及びそれと相應俱起する心心所法と、得と四相等なり。

【一六】 欲界には有覆無記の身・語業なきため、有覆無記の色蘊なきなり。

【一六】 色界の有覆無記の五蘊とは、有覆無記の四蘊と、初禪の修所斷の煩惱より起る有覆無記の身・語業の色蘊となり。

【一七】 茲に五蘊とは、無色の四蘊と道俱戒の色蘊とをいふ。

【一八】 **欲界所得の法と三世の得との關係。**

【一九】 善・不善の色とは、善・不善業の表色・無表色をいふ。

【二〇】 此は無覆無記なりと雖も、勢力强きが故と、種々の加行によりて、引起さるゝ所なるが故とによりて、三世の得あるなり。(俱舍、四)

【二一】 無覆無記は熱力劣なるが故に唯、法俱得のみなり。

【二二】 馬勝(Aśvajit) は威儀の正しき人にして、舍利弗歸佛の機緣は實に馬勝の威儀に感じたるに由ると傳へらる。(mahā-vagga I. 4.)

【二三】 妙業天子(Viśvakarma deva 毘濕縛羯磨)の工巧處の慧の勢力は强盛にして、彼の造作する所は願智の如く生ず

[二七]無色界の善と有覆無記との四蘊の彼の得は、世雜り刹那雜るなり。謂く三世に在る各には三世の得有るが故に。異熟生の四蘊の彼の得は、世も不雜、刹那も不雜なり。隨つて彼の世に在れば卽ち唯、彼の世の得のみ有るが故に。

[二八]無漏の五蘊の彼の得は、亦、世も雜り、刹那も雜るなり。謂く三世に在る各には、三世の得有るが故に。此は則ち總說なり。若し別說すれば、諸の未曾得の無漏の五蘊と、及び未曾得の[二九]有漏の修所成と、並びに未曾得の聞・思所成との彼の最初の得は、若し未來に在れば彼の法には唯、未來の得のみ有り、若し現在に在れば彼の法には、則ち未來と現在との得有り、若し過去に在れば、彼の法には則ち三世の得有り。擇滅と非擇滅との法は三世の攝に非ずと雖も、而も三世の得有り。然も[三〇]擇滅の得に二種有り。謂く有漏と無漏となり。有漏の擇滅の得は、欲界の染乃至無所有處の染を離るるに由るが故に起り、是は世俗道の類なり。若し未だ離染せざれば、彼の滅には唯、過去と未來との得のみ有り。若し已に染を離るれば、彼の滅には卽ち三世の得有り。無漏の擇滅の得は三界の見・修所斷の染を離るるに由るが故に起る。是れ聖道の類なり。欲界の見苦所斷法の擇滅は、若し[三一]苦法智が未だ現在前せざれば、彼の滅には唯、未來の得のみ有り、若し現在前せば、彼の滅には則ち未來と現在との得有り、若し已に滅すれば、彼の滅には則ち三世の得を有するなり。是くの如く乃至して、有頂の第九品の法の擇滅は、若し[三二]盡智が未だ現前せざる等につきては理の如く應に知るべきなり。

[三三]非擇滅の得は唯、是れ有漏のみなり。彼の最初の得は若し未來に在れば、彼の滅には唯、未來の得のみ有り、若し現在に在れば彼の滅には則ち未來と現在との得のみ有り、若し過去に在れば、彼の滅には則ち三世の得有るなり。

此の中、初の問答は一一の世の法に三世の得有ることを顯はし、第二の問答は、一一の世の得が

と云はる。婆沙五十五卷（毘曇部十一、頁二九〇）參照。

【二四】色界所得の法と三世の得との關係。

【二五】不定の善の色蘊とは善の身、語表色をいふ。

【二六】有覆無斷の色蘊とは、初靜慮の修所斷の煩惱によりて引起さる身・語表色をいふ。

【二七】無色界の所得の法と三世の得との關係。

【二八】無漏の五蘊と三世の得との關係。

【二九】茲に特に有漏のと限定せしは、修所成の慧は有漏、無漏に通ずるを以つてなり。これに反して、聞・思所成は唯、有漏なるが故に限定する必要なきなり。（婆沙四十二卷、毘曇部九、頁八）

【三〇】特に擇滅の二種の得に就きて――有漏と無漏となり。

【三一】苦法智忍の位は能斷の無漏道は所斷の煩惱の得と併在するが故に未だ擇滅は現在の得無く、未來の得のみ有るなり。

【三二】盡智は第九無間道卽ち金剛喩定の等無間に生ずる智なり。

【三三】特に非擇滅の得に就きて――非擇滅は無漏なれどその得は有漏なり。

三世及び離世の法を得することを顯はす。

是れを此處に略毘婆沙と謂ふなり。

[三四]第三節　三世の得と三世法、離世法との三世分別

【本論】[三五] 諸の過去法を得する彼の得は過去なりや。答ふ、彼の得は、或は過去、或は未來、或は現在なり。

過去法を得する過去の得とは、謂く過去の三界の一切の諸蘊と及び無漏の蘊との彼の所有の過去の得なり。過去法を得する未來の得とは、謂く過去の欲界の善と不善との五蘊と、有覆無記の四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と、及び威儀路・工巧處の[三六]一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊との彼の所有の未來の得なり。過去法を得する現在の得とは、謂く過去の欲界の善と不善との五蘊――乃至廣說すること未來の如し――、彼の所有の現在の得なり。

【本論】[三七] 設し得にして過去なれば、彼れは過去法を得するや。答ふ、彼の法は或は過去、或は未來、或は現在、或は無爲なり。

過去の得が過去法を得すとは、謂く過去の得が過去の三界の一切の諸蘊と及び無漏の蘊とを得するなり。過去の得が未來の法を得すとは、謂く過去の得が未來の欲界の善と不善と有覆無記との四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と、及び威儀路・工巧處の一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊とを得するをいふなり。過去の得が現在の法を得すとは、謂く過去の得が、現在の欲界の善――乃至廣くは未來を得する說の如し――を、得するをいふなり。過去の得が無爲法を得すとは、謂く過去の得が擇滅・非擇滅を得するをいふなり。

【三四】 本節は發智論の頌文の「五得」中の第一得に相應するものにして、得と所得との三世關係を、
（一）a、過去法を得する得の三世分別。
b、過去得が得する法の三世・離世分別。
（二）a、未來法を得する得の三世分別。
b、未來得が得する法の三世・離世分別。
（三）a、現在法を得する得の三世分別。
b、現在得が得する法の三世・離世分別。
の組織に依りて論究する段なり。

【三五】 過去法を得する得の三世分別。

【三六】 茲に一分の四蘊とは、佛、馬勝及び善く串習せる有情の威儀路の四蘊と、佛・妙業天子及び善く串習せる有情の工巧處の四蘊の一分とをいふ。

【三七】 過去得が、得する法の三世・離世分別。

【本論】[三八]**諸の未來法を得する彼の得は、未來なりや。答ふ、彼の得は或は未來、或は過去、或は現在なり。**

未來法を得する未來の得とは、謂く未來の三界の一切の諸蘊と、及び無漏の蘊との彼の所有の未來の得なり。未來法を得する過去の得とは、謂く未來の欲界の善と不善と有覆無記との四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と、及び威儀路・工巧處の一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊との彼の所有の過去の得なり。未來法を得する現在の得とは、謂く未來の欲界の善——乃至廣說すること過去の如し——の、彼の所有の現在の得なり。

【本論】[三九]**設し得にして未來なれば、彼れは未來法を得するや。答ふ、彼の法は或は未來、或は過去、或は現在、或は無爲なり。**

未來の得が未來法を得すとは、謂く未來の得が未來の三界の一切の諸蘊と、及び無漏の蘊とを得するをいふなり。未來の得が過去法を得すとは、謂く未來の得が過去の欲界の善と不善との五蘊と、有覆無記の四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と、及び威儀路・工巧處の一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊とを得するをいふなり。未來の得が現在の法を得すとは、謂く未來の得が現在の欲界の善——乃至廣くは過去を得する說の如し——を、得するをいふなり。未來の得が無爲を得すとは、謂く未來の得が擇滅と非擇滅とを得するをいふなり。

【本論】[四〇]**諸の現在法を得する彼の得は、現在なりや。答ふ、彼の得は或は現在、或は過去、或は未來なり。**

【三八】未來法を得する得の三世分別。

【三九】未來得が得する法の三世離世分別。

【四〇】現在法を得する得の三世分別。

現在法を得する現在の得とは、謂く現在の三界の一切の諸蘊と、及び無漏の蘊との彼の所有の現在の得なり。現在法を得する過去の得とは、謂く現在の欲界の善と不善と有覆無記との四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と、及び威儀路・工巧處の一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊との彼の所有の過去の得なり。現在法を得する未來の得とは、謂く現在の欲界の善と不善との五蘊と、有覆無記の四蘊と、――餘は過去の得の說の如し――の、彼の所有の未來の得なり。

【本論】[四一] 設し得にして現在なれば、彼れは現在法を得するや。答ふ、彼の法は或は現在、或は過去、或は未來、或は無爲なり。

現在の得が現在法を得すとは、謂く現在の得が現在の三界の一切の諸蘊と、及び無漏の蘊とを得するをいふなり。現在の得が過去法を得すとは、謂く現在の得が過去の欲界の善と不善との五蘊と、有覆無記の四蘊と、無覆無記中の通果心と倶生する品と及び威儀路・工巧處の一分との四蘊と、色界の善の五蘊と、有覆無記と及び無覆無記中の通果心と倶生する品との四蘊と、無色界の善と有覆無記との四蘊と、無漏の五蘊とを得するをいふなり。現在の得が未來法を得すとは、謂く現在の得が未來の欲界の善と不善と有覆無記との四蘊と、――餘は過去を得する說の如し――を、得するをいふなり。現在の得が無爲を得すとは、謂く現在の得が擇滅と非擇滅とを得するをいふなり。

[四二] 第四節　能得と所得との三性分別

【本論】[四三] 諸の善法を得する彼の得は、善なりや。答ふ、是くの如し。

善法の得は必ず是れ善なるを以つての故なり。

【本論】設し得にして善なれば、彼れは善法を得するや。答ふ、是くの如し。

【四一】現在得が得する法の三世・離世分別。

【四二】本節は發智頌文の「五得」中の第二得に當るものにして、得と得せらるゝ法との間に於ける、善・不善・無記の三性關係を明にするを其の課題とす。而して、能得と所得とはその性必ず同じ。

【四三】善の得と善法との三性關係。

諸の善の得は唯、善法のみを得するが故なり。

【本論】[四四]諸の不善法を得する彼の得は、不善なりや。答ふ、是くの如し。設し得にして不善なれば、彼れは不善法を得するや。答ふ、是くの如し。[四五]諸の無記法を得する彼の得は、無記なりや。答ふ、是くの如し。設し得にして無記なれば、彼れは無記法を得するや。答ふ、是くの如し。

不善と無記とにつきての問答も亦、爾り。能得と所得との性は必ず同じきが故に。

[四六]第五節　能得と所得との三界繋分別

【本論】[四七]諸の欲界法を得する彼の得は、欲界なりや。答ふ、是くの如し。

欲界法の得は必ず是れ欲界なるを以っての故なり。

【本論】設し得にして欲界なれば、彼れは欲界法を得するや。答ふ、彼の法は或は欲界、或は不繋なり。

欲界とは、欲界の五蘊を謂ひ、不繋とは諸の非擇滅を謂ふ。欲界に生ずる補特伽羅は三界繋と及び[四八]不繋との法に於て非擇滅を得し、彼の得は皆、是れ欲界繋なるを以っての故なり。

【本論】[四九]諸の色界法を得する彼の得は、色界なりや。答ふ、是くの如し。

色界法の得は必ず是れ色界なるを以っての故なり。

【本論】設し得にして色界なれば、彼れは色界法を得するや。答ふ、彼の法は或は色界或は不繋なり。

色界とは色界の五蘊を謂ひ、不繋とは諸の擇滅と非擇滅とを謂ふ。擇滅とは、欲界と下三靜慮との五蘊の擇滅を謂ふ。彼の世俗道類の得は、皆、色界繋なり。下地の擇滅の有漏の得は、皆、上地

【四四】**不善の得と不善法との三性關係。**因みに以下の本論は發智論より補譯せり。

【四五】**無記の得と無記法との三性關係。**

【四六】本節は發智論の頌文の「五得」中の第三得に相應する段にして、能得と所得との關係を界繫門の立場より論じたるもの。

【四七】**欲界の得と欲界法との界繫關係。**

【四八】これ世親が倶舍論(四)に於て「一切の有情は非擇滅を成就せざる者無し、故に對法中に傳說すること是の如し。誰か無漏法を成ずるや。謂く一切の有情なり」と揶揄せし所以なり。

【四九】**色界の得と色界法・不繫法との界繫關係。**

の近分の攝なるを以つての故に。非擇滅とは、色界に生ずる補特伽羅が三界繫と不繫との法に於て非擇滅を得するを謂ふ。彼の得は皆、是れ色界繫なるが故なり。

【本論】[五〇]諸の無色界法を得する彼の得は、無色界なりや。答ふ、是くの如し。

無色界法の得は皆、是れ無色界繫なるを以つての故なり。

【本論】設し得にして無色界なれば、彼れは無色界法を得するや。答ふ、彼の法は或は無色界、或は不繫なり。

無色界とは無色界の四蘊を謂ひ、不繫とは諸の擇滅と非擇滅とを謂ふ。擇滅とは、第四靜慮地繫の五蘊と、及び下三無色地繫の四蘊との擇滅を謂ふ。[五一]彼の世俗道類の得は、皆無色界繫なり。所以は前の如し。非擇滅とは、無色界に生ずる補特伽羅が、三界繫と及び不繫との法に於て非擇滅を得するを謂ふ。彼の得は皆、是れ無色界繫なるが故なり。

[五二]第六節　能得と所得との三學分別

【本論】[五三]諸の學法を得する彼の得は、學なりや。答ふ、是くの如し。

學法の得は必ず是れ學なるを以つての故に。

【本論】設し得にして學なれば、彼れは學法を得するや。答ふ、彼の法は、或は學、或は非學非無學なり。

學とは學の五蘊を謂ひ、非學非無學とは諸の學の得の所得の擇滅をいふ。

【本論】[五四]諸の無學法を得する彼の得は、無學なりや。答ふ、是くの如し。

無學法の得は必ず是れ無學なるを以つての故に。

【本論】設し得にして無學なれば、彼れは無學法を得するや。答ふ、彼の法は或は

【五〇】無色界の得と無色界法・不繫法との界繫關係。

【五一】彼は大正本に後とあるも彼の誤植なり。

【五二】本節は發智論の頌文の「五得」中の第四得と相應する段にして、能得と所得の法との間の關係を三學門の立場より見たるものなり。

【五三】學の得と學法との關係。

【五四】無學の得と無學法との關係。

無學、或は非學非無學なり。

無學とは、無學の五蘊を謂ひ、非學非無學とは諸の無學の得の所得の擇滅をいふ。

【本論】[五五]諸の非學非無學を得する彼の得は、非學非無學なりや。答ふ、彼の得は或は非學非無學、或は學、或は無學なり。

非學非無學なりとは、有漏の五蘊と四蘊との得と、一切の非擇滅の得と、諸の擇滅の世俗道類の得とを謂ふ。學なりとは、諸の擇滅の學道類の得を謂ふ。無學なりとは、諸の擇滅の無學道類の得を謂ふなり。

【本論】設し得にして非學非無學なれば、彼れは非學非無學法を得するや。答ふ、是くの如し。

諸の非學非無學の得は唯、非學非無學のみを得するを以つての故に。

[五六]第七節　能得と所得との三斷分別

【本論】[五七]諸の見所斷法を得する彼の得は、見所斷なりや。答ふ、是くの如し。

見所斷法の得は必ず是れ見所斷なるを以つての故に。

【本論】設し得にして見所斷なれば、彼れは見所斷法を得するや。答ふ、是くの如し。

見所斷の得は唯、見所斷法のみを得するを以つての故に。

【本論】[五八]諸の修所斷法を得する彼の得は、修所斷なりや。答ふ、是くの如し。

修所斷法の得は必ず是れ修所斷なるを以つての故に。

【本論】設し得にして修所斷なれば、彼れは修所斷法を得するや。答ふ、彼の法は

【五五】非二學の得と非二學法との關係。

【五六】本節は發智論の頌文の「五得」中の第五の得に相當する段にして、能得と所得の法との關係を、三斷門の立場より觀察せるものなり。

【五七】見斷の得と見斷法との關係。

【五八】修斷の得と修斷法との關係。

或は修所斷、或は不斷なり。

修所斷なりとは、修所斷の五蘊を謂ひ、不斷なりとは、一切の非擇滅と及び[五九]世俗道類の所得の擇滅とを謂ふなり。

【本論】[六〇]諸の不斷法を得する彼の得は、不斷なりや。答ふ、彼の得は或は不斷、或は修所斷なり。

不斷なりとは、無漏の五蘊の得と及び諸の擇滅の無漏道類の得とを謂ひ、修所斷なりとは、一切の非擇滅の得と、及び諸の擇滅の世俗道類の得とを謂ふなり。

【本論】設し得にして不斷なれば、彼れは不斷法を得するや。答ふ、是くの如し。

不斷の得は唯、不斷法のみを得するを以つての故に。

第八節 [六一]特に三世の非得と三世法・離世法との三世分別

已に本文に隨つて諸の得の相を辯ぜしをもて、當に更に義に隨つて諸の非得を顯はすべし。

[六二]若し法にして得有れば、彼の法には非得も有り。若し法にして、得無ければ、彼の法には非得も無し。獲と成就と非獲と非成就とに就きて說くことも亦、爾り。此れに由りて、一切の有情數の法と及び擇滅と非擇滅とには得・非得有り、獲・非獲有り、成就・非成就有り。一切の[六三]非有情數の法と[六四]及び虛空無爲とには、則ち皆、得・非得等有ること無きなり。又、自相續の法に於ては得有り、非得等有るも、[六五]他相續の法に於ては得・非得等無きなり。

[六六]此の中、過去・未來法には各、三世の非得有るも、現在法には唯、過・未二世の非得のみ有るなり。成就法は現在世に在りて必ず成就するを以つての故に。得と非得とは更互に相違して倶起せざるが故に。

善・不善・無記法の非得は、皆、唯、[六七]無記のみなり。

【五九】世俗道は有漏善なるを以つて修所斷なり。故に世俗道の得は修所斷なるも、その所得の法は擇滅なるを以つて不斷法なり。

【六〇】不斷の得と不斷法との關係。

【六一】本節は上に發智論が、「三世の得と三世法・離世法との三世關係を論ぜしに準據して、婆沙師が非得に就きて、それと同じ組織にて論究せんとしたる段なり。從つて發智論は非得に關しては論及し居らざるなり。

【六二】得・非得有る法に就きて、

一、得がある法には必ず非得あり。

二、有情數と擇滅と非擇滅とには得、非得あり。

三、非有情數と虛空無爲とには得、非得無し。

四、自相續に於ては得、非得あるも、他相續に於ては爾らず。

【六三】非情の法を我が身に成就することなし、若し成就すとせば、有情、非情雜亂の過あるが故に。成就すること無きが故に、得も非得も無きなり。

【六四】虛空無爲は決定して成就すること無きが故に、得、非得無きなり。

三界法の非得は皆、三界に通ず。

學、無學、非學非無學法の非得は、皆、唯、非學非無學のみなり。

見所斷・修所斷・不斷法の非得は皆、唯、修所斷のみなり。是れを非得の略毘婆沙と謂ふ。

[六八]諸の過去法を得せざる彼の非得は、過去なりや。答ふ、彼の非得は或は過去、或は未來、或は現在なり。

過去法を得せざる過去の非得とは、謂く過去の善と不善と有覆無記と無覆無記と無漏との五蘊の彼の所有の過去の非得なり。此の中、[六九]斷善根者の善の五蘊と離欲染者の不善の五蘊と、諸の阿羅漢の有覆無記の五蘊と、一切有情の多分の無覆無記の五蘊——無覆無記法は已に過ぎし刹那と、及び未だ至らざる刹那とは多分に成就せざるを以つての故なり——と、諸の異生類の無漏の五蘊と、是れを總相によりての得せざる所の法と謂ふなり。過去法を得せざる未來の非得とは、謂く過去の善と不善と有覆無記と無覆無記と無漏との五蘊の彼の所有の未來の非得なり。前に釋せるが如し。過去法を得せざる現在の非得とは、謂く過去の善と不善と有覆無記と無覆無記と無漏との五蘊の彼の所有の現在の非得なり。所應に隨ふこと前に釋せるが如し。

[七〇]設し非得にして過去なれば、彼れは過去法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は過去、或は未來、或は現在、或は無爲なり。

過去の非得が過去法を得せずとは、過去の非得が過去の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふなり。前に釋せるが如し。過去の非得が未來法を得せずとは、過去の非得が未來の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふなり。前に釋せるが如し。過去の非得が現在法を得せずとは、過去の非得が現在の善乃至無漏の五蘊を得せざるを謂ふ。前に釋せるが如し。過去の非得が無爲法を得せずとは、過去の非得が擇滅と非擇滅との法を得せざるをいふなり。謂く具縛者の擇滅に於けると、一切有情の非擇

【六五】他身の法を成就すること無きが故に得なく、得無ければ從つて非得も無し。

【六六】非得に關する略毘婆沙

【六七】無記は俱舍四、順正理、十二に俱に無覆無記と言へり。

【六八】過去法を得せざる非得の三世分別。

【六九】斷善根者は因果を撥無する上品の邪見を起すに依りて欲界の生得の善根を斷ずるものなり。加行善は既に已に斷ずるが故なり。

【七〇】過去の非得が得せざる法の三世・離世分別。

減に於けるとなり。

[七一]諸の未來法を得せざる彼の非得は、未來なりや。答ふ、彼の非得は或は未來、或は過去、或は現在なり。

未來法を得せざる未來の非得とは、謂く未來の善乃至無漏の五蘊の彼の所有の未來の非得なり。前に釋せしが如し。

未來法を得せざる過去の非得とは、謂く未來の善乃至無漏の五蘊の彼の所有の過去の非得なり。前に釋せしが如し。

未來法を得せざる現在の非得とは、謂く未來の善乃至無漏の五蘊の彼の所有の現在の非得なり。前に釋せしが如し。

[七二]設し非得にして未來なれば、彼れは未來法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は未來、或は過去、或は現在、或は無爲なり。

未來の非得が未來法を得せずとは、謂く未來の非得が未來の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふ。前に釋せしが如し。

未來の非得が過去法を得せずとは、未來の非得が過去の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふなり。前に釋せしが如し。

未來の非得が現在法を得せずとは、未來の非得が現在の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふなり。前に釋せしが如し。未來の非得が無爲法を得せずとは、未來の非得が擇滅と非擇滅とを得せざるをいふなり。前に釋せしが如し。

[七三]諸の現在法を得せざる彼の非得は、現在なりや。答ふ、彼の非得は或は過去、或は未來にして、現在は非らず、相違するが故に。

【七一】未來法を得せざる非得の三世分別。

【七二】未來の非得が得せざる法の三世・離世分別。

【七三】現在法を得せざる非得の三世分別。

現在法を得せざる過去の非得とは、謂く現在の善乃至無漏の五蘊の彼の所有の過去の非得なり。前に釋せしが如し。

現在法を得せざる未來の非得とは、謂く現在の善乃至無漏の五蘊の彼の所有の未來の非得なり。前に釋せしが如し。

[七四]設し非得にして現在なれば、彼れは現在法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は過去、或は未來、或は無爲にして、現在は非らず　相違するが故に。

現在の非得が過去法を得せずとは、現在の非得が過去の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふ。所應に隨ふこと前に釋せしが如し。

現在の非得が未來法を得せずとは、現在の非得が未來の善乃至無漏の五蘊を得せざるをいふ。前に釋せしが如し。

現在の非得が無爲法を得せずとは、現在の非得が擇滅と非擇滅とを得せざるをいふなり。前に釋せしが如し。

[七五]第九節　特に非得と不所得法との三性分別

[七六]諸の善法を得せざる彼の非得は、善なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は、是れ無記にして善性に非ざるを以つての故に。

設し非得にして無記なれば、彼れば善法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は善、或は不善、或は無記なり。

無記の非得は三性法を得せざるを以つての故に。

[七七]諸の不善法を得せざる彼の非得は不善なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は是れ無記にして不善の性に非ざるを以つての故に。

[七四]　現在の非得が得せざる法の三世・離世分別。

[七五]　本節は非得と、非得が得せざる所の法との間の關係を三性の立場より考察する段なり。

[七六]　善法を得せざる非得は善なりやに就きて。

[七七]　不善法を得せざる非得は不善なりやに就きて。

設し非得にして無記なれば、彼れは不善法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は善、或は不善、或は無記なり。

無記の非得は、三性法を得せざるを以つての故に。

七八 諸の無記法を得せざる彼の非得は、無記なりや。答ふ、是くの如し。

諸の非得は唯、無記のみなるを以つての故に。

設し非得にして無記なれば、彼れは無記法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は善、或は不善、或は無記なり。

無記の非得は、三性法を得せざるを以つての故に。

第十節 特に非得と不所得法との界繫分別 七九

八〇 諸の欲界法を得せざる彼の非得は、欲界なりや。答ふ、彼の非得は或は欲界、或は色界、或は無色界なり。

欲界法を得せざる欲界の非得とは、謂く欲界に生ずるものの欲界の諸蘊の非得なり。欲界法を得せざる色界の非得とは、謂く色界に生ずるものの欲界の諸蘊の非得なり。欲界法を得せざる無色界の非得とは、謂く無色界に生ずるものの欲界の諸蘊の非得なり。

八一 設し非得にして欲界なれば、彼れは欲界法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は欲界、或は色界、或は無色界、或は不繫なり。

欲界の非得が欲界法を得せずとは、欲界に生ずるものが欲界の諸蘊を得せざるを謂ふなり。欲界の非得が色界法を得せずとは、欲界に生ずるものが色界の諸蘊を得せざるをいふ。欲界の非得が無色界法を得せずとは、欲界に生ずるものが無色界の諸蘊を得せざるをいふ。欲界の非得が不繫法を得せずとは、謂く欲界に生ずるものが無漏の諸蘊と及び擇滅と非擇滅とを得せざるを謂ふなり。

【七八】無記法を得せざる非得は無記なりやに就きて。

【七九】本節は非得と、非得が得せざる所の法との關係を界繫分別の立場より攷究せるもの。

【八〇】欲界法を得せざる非得の界繫分別。

【八一】欲界の非得が得せざる法の界繫分別。

八二 諸の色界法を得せざる彼の非得は、色界なりや。答ふ、彼の非得は或は欲界、或は色界、或は無色界なり。

色界法を得せざる欲界の非得とは、謂く、欲界に生ずるものの色界の諸蘊の非得なり。色界法を得せざる色界の非得とは、謂く色界に生ずるものの色界の諸蘊の非得なり。色界法を得せざる無色界の非得とは、謂く無色界に生ずるものの色界の諸蘊の非得なり。

八三 設し非得にして色界なれば、彼れは色界法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は欲界、或は色界、或は無色界、或は不繋なり。

色界の非得が欲界法を得せずとは、色界に生ずるものが欲界の諸蘊を得せざるをいふ。色界の非得が色界法を得せずとは、色界に生ずるものが色界の諸蘊を得せざるをいふ。色界の非得が無色界法を得せずとは、色界に生ずるものが無色界の諸蘊を得せざるをいふ。色界の非得が不繋法を得せずとは、色界に生ずるものが無漏の諸蘊と及び擇滅と非擇滅とを得せざるをいふなり。

八四 諸の無色界法を得せざる彼の非得は、無色界なりや。答ふ、彼の非得は或は欲界、或は色界、或は無色界なり。

無色界法を得せざる欲界の非得とは、謂く欲界に生ずるものの無色界の諸蘊の非得なり。無色界法を得せざる色界の非得とは、謂く色界に生ずるものの無色界の諸蘊の非得なり。無色界法を得せざる無色界の非得とは、謂く無色界に生ずるものの無色界の諸蘊の非得なり。

八五 設し非得にして無色界なれば、彼れは無色界法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は欲界、或は色界、或は無色界、或は不繋なり。

無色界の非得が欲界法を得せずとは、無色界に生ずるものが欲界の諸蘊を得せざるをいふ。無色界の非得が色界法を得せずとは、無色界に生ずるものが色界の諸蘊を得せざるをいふ。無色界の非

【八二】色界法を得せざる非得の界繫分別。

【八三】色界の非得が得せざる法の界繫分別。

【八四】無色界法を得せざる非得の界繫分別。

【八五】無色界の非得の得せざる法の界繫分別。

得が無色界法を得せずとは、無色界に生ずるものが無色界の諸蘊を得せざるをいふ。無色界の非得が不繫法を得せずとは、無色界に生ずるものが無漏の諸蘊と及び擇滅と非擇滅とを得せざるをいふなり。

第十一節　特に非得と不所得法との三學分別[八六]

[八七]諸の學法を得せざる彼の非得は、學なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は是れ非學非無學にして是れ學に非ざるを以つての故に。

設し非得にして非學非無學なれば、彼れは學法を得せざるや。答ふ、彼の法は或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

非學非無學の非得は三種の法を得せざるを以つての故に。

[八八]諸の無學法を得せざる彼の非得は、無學なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は是れ非學非無學にして是れ無學に非ざるを以つての故に。

設し非得にして非學非無學なれば、彼れは無學法を得せざるや。答ふ、彼の法は、或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

非學非無學の非得は三種の法を得せざるを以つての故に。

[八九]諸の非學非無學法を得せざる彼の非得は、非學非無學なりや。答ふ、是くの如し。

諸の非得は唯、是れ非學非無學のみなるを以つての故に。

設し非得にして非學非無學なれば、彼れは非學非無學法を得せざるや。答ふ、彼の法は、或は學、或は無學、或は非學非無學なり。

非學非無學の非得は三種の法を得せざるを以つての故に。

第十二節　特に非得と不所得法との三斷分別[九〇]

【八六】本節は、非得と、非得が得せざる所の法との間の關係を三學分別に據つて明にせんとしたる段なり。

【八七】學法を得せざる非得は學法なりやに就きて。

【八八】無學法を得せざる非得は無學なりやに就きて。

【八九】非二學法を得せざる非得は、非二學なりやに就きて。

【九〇】本節は非得と、非得が得せざる所の法との關係を三斷門分別によりて決定せんとする段なり。

九一 諸の見所斷法を得せざる彼の非得は、見所斷なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は是れ修所斷にして見所斷に非ざるを以つての故に。

設し非得にして修所斷なれば、彼れは見所斷法を得せざるや。答ふ、彼の法は、或は見所斷、或は修所斷、或は不斷なり。

修所斷の非得は三種の法を得せざるを以つての故に。

九二 諸の修所斷法を得せざる彼の非得は、修所斷なりや。答ふ、是くの如し。

諸の非得は唯、修所斷のみなるを以つての故に。

設し非得にして修所斷なれば、彼れは修所斷法を得せざるや。答ふ、彼の法は、或は見所斷、或は修所斷、或は不斷なり。

修所斷の非得は、三種の法を得せざるを以つての故に。

九三 諸の不斷法を得せざる彼の非得は、不斷なりや。答ふ、爾らず。

彼の非得は是れ修所斷にして不斷に非ざるを以つての故に。

設し非得にして修所斷なれば、彼れは不斷法を得せざるや。答ふ、彼の法は、或は見所斷、或は修所斷、或は不斷なり。

修所斷の非得は、三種の法を得せざるを以つての故に。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百五十七

【九一】見所斷法を得せざる非得は見所斷法なりやに就きて

【九二】修所斷法を得せざる非得は修所斷なりやに就きて。

【九三】不斷法を得せざる非得は不斷なりやに就きて。

卷の第百五十八（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、得納息第一之二）

一 第十三節　特に、得・非得に關する諸問題

二 問ふ、得と非得とに、何の差別ありや。答ふ、名に卽ち差別あり。謂く得（prāpti）と名け、非得（aprāpti）と名くるなり。復次に、得は有漏・無漏なるに、非得は唯、三有漏のみなり。復次に、得は善・不善・無記なるに、非得は唯、無記のみなり。復次に、得は三界繫及び不繫なるに、非得は唯、三界繫のみなり。復次に、得は學・無學・非學非無學なるに、非得は唯、非學非無學のみなり。復次に、得は見所斷・修所斷・不斷なるに、非得は唯、修所斷のみなり。復次に、得は染汚・不染汚なるに、非得は唯、四不染汚のみなり。復次に、得は異熟・非異熟なるに、非得は唯、非異熟のみなり。復次に、得は有異熟・無異熟なるに、非得は唯、無異熟のみなり。復次に、得は所得の法と或は五俱起し、或は俱起せざるに、非得は得せざる所の法と必ず俱起せざるなり。復次に、得は苦・集・道の三諦の攝なるに、非得は唯、苦・集諦の攝のみなり。是くの如き等の門を以つて應に得と非得との差別を知るべきなり。

六 問ふ、何が故に、得と所得の法との性類は、或は同、或は異なりや。答ふ、得に三種有り。一に有爲法の得、二に擇滅の得、三には非擇滅の得なり。有爲法の得は所得の法に隨つて性類に差別あり。有爲法は能く作用有りて自の得を引くを以つての故に。擇滅の得は、能證の道に隨つて性類に差別あり。諸の擇滅は自に作用無く但、道力に由りてのみ證を求むる彼の時、彼の得を引くを以つての故に。非擇滅の得は自の所依に隨つて性差に差別あり。非擇滅は自に作用無く道の所求に非ずして、彼の得は但、命根と衆同分とに依りてのみ而も現前するを以ての故に。

【一】 前卷に於て、得、非得に關する諸門分別を爲したるに依り、本節は更に進んで得と非得とに關する諸種の問題を攻究せんとする段なり。其の內容を列擧せば、
一、得と非得との差別、
二、得の性類差別の根據、
三、非得の性類差別の根據、
四、得の得の有無に關する論、
五、一一の法の各別の得の有無、
六、非得の非得に就きて、
七、過・未の得の成就・不成就に就きて、
八、能得と所得との得、捨に就きて、
九、得の四種、
十、所得の法の六種、
十一、非得の三種、
十二、所不得の法の三種、
十三、俱非得無き理由。
十四、後非得のみ有る法無き理由、
等の如し。

【二】 得と非得との差別。

【三】 俱舍論(四)は非得が唯、有漏なる理由を說明するに際して、「發智論の「云何んが異生性なりや。謂く聖法を獲せざるなり」の文を援用して、「獲せず」とは、非得の異名なり。然るに異生性を無漏と說くことは道理に應ぜざるを以つて、非得は決定して有漏なりと云

[七]問ふ、非得は何に隨つて性類に差別ありや。答ふ、彼れは定んで得せざる所の法に隨はず、相違するを以つての故に。又、道に隨はず、道の所求に非ざるが故に。但、命根と衆同分とに依りてのみ轉ずるが故に、所依に隨つて性類に差別あるなり。

問ふ、若し諸の非得と非擇滅の得とが俱に所依に隨つて性類に差別ありとせば、所依に或は異熟なるあり、或は唯、等流なるものあるに、此の二は何れに隨つて性類に差別ありや。答ふ、等流性に隨ふなり。義、遍きを以つての故に。異熟は遍きに非ず、故に隨つて立てざるなり。

[八]問ふ、非得が若し得せざる所の法に隨つて性類に差別ありとせば、何の過有りや。答ふ、[九]斷善根者は應に善を成就すべく、已離欲善者は應に不善を成就すべく、諸の無學者は應に染を成就すべく、異生は應に三乘の無漏法を成就すべく、果より退せしものは應に果を成ずべく、向を捨せしものは應に向を成ずべく、[一〇]二滅の非得は應に是れ無爲なるべけん。此等の過に由りて、非得は得せざる所のものに隨つては性類に異り有るべからざるなり。

[一一]問ふ、所説の得には、更に得有りとせんや、無しとせんや。若し更に得有りとせば、得に[一二]復、得有るをもて、何ぞ無窮に非ざらんや。若し更に得無しとせば、此の得は何に由りて成就すと説くべきや。答ふ、應に得に復、得有りと説くべきなり。問ふ、若し爾らば、應に無窮を成ずべし。答ふ、無窮なるも亦、過有ること無し、此れに由りて生死は斷じ難く越え難きなり。或は無量の得は皆、一剎那に俱に生じ滅するをもて、無窮の過無きなり。如是說者はいふ、「一剎那中には但、三法のみ有り。一に彼の法、二に得、三に得の得なり。得に由るが故に、彼の法と及び得の得とを成就し、得の得に由るが故に、得を成就し、更互に相得するに由るが故に、無窮に非ざるなり。是の故に、説く「[一三]色蘊と行蘊とを一得が得し、乃至識蘊と行蘊とを一得が得し、[一四]有爲と無爲を一得が得す」と。」と。

へり。
因みに俱舍論（正理十二も然り）が引用せる發智論の文は、卷第二の「云何異生性、答若於聖法・聖暖・聖見・聖忍・聖欲・聖慧・諸非得・已非得・當非得・是謂異生性」の文を指すならん。（婆沙四十五、毘曇部九、頁、六五參照）。

【四】　茲に不染汚とは、非得が無覆無記なるをいふ。非得が無覆無記なることに就きては婆沙四十五卷、（毘曇部九、頁六七）を參照すべし。

【五】　俱起すとは現在得するときをいひ、俱起せずとは、過去を得し或は未來を得するときの如きをいふ。

【六】　**得と所得の法との性類に同異ある理由、**
一、有爲法の得は所得の法に隨ふ。
二、擇滅の得は能證の道に隨ふ。
三、非擇滅の得は自の所依に隨ふ。

【七】　**非得の性類差別の理由。**所依に隨ふ。

【八】　**特に非得の性類差別が所不得の法に隨はざる理由。**

【九】　斷善根者とは善根の非得を得せるものなるに、若し非得の性類が、得せざる所の法即ち善根の性類に隨つて善なりといふことになれば、斷

一五 問ふ、一一の法には各別に得有りとせんや、爾らずとせんや。或は説者有り「倶有の法は同一の得が得す」と。問ふ、若し爾らば、應に是くの如き説を作すべからず「色蘊と行蘊とを一得が得す等」と。答ふ、法と得の得とに異の得無きことを顯はさんと欲するが故に、是くの如き説を作すも、然も實には五蘊・四蘊を一得が得すの義、無きに不ざるなり」と。有るが説く「一一の法は各別の得が得す。唯、得の得と、彼の法とを同一の得が得するを除く」と。

問ふ、若し爾らば便ち無窮の過失有らん。得には皆、生・住・異・滅有るを以つて生等にも復、得と得の得と有り。彼の得と得の得とにも復、生等有り、是くの如く展轉して無窮を成ずるが故に。答ふ、無窮なるも復、何の過か有らん。此れに由りて生死は斷じ難く越へ難ければなり。或は此の諸法は皆、一刹那に倶に生じて而も滅するをもて、無窮の過無きなり。如是説者はいふ、「法と生等とは同一の得が得す。相と所相とは極親近なるが故に。此れに由りて色蘊と行蘊とを一得が得す等を善通し、又、前の如き無窮の過失を去るなり」と。

一六 得を説くが如く、是くの如く非得は得と相違して應に隨つて廣く説くべきなり。然も同時に非得の非得は無きなり。有情數の法が現在前する時には必ず得と倶なり。是の故に、一七 非得の起る時は決定して、非得の非得と及び彼の法とは倶起せざるなり。此の三法は互に相違するに由るが故に。異時に有りと説くことは則ち遮せざるなり。

一八 問ふ、過去・未來の得を成就すとせんや、成就せずとせんや。若し成就すとせば、則ち無窮と爲らん。謂く一刹那に三法倶起す、一に法、二に得、三に得の得なり。此の三の滅する位には六の得の生ずること有り。謂く三の得と三の得の得となり。此の六の滅する位には 一九 十二の得起る。謂く六の得と六の得の得となり。十二の滅する位には二十四の得起る。謂く 二〇 十二の得と十二の得の得となり。是くの如く展轉して無始時より來乃し後際に至るまで、念念に倍起し其の得は無限なり。

善者が善性の非得を得すること、即ち斷善根者が善を成就するといふが如き不都合を來すが故に、非得は得せざる所の法に隨つて性類差別さるゝに非ざるなり。以下の例もこれに准じて知るべし。

【一〇】 二滅とは、擇滅と非擇滅との二をいふ。

【一一】 **得の得(小得)の有無に就きて、**こは所謂、得得の問題にして、その論述の體裁は全く生生等の隨相の有無に關する論究と相似するものあり。婆沙三十九卷(毘曇部八、頁三三二)を參見すべし。

【一二】 復は大正本に傳とあるも、三本、宮本に從つて復と改む。

【一三】 色蘊と行蘊とを一得が得すとは、本法たる色蘊を大得が得し、亦、大得を得する小得(行蘊)をも大得が得するをいふ。

因みに、茲の行蘊が小得のみを攝するや、又更に生等の四相をも攝するやに關しては次項に議論のある所なるも、如是説者は生等の四相をも攝せしむると見るなり。

【一四】 有爲と無爲とを一得が得すとは、無爲例せば擇滅を得する大得は、其の得を得す

隣次の刹那に倍增することすら尙、爾り。況んや、隔越の前刹那に於ける諸得の倍增するをや。是の故に展轉して無窮の過有るなり。若し成就せずとせば、便ち[二一]此の蘊の後の說と相違す。說くが如し「無色界より歿して欲界に生ずる時、得する所の蘊・界・處・大種・善根・不善根・無記根・結・縛・隨眠・隨煩惱・纒は當に曾得を得すと言ふべきや、未曾得を得すと言ふべきや。答ふ、善と染汚との法は當に曾得を得すと言ふべく、異熟法は當に未曾得を得すと言ふべきなり」と。此くの如くなれば則ち成就せざるには非ざればなり。得にも亦、善と染汚と有るを以つての故に。答ふ、應に是の說を作すべし、過去・未來の得には成就するもの有り。[二二]善及び染汚の法等には、三世の得有るを以つての故に。問ふ、若し爾らば豈、無窮に非ざらんや。答ふ、無窮なるも復、何の過か有らん、此れに由りて生死は斷じ難く越え難ければなり。或は彼の諸得は一刹那に生ずるをもて無窮の過無きなり。又、此の諸得は但、多と言ふべくして、而も無窮に非らず、猶、分限有るが故に。有餘師の說く、「過去・未來の得を成就するもの有ること無し、是の故に、無窮の過無きなり」と。問ふ、此の蘊の後の說を當に云何んが通ずべきや。答ふ、此の蘊の後の文に說く所得の法は、能得の得に非ざるをもて、斯に何の咎が有らんや。如是說者はいふ、「應に初說の如くなるべし、得は所得の如く應に成就すべきが故に。又、得を以つての故に沙門果と名く。若し過・未の得を成就せざれば、諸の沙門果は應に刹那に捨し刹那に得すべきなり。然も是の事無きなり。又、諸の聖道に三時の捨有り、謂く退時と、得果時と、練根時となり。若し過・未の得を成就せざれば、則ち聖道は應に刹那刹那に捨すべく、三時と謂ふは非なり。是くの如き過を無からしめんと欲するが故に、過・未の諸得を成就すること有るなり。」と。

[二三]若し所得の法を成就すれば、亦、彼の得をも成就し、若し所得の法を捨すれば、彼の得をも亦、捨するなり。法と得とは捨・得同じきを以つての故に。[二四]然も得に總じて四種有り。一に彼の法の前

る小得をも得するが故に、茲に、有爲(得々)と無爲(擇滅)とを一得(大得)が得すと言へるなり。

【一五】**一一の法に各別の得有りや否や。**これに三種の說あり、一、倶有法(四蘊五蘊)は同一の得が得すとする說。是れ西方諸師の說か(婆沙第九卷、毘曇七、頁、一七二參照)二、一一の法は各別の得が得すとする說(但し得得と彼の法とは同一の得が得すを除く)三、本法と生等の四相とは同一得が得す。此の中第三說が正說なり。

【一六】**非得の非得に就きて。**

【一七】或る法を非得する時は、其の法の不現前なるを意味するに、其の非得を非得すとは、反つて其の法の現前を意味し、法の非得と、其の法の非得の非得とは、矛盾するが故に、「倶時になし」となり。

【一八】**過去未來の得を成就するや否やに就きて。**こは、過・未の得を成就すとせば無窮の過に陷ることとゝなり、若し成就せずといはば、宗蘊に、善と染汚との法は曾得を成就すといふ文意に反することゝなる、此を如何に解

に在るもの、二に彼の法の後に在るもの、三に彼の法と倶なるもの、四に彼の法と前と後と及び倶とに非ざるものなり。[二五]若し所得の法なれば則ち六種有り。一に、有る所得の法にして唯、倶得のみ有るものあり。[二六]異熟生等の如し。二に、有る所得の法にして唯、前得のみ有るものあり。[二七]三類智邊の世俗智等の如し。有るが說く「此等に亦、倶得も有るなり」と。三に、有る所得の法にして唯、倶得と後得とのみ有るものあり。[二八]別解脫戒等の如し。四に有る所得の法にして、唯、倶得と前得とのみ有るものあり、[二九]道類智忍等の如し。五に有る所得の法にして具さに前と後と倶との得有るものあり、所餘の[三〇]善と染汚等の如し。六に有る所得の法にして前と後と倶との得有りと說くべからずして、而も諸得有るものあり、謂く擇滅と非擇滅となり。必ず、法にして唯、法後得のみ有るもの有ること無し。現在前する時、必ず得有るが故に。

[三一]一切の非得に總じて三種有り。一に彼の法の前に在るもの、二に彼の法の後に在るもの、三に彼の法の前・後にも及び倶にも非ざるものなり。[三二]所不得の法に亦、三種有り。一に有る所不得の法にして唯、彼の前非得のみ有るものあり、謂く未來の情數の畢竟不生法と及び[三三]無餘涅槃に入る最後刹那の心等なり。二に有る所不得の法にして通じて彼の前と彼の後との非得有るものあり、謂く、餘の[三四]應に隨ふ有情數の法なり。三に有る所不得の法にして彼の前と後と及び倶との非得無くして而も非得有るものあり。謂く擇滅と非擇滅となり。[三五]必ず、非得にして法と倶なるべきもの無し。法の現在前する時是の所得の者には必ず得有るを以つての故に。所得に非らざるものには、得無く[三六]非得無きが故に。亦、唯、[三七]彼の後非得のみ有るもの無し、無始來、恒に彼を成就し、未だ捨せざれば必ず彼の類を起して盡くすに非ざるが故に。然も諸の非得は性羸劣なるが故に、唯、現在のみを成就す、一一の刹那に得し已れば卽ち捨す。未得の彼の法と及び已捨の位とに於ては恒に此の非得、有ること應に知るべきなり。

すべきやとは問意。これに對して二種の異說あり。
(一)善と染汚との非色の四蘊には三世に各三世の得あるが故に、善と染汚との得のみは過去・未來を成就することありとする說。
(二)能得は所得の法に非ざるが故に、定蘊の文に拘はること無く、過去・未來の得を成就することなしといふ說
右の中、如是說者は第一說に讃意を表せり。

【二九】倶舍論四には、初刹那には三法倶起し第二刹那には六法倶起し、第三刹那には十八法倶起す、卽ち第一、第二刹那に於て生ぜる所の諸法に九の法の得と及び九得の得とあればなりといへり。

【三〇】十二は大正本に二十とあるも十二の誤植に就き訂正せり。

【三一】此の蘊とは、發智定蘊第七中、一行納息、大正・二六、頁一〇二二中(婆沙卷第百八十六、頁九三四上)を指す。

【三二】このことに關しては前卷、第二節、特に得論に關する大綱論を往見すべし。

【三三】能得と所得の法との得捨の時間的規定。

【三四】得の四種に就きて、
一、法前得、
二、法後得、

三八 第十四節　特に見・修・無學道所起の得及び四諦の得に關する論究

三九 見道所起の得に十五類有り。即ち十五心の時、倶起する諸得なり。四〇 見道の滅位には自の所起の諸得と倶滅す。日が沒する時には自の所起の光明と倶に沒するが如し。四一 然も、苦法智忍に十五得有り、苦法智に十四得有り、乃至道類智忍に但、一得のみ有り。問ふ、見道の得は但、爾所のみ有りとせんや、更に餘有りとせんや。有るが說く、「但、爾所のみ有り」と。有るが說く、「更に餘の未來世の不生の諸得有るも、而も說くべからざるなり」と。此は理に應ぜず、寧ろ當に無しと說くべく、有るも而も說くべからずと言ふべからず。如是說者はいふ、「更に餘の未來の得有り」と。

四二 苦法智忍は一得と倶生す、忍と得とは相望するに、互に因の義無し。苦法智は三得と倶生す、二道の得と、一の離繫得となり。二道の得とは、苦法智忍の得と苦法智の得とを謂ひ、一の離繫得とは、欲界の見苦所斷の十の繫の得を滅して、十の離繫得を起すを謂ふ。苦法智は彼の三得の與めに互に因と爲らず、苦法智忍は彼の三得の與めに皆、因の義有り。苦類智忍は四得と倶生す、三道の得と一の離繫得となり。苦類智忍は、彼の四得の與めに互に因と爲らず。苦法智忍は四得の因と爲る。苦法智は三得の因と爲り、苦法智忍の得を除く。加行善法の勝なるものは、劣なるものの因に非ざるを以つての故に、有爲法の得には法に隨つて勝劣あるが故に。苦類智は六得と倶生す。四道の得と二の離繫得となり。苦類智は彼の六得の與めに互に因と爲らず、苦法智忍は六得の因と爲る。苦法智は五得の因と爲り、苦法智忍の得を除く。彼れは劣なるを以つての故に。苦類智忍は、三得の因と爲る。前の四三 三得を除くなり。彼れは劣なるを以つての故に。問ふ、前の二道の得の與めに因と作らざること、是の事は爾るべし、彼の所得は劣なるが故に。前の離繫得の與めに因と作らざること、云何んが爾るべきや。彼の所得は最勝なるが故に。答ふ、有爲法の得には所得の法に隨つて勝劣あり。彼れの所引なるが故に。無爲法の得には道に隨つて勝劣あり、道の所引なるが故に。彼

三、法倶得、
四、非前・非後・非倶得、

【三五】所得の法の六種
一、法倶得のみ有る法、
二、法前得のみ有る法、
三、法倶得と法後得と有る法、
四、法倶得と法前得と有る法、
五、法前得と法倶得と法後得と有る法、
六、非前非後非倶得有る法、

【三六】異熟生等とは、欲・色界の異熟生の五蘊と無色界の異熟生の四蘊と、欲、色界の威儀路・工巧處の多分の四蘊と、色界の有覆無記の色蘊とは勢力劣なるが故に法倶得のみなり。(婆沙卷第百五十七參照)。

【三七】世俗智は無始以來、苦を知り集を斷じ滅を證し來れるを以つて今、無漏の類智を以つて苦を知り、集を斷じ滅を證するも亦、之れと同じ、故に、苦、集、滅の三類智の後邊に一一、世俗智を未來修として修するなり。されど此の現觀邊の世俗智は現起するものに非ずして、不生法なるが故に、茲に唯、前得のみ有るものといひ得るなり。(倶舍二八)

【三八】別解脫律儀は、未だ捨せざる以來は恒に現世を成就す、即ち法倶得なり。第二剎那以後は別解脫律儀の無表の過去のをも成就す、即ち法後得なり。されど之は不隨心轉

の道は劣なるが故に、彼の得は因に非ざるなり。是くの如く乃至して道類智忍は二十二得と倶生す。十五道の得と、七の離繋得となり。道類智忍は彼の諸得の與めに互に因と爲らず、苦法智忍は皆、二十二得の與めに因と作る。苦法智は二十一得の與めに因と作り、苦法智忍の得を除く。乃至道法智は但、三得の與めにのみ因と作る。謂く、二道の得と一の離繋得となり。前の十九の得の因には非ず、彼れは劣なるを以ての故に。此れに由るが故に說く「頗し有る前生の無漏法が後生の無漏法の因に非ざるものありや。答ふ、有り、謂く、勝の劣に於けるなり」と。

〔三四〕苦法智忍が現在前する時は、未來の無量の苦法智忍を修し、此の現在の忍は所修の與めに、因と爲る。彼れは是れ此の果なればなり。有るが說く「此の現在の忍は所修のために因と爲るに非ず、彼れは此の果に非ず、彼れは竟に一刹那も現在前すること無きを以ての故に」と。評して曰く、應に說くべし「此は彼のために因と爲り、彼れは是れ此の果なり。一相續に攝し、劣道に非ざるが故に」と。是くの如く乃至して、金剛喩定の現在前する時は、未來の無量の金剛喩定を修す。此の現在の定は所修の與めに因と爲る、彼れは是れ此の果なり。有るが說く「此の現在の定は所修のために因に非ず、彼れは此の果に非ず。彼れは竟に一刹那も現在前すること無きを以ての故に」と。評して曰く、應に說くべし、「此は彼のために因と爲り、彼れは是れ此の果なり、一相續の攝にして劣道に非ざるが故に」と。

〔三五〕已生の苦法智忍は不生の苦法智忍の與めに因と爲り亦、苦法智等と一切の學・無學道との與めに因と爲る。已生の苦法智は不生の苦法智の與めに因と爲り、亦、苦類智忍等と一切の學・無學道との與めに因と爲るも、苦法智忍の與めに因と爲らず。是くの如く乃至して、已生の盡智は未生の盡智の與めに因と爲り、亦、後の已生と未來との一切の無學道の與めに因と爲るも、一切の學道の與めに因と爲らず。此れに由るが故に說く「頗し有る已生の無漏法にして未生の無漏法のために因に非

の色なるが故に勢力微劣なるを以つて未來を成就すること、即ち法前得無きなり。

【二九】道類智忍は勢力勝るが故に、未來修あるをもて、法前得有り、又法倶得あり現に得せるが故に。されど、こは見道の滅位なるが故に見道を捨するを以つて法後得無きなり。（次節參照）

【三〇】善と染汚との法には三世に各、三世の得あるものあるが故なり。

【三一】**非得の三種**
一、前非得
二、後非得
三、非前非後倶の非得

【三二】**所不得の法の三種、**
一、前非得のみ有る法、
二、前非得と後非得と有る法、
三、非前・非後・非倶の非得有る法、

【三三】無餘涅槃に入る最後刹那の心は、次刹那には心ず滅して畢竟して生ずること無きが故に前非得ありといふなり。

【三四】有情數に攝する異熟無記の法等なり、こは法倶得のみあるが故に、前非得、後非得有る法となるなり。

【三五】**特に倶非得無き理由。**

【三六】非得は元來、得に對立して設けし原理なるが故に、得無きものに對しては當然、非得も無きなり。

ざるものありや。答ふ、有り。謂く已生の苦法智忍のために因に非ず、乃至、已生の盡智が未生の金剛喩定のために因に非ざるをいふ。勝道は劣道の與めに因と爲らざるが故に」と。

四六 苦・集諦は是れ有漏にして、彼の諸の得も亦、有漏なり。滅諦は是れ無漏にして、彼の諸の得は或は有漏、或は無漏なり。道諦は是れ無漏にして、彼の諸の得は亦、無漏なり。

四七 又、苦・集諦は是れ善・不善・無記にして、彼の諸の得も亦、爾り。滅諦と道諦とは是れ善にして彼の諸の得も亦、是れ善なり。

四八 又、苦・集諦は是れ三界繫にして彼の諸の得も亦、爾り。滅諦は是れ不繫にして、彼の諸の得は、或は四九色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。道諦は是れ不繫にして彼の諸の得も亦、不繫なり。

五〇 又、苦・集諦は是れ非學非無學にして、彼の諸の得も亦、爾り。滅諦は是れ非學非無學にして彼の諸の得は、或は學、或は無學、或は非學非無學なり。道諦は是れ學・無學にして彼の諸の得も亦、爾り。

五一 又、苦・集諦は是れ見所斷・修所斷にして彼の諸の得も亦、爾り。滅諦は是れ不斷にして、彼の諸の得は或は修所斷、或は不斷なり、道諦は是れ不斷にして、彼の諸の得も亦、不斷なり。

五二 又、苦・集諦は是れ染汚・不染汚にして、彼の諸の得も亦、爾り。滅諦と道諦とは、是れ不染汚にして、彼の諸の得も亦、爾り。

五三 又、苦・集諦は是れ有異熟・無異熟にして、彼の諸の得も亦、爾り。滅諦は是れ無異熟にして、彼の諸の得は或は有異熟、或は無異熟なり。道諦は是れ無異熟にして、彼の諸の得も亦、爾り。

五四 又、苦・集諦は是れ苦・集諦の攝にして、彼の諸の得も亦、爾り。滅諦は是れ滅諦の攝にして、彼の諸の得は是れ苦・集・道の三諦の攝なり。道諦は是れ道諦の攝にして、彼の諸の得も亦、爾り。

【三七】特に捨非得のみ有る法無き理由。

【三八】本節は先づ見道所起の得の十五類に關する論究より始め、見・修・無學道と倶生する得の數、並びに、その得と、三道との因的關係等を論じ、最後に、四諦と四諦の得との關係を、有漏無漏乃至、有異熟無異熟の諸門分別によりて明かにせんとしたる段なり。

【三九】見道所起の得の十五類に就きて。

【四〇】見道の滅位とは道類智忍の位なり。

【四一】特に見道の得の數に就きて。

【四二】苦法智忍乃至道類智忍と倶生する得の數、並びに其等相互の因的關係。

【四三】茲に三得とは苦法智忍の得と、苦法智の得と、欲界苦諦下の十隨眠の離繫得となり。

【四四】苦法智忍乃至金剛喩定と、その未來修としての苦法智忍乃至金剛喩定との因的關係。

これに、二說あり

一、現修は未來修の爲めに因となり、未來修は現修の果なりとする說。

二、現修は未來修の爲めに因とならず、未來修は現修の果に非ずとする說。

所得の四諦と能得の得とに、是くの如き等の諸門の同異有るなり。

第十五節　特に離繫得に關する論究[五五]

[五六]問ふ、何地の所繫の法に幾種の離繫得有りや。答ふ、欲界乃至無所有處の見・修所斷法に皆、三種の離繫得有り。謂く學と無學と非學非無學とのなり。非想非非想處の見所斷法と及び前八品の修所斷法とには皆、二種の離繫得有り。謂く學と無學のとなり。彼の第九品の修所斷法には唯、一種の離繫得のみ有り。謂く無學のなり。無學の初心に方に初めて起るが故に。

[五七]問ふ、何地の所繫の法に幾地の無漏の離繫得有りや。或は[五八]說者有り「諸の離繫得は[五九]斷對治に隨ふなり」と。彼れは是の說を作す「欲界の見・修所斷法の無漏の離繫得は未至定の攝なり。初靜慮の見修所斷法の無漏の離繫得は[六〇]三地の攝なり。第二靜慮の見・修所斷法の無漏の離繫得は四地の攝なり。第三靜慮の見・修所斷法の無漏の離繫得は五地の攝なり。第四靜慮の見・修所斷法と及び[六一]無色界の見所斷法との無漏の離繫得は六地の攝なり。空無邊處の修所斷法の無漏の離繫得は七地の攝なり。識無邊處の修所斷法の無漏の離繫得は八地の攝なり。無所有處と非想非非想處との無漏の離繫得は九地の攝なり」と。復[六二]說者有り「諸の離繫得は[六三]壞對治に隨ふなり」と。彼れは是の說を作す「欲・色界の見・修所斷法の無漏の離繫得は皆、六地の攝なり。空無邊處の見・修所斷法の無漏の離繫得は七地の攝なり。識無邊處の見・修所斷法の無漏の離繫得は八地の攝なり。無所有處と非想非非想處との見・修所斷法の無漏の離繫得は九地の攝なり」と。[六四]有るが是の說を作す「若し地にして法智品道有れば、彼の地には欲界の見・修所斷法の無漏の離繫得有り。若し地にして類智品道有れば、彼の地には色・無色界の見・修所斷法の無漏の離繫得有り」と。彼れは是の說を作す「欲界の見・修所斷法の無漏の離繫得は、六地の攝なり。色・無色界の見・修所斷法の無漏の離繫得は九地の攝なり」と。[六五]評して曰く、「此の中、初說を善と爲す。諸の離繫得は必ず斷對治の力に由りて

【四五】已生の苦法智忍乃至盡智は、不生の苦法智忍乃至盡智の爲め並びに所應に隨つて見・修・無學道の爲めに因となる。

【四六】四諦と四諦の得との有漏・無漏關係、有爲法の得は所得の法に隨ひ、擇滅の得は能證の道に隨ひ、非擇滅の得は所依に隨ひて性類に差別あることを心得えて以下の文を解すべし。

【四七】四諦と四諦の得との三性關係。

【四八】四諦と四諦の得との界繫關係。

【四九】色界繫、或は無色界繫とは、有漏道によりて滅を證する時なり。

【五〇】四諦と四諦の得との三學關係。

【五一】四諦と四諦の得との三斷關係。

【五二】四諦と四諦の得との染汚・不染汚關係。

【五三】四諦と四諦の得との有異熟・無異熟關係。

【五四】四諦と四諦の得との四諦分別。

【五五】上來數節に渉りて得に關する論究をなしたるに因みて、本節は特に離繫得に就きての諸問題を取り扱へる段なり。

【五六】九地の所繫法の離繫得

引起せらるるが故に」と。

六六 問ふ、若し滅・道の法智を以て色・無色界の修所斷の染を離るる時、彼の色・無色界の修所斷法の無漏の離繫得は法智品の攝なりとせんや、類智品の攝なりとせんや。若し法智品の攝なりとせば此は理に應ぜず、彼の法と及び斷とは、類智の所知なるが故に。若し類智品の攝なりとせば亦、理に應ぜず、彼の斷と及び得とは、法智の所證なるが故に。有るが是の證を作す「彼の離繫得は類智品の攝なり」と。問ふ、豈、彼の斷と及び得とは法智の所證ならずや。答ふ、法智の所證なりと雖も、而も類智の攝なり。類智の所知なるが故に。有餘師の說く「彼の無漏の離繫得は法智品の攝なり」と。問ふ、豈、彼の法と及び斷とは類智の所知ならずや。答ふ、類智の所知なりと雖も、而も法智の攝なり。法智の所證なるが故に。評して曰く、「此の中、初說を善と爲す。類智品は是れ彼れの不共の決定の對治なるを以つての故に」と。

六七 問ふ、聖者が世俗道を以て諸地の染を離るる時、是れ曾得道なりとせんや、未曾得道なりや。六八 有るが是の說を作す「是は曾得道なり。此の道は無始時來、串習し曾て得せしものを、今現前するに由るが故に」と。彼れは是の說を作す「聖者は世俗道を以て欲界修所斷の上上品の染を離るる時、欲界修所斷の上上品の法に於て二種の離繫得を得す、一には世俗の得、二には無漏の得なり。世俗の得は是れ曾得道の類にして、無漏の得は是れ聖道の類なり。世俗道が現在前する時は亦、六九 未來の無漏道をも修するを以ての故に。欲界の見所斷の上上品の法に於ては一種の離繫得を得す。謂く世俗の得にして、是れ曾得道の類なり。無漏の得は得せず、先に已に得せるが故に。七〇 問ふ、若し爾らば云何んが共對治道が轉じて不共對治を成ずるや。謂く、此の曾得道は先時には、總じて欲界の見・修所斷の諸法を以て九品斷と爲し、今時には此の道は唯、欲界の修所斷のみを斷ずるが故に。答ふ、此の道は猶、共對治道と名く。此は恒に倶に斷の力を有するを以ての故に。此の見所斷は先

の種類に就きて、こは、三界九地の見・修所斷法の離繫得を能證の補特伽羅に依りて、學・無學・非二學の三種分別する段なり。

【五七】 九地所繫の法の無漏の離繫得の地分別。これに(一)斷對治に據りて立論するものと、(二)厭壞對治に據りて立論するものと、(三)法・類智品道の有無に據りて立論するものとの三說あるも、評者は第一說を正說とせり。

【五八】 斷對治に據りて立論するもの——

【五九】 斷對治(prahāṇa pratipakṣa)とは無間道をいふ。

【六〇】 三地とは、未至と初靜慮と、靜慮中間との三地をいふ。

【六一】 無漏道を始めて起し得るは未至・中間・四根本の六地に限る。而して無色の見所斷は、見道位に於て、色界の見所斷と同時に斷ずるを以つて、茲に無色の見所斷の無漏の離繫得は六地の攝なりといへるなり。

【六二】 之れに反して、三界の修所斷は各地別々に斷じ且つ、無漏道は、無所有處に迄有り得るを以つて、茲に、空無邊處の修所斷法の無漏の離繫得は七地の攝なりといへるなり。

【六三】 厭壞對治に據りて立論

已に斷ぜるが故に、今斷ずべきもの無きも斷ずること能はざるに非ず。是の故に、恒に共對治道と名く。上上品を離るるが如く、乃至下下品を離るるも亦、爾り。欲界の修所斷を離るるが如く、乃至無所有處の修所斷を離るるも亦、爾り。

七一 有餘師の說く「是は未曾得道なり。此の道は無始時來、未だ習せず未だ得せずして唯、聖のみの所起なるに由るが故に」と。彼れは是の說を作す、「聖者は世俗道を以て欲界の修所斷の上上品の染を離るる時、欲界の修所斷の上上品の法に於て二種の離繫得を得す。一に世俗の得、二に無漏の得なり。世俗の得は是れ未曾得道の類にして、無漏の得は是れ聖道の類なり。世俗道が現在前する時亦、未來の無漏道をも修するを以ての故に。欲界の見所斷の上上品の法に於て離繫得を得せず、世俗の得を得せざるは、未曾得道は彼の對治に非ざるが故なり。無漏の得を得せざるは、先已に得せるが故なり。上上品を離るるが如く、乃至下中品を離るるも亦、爾り。欲界の修所斷の八品を離るるが如く、初靜慮の修所斷の八品を離れ、乃至無所有處の修所斷の八品を離るるも亦、爾り。欲界の修所斷を離るる第九品の解脫道の時、未來に曾得と未曾得との二の世俗道を修す。爾の時、欲界の修所斷法に於て、三種の離繫得を得す。一に世俗の曾得の得にして、曾得道の類を謂ひ、二に世俗の未曾得の得にして、未曾得道の類を謂ひ、三に無漏の得にして聖道の類を謂ふ。欲界の見所斷法に於て、七二 二種の離繫得を得す。未曾得の世俗の得を除くなり。問ふ、云何んが第九解脫道の時、能く未來の曾得と未曾得との二の世俗道を修すると知るや。答ふ、若し現在の他心智を成就するものなれば、

七三 彼は定んで、過去の他心智を成就すと說くを以ての故なり。問ふ、何が故に、前八品の染を離るる時、未曾得道を修し、第九品の染を離るる解脫道の時、曾得と未曾得との道を修するや。答ふ、離染の道が異り、地を得することも亦、異ればなり。謂く、離染の道は唯、未曾得のみなるをもて、未來の所修も亦、未曾得なり。若し地を得する時に現ずる離染の道は、未曾得なりと雖も、根

するもの——

【六三】 壞對治とは、厭患對治（vidūṣaṇa pratipakṣa）とも云ひ、苦・集を緣じて加行道を起すことなり。（婆沙十七、毘曇部七、頁、三二一參照）

【六四】 法・類智品道の有無に依りて立論するもの——

【六五】 評者の說——

【六六】 **滅・道法智に依る上二界の修斷の離繫得は、法・類智品の何れの攝なりや。** 上二界は原則としては類智に依りて斷ぜらるゝに、滅・道の法智に限り、上界の修所斷を斷ず、其の際、斷ぜらるゝ法と斷とは、類智の知る所なるも、斷と得とは法智が證する所のものなり、茲に於て、其の離繫得は法智品と類智品との何に攝せらるべきものなりやといふことが問題となるなり、これに對して、（一）類智品の所攝なりと主張するものと、（二）法智品の所攝なりと主張するものとの二說あるも、評者は第一說を取れり。因に欲界の滅道は上界の滅道と種類同じく、共に滅・淨・妙・離・道・如・行・出なるが故に、上界の苦集に勝るが故に滅・道法智は上界の修斷を對治するなり。

【六七】 **聖者が世俗道にて下八**

本地を得するが故に、通じて未來の曾得と未曾得との道を修するなり。欲界の修所斷の第九品を離るるが如く、乃至無所有處の修所斷の第九品を離るるも亦、爾り。

[七四]評して曰く「應に是の說を作すべし、「聖者は世俗道を以て諸地の染を離るる時、應に是は未曾得道なりと言ふべし、昔來、未だ、得せず。唯、聖のみの所起なるが故に。然も未來に於ては通じて曾得と未曾得との道を修す。所對治同じきが故に。應に是の說を作すべし、聖者は世俗道を以て欲界の修所斷の上上品の染を離るる時、欲界の修所斷の上上品の法に於て三種の離繫得を得す。一には世俗の曾得の得にして曾得道の類を謂ひ、二には世俗の未曾得の得にして未曾得道の類を謂ひ、三には無漏の得にして聖道の類を謂ふなり。欲界の見所斷の上上品の法に於て一種の離繫得を得す。謂く曾得の世俗道の類なり。未曾得の得を得せざるは、未曾得道は彼の對治に非ざるが故なり。無漏の得を得せざるは、先已に得せるが故なり。上上品を離るるが如く、乃至下下品を離るるも亦、爾り。欲界の修所斷を離るるが如く、乃至無所有處の修所斷を離るるも亦、爾り」と。

[七五]此れに由るが故に說く「頗し退せず得果せず轉根せず、見道が現在前するにも非ず、亦、異生類にも非ずして、而も見所斷法に於て、離繫得を得するもの有りや。答ふ、有り。謂く前所說なり。唯、[七六]欲染の第六・九品を離るる時を除く」と。

[七七]所說の義に依りて、應に是の說を作すべし「頗し有る離繫得にして、得して而も捨せず、捨して而も得せざるものありや。答ふ、應に四句を作すべし。

(一)有る離繫得にして、得して捨せざるものあり。謂く諸の異生が欲界乃至無所有處の染を離る る時と及び、諸の聖者が得果に非ずして離染する時となり。

(二)有る離繫得にして、捨して而も得せざるものあり。謂く諸の異生が欲界乃至無所有處の染を離るるより退する時と、及び[七八]諸の聖者が果を失するに非ずして退する時と、若しくは欲界より

地の染を離るゝ時の其の道は曾得なりや、未曾得なりや。又、其の時の離繫得は幾くなりやに就きて、これに三說あり。
第一說——曾得の世俗道なり。修所斷に對しては曾得道と無漏道との二種の離繫得を得し、見所斷に對しては一の曾得道の離繫得を得す。
第二說——未曾得の世俗道なり。修所斷の八品に對しては、未曾得道と無漏道との二種の離繫得を得し、第九品に對しては更に曾得道の離繫道得を加へて三種の離繫得を得す、見所斷の八品に對しては離繫得を得せざるも、第九品に對しては曾得道と無漏道類との二の離繫得を得す。
第三說——未曾得の世俗道なり。修所斷に對しては三種の離繫得を得し、見所斷に對しては曾得の世俗道の一種の離繫得を得す。而も第三說は評者の說なり。
【六八】第一說——
【六九】聖者が世俗道を以つて欲染を離るゝ時、未來は、法・類智と四諦智との六の無漏智と及び世俗智との七智を修するなり。(婆沙百七卷、毘曇部十二、頁一五四參照)

七七歿して第二靜慮以上に生ずる時と、初靜慮より歿して第二靜慮以上に生ずる時と、乃至無所有處より歿して非想非非想處に生ずる時と、色・無色界の諸地より歿して欲界に生ずる時となり。

(三)有る離繫得にして亦、得し亦、捨するものあり。謂く、進んで四沙門果を得する時と、信勝解が練根して見至と成る時と、退法種八〇姓の阿羅漢等が練根して思法等と成る時と、離染或は種姓より退する若しくは八一三若しくは四沙門果の時と、若しくは色・無色界の上地より歿して下地に生ずる時となり。

(四)有る離繫得にして、得するにも非ず、捨するにも非ざるものあり。謂く、前相を除くものなり。

八二問ふ、若し先に欲界の五品の染を離れて後、正性離生に入り苦法智生ずる時、先に斷ぜし所の見苦所斷の五品の法と、今、斷ずる所の見苦所斷の四品の法とに於て皆、無漏の離繫得を得し、乃至道法智の生ずる時、先に斷ぜし所の見道所斷の五品の法と、及び今斷ずる所の見道所斷の四品の法とに於て皆、無漏の離繫得を得し、道類智生ずる時、三界の見所斷法に於て皆、無漏の離繫得を得するに、彼の先に斷ぜし所の欲界の修所斷の五品の法の無漏の離繫得は、何時、當に得すべきや。尊者僧伽筏蘇は是くの如き說を作す、「道類智の時、得す。爾の時を以つて預流果と名け、亦、一來向と名くるが故に」と。彼の說は然らず、所以は何ん。爾の時に於ては預流果を得するも一來果の向道に於ては、乃至未だ一刹那も起して現前せざるを以て、如何が說きて一來向と爲すべきや。有るが是の說を作す「一來果の加行道を起す時、得す、是れ一來向の所攝なるを以ての故に」と。有餘師の說く「一來果を得する時、得す。第六無間道に住する時、能く三界の見所斷と及び欲界の修所斷の前六品との法の無漏の離繫得を引きて起らしめ、一來果を得するを以ての故に」と。如是說者はいふ、「預流果より決定して勝進道を起し、彼れが現前する時、得す。下果より上に趣く勝進道の時には、必ず

【七〇】世俗道は、見・修所斷を一束として斷ずるが故に、世俗道を共對治道といふなり。然るに、聖者は既に三界の見所斷を斷盡せるを以つて、今斷ずるは修所斷のみなり。故に聖者が世俗道を以つて斷ずれば、元來共對治道なるべき世俗道が修所斷のみを斷ずることゝなるが故に、共對治道が轉じて不共對治道となるに非ずやといふなり。これに對する答へは、世俗道は、見・修所斷を一束として斷ずるも、今は既に見所斷は斷じ已れるを以つて、必要なきが故に斷ぜざるのみにして斷ずる能力無きに非ざるが故に、共對治道なりとなり。

【七一】第二說——

【七二】二種の離繫得とは、曾得道と無漏道との離繫得なることと云ふ迄も無し。曾得は見・修所斷の對治道なるが故なり。無漏の離繫得を得するは得果による。未曾得の離繫無きは對治道に非ざるが故なり。

【七三】茲に論證に用ひられし文は、發智本文に、「若し現在の他心智を成就するものなれば、彼は過去、未來のものなりや、答ふ、是の如し」とあるを指す。(婆沙百十一卷・毘曇部十二、頁二八四參照)

先に斷ぜし所の上位の諸結の對治道を修するを以ての故に」と。

[八三]問ふ、頗し一刹那の頃、無漏の離繫得に於て、有るは身に作證するも而も慧が見ざるものあり、有るは慧が見るも而も身に作證せざるものあり、乃至四句を作すこと有りや。答ふ、有り。謂く、道類智忍滅して道類智生ずる時、應に四句を作すべし。(一)有る無漏の離繫得にして身に作證するも、而も慧が見ざるものあり。謂く、[八四]欲界の見所斷法の無漏の離繫得なり。(二)有る無漏の離繫得にして慧が見るも而も身に作證せざるものあり。謂く、[八五]色・無色界の修所斷法の無漏の離繫得なり。(三)有る無漏の離繫得にして身に作證し、慧が亦、見るものあり。謂く、[八六]色・無色界の見所斷法の無漏の離繫得なり。(四)有る無漏の離繫得にして身に作證せず、慧も亦、見ざるものあり。謂く、[八七]欲界の修所斷法の無漏の離繫得なり。

[八八]問ふ、頗し一刹那の頃、信等の五根に於て得するも而も捨せず、捨して而も得せず、乃至四句を作すこと有りや。答ふ、有り。謂く聖者にして欲界の染を離る最後の無間道に住する時、應に四句を作すべきなり。(一)得して捨せずとは、謂く、[八九]三地の世俗道と二地の無漏道との所攝の信等の五根なり。(二)捨して而も得せずとは、謂く[九〇]欲界の惡作・憂根と倶生する信等の五根なり。(三)亦得し亦捨すとは、謂く未至地の無漏道所攝の信等の五根なり。無間道の所攝を捨し、解脫道の所攝を得すればなり。(四)得するにも非ず、捨するにも非ずとは、謂く前相を除くものなり。

[九一]第十六節　特に得論に關する諸問題

[九二]問ふ、若し法にして過去なれば、彼の得は過去なりや。設し得にして過去なれば彼の法は過去なりや。答ふ、應に四句を作すべし。(一)有るは法が過去なるも彼の得は過去に非ざるものなり。[九三]謂く過去の有情數の法にして彼の得は未來・現在に在るものなり。(二)有るは得が過去なるも彼の法は過去に非ざるものあり。謂く過去の得が得する未來・現在の有情數の法と及び擇滅と非擇

【七四】第三說——

【七五】特に、退せず、得果せず、轉根せず、見道位に非ず異生に非ずして見所斷法に離繫得を得する場合。聖者が世俗道にて諸地の染を離るゝ時、見所斷に於て、曾得の世俗道の離繫得を得するなり。

【七六】欲染の第六、九品を離るゝ時を除くは、此の時は、一來・不還果を得する時にして、又、見所斷に於て離繫の重得を得するなり。故に之を除く。

【七七】離繫得の得捨に關する四句分別。

【七八】こは例へば色染を離れし不還者が色染を起して退するが如き場合をいふ。

【七九】歿して生ずる時は有漏道による離繫得は能證の道に從つて有漏なるが故に生を變ゆる時捨するなり。

【八〇】姓は大正本に性とあるも宮本に從つて姓と改む。

【八一】三とは、預流果を除く餘の三沙門果にして、こは離染より退する場合にして、四沙門果の時とは種姓より退する場合なり。こは共に離繫得を捨して得するなり。

【八二】欲界の五品染を斷じて正性離生に入りしものは、此の五品に對して、何時無漏の

滅となり。(三)有るは法が過去にして彼の得も亦、過去なるものあり。謂く過去の有情數の法にして彼の得が過去に在るものなり。(四)有るは法が過去に非ず、彼の得も亦、過去に非ざるものあり。謂く、未來・現在の得が得する未來現在の有情數の法と及び擇滅と非擇滅となり。

過去につきて四句を作すが如く、未來・現在につきても各、四句を作すこと、理の如く應に知るべきなり。

九四 問ふ、若し法にして過去に在るものなれば、彼の法には過去の得有りや。設し法にして過去の得有るものなれば、彼の法は過去に在りや。答ふ、應に四句を作すべし。(一)有る法にして、過去に在るも、彼の法には過去の得無きものあり。謂く過去の非有情數の法なり。(二)有る法にして過去の得有るも、彼の法は過去に在らざるものあり。謂く擇滅と非擇滅と及び未來・現在の有情數の法にして過去の得有るものなり。(三)有る法は過去に在り、彼の法には亦、過去の得有るものあり。謂く過去の有情數の法なり。(四)有る法は過去に在るにも非ず、彼の法には亦、過去の得有るにも非ざるものあり。謂く未來・現在の非有情數の法と及び虛空無爲と幷びに未來・現在の有情數の法と及び擇滅と非擇滅とにして過去の得無きものなり。

過去につきて四句を作すが如く、未來・現在の各につきて四句を作すこと、理の如く應に知るべきなり。

九五 問ふ、若し法にして過去に在らざれば、彼の法には過去の得無きや。設し法にして過去の得無ければ、彼の法は過去に在らざるや。答ふ、應に四句を作すべきなり。前の第二句を此の第一句と作し、前の第一句を此の第二句と作し、前の第四句を此の第三句と作し、前の第三句を此の第四句と作して、前の如く應に知るべきなり。

過去につきて四句を作すが如く、未來・現在の各につきて四句を作すこと理の如く、應に知るべ

離繫得を得するや。これに四說あり。

一、道類智の時得すとする僧伽筏蘇の說、

二、一來果の加行道を起す時得すとの有說、

三、一來果を得する時、得すとの有餘師の說、

四、預流果より勝進道を起す時、得すとの如是說者の說。

【八三】**一刹那の頃の無漏の離繫得に對する、身作證と慧見との有無に關する四句分別**　倘、此の項は、婆沙二十三卷(毘曇部七、頁四三六)の「頗し一刹那の頃に隨眠の滅に於て身作證して慧、彼の滅を見ざること有りや」の項を參照せば理解し易からん。(但し、その際は、一來果を得する時を例に取りて說明せり。

【八四】見道位、終りて最初の修道位たる道類智の時は、既に欲界の見惑は斷ぜるが故に、欲界の見所斷法の無漏の離繫得は身作證せるも、今は類智を起せる時なるを以て、その所緣は色・無色界なるが故に、慧は欲界の見所斷の離繫得を見ざるなり。

【八五】色・無色界の修所斷法の無漏の離繫得は未だ得せざるが故に、之を身作證せざるも、而しそは類智の所緣なるが故に慧これを見るなり。

きなり。

九六 問ふ、若し法にして得有れば、彼の法に離繫得有りや。設し法にして離繫得有れば彼の法に得有りや。答ふ、應に四句を作すべし。(一)有る法にして得有るも、彼の法に離繫得有るに非ざるものあり。謂く 九七 無漏の有爲法と及び擇滅と非擇滅となり。(二)有る法にして離繫得有るも、彼の法に得有るに非ざるものあり。謂く 九八 非有情數の法なり。(三)有る法にして得有り、彼の法に亦、離繫得も有るものあり。謂く有漏の有情數の法なり。(四)有る法にして得有るにも非ず、彼の法に亦、離繫得も有るに非らざるものあり。謂く 九九 虛空無爲なり。

一〇〇 問ふ、若し法にして得無ければ、彼の法には離繫得無きや。設し法にして離繫得無ければ、彼の法には得無きや。答ふ應に四句を作すべし。前の第二句を此の第一句と作し、前の第一句を此の第二句と作し、前の第四句を此の第三句と作し、前の第三句を此の第四句と作して、前の如く應に知るべきなり。

一〇一 問ふ、法にして應に修すべきものなれば、彼の法の得も應に修すべきものなりや。設し法の得にして應に修すべきものなれば、彼の法も應に修すべきものなりや。答ふ、若し法にして應に修すべきものなれば、彼の法の得も亦、應に修すべきものなり。有の法の得は應に修すべきものなるも、彼の法は應に修すべきものに非ざるものあり。謂く、一〇二 擇滅なり。

一〇三 問ふ、若し法にして應に斷ずべきものなれば、彼の法の得も應に斷ずべきものなりや。設し法の得にして應に斷ずべきものなれば、彼の法は應に斷ずべきものなりや。答ふ、若し法にして應に斷ずべきものなれば彼の法の得も亦、應に斷ずべきものなり。有る法の得は應に斷ずべきものなるも、彼の法は應に斷ずべきものに非ざるものあり。謂く 一〇四 擇滅の一分と及び 一〇五 非擇滅となり。

一〇六 問ふ、若し法にして應に厭ふべきものなれば、彼の法の得も應に厭ふべきものなりや。設し法の

【八六】色・無色界の見所斷法の無漏の離繫得は、既に三界の見惑を斷盡せる位なるが故に、身作證し、且つ、上界は類智の所緣なるが故に、慧も亦、これを見るなり。

【八七】欲界の修所斷の無漏の離繫得は未だこれを得せざる位なるが故に、身作證すること無く、又、類智なるが故に欲界を緣ぜざるが故に慧も之れを見ざるなり。

【八八】**一剎那の頃の信等の五根の得、捨に關する四句分別**

【八九】三地の世俗道とは、未至、と初靜慮と、靜慮中間の三地所攝の世俗道をいひ、二地の無漏道とは未至と初靜慮との二地の無漏道をいふ。

【九〇】惡作・憂根は欲界にのみ有りて上界には無きが故に第九無間道の時、斷ぜらるる故に、それと俱生する信等の五根は、捨して得せざるなり。

【九一】本節は得論の結尾として、得に關する諸種の問題を論究せんとしたる段にして、其の內容は、脚註に示せるが如し。

【九二】**過去法とその得との三世關係に關する四句分別。**

【九三】善・染汚の四蘊にして、過去に在るも而もその得が未來、現在に在るものなり。

【九四】**過去法に於ける過去得**

得にして應に厭ふべきものなれば、彼の法も應に厭ふべきものなりや。答ふ、若し法にして應に厭ふべきものなれば、彼の法の得も亦、應に厭ふべきものなり。有る法の得は應に厭ふべきものなるも、彼の法は應に厭ふべきものに非らざるものあり。謂く[一〇七]擇滅の一分と及び非擇滅となり。

[一〇八]問ふ、何が故に諸の得は所得の法に隨つて善等の性と成るに、而も色等と成らざるや。答ふ、善等は是れ諸法の性類なり、諸法の性類は相隨轉すべきも、色等は是れ諸法の自體なり。諸法の自體には相隨ふの義無ければなり。有るが說く「善等は是れ共相なるをもて隨つて轉ずべきも、色等は是れ自相なるをもて相隨ふの義無ければなり。

[一〇九]問ふ、何が故に、諸の得は所得の法に隨つて定んで是れ善等なるに、所得の法に隨つて定んで是れ過去等ならざるや。答ふ、所得の諸法は世に行ずること不定なるが故に、能得の得の世も亦、不定なり。所得の諸法の善等の性は定なるが故に、能得の得の善等も亦、定なるなり。

[一一〇]問ふ、諸の得は幾く識の所識なりや。幾く智の所知なりや。幾く隨眠の隨增する所なりや。答ふ、諸の得は一識の所識なり。謂く意識なり、法界・法處・行蘊の攝なるが故に。八智の所知にして滅智と他心智とを除く、是れ有爲にして不相應なるを以ての故に。三界五部有漏緣の隨眠の隨增する所なり。得の中に於ては[一一一]相應隨增なきを以ての故に。

[一一二]問ふ、諸の非得は幾く識の所識なりや。幾く智の所知なりや。幾く隨眠の隨增する所なりや。答ふ、諸の非得は一識の所識なり、謂く意識なり、亦、法界・法處・行蘊の攝なるが故に。七智の所知なり、滅智と道智と他心智とを除く。是れ有漏にして不相應なるを以つての故に。三界修所斷と及び諸の遍行との隨眠の隨增する所なり。非得は唯、[一一三]修所斷のみなるを以つての故に。

[一一四]問ふ、頗し得を捨して而も非得を得せざるもの有りや。答ふ、有り。謂く無餘涅槃に入る時、諸法の得を捨して而も非得を得せず、所依斷ずるが故に。

[一一五]問ふ、頗し諸法にして先に非得を起し、一たび得して以去更に非得を起さざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、諸の非擇滅と及び無生智等は一たび得せば以去、乃ち無餘涅槃の前に至るまで恒に成

の有無に關する四句分別、

こは、非有情數の法と、虛空無爲とには得無きことゝ、擇滅と非擇滅と虛空とは世に墮せざることゝを心得へ置かば解し易し。

【九五】**過去に在らざる法に於ける過去得の有無に關ずる四句分別。**

【九六】**得有る法に於ける離繫得の有無に關する四句分別**

【九七】無漏の有爲法即ち道諦と、擇滅即ち滅諦とは之れを得すること有るも、それ自體は既に離繫なるが故に、離繫得を得すること無し。又、非擇滅は、竟畢究不生法なるが故に之れを得すること有るも、無漏の離繫得は無きなり。

【九八】非有情數は、修所斷なるが故にこれに對して離繫得を得することあるも、非有情數なるが故に、得有ること無きなり。

【九九】虛空無爲は、道が之れを緣ずること無く、又そは得すべき法にも非ざるが故に第四句となるなり。

【一〇〇】**得無き法に於ける離繫得の有無に關ずる四句分別。**

【一〇一】**修すべき法とその得との應修不修に就きて**

茲に修すべきものとは有爲の善法をいふ。

就するが故に。

[一一六]問ふ、頗し諸法にして本來、得有るも、非得無きもの有りや。有るが說く「無し。得有れば必ず非得有るを以ての故に」と。有るが說く「有り。[一一七]三類智邊の世俗智等の如き非擇滅の法は、本來、得有るも非得有ること無し、彼れは本來、定んで不生なるを以ての故に」と。

[一一八]問ふ、一得にして能く彼の法と及び得の得とを得するもの有るが如く、亦、一非得にして能く彼の法と及び非得の非得を捨するもの有りや。答ふ、無し。非得には同時に非得の非得無きを以つての故に。現在の非得は必ず成就するを以つての故に。

[一一九]問ふ、頗し法にして、得無く非得無く、彼の法の滅に得有り非得有るもの有りや。答ふ、有り。謂く一切の非有情數の法なり。

【一〇三】擇滅は無爲なるが故に修すべきものに非ざるも、その得は、有爲無漏善か、有爲有漏善かなれば修すべき法なり。

【一〇四】**斷ずべき法とその得との斷・不斷に就きて、**
茲に斷ずべきものとは有爲有漏法をいふ。

【一〇四】擇滅の一分とは茲にては有漏道によりて證せられし擇滅をいふ、擇滅は無爲無漏なるが故に斷ずべきに非ざるも、その得は有爲有漏なるが故に斷ずべきものなり。

【一〇五】非擇滅は無爲なるが故に斷ずべきに非ざるも、その得は無覆無記にして有爲有漏なるが故に斷ずべきものなり。

【一〇六】**厭ふべき法とその得との厭・不厭に就きて、**
茲に厭（nirveda or nirvidyate）とは、苦集諦をいふ。（倶舍二五）

【一〇七】茲に擇滅の一分とは有漏道によりて得せし擇滅をいふ、其の理由に就きては前の斷の場合に準じて知れ。

【一〇八】**得は所得の法に隨つて性類に、差別あるに、所得の法と成らざる理由。**

【一〇九】**得は所得の法の性類に隨ふも、その法の世に隨はざる理由。**

【一一〇】**得を知る識・及び智・並びに隨增する隨眠に就きて、**

【一一一】得は不相應法なるが故に相應隨增無く、隨つて無漏緣の隨眠が隨增すること無きなり。

【一一二】**非得を知る論及び智・並びに隨增する隨眠に就きて、**

【一一三】非得は無覆無記なるが故に、修所斷なり。

【一一四】**得を捨して非得を得せざる場合、**
通例は得を捨することは非得を得することとなれども、無餘涅槃に入る時は所依無きが故に得するといふこと無く、從つて非得をも得せざるなり。

【一一五】**先に非得を得して以來非得を起さざるものに就きて、**
これに二種あり。
一、非擇滅は一度得せば非擇滅の非得を得すること斷じて無し。若し得すとせば竟究不生法を現起すると云ふが如き不都合を來すが故に。
二、無生智は不動阿羅漢以前に在りてはその非得を得せるも、不動羅漢になりし刹那に無生智を得し、とは不退なるが故に無生智を捨することと無きを以て無生智の非得を得せざるなり。

【一一六】**本來、得有りて非得無きものに就きて。**

【一一七】世俗智は無始以來成就するが故に茲に本來得有りといへるなり。而かも現觀邊の世俗智は未來修として得するのみにして、生ずること無きが故に、生ずること無きものには非得も無しといふ意なり。

【一一八】**一非得にして、法と非得の非得とを捨するものありや。**

【一一九】**得も非得も無くして、その法の滅に於て得有り非得有るものに就きて。**

巻の第百五十九（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、得納息第一之三）

第十七節[一]　三性心と倶起する無色の三性分別

【本論】諸法の善の無色が起れば、彼の法は善心と倶なりや。乃至廣說。

[二]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、「相應法無く、生・老・住・滅無く、退無し」と說く者の意を止めんと欲し、及び自宗の正理を說きて、相應法のあることを顯はさんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[三]問ふ、何が故に此の中、唯、無色の起ることのみを問ひて、色を問はざるや。答ふ、彼の作論者の意欲爾るが故なり。彼の意欲に隨つて而も此の論を作すも但、法相に違はざれば便ち應に責むべからず。有るが說く「若し法にして一切の界、一切の地、一切の部、一切の心中に得べきものなれば、此の中に之れを問ふも、色法は一切の界に非ず、乃至一切の心中に得べきにも非ざるが故に、此の[四]中に問はざるなり」と。有るが說く「若し法にして多分に是れ心と倶有なり、心力に由りて生じ、心に隨つて轉ずるものなれば、此の中に則ち問ふも、色法は多分に心と倶有ならず、心力の生ずるにも非ず、心に隨つて轉ずるにも非ざること、苦法智忍の時、九十八隨眠の得の起ること有るも、然も彼の諸の得は忍と[五]倶有なるに非ず、忍力の生ずるにも非ず、忍に隨つて轉ずるにも非ざるが如し。忍と倶なること無色法に同ずと雖も、尚、彼れと忍とは心と倶なりと說かず。況んや、諸の色法をや。是の故に問はざるなり」と。

此の中、所說の無色法が起れば善等の心と倶なりとは、要ず是れ彼の心の勢力の引く所の諸の無色法なり。

【一】本節は發智の頌文の「四起」中の第一起にして
一、(a)善の無色が起れば彼の法は善心と倶なりや、
b.善心と倶起する法は善の無色なりや、
二、(a)不善の無色が起れば彼の法は不善心と倶なりや。
b.不善心と倶起する法は不善の無色なりや、
三、(a)無記の無色が起れば彼の法は無記心と倶なりや、
b.無記心と倶起する法は無記の無色なりや、
に關して論究する段なり。因みに茲に云ふ、無色とは心の勢力によりて引起せられし、心心所と生・老・住・無常の四相と及び得とを云ふなり。

【二】論起の因由。

【三】無色に就きて作論し、色に就きて作論せざる理由。

【四】中は大正本に無きも、三本、宮本に從つて之を補へり。

【五】忍は、隨眠の得を斷ぜしむるものなるが故に同一果に非ざるを以つて、忍と隨眠の得とは倶有なるに非ざるなり。

【本論】[六]諸法の善の無色が起れば、彼の法は善心と倶なりや。答ふ、諸法の善の無色が起れば、彼の法は或は善心と倶なり、或は不善心と倶なり、或は無記心と倶なり。

[七]云何んが善心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの善の無色なり。

彼の心と相應する善の無色とは、善の心所を謂ひ、彼の心と倶有なる善の無色とは、彼の法の生・老・住・無常を謂ふ。

此の中に亦、同類の得を起すこと有るも、略の故に說かず、彼れは應に准じて知るべきなり。

【本論】[八]云何んが不善心と倶なりや。答ふ、不善心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき善法の得の起るが如し。

不善心にて退し善の得が起るとは、謂く[九]諸の聖者の已離欲染のものが、若し欲界の下下と下中との二品の纒を起して退する時なれば、彼の心は[一〇]一來果と及び勝果道と幷びに[一一]善の惡作・憂根と倶生する品の四蘊との諸得と倶起す。若し下上品の纒を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き善の得と倶起す。其の加行を護ること能はざること有るものなれば、一來の勝果道を除き、彼の心は餘の前の如き善の得と倶起するなり。[一二]問ふ、此の中、云何んが加行を護るもの、加行を護らざるものと名くるや。答ふ、[一三]煩惱の勢力が現在前する時、修斷に於て、彼の加行を能く護ること有らしめ、護ること能はざること有らしむるが故なり。若し中下乃至上中の五品の纒を起して退する時なれば、彼の心は預流果と及び勝果道と幷びに善の惡作・憂根と倶生する品の四蘊との諸得と倶起す。若し上上品の纒を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き善の得と倶起す。其の加行を護ること能はざること有るものなれば、預流の勝

【六】 以下、善の無色が起れば彼の法は善心と倶なりや否やに就きて、

【七】 善の無色が起りて善心と倶なる場合。

【八】 善の無色が起りて不心と倶なる場合。

【九】 已離欲染の聖者が退する場合――

【一〇】 已離欲染の聖者なる不還者等が退して、一來果を得する時――一來果は善なるが故にその果の得も善なり。勝果道も之に準じて知れ。

【一一】 善の惡作とは、此の場合に於ては退せしことを追悔するをいふ。

【一二】 住して退する時は必ず意識に因みに退するが故に惡作、憂根等を起し得るなり。

【一三】 特に加行を護るものと護らざるものとの意義。

【一三】 大正本には「煩惱……前する時」の文と「修斷……護ること有らしめ」の文と前後入り變れるも、三本宮本によりて斯く訂正せり。

果道を除き、彼の心は餘の前の如き善の得と倶起す。

[一四]若し一來者なれば、前六品の纒の隨つて何を起して退するも、[一五]善の惡作と憂根と、倶生する品の得を除き、彼の心は其の所應に隨つて餘の前の如き善の得と倶起す。

[一六]若し諸の異生の已離欲染のものなれば、隨つて何品の不善の纒を起して退する時も、彼の心は善の惡作と憂根と倶生する品の四蘊の諸得と倶起す。

[一七]不善心にて生ずるとき善の得を起すとは、謂く、色・無色界より歿して欲界に生ずるに、不善心を以て結生する時は、彼の心は欲界の生得の善の四蘊の諸得と倶起す。[一八]有るが說く「彼の心は亦、一分の聞・思所成の四蘊の諸得と倶起するなり」と。

【本論】[一九]云何んが無記心と倶なりや。答ふ、無記心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき、善法の得が起るが如し。

無記心にて退するとき善の得が起るとは、謂く、[二〇]阿羅漢が勝根を退して劣根に住する時、彼の無記心は劣根の品の善の得と倶起す。學が勝種姓を退して劣種姓に住するも亦、爾り。

[二一]若し阿羅漢にして非想非非想處の纒を起して退する時なれば、彼の心は不還果と及び勝果道と幷びに非想非非想處の[二二]順退分との諸得と倶起す。是くの如く乃至して、初靜慮の後八品の纒を起して退する時は、彼の心は不還果と及び勝果道と幷びに初靜慮の順退分との諸得と倶起す。若し初靜慮の上上品の纒を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き善の得と倶起す。其の加行を護ること能はざること有るものなれば、不還の勝果道を除き、彼の心は餘の前の如き善の得と倶起す。

[二三]若し不還者と及び諸の異生とにして已に無所有處の染を離るるものが、無所有處の纒を起して退する時なれば、彼の心は無所有處の順退分の諸得と倶起す。是くの如く乃至して初靜慮の纒を起して

【一四】 一來者が退する場合――

【一五】 茲に善の惡作・憂根を除くは、一來果より退すと雖ども、同じく欲界の中の出來事に屬し、惡作・憂根無き色界より之れ等が有る欲界に退したるが如き場合と異なるを以つてなり。

【一六】 已離欲染の異生が退する場合――

【一七】 不善心にて生ずる場合

――

【一八】 聞・思所成の慧は、原則としては、加行得と離染得（有頂の染を離るる時得するが故に）となるも、「上地より歿して下地に生ずる時、得すること有るが故に」とて生得を許す有說あること婆沙四十二卷（毘曇部九、頁九）に見ゆ。修所成慧を說かざるは修所成慧は欲界に無きがためなり。

【一九】 **善の無色が起りて無記心と倶なる場合。**

【二〇】 學無學が勝種姓より退する場合――

【二一】 阿羅漢が退する場合――

――

【二二】 順退分 (hānabhāgīya) とは、自地の煩惱に順ずるが故に此の名を得。されどこは淨定の攝なるが故に善なり。尚、詳しくは婆沙百六十五卷を見よ。

退する時なれば、彼の心は初靜慮の順退分の諸得と倶起す。已に無所有處の染を離るるものの如く、若しくは已に識處の染を離れしもの乃至已に初靜慮の染を離れしものにつきても應に知るべし亦、爾ることを。若し諸の異生の已離欲染なるもの[二四]にして、欲界の有身見・邊執見の纏を起して退する時なれば、彼の心は善の惡作と憂根と倶生する品の四蘊の諸得と倶起す。

[二五]無記心にて生ずるとき善の得を起すとは、謂く無色界の上地より歿して下地に生ずる時、彼の心は彼の地の善の四蘊の諸得と倶起す。若し無色界及び上靜慮地より歿して下の諸靜慮地に生ずる時なれば、彼の心は彼の地の善の五蘊の諸得と倶起す。若し色・無色界より歿して欲界に生じ、有身見・邊執見を以て結生する時なれば、彼の心は欲界の生得の善の四蘊の諸得と倶起す。有るが説く「彼の心は亦、一分の聞・思所成の諸得と倶起するもの有り」と。若し欲界より歿して上二界に生ずると及び上二界の下地より歿して上地に生ずるとの時なれば、彼の心は彼の地の生得の善の四蘊の諸得と倶起するなり。

【本論】[二六]設し法にして善心と倶起するものなれば、彼の法は善の無色なりや。答ふ、諸法にして善心と倶起するものなれば、彼の法は或は善の無色、或は無記の無色なり。

[二七]云何んが善の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの善の無色なり。

義は前に釋せるが如し。

【本論】[二八]云何んが無記の無色なりや。答ふ、善心にて勝進するとき、無記法の得が起ると、及び善心に住するとき、無記の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・

【二三】不還者及び異生が退する場合――

【二四】茲に異生につきてのみ説きて、聖者を説かざるは、聖者は有身見、邊執見の如き見所斷の惑を起すこと無ければなり。預流果を退すること無きが故に(婆沙六十一卷、毘曇部十頁十二參照)。

【二五】無記心にして生ずる場合――

【二六】以下善心と倶起する法は善の無色なりやに就きて。

【二七】善心と倶起する善の無色。

【二八】善心と倶起する無記の無色。

老・住・無常との如きなり。

[二九]善心にて勝進するとき無記の得が起るとは、謂く、欲染を離るる第九無間道が滅し、解脱道が起る時、彼の心は初靜慮の果の[三〇]無記の通果心品の諸得と倶起し、乃至、第三靜慮の染を離るる第九無間道が滅し、解脱道が起る時、彼の心は第四靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起す。[三一]金剛喩定が滅し盡智が起る時、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起す。[三二]已離欲染の信勝解が練根して見至と作る加行道の時、——有るが説く「及び解脱道の時」と、——彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起す。[三三]時解脱阿羅漢が練根して不動と作る、未至定乃至第四靜慮に依る加行道の時、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起し、及び[三四]一切地に依る[三五]第九解脱道の時、彼の心は四靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起す。[三六]五通を引發する諸加行道、五無間道、三解脱道の時と[三七]雜修靜慮の初後の無間道と解脱道との時と、四無量・初三解脱・八勝處・前八遍處を起す時と、無礙解を起し、及び未至定乃至第四靜慮に依りて増長する時と、無諍・願智・邊際定を起し、及び増長する時と、[三八]未至定乃至第四靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相等の諸功德を起し及び増長する時とには、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の無記の通果心品の諸得と倶起す。

及び善心に住する乃至彼の法の得と生・老・住・無常とは、謂く、欲色界に生じて善心が流注し久しく相續して起る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は、彼の得と四相と倶起するなり。諸根の長養と大種の増益との問答解釋は[三九]大種蘊の如し。

【本論】[四〇]諸法の不善の無色が起れば、彼の法は不善の心と倶なりや。答ふ、諸法の不善の無色が起れば、彼の法は、或は不善心と倶なり、或は無記心と倶なり。

[四一]云何んが不善心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有

【二九】善心にて勝進するとき無記の得が起る場合——

【三〇】無記の通果心とは能變化心と天眼・天耳通とをいひ、こは四靜慮によりて起され、欲界と四靜慮とにあり、加行得・離染得に通ず。

【三一】金剛喩定が滅して盡智が起る時は、その力は能く九地の有漏無量の功德を修するなり。(倶舍二六)

【三二】已離欲染の信勝解が練根して見至となる時、世俗・或は無漏を加行となせば、未來は八智を修す。無間・解脱道は必ず無漏道による。無間道の未來修は世俗と他心を除く六智を修するが故に茲に説かざるなり。解脱道の未來修につきて有るは世俗を除く七智を修すといひ、有るは、八智を修すといふ。(婆沙百七卷、毘曇部十二、頁一一五參照)。

【三三】時解脱が練根して不動となる時の加行道の未來修は八智なり。

【三四】無學の練根の所依の定とは未至・中間・四根本・下三無色の九地の定なり。聖者は有漏道によりて練根する理無ければなり。(倶舍二五)

【三五】八解脱道中、未來には世俗を除く七智を修するが故に、茲に説かざるも、而も第九解脱道の未來修には八智と

なるとの不善の無色なり。

義は[四二]前に釋せるが如し。

【本論】[四三]云何んが無記心と倶なりや。答ふ、無記心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、不善法の得が起るが如し。

無記心にて退し、不善の得が起るとは、謂く諸の異生にして已離欲染のものが、欲界の有身見・邊執見の纒を起して退する時、彼の心は、見修所斷の不善の四蘊の諸得と倶起するなり。無記心にて生じ不善の得が起るとは、謂く、色・無色界より歿して欲界に生ずるに、有身見・邊執見を以て結生する時、彼の心は見・修所斷の不善の四蘊の諸得と倶起するなり。

【本論】[四四]設し法にして不善心と倶起するものなれば、彼の法は不善の無色なりや。答ふ、諸法にして不善心と倶起するものなれば、彼の法は或は不善の無色、或は善の無色、或は無記の無色なり。

[四五]云何んが不善の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの不善の無色なり。

義は前に釋せるが如し。

【本論】[四六]云何んが善の無色なりや。答ふ、不善心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき善法の得が起るが如し。

此は前の善の無色が起りて不善心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[四七]云何んが無記の無色なりや。答ふ、不善心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、無記法の得が起ると、及び不善心に住するとき無記の諸根を長養し大種を増

三界の無量の善根を修するを以つて茲に說けるなり。

【三六】五通を引發する諸加行道の時は現在は世俗智を修し、未來は八智を修す。五無間道の時は現在は世俗智を修し、未來は他心智を除く七智を修す。三解脫とは、神境・他心・宿住の三通の解脫道をいひ、未來は共に八智を修す。天眼・天耳を除くは無記なるが故に智を修せざるが故なり。

【三七】雜修靜慮の初無間道とは、雜修靜慮の成滿の三剎那中の第一剎那の無漏心の時をいひ、こは未來に、學なれば他心智を除く、七智を修し、無學なれば鈍は八智を、利は九智を修す。後の無間道とは第二剎那の有漏心をいひ、未來修は第一剎那の如し。この二剎那に於て不染汚無覆の定障を斷ずるが故に、無間道と名く。解脫道とは第三剎那の無漏心をいひ、未來に、學なれば八智、無學の鈍は九智、利は十智を修す。こは定障の斷を證するが故に解脫道と名けらる。(婆沙百七卷、光記二十六)

【三八】三重三摩地は未至乃至無所有處によりて現前する中、今は特に通果心を起し得る地たる、第四靜慮迄に限りしなり。此の三重三摩地は世俗智と倶なり。

益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

不善心にて退するとき無記の得が起るとは、謂く阿羅漢にして欲界の纒を起して退する時なれば、彼の心は上八地の[四八]修所斷の無記の四蘊の諸得と倶起す。諸の不還者にして若し已に無所有處の染を離れしものが、欲界の纒を起して退する時なれば、彼の心は七地の修所斷の無記の四蘊の諸得と倶起す。乃至若し已に初靜慮の染を離るるも未だ第二靜慮の染を離れざるものが欲界の纒を起して退する時なれば、彼の心は一地の修所斷の無記の四蘊の諸得と倶起す。諸の異生類にして若し已に無所有處の染を離れしものが不善心を起して退する時なれば、彼の心は七地の見、修所斷と及び欲界の見所斷との無記の四蘊の諸得と倶起す。乃至、若し已に初靜慮の染を離るるも未だ第二靜慮の染を離れざるものが、不善の纒を起して退する時なれば、彼の心は一地の見・修所斷と及び欲界の見所斷との無記の四蘊の諸得と倶起す。若し已に欲界の染を離るるも未だ初靜慮の染を離れざるものが、不善の纒を起して退する時なれば、彼の心は、欲界の見所斷の無記の四蘊の諸得と倶起するなり。

不善心にて生じ無記の得が起るとは、謂く非想非非想處より歿して欲界に生ずるに不善心を以て結生する時なれば、彼の心は七地の見・修所斷と及び欲界の見所斷との無記の四蘊と、修所斷の無記の色・行二蘊との諸得と倶起す。有るが說く「亦、欲界の修所斷の無記の心心所の諸得とも倶起す。謂く、[四九]善く串習せし威儀路・工巧處の四蘊なり」と。乃至初靜慮より歿して欲界に生ずるに不善心を以つて結生する時なれば、彼の心は欲界の見所斷の無記の四蘊と修所斷の無記の色・行の二蘊との諸得と倶起す。有るが說く「亦、欲界の修所斷の無記の心・心所の諸得とも倶起す、――前說の如し」と。

及び不善心に住して乃至、彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く諸の異生の三十四隨眠と聖者の四隨眠との隨一が流注し久しく相續して起る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は、

【三九】 大種蘊とは、大種蘊第五中、執受納息第四婆沙百三十八卷(毘曇部十四、頁七五)を指す。

【四〇】 **以下、不善の無色が起れば彼の法は不善心と倶なりやに就きて。**

【四一】 **不善の無色が起りて不善心と倶なる場合。**

【四二】 前とは「善の無色が起りて善心と倶なる法」の場合の說明を指す。即ちその際の善を不善と置き換ふればそのまま說明となるをいふ。

【四三】 **不善の無色が起りて無記心と倶なる場合。**

【四四】 **以下、不善心と倶起する法は不善の無色なりやに就きて。**

【四五】 **不善心と倶起する不善の無色。**

【四六】 **不善心と倶起する善の無色。**

【四七】 **不善心と倶起する無記の無色。**

【四八】 聖者の退する時なるが故に見所斷の惑を起すこと無きを以つて唯、修所斷とのみいへり。而も上界なるが故に有覆無記なるなり。

【四九】 善く串習せし威儀路工巧處の四蘊に關しては婆沙百五十七卷第二節を參照せよ。

彼の得と四相と倶起す。餘は前說の如し。

【本論】[五〇]諸法の無記の無色が起れば、彼の法は無記心と倶なりや。答ふ、諸法の無記の無色が起れば、彼の法は或は無記心と倶なり、或は善心と倶なり、或は不善心と倶なり。

[五一]云何んが無記心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの無記の無色なり。

義は前に釋せるが如し。

【本論】[五二]云何んが善心と倶なりや。答ふ、善心にて勝進するとき無記法の得が起ると、及び善心に住するとき、無記の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

此は前の善心と倶起する無記の無色の釋の如し。

【本論】[五三]云何んが不善心と倶なりや。答ふ、不善心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき無記法の得が起ると、及び不善心に住するとき無記の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

此は前の不善心と倶起する無記の無色の釋の如し。

【本論】[五四]設し法にして無記心と倶起するものなれば、彼の法は無記の無色なりや。答ふ、諸法にして無記心と倶起するものなれば、彼の法は或は無記の無色、或は善の無色、或は不善の無色なり。

[五五]云何んが無記の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有

【五〇】以下無記の無色が起れば彼の法は無記心と倶なりやに就きて。

【五一】無記の無色が起りて無記心と倶なる場合。

【五二】無記の無色が起りて善心と倶なる場合。

【五三】無記の無色が起りて不善心と倶なる場合。

【五四】以下無記心と倶起する法は無記の無色なりやに就きて。

【五五】無記心と倶起する無記の無色。

なるとの無記の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[五六]云何んが善の無色なりや。答ふ、無記心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき、善法の得が起るが如し。

此は前の善の無色が起りて無記心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[五七]云何んが不善の無色なりや。答ふ、無記心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき、不善法の得が起るが如し。

此は前の不善の無色が起りて無記心と倶なるものの釋の如し。

第十八節[五八]　三界心と倶起する無色の界繫分別

【本論】[五九]諸法の欲界の無色が起れば、彼の法は欲界心と倶なりや。答ふ、諸法の欲界の無色が起れば、彼の法は或は欲界心と倶なり。或は色界心と倶なり、或は無色界心と倶なり、或は不繫心と倶なり。

[六〇]云何んが欲界心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの欲界の無色なり。

彼の心と相應する欲界の無色とは、謂く欲界の心所法なり。彼の心と倶有なる欲界の無色とは、謂く彼の法の生・老・住・無常なり。

此の中に亦、同類の得の起るもの有るも、略なるが故に說かざるなり。

【本論】[六一]云何んが色界心と倶なりや。答ふ、色界心にて若しくは生じ、若しくは勝進するとき欲界法の得が起ると、及び色界心に住するとき、欲界の諸根を長養し大種

【五六】 **無記心と倶起する善の無色。**

【五七】 **無記心と倶起する不善の無色。**

【五八】 本節は發智論の頌文の「四起」中の第二起に相當する段にして

一、a. 欲界の無色が起れば彼の法は欲界心と倶なりや。
b. 欲界心と倶起する法は欲界の無色なりや。

二、a. 色界の無色が起れば彼の法は色界心と倶なりや。
b. 色界心と倶起する法は色界の無色なりや。

三、a. 無色界の無色が起れば彼の法は無色界心と倶なりや。
b. 無色界心と倶起する法は無色界の無色なりや。

の如き組織によりて、三界心と倶起する無色の界繫分別をなす段なり。

【五九】 **以下、欲界の無色が起れば彼の法は欲界心と倶なりやに就きて。**

【六〇】 **欲界の無色が起りて欲界心と倶なる場合。**

【六一】 **欲界の無色が起りて色界心と倶なる場合。**

を増益する彼の法の得と、生・老・住・無常との如きなり。

色界心にて生じ欲界の得が起るとは、謂く無色界より歿して、若し第四靜慮に生ずる時なれば、彼の心は第四靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す、乃至、若し初靜慮に生ずる時なれば、彼の心は初靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。無色界より歿して色界に生ずるが如く、上地より歿して下地に生ずるときも亦、爾り。

色界心にて勝進するとき、欲界の得が起るとは、謂く世俗道を以て欲界の染を離るる第九無間道が滅して解脱道が起る時、彼の心は初靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す、乃至、世俗道を以て第三靜慮の染を離るる第九無間道が滅して、解脱道が起る時、彼の心は第四靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。已離欲染の信勝解が練根して見至と作るときの世俗の[六二]加行道の時なれば、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。未至定乃至第四靜慮に依りて時解脱阿羅漢が練根して不動と作るときの世俗の加行道の時なれば、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脱道と及び世俗の他心智通の解脱道との時と[六三]雜修靜慮の中間心の時と、四無量・初三解脱・八勝處・前八遍處を起す時と、無礙解を起すと、及び未至定乃至第四靜慮に依りて世俗の無礙解を増長するとの時と、無諍・願智・邊際定を起すと及び増長するとの時と、未至定乃至第四靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相等の世俗の諸功德を起すと及び増長するとの時とには、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。

及び色界心に住し乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く欲界に生じて色界定に入る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は彼の得・四相と倶起するなり。

【本論】[六四]云何んが無色界心と倶なりや。答ふ、無色界心に住するとき欲界の諸根を

【六二】聖者の練根の加行道は、有漏・無漏に通ずるも、無間・解脱道は唯、無漏なり。而して、今は色界心と倶なるものなるが故に、特に世俗を加行となすといへるなり。

【六三】雜修靜慮の中間心とは、雜修靜慮の成滿のときは、第一刹那心が無漏・第二刹那心が有漏・第三刹那心が無漏なるに、其中の第二刹那の有漏心を指す。

【六四】欲界の無色が起りて無色界心と倶なる場合。

長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。
謂く、欲界に生じ、無色界定に入る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は、彼の得・四相と倶起するなり。

【本論】[六五]云何んが不繋心と倶なりや。答ふ、不繋心にて勝進するとき欲界法の得が起ると、及び不繋心に住するとき欲界の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

不繋心にて勝進するとき、欲界法の得が起るとは、謂く見道の三類智に住する時の彼の心は、苦・集・滅の[六六]三現觀邊に修する所の欲界の世俗智品の諸得と倶起す。無漏道を以て、欲界の染を離るる第九無間道が滅して解脫道が起る時、彼の心は初靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。乃至無漏道を以て第三靜慮の染を離るる第九無間道が滅して解脫道が起る時、彼の心は第四靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。[六七]金剛喩定が滅して盡智が起る時、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と、及び爾の時得する所の欲界の善法の諸得と倶起す。已離欲染の信勝解が練根して見至と作る無漏の加行道の時、――有るが說く「及び解脫道の時」と――、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。時解脫阿羅漢が練根して不動と作る未至定乃至第四靜慮に依る無漏の加行道の時、彼の心は所應に隨ふ、靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。一切地に依る第九解脫道の時、彼の心は四靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と、及び爾の時、得する所の欲界の善法の諸得と倶起す。無漏の他心智通を起す時と、雜修靜慮の初後の心の時と、未至定乃至第四靜慮に依り無漏の無礙解等を增長する時とには、彼の心は所應に隨ふ靜慮の果の欲界の通果心品の諸得と倶起す。

及び不繋心に住するとき、乃至、彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く、欲界に生ぜしも

【六五】欲界の無色が起りて不繋心と倶なる場合。

【六六】三は大正本に二とあるも三本宮本に從つて三と改む。

【六七】金剛喩定が滅して初盡智を起す時は、欲界乃至有頂の諸功德を修するなり。

のが無漏の未至乃至無所有處の定に入る時、諸根と大種とを長養し增益する彼の心は、彼の得・四相と俱起するなり。

【本論】[六八] 設し法にして欲界心と俱起するものなれば、彼の法は欲界の無色なりや。答ふ、諸法にして欲界心と俱起するものなれば、彼の法は或は欲界の無色なり、或は色界の無色なり、或は無色界の無色なり、或は不繫の無色なり。

[六九] 云何んが、欲界の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と俱有なるとの欲界の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[七〇] 云何んが色界の無色なりや。答ふ、欲界心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき、色界法の得が起るが如きなり。

欲界心にて退するとき、色界の得が起るとは、謂く、諸の聖者の已離色染のものが欲界の纏を起して退する時、彼の心は、色界の四地の修所斷法の諸得と俱起し、乃至、已に初靜慮の染を離るるも未だ第二靜慮の染を離れざるものが欲界の纏を起して退する時、彼の心は色界の一地の修所斷法の諸得と俱起す。若し諸の異生の已離色染のものが、欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は色界四地の見・修所斷法の諸得と俱起し、乃至已に初靜慮の染を離るるも未だ第二靜慮の染を離れざるものが欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は色界一地の見・修所斷法の諸得と俱起す。

欲界心にて生ずるとき色界の得が起るとは、謂く無色界より歿して欲界に生ずる時、彼の心は色界四地の見・修所斷法の諸得と俱起し、乃至第二靜慮より歿して欲界に生ずる時、彼の心は色界一地の見・修所斷法の諸得と俱起するなり。

【六八】以下、欲界心と俱起する法は欲界の無色。

【六九】欲界心と俱起する欲界の無色。

【七〇】欲界心と俱起する色界の無色。

【本論】[七一] 云何んが無色界の無色なりや。答ふ、欲界心にて若しくは退し若しくは生ずるとき、無色界法の得が起るが如きなり。

欲界心にて退するとき無色界の得が起るとは、謂く、阿羅漢が欲界の纏を起して退する時、彼の心は無色界の四地の修所斷法の諸得と俱起す。若し不還者にして已に無所有處の染を離れしものが、欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は無色界の三地の修所斷法の諸得と俱起す。乃至已に空無邊處の染を離るるも未だ識無邊處の染を離れざるものが欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は無色界の一切の修所斷法の諸得と俱起す。若し諸の異生にして已に無所有處の染を離れしものが欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は無色界の三地の見・修所斷法の諸得と俱起す。乃至、已に空無邊處の染を離るるも未だ識無邊處の染を離れざるものが欲界の纏を起して退する時なれば、彼の心は無色界の一地の見・修所斷法の諸得と俱起す。

欲界心にて生ずるとき無色界の得が起るとは、謂く非想非非想處より歿して欲界に生ずる時、彼の心は無色界の三地の見・修所斷法の諸得と俱起す。乃至識無邊處より歿して欲界に生ずる時、彼の心は無色界の一地の見・修所斷法の諸得と俱起するなり。

【本論】[七二] 云何んが不繫の無色なりや。答ふ、欲界心にて退するとき不繫法の得が起るが如し。

謂く、阿羅漢が勝根より退して劣根に住する時、彼の欲界の心は、劣根品の[七三]不繫の得と俱起す。學が勝種姓より退して劣種姓に住するも亦、爾り。若し諸の聖者の已離欲染なるものが、欲界の下下と下中との二品の纏を起して退する時なれば、彼の心は一來果と及び勝果道との諸得と俱起す。若し下上品の纏を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き諸の不繫の得と俱起す。其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は唯、一來果の諸得と

【七一】欲界心と俱起する無色界の無色。

【七二】欲界心と俱起する不繫の無色。

【七三】勝根より退して劣根に住する時得する無學法は、有爲無漏なるが故に、その得の性類も所得の法に隨つて無漏なるなり。

倶起す。若し中上乃至上中の五品の纒を起して退する時なれば、彼の心は預流果と及び勝果道との諸得と倶起す。若し上上品の纒を起して退する時、猶能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き諸の不繋の得と倶起す。其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は唯、預流果の諸得と倶起す。若し一來者が前六品の纒の隨つて何を起して退するも、彼の心は應に隨つて亦前の如き諸の不繋の得と倶起す。

問ふ、欲界心にて勝進しても不繋法の得が亦、起ることあり、或は施に由り、或は戒に由り、或は聞に由り、或は思に由るが故に、惡趣等に於て非擇滅を得せしむるが如し。此の中、何が故に説かざるや。有るが説く「應に説くべくして而も説かざるは、當に知るべし、此の義有餘なることを」と。如是説者はいふ「[七四]非擇滅は不繋なりと雖も而も彼の得は不繋に非ず。此の中には不繋の得を起すを説くをもて、是の故に説かざるなり」と。

【本論】[七五]諸法の色界の無色が起れば、此の法は色界心と倶なりや。答ふ、諸法の色界の無色が起れば、彼の法は或は色界心と倶なり、或は欲界心と倶なり、或は無色界心と倶なり、或は不繋心と倶なり。

[七六]云何んが色界心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの色界の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[七七]云何んが欲界心と倶なりや。答ふ、欲界心にて若しくは退し、若しくは生じ色界法の得が起るが如し。

此は前の欲界心と倶起する色界の無色の説の如し。

【七四】非擇滅の得の性類は所依身に依るを以つて無覆無記なり。

【七五】以下、色界の無色が起れば彼の法は、色界心と倶なりやに就きて。

【七六】色界の無色が起りて、色界心と倶なる場合。

【七七】色界の無色が起りて欲界心と倶なる場合。

【本論】[七八] 云何んが無色界心と倶なりや。答ふ、無色界心に住するとき、色界の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

謂く、色界に生ぜしものが無色界定に入る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は、彼の得・四相と倶起するなり。

【本論】[七九] 云何んが不繋心と倶なりや。答ふ、不繋心にて勝進するとき色界法の得が起ると、及び不繋心に住するとき、色界の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

不繋心にて勝進するとき色界の得が起るとは、謂く見道の三類智に住する時、彼の心は苦・集・滅の三現觀邊に修する所の色界の世俗智品の諸得と倶起するなり。無漏道を以て欲界の染を離るるに若し無漏をもて加行となせば、諸の加行道・九無間道・九解脱道の時、彼の心は未來所修の色界道の諸得と倶起し。第九解脱道の時、亦、初靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。無漏道を以て初靜慮乃至第三靜慮の染を離るる時、若し無漏をもて加行と爲せば、諸の加行道・九無間道・九解脱道の時、彼の心は未來所修の色界道の諸得と倶起し、最後の解脱道の時、亦、第二靜慮乃至第四靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。無漏道を以て第四靜慮の染を離るゝと及び未至定乃至第四靜慮に依りて空無邊處乃至非想非非想處の染を離るゝとき、若し無漏をもて加行と爲せば、諸の[八〇]加行道の時、彼の心は未來所修の色界道の諸得と倶起す。金剛喩定が滅して盡智が起る時、彼の心は、爾の時得する所の色界善の諸得と倶起し、亦、所應に隨ふ靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。未離欲染の信勝解が練根して見至と作るとき、若し無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時、――有るが説く「及び解脱道の時」と――、彼の心は未來所修の色界道の諸得と倶起す。

【七八】色界の無色が起りて、無色界心と倶なる場合。

【七九】色界の無色が起りて不繋心と倶なる場合。

【八〇】加行道の時は未だ上地染を離れざるが故に、自地（色界）の世俗智を未來修として修するなり。

已離欲染の信勝解が練根して見至と作るとき、若し無漏をもて加行と爲せば、彼の加行道の時、——有るが說く「及び解脫道の時」と、——彼の心は未來所修の色界道の諸得と、及び所應に隨ふ靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。時解脫阿羅漢が練根して不動と作る未至定乃至第四靜慮に依る無漏の加行道の時、彼の心は未來所修の色界道の諸得と、及び所應に隨ふ靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。一切地に依る第九解脫道の時、彼の心は、爾の時得する所の色界善の諸得及び四靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。無漏の他心智通を起す時と、雜修靜慮の初後の心の時と、未至定乃至第四靜慮に依る無漏の無礙解を増長する時と、即ち彼の諸地に依りて無漏の念住を起す時とには、彼の心は未來所修の色界道の諸得と、及び所應に隨ふ靜慮の果の色界の通果心品の諸得と倶起す。

及び不繫心に住するとき乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く色界に生ずるものが、無漏の未至乃至無所有處定に入る時、諸根と大種とを長養し増益する彼の心は、彼の得・四相と倶起す。

【本論】[八一]設し法にして色界心と倶起するものなれば、彼の法は色界の無色なりや。答ふ、諸法にして色界心と倶起するものなれば、彼の法は或は色界の無色、或は欲界の無色、或は無色界の無色、或は不繫の無色なり。

[八二]云何んが色界の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの色界の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[八三]云何んが欲界の無色なりや。答ふ、色界心にて若しくは生じ、若しくは勝

【八一】以下、色界心と倶起する法は、色界の無色なりやに就きて。

【八二】色界心と倶起する色界の無色。

【八三】色界心と倶起する欲界の無色。

進ずるとき欲界法の得が起ると、及び色界心に住するとき欲界の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

此は前の欲界の無色が起りて色界心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[八四]云何んが無色界の無色なりや。答ふ、色界心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき無色界法の得が起るが如きなり。

色界心にて退して無色界の得が起るとは、謂く阿羅漢が色界の纒を起して退する時、彼の心は無色界の四地の修所斷法の諸得と倶起す。諸の不還者にして已に無所有處の染を離れしものが色界の纒を起して退する時、彼の心は無色界の三地の修所斷法の諸得と倶起す、乃至已に空無邊處の染を離るるも、未だ識無邊處の染を離れざるものが、色界の纒を起して退する時、彼の心は無色界の一地の[八五]修所斷法の諸得と倶起す。若し諸の異生にして已に無所有處の染を離れしものが色界の纒を起して退する時なれば、彼の心は無色界の三地の見・修所斷法の諸得と倶起す。乃至已に空無邊處の染を離るゝも、未だ識無邊處の染を離れざるものが、色界の纒を起して退する時なれば、彼の心は無色界の一地の見・修所斷法の諸得と倶起す。

色界心にて生ずるとき無色界の得が起るとは、謂く非想非非想處より沒して色界に生ずる時、彼の心は無色界の三地の見・修所斷法の諸得と倶起す、乃至、識無邊處より沒して色界に生ずる時、彼の心は無色界の一地の見・修所斷法の諸得と倶起するなり。

【本論】[八六]云何んが不繫の無色なりや。答ふ、色界心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき不繫法の得が起るが如し。

色界心にて退するとき不繫の得が起るとは、謂く阿羅漢が色界の纒を起して退する時、彼の心は

【八四】色界心と倶起する無色界の無色。

【八五】大正本には、修所斷は見・修所斷とあるも、これにては法相上妥當ならず、依つて三本宮本に隨つて「見」を除けり。

【八六】色界心と倶起する不繫の無色。

不還果と及び勝果道との諸得と倶起するなり。

色界心にて勝進するとき不繫の得が起るとは、謂く諸の聖者が[八七]世俗道を以て欲界乃至第三靜慮の染を離るるに、若し世俗をもて加行となせば一切の加行・無間・解脫道の時、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。未至定乃至第四靜慮に依りて、第四靜慮乃至非想非非想處の染を離るるに、若し世俗をもて加行と爲せば、諸の加行道の時、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。信勝解が練根して見至と作ると、及び未至定乃至第四靜慮に依りて、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るとのとき、若し世俗をもて加行と爲せば、諸加行道の時、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。若し諸の聖者が諸通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と、及び世俗の他心智通の解脫道との時と、雜修靜慮の中間心の時と、若し諸の聖者が四無量・初三解脫・八勝處・前八遍處を起す時と、無礙解を起し及び未至定乃至第四靜慮に依り世俗の無礙解を增長する時と、無諍・願智・邊際定を起すと及び增長するとの時と、未至定乃至第四靜慮に依り空空・無願無願・無相無相を起す時と、及び聖者が卽ち彼の地に依りて不淨觀・持息念・世俗の念住等の諸功德を起し及び增長する時とには、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。

問ふ、色界心にて生ずる時、不繫法の得が亦、起ることあり、無色界より沒して第四靜慮に生ずる時、彼の心は第三靜慮の見・修所斷の蘊の擇滅の得と倶起し、乃至、上地より沒して初靜慮に生ずる時、彼の心は欲界の見・修所斷の蘊の擇滅の得と倶起するが如し。此の中、何が故に、說かざるや。答ふ、有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは當に知るべし、此の義有餘なることを」と。如是說者はいふ、「爾の時、得する所の擇滅は不繫なりと雖も、而も彼の諸得は、是れ[八八]色界繫にして不繫に非ざるをもて、是の故に說かざるなり」と。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百五十九

【八七】以下世俗道といへるは今は色界心と倶なる場合なれば、色界の世俗心ならざるべからざればなり。

【八八】上地より沒して下地に生ずるものは異生に限る。然るに異生は有漏道によりて擇滅を得せしものなるが故に、その擇滅は不繫なるも、その得は能證の道に從つて有漏にして不繫に非ず。而もその際は、上地の近分によりて下地を斷ずるものなるが故に、第三靜慮乃至欲界の擇滅の得は皆色界繫となるなり。

（定蘊第七中、得納息第一之四）

[1]第十九節　三界心と倶起する無色の界繫分別（續き）

【本論】[2]諸法の無色界の無色が起れば、彼の法は無色界心と倶なりや。答ふ、諸法の無色界の無色が起れば、彼の法は或は無色界心と倶なり、或は欲界心と倶なり、或は色界心と倶なり、或は不繫心と倶なり。

[3]云何んが無色界心と倶なるものなりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの無色界の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[4]云何んが欲界心と倶なるものなりや。答ふ、欲界心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき無色界法の得が起るが如きなり。

此は前の欲界心と倶起する無色界の無色の釋の如し。

【本論】[5]云何んが色界心と倶なるものなりや。答ふ、色界心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき無色界法の得が起るが如きなり。

此は前の色界心と倶起する無色界の無色の釋の如し。

【本論】[6]云何んが不繫心と倶なるものなりや。答ふ、不繫心にて勝進するとき無色界法の得が起るが如きなり。

謂く、無漏道を以て第四靜慮の染を離るる九無間道・九解脱道の時、彼の心は[7]未來所修の無色

【一】本節は前節の續行なり。分巻に依るが故に便宜上分節せしのみ。

【二】以下無色界の無色が起れば彼の法は無色界心と倶なりやに就きて。

【三】無色界の無色が起りて無色界心と倶なる場合。

【四】無色界の無色が起りて欲界心と倶なる場合。

【五】無色界の無色が起りて色界心と倶なる場合。

【六】無色界の無色が起りて不繫心と倶なる場合。

【七】未來には無色界の世俗智を修するが故に無色界道の得が起るなり。而もその際は無漏道に住するが故に其の得は無漏心と倶なるなり。

界道の諸得と倶起す。無漏道を以て空無邊處乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏をもて加行となせば、諸加行道・九無間道・九解脱道の時、彼の心は未來所修の無色界道の諸得と倶起す。此は是れ總說なり。中に於て、若し未至定乃至第四靜慮に依りて下三無色の染を離るるものなれば、[八]加行道を除く。下三無色に依りて非想非非想處の染を離るゝに、若し無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時、彼の心は未來所修の無色界道の諸得と倶起す。及び一切地に依りて非想非非想處の染を離るゝ[九]最後の解脱道の盡智が起る時、彼の心は、爾の時得する所の[一〇]無色界の善の諸得と倶起す。時解脱阿羅漢が練根して不動と作るに、若し三無色に依りて無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時、彼の心は未來所修の無色界道の諸得と倶起す・及び一切地に依る[一一]最後の解脱道の時、彼の心は爾の時得する所の無色界の善の諸得と倶起す。[一二]無漏の解脱を起す時と、無色定に依りて無漏の無礙解を增長する時と、無色の無漏の念住を起す時とには、彼の心は未來所修の無色界道の諸得と倶起す。

【本論】[一三]設し法にして無色界心と倶起するものなれば、彼の法は無色界の無色なりや。答ふ、諸法にして無色界心と倶起するものなれば、彼の法は或は無色界の無色なり、或は欲界の無色なり、或は色界の無色なり、或は不繫の無色なり。

[一四]云何んが無色界の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの無色界の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[一五]云何んが欲界の無色なりや。答ふ、無色界心に住するとき、欲界の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

【八】加行道を除くは、加行道の時は未だ下三無色の染を斷ぜざるが故に、未來修として修する世俗智は未至乃至第四靜慮繫なり、從つて其の得も色界繫となる。然るに今は無色界の無色(得)が起ることを必要とする場合なるが故に之を除くなり。

【九】茲に最後の解脱道とのみ云ひて九無間道・八解脱道を說かざるは、此の時には未來に世俗智を修せざるが故なり。されど下三無色の離染時には、九無間道、九解脱道共に未來は世俗智を修するなり。

【一〇】此の時は、欲界乃至有頂の有漏の諸功德を修するも、今は無色界のもののみを必要とするが故に無色界の善といへるなり。

【一一】茲に最後の解脱道とのみ云ひて、九無間道、八解脱道を說かざるは、無學の練根時の九無間道、八解脱道には未來に世俗智を修せざるが爲めなり。

【一二】茲に單に無漏の解脱とのみ云ひて「無色の」といはざるは無漏の解脱は下三無色解脱に限るを以つてなり。

【一三】以下無色界心と倶起する法は無色界の無色なりやに就きて。

【一四】無色界心と倶起する無色界の無色。

此は前の欲界の無色が起りて無色界心と倶なるものの釋の如し。」

【本論】[一六]云何んが色界の無色なりや。答ふ、無色界心に住するとき、色界の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と、生・老・住・無常との如きなり。

此は前の色界の無色が起りて無色界心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[一七]云何んが不繫の無色なりや。答ふ、無色界心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき、不繫法の得が起るが如し。

無色界心にて退するとき不繫の得が起るとは、謂く、阿羅漢が無色界の纒を起して退する時、彼の心は不還果と及び勝果道との諸得と倶起す。無色界心にて勝進するとき不繫の得が起るとは、謂く諸の聖者が世俗道を以つて第四靜慮の染を離るるに若し空無邊處の近分をもて加行となせば、彼の[一八]加行道・九無間道・九解脫道の時と、及び聖者が世俗道を以つて下三無色の染を離るゝに、若し世俗をもて加行となせば一切の加行・無間・解脫道の時と、并びに無色定に依りて非想非非想處の染を離るるに若し世俗をもて加行となせば、彼の[一九]加行道の時とには、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに無色定に依るとき、若し世俗をもて加行となせば、彼の加行道の時と、若し聖者が無色の有漏の解脫と二遍處とを起す時と、無色定に依りて、有漏の無礙解を增長する時と、無色定に依りて世俗の念住・空空・無願無願・無相無相を起す時と、[二〇]入滅定の想・微細心を起す時とには、彼の心は未來所修の不繫法の諸得と倶起す。

問ふ、無色界心にて生ずる時、不繫法の得が亦、起ることあり。無色界の上地より沒して下地に生ずる時、彼の心は所生の次下の見・修所斷の諸染の擇滅の得と倶起するが如し。此の中、何が故に說かざるや。有るが說く、「應に說くべくして而も說かざるは當に知るべし此の義有餘なること

【一五】 **無色界心と倶起する欲界の無色。**

【一六】 **無色界心と倶起する色界の無色。**

【一七】 **無色界心と倶起する不繫の無色。**

【一八】聖者が世俗道にて第四靜慮の染を離るゝに、若し空無邊處の近分を以つて加行となせば其の時は無色界心なり。而してその加行道と九無間道と九解脫道とには八智を、九無間道中には七智（他心智を除く）を未來修として修するが故に、無漏智の得を起す、卽ち不繫の得が起るなり。他は之に準じて知れ。

【一九】茲に無間・解脫道を云はざるは、有頂の離染は必ず、無漏道に依るに、今は、有漏道に依ること、卽ち無色界心に住することを必要とするが故に、有頂の無間、解脫道を說かざるなり。

【二〇】入滅定の想・微細心は無色界中の何地の心なりやに就きては異說あるも、無色界心たることは皆一致する所なり。而して現在は世俗智を修するも、未來は聖道を修するが故に、不繫の得が倶起す。（婆沙百五十三、毘曇部十四、頁、三五九參照）

を」と。如是說者はいふ、「爾の時、得する所の擇滅は、不繫なりと雖も、而も得は是れ[三二]無色界繫にして、不繫に非ざるをもて、是の故に說かざるなり」と。

第二十節　三學心と俱起する無色の三學分別[三三]

【本論】[三三]諸法の學の無色が起れば、彼の法は學心と俱なりや。答ふ、諸法の學の無色が起れば、彼の法は或は學心と俱なり、或は非學非無學心と俱なり。

[三四]云何んが學心と俱なるものなりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と俱有なるとの學の無色なり。

彼の心と相應する學の無色とは、謂く學の心所法なり。彼の心と俱有なる學の無色とは、謂く彼の法の生・老・住・無常なり。

此の中にも亦、同類の得が起ること有るも、略なるが故に說かざるなり。

【本論】[三五]云何んが非學非無學心と俱なるものなりや。[三六]答ふ、非學非無學心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき、學法の得が起るが如きなり。

非學非無學心にて退するとき學法の得が起るとは、謂く阿羅漢が非想非非想處乃至初靜慮の後八品の纏を起して退する時、彼の心は不還果と及び勝果道との諸得と俱起す。若し初靜慮の上上品の纏を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き學の得と俱起するも、其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は唯、不還果の諸得とのみ俱起するなり。

諸の不還者にして若し欲界の下下・下中の二品の纏を起して退する時なれば、彼の心は一來果と及び勝果道との諸得と俱起す。若し下上品の纏を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き學の得と俱起するも、其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼

【三二】無色界の有漏道にて證する擇滅なるが故に、其の得は有漏にして不繫に非ざるなり。

【三三】本節は發智論の頌文の「四起」中の第三起に相當する段にして、學・無學・非學非無學の三心と俱起する無色は學無學・非學非無學の何れなりやを分別するをその目的とす。論述の組織は前二節と全く一致せるが故に、之を茲に掲ぐることを省略す。

【三三】以下學の無色が起れば彼の法は學心と俱なりやに就きて。

【三四】學の無色が起りて學心と俱なる場合。

【三五】學の無色が起りて非二學心と俱なる場合。

【三六】答は大正本に起とあるも答の誤植なり。

の心は唯、一來果の諸得とのみ倶起するなり。若し中下乃至上中の五品の纏を起して退する時なれば、彼の心は預流果と及び勝果道との諸得と倶起す。若し上上品の纏を起して退する時、猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き學の得と倶起するも、其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は唯、預流果の諸得とのみ倶起するなり。若し一來者が前六品の纏の隨つて何を起して退するも、彼の心は其の所應に隨つて亦、前の如き學の得と倶起す。

非學非無學心にて勝進するとき學の得が起るとは、謂く諸の學者が世俗道を以つて欲界乃至無所有處の染を離るるに、若し世俗をもて加行となせば、一切の加行・無間・解脫道の時と、及び非想非非想處の染を離るるに、若し世俗をもて加行となせば、彼の加行道の時とには、彼の心は未來所修の學法の諸得と倶起するなり。信勝解が練根して見至と作るに、若し世俗をもて加行となせば彼の加行道の時と、卽ち此の學者が、諸通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、學者の雜修靜慮の中間心の時と、學者が四無量・世俗の解脫・八勝處・十遍處を起す時と、學者が入滅定の想・微細心を起す時と、學者が不淨觀・持息念・世俗の念住を修する時とには、彼の心は未來所修の學法の諸得と倶起するなり。

【本論】[二七] 設し法にして學心と倶起するものなれば、彼の法は學の無色なりや。答ふ、諸法にして學心と倶起するものなれば、彼の法は或は學の無色、或は非學非無學の無色なり。

[二八] 云何んが學の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの學の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【二七】以下學心と倶起する法は學の無色なりやに就きて。

【二八】學心と倶起する學の無色。

【本論】[二九]云何んが非學非無學の無色なりや。答ふ、學心にて勝進するとき非學非無學法の得が起ると、及び學心に住するとき、非學非無學の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

學心にて勝進するとき非學非無學の得が起るとは、謂く、見道の三類智に住する時、彼の心は苦・集・滅の三現觀所修の世俗智品の諸得と俱起す。無漏道を以つて欲界乃至無所有處の染を離るるに若し無漏をもて加行となせば、一切の加行・無間・解脫道の時と、及び非想非非想處の染を離るゝに若し無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時とには、彼の心は未來所修の世俗道の諸得と俱起す。欲界乃至第三靜慮の染を離るる第九解脫道の時、彼の心は亦、通果心品の諸得と俱起す。[三〇]信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時、——有るが說く「及び解脫道の時」と——、彼の心は未來所修の世俗道と及び通果心品との諸得と俱起す。學者が無漏の他心智通を起す時と、學者の雜修靜慮の初後心の時と、學者が無漏の念住を起す時とには、彼の心は未來所修の世俗道と及び通果心品との諸得と俱起す。學者が無漏の解脫を起す時には、[三一]通果心を除き、前說の如き諸得と俱起す。

及び學心に住するとき乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く諸の學者にして欲・色界に生じ、色・無色の無漏定に住する時、諸根と大種とを長養し增益する彼の心は、彼の得・四相と俱起するなり。

【本論】[三二]諸法の無學の無色が起れば、彼の法は無學心と俱なりや。答ふ、諸法の無學の無色が起れば、彼の法は或は無學心と俱なり、或は非學非無學心と俱なり。

[三三]云何んが無學心と俱なるものなりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の

[二九] 學心と俱起する非二學の無色。

[三〇] 信は大正本に俱とあるも信の誤植なり。

[三一] 茲に通果心を除くは、通果心は四靜慮によりて起さるゝものなるに、無漏の解脫は下三無色なれば通果心起らざるを以つてなり。

[三二] 無學の無色が起れば彼の法は無學心と俱なりやに就きて。

[三三] 無學の無色が起りて無學心と俱なる場合。

心と倶有なるとの無學の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[三四] 云何んが非學非無學心と倶なるものなりや。答ふ、非學非無學心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき無學法の得が起るが如し。

非學非無學心にて退するとき無學の得が起るとは、謂く阿羅漢が勝根より退して劣根に住する時、彼の非學非無學心は劣根品の無學法の諸得と倶起す。

[三五]有の唯、煩惱が現前するが故にのみ退すと説く者、彼れは説く、「此の中には但、應に勝進するときのみを言ふべく、退するときを言ふべからざるなり」と。如是説者はいふ、「無覆無記心に住しても亦、退するが故に、此の中に亦、應に退するときをも説くべきなり。謂く、無覆無記心に住して堪達根より退して、安住法根に住し、乃至、思法根より退して[三六]退法根に住するなり」と。

非學非無學心にて勝進するとき無學の得が起るとは、謂く、時解脱阿羅漢が練根して不動と作るに若し世俗をもて加行となせば彼の加行道の時、彼の心は未來所修の無學法の諸得と倶起す。阿羅漢が諸通を引發する諸加行道・五無間道・二解脱道と及び世俗の他心智通の解脱道との時と、阿羅漢の雜修靜慮の中間心の時と、阿羅漢が四無量・世俗の解脱・八勝處・十遍處を起す時と、無礙解を起すと及び世俗の無礙解を增長するとの時と無諍・願智・邊際定・空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、阿羅漢が不淨觀・持息念・世俗の念住并びに入滅盡定の想・微細心を起す時とには、彼の心は未來所修の無學法の諸得と倶起するなり。

【本論】[三七] 設し法にして無學心と倶起するものなれば、彼の法は無學の無色なりや。

答ふ、諸法にして無學心と倶起するものなれば、彼の法は或は無學の無色なり、或は

[三四] 無學の無色が起りて非二學心と倶なる場合。

[三五] 特に退は唯、煩惱に依るや否やに就きて。これに二説あり。一、退は唯、煩惱にのみ依るとする説。二、無覆無記心にても退すとする如是説者の説。就中、第一説は退を位に約してのみ説かんとするものなり。之に反して如是説者は種姓の退も退といひ得との立場よりの主張なり。尙、退に關しては婆沙六十一卷(毘曇部十、頁五を見よ)。

[三六] 退する阿羅漢とは、退法・思法・護法・安住法・堪達法の五種阿羅漢をいふ。

[三七] 以下無學心と倶起する法は無學の無色なりやに就きて。

非學非無學の無色なり。

[三八] 云何んが無學の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と俱有なるとの無學の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[三九] 云何んが非學非無學の無色なりや。答ふ、無學心にて勝進するとき非學非無學法の得が起ると、及び無學心に住するとき、非學非無學の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

無學心にて勝進するとき非學非無學の得が起るとは、謂く、金剛喩定が滅して盡智が起る時、彼の心は爾の時得する所の世俗の善と、及び或は亦、通果心品との諸得と俱起す。時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに若し無漏をもて加行となせば、彼の加行道の時、彼の心は未來所修の世俗道と及び或は亦、通果心品との諸得と俱起す。最後の解脫道の時、彼の心は爾の時得する所の世俗の善と及び通果心品との諸得と俱起す。阿羅漢が無漏の他心智通を起す時と、阿羅漢の雜修靜慮の初後の心の時と、阿羅漢が色界定に依りて無漏の念住と及び無漏の無礙解とを起し增長する時とには、彼の心は未來所修の世俗道と及び通果心品との諸得と俱起す。阿羅漢が無漏の解脫を起し、及び無色定に依りて無漏の念住と幷びに無漏の無礙解とを起し增長する時には、通果心を除き、彼の心は餘の前の如き諸得と俱起す。

及び無學心に住するとき、乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く欲、色界に生ずる阿羅漢が色・無色の無漏定に住する時、諸根と大種とを長養し增益する彼の心は、彼の得・四相と俱起するなり。

【三八】無學心と俱起する無學の無色。

【三九】無學心と俱起する非二學の無色。

【本論】[四〇]諸法の非學非無學の無色が起れば、彼の法は非學非無學心と倶なりや。答ふ、諸法の非學非無學の無色が起れば、彼の法は或は非學非無學心と倶なり、或は學心と倶なり、或は無學心と倶なり。

[四一]云何んが非學非無學心と倶なるものなりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの非學非無學の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[四二]云何んが、學心と倶なるものなりや。答ふ、學心にて勝進するとき非學非無學法の得が起ると、及び學心に住するとき非學非無學の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と、生・老・住・無常との如きなり。

此は前の學心と倶起する非學非無學の無色の釋の如し。

【本論】[四三]云何んが無學心と倶なるものなりや。答ふ、無學心にて勝進するとき非學非無學法の得が起ると、及び無學心に住するとき非學非無學の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

此は前の無學心と倶起する非學非無學の無色の釋の如し。

【本論】[四四]設し法にして非學非無學心と倶起するものなれば、彼の法は非學非無學の無色なりや。答ふ、諸法にして非學非無學心と倶起するものなれば、彼の法は或は非學非無學の無色なり、或は學の無色なり、或は無學の無色なり。

[四五]云何んが非學非無學の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると彼の心と

【四〇】以下、非二學の無色が起れば彼の法は非二學心と倶なりやに就きて。

【四一】非二學の無色が起りて非二學心と倶なる場合。

【四二】非二學の無色が起りて學心と倶なる場合。

【四三】非二學の無色が起りて無學心と倶なる場合。

【四四】以下、非二學心と倶起する法は非二學の無色なりやに就きて。

【四五】非二學心と倶起する非二學の無色。

倶有なるとの非學非無學の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[四六]云何んが學の無色なりや。答ふ、非學非無學心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき、學法の得が起るが如きなり。

此は前の學の無色が起るとき非學非無學心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[四七]云何んが無學の無色なりや。答ふ、非學非無學心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき無學法の得が起るが如きなり。

此は前に無學の無色が起るとき非學非無學心と倶なるものの釋の如し。

[四八]第二十一節　三斷心と倶起する無色の三斷分別

【本論】[四九]諸法の見所斷の無色が起れば、彼の法は見所斷心と倶なりや。答ふ、諸法の見所斷の無色が起れば、彼の法は或は見所斷心と倶なり、或は修所斷心と倶なり。

[五〇]云何んが見所斷心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの見所斷の無色なり。

彼の心と相應する見所斷の無色とは、謂く見所斷の心所法なり。彼の心と倶有なる見所斷の無色とは、謂く彼の法の生・老・住・無常なり。

此の中亦、同類の得が起ること有るも、略なるが故に説かざるなり。

【本論】[五一]云何んが修所斷心と倶なりや。答ふ、修所斷心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき見所斷法の得が起るが如きなり。

修所斷心にて退し見所斷の得が起るとは、謂く、諸の異生の已に無所有處の染を離れしものが、或

【四六】非二學心と倶起する學の無色。

【四七】非二學心と倶起する無學の無色。

【四八】本節は發智論の頌文の「四起」中の最後の起に相當する段にして、見所斷・修所斷・不斷の三斷心と倶起する無色の三斷分別を論究するを其の課題とす。而してその組織は全く前三節と一致するが故に茲に掲ぐることを省略するも、脚註によりてその大綱を知るべし。

【四九】以下、見所斷の無色が起れば彼の法は見所斷心と倶なりやに就きて。

【五〇】見所斷の無色が起りて見所斷心と倶なる場合。

【五一】見所斷の無色が起りて修所斷心と倶なる場合。

は無所有處の修所斷の纏を起して退し、或は乃至欲界の修所斷の纏を起して退する時、彼の心は或は一地の見所斷法、或は乃至八地の見所斷法の諸得と倶起す。乃至已に欲界の染を離るるも未だ初靜慮の染を離れざるものが欲界の修所斷の纏を起して退する時、彼の心は一地の見所斷法の諸得と倶起す。

修所斷心にて生ずるとき見所斷の得が起るとは、謂く非想非非想處より沒して或は無所有處に生ずるとき無所有處の修所斷心を以つて結生し、或は乃至欲界に生ずとき欲界の修所斷心を以つて結生する時には、彼の心は或は一地の見所斷法或は乃至八地の見所斷法の諸得と倶起す。乃至初靜慮より沒して欲界に生ずるとき、欲界の修所斷心を以つて結生する時は、彼の心は一地の見所斷法の諸得と倶起するなり。

【本論】[五二] 設し法にして見所斷心と倶起するものなれば、彼の法は見所斷の無色なりや。答ふ、諸法にして見所斷心と倶起するものなれば、彼の法は或は見所斷の無色、或は修所斷の無色なり。

[五三] 云何んが見所斷の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの見所斷の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[五四] 云何んが修所斷の無色なりや。答ふ、見所斷心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき修所斷法の得が起ると、及び見所斷心に住するとき、修所斷の諸根を長養し大種を増益する彼の法の得と、生・老・住・無常との如きなり。

見所斷心にて退するとき修所斷の得が起るとは、謂く諸の異生の已に無所有處の染を離れしもの

【五二】以下、見所斷心と倶起する法は見所斷の無色なりやに就きて。

【五三】見所斷心と倶起する見所斷の無色。

【五四】見所斷心と倶起する修所斷の無色。

が無所有處の見所斷の纒を起して退すると、或は乃至、欲界の見所斷の纒を起して退するとの時、彼の心は一地の修所斷法或は乃至八地の修所斷法の諸得と倶起す。乃至已に欲界の染を離るるも未だ初靜慮の染を離れざるものが、欲界の見所斷の纒を起して退する時、彼の心は一地の修所斷法の諸得と倶起するなり。

見所斷心にて生ずるとき修所斷の得が起るとは、謂く、非想非非想處より歿して或は無所有處に生ずるに無所有處の見所斷心を以つて結生し、或は乃至欲界に生ずるに欲界の見所斷心を以つて結生する時、彼の心は或は一地の修所斷法或は乃至八地の修所斷法の諸得と倶起す。乃至初靜慮より歿して、欲界に生ずるに、欲界の見所斷心を以つて結生する時、彼の心は一地の修所斷法の諸得と倶起するなり。

及び見所斷心に住するとき乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く欲・色界に生じて見所斷の煩惱が現在前する時、諸根と大種とを長養し增益する彼の心は、彼の得・四相と倶起するなり。

【本論】[五五] 諸法の修所斷の無色が起れば、彼の法は修所斷心と倶なりや。答ふ、諸法の修所斷の無色が起れば、彼の法は或は修所斷心と倶なり、或は見所斷心と倶なり、或は不斷心と倶なり。

[五六] 云何んが修所斷心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの修所斷の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[五七] 云何んが見所斷心と倶なりや。答ふ、見所斷心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき修所斷法の得が起ると、及び見所斷心に住するとき修所斷の諸根を長養

【五五】以下、修所斷の無色が起れば彼の法は修所斷心と倶なりやに就きて。

【五六】修所斷の無色が起りて修所斷心と倶なる場合。

【五七】修所斷の無色が起りて見所斷心と倶なる場合。

し大種を增益する彼の法の得と、生・老・住・無常との如きなり。

此は前の見所斷心と俱起する修所斷の無色の釋の如し。

【本論】[五八]云何んが不斷心と俱なりや。答ふ、不斷心にて勝進するとき修所斷法の得が起ると、及び不斷心に住するとき修所斷の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

不斷心にて勝進するとき修所斷の得が起るとは、謂く見道の三類智に住する時、彼の心は苦・集・滅三現觀邊所修の世俗智品の諸得と俱起す。無漏道を以つて欲界乃至無所有處の染を離るるに若し無漏をもて加行と爲せば、一切の加行・無間・解脫道の時と、及び非想非非想處の染を離るるに若し無漏をもて加行と爲せば、彼の加行道の時とには、彼の心は未來所修の世俗道の諸得と俱起す。欲界乃至第三靜慮の染を離るる第九解脫道の時、彼の心は亦、通果心品の諸得とも俱起す。金剛喩定が滅して盡智が起る時、彼の心は爾の時得する所の世俗の善と及び或は亦、通果心品との諸得と俱起す。信勝解が練根して見至と作る時、若し無漏をもて加行と爲せば、彼の加行道の時、——有るが說く「及び解脫道の時」と——、彼の心は未來所修の世俗道と及び或は亦、通果心品との諸得と俱起す。時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに若し無漏をもて加行と爲せば、彼の加行道の時、彼の心は未來所修の世俗道と及び或は亦、通果心品との諸得と俱起す。最後の解脫道の時、彼の心は其の時所得の世俗の善と及び通果心品との諸得と俱起す。無漏の他心智通を起す時と、雜修靜慮の初後の心の時と、色界定に依りて無漏の念住と及び無漏の無礙解とを起し增長する時とには、彼の心は未來所修の世俗道と及び通果心品との諸得と俱起す。無漏の解脫を起すと及び無色定によりて無漏の念住幷びに無漏の無礙解を起し增長するとの時、通果心を除き、彼の心は餘の前の如き諸得と俱起す。

【五八】修所斷の無色が起りて不斷心と俱なる場合。

及び不斷心に住するとき乃至彼の法の得と生・老・住・無常となりとは、謂く欲・色界に生じ色・無色の無漏定に住する時、諸根と大種とを長養し增養する彼の心は、彼の得・四相と倶起するなり。

【本論】[五九]設し法にして修所斷心と倶起するものなれば、彼の法は修所斷の無色なりや。答ふ、諸法にして修所斷心と倶起するものなれば、彼の法は或は修所斷の無色なり、或は見所斷の無色なり、或は不斷の無色なり。

[六〇]云何んが修所斷の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有なるとの修所斷の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[六一]云何んが見所斷の無色なりや。答ふ、修所斷心にて若しくは退し、若しくは生ずるとき見所斷法の得が起るが如きなり。

此は、前の見所斷の無色が起りて修所斷心と倶なるものの釋の如し。

【本論】[六二]云何んが不斷の無色なりや。答ふ、修所斷心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき、不斷法の得が起るが如きなり。

修所斷心にて退するとき不斷の得が起るとは、謂く、阿羅漢が勝根より退して劣根に住する時、彼の[六三]修所斷心は劣根品の不斷法の諸得と倶起するなり。學が勝種姓より退して劣種姓に住するも亦、爾り。阿羅漢が非想非非想處乃至初靜慮の後八品の纒を起して退する時、彼の心は不還果と及び勝果道との諸得と倶起す。若し初靜慮の上上品の纒を起して退する[六四]時猶、能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き不斷の得と倶起するも、其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は、唯、不還果の諸得とのみ倶起するなり。諸の不還者が、[六五]若し欲界の下下・下中の二

【五九】以下、修所斷心と倶起する法は修所斷の無色なりやに就きて。

【六〇】修所斷心と倶起する修所斷の無色。

【六一】修所斷心と倶起する見所斷の無色。

【六二】修所斷心と倶起する不斷の無色。

【六三】玆の修所斷心とは無覆無記心をいふ、學・無學者は無覆無記心に住して勝種性を退することあるが故に。

【六四】時は大正本に無きも明本によりて之を補へり。下同。

【六五】若は大正本に無きも明本によりて補へり。

品の纒を起して退する時なれば、彼の心は一來果と及び勝果道との諸得と倶起す。若し下上品の纒を起して退する時、猶能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き不斷の得と倶起するも、其の加行を護ること能はざること有ものなれば、彼の心は唯、一來果の諸得とのみ倶起するなり。若し中下乃至上中の五品の纒を起して退する時なれば、彼の心は預流果と及び勝果道との諸得と倶起す。若し上上品の纒を起して退する時、猶能く加行を護るものなれば、彼の心は亦、前の如き不斷の得と倶起するも、其の加行を護ること能はざること有るものなれば、彼の心は唯、預流果のみの諸得と倶起するなり。

修所斷心にて勝進するとき不斷の得が起るとは、謂く諸の聖者が世俗道を以つて欲界乃至無所有處の染を離るるに、若し世俗をもて加行となせば、一切の加行・無間・解脱道の時と、及び非想非非想處の染を離るるに、若し世俗をもて加行となせば、彼の加行道の時とには、彼の心は未來所修の不斷法の諸得と倶起するなり。信勝解が練根して見至を作ると、及び時解脱阿羅漢が練根して不動と作るとき、若し世俗をもて加行と爲せば、彼の加行道の時、彼の心は未來所修の不斷法の所得と倶起す。若し聖者が諸通を引發する諸加行道・五無間道・二解脱と及び世俗の他心智通の解脱道との時と、雜修靜慮の中間心の時と、聖者が四無量と世俗の解脱と八勝處と十遍處とを起す時と、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、無諍と願智と邊際定と空空と無願無願と無相無相とを起し及び增長する時と、聖者が不淨觀と持息念と世俗の念住とを起す時と、入滅定の想、微細心を起す時とには、彼の心は未來所修の不斷法の諸得と倶起するなり。

【本論】六六 諸法の不斷の無色が起れば、彼の法は不斷心と倶なりや。答ふ、諸法の不斷の無色が起れば、彼の法は或は不斷心と倶なり。或は修所斷心と倶なり。

六七 云何んが不斷心と倶なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と倶有な

【六六】以下、不斷の無色が起れば彼の法は不斷心と倶なりやに就きて。

【六七】不斷の無色が起りて不斷心と倶なる場合。

るとの不斷の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[六八]云何んが修所斷心と俱なりや。答ふ、修所斷心にて若しくは退し、若しくは勝進するとき、不斷法の得が起るが如きなり。

此は前に修所斷心と俱起する不斷の無色の釋の如し。

【本論】[六九]設し法にして不斷心と俱起するものなれば、彼の法は不斷の無色なりや。答ふ、諸法にして不斷心と俱起するものなれば、彼の法は或は不斷の無色、或は修所斷の無色なり。

[七〇]云何んが不斷の無色なりや。答ふ、諸法にして彼の心と相應すると、彼の心と俱有なるとの不斷の無色なり。

義は前に釋せしが如し。

【本論】[七一]云何んが修所斷の無色なりや。答ふ、不斷心にて勝進するとき、修所斷法の得が起ると、及び不斷心に住するとき、修所斷の諸根を長養し大種を增益する彼の法の得と生・老・住・無常との如きなり。

此は前の修所斷の無色が起るとき不斷心と俱なるものの釋の如し。

[七二]第二十二節　染靜慮の支に關する論究

【本論】一切の初靜慮には皆、五支有りや。乃至廣說。

[七三]問ふ、何が故に、此の論を作すや。有るが說く『他の所說を止めんと欲するが故なり。分別論者の如し、唯、初靜慮にのみ支を建立することを許すも餘は非らず。所以は何ん。契經に依るが故な

【六八】不斷の無色が起りて修所斷心と俱なる場合。

【六九】以下、不斷心と俱起する法は不斷の無色なりやに就きて。

【七〇】不斷心と俱起する不斷の無色。

【七一】不斷心と俱起する修所斷の無色。

【七二】本節は發智論の頌文の「支」に相當するものにして、不染汚の四靜慮中に有る五支・四支が、染汚の靜慮(kliṣṭa-dhyāna)中にも有りや否やを決定せんとする段なり。先づ論題提起の理由の一として、分別論者の「初靜慮にのみ支ありて上三靜慮に支無し」との主張を破し、次いで本論に入り、最後に、染靜慮にはすべて、支無しとの有說の二種紹介せり。

【七三】分別論者が初靜慮にのみ支を建立するを破す。こは論起の因由の第一なり。

り。[七四]契經に說くが如し、「毘舍佉鄔波索迦(Viśākha upāsaka)は達磨陣那苾芻尼(Dharmadinnā bhikṣuṇī)の所に往きて問ふて言く、聖者よ、初靜慮に幾く支有りや。答へて言く、具壽よ、五支有り。謂く尋と伺と喜と樂と心一境性となり」と。彼の鄔波索迦は既に上靜慮支を問はず、彼の苾芻尼は又、說かず。故に知る上の諸靜慮には支を建立せざることをと。彼の意を遮して上の諸靜慮にも亦、支を建立することを顯はさんが爲めの故に、斯の論を作すなり』と。

[七五]問ふ、若し上の諸靜慮にも亦、支を立つとせば、何が故に、毘舍佉は問はず、苾芻尼は說かざるや。有るが說く「彼れは、疑ふものは問ふも疑はざるものは問はざるをもて、隨つて問ふものは說き、問はざるものは說かざりしなり。此れに由りて其の所以を應に責むべからざるなり」と。有るが說く「毘舍佉は彼の苾芻尼が此の事に於て能く知るとせんや不やを試さんと欲して、且らく初靜慮支を問へるに、彼れ既に滯ること無くして說けるをもて、鄔波索迦は便ち是の念を作せり、此の尊者は初靜慮に於て既に能く滯ること無くして說けるをもて、餘の靜慮に於ても必ず亦、能く知るならんと。是の故に問はざるなり。彼れ更に問はざるに由るが故に、苾芻尼も亦、復、說かざりしなり」と。有るが說く「毘舍佉は是れ利根性なるをもて、初靜慮を聞けば卽ち餘の三を知るが故に、更に問はず、苾芻尼も亦、彼れ已に悟れることを知るをもて、更に爲めに說かざりしなり」と。有るが說く「毘舍佉は是れ鈍根性なるをもて、極作意力によりて纔かに能く初靜慮を問ふも、力の更に能く餘を問ふもの無し、是の故に問はず。苾芻尼も亦、彼れは是れを齊りて能く受持するも、餘に於ては器に非ざることを知るが故に、更に說かざりしなり」と。

[七六]有餘師の說く「疑者をして決定の解を得せしめんが爲めの故に、斯の論を作るなり。謂く、彼の經は但、初靜慮に九支有ることのみを說きて、上地を說かず、又、但、支のみを說きて、染と不染とを說かざるをもて、今、上地にも亦、支有り、唯、不染汚中にのみ具有することを顯示して、諸の疑

【七四】契經とは、中阿含卷第五十八、法樂比丘尼經、(大正・一、頁七八八下)を指す。

【七五】特に、毘舍佉が上靜慮の支を問はず、苾芻尼が答へざりし理由に就きて。

【七六】不染汚の四靜慮は皆、支を具有す。こは論起の因由の第二なり。

者をして決定の解を生ぜしめんと欲するが故に、斯の論を作すなり」と。

【本論】[七七]一切の初靜慮には皆、[七八]五支有りや。答ふ、不染汚の初靜慮には五有るも、染汚のには五無し。何等が無きや。答ふ、離生喜樂無きなり。

問ふ、何が故に、染汚の喜は染靜慮に於て支と說かざるや。[七九]有るが說く「此の文は但、應に樂無しとのみ說くべし。[八〇]輕安の樂は、染中には無きを以ての故に」と。若し是の說を作せば、彼の不染の初靜慮は五支を具し、染の初靜慮には四支有るなり。有るが說く「此の文は卽ち是れ但、樂のみ無きことを說くなり。此の樂は離より生ずるに由るが故に。喜と相應するが故に、離生喜樂と名くるなり、是の故に此の文は喜無しとは言はざるなり」と。[八一]有るが說く「染靜慮中には亦、喜有りと雖も[八二]支の相無きが故に立てて支と爲さざるなり」と。若し此の說を作せば、不染の初靜慮は五支を具するも、染の初靜慮には、唯、三支のみ有るなり。

【本論】[八三]一切の第二靜慮には皆、[八四]四支有りや。答ふ、不染汚のには四有るも、染汚のには四無きなり。何等が無きや。答ふ、內等淨無きなり。

問ふ、內等淨は是れ信なり。信は染汚と不染汚とに通ずるに、何が故に染靜慮に於て支と說かざるや。有るが說く「此の文は應に樂無しと說くべきなり。輕安の樂は染中には無きを以ての故に」と。若し是の說を作せば、不染の第二靜慮は四支を具し、染の第二靜慮には三支有るなり。[八五]有るが說く「染の信を不信と名く、此は染中に於て有りと雖も、支の相無きが故に立てて支と爲さざるなり」と。若し是の說を作せば、不染の第二靜慮は四支を具するも、染の第二靜慮には唯、二支のみ有るなり。

【本論】[八六]一切の第三靜慮には皆、[八七]五支有りや。答ふ、不染汚のには五有るも、染汚

【七七】染・不染の初靜慮と支との關係。
【七八】五支とは、尋(vitarka)、伺(vicāra)、喜(saumanasya)、樂(sukha)、心一境性(cittaikāgratā)をいふ。詳しくは婆沙八十卷（毘曇部十、頁三七五）を參見すべし。
【七九】俱舍論(二八)は此の說を有餘師の說として異說の一に數へたり。
【八〇】初二靜慮の樂の體が輕安(prasrabdhi)なること婆沙八十卷に議論あり往見すべし。
【八一】俱舍論(二八)は此の染の初靜慮三支說を採用せり。
【八二】支とは、隨順の義、重擔を負ふ義、大事を成ずるの義、堅勝の義、分別の義なりと云はる。婆沙八十卷（毘曇部十、頁三七六）參照。
【八三】染・不染の第二靜慮と支との關係。
【八四】四支とは、(一)、內等淨(adhyātma-samprasāda)、(二)、喜、(三)、樂、(四)、心一境性なり。
【八五】俱舍論(二八)は、染中にありては煩惱の爲めに擾濁せらるゝが故に、內等淨無しといへり。
【八六】染・不染の第三靜慮と支との關係。
【八七】五支とは、

のには、五無きなり。何等が無きや。答ふ、正念・正知無きなり。

　問ふ、念と慧とは、皆、染汚中に通じて有るに、何が故に染靜慮の支と立てざるや。[八八]有るが説く「此の文は應に捨無しと説くべきなり、[八九]大善地法は染中に無きが故に」と。若し此の説を作せば、不染の第三靜慮は五支を倶し、染の第三靜慮には四支有るなり。[九〇]有るが説く「染の念を失念と名け、染の慧を不正知と名く。此は染中に於ては有りと雖も、支の相無きが故に立てて支と爲さざるなり」と。若し是の説を作せば、不染の第三靜慮は五支を具するも、染の第三靜慮には唯、[九一]三支のみ有るなり。

【本論】[九二]一切の第四靜慮には皆、[九三]四支有りや。答ふ、不染汚のには四有るも、染汚のには四無きなり。何等が無きや。答ふ、捨念清淨無きなり。

　問ふ、念は染汚に通ずるに、染靜慮に於て何が故に、支に非ざるや。有るが説く「此の文は但、應に捨無しとのみ説くべきなり。大善地法は染中には無きが故に」と。若し是の説を作せば、不染の第四靜慮は四支を具し、染の第四靜慮には三支有るなり。有るが説く「染の念を失念と名け、念清淨と名けず、此の染中に於ては有りと雖も、支の相無きが故に、立てて支と爲さざるなり」と。若し是の説を作せば、不染の第四靜慮は四支を具し、染の第四靜慮には唯、二支有るのみなり。

　[九四]此の中有るが是の説を作す、「諸の染靜慮には皆、支を立てず、而して唯、喜樂無し等とのみ説くは、明了の義に隨つて説くのみなり。謂く、初靜慮の離生喜樂は離生の言有るが故に、第二靜慮の内等淨は淨の言有るが故に、第三靜慮の正念・正知は正の言有るが故に、第四靜慮の捨念清淨は清淨の言有るが故、に此は皆、染に於て明了に相違するが故に、偏へに無しと説くも、而も實には、染靜慮中には一切の支は皆、あるに非ざるなり」と。有るが説く「勝る者に隨つて説くなり。謂く初靜慮は欲界の重苦を出ずるをもて利益の支勝り、上三靜慮は勝妙の離染に於て對治の支勝るをも

(一)行捨(upekṣā)、(二)正念(samyaksmṛti)、(三)正慧(samprajñā)、(四)受樂(vedanāsukha)、(五)心一境性(cittaikāgratā)をいふ。

【八八】倶舍論は此の説を有餘師の説として異説の一に數へたり。(倶舍二八)

【八九】大善地法とは、信・勤・慚・愧・無貪・無瞋・無癡・輕安・捨・不放逸・不害の十の心所をいふ。

【九〇】倶舍論は此の論を採用せり。因みに倶舍論は、正念と正慧無き理由として「彼れは染樂の爲めに迷亂せらるゝが故なり」といへり。

【九一】三は大正本に二とあるも三本宮本に從つて三と改む。

【九二】染・不染の第四靜慮と支との關係。

【九三】四支とは、(一)不苦不樂受(aduḥkhāsukha-vedanā)、(二)行捨清淨(upekṣāpariśuddha)、(三)念清淨(smṛtipariśuddha)、(四)心一境性なり。

【九四】染靜慮には支無しとの有説。

て、是の故に染靜慮に於ては勝る者に隨つて無しと說くも、然も其の餘の支も染靜慮に於ては亦、建立せざるなり」と。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十

（定蘊第七中、得納息第一之五）

[一]第二十三節　味相應の定に入出する等に關する論究

【本論】　味相應の初靜慮に入るを當に味と言ふべきや。出づるを當に味と言ふべきや。乃至廣說。

[二]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、疑者をして決定を得せしめんと欲するが故なり。謂く[三]品類足論に說く「初靜慮とは云何ん。答ふ、初靜慮所攝の善の色・受・想・行・識なり。乃至、第四靜慮とは云何ん。答ふ、第四靜慮所攝の善の色・受・想・行・識なり」と。是く如き疑――靜慮は唯、善のみなりと――を生ぜしむること勿れ。靜慮は、唯是れ、善にのみに非ざることを顯はさんと欲するが故に、斯の論を作すなり。靜慮は善と染と無覆無記とに通ずるを以つての故に。

【本論】[四]味相應の初靜慮に入るを、當に味と言ふべきや、出づるを當に味と言ふべきや。答ふ、能味に於て當に入ると言ふべく、所味に於て當に出づると言ふべきなり。乃至、味相應の非想非非想處に入るを、當に味と言ふべきや。出づるを當に味と言ふべきや。答ふ、能味に於て、當に入ると言ふべく、所味に於て當に出づると言ふべきなり。

此の中、愛を名けて味(āsvādana)と爲し、三摩地を初靜慮等と名く。即ち、愛と相應する諸の三摩地を味相應の靜慮(āsvādanasaṃprayuktadhyāna)、味相應の無色と名くるなり。

[五]問ふ、何が故に、但、愛と相應するもののみを說きて、餘の煩惱は非(しか)らざるや。答ふ、是は作論者の意欲爾るが故なり。乃至廣說。有るが說く「亦、應に餘の煩惱をも說くべきなり。謂く、應に有

【一】　本節は、發智論の頌文の「味」に相當する段にして、先づ、味相應の定とは如何なるものなりや。入出とは如何なる意味なりやを規定して、次に能味に於て入ると言ひ、所味に於て出づると言ふは如何なる意義なりやを論究し最後に愛相應の味定の外に、見・疑・慢・無明と相應する有覆無記の定のあることを論述せり。

【二】　論起の因由として、靜慮に、善・染・無覆無記の三種あることを明す。

【三】　品類足論とは、同論卷第七（大正・二六、頁七一八中）の「初靜慮云何。謂初靜慮所攝善五蘊……」の文を指す。

【四】　定の入出と味との關係に就きて

【五】　特に愛相應のみを說きて他の相應を說かざる理由

これに四種の異解あり。即ち

（一）作論者の意欲に據るとするもの

（二）これを有餘の說と見るもの

（三）愛を擧げて門となすと見るもの

（四）相似なるものを說くとするものなり。

身見と相應する初靜慮に入るを當に我・我所を取すと言ふべきや、出づるを當に我・我所を取すと言ふべきや。答ふ、能取に於て當に入ると言ふべく、所取に於て當に出づると言ふべし、廣說乃至、無明と相應する初靜慮に入るを當に愚と言ふべきや。出づるを當に愚と言ふべきや。答ふ、能愚に於て當に入ると言ふべく、所愚に於て當に出づると言ふべきなり、乃至非想非非想處を說くことも亦、是くの如し。而も是の說を作さざるは、應に知るべし此の義有餘なることを」と。有るが說く「此の中、愛を擧げて門と爲し、餘の煩惱も亦、爾ることを知らしむるなり」と。有るが說く「此の中、相似なるものを說くなり。謂く、愛と定とは相似するも餘の煩惱は非らざればなり。所以は何ん。定は所緣に於て流注し相續するに、愛も亦、是くの如ければなり。復次に、定は所緣に於て審諦して取るに、愛も亦、是くの如し。復次に、定は所緣に於て心を繫ぎて離れざるに、愛も亦、是くの如し。復次に、定は所緣に於て攝受して轉ずるに、愛も亦、是くの如し。復次に、定は能く、諸根・大種を長益するに、愛も亦、是くの如し。諸餘の煩惱には此の相無きが故に、相應を說かざるなり」と。

問ふ、[六]味は是れ愛にして靜慮[七]等に非ざるをもて、應に入ると言ふべからず、定に於て入るの言有るを以つての故に。靜慮等は是れ定にして愛に非らざるをもて、應に味と言ふべからず。愛に於て味の言有るを以つての故に。何が故に二法は更互に名を得するや。答ふ、此の二法は展轉相應するに由りて更互に名を受くるも、斯に何の過か有らん。謂く、定は愛と相應するが故に亦、味と名くべく、愛は定と相應するが故に、亦、入と名くべきなり。

[八]此の中、入出とは、入出に五種有り、一に地、二に行相、三に所緣、四に異類心、五に刹那なり。地の入出とは、謂く、初靜慮の等無間に第二靜慮が現在前する時、第二靜慮に入り、初靜慮より出づと名け、乃至無所有處の等無間に非想非非想處が現在前する時、非想非非想處に入り無所有處より出づと名くるなり。順次に入出するが如く、是くの如く逆次に入出すると、及び順・逆に超入出する

【六】　味（愛）を入とも名け、定を味とも入とも名くる所以なり。
【七】　等とは無色を等取するなり。
【八】　入出の五種に就きて
（一）地の入出
（二）行相の入出
（三）所緣の入出
（四）異類心の入出
（五）刹那の入出
因みに、玆は刹那の入出に依りて作論するなり。

も亦、爾り。行相の入出とは、謂く無常行相の等無間に苦行相が現在前する時、苦行相に入り無常行相より出づと名く。餘の行相も亦、爾り。所緣の入出とは、謂く色を緣ずる定の等無間に、受を緣ずる定が現在前する時、受を緣ずる定に入り、色を緣ずる定より出づと名く。餘を緣ずる定も亦、爾り。異類心の入出とは、謂く、欲界心の等無間に、色界或は不繫心が現在前する時、色界或は不繫心に入り欲界心より出づと名く。色界心等を說くことも亦、爾り。欲界等の心の如く、學等の心も亦、是くの如し。餘の善等の心も應に隨つて亦、爾り。剎那の入出とは、謂く、初剎那の等無間に第二剎那が現在前する時、第二剎那に入り初剎那より出づと名く。餘の剎那も亦、爾り。五の入出の中に於て、此は剎那の入出に依りて論を作すなり。

[九] 能味に於て當に入ると言ふべく、所味に於て、當に出づると言ふべきなりといふにつきて、[一〇] 有るが是の說を作す「此の中には味相應の定が流注し相續し現在前する時を說くなり。皆、前剎那を以つて所味と爲す、是れ所緣なるが故に、後剎那を能味と爲す、是れ能緣なるが故に。能味に於て當に入ると言ふべしとは、謂く後後剎那の味相應の靜慮・無色が現在前する時、能味に於て已入と名く、已起位に於て方に能味を成ずるが故に。所味に於て當に出づると言ふべしとは、謂く前前剎那の味相應の靜慮・無色が已に謝滅する時、所味に於て已出と名く。已滅位に於て方に所味を成ずるが故に」と。問ふ、愛と相應する定は能く三世を緣ずるに、何が故に、唯、過去を緣ずるをのみ說くや。有るが說く「此は多分に依りて而も說くなり。謂く有情類は法爾に多く曾て受けし所の順境を緣じて愛味を生ずるが故に」と。有るが說く「過去の定は相續中に於て已に饒益を作し、現在の定は彼れに從つて而も起るをもて追戀して愛を生ずるなり」と。有るが說く「此の中、入出する定に依りて問答を爲すなり。未來の定は未だ入出と名けず、現在の定は入と名くるも未だ出づと名けず、過去の定は、入り已りて出づると名く。今は已出位に於て味を生ずることを顯はさんと欲するが故に、但、過

【九】 **能味に於て當に入ると言ひ所味に於て當に出づると言ふに就きての解釋。** 之に二の異說あり。第一說は味相應の定の相續中に於て、後後の剎那の定を能味と云ひ、前前剎那の定を所味と云ふなり。第二說は淨定の無間に味定を起すとき、味定を能味といひ、前剎那の淨定を所味と言ふなり。然して評者は初說を善とせり。

【一〇】 第一說——

去を緣ずるをのみ說くなり」と。

[一一] 有餘師の說く「此の中、淨定の無間に味相應の定を起すことを說くなり。淨定を所味と爲す、是は所緣の故なり。味相應の定は是れ能味なり。是れ能緣なるが故に、餘は前說の如し」と。

[一二] 評して曰く、「應に知るべし、初說を善と爲すことを。此の中、入出は皆、味定に依りて論を作すが故に」と。

【本論】 諸の味相應の初靜慮は、皆、有覆無記なりや。乃至廣說。

[一三] 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、前文は唯、愛と相應する定のみを說けるをもて、今、定は亦、餘の煩惱とも相應することを顯はさんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

【本論】 [一四] 諸の味相應の初靜慮は皆、有覆無記なりや。設し有覆無記の初靜慮なれば、皆、味相應なりや。答ふ、諸の味相應の初靜慮は皆、有覆無記なるも、有るは有覆無記の初靜慮にして、味相應に非ざるものあり。謂く、愛を除く餘の煩惱が現前するものなり、乃至、諸の味相應の非想非非想處は皆、有覆無記なりや。設し有覆無記の非想非非想處なれば、皆、味相應なりや。答ふ、諸の味相應の非想非非想處は皆、有覆無記なるも、有るは有覆無記の非想非非想處にして、味相應に非ざるものあり。謂く、愛を除く餘の煩惱の現前するものなり。

此の中、味相應の靜慮・無色は皆、有覆無記なりとは、能く聖道と及び聖道の加行とを障ゆるが故に、有覆と名け、異熟果を招かざるが故に、無記と名くるなり。

餘の煩惱とは、謂く、見と疑と慢と無明となり。此の諸の煩惱は、不染汚の靜慮・無色と展轉相續して現在前し、瑜伽師をして [一五] 愛上靜慮・見上靜慮・疑上靜慮・慢上靜慮者と名けしむるなり。亦、餘の

【一一】 第二說——

【一二】 評者の說——

【一三】 論起の因由

【一四】 味相應の定と有覆無記の定との關係　味定は有覆無記なるも、有覆無記の定にして味定に非ざるものあり。即ち、見・疑・慢・無明隨眠と及び纏・隨煩惱・垢と相應する定なり。

【一五】 愛・見・疑・慢上靜慮者。

纏・隨煩惱・垢と共に相應する義が有るも、煩惱勝るが故に、但、煩惱のみを說くなり。

第二十四節　入定の次第に關する論究[一六]

【本論】頗し初靜慮に入らずして第二靜慮に入ること有りや。答ふ、入る。乃至、頗し無所有處に入らずして非想非非想處に入ること有りや。答ふ、入る。

[一七] 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、疑者をして決定を得せしめんと欲するが故なり。[一八] 品類足論に說くが如し、「初とは、謂く、次第に隨順し、相續し連合する中、數へて初と爲すが故に。復次に、次第に隨順し相續し連合して諸定に入る時、此は最初なるが故に」と。[一九] 契經中に亦說く「九次第定あり」と。或は有るが是くの如き疑を生ず、「若し初靜慮等に入らざれば、便ち第二靜慮等に入ること能はず」と。今、彼れをして決定の解――初靜慮等に入らずして亦、能く第二靜慮等に入ること――を生ぜしめんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[二〇] 頗し初靜慮に入らずして第二靜慮に入ること有りや。答ふ、入る。

云何んが入るや。謂く、未至定より或は靜慮中間、或は第二靜慮の近分、或は第二靜慮、或は第三靜慮の近分、或は第三靜慮、或は第四靜慮より、等無間に第二靜慮が現在前するなり。

[二一] 此の中、有るが說く「欲界の善心の等無間には唯、能く未至定にのみ入るなり」と。有るが說く亦、能く初靜慮にも入るなり」と。有るが說く「亦、能く靜慮中間にも入るなり」と。尊者僧伽伐蘇說きて曰く「亦、能く第二靜慮にも入るなり。超定者が、初靜慮より等無間に第二靜慮を超へて第三靜慮に入るが如く、是くの如く、亦、應に欲界の善心より等無間に初靜慮を超へて第二靜慮に入るなり」と。此は理に應ぜず。欲界の善心は定心に非ざるが故に、諸の定心と其の勢力同じと、說くことを得べからざるなり。

[二二] 頗し第二靜慮に入らずして、第三靜慮に入ること有りや。答ふ、入る。

【一六】本節は發智論の頌文の「入」に相應する段にして、入定の順序に關する問題を取扱へるもの。即ち初靜慮に入らずして第二靜慮に入るは何定より無間に入るや、乃至、無所有處定に入らずして非想非非想處定に入るは何定より無間に入るやに就きて論ずるが其の課題なり。

【一七】**論題提起の理由――初靜慮等に入らずして第二靜慮等に入り得。**

【一八】品類足論とは同論卷第七（大正・二六、頁七二〇下）の「初者謂隨ニ算數漸次順次相續次第一此最在レ初、又隨ニ入定漸次順次相續次第一此最在レ初」の文を指す。

【一九】契經とは、長阿含經卷第九、十上經（大正・一、頁五六下）長阿含十報法經卷下、（大正・一、頁二四〇上）等を指す。

【二〇】**初靜慮に入らずして第二靜慮に入る場合。**

【二一】**特に欲界の善心の等無間に入り得る定に就きて**

【二二】**第二靜慮に入らずして第三靜慮に入る場合。**

云何んが入るや。謂く、初靜慮、或は第三靜慮の近分、或は第三靜慮、或は第四靜慮の近分、或は第四靜慮、或は空無邊處よりなり。有るが說く「亦、第二靜慮の近分より等無間に第三靜慮が現在前するなり」と。

〔三三〕頗し第三靜慮に入らずして、第四靜慮に入ること有りや。答ふ、入る。

云何んが入るや。謂く、第二靜慮、或は第四靜慮の近分、或は第四靜慮、或は空無邊處の近分、或は空無邊處、或は識無邊處よりなり。有るが說く「亦、第三靜慮の近分より等無間に第四靜慮が現在前するなり」と。

〔三四〕是くの如く乃至して、頗し無所有處に入らずして非想非非想處に入るや。答ふ、入る。

云何んが入るや。謂く、識無邊處、或は非想非非想處の近分、或は非想非非想處よりなり。有るが說く「亦、無所有處の近分より等無間に非想非非想處が現在前するなり」と。

此の中、刹那を遮するも、相續を遮せず、分位を遮せず、衆同分を遮せず、無始時來を遮せざるなり。謂く此の定に入る前刹那には彼の定に入らざるも、餘の刹那には亦、曾て入らざるに非ざるが故に、相續等は此に於て遮せざるなり。

斯の理趣に由りて應に知るべし、亦、〔三五〕二を遮し三を遮し乃至七を遮すこと有ることを。謂く、〔三六〕頗し初二靜慮に入らずして第三靜慮に入ること有りや。答ふ、入る。謂く、未至定に依りて欲界乃至第二靜慮の染を離れしものが命終して第三靜慮に生じ、或は上地より歿して第三靜慮に生じて卽ち彼の第三靜慮を現在前するなり。乃至、頗し四靜慮・下三無色に入らずして非想非非想處に入ること有りや。答ふ、入る。謂く未至定に依りて欲界乃至無所有處の染を離れしものが命終して非想非非想處に生じ、卽ち彼の非想非非想處定を現在前するなり。此は刹那を遮し、乃至衆同分を遮するも、無始時來を遮せざるに依りて說くなり。其れに亦、衆同分を遮せず、或は亦、分位を遮せざる

〔三三〕第三靜慮に入らずして第四靜慮に入る場合

〔三四〕無所有處に入らずして非想非非想處に入る場合

〔三五〕二とは初二靜慮をいひ、三とは初と第二と第三との靜慮をいひ、七とは、四靜慮と下三無色とをいふ。

〔三六〕初二乃至七定に入らずして、第三乃至非想非非想處定に入る場合

の義有ることも亦、違ふこと無きこと、應に前說に准ずべきなり。

二七 第二十五節　入定せずして其の處に生ずるに就きて

【本論】 頗し初靜慮に入らずして梵世に生ずること有りや。答ふ、生ず。乃至、頗し非想非非想處に入らずして非想非非想處に生ずること有りや。答ふ、生ずるなり。

二八 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、疑者をして決定を得せしめんと欲するが故なり。契經に說くが如し「先に、此に入定して後、彼の中に生ず乃至廣說」と。或は有るが疑を生ず、「要ず彼の定に入りて方に彼れに生ずることを得るならん」と。此の疑をして決定を得せしめんと欲するが故に、彼の定に入らずと雖も亦、彼れに生ずることを得ることを顯はさんが爲めの故に、斯の論を作すなり。

問ふ、若し爾らば、經の說を當に云何んが通ずべきや。答ふ、有る諸の有情にして先に彼の定に入り、後、彼の中に生ずるものなり、有る諸の有情にして彼の定に入らずして而も亦、彼れに生ずるものあり。契經は定に入りて彼れに生ずる者を說き、阿毘達磨は、定に入らずして彼れに生ずる者を說くなり。是くの如くなれば、則ち二說は善通するなり。

二九 問ふ、若し彼の定に入らずしても亦、彼れに生ずることを得るとせば、何が故に世尊は唯、定に入りて彼處に生ずとのみを說くや。答ふ、諸の外道にして、梵天等は定を修して得するに非ずと謂ふもの有るが故に、世尊は、先に此に入定して後に方に彼れに生ずと說きて、決定して、果は因に由りて得することを信ぜしめしなり。復次に、三〇「諸の有情にして現在の少分の欲樂に耽著し、當來の離欲の勝果を樂はざるもの有り、世尊は、彼れの爲めに欲樂を毀呰し、離欲の果を讃せしとき、彼の有情は聞き已りて忻樂して所因を說かんことを請へり、故に佛は爲めに先に彼の定に入り、後、彼處に生ずと說けるなり。復次に、諸の有情にして、上界の離欲の勝果を說くを聞きて信解を生ぜざ

【二七】 本節は發智論の頌文の「生」の一部に相當するものにして、通例は、先に其の定に入れば、それが異熟因となりて、次生には其の處所に生ずるなり。されど其の處所に生ずるには必ず先に其の定に入るを要すとのみ限らず、今は斯かる特別の場合に就きて論ずるなり。即ち、先に初靜慮に入らずして梵世に生ずる場合、乃至、先に非想非非想處定に入らずして非想非非想處に生ずる場合に就きて一一論究するなり。但し、先に此の定に入らずと云ふ條件は此世に於てのみ此の定に入らずといふ意味にして、無始以來を遮するには非ざるなり。

【二八】 **論題提起の理由――先に入定せざるもその定に生ずることを得。**

【二九】 **先に定に入りて後、彼處に生ずと世尊が說きし理由に就きて。**

【三〇】 諸は大正本に說とあるもこは諸の誤植なり。

るもの有り。[三一]佛は意に、若し能く彼の根本定に入る時は現に勝樂を受くることを顯はして、彼の果は更に勝妙なることを知らしめんと欲するが故に、佛は爲めに、先に此に入定せば後、彼の中に生ずと說けるなり。復次に、瑜伽師にして能く彼の定に入り、彼れに生ずることを樂ふと雖も、而も現に入らざるもの有るが故に、佛は爲めに先に此に入定せば後、方に彼れに生ずと說くなり。復次に、瑜伽師にして欲界の苦を厭ひて離欲の樂を求むと雖も、而も離欲の法に於て懈怠して修せざるもの有るが故に、佛は爲めに先に此に入定せば後、彼處に生ずと說けるなり。

[三二]頗し初靜慮に入らずして梵世に生ずるもの有りや。答ふ、生ず。

云何んが生ずるや。謂く、未至定に依りて、欲界の染を[三三]離れ、最後の解脫道と及び後との時、初靜慮に入らず、彼れ若し未だ初靜慮の染を離れずして命終せば、必ず當に梵世に生ずべし。或は上地より歿して彼の天中に生ずるあり。

問ふ、彼の定を起さずして、云何んが彼れに生ずるや、異熟因無きが故に。答ふ、[三四]順後次受業を異熟因と爲すが故に、彼れに生ずることを得るなり。

[三五]頗し第二靜慮に入らずして極光淨に生ずること有りや。答ふ、生ず。

云何んが生ずるや。謂く、未至定・初靜慮・靜慮中間・第二靜慮の近分の隨一に依りて、初靜慮の染を離るゝも第二靜慮に入らず、彼れ若し未だ第二靜慮の染を離れずして命終せば、必ず當に極光淨に生ずべきなり。或は上地より歿して彼の天中に生ずるあり。

[三六]頗し第三靜慮に入らずして遍淨に生ずるもの有りや。答ふ、生ず。

云何んが生ずるや。謂く未至・初靜慮・靜慮中間・第二靜慮・第三靜慮の近分の隨一に依りて第二靜慮の染を離るゝも、第三靜慮に入らず、彼れ若し未だ第三靜慮の染を離れずして命終せば、必ず當に遍淨に生ずべし、或は上地より歿して彼の天中に生ずるあり。

【三一】直接、入定の未來の果報を說くときは、信解せざるものあるが故に、先づ、定に入れば現に斯くの如き勝樂を受くるなりと顯示し、次に、入定の果は更に此れよりも勝妙なることを知らしめんが爲めに、佛は、先に此に入定せば後、彼の中に生ずと說けるなりと。

【三二】**初靜慮に入らずして梵世に生ずるに就きて。**

【三三】離欲染の第九解脫道の時は、通例未至定に在るも、若し初靜慮に入らんことを願ひしものは、その時、入り得るなり。

【三四】梵世に生ずる次前の生に於て梵世に生ずる異熟因としての定を修せざるも、無始以來の生の中に梵世に生ずる因を作り置きしかば（順後次受業）これを因として生ずるなりとなり。

【三五】**第二靜慮に入らずして極光淨に生ずるに就きて。**

【三六】**第三靜慮に入らずして遍淨に生ずるに就きて。**

[三七]是くの如く乃至して頗し非想非非想處に入らずして、非想非非想處に生ずること有りや。答ふ、生ず。

云何んが生ずるや。謂く、未至定乃至無所有處の隨一に依りて無所有處の染を離るゝも未だ上染を離れず、非想非非想處に入らずして、命終せば、必ず、非想非非想處に生ずるなり。

此の中、刹那を遮し、相續を遮し、分位を遮し、衆同分を遮するも、無始時來を遮せざるなり。

[三八]第二十六節　下定を得するも上定を得せざるものの生處に就きて

【本論】 若し初靜慮を得するも第二靜慮を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。乃至廣說。

[三九]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、疑者をして決定を得せしめんと欲するが故なり。世尊の說くが如し、「苾芻よ、當に知るべし、我は、初靜慮に依りて能く諸漏を盡くし、第二靜慮乃至無所有處に依りて能く諸漏を盡くすと說くことを」と。

「唯、根本定に依りてのみ能く諸漏を盡くすも、未至等は非らざらん」と疑を生ずること有ること勿れ。此の疑をして決定を得せしめんが爲めの故に、九地に依りて皆能く漏を盡くすことを顯はすなり。謂く、七根本と未至と中間となり。[四〇]餘の近分地は、盡くすこと能はずと雖も、而も亦、能く斷ずるが故に、斯の論を作すなり。

[四一]然も得に、二種有り。一に現前の得にして二に成就の得なり。此の中、現前の得に依りて論を作すなり。

【本論】 [四二]若し初靜慮を得するも、第二靜慮を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は遍淨、或は廣果、或は空無邊處、

【三七】非想非非想處に入らずして有頂に生ずるに就きて。

【三八】本節は前節と共に發智の頌文の「生」に相應するものにして、下定を得するもその次上の定を得せざるものは命終して何處に生ずるやを明にせんとするなり。通例、その定を得せざれば命終して、その處所に生ずることを得ざるも、下定に依りて無漏道を引起し以つて上定の染を盡くせるものは、假令其の定を現前に得せずとも、命終して上に生ずることを得るなり。斯かる場合につきて一一論述するが本節の內容なり。而して其の間に於て無漏道は未至・中間・四根本・下三無色の九地にあることをも明にせんとするなり。

【三九】**論題提起の因由として九地によりて諸漏を盡すことを明す。**

【四〇】餘の近分は下地を斷ずることを得れども無漏道無きを以って一切地を盡くすこと能はざるなり。

【四一】**特に得の二種。**
(一)現前得
(二)成就得

【四二】**初靜慮を得するも第二靜慮を得せざるものゝ生處に就きて。**

或は識無邊處、或は無所有處、或は非想非非想處、或は無處なり。

謂ふ所の、現前に初靜慮を得するに非ずとは、決定して欲界の染を離るゝも、而も上地は不定なるをいふなり。中に於て若し未だ初靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して梵世に生ず。若し未至定、或は初靜慮、或は靜慮中間、或は第二靜慮の近分の隨一に依りて初靜慮の染を離れ、最後の解脫道と及び後との時に第二靜慮に入らず、未だ第二靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して極光淨に生ず。卽ち、彼れは若し未至・初靜慮・靜慮中間の隨一に依りて第二靜慮の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して遍淨に生ず。若し卽ち前三地の隨一に依りて第三靜慮の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは、命終して廣果に生ず。是くの如く、乃至若し卽ち前三地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無し。已に三界の染を離るゝが故に。

【四三】若し第二靜慮を得するも第三靜慮を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は極光淨、或は遍淨、乃至或は非想非非想處、或は無處なり。

謂ふ所の、現前に第二靜慮を得するも第三靜慮を得するに非ずとは、決定して初靜慮の染を離るゝも而も上地は不定なるをいふなり。中に於て、若し未だ第二靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して極光淨に生ず。若し未至・初靜慮・靜慮中間・第二靜慮・第三靜慮の近分の隨一に依りて第二靜慮を離るゝも、第三靜慮に入らず、第三靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して遍淨に生ず。卽ち彼れ若し未至・初靜慮・靜慮中間・第二靜慮の隨一に依りて第三靜慮の染を離るゝも、未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して廣果に生ず、若し卽ち前四地の隨一に依りて第四靜慮の染を離るゝも、未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して空無邊處に生ず。是くの如く乃至して、若し卽ち前四地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無し。

【四三】第二靜慮を得するも第三靜慮を得せざるものゝ生處に就きて。
因みに玆の文は、發智論が「乃至」と云ひて省略せるを婆沙論が補足せるもの。次も之に同じ。

四四若し第三靜慮を得するも第四靜慮を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は遍淨、或は廣果、乃至或は非想非非想處、或は無處なり。

謂ふ所の、現前に第三靜慮を得するも第四靜慮を得するに非ずとは、決定して已に第二靜慮の染を離るゝも、而も上地は不定なるをいふなり。中に於て、若し未だ第三靜慮の染を離れざれば、彼は命終して遍淨に生ず。若し未至定乃至第三靜慮の隨一に依りて第三靜慮の染を離るゝも、未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して廣果に生ず。若し卽ち前五地の隨一に依りて第四靜慮の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して空無邊處に生ず。是くの如く乃至して若し卽ち前五地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり。

四五若し第四靜慮を得するも空無邊處を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は廣果、乃至或は非想非非想處、或は無處なり。

謂ふ所の、現前に第四靜慮を得するも空無邊處を得するに非ずとは、決定して已に第三靜慮の染を離るゝも、而も上地は不定なるをいふなり。中に於て若し未だ第四靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して廣果に生ず。若し未至定乃至第四靜慮の隨一に依りて、第四靜慮の染を離るゝも、未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して空無邊處に生ず。若し卽ち前六地の隨一に依りて空無邊處の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して識無邊處に生ず、是くの如く乃至して、若し卽ち前六地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり。

【本論】四六若し空無邊處を得するも識無邊處を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は空無邊處、乃至或は無處なり。

謂ふ所の、現在に空無邊處を得するも識無邊處を得するに非ずとは、決定して已に第四靜慮の染を離るゝも、而も上地は不定なるをいふなり。中に於て若し未だ空無邊處の染を離れざれば、彼れ

【四四】第三靜慮を得するも第四靜慮を得せざるものゝ生處に就きて。

【四五】第四靜慮を得するも、空無邊處を得せざるものゝ生處に就きて。

【四六】空無邊處を得するも識無邊處を得せざるもの生處に就きて。

は命終して空無邊處に生ず。若し未至定乃至空無邊處の隨一に依りて、空無邊處の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して識無邊處に生ず。是くの如く乃至して若し卽ち前七地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり。

【本論】[四七]若し識無邊處を得するも無所有處を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は識無邊處、乃至、或は無處なり。

謂ふ所の、現前に識無邊處を得するも、無所有處を得するに非ずとは、決定して已に空無邊處の染を離るるも而も上地は不定なるをいふなり。中に於て若し未だ識無邊處の染を離れざれば、彼れは命終して識無邊處に生ず。若し未至定乃至識無邊處の隨一に依りて識無邊處の染を離るゝも、未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して無所有處に生ず。是くの如く、乃至して若し卽ち、前八地の隨一に依りて、非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり。

【本論】[四八]若し無所有處を得するも非想非非想處を得するに[四九]非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は無所有處、乃至或は無處なり。

謂ふ所の、現前に無所有處を得するも、非想非非想處を得するに非ずとは、決定して已に識無邊處の染を離るゝも而も上地は不定なるをいふなり。中に於て、若し未だ無所有處の染を離れざれば彼れは命終して、無所有處に生ず。若し未至定乃至無所有處の隨一に依りて無所有處の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して非想非非想處に生ず。若し卽ち前九地の隨一に依りて非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり。

[五〇]斯の理趣に由りて應に知るべし、亦、[五一]二を得し三を得し乃至七を得す――、*遮も亦、是くの如し――ことも有ることを。答への理は、異り無きが故に、具さに說かざるなり。

[五二]問ふ、若し欲界の善心を得するも、初靜慮を得するに非ざるものあるに、此の中に何が故に彼れ

【四七】識無邊處を得するも無所有處を得せざるものゝ生處に就きて。

【四八】無所有處を得するも非想非非想處を得せざるものゝ生處に就きて。

【四九】非は發智本文には之を缺く。但し、八揵度論には有り。

【五〇】初或は第二靜慮を得するも第三靜慮を得せざるものゝ等の生處に就きて。

【五一】二とは初或は第二靜慮を得するをいひ、三とは初或は第二或は第三靜慮とを得するをいひ、七とは初或は乃至無所有處を得するをいふ。

※遮も亦、是の如し、云云とは、第二靜慮を得せざるも、

は命終して何處に生ずるやを問はざるや。有るが說く『亦、應に「若し欲界の善心を得するも、初靜慮を得するに非ざれば、彼れは命終して何處に生ずるや。答ふ、或は欲界、或は梵世、乃至或は非想非非想處、或は無處なり。謂ふ所の現前に欲界の善心を得するも初靜慮を得するに非ずとは、彼れは決定して欲界に在るも而も染を離るゝことは不定なるをいふなり。謂く、彼れ若し未だ欲界の染を離れざれば命終して還た欲界に生ずるなり。若し未至定に依りて欲界の染を離るゝ最後の解脫道と及び後との時に、初靜慮に入らず未だ初靜慮の染を離れざれば、彼れは命終して梵世に生ず、卽ち、彼れ若し未至定に依りて初慮の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れを命終して極光淨に生ず、乃至若し未至定に依りて無所有處の染を離るゝも未だ上の染を離れざれば、彼れは命終して非想非非想處に生ず。若し未至定に依りて、非想非非想處の染を離るれば、彼れは命終して生ずる處無きなり」と說くべきなり。應に是の說を作すべくして而も說かざるは當に知るべし、此の義有餘なることを』と。有るが說く、「彼れは應に欲界につきて問答すべからず。此は是れ定蘊なるを以つて正しく定及び定果を問答すべきも欲界は定に非ず定果に非ざるをもて、是の故に說かざるなり」と。[五三]問ふ、初靜慮を得するも第二靜慮等を得するに非ざれば、彼れは命終して亦、欲界等に生ずることあるに、此の中、何が故に說かざるや。有るが說く、「亦、應に、彼れは一切の下地に生ずることを說くべきに而も說かざるは、當に知るべし、此の義有餘なることを」と。有るが說く「此は是れ定蘊なるをもて、正に定地に生ずることを顯はすに、若し下に生ずることを說けば、則ち欲界の不定地に生ずるの過有り。是の故に說かざるなり」と。有るが說く、「此の中には、諸定を得して死生する者を說くも、諸の下に生ずる者は、諸定を退捨するものなるをもて、是を以つて說かざるなり」と。

問ふ、諸の上に生ずる者は、命終する時に於て、亦、諸定を捨するに何が故に則ち說くや。答ふ、

(遮一)初靜慮を得せざるにあらざれば彼は命終して、何處に生ずるやの如き形式を言ふ、(但し、こは初靜慮を得するも、第二靜慮を得せざるものが何處に生ずるやの場合の如し)以下之に准じて推知すべし。

【五二】 欲界の善心を得するも初靜慮を得せざるものゝ生處に就きて問答せざる所以。

【五三】 初靜慮を得するも第二靜慮を得せざるもの等の生處中に、下地を說かざる理由に就きて。

諸の上に生ずる者は、捨する所有りと雖も、猶、勝進と名く。況んや得する所有るをや。諸の下に生ずる者は得する所有りと雖も、尙、退墮と名く、況んや捨する所有るをや。今、是の定蘊は正に勝進を顯はすをもて、是の故に說かざるなり。

五四 第二十七節　特に初靜慮乃至無所有處に依りて諸漏を盡すの經文に就きて

問ふ契經は但、「初靜慮乃至無所有處に依りて能く諸漏を盡す」とのみ說くに、云何んが靜慮中間及び未至定有りて、之に依りて漏を盡くすことを知るや。答ふ、五五世尊は說く、「三三摩地の能く諸漏を盡くす」もの有り、謂く、有尋有伺・無尋唯伺・無尋無伺なり」と。餘經に又說く「初靜慮を有尋有伺と名け、第二靜慮以上を無尋無伺と名く」と。若し靜慮中間無くんば、更に何等を說きて無尋唯伺と名くるや。此れに由りて、靜慮中間有り、之に依りて漏を盡くすことを知るなり。

五六 又、契經に說く「佛、苾芻に告ぐ、我れは唯、欲・惡・不善法を離れ、有尋有伺にして離生喜樂ある初靜慮に具足して住す等に依りて能く諸漏を盡くすとのみ說かずして、然も慧と見とに由りても亦、能く漏を盡くせばなり」と。此の經は則ち未至定有り、之れに依りて漏を盡くすことを顯はすなり。又、五七 未離欲染の聖者は未だ靜慮を得せずして而も聖諦を見る。若し未至定無くんば、何に依りて聖道を起して永く諸漏を斷じ得るや。此れに由るが故に、未至定有り、之れに依りて漏を盡くすことを知るなり。

五八 問ふ、何ぞ、卽ち初靜慮等は能く諸漏を盡くすと說かずして、而も初靜慮等に依りてと說くや。有るが說く「靜慮には先に曾て得せしもの有り。若し世尊が、初靜慮等は能く諸漏を盡くすと說けば、則ち無智者は、靜慮を得せば、皆、已に漏を盡くせりと謂ふをもて、是の故に、靜慮等に依りて無漏道を起して方に能く漏を盡くすと說くなり」と。有るが說く「諸定は唯、是れ奢摩他(śamatha 止)のみなるに、要ず毘鉢舍那(vipaśyanā 觀)が、方に能く漏を盡くすが故に定に依ると說くなり。應

【五四】前節の「論題提起の因由」の所に引用されし「初靜慮乃至無所有處に依りて能く諸漏を盡す」の經文に依れば、未至定と靜慮中間とには無漏道無きが如くに見ゆるを以つて、本節は、未至・中間の存在、及びその二定にも無漏道の在ることを論證し、次に、「靜慮等に依りて漏を盡す」と說きて靜慮等は漏を盡すと說かざる理由に述べ、最後に、非想非非想處にも無漏道有りと說くかの如く見ゆる經文の會釋をなして、非想非非想處には無漏道なきことを明す段なり。要之、本節は、未至・中間・四根本・下三無色の九地にのみ無漏道あり、之によりて能く煩惱を斷盡することを明すをその目的となすなり。

【五五】靜慮中間存在の經證。

【五六】未至定存在の經證。

【五七】未至定存在の理證。

【五八】靜慮に依りて漏を盡くすと說く理由。これは靜慮は能く漏を盡くすと說かずして靜慮に依りて漏を盡くすと說ける理由を明かにせんとするなり。

に慧を起すことを須ふべければなり」と。

有るが説く「諸定は多く是れ會得なるをもて、戀著して進んで修することを欲せざることを有ること勿れの故に、之に依りて進んで勝道を求め、應に著を生ずべからずと説くなり」と。

[五九]問ふ、契經に説くが如し「非想非非想處と倶行して[六〇]念等覺支を修す」と。餘經に復、説く「[六一]乃至想定に能く正に通達せば、能く聖旨を辯ず」と。前經にも亦、説く「初靜慮乃至無所有處に依りて能く諸漏を盡くす」と。是くの如き二説は豈、相違せざらんや。答ふ、初經は能く引發することを説き、後の二經は卽ち彼れに依ることを説くなり。又、初經は方便を説き、後の二經は成滿を説くなり。

問ふ、若し爾らば、何が故に、倶行と説くや。答ふ、前後の義に於ても、倶の聲が亦、轉ずるなり。

[六二]世尊の説くが如し「曼駄多王(Māndhātṛ 頂生)は、此の想を起すと倶に卽ち墮落せり」と。又、經に復、説く「此の想を起すと倶に彼の有情は卽便ち殞歿す」と。又、[六三]餘經に説く「毘摩質多羅王(Vem-acitra)は此の心を起すと倶に尋いで自身の五繫に繫せらるゝを見る」と。此は皆、前後に而も倶の聲を説くなり。覺支を修すとの經も應に知るべし亦、爾ることを。

[六四]第二十八節　特に、定を因と爲す法と定の果との關係に就きて

[六五]問ふ、若し法にして初靜慮を因と爲すものなれば、彼の法は是れ初靜慮の果なりや。設し法にして是れ初靜慮の果なれば、彼の法は初靜慮を因と[六六]爲すや。答ふ、諸法にして初靜慮を因と爲すものなれば、彼の法は是れ初靜慮の果なり。有る法は是れ初靜慮の果なるも、彼の法は初靜慮を因と爲すに非ざるものあり。謂く、[六七]三界の結の斷と、及び初靜慮の果の[六八]欲界の通果心品となり。

乃至第四靜慮につきても亦、應に此の問答を作すべきなり。

無色定に於ては、唯、應に、結斷のみを説くべきなり。

[六九]第二十九節　特に、定地の心の捨・得と滅・起等に關する論究

【五九】　非想非非想處に無漏道の存在を許すが如き經文とその會通。茲に引用さるゝ「非想非非想處と倶行して念等覺支を修す」及び「乃至想定に能く正に通達せば聖旨を辯ず」の經文に依れば、有頂にも無漏道あるが如く見ゆ。然るに「初靜慮乃至無所有處に依りて諸漏を盡くす」の經文よりせば有頂には無漏道無き筈なり、この矛盾を如何に解すべきやは茲に此の論ある所以なり。

【六〇】　念等覺支(smṛti saṃbodhyaṅga)は七覺支の一にして唯無漏なり、故に此の經文に依れば非想非非想處にも無漏道あるが如く見ゆるなり。

【六一】　乃至想定とは、「未至より非想非々想處」を略述せるものなり。

【六二】　こは佛説頂生王故事經(大正・一、頁八二三下)を指す。頂生王(曼駄多王)は天帝釋の坐所の勝妙にして玉女の侍するを見、帝釋を追ひ出して自分にて此の處を領せんとの念を起せり、而してその念を起せし時、卽ち閻浮利に墮せりと云はる。

【六三】　餘經とは雜阿含經卷第四十三、(大正・二、頁三一二上、中)を指す。毘摩質多羅王は阿修羅群を率

七〇 問ふ、諸の初靜慮地の心を捨して第二靜慮地の心を得するものは皆、初靜慮地の心を滅し、第二靜慮地の心を起すや。答ふ、應に四句を作すべし。第一句は、謂く、未至定・或は靜慮中間、或は第二靜慮の近分に依りて梵世の染を離るゝも根本地に入らざる爾の時には、初靜慮地の染汚心を捨して第二靜慮地の不染汚心を得するも、[七一]而も、彼れを滅し此れを起するには非ざるなり。第二句は、謂く、[七二]離染に非ずして次第に入定する時なり。第三句は、謂く[七三]初靜慮より歿して第二靜慮に生ずる時なり。第四句は、謂く前相を除くものなり。

七四 問ふ、諸の第二靜慮地の心を捨して初靜慮地の心を得するものは皆、第二靜慮地の心を滅して初靜慮地の心を起すや。答ふ、應に四句を作すべし。[七五]第一句は、謂く、欲界の纒を起して第二靜慮より退する時なり。[七六]第二句は、逆の次第にて入定する時なり。第三句は、謂く、第二靜慮より沒して初靜慮に生ずる時なり。第四句は、謂く前相を除くものなり。

七七 問ふ、諸の初靜慮の煩惱を捨するもの、彼れは、第二靜慮地の善法を得するや。答ふ、應に四句を作すべきなり。[七八]第一句は、謂く、未至定或は初靜慮・靜慮中間に依りて見道に入る四心の頃なり。第二句は、謂く、[七九]第二・第三・第四靜慮に依りて見道に入る時と、及び聖者が[八〇]上七地の染を離るゝ時となり。第三句は、謂く[八一]初靜慮の染を離るゝ時なり。第四句は、謂く前相を除くものなり。

八二 問ふ、諸の第二靜慮地の功德を捨するもの彼れは初靜慮地の煩惱を得するや。答ふ、應に四句を作すべきなり。第一句は、謂く、[八三]上地の對治と及び、上地所修との第二靜慮地の功德とを退する時なり。[八四]第二句は、謂く上地より歿して欲界及び梵世に生ずる時なり。[八五]第三句は、謂く極光淨より歿して欲界及び梵世に生ずる時と、及び下地の煩惱を起して第二靜慮より退する時となり。第四句は、謂く、前相を除くものなり。

ひて天帝釋と戰ひしに敗れて、捕えられ五欲の五繋を以て縛せられて天宮殿上に置かる。毘摩質多羅王、阿修羅宮に歸らんとの念を作せば、即ち身の五繋に縛せらるゝを見、天宮に住せんとの念を作せば即ち身の五縛の解せるを見ると云はる。

【六四】本節は定を因と爲すものは、其の定の果なるも、定の果にして其の定を因と爲さざるものあるを以つて、定を因と爲す法と、定の果との關係を明にせんとしたる段なり。

【六五】**初靜慮を因と爲す法と初靜慮の果との關係。**

【六六】大正本には爲は無とあるも爲の誤植なり。

【六七】初靜慮に依りて無漏道を引起して、三界の結を斷ぜし場合、三果の結斷は初靜慮地の無漏道に依りて得せられたる離繋果なるを以つて、其の點に於て初靜慮の果と云ひ得るも、結斷・即ち離繋果は擇滅無爲なるが故に、有漏法たる初靜慮を因とは爲さざるなり。

【六八】初靜慮の果たる欲界の通果心は初靜慮を修して得たるものなるが故に初靜慮の果と言ふべきなれど、それは欲界繋なるに、初靜慮は色界繋或は不繫なれば、上は下の因とならざるが故に、欲界の通果

餘の定に於ては、其の所應に隨つて亦、應に此の問答分別を作すべきなり。

【六九】本節は下地の心を捨して次上地の心を得するとき、下地の心を滅して次上地の心を起すや否や。及びその逆の上地の心を捨して次下地の心を得するとき、上地の心を滅して次下地の心を起すや否やに關する問題を、四句分別に依りて明し、次に下地の煩惱を捨せば次上地の善法を得するや否や、及び上地の功德を捨すときは次下地の煩惱を得するや否やに關する問題を同じく四句分別によりて明にせんとしたる段なり。

【七〇】**初二靜慮心の捨・得と滅・起とに關する四句分別。**

【七一】滅せし心は未至、或は中間・或は第二靜慮の近分の心にして初靜慮には非ず、又、第二靜慮の不染汚心を得せりと雖も、そは未來修として得せしものなるが故に未だ現起せざるなり。

【七二】離染に非ざるが故に下地を捨せず、從つて上地を得すること無し。

次第に入定するが故に下地の心を滅し、上地の心を現起するなり。

【七三】初靜慮より沒するが故に初靜慮の有漏心を捨し、又滅す。

第二靜慮に生ずるが故に第二靜慮心を得し又現起するなり。

【七四】**第二と初との靜慮地の心の捨・得と滅・起とに關する四句分別。**

【七五】欲界の纏を起して第二靜慮より退するときは、第二靜慮の心を捨し、初靜慮の見・修所斷心（聖者なれば唯修所斷心）を得し、第二靜慮の心を滅するも初靜慮の心を起さずして欲界心を起すなり。

【七六】第二靜慮より初靜慮に入る場合は第二靜慮を滅し初靜慮心を起すも、第二靜慮心を捨せず、初靜慮を得せざるなり。離染に非ざるが故に。

【七七】**初靜慮の煩惱の捨と第二靜慮の善法の得とに關する四句分別。**

【七八】未至・初靜慮、靜慮中間によりて見道に入り、苦類智忍・集類智忍・滅類智忍・道類智忍の四心の頃には初靜慮の見所斷の煩惱を捨するも、未だ初靜慮の染を全離せざるが故に第二靜慮の善法を得せざるなり。

【七九】第二・三・四靜慮に依りて見道に入る者は既に初靜慮の染を離れしものなるが故に、初靜慮の煩惱を再び捨すること無し。而も見道に入る時は自地の見道と、自と下地との世俗智とを未來修として得するが故に（倶舍二六）、今は第二靜慮乃至第四靜慮の世俗智を得することを得るなり。

【八〇】茲に上七地とは上三靜慮と四無色との七地をいひ、此の七地の染を離るゝ時に於ては、初靜慮の煩惱を捨するに非ず、こは既に捨せしが故に。されど七地の各地の染を離るゝ時、その離染せし地と下地との無漏のを修するが故に第二靜慮の善法を得すと云ひ得るなり（倶舍二六）

心は初靜慮を因と爲さざるなり。

【八一】初は大正本に無きも三本宮本によりて補へり。

【八二】**第二靜慮の功德の捨と初靜慮の煩惱の得とに關する四句分別。**

【八三】上地の對治道と及び上地所修との第二靜慮地の功德を退するが故に、第二靜慮地の功德を捨するも、下地に生ずるにも非ず、下地の煩惱を起して退するにも非ざるが故に、初靜慮の煩惱を得せざるなり。

【八四】第三靜慮以上の地より沒するが故にその地の善法を捨するも、第二靜慮のは非ず、既に上地に生ずる時に捨せるが故に。又、欲界、或は梵世に生ずるが故に、初靜慮の煩惱を得するなり。

【八五】極光淨より沒するが故に、或は第二靜慮より退するが故に、第二靜慮の善法を捨し、又、欲界或は梵世に生ずるが故に、或は下地の纏を起すが故に、初靜慮の煩惱を得するなり。

卷の第百六十二（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、得納息、第一之六）

第三十節　四無量と及びその等無間緣との行相に就きて[一]

【本論】[二]何等を思惟して、慈定に入るや。答ふ、有情に樂を與ふることなり。何等を思惟して、非定に入るや。答ふ、有情の苦を拔くことなり。何等を思惟して、喜定に入るや。答ふ、諸の有情を慶ばすことなり。何等を思惟して、捨定に入るや。答ふ、有情に於て捨することなり。

[三]問ふ、此の中には等無間緣の行相を說くとせんや、慈等と倶生する行相を說くとせんや。若し等無間緣の行相を說くとせば、慈等の現前する時、復、何の行相ありや。若し慈等と倶生する行相を說くとせば、何が故に是の說「何等を思惟して慈定に入るや乃至廣說」を作すや。有るが說く「此の中には、等無間緣の行相を說くなり」と。問ふ、若し爾らば、慈等が現前するとき、復、何等の行相ありや。答ふ、即ち是くの如き四種の行相を作すなり。謂く、有情に樂を與ふること乃至、有情に於て捨することなり」と。有るが說く、「此は、慈等と倶生する行相を說くなり」と。問ふ、若し爾らば、何が故に、是の說「何等を思惟して慈定に入るや、乃至廣說」を作すや。答ふ、此の中には已入に於て入の名を說き近に於て遠の聲を說くなり。說くが如し「大王よ、何處より來るや」と。此は、已來に於て來と名くるなり。說くが如し、「空三摩地に依りて[四]正決定に入るなり」と。此は亦、已入を入と名くるなり。所以は何ん。世第一法は空三摩地と相應するに非ざるが故に。說くが如し「[五]正性離生に入りて、現觀邊の世俗智を得す」と。此は亦、已入を入と名くるなり。所

【一】本節は發智論の頌文の「無量」に相應する段にして、靜慮の功德たる四無量の行相及び四無量の等無間緣の行相を明にせんとするもの。因みに、四無量に關しては婆沙八十一卷（毘曇部十一、頁一以下）を參照せよ。

【二】四無量の行相。

【三】本論は、四無量の行相を說くや、或は其の等無間緣の行相を說くやに就きて。

【四】正決定（samyaktvani-yāma）とは正性離生とも云ひ、見道の位なり。精しくは婆沙三卷（毘曇部七、頁五三）を見よ。

【五】「正性離生に入りて云々」といへば、見道初位即ち初刹那に、已に、現觀邊の世俗智を得すとも解せらるゝも、而も事實は、正性離生に入りて少くとも第三刹那、（苦類智忍）以後に於て得するなり。從つて、茲に「正性離生に入りて」とは、少くとも「既に第三刹那以前に入りをりて後」の意なりとなり。

以は何ん。[六]三類智忍の時、方に彼の智を得するが故に。說くが如し「樂受を受くる時、如實に我れは樂受を受くと知る」と。此は亦、已受を說きて受と名くるなり。所以は何ん、自から知るときには現在受くること有ること無きが故に。說くが如し「樂を斷じ、苦を斷じ先に喜と憂とを沒し、不苦不樂にして捨・念淸淨となり、第四靜慮に入り具足して住す」と。此は亦、已斷を斷と名くるなり。所以は何ん。欲界の染を離るる時、已に苦根を斷ぜるが故に。說くが如し「阿羅漢は、欲漏を心解脫し、有漏・無明漏を心解脫す」と。此は亦、已解脫を解脫と名くるなり、所以は何ん。欲界の染を離るる時、已に欲漏を解脫せるが故に。此の中も亦、爾り。已入を入と名く。是の故に過無きなり。

[七]問ふ、慈無量等の等無間緣は亦、但、此の如き行相のみを作すとせんや。更に餘の行相をも作すとせんや。答ふ、初修業者は唯、是くの如き四種の行相のみを作して能く慈等を引くも、若し已に、成滿せるものなれば、其の所欲に隨つて亦、所餘の苦等の行相を作して慈等を引生す。慈等の起る時には、唯、前の如き四種の行相のみを作すなり。

[八]第三十一節　無量・淨定・解脫・勝處・遍處の斷結に就きて

【本論】[九]慈は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。悲・喜・捨は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。

[一〇]問ふ、何が故に、四無量は煩惱を斷ぜざるや。答ふ。行相異なるが故なり。謂く、[一一]十九行相は能く煩惱を斷ずるに、無量は彼の行相に非ざればなり。四行相は是れ無量にして、煩惱を斷ずるは、此の行相を以つてせざるが故なり。復次に、無量は是れ[一二]勝解作意なるに、唯、眞實の作意のみが能く煩惱を斷ずればなり。復次に、無量は是れ增益の作意なるに、唯、不增益の作意のみが、能く煩惱を斷ずればなり。復次に、無量は唯、現在のみを緣ずるに、要ず、三世或は無爲を緣ずる道が、

【六】　三類智忍とは苦・集・滅の三類智忍をいふ。但し、一般には觀邊の世俗智は、苦・集・滅類智の後邊に得すと稱せらるゝも、三類智忍の時、方に彼の智を得すとは稱せず（婆沙百〇七卷毘曇部十二、頁五三、及び、倶舍廿六卷參照）玆の婆沙文は「此は慈等倶生の行相を說く」と主張する有人の說なり。

【七】　四無量の等無間緣の行相に就きて。

【八】　本節は發智論の頌文の「斷結」の一部に相當するものにして、卽ち淨定及び定の功德たる四無量・八解脫・八勝處・十遍處の各々が結を斷ずるや否やに就きて論究する段なり。無漏道には下と自と上との地を能く斷ずるものあるも、有漏道にては近分定のみが下を斷じ、根本定は、自と上との地を斷ずる能力なきなり。又、加無間道のみが煩惱を斷じ、加行道・解脫道・勝進道は煩惱を斷ずること能はざるなり。此れに依つて、四無量乃至十遍處中、能く煩惱を斷じ得るは無漏の下三無色解脫にして無間道所攝のもののみが煩惱を斷ずるなり。

【九】　四無量は結を斷ぜず。

【一〇】　四無量が煩惱を斷ぜざる理由。

能く煩惱を斷ずればなり。復次に、無量は有情を緣ずるに、要ず法の想が能く煩惱を斷ずればなり。復次に、無量は[一三]一分の境を緣ずるに、一分の境を緣ずる道は、能く煩惱を斷ずるに非ざればなり。復次に、無間道は能く煩惱を斷ずるに、無量は是れ解脫道の時、得するが故なり。

[一四]問ふ、若し無量が煩惱を斷ずること能はざれば、經の說を云何んが通ずるや。經に說くが如し、「慈を若しくは習し、若しくは修し、若しくは多く修習せば、則ち能く瞋を斷ず。悲を若しくは習し、若しくは修し、若しくは多く修習せば、則ち能く害を斷ず。喜を若しくは習し、若しくは修し、若しくは多く修習せば、能く不樂を斷じ、捨を若しくは習し、若しくは修し、若しくは多く習修せば、能く貪と恚とを斷ず」と。答ふ、斷に二種有り。一は暫時斷にして、二は究竟斷なり。契經は暫時斷を說き、此の阿毘達磨は究竟斷を遮するなり。是くの如ければ則ち二說は善通す。暫時斷と究竟斷との如く、是くの如く、有餘斷と無餘斷、有影斷と無影斷、有隨縛斷と無隨縛斷、摧枝葉斷と拔根本斷、制伏纏斷と害隨眠斷とも應に知るべし、亦、爾ることを。

【本論】[一五]淨の初靜慮は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。乃至淨の非想非非想處は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。

此の中、淨の初靜慮等とは、根本地を謂ひ、近分に非ざるなり。

[一六]問ふ、何が故に、淨の初靜慮等は煩惱を斷ぜざるや。答ふ、下地の煩惱は、應に斷ずべき所なりと雖も、而も[一七]彼れを斷じて已りて此れが方に現前するをもて、復、斷ずべきもの無きなり。自地の煩惱は現に得べしと雖も、所對治に非ず、力の能く斷ずるもの無ければなり。上に於けるも亦、然り。故に煩惱を斷ぜざるなり。

[一八]問ふ、上を斷ずること能はざること、是の義は爾るべし。何が故に、自地を斷ずること能はざるや。答ふ、自地の煩惱に繫縛せらるるが故なり。人は縛せらるれば自から解すること能はざるが如

【一一】十九行相とは、苦・空・非常・非我・因・集・生・緣・滅・靜・妙・離・道・如・行・出・麁・苦・障の十九をいふ。

【一二】勝解作意(adhimukti-manaskāra)とは、對象に於いて繫せられず、礙へられず、無礙自在に轉ずる作意にして、不淨觀・四無量・有色解脫・勝處・遍處等の觀に相應する作意なり。而して、無量が此の作意と相應するは、無量は假想觀なるが故なり。

【一三】一分の境とは無量は欲界の有情のみを緣じ、他を緣ぜざるをいふ。

【一四】四無量を修して煩惱を斷ずとの經文の會通。これに關しては婆沙八十三卷、(毘曇部十一、頁二六)を參照せよ。

【一五】淨定は結を斷ぜず。

【一六】淨定が煩惱を斷ぜざる理由。

【一七】下地の煩惱を斷ずるは上地の近分定なり。

【一八】特に淨定が自地の煩惱を斷ずること能はざる理由。

し。又、自地の諸の煩惱等と、同一縛なるが故に、力の彼れに勝るもの無ければなり。又、自地の愛が親愛する所なるが故なり。人が親友を劣ると雖も捨せざるが如し。又、自地の煩惱に淩雜せらるるが故なり。謂く、展轉して無間に而も現在前するが故に、斷ずること能はざるなり。又、自地の善法は、自地の煩惱と相忌難せざること、猶し夫妻の如く、又、旃荼羅子と長者子とが交れば相敬憚せざるが如くなるが故に、斷ずること能はざるなり。又、無間道は能く煩惱を斷ずるに、淨の根本地は無間道に非ざるが故に、斷ずること能はざるなり。又、顧る所無ければ、乃ち能く之を斷ずるも、自地の法に於ては顧る所無きに非ざるが故に、斷ずること能はざるなり。

[一九] 問ふ、何が故に、有漏道は自地及び上地を斷ずること能はざるに、無漏道は則ち能く斷ずるや。答ふ、無漏道は是れ不繫法なるを以つて、有漏法に於て是れ勝なるに非ざること無し、是の故に能く斷ずるなり。又、有漏道は六行相と作りて下地を厭ひ、自地を欣ぶが故に、下のみを斷ずるも、無漏道は十六行相と作りて一切地を厭背するが故に、能く遍く斷ずるなり。

問ふ、有漏道も亦、十六行相と作るに、何が故に、遍く斷ずること能はざるや。答ふ、彼れは、聖道の行相と作ることを學ぶと雖も、明了ならざるが故に、煩惱を斷ぜざること、師子の子が未だ獸を害すること能はざるが如し。

【本論】[二〇] 初と第二と第三との解脱は、何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。

[二一] 問ふ、何が故に、此の三は煩惱を斷ぜざるや。答ふ、行相異るが故なり。謂く、若し此の行相を以つて煩惱を斷ずれば、此の[二二]行相を以つて前三解脱と作さず。若し此の行相を以つて前三解脱と作せば、此の行相を以つて煩惱を斷ぜざるなり。又、前三解脱は是れ勝解作意なるに、唯、眞實の作意のみが能く煩惱を斷ずればなり。又、前三解脱は是れ增益の作意なるに、唯、不增益の作意のみが能く煩惱を斷ずればなり。又、前三解脱は自相の境のみを緣ずるに、唯、共相を境とする道のみ

【一九】特に無漏道が自地・上地の煩惱を斷じ得る理由。

【二〇】前三解脱は結を斷ぜず。

【二一】特に前三解脱が煩惱を斷ぜざる理由。

【二二】初二解脱は不淨行相と作り、第三解脱は淨行相と作る。

が、能く煩惱を斷ずればなり。又、前三解脫は唯、現在のみを緣ずるに、要ず三世或は無爲を緣ずる道のみが、能く煩惱を斷ずればなり。又、前三解脫は唯、[二三]一蘊の少分のみを緣ずるに、要ず、五蘊・四蘊或は非蘊を緣ずる道が能く煩惱を斷ずればなり。又、前三解脫は一分の境を緣ずるに、一分の境を緣ずるものは能く煩惱を斷ずるに非ざればなり。又、無間道は能く煩惱を斷ずるに、前三解脫は解脫道の時、得するが故なり。

【本論】[二四]空無邊處解脫は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は空無邊處、或は識無邊處、或は無所有處、或は非想非非想處の繫の結を斷じ、或は斷ずること無きなり。

或は空無邊處の繫の結を斷ずとは、空無邊處解脫に依りて空無邊處の染を離るる諸の無間道が空無邊處繫の結を斷ずるを謂ふなり。乃至或は非想非非想處のを斷ずとは、空無邊處解脫に依りて非想非非想處の染を離るる諸の無間道が非想非非想處繫の結を斷ずるを謂ふなり。或は斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脫・勝進道行攝の空無邊處解脫と及び世俗の空無邊處解脫とが結を斷ずること無きを謂ふなり。

【本論】[二五]識無邊處解脫は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は識無邊處、或は無所有處、或は非想非非想處のを斷じ或は斷ずること無きなり。

或は識無邊處のを斷ずとは、識無邊處解脫に依りて識無邊處の染を離るる諸の無間道が識無邊處の結を斷ずるを謂ふなり。乃至、或は非想非非想處のを斷ずとは、識無邊處解脫に依りて非想非非想處の染を離るる諸の無間道が非想非非想處の結を斷ずるを謂ふなり。或ひは斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脫・勝進道所攝の識無邊處解脫と及び世俗の識無邊處解脫とが結を斷ずること無きを謂ふなり。

【二三】一蘊の少分を緣ずとは初の三解脫は欲界の色蘊のみを緣ずるをいふ。

【二四】空無邊處解脫の斷結に就きて。因みに下三無色解脫は有漏無漏に通じ、其の無漏の中の無間道の攝のもののみが結を斷ずることを得るなり。

【二五】識無邊處解脫の斷結に就きて。

【本論】[二六]無所有處解脫は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は無所有處、或は非想非非想處のを斷じ、或は斷ずること無きなり。

或は無所有處のを斷ずとは、無所有處解脫に依りて無所有處の染を離るる諸の無間道が無所有處の結を斷ずるを謂ふなり。或は非想非非想處のを斷ずとは、無所有處解脫に依りて非想非非想處の染を離るる諸の無間道が非想非非想處の結を斷ずるを謂ふなり。或は斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脫・勝進道所攝の無所有處解脫と及び世俗の無所有處解脫とが結を斷ずること無きを謂ふなり。

【本論】[二七]非想非非想處解脫と滅受想解脫とは、何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無きなり。

非想非非想處には無漏無きを以っての故になり。

【本論】[二八]初勝處は、何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無し。乃至、第八勝處は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無きなり。

此の中、所以は前三解脫の說の如し。

【本論】[二九]初遍處は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無きなり。乃至第十遍處は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無きなり。

此の中、前の八は八勝處の如く、後の二は應に隨つて亦、前說の如し。

第三十二節[三〇]　八智及び三三摩地の斷結に就きて

【本論】[三一]法智は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は欲界、或は色界、或は無色界のを斷じ、或は斷ずること無きなり。

【二六】無所有處解脫の斷結に就きて。

【二七】後二解脫は結を斷ぜず。

【二八】八勝處は結を斷ぜず。因みに八勝處は、皆勝解作意なるが故に、結を斷ずること能はざるなり。

【二九】十遍處は結を斷ぜず。因みに十遍處は皆勝解作意なるが故に結を斷ずること能はざるなり。

【三〇】本節は發智論の頌文の「斷結」の一部に相應するものにして、法智・類智・四諦智・他心智・世俗智の八智と空・無相・無願の三三摩地との各各が何繫の結を斷ずるやを明にせる段なり。

【三一】法智の斷結に就きて。

或は欲界のを斷ずとは、四法智の隨一が現前して欲界の染を離るる諸の無間道が欲界の結を斷ずるを謂ふなり。或は色界、或は無色界のを斷ずとは、滅・道法智の隨一が現前して色界・或は無色界の染を離るる諸の無間道が色界或は無色界の結を斷ずるを謂ふなり。或は斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脱・勝進道所攝の法智が結を斷ずること無きを謂ふなり。

【本論】[三二]類智は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は色界、或は無色界のを斷じ、或は斷ずること無きなり。

或は色界、或は無色界のを斷ずとは、四類智の隨一が現前して、色界、或は無色界の染を離るる諸の無間道が色界或は無色界の結を斷ずるを謂ひ、或は斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脱・勝進道所攝の類智が結を斷ずること無きを謂ふなり。

【本論】[三三]他心智は何繫の結を斷ずるや。答ふ、斷ずること無きなり。

[三四]問ふ、何が故に、他心智は、煩惱を斷ぜざるや、有るが說く「他心智は一物を緣じて境と爲すに、一物を緣ずる道は、能く煩惱を斷ずるに非ざればなり」と。有るが說く「他心智は自相の境を緣ずるに、唯、共相の境を緣ずる道のみが、能く煩惱を斷ずればなり」と。有るが說く「他心智は現在を緣ずるに、要ず三世、或は無爲を緣ずる道が能く煩惱を斷ずればなり」と。有るが說く「他心智は但、心心所法のみを緣じて境と爲すに、要ず、四蘊、或は五蘊、或は無爲を緣ずる道が能く煩惱を斷ずればなり」と。有るが說く「他心智は唯、他の相續のみを緣じて境と爲すに、要ず、自他の相續、或は非相續の境を緣ずる道が能く煩惱を斷ずればなり」と。有るが說く無間道は煩惱を斷ずるに、他心智は解脱道の時、得するが故なり」と。

【本論】[三五]世俗智は何繫の結を斷ずるや。答ふ、或は欲界、或は色界、或は無色界の

【三二】類智の斷結に就きて。

【三三】他心智は結を斷ぜず。

【三四】特に他心智が煩惱を斷ぜざる理由に就きて。

【三五】世俗智の斷結に就きて。

を斷じ、或は斷ずること無きなり。

或は欲界のを斷ずとは、欲界の染を離るる世俗の無間道が欲界の結を斷ずるを謂ひ、或は色界のを斷ずとは、色界の染を離るる世俗の無間道が色界の結を斷ずるを謂ひ、或は無色界のを斷ずとは、下三無色の染を離るる世俗の無間道が下三無色の結を斷ずるを謂ひ、或は斷ずること無きなりとは、此は諸の加行・解脫・勝進道所攝の世俗智と及び餘の欲界の善の世俗智と諸の根本地の善の世俗智と并びに一切の染汚と無覆無記との世俗智とが結を斷ずること無きを謂ふなり。

【本論】[三六]世俗智の如く、苦・集・滅・道智と空・無願・無相の三摩地とも亦、爾り。差別あるをいへば、此の諸の無漏智と三摩地とは、皆、能く通じて、九地を斷ずるも、而も、遍く、五部を斷ずること能はざることなり。中に於て、四諦智は能く九地の修所斷の煩惱を斷ず。[三七]空三摩地は能く九地の見苦所斷と及び修所斷との煩惱を斷じ、[三八]無願三摩地は能く九地の見・苦・集・道所斷と及び修所斷との煩惱を斷じ、[三九]無相三摩地は、能く九地の見滅所斷と及び修所斷との煩惱を斷ず。此は是れ無間道のなり、これを前との差別といふ。或は斷ずること無きなりの中に於ては、唯、「此は諸の加行・解脫・勝進道の所攝なり」のみ有りて、餘は非(しか)らざるなり。

[四〇]問ふ、若し三三摩地が亦、能く煩惱を斷ずとせば、契經の所說は當に云何んが通ずべきや。契經に說くが如し「苾芻よ、我れは、知の故に、見の故に、能く諸漏を盡くすと說く」と。又、契經に「我が聖弟子は、般若の劍を以つて煩惱の怨を斷ず」と。有るが說く「唯、慧のみは能く煩惱を斷じ、諸の餘の覺分は、斷を助くるを斷と名くるなり」と。如是說者はいふ、「慧と俱生する品の四蘊・五蘊は皆、能く煩惱を斷ず、共相念住は煩惱を斷ずるを以つての故に。然も佛は或る時は般若を稱讃し、或は定を稱讃し、或は餘を稱讃す。皆、他の有情を饒益せんが爲めなり。

[四一]第三十三節　無量・淨定・解脫・勝處・遍處・智の異熟果を受くる處に就きて

【三六】四諦智と三三摩地との斷結に就きて。

【三七】 空三摩地は、空と非我との二行相となりて轉ずるが故に苦智と相應す。故に九地の見苦所斷と修所斷とを斷ずるなり。

【三八】 無願三摩地は、集・道諦下の各〻の四行相と苦諦下の非常・苦の二行相との十行相と作りて轉ずるが故に、苦・集、道智と相應す。從つて九地の見苦・集・道所斷と修所斷とを斷ずるなり。

【三九】 無相三摩地は滅諦下の四行相と作りて轉ず、故に滅智と相應し、九地の見滅所斷と修所斷とを斷ずるなり。

【四〇】三摩地が煩惱を斷ずるといふに就きての疑義。 こは、經文によれば唯、慧のみが煩惱を斷じ他は斷を助くるのみなりと說かるるを以つて、三摩地は定なるが故に煩惱を斷ずること能はざらんと疑義を生ぜしなり。之れに對して如是說者は慧と俱生する品の四蘊五蘊は皆、煩惱を斷ずるが故に過なしといへり。

【四一】 本節は發智論の頌文の「受果處」に相應する段にして、四無量、淨の四靜慮と四無色との八定、八解脫、八勝處、十遍處、他心智・世俗智等にして異熟果を受くるに定まれ

【本論】　慈の異熟は何處にて受くるや。乃至廣說。

四二 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、是は作論者の意欲爾るが故なり、――乃至廣說。復次に、他の所說を止めんと欲するが故なり。謂く、或は有るが說く「諸の善・不善には異熟果無きなり」と。或は復、有るが說く「諸の有爲法は皆、有異熟なり」と。或は復、有るが說く「一切の不善と及び有漏の善とは定んで異熟を得す」と。是くの如き種種の異說を止め、唯、不善と善の有漏との法のみは定んで有異熟にして、而も得することは不定なることを顯はさんが爲めの故に、斯の論を作すなり。

四三 然も此の中に二種の定り有り、一は異熟の定りにして、二は生の定りなり。異熟の定りとは、一切の不善と善の有漏との法は皆、有異熟なるが故なり。生の定りとは、若し彼の異熟が生ずるものなれば、或は梵世等と名け、若し生ぜざるものなれば、處所無しと名く。是れを此處に略毘婆沙と謂ふなり。

【本論】四四 慈の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は遍淨、或は廣果にて受け、或は受くる處所無きなり。

或は梵世乃至或は廣果にて受くとは、四靜慮の慈無量の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は受くる處所無しとは、四靜慮の慈無量の異熟果の不生に墮するものを謂ふなり。

【本論】　慈の如く、悲と捨とも亦、爾り。

皆、四靜慮に通ずるが故に。

【本論】四五 喜の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は處所無きなり。

るもの(有異熟なるもの)は、何の所處に於て異熟果を受くるやを明かにし、又、有異熟なるも而も果が不生法中に墮して、異熟果を得せざる場合あること等に關する論究をなすが本節の課題なり。

【四二】論起の因由としての異熟果に關する異執の破斥。
茲に三種の異執あり。
(一)善・不善には異熟果無しとの異執、
(二)有爲法は皆、有異熟なりとの異執、
(三)一切の不善と有漏善とは定んで異熟を得すとの異執。

【四三】本節の略毘婆沙。

【四四】慈・悲・捨無量の異熟果を受くる處所に就きて。

【四五】喜無量の異熟果を受くる處所に就きて。
喜無量は初二靜慮にのみ有るなり。

或は梵世、或は極光淨なりとは、初と第二との靜慮の喜無量の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は處所無しとは、初と第二との靜慮の喜無量の異熟果の不生に墮するものを謂ふなり。

【本論】[四六]淨の初靜慮の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は處所無きなり。

或は梵世なりとは、善有漏の初靜慮の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は處所無しとは、善有漏の初靜慮の異熟果の不生に墮するものを謂ふなり。

【本論】[四七]淨の第二靜慮の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は極光淨、或は處所無し。淨の第三靜慮の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は遍淨、或は處所無し。淨の第四靜慮の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は廣果、或は處所無し。淨の空無邊處の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は空無邊處、或は處所無し。淨の識無邊處の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は識無邊處、或は處所無し。淨の無所有處の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は無所有處、或は處所無し。淨の非想非非想處の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は非想非非想處、或は處所無し。

淨の初靜慮の如く、是くの如く淨の第二靜慮乃至非想非非想處も亦、爾り。差別あるをいへば自名を說くことなり。

【本論】[四八]初と第二との解脫の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は處所無きなり。

此は喜無量の說の如し。倶に初二靜慮地に在るが故に。

【本論】[四九]淨解脫の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は廣果、或は處所無きなり。

或は廣果なりとは、淨解脫の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は處所無しとは、淨解脫の異熟果の

【四六】淨の初靜慮の異熟果を受くる處所に就きて。

【四七】淨の第二靜慮乃至非想非非想處の異熟果を受くる處所に就きて。因みに以下の本論は發智論より補譯せるものなり。

【四八】初二解脫の異熟果を受くる處所に就きて。

【四九】淨解脫の異熟果を受くる處所に就きて。

不生に墮するものを謂ふなり。

【本論】[五〇]空無邊處解脫乃至非想非非想處解脫の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は自地、或は處所無きなり。

或は自地なりとは、四地の有漏の解脫の各の自の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は處所無しとは、三地の[五一]無漏の解脫と、及び四地の有漏の解脫の各の異熟果の不生に墮するものとを謂ふなり。

【本論】[五二]滅受想解脫の異熟は何處にて受くるや。答ふ、或は非想非非想處、或は處所無し。

此は非想非非想處解脫の說の如し。

【本論】[五三]初の四勝處の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は處所無し。

此は初と第二との解脫の說の如し。

【本論】[五四]後の四勝處の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は廣果、或は處所無し。

此は淨解脫の說の如し。

【本論】[五五]後の四勝處の如く、前八遍處も亦、爾り。

[五六]後の二遍處の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は自地、或は處所無し。

此は淨の初二無色の說の如し。

【本論】[五七]他心智の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は梵世、或は極光淨、或は遍淨、或は廣果、或は處所無きなり。

或は梵世、乃至或は廣果なりとは、四靜慮の有漏の他心智の各の自の異熟果の生ずるものを謂ふ

[五〇] 無色解脫の異熟果を受くる處所に就きて。

[五一] 無漏なるが故に異熟果を招くこと無きなり。

[五二] 滅受想解脫の異熟果を受くる處所に就きて。

[五三] 前四勝處の異熟果を受くる處所に就きて。

[五四] 後四勝處の異熟果を受くる處所に就きて。

[五五] 前八遍處の異熟果を受くる處所に就きて。

[五六] 後二遍處の異熟果を受くる處所に就きて。

[五七] 他心智の異熟果を受くる處所に就きて。

なり。或は處所無しとは、無漏の他心智と、及び、有漏の他心智の異熟果の不生に墮するものとを謂ふなり。

【本論】[五八] 世俗智の異熟は、何處にて受くるや。答ふ、或は欲界、或は色界、或は無色界、或は處所無きなり。

或は欲界乃至或は無色界なりとは、謂く三界の有漏善と及び不善との世俗智の各の自の異熟果の生ずるものを謂ひ、或は處所無しとは、三界の無記の世俗智と、及び不善と善の有漏との世俗智の異熟果の不生に墮するものを謂ふなり。

餘の無漏智は無異熟なるが故に、此の中に說かさるなり。

【五八】世俗智の異熟果を受くる處所に就きて。

一第二章　八等至に於ける味相應と淨と無漏との等至に關する論究

（定蘊第七中、緣納息、第二之一）

【本論】八等至（samāpatti）有り。謂く四靜慮と四無色となり。三等至有り。謂く味相應と淨と無漏となり。此の中、前七は各、三種を具す、第八は唯、二のみなり。謂く無漏を除くなり。

二第一節　八等至と三等至とに就きて

是くの如き等の章及び解章の義は既に領會し已れるをもて、應に廣く分別すべきなり。

三問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、他の宗を止め、己が義を顯はさんと欲するが故なり。謂く、或は有るが說く「八等至は一切の等至を攝せず」と。或は有るが說く「等至は唯、淨と無漏とのみにして、味相應は非らず」と。或は有るが說く「欲界と非想非非想處とにも亦、無漏有り」と。或は有るが說く「成就等の法無し」と。是くの如き種種の異執を止め、八等至は一切の等至を攝し、乃至、成就等も有ることを顯はさんが爲めの故に、斯の論を作すなり。

四問ふ、若し八等至が一切の等至を攝せば、毘奈耶の說を當に云何んが通ずべきや。毘奈耶に說くが如し、「佛の入る所の等至は、一切の聲聞・獨覺すら尚、其の名を知らず、獨覺の入る所の等至は一切の聲聞は知らず、舍利子の入る所は諸餘の聲聞は知らず、大目揵連の入る所は、舍利子を除く餘の聲聞は知らざるなり」と。何が故に、八等至は一切の等至を攝すと言ふや。答ふ、一切の等至は八等至中に攝在せざること無きなり。然るに、五種姓に由りて般若に差別有るが故に、入出する所

【一】本章の內容を發智論の頌文によりて示せば、「八味・淨・無漏、成・不成・得・捨・退修初入緣・此章願具說」なり。就中「八味・淨・無漏」とは四禪四無色の八等至の各に味相應・淨・無漏の三種の等至あることを明すもの。「成・不成・得・捨・退」は八等至の各に於ける、味・淨・無漏の三等至の成就・不成就・得・捨・退に關する問題を論究するもの。「修」とは、下七等至に於ける淨定と無漏定との習修・得修の關係に關する四句分別をなすもの。「初入」とは、最初に無漏定に入る時、得する未來の無漏の心心所に關する諸門分別をなすもの。「緣」とは、等至に於ける味等の三種等至の相緣關係を明にせるものなり。

【二】本節は發智論の頌文の「八味淨無漏」に相當する段にして、卽ち等至に、四靜慮と四無色との八ありて、而かも此の八等至は一切の等至を攝し盡くすことを明し、次に等至と等持との區別を明し、更に進んで八等至中の前七等至に味相應と淨と無漏との三種の等至あり、第八等至には味

の等至にも亦、勝劣有らしむるなり。劣なるものは勝なるものに於て測知すること能はざるが故に、是の説を作すなり。此に由るが故に、「佛の般涅槃する時には不動明等至に入り、舍利子の般涅槃する時には[6]師子奮迅等至に入り、大目犍連の般涅槃する時には、[7]香象頻申等至に入り、尊者、阿難陀の般涅槃する時には、施風等至に入る。皆、根に由りて慧に差別有るが故に。乃至、般涅槃する時、入る所の等至にも亦、差別有るなり」と。

[8]問ふ、等持(samādhi)と等至(samāpatti)とに何の差別有りや。答ふ、有るが説く「等持は一物を體と爲し、等至は五蘊を體と爲す」と。有るが説く「等持は一刹那なるも、等至は相續す」と。有るが説く「諸の等持は卽ち等至なるも、有る等至にして等持に非ざるものあり。謂く無想等至と滅盡等至となり」と。有るが説く「亦、有る等持にして等至に非ざるものあり。謂く、不定心と相應する等持なり。此れに由りて應に、四句を作すべきなり。(一)有るは等至にして等持に非ざるものあり。謂く二無心定なり。(二)有るは等持にして等至に非ざるものあり。謂く不定心と相應する等持なり。(三)有るは等至にして亦、等持なるものあり。謂く一切の有心定なり。(四)有るは等至にも非ず等持にも非ざるものあり。謂く前相を除くものなり」と。

[9]初靜慮に三種有り。謂く、味相應と淨と無漏となり。味相應とは、愛と相應するものを謂ふ。愛は能く心を持して境に於て流注し、其の相は定に順ずるが故に、獨り、其の名を受くるなり。所餘の因緣は、[10]前已に說けるが如し。淨とは善有漏を謂ひ、無漏とは聖道を謂ふ。

[11]問ふ、善有漏の定には、垢有り、濁有り、毒有り、刺有り、漏有り、過失有るに、云何んが、淨と名くるや。答ふ、究竟して淨に非ずと雖も、而も少分淨なるを以つての故に、淨と名くるなり。謂く煩惱を雜へざるが故に、煩惱と相違するが故に、無漏の勝義の淨を引發するが故に、聖道に順ずるが故に、無漏の眷屬なるが故になり。

相應と淨との二等至のみあることを明し、最後に、有頂と欲界とに無漏無き理由を説明せり。

【三】 **論起の因由として等至に關する異執を破す。**

【四】 **八等至が一切の等至を攝すと云ふに就きての疑義。**

【五】 種姓は大正本に種性とあるも、宮本に從つて種姓と改む。

【六】 師子奮迅等至(Siṃha-vikrīḍito samāpatti)は師子遊戲等至とも譯せらる。師子が奮迅する時、諸根を開張し、身毛皆堅ち威怒哮吼の相を現すが如く、佛も此の三昧に入れば大悲法界の身を奮ひ、大悲の根門を開き、應機の威を現じ、外道・二乘の小獸をして攝伏せしむるが故に師子奮迅三昧と名くと云はる(探玄記十八)

【七】 香象頻申等至とは、gandhahastivijṛmbhāsamāpattiなり。

【八】 **等持と等至との區別に就きて。**

【九】 **初靜慮に三等至あるに就きて。**

第二靜慮乃至無所有處等至も亦、各、三種の等至あり。

【一〇】 前とは、前卷の初めを指す。

【一一】 **特に、善有漏定を淨定**

(二二) 問ふ、無漏の等至は是れ勝義の淨なるに、何が故に名けて淨と爲さざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし有餘なることを」と。有るが說く「無漏を淨と名くるは共に了知する所なるも、有漏を淨と名くることは、共に知る所に非ず、是を以つて偏に說くなり」と。有るが說く「名を立つるは差別の義に依るなり。善の有漏定は初めて染法に違ふをもて、淨の義、爲勝が故に、說きて淨と名け、聖道は漏を斷ずる無漏の義、勝るが故に、無漏と名くるなり。

初靜慮の三種の如く、乃至無所有處の三種も亦、爾り。

(二三) 非想非非想處には唯、二種のみ有り。謂く無漏を除くなり。欲界と有頂とには聖道無きが故なり。

(二四) 問ふ、何が故に、彼の二地に聖道無きや。答ふ、田に非ず器に非ず——乃至廣說。復次に、欲界は、定地に非ず、修地に非ず、離染地に非ず、有頂は昧鈍・羸劣なるに、要ず、定地、修地、離染地にして、明利・强勢な地に乃ち聖道有ればなり。有るが說く「欲界には掉擧增上し、有頂には沈寂增上するに、要ず、掉擧多からず、沈寂多ざらざる地に、方に聖道有ればなり」と。有るが說く「欲界は散亂にして有頂は猶豫なるに、要ず、寂靜にして決定なる地に、方に聖道有ればなり」と。有るが說く「欲界と有頂とは、是れ下と上との邊なるに、聖道は中に居して邊に在らざるが故なり」と。有るが說く「欲界と有頂とは是れ有の根本なるが故に、聖道無きなり。謂く、生死の樹は或は根が下に在りて莖等が上に在り、或は根が上に在りて莖等が下に在るなり。欲界は是れ喧雜の根本なるをもて說きて下の根となす。五趣を具するが故に。有頂は是れ離離の根本なるをもて、說きて上の根と爲す、最後に離るるが故に。若し喧雜の根本を生死の樹と爲すに依れば、則ち欲界は根と爲り、四靜慮は莖と爲り、三無色は枝と爲り、有頂は條葉と爲る。若し離離の根本を生死の樹と爲すに依れば、則ち有頂は根と爲り、三無色は莖と爲り、四靜慮は枝と爲り、欲界は條葉と爲る。故に欲界と有頂とを說きて有の根本と爲す。是れ有の根本なるを以ての故に、聖道有ること無きなり」と。

と名くる理由。
【二二】特に、無漏定を淨定と名けざる理由。
【二三】非想非非想處に二種の等至あるに就きて。
【二四】特に、有頂と欲界とに無漏無き理由。

【本論】[一六] 頗し味相應の初靜慮を成就するも、淨と無漏とのを成就するに非ざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、欲の愛を未だ盡さゞるものなり。

下地の愛を未だ盡さざるものは、必ず、上地の愛を成就し、必ず未だ上の根本の淨と無漏とを得せざるを以つての故なり。

【本論】　頗し淨の初靜慮を成就するも、味相應と無漏とのを成就するに非ざるもの有りや。答ふ、有り。謂く異生にして欲界か梵世かに生じて、梵世の愛を盡くせるものなり。

此の地、或は下地に生じ、而も此の地の愛を盡くせる者は、必ず此の地の淨を成就し、必ず、此の地の味相應を成就せざるを以つての故に、又、異生なるが故に、無漏を成就せざるを以つてなり。

【本論】　頗し無漏の初靜慮を成就するも、味相應と淨とのを成就するに非ざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、聖者にして梵世より上に生ずるものなり。

聖者は上地に生ずるも必ず下地の無漏を成就し、必ず、下地の味相應と淨とを成就せざるを以つての故に。味相應は已に斷ぜるが故に、淨は界地を越ゆれば捨するが故に。

問ふ、上地に生ずる者も亦、下地の通果心を成就するに、何が故に、下地の淨を成就せずと說くや。答ふ、有るが說く「無覆無記を亦、名けて淨と爲すも而も此の中に說かざるは、彼れは是れ上地の果なるを以つての故に、下地の淨と名けず、又、一切地に得べきものは、此の中に之を說くも、通果心は無色界には無きをもて、是の故に說かざるなり」と。如是說者はいふ、「此の中、淨定は有漏善なりと說けるをもて、是の故に、難に非ざるなり」と。

【一五】　本節は發智論の頌文の「成不成」に相應する段にして、即ち、
(一)初靜慮の三等至中の一を成就して二を成就せざる場合、
(二)二を成就して一を成就せざる場合、
(三)三を成就する場合、
(四)一を成就せずして二は非らざる場合、
(五)二を成就せずして一は非らざる場合、
(六)三を成就せざる場合、の六つの場合に於ける初靜慮の三等至の成就、不成就を論究する段なり。

【一六】　**以下、初靜慮の三等至中の一を成就し、二を成就せざる場合に就きて。**

【本論】[一七]頗し味相應と淨との初靜慮を成就するも、無漏のは非らざるもの有りや。

答ふ、有り。謂く異生にして欲界に生じ、欲界の愛を盡くすも梵世の愛を未だ、盡くさゞるものと、及び梵世に生じて梵世の愛を未だ盡さゞるものとなり。

此の地、或は下地に生じて而も此の地の愛を未だ盡さざる者は、必ず、此の地の味相應と淨とを成就するを以つての故に、又、異生なるが故に、無漏を成就せざるを以つてなり。

【本論】頗し味相應と無漏との初靜慮を成就するも、淨のは非らざるもの有りや。

答ふ、無し。

此の地の味相應と無漏とのを成就せば、必ず此の地の淨のをも成就するを以つての故に。

【本論】頗し淨と無漏との初靜慮を成就するも、味相應のは非らざるもの有りや。

答ふ、有り。謂く聖者にして欲界か梵世かに生じて、梵世の愛を盡せるものなり。

聖者にして此の地、或は下地に生じて而も此の地の愛を盡くせる者は、必ず、此の地の淨と無漏とのを成就するも、味相應のは非らざるを以つての故なり。

【本論】[一八]頗し味相應と淨と無漏との初靜慮を成就するもの有りや。答ふ、有り。謂く聖者にして欲界に生じ、欲界の愛を盡くすも梵世の愛は未だ盡さゞるものと、及び梵世に生じて梵世の愛を未だ盡さゞるものとなり。

聖者にして此の地、或は下地に生じて而も下地の愛を盡くすも此の地の愛を未だ盡くさざる者は、必ず、此の地の三種を成就するを以つての故なり。

【本論】[一九]頗し味相應の初靜慮を成就せざるも淨と無漏とのは非らざるもの有りや。

答ふ、有り。謂く聖者にして欲界か梵世かに生じて、梵世の愛を盡くせるものなり。

【一七】以下、初靜慮の三等至中の二を成就し一を成就せざる場合に就きて。

【一八】初靜慮の三等至を成就する場合に就きて。

【一九】初靜慮の三等至中、一は不成就にして二は非らざる場合に就きて。これは前の初靜慮の三等至の中の二を成就し、一を成就せざる場合の頂を參照せよ。

[三〇]頗し淨の初靜慮を成就せざるも、味相應と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、無し。頗し無漏の初靜慮を成就せざるも、味相應と淨とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く異生にして欲界に生じ、欲界の愛を盡くすも梵世の愛を未だ盡くさゞるものと、及び梵世に生じ、梵世の愛を未だ盡くさゞるものとなり。

[三一]頗し味相應と淨との初靜慮を成就せざるも、無漏のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く聖者にして梵世より上に生ずるものなり。頗し味相應と無漏との初靜慮を成就せざるも、淨のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く異生にして欲界か梵世かに生じて梵世の愛を盡くせるものなり。頗し淨と無漏との初靜慮を成就せざるも、味相應のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く欲界の愛を未だ盡さゞるものなり。

[三二]頗し味相應と淨と無漏との初靜慮を成就せざるもの有りや。答ふ、有り。謂く異生にして梵世より上に生ずるものなり。

是の如き等の文は、本論に說くが如く、其の所應に隨つて成就と相違して應に廣く說くべきなり。

[三三]問ふ、梵世の愛を盡くす者は、亦、[三四]淨退分の初靜慮をも成就せざるに、此の中、何が故に說かざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし、此の義有餘なることを」と。有るが說く「此の中には全を成就せざるものを說くに、彼れは、順退分を成就せずと雖も、而も、餘を成就するをもて、是の故に說かざるなり」と。

[三五]問ふ、何が故に、淨定は界・地を越ゆれば、捨するに、無漏は非らざるや。答ふ、淨定は有漏なるをもて界・地に墮在し、上に生ぜば下を厭ひ、又、無用なるが故に、則ち捨するなり。無漏は地に

【三〇】　以下の本論は發智論より補譯せるものなり。

【三一】　初靜慮の三等至中、二は不成就にして一は非らざる場合。

これは前の初靜慮の三等至中の一を成就するも二を成就せざる場合を參照せよ。

【三二】　初靜慮の三等至を成就せざる場合に就きて。

【三三】　特に梵世の愛を盡す者は淨の順退分を成就せざるに此を玆に說かざる理由に就きて。

【三四】　淨定に四種あり、(一)順退分・(二)順住分・(三)順勝進分・(四)順決擇分なり。就中、順退分は自地の煩惱に隨順する定なるが故に、下地の染を離るれば、之を得するも、自地の染を離るれば之を捨するなり。(俱舍二八)

【三五】　特に、淨定は界地を越ゆれば捨し無漏は捨せざる理由に就きて。

墮すと雖も、而も界に壞せず、上に生ずるも下を厭はざるをもて、無用なりと雖も而も捨せざるなり」と。

【本論】[二七]頗し味相應の初靜慮を得するも、淨と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、梵世の愛を盡くせるより退する時と、及び梵世の上より歿して欲界に生ずる時となり。

[二六]第三節　初靜慮の三等至の得と捨と退とに關する論究

問ふ、梵世の愛を盡くせるより退する時にも亦、[二八]淨の退分の初靜慮を得するに、此の中、何が故に說かざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは當に知るべし、此の義、有餘なることを」と。有るが說く「此の中には全を得するものを說くに、彼れは、唯、少分をのみ得するをもて、是の故に說かざるなり」と。

【本論】頗し淨の初靜慮を得するも、味相應と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く異生にして欲の愛を盡くす時なり。

彼れは欲染を離るる第九解脫道の時、根本の淨の初靜慮を得するを以つての故に。

【本論】頗し無漏の初[二九]靜慮を得するも、味相應と[三〇]淨とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、[三一]靜慮と靜慮中間とに依りて正性離に入ると、及び阿羅漢果を得するとの時なり。

問ふ、正性離生に入る者は、亦、淨の初靜慮――謂く、現觀邊の世俗智なり――をも得すに、此の中、何が故に說かざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし有餘なることを」と。有るが說く「此の中には全を得するものを說くに、彼れは唯、少分のみを得するをもて、

【二六】本節は、發智論の頌文の「得・捨・退」に相應する段にして、即ち、
(一)初靜慮の三等至中の一を得するも二は非らざる場合、
(二)二を得するも一は非らざる場合、
(三)三を得する場合(無し)
(四)初靜慮の三等至中の一を捨し二は非らざる場合、
(五)二を捨し一は非らざる場合、
(六)三を捨する場合、(無し)
(七)初靜慮の三等至中の一を退し二は非らざる場合、
(八)二を退して一は非らざる場合、
(九)三を退する場合、(無し)
の如き組織によりて初靜慮の三等至の得と捨と退とを攻究するを其の目的となすなり。

【二七】以下、靜慮の三等至中の一を得するも二は非らざる場合に就きて。

【二八】淨の順退分の初靜慮は初靜慮の染を離るる時、捨するが故に、逆に初靜慮の離染より退する時は之を得するなり。

【二九】靜は大正本に淨とあるも三本宮本によりて靜と改む。

【三〇】淨は大正本に靜とあるも三本宮本に從つて淨と訂正せり。

【三一】何地に依りて見道に入

是の故に說かざるなり」と。有るが說く「正性離生に入る位の中にては、多分のを得せずして唯、三刹那のみのを得するをもて、是の故に說かざるなり」と。有るが說く「唯、世第一法が滅して苦法智忍が生ずる時のみを入正性離生と名け、爾の時は、唯、無漏のみを得するが故に、淨を說かざるなり」と。

問ふ、阿羅漢果を得する時には、先已に無漏の初靜慮、――謂く正性離生に入る時なり――を得せるに、何が故に、復、無漏のを得すと說くや。答ふ、此の文は但、應に正性離生に入る時のみを說くべくして、阿羅漢果を得するときを說くべからざるに、而も是の說を作すは、先時、學の無漏を得せりと雖も、未だ無學のを得せざることを顯はさんと欲するをもて、是の故に復、說くなり。問ふ、若し爾らば亦、應に梵世の上の纏を起して阿羅漢果を退する時をも說くべきなり。爾の時、還た、學の無漏を得するが故に。答ふ、理としては亦、應に說くべきも、而も說かざるは、無漏は是れ勝功德なるをもて、勝進する時に於て得することを顯せば則ち順ずるも、退する時に得することを顯せば、則ち順ぜざることを顯はさんと欲するをもて、是の故に說かざるなり。問ふ、若し爾らば、學の果を得する時と及び信勝解が練根して見至と作る時とは、倶に勝れたる無漏を得するに、此の中、何が故に說かざるや。答ふ、此は先に是れ學にして、今の所得も亦、是れ學なるをもて、是の故に說かず。是れを以つての故に、亦、無學の練根をも說かざるなり。

問ふ、[三二]阿羅漢果を得する時にも亦、無量の有漏の善法を得するに、何が故に亦、淨を得すと說かざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし有餘なることを」と。有るが說く「無漏は[三三]先なるを捨し、後なるを得するをもて是の故に則ち說くも、有漏は、先なるを捨せずして而も後なるを得するをもて、是の故に、說かざるなり」と。有るが說く「今得する所のものと、先に得せし所のものとは、倶に名けて淨と爲し、義に差別無きこと、學と無學とに差別の相有

るも、未來は、自地と下地との見道を修するが故に、今、四靜慮と靜慮中間とによりて見道に入れば未來修として初靜慮の無漏定を得するなり。（倶舍二六）。

【三二】初めて盡智が現在前する時は、能縛の衆惑を斷じて餘す所無きを以つて其の力能く九地の有漏の無量の功德を修するなり。されど、こは欲界に生じて初盡智を起せしものに限り、上地に生ずるものの場合は下地を必ず修せざるなり。（倶舍二六）

【三三】先なるをとは學の無漏をいひ、後なるをとは無學の無漏をいふ。

るが如にはあらず、是の故に說かざるなり」と。有るが說く「得すと雖も不定なるを以っての故に說かざるなり。謂く欲界か梵世かに生じて阿羅漢果を得する者は、得するも、上地に生ずれば即ち得せざるが故なり」と。有るが說く「此の中には一切得するものを說くも、彼れは少分を得するをもて、是の故に說かざるなり」と。

【本論】[三四] 頗し味相應と淨との初靜慮を得するも、無漏のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く梵世の上より歿して梵世に生ずる時なり。

中有に生ずる時、二倶に得するを以っての故に。

【本論】頗し味相應と無漏との初靜慮を得するも淨のは非らざるもの有りや。答ふ、無し。

問ふ、阿羅漢が梵世の纏を起して退する時、倶に[三五]二種を得するに、何が故に無しと言ふや。答ふ、應に有りと說くべきなり。卽ち向の所說は是なり、而も無しと言ふは、當に知るべし有餘なることを。有るが說く「先に成就せずして、今成就するものなれば、得すと名くるも、無漏の初靜慮は先已に成就せるをもて、是の故に說かざるなり」と。有るが說く「前已に、無漏は是れ勝功德なるをもて、勝進時に於て得することを顯はせば則ち順ずるも、退する時に得することを顯はせば則ち順ぜずと說けり。是の故に說かざるなり」と。

【本論】頗し淨と無漏との初靜慮を得するも、味相應のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く聖者にして欲界の愛を盡くす時なり。

不還果を得する時、二倶に得するを以っての故に。

【本論】[三六] 頗し味相應と淨と無漏との初靜慮を得するもの有りや。答ふ、無し。

【三四】以下、初靜慮の三等至中の二を得するも一は非らざる場合。

【三五】玆に二種とは學の無漏の初靜慮と味相應の初靜慮となり。

【三六】初靜慮の三等至を得する場合――無。

問ふ、梵世の纏を起して、阿羅漢果を退する時、三種を倶に得するに、何が故に說かざるや。答ふ、爾の時、淨の[三七]は少分を得するを以つての故に說かざるなり。無漏のは、前說の如し。

[三八] 問ふ、得と成就とに、何の差別有りや。有るが說く「名に卽ち差別あり。謂く得(prāpti)と名け、成就(samanvāgama)と名くるなり」と。有るが說く「未得にして而も得するを得と名け、已得にして而も得するを成就と名くるなり」と。有るが說く「最初に得するを得と名け、後數數得するを成就と名く」と。有るが說く「先に成就せずして而も成就するを得と名け、先に成就して而も成就するを成就と名く」と。有るが說く「先に繫屬無くして而も繫屬有るを得と名け、先に繫屬有りて、而も繫屬有るを成就と名く」と。有るが說く「初得を得と名け、得し已りて斷ぜざるを成就と名く」と。有るが說く「初めての獲(pratilambha)を得と名け、得し已りて失せざるを成就と名く。是の故に得は唯、初めにのみ在るも、成就は初と後とに通ず」と。得と成就とにつきての是れを差別と謂ふなり。

【本論】[三九] 頗し味相應の初靜慮を捨するも、淨と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、梵世の愛を盡くす時なり。[四〇] 頗し淨の初靜慮を捨するも、味相應と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。[四一] 謂く異生にして欲界の愛盡より退する時と、及び欲界か梵世かより歿して梵世の上に生ずる時と、並びに梵世より沒して欲界に生ずる時となり。

[四二] 頗し淨と無漏との初靜慮を捨するも、味相應のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、聖者にして欲界の愛盡より退する時なり。

[四三] 頗し餘を捨するもの有りや。答ふ、無し。

【三七】 淨のは少分を得すとは初靜慮の淨の順退分定のみを得し、他の順住分順勝進分、順決擇分定を得せざるをいふ。

【三八】 特に、得と成就との差別に就きて。

【三九】 初靜慮の三等至中の一を捨し二は非らざる場合に就きて。

【四〇】 以下の本論は發智論より補譯せるものなり。

【四一】 此の場合、無漏の初靜慮を捨せざるは異生は無漏定を得せざるが故に、捨すること能はざるなり。

【四二】 初靜慮の三等至中の二を捨し一は非らざる場合。

【四三】 初靜慮の三等至を捨する場合――無。

是の如き等の文は、本論の說の如く、其の所應に隨つて得と相違して、應に廣く說くべきなり。

問ふ、梵世の愛を盡くす時にも亦、退分の淨を捨するに、何が故に、說かざるや。答ふ、此の中には一切を捨するものを說くに、彼れは唯、少分のみを捨するをもて、是の故に、說かざるなり。

問ふ、得果と、練根と及び退位とに皆、唯、無漏の初靜慮のみを捨し、餘は非らざるもの有るに、此の中、何が故に、說かざるや。有るが說く「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし有餘なることを」と。有るが說く「此の中には捨して而も得せざるものを說くに、彼れは、捨して還た得するをもて、是の故に說かざるなり」と。

四四 問ふ、捨と不成就とに何の差別有りや。答ふ、名に卽ち差別あり。捨と名け、不成就と名くるなり。是くの如き等は前の得と成就との相違の如く應に廣く說くべきなり。

【本論】四五 頗し味相應の初靜慮を退するも、淨と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、無し。

煩惱を捨するを退と名けざるを以つての故に。

【本論】 頗し淨の初靜慮を退するも、味相應と無漏とのは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く、異生にして欲界の愛盡より退する時なり。

四六 頗し淨と無漏との初靜慮を退するも、味相應のは非らざるもの有りや。答ふ、有り。謂く聖者にして、欲界の愛盡より退する時なり。

四七 頗し餘を退するもの有りや。答ふ、無し。

問ふ、上二界の纒を起して、無學果を退すると、及び、種姓より退するとの時には皆、無漏の初靜慮を退するも餘は非らざるもの有るに、此の中、何が故に說かざるや。有るが說く「應に說くべ

【四四】 特に捨と不成就との區別に就きて。

【四五】 初靜慮の三等至中の一を退して二は非らざる場合。

【四六】 初靜慮の三等至中の二を退して一は非らざる場合。

【四七】 初靜慮の三等至を退する場合——無。

【四八】 特に捨と退との區別に就きて。

【四九】 六の成就とは、(一)味を成じ淨と無漏とは非らず。(二)淨を成じ、味と無漏とは非らず。(三)無漏を成じ、淨と味とは非らず。(四)味と淨とを成じ無漏は非らず。(五)淨と無漏とを成じ味は非らず。(六)味と淨と無漏とを成就すのの六の場合有るを謂

くして而も說かざるは當に知るべし、此の義有餘なることを」と。有るが說く「此の中には、退して得せざるものを說くに、彼れは退すと雖も而も還た得するをもて、是の故に說かざるなり」と。

[四八]問ふ、捨と退とに、何の差別ありや。有るが說く「名に卽ち差別あり、謂く名けて捨と爲し、名けて退と爲すなり」と。有るが說く「捨は勝進と退との時に通ずるに、退は唯、退時のみなり」と。有るが說く「捨は損減と增益との時に通ずるに、退は唯、損減の時のみなり」と。有るが說く「捨は上と下との時に通ずるに、退は唯、下の時のみなり」と。有るが說く「捨は盛と衰との時に通ずるに、退は唯、衰の時のみなり」と。有るが說く「捨は味相應等の三に通ずるに、退は唯、二種のみにして味相應を除くなり」と。有るが說く「捨は利と鈍との根に通ずるに、退は唯、鈍根のみなり」と。是れを捨と退との差別と謂ふ。

應に知るべし、此の中に[四九]六の成就と[五〇]六の不成就と、[五一]五の得と、[五二]三の捨と、[五三]二の退と有りて以つて初靜慮の味相應等の三種の差別を明すことを。

[五四]第四節　第二靜慮乃至無所有處の三等至の成・不成・得・捨・退に關する論究

【本論】 初靜慮を說くが如く、乃至無所有處を說くことも亦、是くの如し。

此は是れ總說なり。中に於て差別あること、理の如く應に知るべきなり。

非想非非想處は三種を具せざるが故に、類顯せざるなり。然も有する所の二種に於ては、亦、上に准じて、應に知るべきなり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十二

ふ。

【五〇】 六の不成就とは(一)味は不成にして淨と無漏とは非らず。(二)無漏は不成にして淨と味とは非らず。(三)味と淨とは不成にして無漏は非らず。(四)味と無漏とは不成にして淨は非らず。(五)淨と無漏とは不成にして味は非らず。(六)味と淨と無漏とを成ぜずの六の場合あるをいふ。

【五一】 五の得とは、(一)味を得し他は非らず。(二)淨を得し他は非らず。(三)無漏を得し他は非らず。(四)味と淨とを得し他は非らず。(四)淨と無漏とを得し他は非らずの五の場合有るをいふ。

【五二】 三の捨とは、(一)味を捨し他は非らず、(二)淨を捨し他は非らず、(三)淨と無とを捨し味は非らずの三の場合有るをいふ。

【五三】 二の退とは、(一)淨を退し他は非らず、(二)淨と無漏とを退し味は非らずの二の場合あるをいふ。

【五四】 本節は第二靜慮乃至無所有處の七定の各々の三等至に就きて、その成就・不成就・得・捨・退の五問題に關して論究すべきなれど、初靜慮の場合に准じて知るべしとなり。但し有頂には無漏なきを以つて二等至のみなり。

卷の第百六十三（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、緣納息第二之二）

第五節　特に、順四分定に關する論究

[一]淨の初靜慮に四種有り。謂く、順退分(hāna-bhāgīya)と順住分(sthiti-bhāgīya)と順勝進分(viśeṣa-bhāgīya)と順決擇分(nirvedha-bhāgīya)となり。順退分とは、謂く若し此れに住せば多分に退失するものなり。順住分とは、謂く若し此れに住せば多分に退失もせず勝進もせざるものなり。順勝進分とは、謂く若し此に住せば、多分に勝進するものなり。順決擇分とは、謂く若し此れに住せば、多分に能く正性離生に入るものなり。復次に、順退分とは諸の煩惱と相[三]凌し、相雜し、煩惱の無間に此れが現前し、此れの無間に煩惱が現前するものなり。順住分とは、能く下地を觀じて麁・苦・障と爲して厭背を生じ、能く自地を觀じて靜・妙・離と爲して安住を樂ふものなり。順勝進分とは、能く自地を觀じて麁・苦・障と爲して厭背を生じ、能く上地を觀じて靜・妙・離と爲して欣樂を生ずるものなり。順決擇分とは、即ち煖・頂・忍・世第一法等なり。復次に、順退分とは、煩惱に隨順し、順住分とは自地に隨順し、順勝進分とは上地に隨順し、順決擇分とは聖道に隨順するものなり。此の分は或は聖の行相と作り、或は餘の行相と作りて、而して聖道に向ひ、解脫に趣くなり。

初靜慮の如く、乃至有頂も應に隨つて亦、爾り。

[四]頗し有る淨の初靜慮にして、離染の故に得し、離染の故に捨し、退の故に得し、退の故に捨し、生の故に得し、生の故に捨するものありや。答ふ、有り。謂く、順退分の初靜慮は、欲界の染を離るる時、得し、梵世の染を離るる時捨し、梵世の纒を起して退する時得し、欲界の纒を起して退する時捨し、上地より歿して梵世に生ずる時、得し、梵世より歿して欲界に生ずる時捨す。乃至有頂も

【一】本節は、淨定の四種なる(一)順退分、(二)順住分、(三)順勝進分、(四)順決擇分の所謂順四分定に就きて、先づその定義を明し、次に、此の順四分定の得・捨に關する種々の場合を論究する段なり。

【二】順四分定の定義。順退分・順住分・順勝進分・順決擇分の順四分定は淨の初靜慮乃至無所有處にあり、されど有頂は更に上地に趣くべきこと無きが故に、順勝進分あること無し。(俱舍二八)

【三】相淩は大正本に相欵とあるも、三本・宮本に從つて相淩と訂正す。

【四】初靜慮乃至有頂の順退分の得捨の場合に就き。これは順退分なり、婆沙百六十二卷及び俱舍二八參照。

應に隨つて亦、爾り。

五問ふ、若し欲界より沒して第二靜慮に生じ、第二靜慮より歿して初靜慮に生ずるもの彼れは、初靜慮に於ける何の法を、往沒する時捨し、還生する時、得せず、何の法を、還生する時得し往歿する時捨し、還生する時、得せず、何の法を、還生する時、得し往沒する時捨せず、何の法を、往沒する時捨し還生する時得し、何の法を、往沒する時捨せず、還生する時、得せざるや。答ふ、彼れは、初靜慮に於ける六順勝進分と順決擇分とを往沒する時捨し、還生する時、得せず、七順退分と及び八生得とを、還生する時得し往沒する時、捨せず、九順住分を往沒する時捨し、還生する時得す。前相を除く所餘の法を往沒する時捨せず、還生する時、得せざるなり。

一〇問ふ、若し初靜慮より沒して第二靜慮に生じ、第二靜慮より沒して初靜慮に生ずるもの彼れは、初靜慮に於ける何の法を、往沒する時捨し、還生する時得せず、何の法を、還生する時得し往沒する時捨せず、何の法を、往沒する時捨し、還生する時得し、何の法を、往沒する時捨せず、還生する時、得せざるや。答ふ、彼れは初靜慮に於ける順勝進分と順決擇分とを往沒する時捨し、還生する時得せず、順退分を還生する時得し往沒する時捨せず、順住分と及び生得とを往沒する時捨し、還生する時得し、前相を除く所餘の法を往沒する時捨せず、還生する時、得せざるなり。

初靜慮の第二靜慮に於けるが如く、是くの如く、乃至無所有處の非想非非想處に於けるも亦、爾り。

根本地の如く、是くの如く諸の近分地も亦、應に廣說すべきなり。

一一頗し第二靜慮の纏を起して無漏の初靜慮を退するものありや。答ふ、有り。謂く一二無學の初靜慮と及び上七地を對治せる學の初靜慮等なり。

一三頗し第二靜慮の纏を起して淨の初靜慮を退するものありや。答ふ、有り。謂く阿羅漢の修する所

【五】欲界より第二靜慮に生じ、第二靜慮より初靜慮に生ずるものゝ捨得する初靜慮の法に就きて。
【六】初靜慮の順勝進分と順決擇分とは、有漏法なるが故に、第二靜慮に往沒する時捨す。されど第二靜慮より初靜慮に還生する時は初靜慮の纏を起して生ずるものなるが故に加行得なる順勝進分及び順決擇分は得せざるなり。
【七】還生するは纏を起して還生するものなるが故に、煩惱に隨順する順退分を得す。されど往沒する時は、先に自地の染を離れて往沒するが故に、その先の離染の時既に捨せるが故に、往沒する時、捨せざるなり。
【八】生得の法は初靜慮に生ずるが故に得す。往沒する時は欲界の生得を捨するも、初靜慮の生得は未だ得せざるが故に捨するもの無く、從つて捨せざるなり。
【九】順住分は、有漏善なるが故に往沒する時捨し、又、自地に隨順するものなるが故に還生する時得するなり。
【一〇】初靜慮より第二靜慮に生じ、第二靜慮より初靜慮に生ずるものの捨得する初靜慮の法に就きて。
【一一】第二靜慮の纏を起して

の初靜慮と及び[一四]雜修の淨の初靜慮等なり。

[一五]第六節　特に、修の種類及びその意義に關する論究

【本論】若し淨の初靜慮を修せば、彼れは亦、無漏のをも修するや。乃至廣說。

[一六]修に四種有り。謂く得修(pratilambha-bhāvanā)と習修(niṣevaṇa-bhāvanā)と對治修(pratipakṣa-bhāvanā)と除遣修(viuirdhāvana-bhāvanā)となり。此の中、前の二修は有爲の善法を謂ひ、後の二修は有漏法を謂ふ。外國師は說く[一七]『修に六種有り。謂く前の四と及び防護修(saṃvara-bhāvanā)と分別修(vibhāvauā-bhāvanā)となり。防護修とは、即ち是れ根を修するなり。[一八]契經に說くが如し「若し六根に於て善く調べ、善く覆ひ、善く防ぎ、善く護り、善く修する者は、能く後樂を引く」と。分別修とは、即ち是れ身を修するなり。[一九]契經に說くが如し「此の身中に於て髮・毛・爪・齒有り乃至廣說」と』と。此の後の二修は應に知るべし、即ち是れ對治修と除遣修との攝なることを。是の故に、修には唯、四のみ有るなり。

此の中、二修に依りて論を作す。謂く、得修と習修となり。[二〇]餘處に說くが如し「若し法智を修せば、彼れは亦、類智をも修するや。乃至廣說」と。彼れも亦、二修に依りて論を作すなり。謂く得修と習修となり。[二一]餘處に復說く「若し道が過去なれば、彼の道は一切已に修し已に安んぜるや。乃至廣說」と。彼れも亦、二修に依りて論を作すなり。謂く得修と習修となり。[二二]餘處に說くが如し「若し身を修せば、彼れは戒をも修するや。乃至廣說」と。彼れは二修に依りて論を作すなり。謂く對治修と除遣修となり。[二三]餘處に復、說く「若し眼根を修せば、彼れは耳根をも修するや。乃至廣說」と。彼れも亦、二修に依りて論を作すなり。謂く對治修と除遣修となり。[二四]餘處に說くが如し「若し空三摩地を修せば、彼れは亦、無願三摩地をも修するや、乃至廣說」と。[二五]餘處に復、說く「若し身念住を修せば彼れは亦、受念住をも修するや、乃至廣說」と。彼れは亦、皆、二修に依りて論を作

無漏の初靜慮を退するものに就きて。

【一二】第二靜慮の纒を起す限り、無學を退するが故に、從て無學の成就する無漏の初靜慮をも退するなり。

【一三】第二靜慮の纒を起して淨の初靜慮を退するものに就きて。

【一四】雜修靜慮は第四定を雜修し、其の勢に乘じて、能く下三靜慮を雜修す。而も、その目的は(一)現法樂の爲と(二)受生の爲と(三)退を遮せんが爲めとなり。然るに今第二靜慮の纒を起せるを以って、雜修の靜慮を捨するなり。(俱舍、二四)

【一五】本節は次節に於て靜慮の修に關する論究を作すに先立つて先づ、修に四種或は六種あることを明し、次に四修に關する四句分別、修の意義、得修、習修の意義、已得の善法の現前時には未曾修なきこと等を論ずる段なり。

【一六】修の四種に就きて。

【一七】修の六種に就きて。茲に外國師とあるは西方犍馱邏國の論師のこと。

【一八】契經とは、雜阿含經卷第十一、の「如是六根善調伏善關閉善守護善執持、善修習、於未來世必受樂報」の之を指す。(大正・二・頁七六中)

すなり。謂く得修と習修となり。[二六] 餘處に説くが如し「若し無常想を修せば、彼れは無常想を思惟するや、乃至廣説」と、有るが説く「彼れは得修に依りて論を作すなり」と。有るが説く「彼れは習修に依りて論を作すなり」と。有るが説く「彼れは二修に依りて論を作すなり、謂く、得修と習修となり」と。[二七] 餘處に説くが如し「云何んが應に修すべき法なりや、謂く善の有爲法なり」と。謂く得修と習修となり。此の法は復、四修の義を具すと雖も、而も彼れは但、二修のみに依りて論を作すなり。

[二八] 此の義に由るが故に、應に四句を作すべきなり。(一)有る法は前二修を有するも、後の二修無きものあり。謂く有爲の無漏法なり。(二)有る法は後の二修を有するも前の二修無きものあり。謂く染汚と無覆無記との法なり。(三)有る法は具さに四修を具するものあり。謂く善の有漏法なり。(四)有る法は倶に四修無きものあり。謂く、無爲法なり。

[二九] 問ふ、何が故に、修(bhāvanā)と名くるや。答ふ、遍く修するが故に、修と名け、數習するが故に修と名け、熏ずるが故に修と名け、學するが故に修と名け、[三〇] 常淨ならしむるが故に修と名くるなり。

[三一] 應に知るべし、此の中、現在は習修の所顯にして、未來は得修の所顯なり。復次に、現在は習ふが故に修と名け、未來は得するが故に修と名く。復次に、現在は受用するが故に修と名け、未來は引發するが故に、修と名く。復次に、現在は事を辦ずるが故に、修と名け、未來は與欲するが故に、修と名く。

復次に、現在は身中に [三二] 在るが故に修と名け、未來は自在を得するが故に修と名く。復次に、現在は現前するが故に修と名け、未來は成就するが故に、修と名くるなり。

[三三] 問ふ、何が故に、已得の善法が現在前する時、未來を修せざるや。答ふ、已に衰歇せるが故に、已に受用せるが故に、已に作事せるが故に、已に與果せるが故なり。復次に、已に修せるが故に、

【二九】 契經に就きては中阿含經卷第二十、念身經は「此身中有髮毛爪齒麁細薄膚皮肉筋骨心腎肝肺大腸小腸脾胃搏糞腦及腦根涙汗涕唾膿血肪髓涎膽小便、如是比丘隨其身行便知上如眞、彼若如是在遠離獨住心無放逸修行精勤斷心所患而得定心、得定心已則知上如眞、是謂比丘修習念身」とあり。(大正・一・頁五五六上)

【三〇】 餘處とは婆沙百七卷、(毘曇部十二、頁一五七)を指す。

【三一】 餘處とは婆沙百五卷、(毘曇部十二、頁一二三)を指す。

【三二】 餘處とは婆沙百二十三卷、(毘曇部十三、頁一六一)を指す。

【三三】 餘處とは婆沙百五十五卷(大正・二七・頁、七八八)を指す。

【三四】 餘處とは婆沙百八十五卷、(大正・二七・頁九二五下)を指す。

【三五】 餘處とは婆沙百八十八卷、(大正・二七・頁九四四上)を指す。

【三六】 餘處とは婆沙第百八卷(毘曇部十二、頁一九八)を指すか。

【三七】 餘處とは婆沙百六卷、(毘曇部十二、頁一五〇)を指

已に息めるが故に、勢用滅ずるが故なり。復次に、已得の法を現前に受用する時、唯、漸に盡くることのみ有りて更に餘の勢無し、云何んが能く未來を修せんや。人が先に積みし所の財を受用せば、唯、漸く減ずることのみ有りて更に增益すること無きが如し。復次に、功用を作して起すものは、能く未來を修するも、曾得の法は、功用を作すことを須ひて起すに非ざるが故に、未來を修せざるなり。復次に、若し已得の法が現在前して、復、能く未來を修せば、則ち佛般涅槃の時、一切の靜慮・解脫・等持・等至を現起し、爾の時、亦、應に更に未來を修すべきなり。此くの如くならば則ち盡智の時、應に一切の功德を具得せざるべきに、云何んが所作究竟すと名くることを得んや。此の過有ること勿れの故に、已得の法が現在前する時は、未來の諸餘の功德を修せざるなり。

三四 **第七節　淨の初靜慮と無漏の初靜慮との習修・得修に關する論究**

【本論】 若し淨の初靜慮を修せば、彼れは亦、無漏のをも修するや。設し無漏の初靜慮を修せば、彼れは亦、淨のをも修するや。答ふ、應に四句を作すべきなり。

三五 (一)有るは淨の初靜慮を修するも、無漏のを修するに非ざるものあり。謂く、已得の淨の初靜慮を現在前すると、若しくは未得の淨の初靜慮を現在前するも而も無漏のを修せざると、若しくは未得の非初靜慮の世俗智を現在前し、而も淨の初靜慮を修して無漏のは非らざるとなり。

三六 已得の淨の初靜慮を現在前すとは、謂く異生及び聖者、或は學、或は無學、或は聲聞、或は獨覺、或は如來が、或は現法樂住の爲めの故に、或は本所作を觀ぜんが爲めの故に、或は功德を遊戲せんが爲めの故に、或は聖財を自用せんが爲めの故に、曾得の世俗の初靜慮を起して現在前する時は、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。然も現前する

す。

【二八】 **四修に關する四句分別。** こゝは既に婆沙百五卷、(毘曇部十二、頁一一二三)に出せるを以つて說明を省略す。往見すべし。

【二九】 **修の意義。**

【三〇】 常は大正本に光とあるも、三本に從つて常と改む。

【三一】 **習修・得修の意義。**

【三二】 在は大正本には無きも三本・宮本によりて補へり。

【三三】 **已得の善法の現前時、未來を修せざる理由に就きて。**

【三四】 本節は發智論の頌文の「修」の中の前半に相當するものにして、即ち、淨の初靜慮と無漏の初靜慮との習修・得修に就きての關係を四句分別によりて、明かにし、而も、その一一の場合を列擧せる段なり。

【三五】 **淨の初靜慮を修し無漏の初靜慮を修せざる場合。** こは四句中の第一句なり。

【三六】 已得の有爲の善法を現修するも、未來を修せざる理由に就きては、前節の終りを見よ。

位は即ち是れ智修なるが故に、淨の初靜慮を修すと名くることを得るなり。

若しくは未得の淨の初靜慮を現在前するも而も、無漏のを修せずとは、謂く、異生が欲界の染を離るゝに、若し最後の解脫道にて、根本初靜慮を起して現在前する時と、即ち異生が初靜慮の染を離れんが爲めに、初靜慮に依りて加行道を爲す時と、即ち異生が、初靜慮に依りて五通を引發する諸の加行道・五無間道・三解脫道の時と、即ち異生が初靜慮に依りて四無量と[三七]初二解脫と、前四勝處と、不淨觀と、念住と、三義觀と[三八]煖・頂・忍・世第一法とを起す——有るが說く[三九]「亦、持息念をも起す」と——時との、是くの如き等の時には、未曾得の淨の初靜慮を起すと雖も、而も無漏のを修せざるなり。

若しくは未得の非初靜慮の世俗智を現在前して而も淨の初靜慮を修し、無漏のは非らずとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。即ち未至定と靜慮中間となり。謂く異生が欲界の染を離るゝに即ち未至定に依りて第九解脫道を起す時と、即ち異生が初靜慮の染を離れんが爲めに未至定に依りて加行道を起す時と、即ち異生の已離欲染なるものが、未至定に依りて[四〇]三無量と、初二解脫と前四勝處と不淨觀と持息念と念住と三義觀とを起す時と、即ち異生が初靜慮の染を離れんが爲めに靜慮中間に依りて加行道を起す時と、即ち異生が靜慮中間に依りて三無量と初二解脫と前四勝處と不淨觀と持息念と念住と三義觀とを起す時との是の如き等の時には、未曾得の非初靜慮の世俗智を現在前し、而も淨の初靜慮を修して無漏のは非らざるなり。

【本論】[四一]（二）有るは、無漏の初靜慮を修するも、淨のは非らざるものあり。謂く、已得の無漏の初靜慮を現在前すると、若しくは、未得の無漏の初靜慮を現在前するも而も淨のを修せざると、若しくは未得の非初靜慮の世俗智と及び未得の非初靜慮の無漏智との彼れを現在前し、而も無漏の初靜慮を修するも淨のは非らざるとなり。

【三七】初二解脫と前四勝處とは初二靜慮と未至と中間との四地にあるなり。

【三八】煖・頂・忍・世第一法は未至・中間・四根本の六地に在り。これは淨靜慮の所攝なり。

【三九】持息念は通例、欲界と、靜慮中間と下三靜慮の近分との五地に在るも、下三根本靜慮に捨根をあらしむる人は前の五地の外に更に、下三根本靜慮を加へて八地に持息念ありと主張す、今茲に「持息念をも起す」とは右の八地に持息念ありと主張する人々の主張なり。（婆沙二六卷毘曇部八、頁六六參照）

【四〇】三無量とは慈・悲・捨の三無量をいひ、喜無量を云はざるは、喜無量は、欲界と初二靜慮にのみ在りて、未至・靜慮中間には無きが故なり。

【四一】無漏の初靜慮を修し淨の初靜慮を修せざる場合。これは四句中の第二句なり。

已得の無漏の初靜慮を現在前すとは、謂く諸の聖者にして或は學、乃至或は如來が或は現法樂住の爲めの故に、乃至或は聖財を受用せんが爲めの故に、曾得の無漏の初靜慮を起して現在前する時には、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。然も現前する位は卽ち是れ習修なるが故に、無漏の初靜慮を修すと名くることを得るなり。

若しくは未得の無漏の初靜慮を現在前するも而も淨のを修せずとは、謂く、初靜慮に依りて正性離生に入る[四二]苦・集・滅現觀の各の三心の頃と、[四三]道現觀四心の頃と、聖者が初靜慮に依りて初靜慮乃至無所有處の染を離るゝ[四四]九無間道九解脫道の時と、及び非想非非想處の染を離るゝ[四五]九無間道・八解脫道の時と、信勝解が初靜慮に依りて練根して見至と作る[四六]無間道・解脫道の時と――[四七]有るが說く「解脫道の時を除く、此の時には亦、世俗道をも修するが故に」と如是說者はいふ「爾の時は唯、無漏道のみを修す、見道による得果と同じきを以つての故に――、時解脫阿羅漢が初靜慮に依りて練根して不動と作る[四八]九無間道・八解脫道の時との是くの如き等の時に於ては、未曾得の無漏の初靜慮を起して現在前するも、而も淨のを修せざるなり。

若しくは未得の非初靜慮の世俗智を現在前し、而も無漏の初靜慮を修するも、淨のは非らずとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。卽ち[四九]第二靜慮の近分より乃至非想非非想處なり。謂く、聖者が世俗道を以つて初靜慮の染を離るゝに、若し卽ち第二靜慮の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫の時と、卽ち聖者が、第二靜慮の近分に依りて三無量と初二解脫と前四勝處と、不淨觀と持息念と念住と三義觀とを起す時と、卽ち聖者が第二靜慮に依りて、第二靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、第二靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、雜修第二靜慮の中間心の時と、卽ち聖者が第二靜慮に依りて五通を引發する諸加行

【四二】苦・集・滅現觀の各の三心の頃とは苦・集・滅類智の各の一心の頃を除く他の各の三心の頃をいふ。苦・集・滅類智の三心の頃には現觀邊の世俗智を未來に修するが故に之を除くなり。

【四三】道現觀四心の中、その第四心の頃、卽ち修道の初念には現在は、道智、類智の二智を修し、未來は已離欲染のものは七智を修するも世俗智を修せず、道類智は有頂を治する道なるに世俗智は有頂を治する力なければなり。

【四四】九無間道中には、二法智・四類智の隨二を現修し、未來は他心智を除く七智を修す。九解脫道中には二法・四類の隨二を現修し、未來は八智を修す。茲に未來は何れも世俗智を修すれども、そは初靜慮の世俗智には非ず、此は曾得なるを以つて、未來修なければなり。

【四五】九無間道中、二法・四類の隨二を現修し、未來は他心と世俗とを除く六智を修す、八解脫道中、二法・四類の隨二を現修し、未來は世俗を除く七智を修す。

【四六】無間道の時は、四法・四類中の隨二を現修し、未來は他心と世俗とを除く六智を修す。解脫道中には四法・四

道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち聖者が第二靜慮に依りて四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・[五〇]七處善を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、第二靜慮に依りて無礙解と及び世俗の無礙解とを起し增長する時と、第二靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、即ち、聖者が世俗道を以つて第二靜慮の染を離るゝに、若し即ち第三靜慮の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫の時と、即ち聖者が第三靜慮の近分に依りて三無量・不淨觀・持息念・念住・三義觀を起す時と、即ち聖者が第三靜慮に依りて第三靜慮乃至非想非非想處の染を離るゝに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、第三靜慮に依り、信勝解が練根して見至と作り、乃至空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時――廣くは第二靜慮の說の如し、差別あるをいへば、[五一]解脫と勝處と喜無量とを除き餘は皆、前の如し――と、即ち聖者が世俗道を以つて第三靜慮の染を離るゝに若し即ち第四靜慮の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫道の時と、即ち聖者が第四靜慮の近分に依りて三無量・淨解脫・後四勝處・前八遍處・不淨觀・念住・三義觀を起す時と、即ち聖者が第四靜慮に依りて第四靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、第四靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、雜修第四靜慮の中間心の時と、即ち聖者が第四靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち聖者が第四靜慮に依りて三無量・淨解脫・後四勝處・前八遍處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、第四靜慮に依りて無礙解及び世俗の無礙解を起し、增長する時と、[五二]無諍・願智・邊際定を起し及び增長する時と、第四靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、即ち聖者が世俗道を以つて第四靜慮の染を離るるに、若し、即ち空無邊處の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九

類の隨二を現修し、未來は世俗を除く七智を修す。

【四七】此の有說に、未來は八智を修すと主張するものなり。(婆沙百七卷、毘曇部十二、頁一一五五參照)

【四八】九無間道中には二法・四類智の隨二を現修し、未來は他心と世俗を除く六智を修す。八解脫道中には二法・四類智の隨二を現修し未來は世俗を除く七智を修す。

【四九】以下の諸文を解釋するに際して、淨定は上地に於ては、下地のを修せざること、聖者はその地の諸道を現起する時は自地と下地との無漏を修することゝを心得置かば了解し易し。(俱舍二六參照)

【五〇】七處善に關しては婆沙百八卷(毘曇部十二、頁二〇二以下)參照すべし。因みに七處善は有漏無漏に通ずる中、今は有漏のを取るなり。此に對して、三義觀は有漏のみにして無漏なるもの無し。

【五一】解脫と勝處と喜無量とは第三靜慮には無きを以つて茲に之を除くなり。

【五二】無諍・願智・邊際定は第四靜慮にのみ在るものなり。

解脫道の時と、卽ち聖者が空無邊處に依りて空無邊處乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、空無邊處に依り時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、卽ち聖者が空無邊處の世俗の解脫・遍處と世俗の念住とを起す時と、空無邊處に依りて[五三]二無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空無邊處に依りて空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、卽ち聖者が世俗道を以つて空無邊處の染を離るるに若し卽ち識無邊處の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫道の時と、卽ち聖者が識無邊處に依りて識無邊處乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、——餘の廣くは空無邊處の說の如し——、卽ち聖者が世俗道を以つて識無邊處の染を離るるに、若し卽ち無所有處の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫道の時と、卽ち聖者が無所有處に依りて無所有處乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、——餘は亦、廣くは空無邊處の說の如し、差別あるをいへば、[五四]遍處を除くことなり——、卽ち聖者が世俗道を以つて無所有處の染を離るるに、若し卽ち非想非非想處の近分を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・九解脫道の時と、卽ち聖者が非想非非想處に依りて非想非非想處の染を離れんが爲めの加行道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、非想非非想處を以つて加行を爲せば彼の加行道の時と、卽ち聖者が非想非非想處解脫・念住を起す時と、非想非非想處に依りて二無礙解・空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、入滅定の想・微細心を起す時との是くの如き等の時に於ては未曾得の非初靜慮の世俗智を起して現在前し、而も無漏の初靜慮を修するも、淨のは非らざるなり。

及び未得の非初靜慮の無漏智が現在前し而も無漏の初靜慮を修するも淨のは非らずとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。卽ち未至定より——初靜慮を除き——乃ち、無所有處に至るな

[五三]　二無礙解とは、義と辯との二無礙解をいひ、こは一切地に在るも、他の法無礙解は欲界と四靜慮にのみ在り、詞無礙解は欲界と初靜慮の二地にのみ在るなり。

[五四]　遍處の中前八遍處は第四靜慮に在り、第九・第十遍處は各々、空無邊處、識無邊處にありて、無所有處には遍處無きが故に之を除くなり。

り。謂く、已離欲染にして[五五]未至定に依りて正性離生に入るものの道類智の時と、未至定に依りて初靜慮乃至無所有處の染を離るる一切の無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るる九無間道・八解脫道の時と、已離欲染の信勝解が、未至定に依りて練根して見至と作る無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が未至定に依りて練根して不動と作る九無間道・[五六]八解脫道の時と、靜慮中間に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の三心の頃と、道現觀四心の頃と、靜慮中間に依りて初靜慮乃至無所有處の染を離るる一切の無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るる九無間道・八解脫道の時と、靜慮中間に依りて信勝解が練根して見至と作る無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作る九無間道・八解脫道の時と、第二靜慮に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の三心の頃と、道現觀四心の頃と、第二靜慮に依りて第二靜慮乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば、一切の加行・無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば、諸の加行道・九無間道・八解脫道の時と、第二靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作るに若し無漏を加行と爲せば、彼の加行・無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、雜修第二靜慮の初後の心の時と、第二靜慮に依りて無漏の他心智通と無漏の念住と及び無漏の二無礙解とを起し及び增長する時と、——第二靜慮に依るが如く、是くの如く、第三靜慮に依り第四靜慮に依ることを廣說することも、亦、爾り、差別あるをいへば、即ち彼の上の染を離るることなり——、空無邊處に依りて空無邊處乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば、一切の加行・無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、空無邊處に依りて時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、無漏の空無邊處解脫と無漏の念住と及び無漏の二無礙解とを起し增長する時と——空

【五五】未至定に依りて正性離生に入るが故に非初靜慮の無漏智が現在前し、而も已離欲染者なるが故に、道類智の時は未來の無漏の初靜慮を修す、されど修道初念の道類智の時は未來に世俗智を修せざるが故に、淨の初靜慮を修すること無きなり。

【五六】第九解脫道を說かざるは、時解脫が練根して不動と作る第九解脫道の時は、未來に世俗智を修するが故に今の場合、之を說けば、淨の初靜慮を修することゝなるが故なり。

無邊處に依るが如く、是くの如く識無處邊に依り無所有處に依るも亦、爾り。差別あるをいへば、卽ち彼の上の染を離るることなり——、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非初靜慮の無漏智を起して現在前し、而も無漏の初靜慮を修するも淨のは非らざるなり。

【本論】〔五七〕(三)有るは淨の初靜慮を修し亦、無漏のをも修するものあり。謂く、未得の淨の初靜慮を現在前して而も無漏のを修すると、若しくは未得の無漏の初靜慮を現在前して而も淨のを修すると、若しくは、未得の非初靜慮の世俗智かと無漏智かとの彼を現在前して而も淨の初靜慮と及び無漏のをとを修するとなり。

若し未得の淨の初靜慮を現在前して而も無漏のを修すとは、謂く聖者が世俗道を以つて欲界の染を離るる最後に根本地を起す解脫道の時と、卽ち聖者が初靜慮に依りて初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、初靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、雜修初靜慮の中間心の時と、卽ち聖者が初靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、卽ち聖者が初靜慮に依りて四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す——有るが說く「亦、持息念をも起す」と——時と、初靜慮に依りて無礙解及び世俗の無礙を起し增長する時と、初靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時との是くの如き等の時に於ては、未曾得の淨の初靜慮を起して現在前し、而も無漏のを修するなり。

若しくは未得の無漏の初靜慮を現在前して而も淨のを修すとは、謂く初靜慮に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅・現觀の各の〔五八〕一心の頃と、若し無漏道を以つて欲界の染を離るる最後に根本地を起す解脫道の時と、初靜慮に依りて初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し無漏を加

【五七】淨の初靜慮を修し亦、無漏の初靜慮を修する場合。こは四句中の第三句なり。

【五八】三類智の現觀邊の世俗智を起す時をいふ。

行と爲せば彼の加行道の時と、【五九】初靜慮に依りて阿羅漢果を得し初めて盡智を起す時と、初靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道及び最後の解脫道の時と、雜修初靜慮の初後の心の時と、初靜慮に依りて無漏の他心智通・無漏の念住・無漏の無礙解を起し增長する時との是くの如き等の時に於ては、未曾得の無漏の初靜慮を起して現在前し而も淨のを修するなり。

若しくは未得の非初靜慮の世俗智を現在前し而も淨の初靜慮と及び無漏のとを修すとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。即ち未至定と靜慮中間となり。謂く、聖者が世俗道を以つて欲界の染を離るるに、即ち未至定に依りて最後の解脫道を起す時と、未至定に依りて初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、未至定に依りて已離欲染の信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、已離欲染の聖者が未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起し、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、即ち聖者が靜慮中間に依りて初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、靜慮中間に依り信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、即ち聖者が靜慮中間に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起し、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時との是くの如き等の時に於ては、未曾得の非初靜慮の世俗智を起して現在前し、而も淨の初靜慮及び無漏のを修するなり。

及び未得の非初靜慮の無漏智を現在前し而も淨の初靜慮及び無漏を修すとは、此の中、餘の地を

【五九】初靜慮に依るが故に無漏の初靜慮を得し、盡智の時なるが故に九地の有漏の功德を修するが故に、　の初靜慮をも修することゝなるなり。（但し、上地に生ずれば必ず下地の有漏を修せず倶舍二六）

無智の名を以つて說くなり。卽ち未至定より——初靜慮を除き——乃ち無所有處に至るなり。謂く、無漏道を以つて欲界の染を離るに、卽ち未至定に依りて最後の解脫道を起す時と、未至定に依りて初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、未至定に依りて阿羅漢果を得し初めて盡智を起す時と、未至定に依りて已離欲染の信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、時解脫が練根して不動と作るに、若し無漏を加行となせば、彼の加行道及び最後の解脫道の時と、已離欲染の聖者が未至定に依りて無漏の念住及び無漏の無礙解を起し增長する時と、靜慮中間に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各一心の頃と、靜慮中間に依り初靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道の時と、靜慮中間に依り阿羅漢果を得し、初めて盡智を起す時と靜慮中間に依りて信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、時解說が練根して不動と作るに若し無漏を加行と爲せば彼の加行道及び最後の解說道の時と、靜慮中間に依りて無漏の念住及び無漏の無礙解を起し增長する時と、第二靜慮に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の一心の頃と、第二靜慮に依りて阿羅漢果を得し初めて盡智を起す時と、第二靜慮に依りて時解脫が練根して不動と作る最後の解脫道の時と、——第二靜慮に依るを說くが如く、第三・第四靜慮靜慮に依るも亦、應に是くの如し——說くべし、空無邊處に依りて阿羅漢果を得し初めて盡智を起す時と、空無邊處に依りて時解脫が練根して不動と作る最後の解脫道の時と、——空無邊處に依るを說くが如く、識無邊處・無所有處に依るも亦、應に是くの如く說くべきなり——、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非初靜慮の無漏智を起して現在前し、而も淨の初靜慮及び無漏のを修するなり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十三

（定蘊第七中、縁納息第二之三）

第八節　淨の初靜慮と無漏の初靜慮との修習得習に關する論究（續き）[一]

【本論】[二](四)有るは淨の初靜慮を修するにも不らず、亦、無漏のを修するにも非ざるあり。謂く、已得の非初靜慮の世俗智と無漏智とを現在前するときと、若しくは未得の非初靜慮の世俗智と無漏智との彼れを現在前するも、而も淨の初靜慮と無漏のとを修せざるときと、若しくは一切の染汚心・無記心を現在前するときと、若しくは無想定・滅盡定に住するときと、無想天に生ずるときとなり。

[三]已得の非初靜慮の世俗智を現在前するときとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。即ち欲界・未至定より――初靜慮を除き――乃ち非想非非想處に至るなり。謂く、此の諸地に曾得の世俗の功德を現在前する時、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。又、初靜慮に非ざるが故に、淨と無漏との初靜慮に於て俱に修するの義無きなり。

[四]已得の非初靜慮の無漏智を現在前するときとは、此の中、餘の地を亦、智の名を以つて說くなり。即ち未至定より――初靜慮を除き――乃ち無所有處に至るなり。謂く、此の諸地の曾得の無漏の功德が現在前する時は、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。又、初靜慮に非ざるが故に、淨と無漏との初靜慮に於て俱に修するの義無きなり。

[五]若しくは未得の非初靜慮の世俗智を現在前するも、而も淨の初靜慮と及び無漏のとを修せざるときとは、此の中、餘の地を亦、智の名を以つて說くなり。即ち欲界・未至定より――初靜慮を除き

【一】本節は全然前節の續行なり。

【二】淨と無漏との初靜慮を共に修せざる場合。こは、第四俱非句なり。

【三】已得の非初靜慮の世俗智を現在前する時、淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて――。

【四】已得の非初靜慮の無漏智を現在前する時、淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて――。

【五】未得の非初靜慮の世俗智を現在前するも而も、淨の初靜慮と及び無漏とを修せざる時に就き。――

――乃ち非想非非想處に至るなり。謂く、異生が欲界の未曾得の不淨觀・持息念・念住・三義觀と及び餘の聞・思所成の慧とを起して現在前する時と、異生が欲界の染を離るる諸加行道・九無間道・八解脫道の時と、卽ち異生の未離欲染のものが未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す時と、已離欲染のものが、未至定に依りて煖・頂・忍・世第一法を起す時と、靜慮中間に依りて煖・頂・忍・世第一法を起す時と、卽ち異生が第二靜慮の近分に依りて加行を爲して初靜慮の染を離るる彼の加行道・九無間道・九解脫道の時と、卽ち異生が第二靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・三解脫道の時と、四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、卽ち異生が第二靜慮の染を離るる一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち異生が第三靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・三解說道の時と、三無量・不淨觀・念性・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、卽ち異生が第三靜慮の染を離るる一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち異生が第四靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・三解脫道の時と、三無量・淨解脫・後四勝處・前八遍處・不淨觀・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す時と、卽ち異生が第四靜慮の染を離るる一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち異生が空無邊處の解脫・遍處と及び念住とを起す時と、卽ち異生が空無邊處・識無邊處・無所有處の染を離るる一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち異生が識無邊處・無所有處・非想非非想處の解脫と念住と、及び識無邊處遍處とを起す時と、若しくは諸の聖者にして欲界の未曾得の不淨觀・持息念・念住・三義觀と及び餘の聞・思所成の慧とを起して現在前する時と、卽ち聖者が世俗道を以つて欲界の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば諸の加行道・九無間道・八解脫道の時と、無漏道を以つて欲界の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、未離欲染の信勝解が練根して見至　作るに若し世俗を

加行と爲せば彼の加行道の時と、卽ち聖者の未離欲染のものが未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、入滅定の微微心を起す時との是くの如き等の時に於て、未曾得の非初靜慮の世俗智を起して現在前するも、淨の初靜慮と及び無漏のとを修せざるなり。

六 若しくは未得の非初靜慮の無漏智を現在前するも而も淨の初靜慮と及び無漏のとを修せざるときとは、此の中、餘の地を亦、智の名を以つて說く。謂く、未離欲染にして正性離生に入るものの四諦現觀の各の四心の頃と、已離欲染にして未至定に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の四心の頃と、道現觀の三心の頃と、無漏道を以つて欲界の染を離るるに若し無漏を加行と爲せば諸加行道・九無間道・八解脫道の時と、未離欲染の信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加き行と爲せば、彼の加行・無間・解脫道の時と、未離欲染のものが無漏の念住を起す時との、是くの如き等の時に於て未曾得の非初靜慮の無漏智を起して現在前するも、淨の初靜慮と及び無漏のとを修せざるなり。

七 若しくは一切の染汚の心を現在前するときとは、三界の煩惱・隨煩惱と相應する心を謂ふ。彼の順退の體性は沈重にして懈怠と相應するに、要ず順勝進の體性は輕擧にして精進と相應して、方に能く修するを以つての故なり。

八 一切の無記心を現在前するときとは、三界の無覆無記心を謂ふ。彼れは不堅・不住・不實にして、其の性羸劣なること朽ちたる敗種の如くなるに、要ず、堅・住・實にして其の性强盛なるものが、方に能く彼等を修するを以つての故なり。

九 若しくは無想定・滅盡定に住するときとは、彼れは無心なるに、要ず、有心なるに由りて方に能く修するを以つての故なり。

【六】未得の非初靜慮の無漏智を現前する淨と無漏との初靜慮を修せざるきに就きて。

【七】一切の染汚心を現前する時、淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて。

【八】一切の無記心を現前する時、淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて。

【九】無想定・滅盡定に住する時は淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて。

一〇 無想天に生ずるときとは、有るが説く「彼の天にては盡衆同分のあいだ善心起らざるなり」と。有るが説く「彼の天の善心は、起ることありと雖も而も修の所依に非ざるが故に、修の義無きなり」と。

一一 此の中には但、修地に生在して而も修せざるもののみを説けり。然るに、餘處に生じて亦、修せざるものあるも、知り易きが故に、説かざるなり。

一二 【本論】初靜慮につきて説くが如く、第二・第三靜慮につきて説くことも亦、是くの如し。

此の諸地は下地の染を離るる最後の解脫道の時に於て、皆、根本地に入ること有り、入らざること有るを以ての故なり。

一三 第九節　淨の第四靜慮と無漏の第四靜慮との習修得・修に關する論究

【本論】若し淨の第四靜慮を修せば、彼れは亦、無漏のをも修するや。設し無漏の第四靜慮を修せば彼れは亦、淨のをも修するや。答ふ、應に四句を作すべきなり。

(一)有るは一四淨の第四靜慮を修するも、無漏のを修するに非ざるものあり。謂く已得の淨の第四靜慮を現在前するときと、若しくは未得の淨の第四靜慮を現在前するも而も無漏のを修せざるときとなり。

一五 已得の淨の第四靜慮を現在前するときとは、謂く異生と、及び聖者の或は學乃至或は如來とが、現法樂住等の爲めの故に、曾得の世俗の第四靜慮を起して現在前する時は、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。然も現前する位は卽ち是れ習修なるが故に、淨の第四靜慮を修すと名くることを得るなり。

一六 若しくは未得の淨の第四靜慮を現在前するも而も無漏のを修ぜざるときとは、謂く、異生が第三靜

【一〇】 無想天に生ずるとき、淨と無漏との初靜慮を修せざるに就きて。

【一一】 發智論の本文に、淨と無漏との初靜慮を共に修せざる場合の中、地に生ずるものとしては、只無想天に生ずるもの丶みを説くも、北俱盧洲等を説かざる所以は、北俱盧洲の如きは、地其のものが既に欲界に在りて修地に非ざるを以て、玆に、敢えて論議を要せず。然るに、無想天の地は第四靜慮地に在り、從つて修地なるを以て、或はこ丶にても淨と無漏との初靜慮等を修せざるやとの疑ひを充分に起し得べきが故に、玆にこれを擧げて修せざる所以を明瞭にせしなりとなり。

【一二】 淨の第二、第三靜慮を修する時、彼は亦、無漏のをも修するや等に就きて。

【一三】 本節は、發智論の頌文の「修」の中の後半にして、淨と無漏との第四靜慮の習修と得修とに就きての關係を四句分別に依りて明かにする段なり。

【一四】 淨の第四靜慮を修するも、無漏のを修せざる場合。こは、淨の第四靜慮を修するものは、無漏のをも修するや否やに就きての四句分別中の第一單句なり

慮の染を離るる最後の解脫道の時と及び第四靜慮の染を離れんが爲めに、若し第四靜慮を加行と爲せば彼の加行道の時と、卽ち異生が第四靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・三解脫道の時と、三無量・淨解脫・後四勝處・前八遍處・不淨觀・念住・三義觀・煗・頂・忍・世第一法の時との是くの如き等の時に於ては、未曾得の淨の第四靜慮を起して現在前するも而も無漏のを修せざるなり。

一七 **【本論】**（二）有るは無漏の第四靜慮を修するも、淨のを修するに非ざるものあり。謂く已得の無漏の第四靜慮を現在前するときと、若しくは未得の無漏の第四靜慮を現在前するも而も淨のを修せざるときと、若しくは未得の非第四靜慮の世俗智と及び未得の非第四靜慮の無漏智との彼れを現在前するも、而も無漏の第四靜慮を修して淨のは非ざるときとなり。

一八 已得の無漏の第四靜慮を現在前するときとは、謂く、諸の聖者の或は學乃至或は如來が、現法樂住等の爲めの故に曾得の無漏の第四靜慮を起して現在前する時は、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。然も現前する位は卽ち是れ習修なるが故に、無漏の第四靜慮を修すと名くることを得るなり。

一九 若しくは未得の無漏の第四靜慮を現在前するも而も淨のを修せざるときとは、謂く第四靜慮に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の三心の頃と、道現觀の四心の頃と、聖者が第四靜慮に依りて第四靜慮乃至無所有處の染を離るる一切の無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るる九無間道・八解脫の時と、第四靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作る無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作る九無間道・八解脫道の時との、是くの如き等の時に於て未曾得の無漏の第四靜慮を起して現在前するも而も淨のを修せざるなり。

【一五】 已得の淨の第四靜慮を現前する時、無漏のを修せざるに就きて――。

【一六】 未得の淨の第四靜慮を現前するも而も無漏のを修せざる時に就きて――。

【一七】 **無漏の第四靜慮を修するも、淨のを修せざる場合。**こは、若し淨の第四靜慮を修するものは、亦、無漏のをも修するや否やに就きての四句分別中の第二單句なり。

【一八】 已得の無漏の第四靜慮を現前する時、無漏の第四靜慮を修するも、淨のを修せざるに就きて――。

【一九】 未得の無漏の第四靜慮を現前するも、淨のを修せざる時に就きて――。

三〇若しくは未得の非第四靜慮の世俗智を現在前するも、而も無漏の第四靜慮を修して淨のは非らさるときとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり、即ち未至定より――第四靜慮を除き――乃ち非想非非想處に至るなり。謂く聖者が未至定に依りて第四靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、未至定に依りて、已に第三靜慮の染を離れし信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、已に第三靜慮の染を離れし聖者が未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、即ち聖者が初靜慮に依りて第四靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、初靜慮に依りて已に第三靜慮の染を離れし信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、雜修初靜慮の中間心の時と、已に第三靜慮の染を離れし聖者が、初靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち彼れが初靜慮に依りて四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、即ち聖者が、靜慮中間に依りて第四靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、靜慮中間に依りて已に第三靜慮の染を離れし信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、已に第三靜慮の染を離れし聖者が靜慮中間に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、――「初靜慮に依

【三〇】未得の非第四靜慮の世俗智を現前するも而も無漏の第四靜慮を修して、淨のは非らざるに就きて――。

りて」につきて說くが如く、是くの如く「第二靜慮・第三靜慮に依りて」につきて說くことも亦、爾り、差別あるをいへば、第三靜慮に依るにつきては喜無量・初二解脫・前四勝處を除き、餘は皆、前說の如し――、卽ち聖者が世俗道を以つて第四靜慮の染を離るるに、若し卽ち空無邊處の近分を以つて加行と爲せば、一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち彼れが世俗道を以つて空無邊處・識無邊處・無所有處の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、卽ち彼れが無色定に依りて無漏道を以つて四無色の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、無色定に依りて時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、卽ち聖者が無色の世俗の解脫と及び後の二遍處とを起す時と、卽ち彼れが無色定に依りて世俗の念住・二無礙解と及び世俗の二無礙解とを起し增長する時と、空空・無願無願・無相無相を起し、及び增長する時と、入滅定の想と微細との心を起す時との、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非第四靜慮の世俗智を起して現在前するも而も無漏の第四靜慮を修して淨のは非らざるなり。

〔三〕及び未得の非第四靜慮の無漏智を現在前するも而も無漏の第四靜慮を修して淨のは非らずとは、此の中、餘の地を智の名を以つて說くなり。卽ち未至定より――第四靜慮を除き――乃ち無所有處に至るなり。謂く未至定に依りて第四靜慮乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るるに若し無漏を加行と爲せば、彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、未至定に依りて已に第三靜慮の染を離れし信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、卽ち聖者にして已に第三靜慮の染を離れしものが、未至定に依りて無漏の念住・無漏の無礙解を起し增長する時と、卽ち聖者が初靜慮に依りて第四靜慮乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解

【三】未得の非第四靜慮の無漏智を現在前するとき、而も無漏の第四靜慮を修して、淨のは非らざるに就きて――。

脫道の時と、非想非非想處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、初靜慮に依りて已に第三靜慮の染を離れし信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脫道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、雜修初靜慮の初後の心の時と、即ち聖者にして已に第三靜慮の染を離れしものが初靜慮に依りて無漏の他心智通・無漏の念住と及び無漏の無礙解とを起し增長する時と、——靜慮中間は未至定の說の如く、第二・第三靜慮は初靜慮の說の如し——、即ち聖者が空無邊處に依りて空無邊處乃至無所有處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、非想非非想處の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、空無邊處に依りて時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、無漏の空無邊處解脫を起すと、空無邊處に依りて、無漏の念住及び無漏の二無礙解を起して增長するとの時と、——「空無邊處に依りて」につきて說くが如く、是くの如く「識無邊處・無所有處に依りて」につきても亦、爾り、差別あるをいへば、即ち彼の上の染を離るることなり——、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非第四靜慮の無漏智を起して現在前するも而も無漏の第四靜慮を修して淨のは非らざるなり。

三二
【本論】(三二)有るは淨の第四靜慮を修し亦、無漏のをも修するものあり。謂く未得の淨の第四靜慮を現在前して、而も無漏のを修すると、若しくは未得の無漏の第四靜慮を現在前して而も淨のを修するときと、若しくは未得の非第四靜慮の無漏智を現在前するも而も淨の第四靜及び無漏のを修するとなり。

三三
未得の淨の第四靜慮を現在前して而も無漏のを修するときとは、謂く聖者が世俗道を以つて第三靜慮の染を離るる最後の解脫道の時と、即ち彼れが第四靜慮に依りて第四靜慮乃至非想非々想處の

【三二】淨と無漏との第四靜慮を俱に修する場合。こは、淨の第四靜慮を修するものは、無漏のをも修するや不やに就きての四句分別中の第三俱是句なり。

【三三】未得の淨の第四靜慮を現前して、而も無漏のを修する時に就きて——。

染を離れんが爲めに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、第四靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作り、時解脫が練根して不動と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、雜修第四靜慮の中間心の時と、即ち聖者が第四靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち聖者が第四靜慮に依りて三無量・淨解脫・後四勝處・前八遍處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、第四靜慮に依りて無礙解及び世俗の無礙解を起し增長する時と、無諍・願智・邊際定を起し及び增長する時と、第四靜慮に依りて空空・無願無願・無相無相を起し及び增長する時と、是くの如き等の時に於ては、未曾得の淨の第四靜慮を起して現在前して而も無漏のを修するなり。

[二四] 若しくは未得の無漏の第四靜慮を現在前して而も淨のを修するときは、謂く第四靜慮に依りて正性離生に入るものの苦・集・滅現觀の各の一心の頃と、第四靜慮に依りて第四靜慮乃至非想非非想處の染を離れんが爲めに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、第四靜慮に依りて阿羅漢果を得し初めて盡智を起す時と、第四靜慮に依りて信勝解が練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、時解脫阿羅漢が練根して不動と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道と及び最後の解脫道との時と、雜修第四靜慮の初後の心の時と、第四靜慮に依りて無漏の他心智通と、無漏の念住と及び無漏の無礙解とを起し增長する時との、是くの如き等の時に於ては、未曾得の無漏の第四靜慮を起して現在前するも而も淨のを修するなり。

[二五] 若しくは未得の非第四靜慮の無漏智を現在前するも而も淨の第四靜慮と及び無漏とを修するときとは、此の中、餘の地を智の名を以て說くなり。即ち未至定より——第四靜慮を除きて——乃ち無所有處に至るなり。謂く未至定乃至第三靜慮に依りて、第三靜慮の染を離るる最後の解脫道の時と、即ち彼の地に依りて阿羅漢果を得する初盡智の時と、及び彼の地に依りて時解脫阿羅漢が練根して

〔二四〕未得の無漏の第四靜慮を現前して而も淨のを修するときに就きて——。

〔二五〕未得の非第四靜慮の無漏智を現前するも、而も淨と無漏との第四靜慮を修する時に就きて——。

不動と作る最後の解脱道の時と、無色定に依りて阿羅漢果を得する初盡智の時と、即ち彼の地に依りて時解脱阿羅漢が練根して不動と作る最後の解脱道の時との、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非第四靜慮の無漏智を起して現在前するもの、而も淨の第四靜慮と及び無漏のとを修するなり。

[二六] 【本論】（四）有るは淨の第四靜慮を修せず亦、無慮のをも修するに非ざるものあり。謂く、已得の非第四靜慮の世俗智と無漏智とを現在前するときと、若しくは未得の非第四靜慮の世俗智と無漏智との彼れを現在前するも、而も淨の第四靜慮と及び無漏のとを修せざるときと、若しくは一切の染汚心・無記心を現在前するときと、若しくは無想定・滅盡定に住すると、無想天に生ずるときとなり。

[二七] 已得の非第四靜慮の世俗智を現在前するときとは、此の中、餘の地を智の名を以て說くなり。即ち未至定より――第四靜慮を除き――乃ち非想非想想處に至るなり。謂く、此の諸地の曾得の世俗の功德を現在前する時は、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。又、第四靜慮に非ざるか故に、淨と無漏との第四靜慮に於て俱に修するの義無きなり。

[二八] 已得の非第四靜慮の無漏智を現在前するときとは、此の中、亦、智の名を以て而も餘の地を說くなり。即ち未至定より――第四靜慮を除き――乃ち無所有處に至るなり。謂く、此の諸地の曾得の無漏の功德を現在前する時、彼の勢分は尙、自の第二刹那にすら及ばず、況んや能く餘の未來の功德を修せんや。又、第四靜慮に非ざるが故に、淨と無漏との第四靜慮に於て俱に修の義無きなり。

[二九] 若しくは未得の非第四靜慮の世俗智を現在前して而も淨の第四靜慮と無漏のとを修せざるときとは、此の中、亦、餘の地を說きて智と名くるなり。即ち欲界より――第四靜慮を除き――乃ち非想非非想處に至るなり。[三〇] 謂く、異生が欲界の未曾得の不淨觀・持息念・念住・三義觀と及び餘の聞・思所

【二六】淨と無漏との第四靜慮を俱に修せざる場合。こは、淨の第四靜慮を修するものは、無漏のをも修するや否やに就きての四句分別中の、第四俱非句なり。

【二七】已得の非第四靜慮の世俗智を現前する時、淨と無漏との第四靜慮を修せざるに就きて――。

【二八】已得の非第四靜慮の無漏智を現前するとき、淨と無漏との第四靜慮を修せざるに就きて――。

【二九】未得の非第四靜慮の世俗智を現前するも而も、淨と無漏との第四靜慮を修せざる時に就きて――。

【三〇】以下時に、異生の場合。

成の慧とを起して現在前する時と、即ち異生が欲界の染を離るる一切の加行・無間・解脫道の時と、即ち異生が未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す時と、即ち異生が初靜慮に依りて初靜慮の染を離れんが爲めに加行道を起す時と、初靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・三解脫道の時と、四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す——有るが說く「亦、持息念をも起す」と——時と、即ち異生が靜慮中間に依りて初靜慮の染を離れんが爲めに加行道を起す時と、靜慮中間に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・念住・三義觀・煖・頂・忍・世第一法を起す時と、——「初靜慮に依るに」つきて說くが如く、是くの如く「第二靜慮・第三靜慮に依るに」つきて說くことも亦、爾り、差別あるをいへば、即ち彼の上の染を離るることと、及び第三靜慮にては解脫・勝處・喜無量を除くこととなり——、即ち異生が第四靜慮の近分に依りて第三靜慮の染を離るる彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、即ち異生が空無邊處の近分に依りて、第四靜慮の染を離るる彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、即ち異生が空無邊處に依りて、下地の染を離るる第九解脫道を起すと及び自地の染を離れんが爲に加行道を起すとの時と、空無邊處の解脫・遍處と及び念住とを起す時と、即ち異生が識無邊處の近分に依りて空無邊處の染を離るる彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、——空無邊處に依るが如く、是くの如く識無邊處・無所有處に依るも亦、爾り、差別あるをいへば無所有處は遍處を除くことなり——、即ち異生が非想非非想處の近分に依りて無所有處の染を離るる彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、即ち異生が非想非非想處に依りて、下地の染を離るる第九解脫道を起すと及び非想非非想處解脫及び念住を起すとの時と、[三二] 若し聖者が欲界の未曾得の不淨觀・持息念・念住・三義觀と及び餘の聞・思所成の慧とを起して現在前する時と、即ち彼の聖者が世俗道を以て欲界乃至第二靜慮の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、無漏道を以

【三二】特に、聖者が未得の第四靜慮の世俗智を現前するも、而も、淨と無漏との第四靜慮を修せざる場合に就きて——

て欲界乃至第二靜慮の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、即ち彼の聖者が世俗道を以て第三靜慮の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、無漏道を以て第三靜慮の染を離るるに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が未至定に依りて練根して見至と作るに、若し世俗を解行と爲せば彼の加行道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、未至定に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が初靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、初靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち彼れが初靜慮に依りて四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が、靜慮中間に依りて練根して見至と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、靜慮中間に依りて三無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・持息念・世俗の念住・三義觀・七處善を起す時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が第二靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し世俗を加行と爲せば、彼の加行道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが第二靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・二解脫道と及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち第二靜慮に依りて四無量・初二解脫・前四勝處・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が第三靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し世俗を加行と爲せば彼の加行道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、第三靜慮に依りて五通を引發する諸加行道・五無間道・[三三]二解脫道と

【三三】二は大正本に「三」とあるも三本宮本には「二」とあるを以て、二と訂正せり。

及び世俗の他心智通の解脫道との時と、即ち第三靜慮に依りて三無量・不淨觀・世俗の念住・三義觀・七處善を起す――有るが說く「亦、持息念をも起す」と――時と、入滅定の微微心を起す時との、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非第四靜慮の世俗智を起して現在前して淨の第四靜慮と及び無漏のとを修せざるなり。

三三 及び未得の非第四靜慮の無漏智を現在前するも、而も淨の第四靜慮と及び無漏のとを修せざるときとは、此の中、餘の地を亦、智の名を以て說くなり。即ち未至定より乃ち第三靜慮に至るなり。謂く、未至定乃至第三靜慮に依りて正性離生に入るものの四諦現觀の各の四心の頃と、無漏道を以て欲界の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の一切の加行・無間・解脫道の時と、世俗道を以て欲界の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道の時と、未至定に依りて初と第二との靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、第三靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫の時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が、未至定に依りて練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の一切の加行・無間・解脫道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、未至定に依りて無漏の念住を起す時と、初靜慮に依りて初と第二との靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、第三靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が初靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脫道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、初靜慮に依りて無漏の他心智通と及び無漏の念住とを起す時と、靜慮中間に依りて初と第二との靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脫道の時と、第三靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脫道の時と、未だ第三靜慮の染

【三三】未得の非第四靜慮の無漏智を現前するも、而も、淨と無漏との第四靜慮を修せざるときに就きて――。

を離れざる信勝解が靜慮中間に依りて練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脱道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、靜慮中間に依りて無漏の念住を起す時と、第二靜慮に依りて第二靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば一切の加行・無間・解脱道の時と、第三靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脱道の時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が第二靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脱道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、第二靜慮に依りて無漏の他心智通と及び無漏の念住とを起す時と、第三靜慮に依りて第三靜慮の染を離るるに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行道・九無間道・八解脱道の時と、未だ第三靜慮の染を離れざる信勝解が、第三靜慮に依りて練根して見至と作るに、若し無漏を加行と爲せば彼の加行・無間・解脱道の時と、即ち彼の聖者にして未だ第三靜慮の染を離れざるものが、第三靜慮に依りて無漏の他心智通と及び無漏の念住とを起す時との、是くの如き等の時に於ては、未曾得の非第四靜慮の無漏智を起して現在前し、而も淨の第四靜慮と及び無漏のとを修せざるなり。

三四 若しくは一切の染汚心乃至無想天に生ずとは、三五 前の初靜慮の中に說けるが如し。

三六 【本論】 第四靜慮につきて說くが如く、乃至無所有處につきて說くことも亦、是くの如し。

此の諸地は下地の染を離るる最後の解脱道の時に於て、皆必ず根本地に入るを以ての故なり。

三七 問ふ、何が故に、近分に依りて欲界乃至第二靜慮の染を離るる最後の解脱道は、或は即ち近分なり、或は根本に入るといふに、第三靜慮、乃至無所有處の染を離るる最後の解脱道は決定して根本地に入るや。答ふ、下の三近分は根本地と受に差別有るが故に、根本地を求得する時に於て、即ち能く入る者有り、入ること能はざる者有るも、上の五の近分は根本地と受に差別無きが故に、根本地

【三四】 一切の染汚心乃至無想天に生ずる時、淨と無漏との第四靜慮を修せざるに就きて——。

【三五】 前節の第四俱非句の最後を見よ。

【三六】 空・識無邊處・無所有處各自の淨を修すると無漏を修するとに就きての四句分別。

【三七】 近分に依りて第二靜慮以下の染を離るゝ最後の解脱道は、或は近分或は根本地なるに、第三靜慮以上の染を離るゝ最後の解脱道は、決定して根本地に入るとさるゝ所以。

を求得する時に於て定んで卽ち能く入るなり。諸の瑜伽師にして、近分地に依りて下染を離るる者は、必ず自の根本地に於て欣樂を生じ、心力の能く起す者は、必ず卽ち起すが故なり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十四

卷の第百六十五（第七編　定蘊）

（定蘊、第七中、緣納息第二之四）

一 第十節　無漏定に初めて入る時所得の未來の無漏の心々所法の諸門分別

【本論】 若し最初に無漏の初靜慮に入り……乃至廣說――。

二 初に四種有り、一に正性決定に入るの初、二に得果の初、三に離染の初、四に轉根の初なり。此の中、三 二の初に依りて論を作す、謂く。得果の初と轉根の初となり。得果の初とは、阿羅漢果を得する初盡智の時をいひ、轉根の初とは、時解脫阿羅漢が練根して不動と作る最後の解脫道の時をいふ。

問ふ、何が故に、四の初の中に於て、但、二の初のみに依りて論を作すや。答ふ、若し爾の時、一切地の功德を修するものなれば、此の中、之に依りて論を作すなり。唯、二の初の位にのみ、能く是の如く修するが故に、依りて論を作すなり。

【本論】 四 若し最初に無漏の初靜慮に入れば、爾の時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に有尋有伺と言ふべきや。答ふ、彼は或は有尋有伺なり、或は無尋唯伺なり、或は無尋無伺なり。

有尋有伺なりとは、所修の未至定と及び初靜慮とをいひ、無尋唯伺なりとは、所修の靜慮中間をいひ、無尋無伺とは、所修の上三靜慮と下三無色とをいふ。

【本論】 五 若し最初に無漏の第二靜慮に入れば、爾時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に喜根と相應すと言ふべきや。答ふ、彼は或は樂根と相應し、或は喜根と相應し、或は捨根と相應す。

【一】本節は發智頌文の「初入」に相當す。卽ち「最初に無漏の初靜慮乃至無所有處に入るものの、其の時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法を種々分別する段なり。而して、かかる分別の標準を大約三段に分てり。卽ち、初靜慮の場合には所得の未來の無漏の一切の心々所法につきて、有尋有伺等を分別し、次に第二・第三・第四靜慮の場合には、樂・喜・捨等の根相應を分別し、最後に四無色の場合には、夫々四無色の所攝分別をなせり。

【二】初の四種に就きて

【三】特に得果と轉根との二の初にて作論する所以。

【四】無漏の初靜慮の初入時、得修の一切の無漏の心心所の有尋有伺等の分別。

【五】無漏の第二靜慮初入時、得修の無漏の心心所法の根相應分別。

樂根と相應すとは、所修の第三靜慮のをいひ、喜根と相應すとは、所修の初と及び第二靜慮とのをいひ、捨根と相應すとは、所修の未至定と靜慮中間と、第四靜慮と下三無色とのをいふ。

【本論】[六]若し最初に無漏の第三靜慮に入れば、爾の時、所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に樂根と相應すと言ふべきや。答ふ、彼は或は樂根と相應し、或は喜根と相應し、或は捨根と相應す。

義は前譯の如し。

【本論】[七]若し最初に無漏の第四靜慮に入れば、爾の時、所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に捨根と相應すと言ふべきや。答ふ、彼は或は樂根と相應し、或は喜根と相應し、或は捨根と相應するなり。

義は前釋の如し。

【本論】[八]若し最初に無漏の空無邊處に入れば、爾の時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に空無邊處の攝なりと言ふべきや。答ふ、彼は或は空無邊處の攝なり、或は識無邊處の攝なり、或は無所有處の攝なり。

空無邊處の攝なりとは、所修の空無邊處の無漏の心々所法をいひ、識無邊處の攝なりとは、所修の識無邊處のをいひ、無所有處の攝なりとは、所修の無所有處のをいふ。

【本論】[九]若し最初に無漏の識無邊處に入れば、爾の時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に識無邊處の攝なりと言ふべきや。答ふ、彼は或は空無邊處の攝なり、或は識無邊處の攝なり、或は無所有處の攝なり。

義は前釋の如し。

【六】無漏の第三靜慮初入時、得修の無漏の心心所法の根相應分別。

【七】無漏の第四靜慮初入時、得修の無漏の心心所法の根相應分別。

【八】無漏の無色初入時、得修の無漏の心心所法の所攝分別、其の中、此は、無漏の空無邊處に初入する時、所得の未來の無漏の心々所法の所攝分別なり。

【九】無漏の識無邊處初入時所得の未來無漏の心々所法の所攝分別——

【本論】[一〇]若し最初に無漏の無所有處に入れば、爾の時所得の諸餘の未來の無漏の心々所法の彼の一切は、當に無所有處の攝なりと言ふべきや。答ふ、彼は或は空無邊處の攝なり、或は識無邊處の攝なり、或は無所有處の攝なり。

義は前釋の如し。

[一一]問ふ、何が故に、此の中、靜慮に於ては相應を問ひ、無色に於ては攝を問へるや。答ふ、彼の作論者の意欲爾るなり。故に、彼の意に隨つて作論するも、但、法相にのみ違はずんば、便ち責むべからず。有るが說く、「靜慮と無色とに於て、並びに應に倶に問ふべきも、而も問はざるは、當に知るべし此の義有餘なることを」と。有るが說く、「種々の文、種々の說を現さんが爲めなり。種々の文、種々の說に由るが故に、義は則ち解し易ければなり」と。有るが說く、「二門・二略・二階・二炬・二明・二光・二種の文影を現ぜんが爲めなり。即ち靜慮に於て相應を說くが如く、無色に於ても亦、爾り。無色に於て攝を說くが如く、靜慮に於ても、亦、爾るなり」と。有るが說く、「靜慮は麤顯にして見易く、知り易きが故に、相應を問ひ、無色は微細にして、了し難く覺し難きが故に、但、攝をのみ問へるなり」と。有るが說く「靜慮には種々相有りて、互に相似せざるが故に相應を問ひ、無色は爾らざるが故に、但、攝のみを問へるなり」と。有るが說く、「[一二]靜慮には種々の受・種々の根有るが故に、相應を問ふも、無色は爾らざればなり」と。有るが說く、「[一三]靜慮には多くの功德有り、[一四]多くの勝利有るが故に、相應を問ふも、無色は爾らざればなり」と。有るが說く、「靜慮には遍緣智有るが故に相應を問ひ、無色には但、自と上とを緣ずる智有るが故に、但、攝のみを問へるなり」と。

[一五]問ふ、何が故に、此の中、靜慮に於ては亦、無色をも攝するに、無色に於ては靜慮を攝せざるや。答ふ、彼の作論者の意欲爾るが故なり、乃至廣說。有るが說く、「靜慮と無色とに於て並びに應に倶

【一〇】無漏の無所有處初入時、所得の未來の無漏の心心所法の所攝分別――

【一一】右の本文中、靜慮に於ては相應を問ひ、無色に於ては攝を問へる所以。

【一二】靜慮に種々の受ありとは樂喜捨等の種々の受あるをいふ。

【一三】靜慮に多くの功德ありとは、四無量、四解脫、八勝處、八遍處、四無礙解、無諍・願智・邊際定等の多くの功德のあること、無色界に勝るをいふ。

【一四】靜慮に四勝利ありとは四靜慮に四勝利ありといふが如きを指す、詳しくは、婆沙第八十卷毘曇部十、頁三九九、參照のこと。

【一五】靜慮に於ては無色を攝するに、無色に於ては靜慮を攝せざる所以。こは右の本文の問答中、無漏の靜慮の初入時、所得の未來の無漏の心心所法の有尋有伺等の分別を論ずる際に、毘婆沙師は、本文に「或は無尋無伺なり」と言へるを解して「所修の上三靜慮と下三無色となり」と謂ひ、無色をも靜慮の未來修として攝したるに對して、無漏の空無邊處初入時所得の未來修の無漏の心心所法を論ずる際は、下三無色のもののみを論じて、靜慮に

に攝すべくして、而も攝を說かざるは、當に知るべし、此の義有餘なることを」と。有るが說く、「種々の文、種々の說を現さんが爲めなり。種々の文、種々の說に由るが故に、義は則ち解し易ければなり」と。有るが說く、「二門・二略・二影・二光を現さんが爲めなり、乃至廣說」と。有るが說く、「無色が靜慮に依屬するは、先に靜慮を得し、後、無色を得するを以てなり。故に、靜慮に於ては亦、無色を攝するも、靜慮は無色に依屬せず、故に無色に於て靜慮を攝せざるなり」と。有るが說く、「靜慮に於ても亦、無色を攝せざるも、無尋無伺等の言には、別の意有るを以ての故にかく言へるなり。謂く、無尋無伺とは、唯、後三靜慮のみを說き、捨根と相應すとは、唯、未至と靜慮中間と及び第四靜慮とのみを說くなり。靜慮と無色との其の相、各々異るを以て、互に相收すと雖も、而も相攝せざるなり」と。有るが說く、「無色に於ても亦、應に靜慮を攝すべし。應に是の說を作すべし、或は未至定の攝なり、乃至或は無所有處の攝なりと。而も說かざるは、無色は靜慮に入るの加行に非ざることを顯さんと欲すればなり。靜慮の現前するは必ずしも無色に因らざるを以ての故に」と。有るが說く、「靜慮地に生ぜば、能く無色を起すも、無色地に生ぜば、靜慮を起すこと能はざればなり」と。有るが說く、「聖者は靜慮に生じて後、無色に生ず容きも、無色に生じて後、靜慮に生じ容きこと無きをもて、是の故に、靜慮に於て無色を攝するも、無色に於ては、靜慮を攝せざるなり」と。

[二六] 第十一節　味相應と淨と無漏との靜慮・無色の相緣論

【本論】　味相應の初靜慮乃至廣說。

[二七] 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、譬喩者の說を止めんと欲すればなり。彼は緣性中に於て明に了せざるが故に、緣は實有に非ずと說くを以て、今、諸緣の自性を顯示して、諸緣は皆是れ實有なることを知らしめんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

言及せざるを以て、今こゝに其の所以をただすなり。

【二六】　本節は發智本文に於ける「緣」論、即ち味相應と淨と無漏との靜慮乃至無色定等が、夫々自地の味相應等の與め、及び他地の其等の與めに幾緣となるやを逐次的に論究する段なり。

而も、こは根本定によりて論じ近分定に依らず。この事は、世俗即ち有漏道を以て、第四靜慮及び下三無色の染を離るゝ場合には、下地の定を緣ずることあるに、これを本論中に說かざるは、それは近分定なればなりと言へるによりて明かなり。

【二七】　論起の所以としての緣性實有說。

【本論】一八味相應の初靜慮は味相應の初靜慮等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに、因・等無間・所緣・增上と爲る。

因緣とは三因、即ち相應・俱有・同類因にして、等無間緣とは、味相應の初靜慮の等無間に、味相應の初靜慮が現在前するをいひ、所緣々とは、味相應の初靜慮は味相應の初靜慮の與めに所緣と爲るをいひ、增上緣とは、不礙生と及び唯、無障とをいふ。

一九此の中、因緣は種子法の如く、等無間緣は開避法の如く、所緣々は任杖法の如く、增上緣は與欲法の如し。

【本論】二〇自地の淨靜慮の與めに、等無間・所緣・增上緣となる。

等無間緣とは、味相應の初靜慮の等無間に、淨の初靜慮[三]の現在前するをいふ、即ち愛・見・慢・疑上靜慮者の如きが、煩惱の等無間に、淨定を現在前するなり。此は則ち總說なり。若し別說すれば、二一淨に四種有り、順退分と順住分と順勝進分と順決擇分とをいふ。此の中、有るが說く、「味相應の等無間に、唯、順退分の淨の靜慮のみ現在前するなり」と。有るが說く、「亦、順住分をも起す」と。所緣々とは、味相應の初靜慮は淨の初靜慮の與めに所緣と爲るをいひ、增上緣とは、不礙生及び唯、無障をいふ。因緣に非ざるは、染汚法は、善法の與めに種子法の如くに非ざるを以ての故なり。

此の義に由るが故に、味相應は自地の淨の與めに、若し總說すれば三緣と爲るも、若し別說すれば、或は三或は二なり。謂く、二二前の二分の與めに三緣と爲り、後の二分の與めに二緣と爲るなり。

【本論】二三自地の無漏の與めに所緣と增上とに爲る。

所緣とは、苦集の類忍 類智品の與めに所緣と爲るをいひ、增上とは、前說の如し。因に非ざるは、有漏法は無漏法の與めに種子法の如きに非ざるが故にして、等無間に非ざるは、煩惱の等無間に聖

【一八】味相應の初靜慮が、自地の味・淨・無漏乃至上三靜慮等の與めに幾緣となるやに就きて。以下味相應の初靜慮が、自地の味相應と淨と無漏との與めに幾緣となるや、乃至淨と無漏との第二・三・四靜慮の與めに幾緣となるやを問ひ、更に餘の上三靜慮の味相應と、四無色との與めに幾緣となるやを逐次的に論明するにあり。

【一九】特に、四緣の意義に就きて。

【二〇】味相應の初靜慮は、自地の淨の與めに幾緣となるや

【二一】淨に四種有りとは、淨の初靜慮に順退分と、乃至順決擇分なるとの四種あるの意にして、此の四種の中、順退分の淨の靜慮は、諸煩惱と相欵し、相雜り、煩惱の無間に此の定が現前し、此の定の無間に煩惱が現前す等と言はるゝもの。次の順住分の淨とは、能く下地を觀じて麁・苦・障と爲して厭背を生ずるも、自地を觀じては、靜、妙、離と爲して、其の地に安住することを樂しむものなり。此等順退分と順住分とは順勝進分が、自地を觀じて麁・苦・障と爲し、厭背を生じ、上地を觀じて靜・妙・離

道の現在前を起さざるが故なり。此の義に由るが故に、味相應は自地の無漏の與めに、若し總說すれば二緣と爲り、若し別說すれば、或は二、或は一緣となるなり。謂く、苦・集類忍智品の與めに二緣と爲り、滅・道の類・忍類智品と及び一切の法忍・法智品との與めに一緣と爲るなり。

【本論】[二四]淨と無漏との上三靜慮の與めに所緣と增上とに爲る。

所緣とは[二五]彼は下地の味相應を緣ずるが故にして、增上とは、不礙生及び唯無障をいふが故なり。因緣に非ざるは、染は不染に於て種子法に非ざるが故にして、等無間緣に非ざるは、已に下の緣を離れて、方に能く上の根本地の淨と無漏とを起すが故なり。

【本論】[二六]餘の與めに一の增上と爲る。

餘とは、味相應の上の三靜慮と、及び一切の無色とをいひ、增上の義は前說の如し。因緣に非ざるは、異界地の法は因果斷ずるが故に、及び異類の法は種子に非ざるが故なり。等無間緣に非ざるは、已に下染を離れて上地の染、方に現前するが故に、及び相違するが故なり。所緣に非ざるは、上地の煩惱と及び根本無色とは、下地の有漏法を緣ぜざるが故なり。

【本論】[二七]淨の初靜慮は淨の初靜慮等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、[二八]自地の淨の與めに、因・等無間・所緣・增上と爲る。

因とは三因にして、即ち相應と俱有と同類との因をいひ、等無間とは、淨の初靜慮の等無間に淨の初靜慮の現在前するをいひ、所緣とは、淨の初靜慮の與めに所緣と爲るをいひ、增上の義は前說の如し。此は即ち總說なり。

若し別說すれば、淨に四分あり。順退分の淨は順退分の淨の與めに四緣と爲り、順住分の與めにも亦、爾り。[二九]餘の二分の與めに三緣と爲る、等無間を除く。

と爲し、これを欣樂すると與なり、共に、味相應と近く、二者共に、自地を厭背するものに非ざるが故に、相互に等無間となりて生ずることを得るなり。

【二二】前の二分の與めに三緣となるとは、味相應の初靜慮は、四の淨の中、順退分と順住分との二分の淨の初靜慮の與めに、等無間と所緣と增上との三緣になるをいひ、後の二分の與めに二緣と爲るとは、後の順勝進分と順決擇分の與めには、等無間とならずして所緣と增上との二緣のみとなるをいふ。

【二三】味相應の初靜慮は自地の無漏の與めに幾緣となるや――

【二四】味相應の初靜慮は、淨・無漏の上三靜慮の與めに幾緣と爲るや――

【二五】淨と無漏との上三靜慮には遍緣智あるが故なり。

【二六】味相應は味相應の上三靜慮と四無色との與め幾緣となるや――

【二七】**淨の初靜慮は自地の淨・無漏・味相應乃至一切の無色の與めに幾緣と爲るやに就きて。**

【二八】淨の初靜慮が自地の與めに幾緣と爲るや――

【二九】淨の順退分が淨の順勝

順住分は順住分の與めに四縁と爲る、順勝進分の與めにも亦、爾り。順決擇分の與めに三縁と爲る、等無間を除く。順退分の與めに三縁と爲る、因縁を除く、勝は劣の因に非ざるが故に。

順勝進分は順勝進分の與めに四縁と爲る。順決擇分の與めにも亦、爾り。順退分の與めには、有るが説く、「但、所縁と増上とにのみ爲る。順勝進分の無間に順退分現前せざるが故に」と。[30] 如是説者はいふ、「亦、現在前す。是の故に順退分の與めに三縁と爲る、因縁を除く、彼れは劣なるを以ての故に。順住分の與めにも亦、爾り」と。

順決擇分は順決擇分の與めに四縁と爲り、順退分の與めに所縁と増上とに爲る。順住分の與めには、有るが説く、「但、所縁と増上とのみに爲る、順決擇分の無間に順住分現在前せざるを以ての故に」と。如是説者はいふ、「亦、現在前す。是の故に彼が與めに三縁と爲る、因縁を除く、順勝進分の與めにも亦、爾り」と。

【本論】[31] 自地の無漏の與めに等無間・所縁・増上と爲る。

等無間とは、浄の初静慮の等無間に無漏の初静慮現在前するを謂ふ。此は但、順決擇分よりのみす。有るが説く、「亦、順勝進分よりもす」と。所縁とは、無漏の初静慮の與めに所縁と爲るをいひ、増上とは前説の如し。因縁に非ざるは、有漏法は無漏法の因に非ざるが故なり。

【本論】[32] 自地の味相應の與めに、等無間・所縁・増上と爲る。

等無間とは、愛・見・慢・疑上静慮者の如きが浄定の等無間に、煩悩を現在前するなり。當に知るべし此、は順退分、或は順住分の静慮より起ることを。[33] 自地の染を已に離るるものと未だ離れざるものとは、自地の煩悩を起すに差別有るに由るが故に。所縁とは、自地の浄の静慮に味著するが故なり。餘は前説の如し。

【本論】[34] 浄と無漏との第二・第三静慮の與めに、等無間・所縁・増上と爲る。

進分と順決擇分との與めに等無間と爲らざるは、順退分は退して味相應のを起すか、然らずんば、進んで順住分を引起するかなるも、順住分を超して順勝進分を直ちに引起すること無く、順決擇分も亦、然り。故に、こゝに等無間を除くといひしなり。以下、等無間縁を除く場合は之に順じて推知すべし。

【三〇】 如是説者の意見は、順勝進分より退して、順退分を起す場合を考慮せしなり。

【三一】 浄の初静慮は自地の無漏の與めに幾縁となるや――

【三二】 浄の初静慮は自地の味相應の與めに幾縁と爲るや――

【三三】 自地の染を已に離れしものが自地の煩悩を起して現前する時は上地の浄の順退分に依り、未だ自地の染を離れざるものなれば、即ち自地の順住分より煩悩を起すことをも得ればなり。

【三四】 浄の初静慮が、浄・無漏の第二三静慮の與めに幾縁となるや――

等無間縁とは、第二に於ては[三五]順次入なるが故に、第三に於ては順超[三六]入なるが故なり。當に知るべし順勝進分より上の淨の靜慮に入るも、餘よりには非ざることを。餘は前説の如し。

【本論】[三七]淨と無漏との第四靜慮の與めに所縁と增上とに爲る。

等無間の無きは、極遠なるを以ての故に。餘は前説の如し。

【本論】[三八]餘の與めには一の增上と爲る。

餘とは、[三九]味相應の三靜慮と及び一切の無色とをいふ。增上の義は前説の如し。[四〇]是の中の差別をいへば、淨と無漏との無色の與めに等無間に非ざるは、極遠なるを以ての故なり。餘は前説の如し。問ふ、亦、等無間縁なることあり、謂く、初靜慮の善心にて命終して、上地に生ずる時なり、此の中、何が故に説かざるや。答ふ、應に彼の與めに等無間と增上とに爲ると説くべきに、而も説かざるは、當に知るべし義は則ち有餘なることを。有るが説く、「此の定蘊中、唯、定の善と、及び定の煩惱とをのみ説くも、命終と結生とは、但、是れ生の善、及び生の煩惱のみなるをもて、是の故に説かざるなり」と。有るが説く、「此の定蘊中には、唯、根本地の善と及び煩惱とのみを説くも、命終と結生とのときは、唯、近分にのみ住するも、根本に住せざるをもて、是を以て説かざるなり」と。

【本論】[四一]無漏の初靜慮は無漏の初靜慮等の與めに幾縁と爲るや。答ふ、[四二]自地の無漏の與めに、因と等無間と所縁と增上とに爲る。

因とは三因にして、即ち相應と倶有と同類との因をいひ、所縁とは、道忍道智品の與めに所縁と爲るをいふ。餘を説くことは前の如し。此は即ち總説なり。若し別説すれば、[四三]法智品は法智品の與めに、四縁と爲り、類智品の與めに三縁と爲る、[四四]所縁を除く。類智品は類智品の與めに四縁と爲り、法智品の與めに三縁と爲る、所縁を除く。[四五]苦・集・滅智品は苦・集・滅智品の與めに三縁と爲る、所縁

【三五】順次入とは、漸次に下地より上地に入るをいひ、順超入とは、一地を飛び越して上地に入ること、例せば初靜慮より第三靜慮に入り、第三靜慮より空無邊處に入るが如きをいふ。

【三六】超は起とあるも超の誤植なり。

【三七】淨の初靜慮は淨無漏の第四靜慮の與めに幾縁となるや――

【三八】淨の初靜慮は味相應の上三靜慮及び無色の與めに幾縁となるや――

【三九】味相應の三靜慮とは、上三靜慮の味相應をいふ。

【四〇】是の中の差別とは、等無間縁に非ざる理由に就きて、差別あるをいふ。即ち、味相應の上三靜慮は、「已に下染を離れて、方に上地の染が現前するが故に、及び、相違するが故に」淨の初靜慮を等無間とせずといふべきに、一切の無色に對しては「極遠なるを以ての故に」等無間縁に非ずと云ふべければなり。

【四一】無漏の初靜慮が自地の無漏乃至一切の定の與めに幾縁と爲るやに就きて。

【四二】無漏の初靜慮は自地の無漏の與めに幾縁となるや――

【四三】以下の法智等の相縁論

を除く。道智品の與めに四緣と爲る。道智品は道智品の與めに四緣と爲り、苦・集・滅智品の與めに三緣と爲る、所緣を除く。[四六]未知當知根品は未知當知根品の與めに四緣と爲り、已知根品の與めにも亦、爾り。具知根品の與めに三緣と爲る、等無間を除く。已知根品は已知根品の與めに四緣と爲り、具知根品の與めにも亦、爾り。未知當知根品の與めに二緣と爲る。因と等無間とを除く。因を除くとは、後生は前生に於て因に非ざるが故にして、等無間を除くは、修道の等無間に見道現在前せざるが故なり。具知根品は具知根品の與めに、四緣と爲り、未知當知根品及び已知根品の與めに二緣と爲る。因と等無間とを除く。[四七]無學の法智品は學の類智品の與めに一の增上と爲る。無學の類智品は學の法智品の與めに一の增上と爲る。

是の故に、總說を以ての故に「自地の無漏の與めに四緣と爲る」と云ふも、若し差別して說けば、則ち是の如く[四八]或は四・三・二・一なるなり。

【本論】[四九]無漏の第二、第三靜慮の與めに、因と等無間緣と所と增上とに爲る。

無漏法は界に墮せざるを以ての故に、異地にても因緣と爲ること、前說の如し。

【本論】[五〇]自地の淨と及び淨の第二、第三靜慮との與めに、等無間と所緣と增上とに爲る。

此の中、自地の淨に於て、有るが說く、「順退分を除く餘の三分の與めに等無間と爲る」と。有るが說く、「唯、後の二分のみの與めに等無間と爲る、上地の淨に於けるも亦、爾り」と。如是說者はいふ、「漸次に入る時は、亦、順勝進分の與めにも等無間と爲るも、超越して入る時は、唯、順決擇分の與めにのみ等無間と爲る」と。

問ふ、何が故に超越して入る時は、唯、順決擇分のみ無漏道と互に等無間緣と爲りて、餘時は爾らざるや。答ふ、超越時に於ては、唯、猛盛堅固なる善根のみ、能く相引發すること有るに、順決

に關する詳細は、婆沙第百七卷、毘曇部十二、頁、一七八を見よ。

【四四】法智は下を緣じ、類智は上を緣ずるを以て、類智品が法智品を緣ずること無ければなり。

【四五】苦智が苦・集・滅智の所緣緣とならざるは、苦智と集智との所緣は、唯、有漏なるに、苦智は無漏なるが故に之を緣ぜず、滅智は無爲を緣ずるに、苦智は有爲法なるが故に、之を緣ぜざればなり、集智と滅智の場合も之に準じて推知すべし。

【四六】未知當知根等の三無漏根の相緣論の詳細は、婆沙第百四十六卷、毘曇部十四、頁二三九以下を見よ。

【四七】無學の法智品が學の類智品の因緣に非ざるは、上なるは下なる道品の因に非ざるが故に。等無間に非ざるは、無學が退して學となる時は、煩惱を起して退するものなり。而して、煩惱の無間に無漏を起すことは無く、況して無學の法智を起して學に退する筈無きが故に、無學の法智は學の類智の等無間緣に非ざるなり。亦、所緣に非ざるは、法智と類智とは、互に緣ぜざればなり。故に、一の增上のみなると言へり。

擇分は猛盛・堅固なるも、餘の分は爾らざればなり。

【本論】[五一]淨の第四靜慮と及び淨の無色との與めに、所緣と增上とに爲る。

初靜慮の類智品は是れ無色の對治なるを以ての故に、淨の無色の與めにも亦、所緣と爲るなり。餘は前說の如し。

【本論】[五二]無漏の第四靜慮と及び無漏の無色との與めに、因と所緣と增上とに爲る。

無色の道類智品は亦、初靜慮の類智品をも緣ずるを以つての故に。餘は前說の如し。

【本論】[五三]餘の與めに增上と爲る。

餘とは一切の味相應なるものの與めなるをいふ。增上の義は前說の如し。無漏は味と極く相違するが故に等無間無く、貪は無漏法を緣ずること能はざるが故に、所緣に非ず。無漏は染の與めに、種子法に非ざるが故に、因に非ざるなり。

[五四]問ふ、若し無漏が味と極く相違すとせば、云何が增上と作るや。答ふ、無間に起ることに於て、極く相違すと雖も、而も正生時に去來するには、無障なるが故に、展轉して互に增上なることを得るなり。

【本論】[五五]味相應の第二靜慮は、味相應の第二靜慮等の與めに幾緣となりや。答ふ、自地の味相應の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の初二靜慮の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、一切の無漏の靜慮と及び淨の第三、第四靜慮との與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに、一の增上と爲るなり。

餘とは味相應の初と、第三と第四との靜慮と、及び一切の無色とをいふ。

此の中、[五六]淨の初靜慮の與めに等無間と爲るとは、瑜伽師は、第二靜慮の淨定の無間に諸の煩惱を

以下、之に準じて推知すべし。

【四八】無漏の初靜慮が自地の無漏の與めに四緣となるとは、初靜慮地の法智品が法智品に對し、乃至具知根が具知根の與めに四緣と爲る如きをいひ、三緣と爲るとは、法智品が類智品に對して三緣と爲るが如きをいひ、二緣となるとは、已知根が未知當根の與めに二緣(所緣と增上)と爲るが如きをいひ、一緣と爲るとは、無學の法智品が學の法智品の與めに一の增上となると言ふが如きをいふ。

【四九】無漏の初靜慮は無漏の第二・三靜慮の與めに幾緣と爲るや――

【五〇】無漏の初靜慮が、自地及び第二・三靜慮の淨の與めに幾緣となるや――

【五一】無漏の初靜慮が淨の第四靜慮と四無色との與めに幾緣となるや――

【五二】無漏の初靜慮は、無漏の第四靜慮と無色との與めに幾緣となるや――

【五三】無漏の初靜慮は、一切の味相應の與めに幾緣となるや――

【五四】特に無漏の定が味相應の與めに增上緣となる所以。これは無漏定が味相應の定に對して增上緣となる一般の場合をいふ。

起すに、其の心、熱惱して、火の爲めに燒かるるが如くなるをもて、遂に即ち淨の初靜慮に歸投するをいふ。故に、契經に說く、「寧ろ厭作意と倶なる初靜慮を起すとも、劣作意と倶なる第二靜慮を起さず」と。問ふ、彼は何等の淨の初靜慮を起すや。有るが說く、「順住分を起すなり、起し易きを以ての故に」と。有るが說く、順勝進分を起す、上地を防護するが故に」と。

又、此の所說は、味相應の初靜慮の與めに、一の增上と爲るなり。

問ふ、第二靜慮の染心にて命終して、初靜慮に生ずれば、則ち等無間緣有るに、何が故に說かざるや。答ふ、應に彼の與めに等無間と增上とに爲ると說くべくして而も說かざるは、當に知るべし此の義有餘なることを。有るが說く、「此の定蘊の中には、唯、定の煩惱を說くも、命終と結生とは是れ生の煩惱なるをもて、是の故に說かざるなり」と。有るが說く、「此の定蘊中にては、但、根本地のみの煩惱を說くも、命終と結生とは、唯、近分地の煩惱にのみ住するをもて、是の故に說かざるなり」と。餘は所應に隨ふこと前說の如し。

【本論】[五七]淨の第二靜慮は、淨の第二靜慮等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、一切の無漏の靜慮と及び淨の初と第三と第四との靜慮と、並びに自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲るなり。

此も亦、前の如く、應に隨つて廣說すべし。

【本論】[五八]無漏の第二靜慮は、無漏の第二靜慮等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、一切の無漏の靜慮の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、一切の淨の靜慮の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の無色の與めに、所緣と增上とに爲り、無漏の無色

【五五】味相應の第二靜慮は自及び他の一切の定の與めに幾緣となるやに就きて。
【五六】特に味相應の第二靜慮が淨の初靜慮の與めに等無間となる所以に就きて。
【五七】淨の第二靜慮は自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。
【五八】無漏の第二靜慮は自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。

の與めに、因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲るなり。

此も亦、應に隨つて廣くは前說の如し。

第三靜慮より乃ち非想非非想處に至るものに、五に三、一に二の問答あり。

【本論】 六〇 味相應の第三靜慮は、味相應の第三靜慮等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の第二と第三との靜慮の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、一切の無漏の靜慮と及び淨の初と第四との靜慮との與めに所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の第三靜慮は、淨の第三靜慮等の與めに、幾緣と爲るや、答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、一切の無漏の靜慮と及び淨の初と第二と第四との靜慮と、並びに自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の無漏と空無邊處との與めに、等無間と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

無漏の第三靜慮は、無漏の第三靜慮等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、無漏の四靜慮と空無邊處との與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の四靜慮と空無邊處との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の上三無色の與めに所緣と增上とに爲り、無漏の上二無色の與めに、因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

六一 味相應の第四靜慮は、味相應の第四靜慮等の與めに幾緣と爲るや、答ふ、自地の味相應の與めに因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の第三と第四との靜慮の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、無漏の四靜慮と及び淨の初と第二との靜慮との與めに

【五九】 五に三の問答ありとは(1)第三靜慮と(2)第四靜慮と(3)空無邊處と(4)識無邊處と(5)無所有處との五つには、夫々、味相應と淨と無漏とに就きての三種の緣論の問答あるをいひ、一に二の問答ありとは、唯、最後の非想非非想處には、味相應と淨との二のみの緣論の問答あるを言ふ。

【六〇】 第三靜慮の味相應・淨・無漏は自と他との定の與めに幾緣となるやに就きて。 以下の本文は、婆沙は之を省略せるも、例に依りて、發智より補譯し置けり。

【六一】 第四靜慮の味相應・淨・無漏は、自と他との定の與めに幾緣となるやに就きて。

所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の第四靜慮は、淨の第四靜慮等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、無漏の上の三靜慮と及び淨の第二と第三との靜慮と、並びに自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨と無漏との初二無色の與めに、等無間と增上とに爲り、淨と無漏との初靜慮の與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

無漏の第四靜慮は、無漏の第四靜慮等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、無漏の上三靜慮と下二無色との與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の上三靜慮と初二無色との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の初靜慮と後二無色との與めに、所緣と增上とに爲り、無漏の初靜慮と無所有處との與めに、因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

〔六二〕味相應の空無邊處は、味相應の空無邊處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、自地の淨と及び淨の第四靜慮との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、〔六三〕自地の無漏と一切の無漏の靜慮と及び淨の下三靜慮との與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の空無邊處は淨の空無邊處等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、自地の無漏と、及び淨と無漏との第三と第四との靜慮と、並びに自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨と無漏と

【六二】**空無邊處の味相應・淨・無漏は自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。**

【六三】發智論には「自地の無漏」の一句無きも、とは、味相應の識無邊處が、淨と無漏との四靜慮と及び無漏の下二無色との與めに、所緣と增上となると言ひ、味相應の無所有處が、一切地の無漏と及び淨の四靜慮等の與めに所緣と增上と爲ると言ふの例より推すも、又、婆沙、第百六十九卷第二十二節の「若し等至にして、味相應の空無邊處を以て所緣と爲すも、而も彼を以て因と爲すに非ざるものあり」といふ中に、淨と無漏との空無邊處を加ふる點とより言ふも、正に此の一句を缺くを得ざるを以て、今、特に茲に附入し訂正し置けり。因みに、阿毘曇八犍度論の相當文には、此の味相應等の八等至の相互相緣論は、頗る簡略にして、此の點判明ならず（大正二六、頁八九三、下）

の識無邊處と無所有處との與めに、等無間と增上とに爲り、淨と無漏との初と第二との靜慮の與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上に爲る。

無漏の空無邊處は、無漏の空無邊處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、無漏の三無色と後二靜慮との與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の下三無色と後二靜慮との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の初二靜慮と及び淨の非想非々想處との與めに、所緣と增上とに爲り、無漏の初二靜慮の與めに、因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

六四 味相應の識無邊處は、味相應の識無邊處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の下二無色の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨と無漏との四靜慮と及び無漏の下二無色との與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の識無邊處は、淨の識無邊處等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、自地の無漏と及び淨と無漏との第四靜慮と空無邊處と、並びに自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨と無漏との無所有處と及び淨の非想非々想處との與めに、等無間と增上とに爲り、淨と無漏との下三靜慮の與めに所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

無漏の識無邊處は、無漏の識無邊處等の與めに、幾緣と爲るや。答ふ、無漏の第四靜慮と三無色との與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の第四靜慮と四無色

【六四】識無邊處の味相應・淨・無漏は自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。

との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、淨の下三靜慮の與めに、所緣と增上とに爲り、無漏の下三靜慮の與めに、因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上となる。

〔六五〕味相應の無所有處は、味相應の無所有處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに因と等無間と所緣と增上とに爲り、自地の淨及び淨の識無邊處の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、一切地の無漏と及び淨の四靜慮と空無邊處との與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の無所有處は、淨の無所有處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、無漏の三無色と及び淨の下二無色と並びに自地の味相應との與めに等無間と所緣と增上とに爲り、淨の非想非々想處の與めに、等無間と增上とに爲り、淨と無漏との四靜慮の與めに所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

無漏の無所有處は、無漏の無所有處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、無漏の三無色の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の四無色の與めに等無間と所緣と增上とに爲り、淨の四靜慮の與めに所緣と增上とに爲り、無漏の四靜慮の與めに因と所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

〔六六〕味相應の非想非々想處は味相應の非想非々想處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の味相應の與めに因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨の上二無色の與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、一切地の無漏と及び〔六七〕下六地の淨との與めに所緣と增上と

【六五】無所有處の味相應・淨・無漏は自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。

【六六】非想非非想處の味相應と淨とは自と他との定の與めに幾緣と爲るやに就きて。

【六七】下六地とは、下二無色地と四靜慮地とをいふ。

に爲り、餘の與めに一の增上と爲る。

淨の非想非々想處は、淨の非想非々想處等の與めに幾緣と爲るや。答ふ、自地の淨の與めに、因と等無間と所緣と增上とに爲り、淨と無漏との識無邊處と無所有處と、及び自地の味相應との與めに、等無間と所緣と增上とに爲り、[六八]下の五地の淨と無漏との與めに、所緣と增上とに爲り、餘の與めに一の增上と爲るなり。

廣說すること本論の如く、應に知るべきなり。

[六九]問ふ、世俗道を以て第四靜慮及び下三無色の染を離る時の如き、一切の無間道は皆下地を緣ずるに、何が故に第四靜慮と下三無色との味相應と淨とは、上地の淨の與めに所緣と爲ると說かざるや。答ふ、此も亦、應に說くべくして、而も說かざるは、當に知るべし有餘なることを。有るが說く、「此の定蘊の中には、唯、根本地のみを說くも、[七〇]九無間道は但、是れ近分地のみなるをもて、是の故に說かざるなり」と。

[七一]問ふ、何等の無漏の第三と第四との靜慮が、淨と無漏との無色の與めに等無間と爲るや。答ふ、唯、類智品のみなり。問ふ、何が故に法智品に非ざるや。有るが說く、「法智品は下に依りて下を緣ずるが故なり。謂く、法智品は、但、欲界に依りて、但、欲界の諸行と及び彼の因と彼の滅と彼の對治道とを緣ずるも、淨と無漏との無色は爾らざるが故に、法智品は彼の等無間緣に非ざるなり」と。有るが說く、「法智品は、但、欲界と及び彼の滅・道とのみを緣ずるに、欲界と及び彼の滅・道とを緣ずる無間に即ち無色の境を緣ずることを得ず。極遠なるを以ての故に。此に由りて法智品は無色の等無間緣に非ざるなり」と。有るが說く、「無色地は、法智品の所依にも、所緣にも、及び地にも非ざるが故なり。謂く、四靜慮は法智品の所依と所緣とに非ずと雖も、而も是れ法智品の地なり。

【六八】 空無邊處以下の五地をいふ。

【六九】 前述の本論中、第四靜慮の味相應は、自地の味相應と、淨の第三第四靜慮と無漏の四靜慮と及び淨の初と第二との靜慮との與めには所緣と爲ると說くも、上地なる淨の四無色の與めに所緣となるとは說かず、又、第四靜慮の淨なるは、自地の淨なると、無漏の上三靜慮と、淨の第二第三靜慮と、自地の味相應と、淨と無漏との初靜慮との與めに所緣となると說くも、上地の淨の四無色の與めに所緣となると說かず。又。味相應の空無邊處は、自地の味と、自地の淨の第四靜慮と一切の無漏の靜慮と及び淨の下三靜慮との與めにのみ所緣となり、淨の空無邊處は、自地の淨と、自地の無漏と、淨と無漏との第三、第四靜慮と、並に自地の味相應と、淨と無漏との初と第二靜慮との與めにのみ所緣となると說くも、淨の上三無色の與めに所緣となると說かず。次に味相應の識無邊處は、自地の味相應と、淨の下二無色と無漏の四慮靜と、無漏の下二無色との與めにのみ所緣と爲ると說き、淨の識無邊處は、自地の淨と、

欲界は法智品の地に非ずと雖も、而も是れ法智品の所依と所緣となり。諸の無色地には是の如きことと無きが故に、法智品の無間の所起には非ざるなり」と。

七二 問ふ、何が故に、淨と無漏との無色は、但、下地の類智品道のみを緣ずるも、法智品道には非らざるや。答ふ、法智品道は、彼の無色地の對治に非ざるが故なり。問ふ、豈に法智品道も亦、彼を對治するに非ざるや。答ふ、彼を對治すと雖も、而も根本にも非ず、亦、全にも非ざるをもて、是の故に說かざるなり。謂く、七三 是は彼の修所斷法の對治なりと雖も、而も彼の見所斷法の對治に非ず。又、滅・道法智は是れ彼の對治なりと雖も、而も苦・集法智は非らざればなり。有るが說く、「類智品は是れ彼の主對治なりと雖も、法智品は是れ彼の客對治なるが故に、彼の所緣に非ざればなり」と。

七四 第十二節　定の順次順超・逆次逆超、特に超定の加行と成滿との論

七五 然も淨と無漏との靜慮と無色とは、或は下、或は上の無間にして起る。下より起るものを、順次・順超と名け、上より起るものを逆次、逆超と名け、同類より起るものを純と名け、異類より起るものを雜と名く。地の無間なるものを次地と名け、有間なるものを超と名く。有間なるものは、唯、能く一地のみを越すなり。是を此處に略毘婆沙と謂ふなり。

七六 問ふ、所說の超定の加行は云何ん。答ふ、超定を修する時、彼の修定者は先に欲界の善心を起し、此より無間に有漏の初靜慮に入り、次に有漏の第二靜慮に入り、次第して乃至、非想非非想處に入る。彼より還つて有漏の無所有處に入り、次第して乃至、復還つて有漏の初靜慮に入る。此の諸地に於て循環して修習し、善く淳熟して王路の如くならしめ已る。復、無漏の初靜慮に入り、次で無漏の第二靜慮に入り、次第して乃至無漏の無所有處に入り、彼より還つて無漏の識無邊處に入り、次第して乃至復還つて無漏の初靜慮に入る。此の諸地に於て循還し修習して、善く淳熟し王路の如からしめ已る。復、有漏の初靜慮に入り、有漏の初靜慮より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三

自地の無漏と、淨と無漏との第四靜慮と、空無邊處と自地の味相應と、淨と無漏との下三靜慮との與めにのみ所緣なると說くも、上地の淨の二無色の與めに所締となると說かず。

味相應の無所有處は、自地の味と自地の淨と、及び淨の識無邊處と、一切地の無漏と及び、淨の四靜慮と空無邊處との與めにのみ所緣と爲り、淨の無所有處は自地の淨と無漏の三無色と、淨の下二無色と、自地の味相應と、淨と無漏との四靜慮との與めに所緣と爲ると說くも、非想非非想處地の淨の與めに所緣と爲るとは說かず。以上の如く、即ち、第四靜慮と下三無色との味相應と淨とは共に、上地の淨の與めに所緣緣と爲ると說かざるなり。

然るに、世俗道即ち有漏の六行相觀は、下地を緣じて麁・苦・障と爲すものなるを以て、上地の淨も、下地の味相應等を緣ずべきが故に、從つて第四靜慮等の味相應等は、上地の所緣緣となるに非ずやとの以下の間が發さるゝなり。

【七〇】 この九無間道とは、有漏の三行相の九無間道を指す。

【七二】 以下の間も、亦、本論

靜慮より有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より有漏の無所有處に超入し、有漏の無所有處より、還つて有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三靜慮より有漏の初靜慮に超入し、此の諸地に於て循還し修習して、善く淳熟なること王路の如からしめ已る。復、無漏の初靜慮に入り、無漏の初靜慮より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より、無漏の空無邊處に超入し、無漏の空無邊處より、無漏の無所有處に超入し、無漏の無所有處より、還つて無漏の空無邊處に超入し、無漏の空無邊處より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より無漏の初靜慮に超入し、此の諸地に於て、循還し修習して、善く淳熟なること猶し王路の如からしむ。此に齊りて超足の加行成滿するなり。

七七 此より復、有漏の初靜慮に入り、有漏の初靜慮より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より無漏の無所有處に超入し、無漏の無所有處より、還つて有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より有漏の初靜慮に超入す。是の如きを名けて超定の成滿と爲すなり。

七八 有餘師の説く、「超定を修する時、先に欲界の善心を起して、此より無間に有漏の初靜慮に入り、次に有漏の第二靜慮に入り、次第して乃至非想非々想處に入り、彼より還つて有漏の無所有處に入り、次第して乃至復、還つて有漏の初靜慮に入り、此の諸地に於て善く串習し已る。復、無漏の初靜慮に入り、次で無漏の第二靜慮に入り、次第して乃至無漏の無所有處に入り、彼より還つて無漏の識無邊處に入り、次第して乃至復、還つて無漏の初靜慮に入り、此の諸地に於て善く串習し已る。復、有漏の初靜慮に入り、次で無漏の第二靜慮に入り、次で有漏の第三靜慮に入り、次で無漏の第四靜慮に入り、次で有漏の空無邊處に入り、次で無漏の識無邊處に入り、次で有漏の無所有處に入り、彼より還つて無漏の識無邊處に入り、次第して乃至復、還つて有漏の初靜慮に入り、此の諸地

に、無漏の第三靜慮が、淨と無漏との空無邊處の與めに等無間緣となり、無漏の第四靜慮が、無漏と淨との下二無色の與めに等無間緣と爲ると說けるを以て、之に就きて、無漏の中、法智品と類智品との何れが等無間緣となるやを問へるもの。

【七二】 淨と無漏との無色が下地の類智品道のみを緣ずる所以に就きて。

【七三】 「是は」とは法智品道の意なり。

【七四】 前節に於て、定の等無間緣となるものを說きし際に、超定して等無間緣となる場合のあることを論說せり、例せば、淨と無漏との第三靜慮が淨と無漏との空無邊處の與めに等無間緣と爲ると說くが如き是なり。因りて本節は先づ定より定を起すに、順次、順超、逆次、逆超のあることを明し、如何にせば、この超入定をなし得るかの加行論及び其の成滿論を論究するを主目的とし、次に、第四靜慮に超入すること無き所以を論じ、最後に超定を起し得る、處所、趣・男女・補特伽羅・善根の種類等を論ぜり。從つて、本節は發智本文より見ればいはば附論なり。

【七五】 定の順次入・順超入と、

に於て善く串習し已る。復、無漏の初靜慮に入り、次で有漏の第二靜慮に入り、次で無漏の第三靜慮に入り、次で有漏の第四靜慮に入り、次で無漏の空無邊處に入り、次で有漏の識無邊處に入り、次で無漏の無所有處に入り、次で非想非々想處に入り、彼より還つて無漏の無所有處に入り、次第して乃至復還つて無漏の初靜慮に入り、此の諸地に於て善く串習し已る。復、有漏の初靜慮に入り、有漏の初靜慮より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三靜慮より有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より有漏の無所有處に超入し、有漏の無所有處より還つて有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三靜慮より有漏の初靜慮に超入し、此の諸地に於て善く串習し已る。復、無漏の初靜慮に入り、無漏の初靜慮より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より無漏の空無邊處に超入し、無漏の空無邊處より無漏の無所有處に超入し、無漏の無所有處より還つて無漏の空無邊處に入り、無漏の空無邊處より無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より無漏の初靜慮に超入し、此の諸地に於て善串し修習す。是を超定の加行成滿と名く。

七九 此より復、有漏の初靜慮に入り、有漏の初靜慮より、無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より、有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より、無漏の無所有處に超入し、無漏の無所有處より、還つて有漏の空無邊處に超入し、有漏の空無邊處より、無漏の第三靜慮に超入し、無漏の第三靜慮より有漏の初靜慮に超入し、此より復、無漏の初靜慮に入り、無漏の初靜慮より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三靜慮より無漏の空無邊處に超入し、無漏の空無邊處より有漏の無所有處に超入し、有漏の無所有處より還つて無漏の空無邊處に超入し、無漏の空無邊處より有漏の第三靜慮に超入し、有漏の第三靜慮より無漏の初靜慮に超入す。是の如きを名けて超定成滿すと爲すなり」と。

八〇 復、説者有り、「前來の所説は皆是れ加行なり、此の位より後、自在に循還し、諸定に超入して璽

逆次入・逆超入に就きて。

【七六】 超定の加行と成滿とに就きて。此の超定の加行と成滿とに關する説に、以下三種の異説をあぐ、其の中、此は第一説にして、婆沙評家の説と認むべきもの。さて此の加行に約四段あり、(一)は、有漏の靜慮と無色とに順次入し逆次入すること、(二)は無漏の靜慮と無色とに於て同じく順次入し逆次入することに淳熟すること、(三)次に、有漏の靜慮と無色とに順超入し逆超入することに淳熟すること、(四)に、無漏の靜慮・無色とに於て、同じく、順超入し、逆超入することとなり。

【七七】 以下超定の成滿を論ず。

【七八】 超定の加行と成滿とに關する異説第一。以下、この有餘師の超定加行論は約六段に分る。(一)有漏より有漏への順次入、逆次入、(二)無漏より無漏への順逆次入、(三)有漏より無漏、無漏より有漏への順逆次入、(四)無漏より有漏、有漏より無漏への順逆次入、(五)有漏に初まりて有漏に已る順逆超入、(六)無漏より始まりて無漏に已る順逆超入等を串習して、超定の加行成滿すとなすなり。

礙する所無きを乃ち成滿と名く。然も必ず第四靜慮には超入すること能はず」と。

[八一]問ふ、何が故に第四に超入すること能はざるや。答ふ、殑伽の沙の數に過ぐる諸佛世尊及び聖弟子の諸定に超入する法は、皆是の如くなりしが故に、問ふべからず。有るが說く、「諸の超定者は、本、應に漸起すべし。若し彼より超ゆとせば、法として唯、一を超ゆるのみ、勢ひ過ぎざるが故に。恰も梯を登る時の如し。亦、應に漸上すべし。其の超ゆること有る者も、能く二を超ゆること莫し、勢ひ及ばざるが故に」と。有るが說く、「後を起す徑路は、法として皆前の如くなるが故に、但、一のみを超ゆるなり。謂く、觀行者が初めて定を超ゆる時、[八二]五より五に入り、四より四に入る。支の數等しきが故に超入す可きこと易し、後も亦、是の如くなるが故に、二を超えざるなり」と。有るが說く、「所緣々の如くなるが故に、唯、一のみを超ゆ。謂く、觀行者は念作意せざれば所緣々に於て唯、能く一のみを超ゆるなり。[八三]問ふ、云何が觀行者は所緣に於て超ゆるや。答ふ、彼は念作意せざるに由るときは、初靜慮を以て九地の境に於て一一別に緣ずるに、中に於て、唯、能く一地のみを超えて緣ずるなり。謂く、欲界を緣ずる無間に、能く上は初靜慮或は第二靜慮を緣ずるも、餘には非ず。初靜慮を緣ずる無間に、能く下は欲界を緣じ、上は第二靜慮或は第三靜慮を緣ずるも、餘には非ず。第二緣ずる靜慮を緣ずる無間に、能く下は欲界或は初靜慮を緣じ、上は第三靜慮或は第四靜慮を緣ずるも、餘には非ず。第三靜慮を緣ずる無間に、能く下は初靜慮或は第二靜慮を緣じ、上は第四靜慮或は空無邊處を緣ずるも、餘には非ず。是の如く乃至、非想非々想處を緣ずる無間に、能く下は識無邊處或は無所有處を緣ずるも、餘には非ざるなり。初定に依るが如く、是の如く餘の定に依るも、其の所應に隨ひ、所緣々に於て、皆應に廣說すべきなり。二地の所緣を越ゆること能はざるが如く、超定も亦、爾り、故に第四に入らざるなり。

問ふ、若し爾らば、何が故に[八四]淨解脫の、次に五心を起し、淨解脫心は欲界を緣じ、第四靜慮の

【七九】以下有餘師の超定成滿論なり。これが、前の超定成滿論と異なるは、有漏より始まりて、無漏と有漏と交互に順逆超入すると、無漏より始まりて有漏無漏と順逆超入するとの兩者を含說する點なり。

【八〇】**超定の加行と成滿とに關する異說第二。**

【八一】**第四靜慮に超入することと能はざる所以に就きて。**

【八二】五より五に入り、四より四に入るとは、靜慮支が、初靜慮と第三靜慮とには共に五支あり、第二靜慮と第四靜慮とは共に四支あるにより、初靜慮より第三靜慮に入るを五より五に入ると言ふ。四より四に入るも推して知るべし。尙此につきては、婆沙第八十卷、毘曇部十、頁三八四をも參照すべし。

【八三】**特に、觀行者が所緣に於て二地以上を超へざるに就きて**

【八四】淨解脫の次に五心を生ずとは、第四靜慮地に在る淨解脫即ち第三解脫の等無間に、色界の五部の心を生ずるをいひ、(婆沙第八十九卷毘曇部十一、頁一五九參照)、淨解脫心は欲界を緣ずとは、前二解脫と同じく、淨解脫も欲界の色處を緣ずるをいひ、(婆沙第八十四卷、毘曇部十一、頁五一二)

遍行隨眠は、能く自と上の乃至有頂とを縁ずと說くや。豈に能く二地の所縁を越すに非ざらんや。答ふ、不染心は二を超ゆること能はず。彼の心は是れ染なるが故に相違せざるなり。問ふ、苦法智が欲界を縁ずる無間に苦忍を起して乃至有頂を縁ずるに、云何が不染汚心は二を超ゆること能はざるや。答ふ、彼は但、是れ總じて縁ずるをもて、名けて超ゆると爲さず。亦、倶に餘地をも縁ずるが故に、是の故に難に非ざるなり。

八五 問ふ、何處にて能く定を超ゆるや。答ふ、欲界に在りて、色・無色には非ず。人趣に在りて餘趣に非ず。三洲に在るも北洲には非らず。男子と女人と倶に能く定を超ゆるなり。尊者僧伽筏蘇說きて曰く、「唯、贍部洲の唯、男子のみ能く定を超ゆるも、餘の洲と及び女人とは、所依劣なるが故に、能はざるなり」と。如是說者はいふ、「餘洲と及び女人とも亦、能く定を超ゆ、彼は三摩地に於て亦、心の自在を得るが故に」と。

八六 問ふ、何等の補特伽羅が能く定を超ゆるや。答ふ、是れ聖者にして異生に非ず。是れ無學にして、學に非ず。無學中の是れ不時解脫にして、時解脫に非ず。不時解脫中に於ても、要ず願智邊際定等の殊勝の功德を得るものにして、然して後、能く定を超ゆるなり。

八七 問ふ、何が故に唯、無學の不時解脫のみ能く定を超ゆるや。答ふ、要ず相續中、諸の煩惱無く、定に於て自在なれば、乃ち能く定を超ゆるも、學の相續中にては、猶、煩惱有り。時解脫は定に於て自在を得ず、故に並びに定を超ゆること能はざるなり。

八八 問ふ、何等の善根の無間に能く定を超ゆるや。答ふ、無量・解脫・勝處・遍處・諸通等の善根の無間には、皆定を超ゆること能はず。唯、無常等の行相の善根の無間に能く超ゆるなり。所以は何ん。要ず猛利にして增上なる善根の無間にのみ、能く定を超ゆるが故なり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十五

第四靜慮の遍行隨眠は、能く自と上との云云とは、色界第四靜慮の見苦・集所斷の遍行の隨眠が、自界地の見苦・集・滅・道所斷と修所斷との五部の法を縁じ、並びに、色界の見苦、集所斷の他界縁の遍行の隨眠が、無色界四地の五部の諸法を縁ずるをいふ。(婆沙第八十七卷毘曇部十一、頁一一〇以下參照)

【八五】 超定の可能なる處所・趣・男女等の分別。

【八六】 超定を起し得る補特伽羅に就きて。不時解脫阿羅漢のみ超定し得。

【八七】 特に、不時解脫のみ超定し得る所以。

【八八】 超定を無間に起す善根に就きて。無常・苦・空・無我等の十六行相の無間に超定を起すとなり。

卷の第百六十六（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之二）

[一]第三章　等至と十想との相攝等に關する論究

[二]第一節　十想論提起の緣由に就きて

【本論】 十想とは、謂く、無常想・無常苦想・苦無我想・死想・不淨想・厭食想・一切世間不可樂想・斷想・離想・滅想なり。

是の如き等の章及び解章の義、既に領會し已りぬ。應に廣く分別すべし。

[三]問ふ、何が故に此の中には、先に十想に依りて論を作すや。答ふ、彼の作論者の意欲爾るが故なり。彼の意欲に隨つて而して斯の論を作すも、但、法相に違はずんば、便ち責むべからず。有るが說く、「契經の義を分別せんと欲するがための故なり。[四]契經中に說くが如し。「十想有り、無常想乃至滅想なり」と。契經に是の說を作すと雖も、而も廣く辨ぜず。今、之を辯ぜんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[五]問ふ、何が故に、此の中には但、十想のみを說くや。答ふ、此は問ふべからず。是れ佛の經の所說なるを以ての故に。佛は處々の經中に於て、唯、十想のみを說けり。作論者は佛の所說中に於て一を增して十一想と說くこと能はず。一を減じて九想を說くこと能はず。所以は何ん。佛の所說の法に增減無きが故に、增減すべからず。無增と無減との如く、無多と無少、無缺と無長、無量と無邊とも亦、爾り。無量なりとは義測り難きが故にして、無邊なりとは文、了し難きが故なり。譬へば大海の無量無邊なるが如し。無量とは深く、無邊とは廣きなり。假使、百千那庾多の數の諸大論師

【一】本章は發智には「定蘊中攝納息第三」とあるも其の內容は侚多くのを含めり。例によりて、發智に揭ぐる頌文を以て之を示せば、

攝ト可得ト相應ト成不得ト捨退ト　頓漸ト滅依定ト　此章願具說

とあり。

「攝」とは、十想と、四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處・八智・三三摩地の八功德との相攝論と、四靜慮等八種相互の相攝論とを指し、

「可得」とは、自體は自體に於て可得なりと言ふ意義にして、攝と異語同意なるを以て前の「攝」の項と同じ內容を可得の語を以て繰返すもの、

「相應」とは、十想と四靜慮等の八種との相應論と、及び四靜慮等の八種の相互相應論とを表し、

「成不」とは、（一）靜慮又は無量等を成就するものは、靜慮又は無量等の幾を成就し、幾を成就せざるや、（二）隨信行等の七補特伽羅は、味相應・淨・無漏の靜慮・無色等の幾くを成就し幾を成就せざるや等（三）頗し味相應等の靜慮を成就するものは、淨と無漏とのは非らざるや等の七句分別、及び頗し味相應の四無色を成就せざるものは淨と無漏とは

の舍利子の如きが、佛所說の二句の經の中に於て百千の論を造りて、分別し解釋し其の覺性を盡すとも、亦、其の邊量を窮むこと能はず。況んや復、多なるをや。

六 問ふ、作論者を置く。何が故に世尊は但、十想のみを說けるや。答ふ、所化の有情は此の所說に齊りて、事究竟するが故なり。謂く、佛世尊の凡ての所說の法は、皆、有情の所應の作事を觀じて善く究竟せしむること、此に齊りて而して止め、增さず減ぜず。譬へば良醫の有病者を觀じて應に隨ひて藥を授け、增さず減ぜざるが如く、佛も亦、是の如きなり。

有るが說く、「世尊は、聖道と聖道の加行と、及び聖道の果とを顯さんが爲めの故に、十想を說けり。謂く、無常想・無常苦想・苦無我想・死想と說くは、則ち聖道を顯し、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想と說くは則ち聖道の加行を顯し、斷想・離想・滅想と說くは則ち聖道の果を顯すなり」と。有るが說く、「世尊は聖道と聖道の資糧と及び聖道の果とを顯さんが爲めの故に、十想を說くなり。此の中の配釋は、前の如く應に知るべきなり」と。有るが說く、「世尊は奢摩他・毘鉢舍那と及び二の果とを顯さんが爲めの故に、十想を說けり。謂く、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とを說くは、則ち奢摩他を顯し、無常想と無常苦想と苦無我想と死想とを說くは則ち毘鉢舍那を顯し、斷想と離想と滅想とを說くは、則ち彼の二の果を顯すなり」と。有るが說く、「世尊は此岸と彼岸と及び船栰とを顯さんが爲めの故に、十想を說けり。謂く、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想を說くは則ち此岸を顯し、斷想・離想・滅想を說くは則ち彼岸を顯し、無常想・無常苦想・苦無我想・死想を說くは、則ち船栰を顯すなり」と。有るが說く、「世尊は、諸蘊と諸界との過失と及び彼の還滅の果とを顯さんが爲めの故に十想を說けり。謂く、無常想・無常苦想・苦無我想を說くは、則ち諸蘊の過失を顯し、不淨想・厭食想を說くは則ち欲界の過失を顯し、一切世間不可樂想を說くは則ち色界の過失を顯し、死想を說くは則ち無色界の過失を顯し、斷想・離想・滅想を說くは則ち彼の還滅の果を顯すなり」と。

非らざるや等の七句分別等をなすを言ひ。「得捨」の中、「得」とは頗し味相應の四靜慮を得すれば、淨のは非らず、無漏のも非らざるや等を論ずるもの、「捨」とは、頗し味相應の四靜慮を捨すれば、淨のは非らず、無漏のも非らざるや等を究明するもの、「退」とは、頗し味相應の四靜慮を退すれば、淨のは非らず、無漏のも非らざるや等を明すをいひ、「頓漸」とは(一)頗し味相應の四靜慮を頓に得するもの有りや、及び頗し味相應の四靜慮を頓に捨するものありや、及び頗し味相應の四靜慮を漸に得するものありや、及び頗し味相應の四靜慮を漸に捨するものありや等の諸問題(二)無色に就きても亦爾り――を論明するをいひ、「滅依定」とは(一)身語の表と無表、(二)三惡行等、(三)四非聖語等、(四)五蘊等、(五)六法門、(六)七識住等、(七)四靜慮等、(八)他心智等の八種法の一一が、何の定に依りて、滅するやに就きて論究するなり。尙、此の外婆沙論は、第百六十六卷に、十想の一般論、及

有るが說く、「世尊は、正性離生に入ることと、三界の染を離るゝことゝ、及び彼の道果とを顯さんが爲めの故に、十想を說けり。謂く、無常想・無常苦想・苦無我想を說くは、則ち正性離生に入ることとを顯し、不淨想・厭食想を說くは則ち欲界の染を離るゝことを顯す。欲界には婬欲及び段食欲有るを以て、彼に於て染習せば、欲界の染を離るゝこと能はざるが故なり。一切世間不可樂想を說くは則ち色界の染を離るゝことを顯す、色界には生死中の最勝の喜受と最勝の樂受と及び第四靜慮の最勝の輕安の樂と有るを以て、彼に於て耽著せば、色界の染を離るゝこと能はざるが故なり。死想を說くは則ち無色界の染を離るゝことを顯す。無色界の壽量は長遠なるを以て、彼に於て保著するものは、無色界の染を離るゝこと能はざるが故に。斷想・離想・滅想を說くは則ち彼の道果を顯すなり」と。有るが說く、「世尊は、所治の障を近對治することを顯さんが爲めの故に十想を說けり。謂く、無常想を說くは、諸行中に於ける我慢の障を近對治することを顯し、無常苦想を說くは懈怠の障を近對治することを顯し、苦無我想を說くは我見の障を近對治することを顯し、不淨想を說くは色貪の障を近對治することを顯し、厭食想を說くは耽美食の想を近對治することを顯し、一切世間不可樂想を說くは世間の可愛事に貪著する障を近對治することを顯し、死想を說くは恃命憍逸の障を近對治することを顯し、斷想を說くは、諸の非法の障を近對治することを顯し、離想を說くは染著の想を近對治することを顯し、滅想を說くは、所依の障を近對治することを顯すなり」と。有るが說く、「世尊は外道の執見を對治することを顯さんが爲めの故に十想を說く。謂く、諸の外道は無常蘊中に於て、多く常執を起すをもつて、彼を對治せんがための故に無常想を說く。彼は蘊に於て常執を起すに由るが故に、便ち計して樂と爲す。彼を對治せんがための故に無常苦想を說く。彼は蘊に於て樂有りと執するに由るが故に、便ち我有りと計す。彼を對治せんが爲めの故に苦無我想を說く。彼は我有りと執するに由るが故に、便ち淨有りと計す。彼を對治せんがための故に不淨想及び厭食

び轉、隨轉論をなし、第百六十九卷に淨と無漏との靜慮の退と得捨との種々なる場合、同じく第百六十九卷、百七十卷に至り等至の相互相緣論、百七十一卷に四非聖語・四聖語・四種入胎等に關する一般論、第百七十二・三卷に、五趣と五妙論八世法論等に關する所說を揭げり。

【二】本節は、發智の「攝」に就きて十想と四靜慮等の相攝關係を論ずるに先立ち、先づ十想とは何ぞや、十想を何が故にとけるや、等を明す段なり。

【三】十想にて作論する所以。

【四】廣義法門經（大正一、頁九二〇上）及び佛說普法義經（同上、頁九二三、上）を參照すべし。廣義法門經に依れば、此の十想の名目は、（一）不淨想、（二）無常想、（三）於㆓無常㆒觀㆓於苦㆒想、（四）於㆓苦法中㆒觀㆓無我㆒想、（五）厭惡食想、（六）於㆓一切世間㆒無㆓安樂㆒想、（七）生光明想（斷想）（八）觀㆓離欲㆒想（離想）、（九）觀㆓滅離㆒想（滅想）（十）觀死想とあり。

【五】此の中に十想のみを說ける所以。

【六】佛が經に十想を說ける所以。以下、十二の異說を擧げて、

想を説く。彼は淨有りと執するに由るが故に、便ち生死に樂著す、彼を對治せんがための故に、一切世間不可樂想を説く。彼は生死に著するに由るが故に、便ち涅槃を求めず、彼を對治せんがための故に、斷想・離想・滅想を説く。彼は涅槃を求めざるに由るが故に、壽命を保つことを愛す。彼を對治せんがための故に死想を説くなり」と。有るが説く、「世尊は、過失を厭逆し、過失を遠離し、及び彼を離れて得る所の功徳を證することを顯さんが爲めの故に十想を説けり。謂く、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想を説くは、則ち過失を厭逆することを顯し、無常想・無常苦想・苦無我想・死想を説くは則ち過失を遠離することを顯し、斷想・離想・滅想を説くは則ち彼を離れて得る所の功徳を證することを顯すなり」と。有るが説く、「世尊は、暫時斷と究竟斷とを顯さんが爲めの故に十想を説けり、謂く、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想を説くは、暫時斷を顯し、餘の七想を説くは、究竟斷を顯す。暫時斷と究竟斷との如く、是の如く、有影斷と無影斷、有餘斷と無餘斷、有縛斷と無縛斷、摧枝葉斷と拔根本斷、制伏纒斷と害隨眠とも亦、爾るなり」と。有るが説く、「世尊は、三界の染を離るゝ加行と、三界の染を離るゝ道と、三界の染を離るゝことを顯さんが爲めの故に、十想を説く。謂く、不淨想・厭食想を説くは、欲界の染を離るゝ加行を顯し、無常想を説くは、欲界の染を離るゝ道を顯し、斷想を説くは、欲界の染を離るゝことを顯し、一切世間不可樂想を説くは、色界の染を離るゝ加行を顯し、無常苦想を説くは、色界の染を離るゝ道を顯し、離想を説くは、色界の染を離るゝことを顯す。死想を説くは無色界の染を離るゝ加行を顯し、苦無我想を説くは、無色界の染を離るゝ道を顯し、滅想を説くは、無色界の染を離るゝことを顯すなり」と。

第二節[七]　十想の界地等の諸門分別

[八]是の如き十想の界を分別すれば、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想は欲・色界にして、餘の想は、三界及び非界なり。

佛が十想を説ける所以を詳示せり。此の中、十想の意味をも顯示することは注意に價す。

【七】本節は、十想の界・地・所依行相等の諸門を分別して、諸方面より十想を明にする段なり。而も一般の是の如き諸門分別に、自性斷と所緣斷との分別を附せるは、稍特殊の點なり。

【八】十想の界分別。

九 地をいへば、不淨想・厭食想は十地にあり。謂く、欲界と靜慮中間と四靜慮及び四の近分となり。一切世間不可樂想は七地に在り、謂く、欲界と未至と靜慮中間と根本四靜慮となり。餘の七想の有漏なるものは十一地に在り、謂く、欲界と未至と靜慮中間と根本四靜慮と四無色とにして、無漏なるは、九地に在り、謂く、未至と靜慮中間と根本四靜慮と下三無色となり。

一〇 所依をいへば、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想は欲界に依り、餘は三界に依る。

一一 行相をいへば、無常想は無常行相と作り、無常苦想は苦行相と作り、苦無我想は無我行相と作り、不淨想は不淨行相と作り、厭食想は厭逆行相と作り、一切世間不可樂想は不可樂行相と作り、死想は死行相と作り、斷想は斷行相と作り、離想は離行相と作り、滅相は滅行相と作るなり。

有るが說く、「後の三の一切は、皆、滅・靜・妙・離の四種の行相と作る」と。

一二 問ふ、死相も亦、無漏に通ずとせば、云何が聖道が死行相と作るや。答ふ、死が所緣と爲るが故に死想と名くるも、然も彼は還つて無常行相と作るなり。問ふ、若し爾らば、死想と無常想とに何の差別有りや。有るが說く、「諸行の最後の無常を觀察する、此の想を死想と名け、諸行の刹那の無常を觀察する、此の想を無常想と名く」と。有るが說く、「有執受の諸行の無常を觀察する、此の想を死想と名け、有執受と無執受との諸行の無常を觀察する、此の想を無常想と名く」と。有るが說く、「有情處に於て轉ずるを死想と名け、法處に於て轉ずるを無常想と名く」と。

一三 問ふ、若し厭食想が厭逆行相と作るとせば、彼の不淨想も亦、厭逆行相と作るに、此の二に何の差別有りや。答ふ、不淨想は色を厭逆し、厭食想は味を厭逆するなり。有るが說く、「不淨想は婬貪を對治し、厭食想は食貪を對治するなり」と。

一四 諸有の十六行相の外に聖道無からしめんと欲する者、彼は說く、「無漏の斷・滅・離の想は、卽ち滅諦の四種の行相と作る」と。諸有の十六行相の外にも聖道有らしめんと欲する者、彼は說く、「無漏

【九】十想の地分別。

【一〇】十想の所依分別。

【一一】十想の行相分別。此の中には、有漏の麁・苦・障・靜・妙・離とも異り、非常・苦・空・無我等の十六行相とも異る、厭逆行相、不可樂行相、死行相・斷行相等を擧ぐる點注意すべし。

【一二】特に死行相と無常行相との關係に就きて。

【一三】特に厭食想と不淨想との行相上の相違に就きて。

【一四】特に、十六行相外の聖道の有無と、斷・離・滅想の行相との關係。

の斷想は、卽ち斷行相と作り、乃至、無漏の滅想は卽ち滅行相と作る」と。

一五 所緣をいへば、無常想の有漏なるものは、一六 三諦を所緣と爲し、無漏なるものは苦諦を所緣と爲す。無常苦想の有漏なるものは 一七 二諦を所緣と爲し、無漏なるものは苦諦を所緣と爲す。一八 苦無我想の有漏なるものは一切法を所緣と爲し、無漏なるものは、苦諦を所緣と爲す。然も佛は、此の中、所說の三想につきて、唯、苦諦を緣ずるもののみを說くも餘には非ず。不淨想は眼識を加行と爲して引發せらるゝが故に、色處を所緣と爲す。厭食想は段食を厭ふが故に、香・味・觸處を所緣と爲す。有るが說く、「此の想も亦、眼識を加行と爲して引發する所なるが故に、但、色處のみを以て所緣と爲す」と。

一切世間不可樂想に就きては、有るが說く、「唯、欲界のみを緣ず、此の想は、世間の可愛の事を緣ずる貪欲を對治するに、此の貪欲は唯、欲界にのみ在りと說くを以ての所に」と。此の中、有るが說く、「唯、世間の可愛の事のみを緣ず」と。有るが說く、「亦、可愛事の起す所の貪欲をも緣ず」と。問ふ、若し唯、欲界のみを緣ずとせば、云何が一切世間不可樂想と名くるや。答ふ、一切に二種あり、一は一切の一切と、二は少分の一切となり。此の中には、少分の一切を說くをもて、是の故に過無きなり。有るが說く、「此の想は通じて三界を緣ず、一切世間不可樂想と名くるを以ての故に」と。問ふ、若し爾らば、何が故に、「此の想は、世間の可愛事の貪欲を對治す、彼の貪欲は、唯、欲界にのみ在るが故に」と說けるや。答ふ、彼の經は、初起趣入の加行を顯示するが故に、是の說を作すなり。若し已に數習し成滿するものなれば、亦、能く色、無色界の貪欲をも斷ず。是の故に、過無きなり。

死想につきては、有るが說く、「最後の刹那の命根を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「最後の刹那の命根の無常を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「最後の刹那の命根と倶生する五蘊を以て所緣

【一五】十想の所緣分別。
【一六】玆にいふ三諦とは、苦諦・集諦・道諦なること言ふ迄もなし。
【一七】玆の二諦とは、苦・集の二諦なり。
【一八】苦無我想は無我行相なるが故に、其の有漏なるは一切法を緣ずるなり。尙、有漏の無我行相が一切法を緣じ、無漏のが苦諦をのみ緣ずるに就きては、婆沙九卷（毘曇部七、頁一七六以下）の非我の行相の項を參照すべし。

と爲す」と。有るが説く、「最後の刹那の命根と倶生する五蘊の無常を以て所縁と爲す」と。有るが説く、「一切衆同分と命根とを以て所縁と爲す」と。有るが説く、「一切の衆同分と命根との無常を以て所縁と爲す」と。有るが説く、「一切の衆同分と命根と倶生する五蘊を以て所縁と爲す」と。と有るが説く、「一切の衆同分と命根と倶生する五蘊の無常を以て所縁と爲す」と。如是説者はいふ、「最後の命根と倶生する五蘊の無常を以て所縁と爲す」と。

斷想は斷を以て所縁と爲し、離想は離を以て所縁と爲し、滅想は滅を以て所縁と爲す。此の後の三想は、別に隨へば此の如きも、卽ち是は皆、滅諦涅槃を以て所縁の義と爲すなり。

一九 念住をいへば、無常想・無常苦想・苦無我想は、四念住と倶にして、不淨想・厭食想は身念住と倶なり。一切世間不可樂想は、有るが説く、「身念住と倶なり」と。有るが説く、「法念住と倶なり」と。死想と斷・離・滅想とは法念住と倶なり。

二〇 智をいへば、無常想と無常苦想と苦無我想と死想とは、四智と相應す、謂く、法智と類智と苦智と世俗智となり。不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは一智と相應す、謂く世俗智なり。斷・離・滅想は四智と相應す。謂く、法智と類智と滅智と世俗智となり。

二一 三摩地をいへば、無常想と無常苦想と死想との無漏なるは、無願三摩地と相應し、苦無我想の無漏なるは、空三摩地と相應し、斷・離・滅想の無漏なるは空三摩地と相應し、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想と及び餘の七想中の有漏なるとは、皆三摩地と相應せず。

二二 根をいへば、總じて説けば、皆三根と相應す。謂く、樂・喜・捨根なり。

二三 世をいへば、皆三世に墮す。

世を縁するやをいへば、無常想と無常苦想と苦無我想とは、三世を縁じ、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想との過去なるは過去を縁じ、現在なるは現在を縁じ、未來の生のものは未來を縁じ、不

【一九】十想の念住分別。

【二〇】十想の智分別。

【二一】十想の三摩地分別。

【二二】十想の根相應分別。

【二三】十想の世分別と何の世を縁ずるやの分別。

の斷想は、卽ち斷行相と作り、乃至、無漏の滅想は卽ち滅行相と作る」と。

[一五]所緣をいへば、無常想の有漏なるものは、[一六]三諦を所緣と爲し、無漏なるものは苦諦を所緣と爲す。無常苦想の有漏なるものは[一七]二諦を所緣と爲し、無漏なるものは苦諦を所緣と爲す。[一八]苦無我想の有漏なるものは一切法を所緣と爲し、無漏なるものは、苦諦を所緣と爲す。然も佛は、此の中、所說の三想につきて、唯、苦諦を緣ずるもののみを說くも餘には非ず。不淨想は眼識を加行と爲して引發せらるゝが故に、色處を所緣と爲す。厭食想は段食を厭ふが故に、香・味・觸處を所緣と爲す。有るが說く、「此の想も亦、眼識を加行と爲して引發する所なるが故に、但、色處のみを以て所緣と爲す」と。

一切世間不可樂想に就きては、有るが說く、「唯、欲界のみを緣ず、此の想は、世間の可愛の事を緣ずる貪欲を對治するに、此の貪欲は唯、欲界にのみ在りと說くを以ての所に」と。此の中、有るが說く、「唯、世間の可愛の事のみを緣ず」と。有るが說く、「亦、可愛事の起す所の貪欲をも緣ず」と。問ふ、若し唯、欲界のみを緣ずとせば、云何が一切世間不可樂想と名くるや。答ふ、一切に二種あり、一は一切の一切と、二は少分の一切となり。此の中には、少分の一切を說くをもて、是の故に過無きなり。有るが說く、「此の想は通じて三界を緣ず、一切世間不可樂想と名くるを以ての故に」と。問ふ、若し爾らば、何が故に、「此の想は、世間の可愛事の貪欲を對治す、彼の貪欲は、唯、欲界にのみ在るが故に」と說けるや。答ふ、彼の經は、初起趣入の加行を顯示するが故に、是の說を作すなり。若し已に數習し成滿するものなれば、亦、能く色、無色界の貪欲をも斷ず。是の故に、過無きなり。

死想につきては、有るが說く、「最後の刹那の命根を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「最後の刹那の命根の無常を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「最後の刹那の命根と俱生する五蘊を以て所緣

【一五】十想の所緣分別。

【一六】茲にいふ三諦とは、苦諦・集諦・道諦なること言ふ迄もなし。

【一七】茲の二諦とは、苦・集の二諦なり。

【一八】苦無我想は無我行相なるが故に、其の有漏なるは一切法を緣ずるなり。尙、有漏の無我行相が一切法を緣じ、無漏のが苦諦をのみ緣ずるに就きては、婆沙九卷（毘曇部七、頁一七六以下）の非我の行相の項を參照すべし。

と爲す」と。有るが說く、「最後の刹那の命根と倶生する五蘊の無常を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「一切衆同分と命根とを以て所緣と爲す」と。有るが說く、「一切の衆同分と命根との無常を以て所緣と爲す」と。有るが說く、「一切の衆同分と命根と倶生する五蘊を以て所緣と爲す」と。と有るが說く、「一切の衆同分と命根と倶生する五蘊の無常を以て所緣と爲す」と。如是說者はいふ、「最後の命根と倶生する五蘊の無常を以て所緣と爲す」と。

斷想は斷を以て所緣と爲し、離想は離を以て所緣と爲し、滅想は滅を以て所緣と爲す。此の後の三想は、別に隨へば此の如きも、卽ち是は皆、滅諦涅槃を以て所緣の義と爲すなり。

一九 念住をいへば、無常想・無常苦想・苦無我想は、四念住と倶にして、不淨想・厭食想は身念住と倶なり。一切世間不可樂想は、有るが說く、「身念住と倶なり」と。有るが說く、「法念住と倶なり」と。死想と斷・離・滅想とは法念住と倶なり。

二〇 智をいへば、無常想と無常苦想と苦無我想と死想とは、四智と相應す、謂く、法智と類智と苦智と世俗智となり。不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは一智と相應す、謂く世俗智なり。斷・離・滅想は四智と相應す。謂く、法智と類智と滅智と世俗智となり。

二一 三摩地をいへば、無常想と無常苦想と死想との無漏なるは、無願三摩地と相應し、苦無我想の無漏なるは、空三摩地と相應し、斷・離・滅想の無漏なるは空三摩地と相應し、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想と及び餘の七想中の有漏なるとは、皆三摩地と相應せず。

二二 根をいへば、總じて說けば、皆三根と相應す。謂く、樂・喜・捨根なり。

二三 世をいへば、皆三世に墮す。

世を緣ずるやをいへば、無常想と無常苦想と苦無我想とは、三世を緣じ、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想との過去なるは過去を緣じ、現在なるは現在を緣じ、未來の生のものは未來を緣じ、不

【一九】十想の念住分別。

【二〇】十想の智分別。

【二一】十想の三摩地分別。

【二二】十想の根相應分別。

【二三】十想の世分別と何の世を緣ずるやの分別。

生のものは三世を緣ず。死想に就きては、有るが說く、「三世を緣ず」と。有るが說く、「未來を緣ず」と。斷・離・滅想は非世を緣ずるなり。

[三四] 善等をいへば、一切は皆、善なり。

善等を緣ずるやにつきていへば、無常想と無常苦想と苦無我想と不淨想とは、善・不善・無記を緣じ、厭食想は無記を緣ず。一切世間不可樂想につきては、有るが說く、「三種を緣ず」と。有るが說く、「不善と無記とを緣ず」と。死想に就きては、有るが說く、「無記を緣ず」と。有るが說く、「三種を緣ず」と。斷・離・滅想は唯、善のみを緣ずるなり。

三界繫・不繫をいへば、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは欲・色界繫にして、餘は三界繫及び不繫なり。

三界繫・不繫を緣ずるやをいへば、無常想と無常苦想と苦無我想と死想とは三界繫を緣じ、不淨想と厭食想とは欲界繫を緣ず。一切世間不可樂想につきては、有るが說く、「欲界を緣ず。此の想は、可愛の事を緣ずる貪欲を對治するをもて、此の貪欲は唯、欲界のみに在りと說くを以て故に」と。有るが說く、「三界を緣ず。此は一切世間不可樂想と名くるを以ての故に」と。如是說者はいふ、「初說を善と爲す」と。斷・離・滅想は不繫を緣ずるなり。

[三五] 學等をいへば、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは、唯、非學非無學にして、餘は三種に通ず、謂く、學と無學と非學非無學となり。

學等を緣ずるやをいへば、一切は皆、非學非無學を緣ず。

見所斷等をいへば、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは唯、修所斷のみにして、餘は修所斷と不斷とに通ず。

見所斷等を緣ずるやをいへば、無常想と無常苦想と苦無我想とは、見・修所斷を緣ず。不淨想と厭

【三四】十想の三性乃至界繫等の分別。

【三五】十想の學等乃至加行得離染得分別。

食想と一切世間不可樂想とは修所斷を緣ず。死想は、有るが說く、「修所斷を緣ず」と。有るが說く、「見・修所斷を緣ず」と。斷・離・滅想は、不斷を緣ず。

名と義とを緣ずるやをいへば、無常想と無常苦想と苦無我想とは通じて名と義とを緣じ、死想は、有るが說く、「唯、義のみを緣ず」と。有るが說く、「通じて名と義とを緣ず」と。餘の六想は、但、義のみを緣ずるなり。

自相續等を緣ずるやをいへば、前の七想は自他の相續を緣じ、後の三想は非相續を緣ず。

加行得・離染得・生得をいへば、一切は加行得と離染得とにして、生得には非ず。

[三六] 有漏・無漏をいへば、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とは、唯、有漏のみにして、餘は有漏と無漏となり。外國師は說く、「死想は唯、有漏のみなり、所以は何ん。諸の聖道は、我れ當に死すべしとの行相を作して、轉ずるに非ざるが故に」と。評して曰く、「應に說くべし、此の想は有漏と無漏となりと。此の想は加行時に、我等は當に死すべしとの行相を作すと雖も、若し成滿時なれば、卽ち彼の境に於て還つて無常行相と作りて轉ずるが故に」と。

有漏・無漏を緣ずるやをいへば、前七想は有漏を緣じ、後の三想は無漏を緣ず。

問ふ、此の十想の(一)幾が有漏にして無漏を緣じ、(二)幾が無漏にして有漏を緣じ、(三)幾が有漏にして有漏を緣じ、(四)幾が無漏にして無漏を緣ずるや。答ふ、[三七](一)三の少分は是れ有漏にして、無漏を緣じ、(二)四の少分は是れ無漏にして有漏を緣じ、(三)三の全と四の少分とは是れ有漏にして有漏を緣じ、(四)三の少分は是れ無漏にして無漏を緣ずるなり。

問ふ、此の十想は幾が有漏に非ずして有漏を緣ぜざるに非ざるや。――乃至廣く四句を作るに、前の第二句は此の第一句と作り、前の第一句は此の第二句と作り、前の第四句は此の第三句と作り、前の第三句は此の第四句と作るなり。

【三六】 十想の有漏無漏等の分別。

【三七】 以下の四句中の第一の三の少分とは、斷・離・滅の三想の有漏なるものをいふ、この三は無漏を緣ずるが故に。第二句の、四の少分とは、無常想と無常苦想と苦無我想と死想との無漏なるものをいふ、この四想は凡て有漏を緣ずるものなるが故に。第三句の三の全とは、不淨想と厭食想と一切世間不可樂想とをいふ。この三は凡て有漏にして、有漏のみを緣ずるが故に。次の四の少分とは、無常想と無常苦想と苦無我想と死想との有漏なるものをいふ。この四も亦、有漏を緣ずるが故に。第四句の三の少分とは、斷・離・滅の三想の無漏なるものなり。この三は亦、無漏を緣ずるが故に。

[二八]有爲、無爲をいへば、一切は皆、是れ有爲なり。

有爲、無爲を緣ずるやをいへば、前の七想は有爲を緣じ、[二九]後の三想は無爲を緣ず。

[三〇]問ふ、此の十想は、幾が自性斷にして、所緣斷に非ず、幾が所緣斷にして自性斷に非ず、幾が自性斷にして亦、所緣斷なり、幾が自性斷にも非ず、亦、所緣斷にも非ざるや。答ふ、[三一]三の少分は自性斷にして所緣斷に非ず、四の少分は所緣斷にして自性斷に非ず、三の全と四の少分とは亦は自性斷なり、亦は所緣斷なり、三の少分は自性斷にも非ず、亦、所緣斷にも非ざるなり。

問ふ、此の十想は幾が自性斷に非ずして、所緣斷ならざるに非ざるや、乃至廣くの四句を作るに、前の第二句は此の第一句と作り、前の第一句は此の第二句と作り、前の第四句は此の第三句と作り、前の第三句は此の第四句と作る。

[三二]第三節　十想の中の轉と隨轉とに就きて

[三三]問ふ、此の十想は幾が是れ轉にして、幾が是れ隨轉なりや。答ふ、三は是れ轉なり。不淨想と厭食想と死想とをいふ。餘の七は是れ隨轉なり。

[三四]問ふ、若し爾らば何の想が轉ずる時、幾想が隨轉するや。答ふ、不淨想と厭食想との轉の時、各四想が隨轉なり。謂く、一切世間不可樂想と及び斷・離・滅想とをいふ。死想の轉の時、七想は隨轉なり。無常想と無常苦想と苦無我想と一切世間不可樂想と及び斷・離・滅想とをいふ。

[三五]云何が不淨想の轉ずる時、四想が隨轉すといふや。謂く、修行者が不淨想を起す時、先に塚間に行き、不淨想を觀ず。所謂、死屍の青瘀なる、膖脹し、膿爛せる、或は虫獸に食噉され、血肉狼藉し、支節分離せる、或は肉盡きて筋連れる、唯、骨鎖の次第に連接するもののみを觀ずるなり。是の相を取り已りて一近處に至り、目を閉ぢて思惟し、若し皆分明に現在前すれば善し、若し明了ならずんば、當に更に往きて觀ずべし。此の如く、善く不淨の相を觀じ已り、疾く所止に還り、足を洗

【二八】　十想の有爲無爲等の分別。

【二九】　滅諦涅槃を緣ずるが故に。

【三〇】　十想の自性斷・所緣斷分別。

【三一】　以下の中、「三の少分の自性斷にして所緣斷に非ざるもの」とは、斷・離・滅の三想の有漏なるをいふ。有漏法なるが故に、自性は斷ずるも、所緣は滅諦無漏なるが故に不斷なればなり。「四の少分の所緣斷にして、自性斷に非ざるもの」とは、無常想・無常苦想・苦無我想・死想の無漏なるものをいふ。所緣は有漏なるをもつて、斷ずべければなり。「三の全と四の少分との亦、自性斷にして、亦所緣斷なるもの」といふ中、三の全とは、不淨想・厭食想・一切世間不可樂想をいひ、四の少分とは、無常想と無常苦想と苦無我想と死想との有漏なるものをいふ。理由は前說の如し。「三の少分の兩斷に非ざるもの」とは、斷・離・滅の無漏なるものをいふ。これの理由も亦、前述によりて自ら明なるべし。

【三三】　本節は十想の中、不淨想と厭食想と死想とが轉ずる經過を明かにし、同時に、此の前二の轉ずるとき隨つて轉

ひて座を敷き、結跏趺坐し、身心を調滑し、身心をして柔軟にし、身心を堪能ならしめ、身心を無熱にし、身心をして蓋を離れしむ。既に身心をして諸蓋を離れしめ已り、先の外相を取り、方に已身を以て彼の如く此も亦、爾り、此の如く彼も亦、爾りとす。謂く、我が此身には具さに、前の如き諸の不淨の相有り。足骨に因りて以て踝骨を拄へ、踝骨に因りて以て脛骨を拄え、脛骨に因りて以て膝骨を拄え、膝骨に因りて以て髀骨を拄え、髀骨に因りて以て髖骨を拄え、髖骨に因りて以て腰骨を拄え、腰骨に因りて以て脊骨を拄え、脊骨に因りて以て肋骨を傍連す、又、手骨に因りて以て肘骨を拄え、肘骨に因りて以て臂骨を拄え、臂骨に因りて以て肩骨を拄え、肩骨に因りて以て脊骨を拄ふ。復、脊骨に因りて以て項骨を拄え、項骨に因りて以て頷輪を拄え、頷輪に因りて以て齒鬘を拄え、上に髑髏有りと。これ此の身中に於ける骨鎖の次第なるが、善く是の如き相を取り已りて、念を眉間に繋ぐ。然も其の樂ふ所に、廣なる有り、略なる有り、若し略を樂ふ者は即ち眉間より身念住に入り、身念住より受念住に入り、受念住より心念住に入り、心念住より法念住に入るなり。若し廣を樂ふものなれば、眉間より起ちて復、髑髏・齒鬘・頷輪を觀じ、次第に觀察して乃ち足骨に至る。次で勝解作意力に由るが故に、所觀の骨鎖をして漸く增し漸く廣からしめて、一床・一房・一院・一僧伽藍・一村・一田・一城・一國に遍滿し、乃ち大海を邊際とする所有の大地に、皆白骨周匝し、遍滿すと爲すに至る。復、勝解作意力を以ってての故に、彼より漸く略して大地の骨を捨して一國に於けるを觀じ、一國のを捨して一城のを觀じ、乃至、一房のを捨して一床のを觀ず。復、一床の所有の骨相を捨して、但、身骨のみを觀ず。謂く、足骨を觀じ、次で踝骨を觀じ、次で脛骨を觀じ、乃至最後に髑髏骨を觀ず、髑髏骨を捨して、念を眉間に繋ぐなり。

彼の瑜伽師が、若し是の如く廣略に於て自在となれば、是を不淨觀成ずと名くるなり。

然も此の不淨觀は、所緣少なるも自在少なるに非ざるやにつきて、應に四句を作すべし、(一)有

ずる四想及び、死想の轉ずる時に隨つて轉ずる七想を詳說する段なり。尙、最後に、不淨想は假想觀なるに拘らず、顚倒に非ざると、煩惱を伏することとを得る點を明かにせり。

【三三】**十想の轉・隨轉分別。**

【三四】**諸想の轉と隨轉との關係。**

【三五】**特に、不淨想轉と其の隨轉の四想とに就きて。**此の中、不淨觀の成滿するを說くなり其の不淨觀を完全に轉ずる時、又、他の一切世間不可樂想と、斷・離・滅想等も亦、圓滿するを以て、此の四想はこゝに隨轉すと言ふなり。

るは、所緣少なるも、自在少なるに非ざるものあり、謂く、但、自身の骨鎖相のみを思惟し、而して能く數々(しばしば)彼の觀に入出するものなり。(二)有るは自在少にして所緣少に非ざるものあり、謂く、能く大地の骨鎖相を思惟して而も數々彼の觀に入出すること能はざるものなり。(三)有るは自在ににして亦、所緣も少なるものあり。謂く、但、自身の骨鎖相のみを思惟して亦、數々彼の觀に入出すること能はざるものなり。(四)有るは自在少なるにも非ず、亦、所緣少なるにも非ざるものあり、謂く、能く大地の骨鎖相を思惟して亦、能く數々彼の觀に入出するものなり。

又、此の不淨觀は所緣無量にして自在無量に非ざるものありやにつきても、應に四句を作すべし。謂く、前の第二句は此の第一句と作り、前の第一句は此の第二句と作り、前の第四句は此の第三句と作り、前の第三句は此の第四句と作るなり。

彼の瑜伽師は是の如く不淨の相を觀察し已りて、是の思惟を作す、生死の諸行は、何ぞ欣樂すべきや、と。爾の時、便ち欲・色・無色の三界の諸行に於て、都て貪欲せず。此の如きに由るが故に、彼の先の所修の一切世間不可樂想は便ち圓滿なることを得。彼は生死を欣樂せざるに由るが故に、便ち涅槃を欣樂するなり。此の因緣に由りて先に修習せし所の斷・離・滅想は皆圓滿することを得。是の如く不淨想が轉ずる時、四想が隨轉するなり。

三六 云何が厭食想が轉ずる時、四想が隨轉するや。謂く、修行者が厭食想を起す時、手中、若しくは鉢中の食は何れよりして成ずるやを觀じ、穀等よりすと知る。復、穀等は何れよりして來るやを觀じて、田の中の種子の差別よりすと知る。復、種子は誰に由るが故に生ずるやを觀じて、種々の泥土糞穢に由ると知る。是の如く觀じ已りて便ち是の念を作す。此の食は展轉して不淨より生じ、復、能く展轉して諸の不淨を生ず、誰か有智者にして中に於て貪著せんやと。

三七 又、彼の行者には、或は常に乞食するものと、或は僧中にて食するものとあり。常に乞食するもの

【三六】 **厭食想の轉と四想の隨轉とに就きて。** 隨轉の四想は不淨想の轉ずる時の如し。此の中、厭食想の轉ずる次第を明にせり。

【三七】 **特に僧中の常乞食者と僧伽中にて食する者との厭食想觀の別**——

は、晨且に澡漱して楊枝を嚼む時、水に於て尿想を作し、楊枝に於て指骨の想を作し、衣を著し、鉢を持して聚落に往く時、衣に於て濕れる人皮の想を作し、腰縧に於て人腸の想を作し、鉢に於て髑髏の想を作し、錫杖に於て脛骨の想を作し、道路間に見る所の礫石に於て、骸骨の想を作し、既に聚落に至りて、諸城壁を見ては塚墓の想を作し、諸の男女を見ては骨鎖の相を作す。乞食時に於て、若し餅を得れば、人肚の想を作し、若し麨を得れば、骨粖の想を作し、若し鹽を得れば、人齒の想を作し、若し飯を得れば、蛆虫の想を作し、若し諸の茶を得れば、人髮の想を作し、若し羹臛を得れば、下汁の想を作し、若し乳酪を得れば、人腦の想を作し、若し酥蜜を得れば、人脂膏の想を作し、若し魚及び肉を得れば、人肉の想を作し、若し諸飲を得れば、人血の想を作し、若し歡喜丸等を得れば乾糞の想を作すなり。其の僧中に食するものは、若し淨草を得れば、死人の髮の想を作し、處する所の床座にては、骨聚の想を作し、所得の飲食に於ては、不淨想を作すこと皆、前説の如し。

三八 問ふ、行者は何が故に、飲食等に於て不淨想を作すや。答ふ、彼は是の如き思惟を作す、「我れ無始の生死より不淨に於て淨想を作すに由るが故に、五趣に輪廻して諸の苦惱を受けしも、今は彼に違ひて、涅槃の樂に趣かんと欲す」と。是の故に、中に於て觀じて不淨と爲す。復次に、彼の行者は是の念を作す、「我れ飲食に於て淨想を生ずるが故に、貪心を增益し、聖道を障礙せしむること莫らんがための故に、飲食に於て不淨の想を作す。不淨の想に由りて便ち能く厭離す。彼の瑜伽師は、是の如く食に於て厭想を起し已りて是の思惟を作す。生死の諸行、何ぞ欣樂すべきやと。便ち三界の諸行に於て厭を生ず。是の如きに由るが故に、彼の先に修する所の一切世間不可樂想は便ち圓滿することを得。彼は生死を厭ふに由るが故に、便ち涅槃を樂しむ。此の因緣に由りて先に修習する所の斷・離・滅想は皆、圓滿することを得。是の如く厭食想の轉ずる時、四想が隨轉するなり。

【三八】特に飲食等に於て不淨想をなすに就きて。

三九 云何が死想の轉ずる時、七想が隨轉するや。謂く、修行者が死想を起す時、諸法の念々の生滅を觀察す。卽ち彼れは春時、諸の卉木の花を生じ葉を生じて、鮮榮・紅紺なること妙寶色の如く、河・池の津液の、水、漸く盈滿し、魚鳥の喧戲するを見て、便ち是の念を作す、今、外物、生ずと。彼れ聚落に入り、諸の男女の歌舞し跳躍し飮食し喜慶するを見て、卽前に之を問ふ、「此れ何が故に爾るや」と。答へて曰く、「此處に男を生じ、女を生ず」と。便ち是の念を作す、今、內法生ずと。復、夏時に於て、諸の卉木の柯條聳密し、花葉茂盛して、河池汎溢し、波濤輪轉し、査沫敹岸するを見て、便ち是の念を作す、此れ諸の外法、今、已に興盛なりと。彼れ聚落に入り、諸の男女の鼓を擊ち貝を吹き、歌舞し歡笑し、車馬雜沓するを見て、卽前に之を問ふ、「此れ何が故に爾るや」と。答へて曰く、「此の中に嫁娶の事有り」と。便ち是の念を作す、此れ諸の內法、今已に壯盛なりと。復、秋時に於て、諸の草木の秋日に曝され、凉風に吹かれて、青色銷盡し、葉皆黃悴し、河池の流水も漸々に減縮するを見て、便ち是の念を作す、此れ諸の外物の今、已に衰悴するなりと。彼れ聚落に入り、諸の男女の髮白く面皺り、杖に扶りて行き、身形曲僂し、咳逆上氣するを見て、便ち是の念を作す、此れ諸の內法が今、已に衰老するなりと。復、冬時に於て諸の草木の霜風に飄擊され、葉皆地に在り摧折し枯死し、河池の流水、漸く皆竭盡し、乃至乾涸するを見て、便ち是の念を作す、此れ諸の外法が今已に復、滅するなりと。彼れ聚落に入りて、諸の男女の被髮を跳踊させ、胸を搥ちて號叫し、宛轉して地に在るを見て、卽前に之を問ふ、「此は何が故に爾るや」と。答へて曰く、「此處の父母が死喪せしなり」と。便ち是の念を作す、此れ諸の內法が今、已に復、滅するなりと。

彼は是の如く內外の無常に於て善く相を取り已りて其の所止に還り、足を洗ひ座を敷き、結跏趺坐して身心を調滑にし、身心を柔渜にせしめ、身心を堪能にし、身心を無熱にし、身心をして蓋を離れしむ。旣に身心をして諸の蓋を離れしめ已り、內に其の心を住せしめて死想を修す。謂く、所

【三九】 死想の轉と、七想の隨轉とに就きて。先づ死想圓滿するに至る經過を明にせり、而も、こは同時に生滅觀をも明かにするものなることを注意すべし。

見の諸の無常の[四〇]相の如く、內身の一期の諸蘊は結生時に生じ、乃至老死時に滅すと觀察す。復、一期に於ても爾所の位の諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨てゝ一位の法蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一位に於ても爾所の歲の諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨てゝ一歲の諸蘊の前生じ、後滅するを隨觀す。復、一歲に於ても爾所の時に諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨して、一時の諸蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一時に於ても、爾所の月の諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨てて、一月の諸蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一月に於ても、爾所の晝夜の諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨てゝ、一晝夜の蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一晝夜に於て、爾所の[四一]牟呼栗多の諸蘊の各ゝ異なるもの有るに、餘を捨てゝ、一牟呼栗多の蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一牟呼栗多に於ても爾所の[四二]臘縛の諸蘊の各ゝ異なるもの有るに、餘を捨て、一臘縛の蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一臘縛に於て、爾所の[四三]怛刹那の諸蘊の各ゝ異るもの有るに、餘を捨て、一怛刹那の蘊の前生じ後滅するを隨觀す。復、一怛刹那に於て、爾所の[四四]刹那の諸蘊の各ゝ異なるもの有るに、刹那は最多なるを以ての故に、中に於て漸々略觀し、乃至蘊は二刹那に生じ二刹那に滅するを觀ず。是を生滅觀の加行が圓滿すと名くるなり。

此より無間に能く、諸蘊が一刹那に生じ一刹那に滅するを觀ず。是を生滅觀成ずと名くるなり。爾の時を名けて死想圓滿すと爲す。諸位の滅は卽ち是れ死なるを以ての故に。

[四五]彼の修行者は是の如く蘊の生滅を諦觀し已り、便ち是の念を作す。世尊所說の「諸行は無常なり」とは誠に善說たり、生滅は卽ち無常なるを以ての故にと。

是の如く行者の死想の轉ずる時に、先に修せし所の諸の無常想をして、皆圓滿せしむるなり。

行者は復、諸蘊の相續の前刹那の蘊が、後刹那の蘊に逼迫せるゝに由るが故に、生じ已りて卽ち滅するを觀じ、是の如く觀じ已りて、便ち是の念を作す、世尊の所說の「無常なるが故に苦なり」と

【四〇】相は大正本に想とあるも、三本宮本に相と在るをもつて、今は後者を選ぶ。

【四一】牟呼栗多(Muhūrta)。とは須臾と譯じ、三十牟呼栗多が一晝夜卽ち二十四時間に相當するが故に、一牟呼栗多は約四十八分に當る。

【四二】臘縛(Lava)は牟呼栗多の三十分の一なるが故に、約一・六分位に當る。

【四三】怛刹那(Tatkṣaṇa)は一臘縛の六十分の一なるが故に、一怛刹那量は約一・六秒に當る。

【四四】刹那(Kṣaṇa)は一怛刹那の百二十分の一なるが故に、一刹那は〇、〇一三秒强なり。卽ち七十五刹が一秒に當るわけなり。

【四五】**以下特に七想の隨轉につきて論ず——**

は、誠に善説たり、逼迫は即ち是れ苦なるを以ての故にと。是の如く行者の死想の轉ずる時、先に修する所の無常苦想をして圓滿することを得せしむるなり。

行者は復、前刹那の蘊が纔に滅して後刹那の蘊が即ち生ずること――假使、前蘊が念じて、我れ今滅せざらんと言ひ、後蘊が念じて、我　今、生ぜざらんと言ふとも、彼は所欲に於て、皆自在ならず。前蘊は後のゝに逼まらるゝが故に必ず滅し、後蘊は前のに牽るゝが故に必ず生ず――を觀じ、是の如く觀じ已つて、便ち是の念を作す、世尊所説の苦無我想は誠に善説たり、不自在は即ち無我なるを以ての故にと。是の如く行者が死想を轉ずる時、先に修せし所の苦無我想をして圓滿なることを得せしむるなり。

行者は復、諸行が生滅すること自在ならざるを觀ずるが故に、空行聚中に於て貪樂を生ぜず。此に由りて便ち三界の諸行に於て樂著を生ぜず、是の如く死想の轉ずる時、先に修せし所の一切世間不可樂想をして圓滿なることを得せしむるなり。

彼の修行者は、既に生死に於て樂著せざるが故に、便ち涅槃を樂しむ。是の如く死想の轉ずる時、先に修せし所の斷・離・滅想をして皆圓滿することを得せしむるなり。

此に由るが故に、死想の轉ずる時、七想が隨轉すると説けるなり。

四六 問ふ。諸の想を修する時、勝解作意有り、眞實作意有り、彼の勝解作意の觀ずる所は不實なり、何ぞ顚倒に非ざるや。答ふ、彼の修行者は、眞實に非ざることを知るをもて、實の執を生ぜざるが故に、顚倒に非ざるなり。問ふ、若し不實なることを知れば、何が故に猶、作すや。答ふ、煩惱を伏せんが爲め、是の故に須く作すべきなり。問ふ、此れ若し不實ならば、云何が能く煩惱を伏するや。答ふ、彼の想を作すに由りて便ち能く制伏す。恰も餘の女に於て母の想を作す時、貪染を生ぜず、怨憎所に於て親の想を作す時、瞋恚を生ぜず。下人所に於て尊の想を作す時、憍慢を生ぜざるが如

【四六】勝解作意は不顚倒にして能く煩惱を伏する所以に就きて。

勝解作意とは、謂はゞ假設的意識的に假説現象を觀ずるものなるが故に、實際的對象を考ふるが如く、境に繋せられずして、自在なり。從つてこれを勝解といふ。即ち假想觀にして、不淨想厭食想の觀法の如きをいふ。之に對して實際現實を對象として觀ずるのを眞實作意といふ。不淨觀の加行時、死屍等を見るが如きこれなり。

く、此も亦、是の如くなるが故に、須く觀察すべきなり。

阿毘達磨大毘婆沙論巻第百六十六

卷の第百六十七（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之二）

第四節　十想は四靜慮・無量乃至八智・三三摩地の幾を攝するやの論究[一]

【本論】[二] 四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處・八智・三三摩地あり。[三] 無常想等は幾靜慮等を攝するや。答ふ、無常想は四靜慮と四無色と四解脫とを攝す。乃至廣說。

[四] 問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、他の宗を止めて己が義を顯さんと欲するが故なり。分別論者の如きは、他性を攝するを許すも、自性を攝するを遮す。今、彼の意を止めて、自性を攝するを許し、他性を攝するを遮せんがための故に、斯の論を作せり。

[五] 問ふ、何が故に、此の中に、想は還つて想を攝すと說かざるや。答ふ、有るが說く「是れ作論者の意欲爾るが故なり、乃至廣說」と。有るが說く、「此の中、應に是の問を作すべし、無常想等は幾想等を攝するや。答ふ、無常想は無常想を攝し、乃至一切世間不可樂想は一切世間不可樂想を攝すと。應に是の說を作すべくして、而も說かざるは、當に知るべし此の義有餘なることを」と。有るが說く、「此の中、未成立の義を成立せしめんと欲すればなり。想は還つて想を攝すといふは待たずして成立するをもて、是の故に說かざるなり」と。問ふ、若し爾らば、後文にても亦、[六] 初靜慮等のは還た初靜慮等のを攝すと說くべからさらん。有るが說く、[七]「靜慮等は多法の體を攝す。多法に於て自性を攝するの義は、說かずして自ら成ずるには非ず。想は唯、一法のみなるをもて、是の故に難に非ざるなり」と。有るが說く、「彼も亦、應に、靜慮等は靜慮等を攝すと說くべからず。而も說く

【一】本節は、發智頌文の所謂「攝」論に相當す。卽ち、先づ十想は、四靜慮四無量乃至八智三三摩地の幾くを攝するやを論究する段なり。

【二】四靜慮乃至三三摩地の文は、婆沙論は之を省略するも、今、發智より補譯し置けり。

【三】無常想は幾靜慮を攝するや。

【四】論起の緣由は攝の意義を明示せんが爲め。

【五】想が想を攝すと以下の本文中に說かざる所以。

【六】本節の後の本文に、「初靜慮等は幾靜慮等を攝するや、答ふ、初靜慮は初靜慮と四無量と初二解脫と前四勝處と八智と三三摩地とを攝す、乃至第四靜慮は第四靜慮と三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處と八智と三三摩地とを攝す」と說くを指す。

【七】靜慮等は多法を攝すとは前註に示すが如く、初靜慮は初靜慮のみならず無量・解脫等をも攝するを言ふ。

は、種々の文、種々の說を現さんと欲すればなり。種々の文、種々の說に由りて、義を莊嚴すれば、義は則ち解し易し」と。有るが說く、「二門・二略・二階・二炬・二明・二光・二種の文影を現さんが爲めなり。想は想を攝すと說かざるが如く、是の如く亦、應に靜慮は靜慮等を攝すと說かざるべく、後に靜慮は靜慮等を攝すと說くが如く、是の如く亦、應に想は想を攝すと說くべし。彼と此との二義をして倶に通ぜしめんと欲するが故に、二文を作して互に相影發するなり」と。有るが說く、「此の中には、攝と及び相應との義を辯ず。想を以て想に對するときは、但、攝の義のみ有るも、相應の義無きをもて、[八]是の故に說かざるなり」と。評して曰く、此は理に應ぜず。[九]智と等持とに於ても亦、應に相應無しと說くべからざるが故に。應に是の說を作すべし、「想の自性は無雜にして、攝に於て了し易きをもて、是の故に說かず。[一〇]智と等持とは、或は自性に雜有り、或は行相に雜有りて、攝に於て了し難きをもて、是の故に則ち說くなり」と。

二 無常想が四靜慮を攝すとは、此は卽ち總說なり。然も、諸の靜慮は皆五蘊を性とするに、此の無常想は唯、想蘊のみを攝し、餘蘊を攝せず。想蘊中に於ては、唯、無常想のみを攝し、餘の想を攝せず、無常想中に於て、過去なるは過去なるを攝し、未來なるは未來なるを攝し、現在なるは現在なるを攝し、有漏なるは有漏なるを攝し、無漏なるは無漏なるを攝し、學なるは學なるを攝し、無學なるは無學なるを攝し、非學非無學なるは非學非無學なるを攝し、退法なるは退法なるを攝し、乃至不動法なるは不動法なるを攝す。中に於て、初靜慮に在るものは初靜慮を攝し、乃至、第四靜慮に在るものは第四靜慮のを攝す。是の故に總じて四靜慮のを攝すと說くなり。四靜慮のを攝するを說くが如く、四無色と四解脫とを攝するも亦、爾るなり。差別をいへば、四無色と四解脫とは四蘊を性と爲すことなり。

三 餘の想は應に隨つて亦、此の說に准ず。

【八】此の有說の想を以て想に對する時、相應の義無しと言ふは、自性は自性と相應する義なきが故なり。然るに後の本文に初靜慮と初靜慮と相應すると說くが如き文あるは、初靜慮は自地の五蘊を以て自性と爲し、其の中、倶生の受・想・行・識の四蘊が、相互に相應すると說くことを得るが故に、自性が自性と相應するの過なしとの意なるべし。

【九】智と等持とに於ても亦、應に相應無しと說くべからず云云の評者の言は、若し前有說の言ふが如く、「本文中には、攝と及び相應との義を辯ず云云」との主張を正しとせば、智と等持(三三摩地)との攝門も本文中に說くべからざる筈なり。何んとなれば、智と三三摩地を三三摩地とも共に自性は自性を攝せざるが故に。然るに本論は智と等持とに於て共に其の相攝を後文に說くが故に、前有說の言ふ「此中には、攝と及び相應との義を辯ずるもののみを說く」との意は妥當ならずとなり。

【一〇】智と等持とは、或は自性に雜ありとは、先づ智には八智(又は十智)あり、卽ち法智・類智・他心智・世俗智等あり、之等は皆其の自性に相通ずる點もあり通ぜざる點あり。

然も諸想は皆、想を以て自性と爲すが故に、皆、智と三摩地と第八解脫とを攝せざるなり。

[一三]問ふ、無常想も亦、欲界繫に通ずるに、此の中、何が故に說かざるや。答ふ、有るが說く、「應に說くべくして而も說かざるは、當に知るべし此の義有餘なることを」と。有るが說く、「無常想にして欲界に在るものは、是れ加行にして根本に非ず。此の中には、唯、根本のみを說くをもて、是の故に說かざるなり」と。有るが說く、「今、此の定蘊は、唯、定地の法のみを說くが故に、欲界を說かざるなり」と。有るが說く、「此の中、十想は靜慮等に對して門たるを以て問を爲すも、欲界は靜慮等の門に非ざるをもて、是の故に說かざるなり」と。餘想につきて欲界繫を說かざるの義も亦、此に同じ。

【本論】[一四]無常想の如く、無常苦想と苦無我想と死想と斷想と離想と滅想とも亦、爾るなり。

皆、八等至に在りて有漏・無漏に通ずるが故に。

[一五]此の七想は所緣も行相も異るを以ての故に、初三解脫と八勝處と十遍處と及び無量とを攝せず。

【本論】[一六]不淨想は第三・第四靜慮と初二解脫とを攝す。

[一七]問ふ、四靜慮中には、皆不淨想有るに、何が故に、唯、第三・第四靜慮のみを攝すと說けるや。答ふ、亦、應に初と第二との靜慮を攝すと說くべし。而も說かざるは、當に知るべし此の義有餘なることを」と。有るが說く、「若し初二解脫を攝すと說けば、當に知るべし、已に初二靜慮をも說くことを。初二解脫は初二靜慮に在るを以ての故に」と。有るが說く、「此の中、後を擧げて初めを顯すなり。[一八]離喜地を擧ぐれば、有喜地をも顯はすが故に」と。有るが說く、「初二靜慮に不淨想無きをもて、是の故に、說かざるなり。所以は何ん。彼の二地には皆、喜根有り、一切の喜根は、欣歡行轉なるに、不淨想は、厭感行轉なり。一心中に二行の轉ずること非ざるが故なり」と。問ふ、若し

例せば法智と類智とは無漏智なる點通ずるも、他は異り、法智と法智に攝する他心智とは自性同じきも、類智に攝する他心智、又は世俗智に攝する他心智とは同じからず、等々の如し。これ八智相互の自性に雜有り不雜ありと稱せらるる所以なり。亦、八智の行相にも雜有りとは、例せば、法・類智は十六行相と爲るに、他心智の無漏なるは、道の道・如・行・出の四行相とのみなり、有漏なるは不明了行相となり、又、世俗智は十六行相ともなり、又、餘の麁・苦・障等の行相ともなるが如きをいふ。次に、三三摩地の自性に雜ありとは、婆沙百四卷に施設論の文を引きて說くが如く「空三摩地は空にして亦、無願・無相なり、乃至、無相三摩地は、無相にして、亦、空・無願なり。なんとなれば、三三摩地の一一は、其の體、常に非ず、恒に非ず、不變易に非ず、我々所に非ざる等なるが故に」といひ、又、「空三摩地は是れ空にして無願にも無相にも非ず、乃至、無相三摩地は、是れ無相にして、空にも無願にも非ず。なんとなれば、此の三は行相別なるが故に」と言ふが如き、これ三三摩地の自性に雜有りと

爾らば、此の想所攝の初二解脱は何の地に在りや。答ふ、二近分に在りて根本地に非ず。亦、喜受と相違するを以ての故なり。問ふ、若し爾らば後文は、應に初二靜慮は初二解脱と前四勝處を攝すと說くべからざらん。答ふ、彼の說の靜慮は亦、眷屬をも攝すること、恰も城邑と說けば、亦、城邑の邊をも攝するが如くなればなり。問ふ、若し爾らば應に不淨想は第三靜慮を攝すと說くべからざらん。彼の地には樂受有りて、亦、不淨想と相違するを以ての故に。答ふ、第三靜慮の言は、亦、眷屬をも攝し、根本地に非ざるをもて、是の故に過無きなり。若し爾らば、此の中にも、亦、應に不淨想は初二靜慮をも攝すと說くべけん。汝は倶に近分地に在りて差別無しと許すを以ての故に。

一九 如是說者はいふ、「初二靜慮の根本地中にも亦、不淨想と及び初二解脱と有り、若し無しと謂はゞ應に能く此の地の染を離るること有ること無かるべし。此の地には增上の喜有りて、其の心を動踊するを以て、若し不淨想と初二解脱との、彼を制伏するもの無くんば、諸の瑜伽師は、豈に能く彼の地の染を離れんや。又、彼にも亦、苦集の忍智無かるべし。彼は厭行轉なるを以ての故に。此に由るときは亦、應に、無常想と無常苦想とも無かるべけん」と。問ふ、二〇 云何が喜受が厭行轉と作るや。答ふ、能く自在に厭ふが故に、亦、喜を生ず、卽ち喜を生ずる時、彼に於ても亦、厭ふ。怨に勝つ時、亦は厭ひ、亦は喜ぶが如し。有るが說く、「王と將士と與に、怨敵を摧き已りて共に喜樂を受くるが如し。是の如く行者も不淨想等を以て、欲界を摧き已りて、初靜慮等に於て共に喜樂を受くるなり」と。

有るが說く、「初靜慮中の初二解脱と及び不淨想とは、欲界の鼻舌の二識を對治し、第二靜慮の初二解脱と及び不淨想とは、初靜慮の眼・耳・身識を對治するをもて、是の故に、初二靜慮中には、定んで初二解脱と及び不淨想と有るなり。然も此の中にては、略するが故に、不淨想は初二靜慮を攝すと說かざるなり」と。有るが說く、「不淨想は實に四靜慮に在り。然も、此に、唯、第三・第四靜慮

稱せらるゝ所以なり。更に行相に雜ありとは、例せば、空三摩地も無願三摩地と倶に苦諦下の無漏の行相となること同じきも、前者が非我と空との二行相となるに、後者は非常と苦と（其他集諦と道諦とも）の各各四行相とも）なる點異りあるをいふ。

【一一】無常想が四靜慮等を攝すといふ意義に就きて。

【一二】餘の想は應に隨つて亦、此の說に准ずとは、餘の九想も、夫夫無常想につきて說けるが如く、想蘊を攝し、過去なるは、過去なるを攝し乃至不動法なるは不動法なるを攝するをいふ。

【一三】特に、無常想等の欲界繫なるを說かざる所以。

【一四】無常苦想・苦無我想・死想と斷・離・滅想とが靜慮等を相攝するやに就きて。

【一五】無常想等の七想が初三解脱等を攝せざる所以。此の無常想等の七想が初三解脱と八勝處と十遍處と無量と所緣異るといふに就きて說けば、初三解脱と八勝處と前八遍處とは欲界の色處をのみ緣じ、後の二遍處の中、空無邊遍處は空無邊處の四蘊を、識無邊處遍處は識無邊處の四蘊を緣じ、四無量は、欲界の有情のみを緣ずるに、無常想の

のみを攝すと說くは、第三靜慮には、生死中にての殊勝なる受の樂有り、第四靜慮には、生死中にての殊勝なる輕安の樂有るを以て、厭ひ難く捨し難きが故に、是の中に於て不淨想を說くも、初二靜慮中には、是の如き樂無きが故に、攝を說かざるなり」と。

[二二]問ふ、何が故に、不淨想は但、初二解脫を攝すとのみ說きて、前四勝處を攝すと說かざるや。答ふ、[二三]不淨想は是れ初修の總觀にして、初二解脫と相似なるが故に之を攝するも、勝處は是れ後起の別觀なるが故に相攝せざるなり。

【本論】[二三]不淨想の如く、厭食想も亦、爾り。

問ふ、厭食想は解脫の自性に非ざるに、云何が亦、初二解脫を攝するや。答ふ、此の文は但、應に厭食想は第三・第四靜慮のみを攝すと說くべし。而も不淨想の如し、と說くは、厭食想は不淨想を加行と爲すを以て、厭食想と及び加行とを說くことを顯さんと欲するが故に、不淨想の如し、と說けるなり。有るが說く、「厭食想は、不淨想と相雜り、相引きて、相攝の義有るをもて、是の故に、攝すること不淨想の如し、と說くなり」と。有るが說く、「厭食想も亦、不淨行轉と作ればなり。若し飯を得る時、虫蛆の想を作す、乃至廣說と說くが如きをもて、是の故に、亦、初二解脫を攝するなり。俱に色處の不淨を觀じて轉ずるが故に」と。問ふ、[二四]若し厭食想と不淨想とが俱に色處の不淨を觀じて轉ずとせば、世尊所說の厭食想と不淨想とに何の差別ありや。答ふ、體には實に別無きも、但、所對治の愛に差別有るを以ての故に、二想を建立するなり。謂く、不淨想は婬欲愛を對治し、厭食想は段食愛を對治するなり。

評して曰く、應に是の如き說を作すべからず。佛の安立する所の十想は各異るが故に。又、段食愛は段食を緣じて起る。香・味・觸處は、是れ段食の性なるをもて、若し此の想が彼の愛をも對治すと許せば、云何が不淨想と同じく色處を觀ずるが故に、初二解脫を攝すと說かんや。[二五]是の故に、應

有漏なるは、苦・集・道の三諦を緣じ、無漏なるは苦諦を緣じ乃至、斷・離・滅は滅諦を緣ずるが故に、此の想と初三解脫等との所緣を異にするといへるなり。

次に行相の異るにつきていへば、初三解脫の中、初二解脫は不淨行相を作し、第三解脫は淨行相を作す、八勝處には分明なる行相なし。十遍處は皆無邊行相をなし、四無量の中、慈に與樂行相、悲に拔苦行相、喜に喜慰行相、捨に捨置行相ありといふに對して、七想の中先づ、無常想は無常行相をなし、無常苦相は苦行相をなし、苦無我想は無我行相を、死想は死行想を、斷想は斷行相を、離・滅は夫々離行相・滅行相をなすが故に、一も初三解脫等の行相と通ずるものなければなり。

【一六】 **不淨想は第三・四靜慮と初二解脫とを攝す。** 不淨想は、初二靜慮にもあるに、ここに之を說かざるに就きて、次下に諸種の異說をあぐ。

【一七】 **特に、不淨想が初二靜慮を攝するも本文に說かざる所以に就きて。**

【一八】 離喜地とは第三靜慮以上を言ふ。とは、第三靜慮は、喜を離れて捨に住し乃至、第三靜慮に具足して住すと說け

に知るべし、初說を善と爲すことを。

[二六] 此の二想の所緣と行相と及び地とは異るが故に、餘の解脫と勝處と及び遍處と無量とを攝せざるなり。

【本論】[二七] 一切世間不可樂想は第三・第四靜慮を攝す。

問ふ、初と第二との靜慮にも、亦、此の想あるに、何が故に、攝すと說かざるや。答ふ、此の文は應に四靜慮を攝すと說くべし。而も但、後の二のみを攝すと說くは、當に知るべし此の義は有餘なることを。有るが說く、「此の中、後を擧げて初めを顯はすなり」と。有るが說く、「上の二靜慮地は、是れ殊勝なる可愛の樂地なり、最勝の受樂と及び最勝の輕安の樂と有るを以ての故に。是の如き地に於て、此の想有りと說くは、修行者は勝なる樂の地中に於てすら、尙、能く不可樂想を起すことあるを顯さんとてなり。況んや餘處に於てをや。是の故に、唯、此の二地のみを攝すと說けるなり」と。有るが說く、「初靜慮は尋伺の風の動かす所と爲り、第二靜慮は極喜の水に漂はさるる所と爲るをもて、不淨と厭食と一切世間不可樂との想有りと雖も、而も明淨ならず。後の二靜慮は、此と相違するが故に、彼を攝すと說くなり」と。

[二八] 此の想の所緣と行相と及び地とが異るが故に、一切の解脫と勝處と遍處と無量とを攝せず。

[二九] 第五節　靜慮乃至三摩地は靜慮乃至三摩地の幾を攝するやの論究

【本論】[三〇] 初靜慮等は幾靜慮等を攝するや。答ふ、初靜慮は、初靜慮と四無量と初二解脫と、前四勝處と八智と三三摩地とを攝し、第二靜慮は第二靜慮と四無量と初二解脫と前四勝處と八智と三三摩地とを攝し、第三靜慮は第三靜慮と三無量と八智と三三摩地とを攝し、第四靜慮は第四靜慮と三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處と八智と

ばなり。

從つて有喜地とは初と第二との靜慮をさす。卽ち初靜慮は、欲と惡不善法とを離れ乃至離生喜樂にして初靜慮に具足して住すといひ、第二靜慮も、尋伺滅し乃至定生喜樂にして第二靜慮に具足して住すと說くが故なり。

【二九】 以下本文に不淨想に初二靜慮を攝すと說かざる所以に就きての如是說者の說――

【三〇】 特に初二靜慮に於て喜受が厭行相となるに就きて。

【三一】 不淨想が前四勝處を攝すと說かざる所以。

【三二】 不淨想は是れ初修の總觀云云とは、不淨想は賢聖品に於ける初修位に於て、諸色を總觀して不淨となすこと、初解脫が內に色想有りて諸色を總觀し、第二解脫が內に色想無くして外色を總觀するのと、相似と言ひ得れども、勝處にては、初解脫の「有色にして諸色を觀ず」といふを(一)內に色想有りて、外色少を觀じ(初勝處)と(二)內に色想有りて、外色多を觀ずる(第二勝處)との二に別けて觀じ、第二解脫の「內に色想無くして外色を觀ず」といふを、勝處にては(一)內に色想無くして外色少を觀じ(第三勝處)(二)內に色想無くして外色多

三三摩地とを攝す。

此の中、四靜慮は皆自の根本地の五蘊を以て性と爲すが故に、此の諸門の功德を攝することを得。應に知るべし皆、是れ自性の攝にして他性の攝に非ざることを。

【本論】[三一]慈無量等は幾無量等をを攝するや。答ふ、慈は慈と世俗智とを攝し、乃至捨は捨と世俗智とを攝す。

此の中、四無量は皆、倶生品の諸蘊を以て性と爲すが故に、世俗智を攝することを得。總じて有情を緣じて境と爲すが故に、[三二]解脫・勝處・遍處及び他心智を攝せず。有漏なるが故に、餘の智と三三摩地とを攝せざるなり。

【本論】[三三]空無邊處等は、幾無色等を攝するや。答ふ、空無邊處は空無邊處と及び彼の解脫と彼の遍處と六智と三三摩地とを攝し、識無邊處は識無邊處と及び彼の解脫と彼の遍處と六智と三三摩地とを攝し、無所有處は無所有處と及び彼の解脫と六智と三三摩地とを攝し、非想非々想處は、非想非々想處と及び彼の解脫と滅想受解脫と世俗智とを攝す。

此の中、四無色は皆、自の根本地の四蘊を以て性と爲すが故に、此の所有の功德を攝することを得。六智とは、法智と他心智とを除くものなり、此の二は無色地に依らざるが故に。

【本論】[三四]初解脫等は幾解脫等を攝するや。答ふ、初と第二と第三との解脫は、初と第二と第三との解脫と世俗智とを攝す。空無邊處の解脫は、空無邊處の解脫と及び彼の遍處と[三五]六智と三三摩地とを攝し、識無邊處解脫は、識無邊處解脫と及び彼の遍處と六智と三三摩地とを攝し、無所有處解脫は、無所有處解脫と六智と三三摩地とを攝

を觀ず(第四勝處)との二に別けて觀ずるを以て、茲に總觀と別觀との異あり、故に不淨想には初二解脫を攝すと說くも、前四勝處を攝すと說かずとなり。

【三一】 **厭食想が、第三・四靜慮と初二解脫とを攝するに就きて。**以下、厭食想が初二解脫をも攝することと不淨想の如しとなす所以を論究せり。

【三四】 **厭食想と不淨想との差異論。**

【三五】 前に有說は厭食想は不淨想と與に色處の不淨を觀じて起ると主張し次に、爾らば世尊所說の厭食想と不淨想とに何の差別ありやとの反問に對して、不淨想は婬欲の愛を對治し、厭食想は段食の愛を對治するものなるが故に、世尊所說二想に異ありと述べしが、若し是の如くならば、不淨想の如く、厭食想が色處の不淨を觀ずと言ひ得ざるの過あり。なんとなれば、段食の愛は段食を緣じて起り、段食の性は香・味・觸處なるが故に、段食の愛を對治する厭食想は、香・味・觸處の不淨を觀ずと言はざるべからざればなりとなり。

【三六】 此の不淨想と厭食想との所緣と行相と地とは、後の六解脫と八勝處と十遍處と四

し、非想非々想處解脱は、非想非々想處解脱と世俗智とを攝し、滅想受解脱は、滅想受解脱を攝するなり。

此の中、前三解脱は、皆倶生品の五蘊を以て性と爲すが故に、世俗智を攝することを得。是の初めなるは總觀なるが故に、[三六]勝處と遍處とを攝せず。是れ有漏なるが故に餘智と三三摩地とを攝せず。色を緣ずるが故に、他心智を攝せざるなり。

四無色解脱は各〻自地の加行の善の四蘊を性と爲すをもて、[三七]是の故に、後二遍處と及び六智と三三摩地とを攝することを得るなり。

【本論】[三八]初勝處等は幾勝處等を攝するや。答ふ、初勝處は初勝處と世俗智とを攝し、乃至第八勝處は第八勝處と世俗智とを攝す。

此の中、八勝處は皆、倶生品の五蘊を以て性と爲すが故に、世俗智と勝處とを攝することを得。是の中にては、觀ずるが故に遍處を攝せず。有漏なるが故に餘の智と三三摩地とを攝せず。色を緣ずるが故に他心智を攝せざるなり。

【本論】[三九]初遍處等は幾遍處等を攝するや。答ふ、初遍處は初遍處と世俗智とを攝し、乃至第十遍處は第十遍處と世俗智とを攝す。

此の中、十遍處は皆、倶生品の五蘊と四蘊とを性と爲すを以ての故に、世俗智を攝することを得。有漏なるが故に、餘の智と三三摩地とを攝せず。色を緣ずると及び地異るとの故に、他心智を攝せざるなり。

【本論】[四〇]法智等は幾智等を攝するや。答ふ、法智は法智と五智の少分とを攝す。乃至廣說。

無量とのそれ等と異ると言ふ中、不淨想の所緣は色處を總觀し、行相は不淨行相、地は欲界と靜慮中間と四根本靜慮と四近分定の十地なり。厭食想の所緣は香・味・觸處、行相は厭逆行相、地は不淨想の如く十地なり。

此に對して、後の六解脱の所緣をいへば、第三解脱は同じ欲界の色處にても、その可愛なるものをのみ緣じ、第四・五・六・七解脱は、無色の中の夫夫所應の無色と其の因と滅と道とを緣じ、最後の想受滅解脱には所緣なし、又、後の六解脱の行相をいへば、第三解說は淨行相をなし、四無色處解脱は十六行相又は餘の行相を作し、最後の解脱は行相を作さず、次に後の六解脱の地を云へば、何れも第四靜慮以上に在り。此の故を以て、後の六解脱の所緣等は彼の二想のと異るなり。八勝處の所緣につきていへば、こは欲界の一切の色處を別觀と、行相は不分明なり、地をいへば、前四勝處は初二靜慮と未至と靜慮中間との四地に在り、後四勝處は、第四靜慮に在り、十遍處の所緣をいへば、前八遍處は、夫夫欲界の色處を別觀し、後の二遍處は各〻自地の四蘊を緣ず。行相をいへば此の十は皆無邊行相なり、地をいへば

[四一]法智は法智を攝すといふにつきて、法智は六地——謂く、未至定と靜慮中間と及び四靜慮となり——に在るに、未至定の法智は未至定のを攝し、乃至第四靜慮のは第四靜慮のを攝す。又、法智は三道——謂く、見道と修道と無學道となり——に在るに、見道のは見道のを攝し、乃至無學道のは無學道のを攝す。又、法智は四諦を緣ずるに、苦法智は苦法智を攝し、乃至道法智は道法智を攝す。又、法智は四道——謂く、加行と無間と解脫と勝進との道なり——に在るに、加行道のは加行道のを攝し、乃至勝進道のは勝進道のを攝す。又、法智は三世に墮するに、過去のは過去のを攝し、未來のは未來のを攝し、現在のは現在のを攝す。中に於て、乃至、此の刹那のは此の刹那のを攝し、彼の刹那のは彼の刹那のを攝す。此の中には、總じて說くが故に、但、法智は法智を攝すとのみ言へるなり。

[四二]五智の少分を攝すとは、謂く、法智は亦、他心智と四諦智との少分を攝するをいふ。他心智は有漏と無漏とに通ずるに、此は唯、無漏ののみを攝し、無漏の他心智中には、法智と類智と有るに、此は唯、法智ののみを攝するが故に少分と言ふ。四諦智の各〻は法智と類智とに通ずるに、此は唯、法智ののみを攝するが故に、少分と言へるなり。

【本論】[四三]類智は類智と五智の少分とを攝す。

とは、法智の說の如し。差別をいへば、此は[四四]九地にある點なり。

【本論】[四五]他心智は他心智を攝し、

とは、他心智は、四根本靜慮に在るに、初靜慮のは初靜慮のを攝し、乃至第四靜慮のは第四靜慮のを攝す。又、他心智は有漏と無漏とに通ずるに、有漏のは有漏のを攝し、無漏のは無漏のを攝す。又、他心智には法智と類智とあるに、法智のは法智のを攝し、類智のは類智のを攝す。又、他心智には、學と無學と非學非無學のとあるに、學のは學のを攝し、乃至非學非無學のは非學非無學のを

前八遍處は皆第四靜慮に在り、第九遍處は空無邊處に、第十遍處は識無邊處に在り。此の故に八勝處十遍處も亦、何れも、不淨想と厭食想と其の所緣等を異にするなり。

【二七】一切世間不可樂想は第三・四靜慮を攝す。以下、一切世間不可樂想は初二靜慮にも在るに、本文にこれを說かざる所以を詳論せり。

【二八】一切世間不可樂想の所緣等と、一切の解脫と勝處と遍處と無量との所緣等との相違につきて、前者の所緣は欲界又は世間の可愛事、又可愛所起の貪欲を緣じ、行相は不可樂行相、地は七地即ち欲界・未至・靜慮中間、根本靜慮なるを以て、後者の所緣等——前註參照——と異るなり。

【二九】本節は前節の續きにして、四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處・八智・三三摩地の一一はそれ等靜慮等の幾を攝するやを論明する段なり。

【三〇】初靜慮乃至第四靜慮は、幾靜慮乃至幾三摩地を攝するや。

【三一】慈等の無量は幾無量等を攝するや。

【三二】解脫・勝處・遍處等は皆欲界の色處乃至無色等の法を緣む、他心智は、心心所を緣

攝す。又、他心智は三世に墮するに、過去のは過去のを攝し、未來のは未來のを攝し、現在のは現在のを攝す。中に於て乃至此の刹那のは此の刹那のを攝し、彼の刹那のは彼の刹那のを攝す。此の中には總說するが故に、但、他心智は他心智を攝すとのみ言へるなり。

【本論】[四六] 四智の少分をも攝す。

とは、他心智は亦、法智と類智と世俗智と道智との少分を攝するをいふ。法智と類智とは、各〻四諦を緣ずるに、此は唯、道諦を緣ずる少分の智のみを攝するが故に、少分と言へるなり。

世俗智は十八地——謂く、欲界と靜慮中間と四靜慮と四無色と及び彼の近分となり——に在るに、此は唯、四靜慮のみを攝す。四靜慮の世俗智の中に於て、善と染汚と無覆無記とが有るに、此は唯、善のみを攝す。善の世俗智の中に於ても、生得と聞所成と修所成とのが有るに、此は唯、修所成ののみを攝す。修所成のものの中に於ても、加行と無間と解脫と勝進との道あるに、此は唯、勝進ののみを攝す。勝進道の中に於ても、順退分と順住分と順勝進分と順決擇分とのが有るに、此は唯、順住分ののみを攝す。順住分の中に於ても、過去と未來と現在と及び離世とを緣ずるもの有るに、此は唯、現在を緣ずるもののみを攝す。現在を緣ずるものの中に於ても、自相續を緣ずるあり、他相續を緣ずるものあるに、此は唯 他相續を緣ずるもののみを攝す。他相續を緣ずるものの中にも、心心所を緣ずるものあり、五蘊を緣ずるものもあるに、此は唯、心心所を緣ずるもののみを攝す。心心所を緣ずるものの中に於ても、一法を緣ずるもの有り、多法を緣ずるものも有るに、此は唯、一法を緣ずるもののみを攝す。一法を緣ずるものの中にても、是れ他心智なる有り、他心智に非さるものあるに、此は唯、他心智のみを攝するなり。是の如き義に由るが故に少分と言ふ。

道智は九地——謂く、未至定と靜慮中間と四靜慮と三無色となり——に在るに、此は唯、四靜慮に在るもののみを攝す。四靜慮の中に於ては、見道と修道と無學道のと有るに、此は唯、修道と無

ずるも、共に一切の欲界の有情を緣ずるに非ざればなり。

【三三】 **空無邊處乃至非想非非想處は幾無色等を攝するや。**

【三四】 **初解脫乃至滅想受解脫は幾解脫等を攝するや。**

【三五】 六智とは法智と他心智とを除く餘の六なり。以下之に准ず。

【三六】 勝處と遍處とは何れも別觀なるが故に。

【三七】 是の故に後二遍處云云とは、四無色の攝なるものを總じて說くが故に、かく言へるも、四無色を別說すれば、本文の如し。非想非非想處に世俗智をのみを攝すと說くは、こは唯、有漏地なればなり。

【三八】 **初勝處乃至第八勝處は幾勝處等を攝するや。**

【三九】 **初遍處乃至第十遍處は幾遍處等を攝するや。**

【四〇】 **法智は法智と五智の少分とを攝す。**

【四一】 以下、法智が法智を攝すといふ意味を明す——

【四二】 以下法智が五智の少分を攝すと言ふ意味を明す——

【四三】 **類智は類智と五智の少分を攝す。**

【四四】 未至定と靜慮中間と四根本靜慮と更に下三無色地とをいふ。

【四五】 **他心智は他心智と四智の少分を攝す。**

學道との道智のみを攝す。此の二の中に於ても、加行と無間と解脫と勝進との道有るに、此は唯、勝進道のもののみを攝す。勝進道の中に於ても、過去と未來と現在とを緣ずるもの有るに、此は唯、現在を緣ずるもののみを攝す。現在を緣ずるものの中に於ても、自相續を緣ずるもの有り、他相續を緣ずるものも有るに、此は唯、他相續を緣ずるもののみを攝す、他相續を緣ずるものの中に於ても、心心所を緣ずるもの有り、五蘊を緣ずるもの有るに、此は唯、心心所法を緣ずるもののみを攝す。心心所法を緣ずるものの中に於ても、一法を緣ずるもの有り、多法を緣ずるものも有るに、此は唯、一法を緣ずるもののみを攝す。一法を緣ずるものの中に於ても、是れ他心智なる有り、他心智に非ざるもの有るに、此は唯、他心智ののみを攝す。此の如き義に由るが故に、少分と言へるなり。

【本論】[四七] 世俗智は世俗智を攝し、

とは、世俗智は十八地——前說の如し——に在り。欲界のは欲界のを攝し、乃至非想非非想處のは非想非非想處のを攝す。又、世俗智には、善と染汚と無覆無記とのが有るに、善のは善のを攝し、乃至無覆無記のは無覆無記のを攝す。善の中に於ても、加行得と離染得と生得とのがあるに、加行得のは加行得のを攝し、乃至生得のは生得のを攝す。復、順退分乃至順決擇分のが有るに、順退分のは順退分のを攝し、乃至順決擇分のは順決擇分のを攝す。復、加行道の乃至勝進道のあり、加行道のは加行道のを攝し、乃至勝進道のは勝進道のを攝す。復、過去・未來・現在の有り、過去のは過去のを攝し、乃至、現在のは現在のを攝す。中に於て、乃至此の刹那のは此の刹那のを攝し、彼の刹那のは彼の刹那のを攝するなり。此の中にては、總じて說くが故に、世俗智は世俗智を攝すと言ふ。

【本論】[四八] 一智の少分を攝す。

とは、世俗智は亦、他心智の少分をも攝するをいふ。他心智は有漏と無漏とに通ずるに、此は唯、有漏のもののみを攝するが故に少分と言ふなり。

以下、他心智の攝する他心智に有漏・無漏、法智・類智、學・無學・非學非無學等の別あるに應じて、夫々の他心智を攝することを說けり。

【四六】 以下、他心智が四智の少分を攝するといふ其の意味を明す——

【四七】 **世俗智は世俗智と一智の少分とを攝す。** 以下、世俗智が世俗智を攝することを明にせり——

【四八】 以下、世俗智が一智の少分を攝すといふ意味を明す。

【本論】[四九]苦智は苦智を攝し、

とは、苦智は九地に在り、[五〇]三道に在り、四道に在り、三世に墮し、刹那に墮す。何の地、何の道に墮在し、何の世、何の刹那に墮するも、即ち彼の地、彼の道、彼の世、彼の刹那のを攝す。此の中には總じて說くが故に、苦智は苦智を攝すと言へるなり。

【本論】二智の少分とを攝す。

とは、苦智は亦、法智と類智との少分をも攝するをいふ。法智と類智とは各ゝ四諦を緣ずるに、此は唯、苦諦を緣ずるもののみを攝するが故に、少分と言へるなり。

【本論】[五一]集智は集智と二智の少分とを攝す。
滅智は滅智と二智の少分とを攝す。

とは、皆、苦智の說の如し。

【本論】道智は道智を攝し、

とは、亦、苦智の說の如し。

【本論】三智の少分をも攝す。

とは、道智は亦、法智と類智と他心智との少分を攝するをいふ。法智と類智とは各ゝ四諦を緣ずるに、此は唯、道諦を緣ずるもののみを攝するが故に、他心智は有漏と無漏とに通ずるに、此は唯、無漏を緣ずるものをのみ攝するが故に、少分と言へるなり。

【本論】[五二]空三摩地等は幾三摩地を攝するや。答ふ、空は空を攝し、無願は無願を攝し、無相は無相を攝するなり。

空三摩地には苦諦を緣ずる二行相轉じ、無願三摩地には三諦を緣ずる十行相轉じ、無相三摩地に

【四九】苦智は苦智と二智の少分とを攝す。

【五〇】三道とは、見道・修道・無學道をいひ、四道とは加行・無間・解脫・勝進道をいふ。以下三道、四道といふは之に同ず。

【五一】集・滅・道智は幾智を攝するやに就きて。

【五二】空・無願・無相三摩地は夫々幾三摩地を攝するや。

は滅諦を緣ずる四行相轉ず。中に於て一一の行相は皆、九地に在り、三道に在り、四道に在り、三世に墮し、刹那に墮す。何の行相に隨つて何の地、何の道に在り、何の世、何の刹那に墮するも、即ち彼の行相、彼の地、彼の道、彼の世、彼の刹那のを攝す。此の中には、總じて說くが故に、空は空を攝す、乃至無相は無相を攝すと言ふ。

三三摩地は有漏にも通ずと雖も、此の中には、解脫門に依りて說くが故に、唯、無漏ののみを攝するなり。

第六節[五三]　十想乃至三三摩地は靜慮乃至三三摩地の幾くを攝するやの論究

【本論】　攝の如く、可得も亦、爾り。

[五四]自體は自體に於て可得なること、是れ攝の義なるに由るが故なり。謂く、自體は自體に於て是れ有、自體は自體に於て是れ實、自體は自體に於て是れ現有、是れ不異、是れ不外、是れ不相離、是れ不解脫、是れ無差別、是れ不空　是れ不無、客に非ず、遠に非ず、二に非ず、諍に非ず、諸の是の如き等は皆、是れ可得の義なるが故なり。[五五]諸法の自體は自體を攝すとは、手を以て食を攝し、指を以て衣を攝するが如きには非ず。但、一切法は自體を障礙し、究竟して捨せさらしむるが故に名けて攝と爲すなり。有餘師の說く、「[五六]此の自體の攝に四種有り。謂く、各別の界、各別の物、各別の刹那、各別の相續の攝なり。各別の界の攝とは、眼界は眼界を攝し、乃至法界は法界を攝するをいひ、各別の物の攝とは、法界中に七物あり、即ち色と受と想と行と及び三の無爲となるに、色は色を攝し、乃至非擇滅は非擇滅を攝するをいふ。各別の刹那の攝とは、色中に過去・未來・現在ありて、過去なるは過去なるを攝し、乃至現在なるは現在なるを攝するをいふ。各別の相續の攝とは、現在の色のうち有るは自相續に墮するあり、[五七]有るは他相續なるあり、自相續なるは自相續なるを攝し、他相續なるは他相續なるを攝す。此の理趣に由つて、餘は應に准知すべきが故に、攝の如く、可得も亦、爾りと言

【五三】　本節は發智頌文の「可得」論なり。可得とは「攝」論と同じきが故に、本節は婆沙に於て可得と攝との意義及び攝の四種等を明かすも、發智本文にては「攝の如く可得も亦爾り」とのみいへり。

【五四】　可得の義は攝の義に外ならざるに就きて。

【五五】　特に諸法の自體が自體を攝すと言ふの意義。

【五六】　特に自體の攝の四種に就きて。
一、各別の界の攝
二、各別の物の攝
三、各別の刹那の攝
四、各別の相續の攝
なり。

【五七】　他は大正本に地とあるもこれ誤植なり。

へり。攝と可得との義に、異ること無きが故に。

[五八]第七節　十想は四靜慮乃至三三摩地の幾と相應するやの論究

【本論】　無常想等は幾靜慮等と相應するや。答ふ、無常想は四靜慮と四無色と四解脫と四智と一の三摩地と相應す。乃至廣說。

[五九]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、相應法に愚かにして相應法は非實有なりと執する者の意を止め、相應法は是れ實有なることを顯さんが爲めの故に、而して斯の論を作すなり。

【本論】　[六〇]無常想は四靜慮と相應し、

とは、四靜慮は皆、五蘊を性とするに、此の想は、[六一]彼の二蘊の全と一蘊の少分とに相應すればなり。

【本論】　四無色と四解脫[六二]と相應し、

とは、四無色と及び四無色解脫とは皆四蘊を性とするに、此の想は彼の二蘊の全と一蘊の少分とに相應すればなり。

【本論】　四智*と相應し。

とは、法智と類智と世俗智と苦智とに相應することをいふ。

【本論】　一の三摩地*と相應するなり。

とは、苦を緣する無願と相應するをいふ。

【本論】　[六三]無常想の如く、無常苦想と苦無我想と死想と斷想と離想と滅想とも亦、爾り。

とは、此等は皆、四智と一の三摩地とに相應するの數、同じきに依るが故に、亦、爾りと言ふなり。

【五八】　本節は、發智頌文の「相應」論にして、無常想等の十想と、靜慮等との相應を論究する段なり。

【五九】　論起の緣由としての相應法實有論――

【六〇】　無常想は四靜慮と四無色と四解脫と四智と一無願三摩地と相應す。

【六一】　彼の二蘊の全と相應すとは、五蘊中の、受蘊と識蘊との全と相應するをいひ、一蘊の少分とは行蘊中の心所法と相應するをいふ。想はこれ大地法なるが故に。

【六二】　「と相應す」の文は發智に省略さる。以下※印を附せるは、これを示す。

【六三】　無常苦想・苦無我想・死想・斷・離・滅想は幾靜慮等と相應するやに就きて。

中に於て一切同じきものは、謂く、死想なり。[六四]行相は異なるも而も名の同じきものは、謂く無常苦想なり。[六五]智と名とは同じきも餘は同じからざるものは、謂く苦無我想なり。空三摩地と相應するが故に。[六六]唯、數のみ同じきこと有るも、餘は皆、同じからざるものは、謂く、斷・離・滅想なり。滅智と無相三摩地とに相應するが故に。

【本論】[六七]不淨想は、後二靜慮と初二解脱と世俗智とに相應す。

とは、此の想は四靜慮と相應するに、而も、但、後二靜慮とのみ相應すといふは、攝の中に說けるが如し。

【本論】不淨想の如く、厭食想も亦、爾り。

とは、此の想は實に初二解脱と相應せざるに、而も與に相應すと說くは、亦、攝の中の說の如し。

【本論】[六八]一切世間不可樂想は、後二靜慮と世俗智とに相應す。

とは、此の想は亦、四靜慮と相應するに、而も但、後二と相應すとのみ說けるは、亦、攝の中の說の如し。

[六九]第八節　靜慮乃至三摩地は靜慮乃至三摩地の幾と相應するやの論究

【本論】[七〇]初靜慮等は幾靜慮等と相應するや。答ふ、初靜慮は初靜慮と四無量と初二解脱と前四勝處と八智と三三摩地とに相應す。

第二靜慮は、第二靜慮と四無量と初二解脱と前四勝處と八智と三三摩地とに相應す。

第三靜慮は、第三靜慮と三無量と八智と三三摩地とに相應す。

第四靜慮は、第四靜慮と三無量と淨解脱と後四勝處と前八遍處と八智と三三摩地と

【六四】行相異るとは、無常想は無常行相となり、無常苦想は苦行相となるも、共に名を緣ずる點、同じ。因みに行相の相は大正本には想とあるも、三本宮本は俱に相とあるもて、かく訂正せり。

【六五】智と名とが同じきも、餘の異るものは苦無我想なりとは、苦無我想は、無我想と同じく法・類・苦・世俗の四智と相應し、同じく名をも緣ずるも、苦無我想は無我行相となりて苦三摩地と相應し、無常想は無常行相となりて無願三摩地と相應す。一の三摩地と相應する點同じきも、他の行相、所緣等異ればなり。

【六六】唯、數のみ同じとは、無常想が四智と相應するが如く、斷・離・滅・想も四智と相應し、前者が一の三摩地と相應するが如く、後者も亦、一の三摩地と相應するをいへるなり。然も、四智及び一の三摩地の內容は、兩者互に異る、即ち前者の四智とは、法・類・苦・世俗智なるに、後者の四智とは、法・類・滅・世俗智なり、前者の一の三摩地は無願なるに、後者のそれは無相なればなり。

【六七】不淨想・厭食想は後二靜慮と初二解脱と世俗智と相應す。

に相應す。

此の中、四靜慮は皆、自地の五蘊を以て性と爲すに、一一の地に俱生する四蘊は展轉相應するが故に、初靜慮は初靜慮と、乃至第四靜慮は第四靜慮と相應すと言へるも、自性が自性と相應するの義有るに非ず。又、一一の靜慮には多法を攝するを以つての故に、諸の無量等の功德と相應することを得るなり。

此の中の三無量とは喜無量を除く、後二靜慮には喜根無きが故に。[七一]諸有の喜無量は、喜受を以て自性と爲らざらしめんと欲する者も亦、此は喜受と相應すと說くが故に、彼の二地には、唯、三無量のみなり。

【本論】[七二]慈無量等は幾無量等と相應するや。答ふ、慈無量は慈と世俗智とに相應し、乃至捨無量は捨と世俗智とに相應するなり。

慈等は無瞋善根等を以て自性と爲すと雖も、而も此の中の所說は、總じて自性と相應と俱有とを攝するものを慈等の體と爲すが故に、慈と慈と相應し、乃至捨と捨と相應すと說けり。即ち是れ俱生の四蘊が互に相應するの義なり。

【本論】[七三]空無邊處等は幾無色等と相應するや。答ふ、空無邊處は空無邊處と及び彼の解脫と彼の遍處と六智と三三摩地とに相應す。識無邊處は識無邊處と及び彼の解脫と彼の遍處と六智と三三摩地とに相應す。無所有處は無所有處と及び彼の解脫と六智と三三摩地とに相應す。非想非々想處は、非想非々想處と及び彼の解脫と世俗智とに相應す。

此の中の四無色は、皆、自地の四蘊を以て性と爲すに、一一の地に俱生する四蘊は展轉して相應

【六八】一切世間不可樂應は、後二靜慮と世俗智とに相應す。

【六九】本節は全然前節の續きなり。

【七〇】初靜慮乃至第四靜慮は幾靜慮等と相應するや。

【七一】喜無量は、喜受を以て自性と爲せば、此の喜受の無き處地には喜無量無し。又假使、喜無量は喜受を以て自性と爲さずと主張する論なりとも、喜無量は必ず、喜受と相應すと說くが故に、亦、結局喜受無き所には、喜無量も無しと言ふことゝなり、何れにしても、後二靜慮には喜無量なしとの主張には、過失なしとなり。

【七二】慈無量乃至捨無量は幾無量等と相應するや。

【七三】空無邊處乃至非想非非想處は幾無色等と相應するや。

するが故に、空無邊處は空無邊處と、乃至非想非非想處は非想非非想處と相應すと言へり。又、一一の無色は多法を攝するを以ての故に、餘の所說の功德と相應することを得るなり。六智につきては、攝の中に說けるが如し。

【本論】[七四] 初解脫等は幾解脫等と相應するや。答ふ、初と第二と第三との解脫は、初と第二と第三との解脫と世俗智とに相應す。

空無邊處解脫は空無邊處解脫と及び彼の遍處と六智と三三摩地とに相應す。識無邊處解脫は識無邊處解脫と及び彼の遍處と六智と三三摩地とに相應す。無所有處解脫は無所有處解脫と六智と三三摩地とに相應す。非想非々想處解脫は非想非々想處解脫と世俗智とに相應す。

滅想受解脫は非相應なり。

前三解脫は皆、無貪善根を以て自性と爲すと雖も、而も此の中の所說は、總じて自性と相應と倶有との法を以て體と爲すが故に、說きて初と第二と第三との解脫は、初と第二と第三との解脫と相應すと說けり。卽ち是れ倶生の四蘊が互に相應するの義なり。

四無色解脫は四無色に說けるが如し。

滅想受解脫には多法有りて心心所の如く相離れずして倶時に起ると雖も、而も所依と所緣と行相との同じき義無きが故に、非相應なり。

【本論】[七五] 初勝處等は幾勝處等と相應するや。答ふ、初勝處は初勝處と世俗智とに相應し、乃至、第八勝處は第八勝處と世俗智とに相應するなり。

此の中の八勝處は皆、無貪善根を以て自性と爲すと雖も、而も、此の中の所說は總じて自性と相

【七四】初解脫乃至滅想受解脫は幾解脫等と相應するや。

【七五】諸勝處は幾勝處等と相應するや。

應と倶有との法を以て體と爲すが故に、初勝處は初勝處と、乃至、第八勝處は第八勝處と相應すと說けるなり。

【本論】[七六] 初遍處等は幾遍處等と相應するや。答ふ、初遍處は初遍處と世俗智とに相應し、乃至、第十遍處は第十遍處と世俗智とに相應するなり。

前八遍處は無貪善根を以て自性と爲すと雖も、此の中の所說は、總じて自性と相應と倶有との法を以て體と爲し、後の二遍處は總じて倶生の四蘊を以て性と爲すが故に、初遍處は初遍處と、乃至、第十遍處は第十遍處と相應すと言へるなり。

【本論】[七七] 法智等は幾三摩地と相應するや。答ふ、法智は三三摩地の少分と相應す。乃至廣說。

法智は三三摩地の少分と相應すとは、此の智は類智と及び一切の忍と倶なる三三摩地と相應せざるが故に、少分と言へるなり。

【本論】 法智の如く、類智も亦、爾るなり。

とは、此の智は法智と及び一切の忍と倶なる三三摩地と相應せざるが故に、亦、爾りと言へるなり。

【本論】[七八] 他心智は一の三摩地の少分と相應す。

とは、此の智は、苦・集・滅智と、及び他心智に攝せざる所の道智と、幷びに一切の忍とに倶なる三摩地と相應せざるが故に、少分と言へるなり。卽ち是れ一の道を緣ずる無願三摩地の少分と相應するの義なり。

【本論】[七九] 他心智の如く、集・滅・道智も亦、爾り。

とは、此は數同じきに依るが故に、亦、爾りと說けり。然も、集智は唯、集を緣ずる無願三摩地の

【七六】 諸遍處は幾遍處等と相應するや。

【七七】 法智と類智とは幾三摩地と相應するや。

【七八】 他心智は幾三摩地と相應するや。

【七九】 集・滅・道智は幾三摩地と相應するや。

少分とのみ相應し、滅智は唯、無相三摩地の少分とのみ相應し、道智は唯、道を縁ずる無願三摩地の少分とのみ相應す。皆、忍と倶なる三摩地を除くが故に。

【本論】[八〇] 苦智は二の三摩地の少分と相應す。

とは、此の智は、唯、智と倶なる空三摩地と、及び苦智と倶なる無願三摩地とのみ相應するが故に、少分と言へるなり。

三三摩地門につきて別に相應を說かざるは、前の諸門に對して具さに已に說けるが故にと、自門中に於ては相應無きが故にとなり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十七

【八〇】苦智は幾三摩地に相應するや。

巻の第百六十八（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之三）

[一]第九節　初静慮を成就する者は、静慮と無色との幾を成就し幾を成就せざるやの論究

【本論】若し初静慮等を成就せば、乃至廣説。

[二]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、成就・不成就性を撥無する者の意を止め、成就・不成就性は是れ實有なることを顯さんが爲めの故に、斯の論を作すなり。

【本論】[三]若し初静慮[四]等を成就すれば、彼は四静慮等に於て、幾を成就し、幾を成就せざるや。答ふ。若し初静慮を成就すれば、彼は、四静慮に於て、或は一・二・三・四を成就す。

一を成就する者は、梵世の愛を未だ盡さざるものをいふ。

[五]此は卽ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものなり。若し欲界に生ずるものなれば、初静慮に於て唯、離染得の故に成就し、[六]若し梵世に生ずるものなれば初静慮に於て、有るは離染得により、有るは生得の故に成就す。彼は梵世の愛を未だ盡さざるが故に、上三静慮を成就せざるなり。

【本論】[七]二を成就する者とは、梵世の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さざるものをいふ。

此は卽ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の[八]極光淨に生ずるものとなり。若し欲界に生ずるものなれば、初二静慮に於て唯、離染得の故にのみ成就す。若し梵世に生

【一】以下本巻の論述は發智頌文の「成不」論にして、成不論の內容は三段に分る。第一段は卽ち、初静慮乃至或は第四静慮を成就する者は、静慮・無色乃至、八智、三三摩地の幾を成就するや、幾を成就せざるやの論究になり。本節は尙其の中の、「初静慮を成就するものが静慮と無色との幾を成就するや」を明する段なり。

【二】論起の因由としての、成就・不成就性の實有論。

【三】初静慮を成就する者は四静慮の幾くを成就するやに就きての總論。

【四】茲に「等」といふは、初静慮乃至第四静慮を示す。而して、第二・三・四静慮を成就するものに就きての、静慮乃至三三摩地の成就は、この初静慮を成就するものを例として推知せしむるなり。

【五】初静慮を成就する者の一の静慮を成就するものに就きて。

【六】梵世に生ずるものなれば、離染得に依らずとも已に有漏のは成就するに、ここに梵世に生ずるものにして、離染得によりて初静慮を得するものありとは、例せば、味相應の初静慮を捨して、淨の初静慮を得するが如し。以下、静

するものなれば、初靜慮に於て、有るは離染得により、有るは生得の故に成就し、第二靜慮に於ては、唯、離染得の故にのみ成就す。若し極光淨に生ずるものなれば、初靜慮に於て、唯、無漏のをのみ成就するも、有漏のには非ず。地を越ゆるとき捨するを以ての故に。第二靜慮に於ては、唯、離染得の故にのみ成就す。彼は極光淨の愛を未だ盡さざるが故に、上二靜慮を成就せざるなり。

【本論】[九]三を成就する者とは、極光淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるもの、及び聖者にして極光淨と[一〇]遍淨とに生ずるものなり。若し欲界に生ずるものなれば、下三靜慮に於て唯、離染得の故にのみ成就す。若し梵世に生ずるものなれば、初靜慮に於て、有るは離染得により、有るは生得の故に成就し、第二、第三靜慮に於て、唯、離染得の故にのみ成就す。若し極光淨に生ずるものなれば、初靜慮に於て唯、無漏のもののみを成就し、第二・第三靜慮に於て、唯、離染得の故にのみ成就す。若し遍淨に生ずるものなれば、初二靜慮に於て、唯、無漏のもののみを成就し、第三靜慮に於て、唯、離染得の故にのみ成就す。彼は遍淨の愛を未だ盡さざるが故に、第四靜慮を成就せざるなり。

【本論】[一一]四を成就するものとは、遍淨の愛を盡くすものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光淨乃至非想非非想處に生ずるものとなり。若し欲界に生ずるものなれば、四靜慮に於て皆、唯、離染得の故にのみ成就す。若し梵世に生ずるものなれば、初靜慮に於て、有るは離染得により、有るは生得の故に成就し、上三靜慮に於ては唯、離染得の故にのみ成就す。若し極光淨に生ずるものなれば、初靜慮に於て、唯、無漏のもののみを成就し、上三靜慮に於て、唯、離染得の故にのみ成就す。若し遍淨に生ずるものなれば、初二靜慮に於て唯、無漏のもののみを成就し、第三・第四靜慮に於て、唯、離染

慮等に生ぜしものが、離染得によりて靜慮等を得すと說くが如きは、之に準じて推知すべし。

【七】初靜慮を成就する者の二の靜慮を成就するものに就きて。

【八】極光淨とは、第二靜慮地中の最高處なり。

【九】初靜慮を成就する者の三の初靜慮を成就する者に就きて。

【一〇】遍淨とは第三靜慮地中の最高處なり。

【一一】初靜慮を成就する者の四の靜慮を成就する者に就きて。

得の故にのみ成就す。若し[一二]廣果に生ずるものなれば、下三靜慮に於て、唯、無漏のもののみを成就し、第四靜慮に於て、唯、離染得の故にのみ成就す。若し無色界に生ずるものなれば、唯、無漏のもののみを成就するなり。

【本論】[一三]四無量に就ては、或は無なり、或は三、或は四を成就す。

無なりとは、無色界に生ずるものをいふ。

此は即ち聖者の彼の無色界の四地に生ずるものにして、無漏の初靜慮を成就するも、四無量は非らざるなり。界を越ゆるとき捨するを以ての故に。

【本論】三を成就するものとは、遍淨と廣果とに生ずるものをいふ。

此は即ち聖者の彼の二地に生ずるものにして、無漏の初靜慮と及び三無量とを成就するも、喜を除く。地を越ゆるとき捨するを以ての故に。

【本論】四を成就するものとは、欲界と梵世と極光淨とに生ずるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光淨に生ずるものとなり。若し欲界と梵世とに生ずるものなれば、有漏と無漏との初靜慮と及び四無量とを成就す。若し極光淨に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と及び四無量とを成就するなり。

【本論】[一四]四無色に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

[一五]無なりとは、色愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲愛盡くるも、色愛を未だ盡さざるが故に、初靜慮を成就するも、無色は非らざるなり。

【本論】[一六]一を成就するものとは、色愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さゞるものを

【一二】廣果とは、第四靜慮中の聖凡俱生處の最高處なり。

【一三】初靜慮を成就し、且つ無量を成就する者に就きて。

【一四】初靜慮を成就し且つ、無色も成就する者に就きて。

【一五】初靜慮を成就するも、無色を成就せざるもの——

【一六】・初靜慮を成就し、一無色を成就するもの——

いふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光浄乃至空無邊處に生ずるものとなり。彼は皆、初靜慮と及び一の無色とを成就す。若し欲界と梵世とに生ずるものなれば、有漏と無漏との初靜慮と初無色とを成就す。若し極光浄乃至空無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と有漏と無漏との初無色とを成就す。彼は上の愛を未だ盡さざるが故に、上の三無色を成就せざるなり。

【本論】[一七]二を成就する者とは、空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして、極光浄乃至識無邊處に生ずるものとなり。彼は皆、初靜慮と及び二無色とを成就す。若し欲界と梵世とに生ずるものなれば、有漏と無漏との初靜慮と初二無色とを成就す。若し極光浄乃至空無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と、有漏と無漏との初二無色とを成就す。若し識無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と初無色と、有漏と無漏との第二無色とを成就す。彼は上の愛を未だ盡さざるが故に、上の二無色を成就せざるなり。

【本論】[一八]三を成就する者とは、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光浄乃至無所有處に生ずるものとなり。彼等は皆、初靜慮と及び三無色とを成就す。若し欲界と梵世とに生ずるものなれば、有漏と無漏との初靜慮と、初三無色とを成就す。若し極光浄乃至空無邊處に生ずるものな

【一七】初靜慮を成就し、二無色を成就するもの――

【一八】初靜慮を成就し、三の無色を成就するもの――

れば、無漏の初靜慮と、有漏と無漏との初三無色とを成就す。若し識無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と初無色と、有漏と無漏との第二・第三無色とを成就す。若し無所有處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と初二無色と、有漏と無漏との第三無色とを成就す。彼は上の愛を未だ盡さざるが故に、上の一無色を成就せざるなり。

【本論】[一九] 四を成就する者とは、無所有處の愛を盡くすものをいふ。

此は卽ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨乃至非想非非想處に生ずるものとなり。彼は皆、初靜慮と及び四無色とを成就す。若し欲界と梵世とに生ずるものなれば、有漏と無漏との初靜慮と三無色と、有漏の一無色とを成就す。若し極光淨乃至空無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と、有漏と無漏との三無色と、有漏の一無色とを成就す。若し識無邊處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と一無色と、有漏と無漏との二無色と、有漏の一無色とを成就す。若し無所有處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と二無色と、有漏と無漏との一無色と、有漏の一無色とを成就す。若し非想非非想處に生ずるものなれば、無漏の初靜慮と三無色と、有漏の一無色とを成就す。

[二〇] 第十節　初靜慮を成就する者は八解脱・八勝處・十遍處の幾を成就し、幾を成就せざるやの論究

【本論】[二一] 八解脱に於ては、或は無なり、或は一・二・三・四・五・六・七・八を成就す。

[二二] 無なりとは、遍淨に生ずるものにして、卽ち彼の愛を未だ盡さゞるものをいふ。

[二三] 此は卽ち聖者の遍淨に生ずるものは、無漏の初靜慮を成就するも、而も解脱を成就せざるなり、初二解脱は地を越ゆるとき捨するが故に、後の六解脱は未だ遍淨の染を離れざるをもて、未だ得せざるが故に、是の故に「無なり」と言ふなり。

【一九】 初靜慮を成就し、四の無色をも成就するもの——

【二〇】 本節は前節の發智の所謂「成不」論の續行にして、初靜慮を成就せし者にして、(一)八解脱、(二)八勝處、(三)十遍處の幾かを成就するや等を明にする段なり。

【二一】 **以下、初靜慮を成就し、且つ、八解脱の幾かを成就するものに就きて——**

【二二】 初靜慮を成就するも解脱を成就せざるもの——

【二三】 八解脱の地は、初二解脱は、初二靜慮と及び未至と靜慮中間とにあり、第三解脱は、第四靜慮に在り、第四解脱乃至第八解脱は夫々空無邊處乃至非想非々想處に在りて、第三靜慮地には解脱無し。而も、靜慮地に在る解脱は皆有漏なるを以て、地を超ゆるときに、下地の解脱を捨するが故に、遍淨天に生じ、而も其の染を未だ離れざるものは、一の解脱をも成就せざるなり。

【本論】[二四] 一を成就する者とは、遍淨に生ずるものにして、卽ち彼の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは廣果に生じて、卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは空無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡さゞるものとをいふなり。

此は卽ち聖者の彼の諸地に生ずるものにして、無漏の初靜慮と及び一解脫とを成就するものなり。此の中、若し遍淨に生じて卽ち彼の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものなれば、彼は淨解脫を成就するも、餘には非ざるなり。前の二は地を越ゆるとき捨するが故に。後の五は未だ得せざるが故に。若し廣果に生じて、卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものなれば、彼も亦、淨解脫を成就するも、餘には非ざること、前釋の如し。若し空無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものなれば、彼は有漏と無漏との空無邊處解脫を成就するも、餘には非ず。前の三は、地を越ゆるとき捨するが故に、後の四は未だ得せざるが故に。

【本論】[二五] 二を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨と生じて遍淨の愛未だ盡くさゞるものと、若しくは遍淨と廣果とに生じて、廣果の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは空無邊處に生じて卽ち彼の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは識無邊處に生じて、卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものとなり。

此は卽ち異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光淨乃至識無邊處に生ずるものとなり。彼は皆、初靜慮と及び二解脫とを成就す。中に於て、若し欲界と梵世とに生じて遍淨の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び初二解脫とを成就するも、餘には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて遍淨の愛を未だ盡くさゞるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。若し遍淨と廣果とに生じて、廣果の愛を盡くす

【二四】 初靜慮を成就し、一の解脫を成就するもの——

【二五】 初靜慮を成就し、二の解脫を成就するもの——

も、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び第三解脱と、有漏と無漏との第四解脱とを成就するも、餘には非ず。初の二は已に捨するが故に、後の四は未だ得せざるが故に。若し空無邊處に生じて卽ち彼の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び有漏と無漏との第四と第五との解脱とを成就するも、餘には非ず。初の三は已に捨するが故に、後の三は未だ得せざるが故に。若し識無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び無漏の第四解脱と、有漏と無漏との第五解脱とを成就するも、餘には非ざること、前釋の如し。

【本論】[二六]三を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞると、若しくは遍淨と廣果とに生じて、空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞると、若しくは空・識無邊處に生じて、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞると、若しくは無所有處に生じて、卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるとなり。

此は卽ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の、極光淨乃至無所有處に生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び三解脱とを成就するをいふ。

中に於て若し、欲界と梵世とに生じて遍淨の愛盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と、及び前三解脱とを成就するも、餘には非ず。未だ得せざるが故に。若しくは極光淨に生じて遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就す。餘は前說の如し。若し遍淨と廣果とに生じて空無邊處の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と、及び第三解脱と、有漏と無漏との第四・第五解脱と

【二六】初靜慮を成就し、三の解脱を成就するもの——

を成就するも、餘には非ず。前の二は已に捨するが故に、後の三は未だ得せざるが故に。若し空無邊處に生じて、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と、有漏と無漏との初三無色解脫とを成就するも、餘には非ず。前三は已に捨するが故に、後の二は未だ得せざるが故に。若し識無邊處に生じて卽ち彼の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と第四解脫と、有漏と無漏との第五と第六との解脫とを成就するも、餘には非ざること前說の如し。若し無所有處に生じて卽ち彼の愛未だ盡きざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と第四と第五との解脫と、有漏と無漏との第六解脫とを成就するも、餘には非ざること、前說の如し。

【本論】〔二七〕四を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて廣果の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞると、若しくは遍淨と廣果とに生じて識無邊處の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞると、若しくは空・識無邊處と無所有處とに生じて無所有處の愛を盡くすものと、若しくは非想非々想處に生じて滅盡定を得せざるものとをいふなり。

此は卽ち異生と聖者との欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨乃至非想非非想處に生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び四解脫とを成就するなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて廣果の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前三解脫と、有漏と無漏との第四解脫とを成就するも、餘には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて廣果の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。若し遍淨と廣果とに生じて識無邊處の愛

〔二七〕初靜慮を成就し四の解脫をも成就するもの——

を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び第三解脫と、有漏と無漏との初三無色解脫とを成就するも餘には非ず、前の二は已に捨するが故に、後の二は未だ得せざるが故に。若し空無邊處に生じて無所有處の愛を盡くすものなれば、彼は無漏の初靜慮と、有漏と無漏との初三無色解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、餘には非ず、前の三は已に捨するが故に、後の一は未だ得せざるが故に。若し識無邊處に生じて無所有處の愛を盡くすものなれば、彼は無漏の初靜慮と第四解脫と、有漏と無漏との第五と第六との解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、餘には非ざること、前說の如し。若し無所有處に生じて卽ち彼の愛を盡くすものなれば、彼は無漏の初靜慮と、及び第四と第五との解脫と、有漏と無漏との第六解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、餘には非ざること、前說の如し。若し非想非非想處に生じて滅盡定を得せざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と三無色解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、餘には非ず。前の三は已に捨するが故に、後の一は未だ得せざるが故に、或は已に捨するが故に。

【本論】[二八]五を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、空無邊處の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは遍淨と廣果とに生じて、無所有處の愛を盡くすも滅盡定を得せざるものと、[二九]若しくは非想非々想處に生じて滅盡定を得するものとをいふなり。

此は卽ち異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者にして極光淨と遍淨と廣果と非想非非想處とに生ずるものとにして、皆初靜慮と及び五解脫とを成就するをいふなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて、空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前三解脫と、有漏と無漏との第四と第五との解脫とを成就するも餘には非ず、未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を

【二八】初靜慮を成就し、五の解脫をも成就するもの――

【二九】尙「若しくは聖者にして空無邊處に生じて滅盡定を得するもの」等を說かざるは、無色界に生ぜしものは、滅盡定を起すことを得ざればなり。因みに、滅盡定を起し得るものは、欲界生のものと色界生のものとなり。されど、滅盡定を先に起して命終し有頂に生ぜしものは、之を起さざるも成就するなり。（婆沙、百五十三卷、毘曇部十四、頁三六二以下）

未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。若し遍淨と廣果とに生じて、無所有處の愛を盡くすも、滅盡定を得せざるものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び第三解脫と、有漏と無漏との初三無色解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、餘には非ず、前の二は已に捨するが故に、後の一は得せざるが故に。若し非想非非想處に生じて滅盡定を得するものなれば、彼は無漏の初靜慮と初三無色解脫と及び後二解脫とを成就するも、餘には非ず。已に捨するが故に。

【本論】〔三〇〕六を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものと、若しくは、遍淨と廣果とに生じて、滅盡定を得するものとなり。

此は即ち異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨と廣果とに生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び六解脫とを成就するなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前三解脫と、有漏と無漏との初三無色解脫とを成就するも、餘には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。若し遍淨と廣果とに生じて滅盡定を得するものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び第三解脫と、有漏と無漏との初三無色解脫と、幷びに後二解脫とを成就するも、餘には非ず。已に捨するが故に。

【本論】〔三一〕七を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、無所有處の愛を盡くすも、滅盡定を得せざるものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨に生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び七解脫とを成就するなり。

〔三〇〕初靜慮を成就し、六の解脫をも成就するもの――

〔三一〕初靜慮を成就し、七の解脫を成就するもの――

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて、無所有處の愛を盡くすも、滅盡定を得せざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前三解脫と、有漏と無漏との初三無色解脫と、幷びに第七解脫とを成就するも、第八には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて無所有處の愛を盡くすも、滅盡定を得せざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し――餘は前說の如し。

【本論】〔三二〕八を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、滅盡定を得するものをいふ。

此は卽ち聖者の、欲界と梵世と極光淨とに生ずるものにして、皆、初靜慮と及び八解脫とを成就するものなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて滅盡定を得するものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び一切の八解脫とを成就す。若し極光淨に生じて滅盡定を得するものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び一切の八解脫とを成就するなり。

【本論】〔三三〕八勝處に於ては、或は無なり、或は四なり、或は八なり。

〔三四〕無なりとは、遍淨に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは無色界に生ずるものとなり。

此は卽ち聖者の〔三五〕遍淨と及び無色界とに生ずるものにして、倶に無漏の初靜慮を成就するも、八勝處には非ず。遍淨に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものは、前の四は已に捨し、後の四は未だ得せざるを以つての故に。無色界に生ずる者は、皆已に捨するが故に。

【本論】〔三六〕四を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、遍淨の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは遍淨に生じて卽ち彼の愛を盡くすものと、若しくは廣果に

【三二】初靜慮を成就し、八解脫凡てを成就するもの――

【三三】初靜慮を成就する者は勝處の幾を成就するやに就きて。

【三四】初靜慮を成就するも、勝處を成就せざるもの――

【三五】八勝處の中、前四勝處は、初二靜慮と未至と靜慮中間とに在るも、後四勝處は、第四靜慮に在りて、第三靜慮には勝處無し。故に遍淨に生ずるも、未だ遍淨の愛を盡くさざる者は下地の四は捨し、上の四は得せず、從つて一の勝處をもせざるなり。

【三六】初靜慮を成就し、四の勝處をも成就するもの――

生ずるものとをいふなり。

此は即ち異者と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨とに廣果とに生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び四勝處とを成就するものなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて遍淨の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は、有漏と無漏との初靜慮と及び前四勝處とを成就するも、餘には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨に生じて遍淨の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼の無漏の初靜慮を成就し、餘は前説の如し。若し遍淨に生じて、即ち彼の愛を盡くすものと、及び廣果に生ずるものとなれば、彼は無漏の初靜慮と及び後の四勝處とを成就するも、餘には非ず。已に捨するが故に。

【本論】[三七]八を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨とに生じて、遍淨の愛を盡くすものをいふ。

此は即ち異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨に生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び八勝處とを成就す。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて遍淨の愛を盡くすものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び八勝處とを成就す。若し極光淨に生じて遍淨の愛を盡くすものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び八勝處とを成就するなり。

【本論】[三八]十遍處に於ては、或は無なり、或は一・二・八・九・十を成就するなり。

[三九]無なりとは、欲界と梵世と極光淨と遍淨とに生じて、遍淨の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは無所有處と非想非々想處とに生ずるものとなり。

此は即ち[四〇]異生と聖者とにして欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨と、後二

【三七】初靜慮を成就し、八勝處をも成就するもの――

【三八】初靜慮を成就するものは十遍處の幾を成就するやに就きて。

【三九】初靜慮を成就し、十遍處の一をも成就せざるもの――

【四〇】十遍處の中、前八遍處は、第四靜慮に在り、第九遍處は空無邊處に在り、第十遍處は識無邊處に在り、其の故に、欲界・梵世・極光淨・遍淨に生じて遍淨の愛を未だ盡くさざるものは、第四靜慮を未だ得せざるが故に、遍處を得せず。又、後の二無色に生ずるものは、この十遍處は唯有漏なるを以て地を超す時捨するが故に、これ亦成就せざるなり。

無色とに生ずるものとにして、皆、初靜慮を成就するも、十遍處には非ざるなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて、遍淨の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮を成就するも、十遍處には非ず。未だ得せざるが故に。若し極光淨と遍淨とに生じて、遍淨の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就するも十遍處には非ず、未だ得せざるが故に。若し後二無色に生ずるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就するも、十遍處には非ず。已に捨するが故に。

【本論】[四一] 一を成就する者とは、空無邊處に生じて、卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは識無邊處に生ずるものとをいふなり。

此は卽ち聖者の彼の二地に生ずるものにして、俱に無漏の初靜慮と及び一の遍處とを成就す。中に於て、若し空無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は一の空無邊處遍處を成就するも、餘には非ず。前の八は已に捨するが故に、後の一は未だ得せざるが故なり。若し識無邊處に生ずるものなれば、彼は一の識無邊處遍處を成就するも、餘には非ず。已に捨するが故に。

【本論】[四二] 二を成就する者とは、空無邊處に生じて卽ち彼の愛を盡くすものをいふ。

此は卽ち聖者の彼に生ずるものにして、彼は、無漏の初靜慮と及び後の二遍處とを成就するも、餘には非ず。已に捨するが故に。

【本論】[四三] 八を成就する者とは、欲界と梵世と極光淨と遍淨とに生じて遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは廣果に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものとをいふ。

卽ち此は異生と聖者とにして、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨と廣果と

【四一】初靜慮を成就し、一の遍處を成就するもの——

【四二】初靜慮を成就し、二の遍處を成就するもの。

【四三】初靜慮を成就し、八の遍處を成就するもの——

に生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び前八遍處とを成就するものなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡さざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前八遍處とを成就するも、餘には非ず。未だ得せさるが故に。若し極光淨と遍淨とに生じて遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものと及び廣果に生じて即ち彼の愛を未だ盡くさざるものとなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。

【本論】[四四]九を成就する者とは、欲・色界に生じ色愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

此は即ち異生と聖者との、欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨と廣果とに生ずるものとにして、皆、初靜慮と及び前九遍處とを成就するものなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び前九遍處とを成就するも、第十には非ず。未だ得せさるが故に。若し極光淨と遍淨と廣果とに生じて色愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさざるものなれば、彼は無漏の初靜慮を成就し、餘は前說の如し。

【本論】[四五]十を成就する者とは、欲・色界に生じて空無邊處の愛を盡くすものをいふ。

此は即ち異生と聖者との欲界と梵世とに生ずるものと、及び聖者の極光淨と遍淨と廣果とに生ずるものにして、皆、初靜慮と及び十遍處とを成就するものなり。

中に於て、若し欲界と梵世とに生じて空無邊處の愛を盡すものなれば、彼は有漏と無漏との初靜慮と及び十遍處とを成就す。若し極光淨と遍淨と廣果とに生じて空無邊處の愛を盡すものなれば、彼は無漏の初靜慮と及び十遍處とを成就するなり。

【四四】初靜慮の成就し、九の遍處を成就するもの。

【四五】初靜慮を成就し、十遍處凡てを成就するもの――

四六 **第十一節　初靜慮を成就する者は八智と三三摩地との幾を成就し、幾を成就せざるやの論究**

【本論】四七 八智に於て、或は二・四・五・六・七・八を成就す。

二を成就する者とは、異生と及び苦法忍位のものとをいふ。

此の中、異生と及び先に欲染を離れて未至定に依る苦法忍位のものとは、有漏の初靜慮を成就し、若し上五地に依る苦法忍位のものは、有漏と無漏との初靜慮を成就す。彼の一切は、皆二智——謂く、他心智と世俗智となり——を成就す。

【本論】四八 四を成就する者とは、苦法智と苦類忍との位のものをいふ。

四九 此の位の若し未至定に依るものなれば、則ち有漏の初靜慮を成就し、若し上の五地に依るものなれば、則ち有漏と無漏との初靜慮を成就す。彼は皆四智——謂く、他心智と世俗智と苦智と法智となり——を成就す。

【本論】五〇 五を成就する者とは、苦類智と集法忍との位のものをいふ。

此の二位のものが成就する所の有漏と無漏との初靜慮につきては、前に分別するが如し。彼は皆五智——謂く、前の四に類智を加ふるなり——を成就す。

【本論】 六を成就する者とは、集法智と乃至滅法忍との位のものをいふ。

此の諸の位のものが成就する所の初靜慮につきては、前説の如し。彼は皆、六智——謂く、前の五に集智を加ふ——を成就す。

【本論】五一 七を成就する者とは、滅法智と乃至道法忍との位のものをいふ。

此の諸の位のものが成就する所の初靜慮につきては、前説の如し。彼は皆、七智——謂く前の六

【四六】本節は、亦、是れ前々節よりの續きにして、此の中、初靜慮を成就する者は、八智と三三摩との幾かを成就するや等を論述する段なり。

【四七】**初靜慮を成就し、二智をも成就するもの。**

【四八】**初靜慮を成就し、四智を成就するもの。**

【四九】此の位とは「欲染を離れて正性離生に入りしもの」苦法智苦類智忍位のものをさす。

【五〇】**初靜慮を成就し、五智及び六智をも成就するもの。**

【五一】**初靜慮を成就し、七智及び八智を成就するもの。**

に滅智を加ふ――を成就す。

【本論】八を成就する者とは、道法智以上の諸位のものをいふ。

此の中、道法智と道法忍との位のもの丶成就する所の初靜慮につきても亦、前説の如し。道類智の位のものは必ず、有漏と無漏との初靜慮を成就し、*其の道類智より上の法位中にありて、欲界と梵世とに生ずる者は、定んで皆有漏と無漏との初靜慮を成就し、極光淨以上の諸地に生ずる者は、唯、無漏のみの初靜慮を成就す。彼の一切は皆、八智――謂く、前の七に道智を加ふ――を成就するなり。

【本論】[五二]三三摩地に於て、或は無なり、或は二、或は三を成就するなり。

無なりとは、諸の異生をいふ。

彼は有漏の初靜慮を成就するも、三摩地は非らず。得せざるが故に。

【本論】[五三]二を成就する者とは、諸の聖者の滅法忍の未だ生ぜざるものをいふ。

此の前の諸の位のものにして、若し未至定に依るものなれば、唯、有漏の初靜慮のみを成就し、若し上の五地に依るものなれば、有漏と無漏との初靜慮を成就す。彼は皆、二の三摩地――謂く、空と無願となり――を成就す。

【本論】[五四]三を成就する者とは、滅法忍已生のものをいふ。

此の中、滅法忍より乃ち道類[五五]忍に至るもの丶成就する所の初靜慮につきては前説の如し。道類智の位のものは、必ず有漏と無漏との初靜慮を成就し、其の道類智より上の諸位中にありて、欲界と梵世とに生ずる者は、定んで皆有漏と無漏との初靜慮を成就し、極光淨以上の諸地に生ずる者は、唯、無漏のみの初靜慮を成就す。彼の一切は皆、三三摩地を成就するなり。

---

*其の道類智より上の法位中とは修道位をいふ。

【五二】初靜慮を成就するも、三三摩を成就せざるもの。

【五三】初靜慮を成就し、二の三摩地を成就するもの。

【五四】初靜慮を成就し、三の三摩地を成就するもの。

【五五】忍の下に、大正本には智の字あるも、三本宮本には無きが故に、今後者を採擇す。

第十二節[五六] 第二・三・四靜慮を成就する者は、靜慮乃至三摩地の幾を成就し、幾を成就せざるやの論究

【本論】初靜慮を成就するもの、如く、乃至、第四靜慮を成就するものにつきても、所應に隨つて亦、爾り。

謂く、初靜慮を以て四靜慮乃至三三摩地に對して成就を辯ずるが如く、是の如く、乃至第四靜慮を以て四靜慮乃至三三摩地に對して成就を辯ずるも、其の所應に隨つて、若しくは異生、若しくは聖者、若しくは離染得、若しくは生得、若しくは有漏、若しくは無漏、若しくは無、若しくは分に、若しくは具に等、皆應に廣く說くべきなり。

第十三節[五七] 七補特伽羅の味相應等の靜慮・無色の成就・不成就論

【本論】[五八]七補特伽羅とは、隨信行と隨法行と信勝解と見至と身證と慧解脫と倶解脫とをいふ。

[五九]隨信行等は味相應等の四靜慮と四無色とに於て、幾を成就し、幾を成就せざるや。

答ふ、隨信行は味相應の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、色愛を盡くすものをいふ。

彼は離染時に皆已に斷ずるが故に。

【本論】一を成就する者とは、遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は唯、[六〇]上の一靜慮地の味のみを成就すればなり。

【本論】二を成就する者とは、極光淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるも

【五六】本節は、第九節以來の續行として、第二乃至第四靜慮を成就する者の、靜慮等の成不論を、初靜慮を成就する場合に準じて、推知せしむる段なり。

【五七】本節は、發智の所謂「成不」論の第二段たる「隨信行等の七聖者が、味相應と淨と無漏との靜慮と無色との一一の幾を成就するや、其の幾くを成就せざるやを詳論する段なり。

【五八】七補特伽羅に就きて。

【五九】隨信行の味相應の靜慮の成就に就きて。大正本には隨信行の上に「問」の字あるも、發智論にはなく、又、三本宮本にも無きが故に、今は之を省略せり。

【六〇】卽ち味相應の第四靜慮なり。

のをいふ。

彼は唯、[六一]上二靜慮地の味のみを成就すればなり。

【本論】三を成就する者とは、梵世の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は唯、上三靜慮の味のみを成就すればなり。

【本論】四を成就する者とは、梵世の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は[六二]具に四靜慮地の味を成就すればなり。下染を未だ盡くさずんば、必ず上の味を成就し、下染已に盡くれば、必ず下の味を成就せざるが故なり。

【本論】[六三]淨の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就するなり。

無なりとは、欲愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

淨の靜慮に於て、皆未だ得せざるが故に。

【本論】一を成就する者とは、欲愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるをいふ。

彼は[六四]下の一地の淨を成就すればなり。

【本論】二を成就する者とは、梵世の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は唯、下二地の淨のみを成就するが故に。

【本論】三を成就する者とは、極光淨の愛を盡すも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は唯、[六五]下三地の淨をのみ成就すればなり。

【六一】即ち味相應の第三、第四靜慮なり。

【六二】具は、大正本に俱とあるも、三本宮本に依りて具と訂正せり。

【六三】隨信行の淨の靜慮の成就に就きて。

【六四】即ち初靜慮地の淨なるをいふ。

【六五】三地は大正本に二地とあるも、三本宮本に三地とあるに依り、かく訂正す。

【本論】四を成就する者とは、遍淨の愛を盡すものをいふ。

彼は具さに四地の淨を成就すればなり。下染を未だ盡さずんば、必ず上の淨を成就せざるも、上染を已に盡くせば身が下に在る者は、必ず下の淨を成就するが故に。隨信行は必ず欲界に在るを以この故に、是の說を作すなり。

【本論】[66]無漏の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、未至定に依りて正性離生に入るものをいふ。

此の中、或は未だ欲染を離れざるが故に、或は欲染を離ると雖も、修すること能はざるが故に、皆成就せざるなり。

【本論】一を成就する者とは、初靜慮或は靜慮中間に依りて正性離生に入るものをいふ。

彼は下の一地の無漏を成就するも、餘には非ず。或は未だ得せず、或は修すること能はざるが故に。

【本論】[67]二を成就する者とは、第二靜慮に依りて正性離生に入るものをいふ。

彼は下の二地の無漏を成就するも、餘には非ざること、前說の如し。

【本論】[68]三を成就する者とは、第三靜慮に依りて正性離生に入るものをいふ。

彼は下三地の無漏を成就するも、餘には非ざること前說の如し。

【本論】四を成就する者とは、第四靜慮に依りて正性離生に入るものをいふ。

彼は具さに四地の無漏を成就す、皆已に得し、能く修するが故に。見道は下に依りて必ず上を修せず、是れ初得の道なるを以ての故に、無漏は上に依りて必ず下地を修す。自在にして不繫なるを

【六六】隨信行の無漏の靜慮の成就に就きて。

【六七】以下の本文は、發智は、乃至云云とて省略せり。

【六八】以下の本文は、發智は之を省略せり。

以ての故に。

【本論】[六九]味相應の四無色に於て、或は一・二・三・四を成就す。

一を成就する者とは、無所有處の愛を盡すも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は上一地の味を成就す。彼は必ず未だ有頂の染を離れざるが故に。

【本論】二を成就する者とは、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は上二地の味を成就すればなり。

【本論】三を成就する者とは、空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は上三地の味を成就すればなり。

【本論】四を成就する者とは、空無邊處の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は具さに四地の味を成就す。所以は前說の如し。

【本論】[七〇]淨の四無色に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、色の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

淨の無色に於て、皆未だ得せざるが故に。

【本論】一を成就する者とは、色の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は下の一地の淨を成就すればなり。

【本論】[七一]二を成就する者とは、空無邊處の愛は盡くすも、上の愛は未だ盡くさゞる

【六九】隨信行の味相應の無色の成就に就きて。

【七〇】隨信行の淨の無色の成就に就きて。

【七一】以下の本文は發智は之を「乃至」の下に省略せり。

ものをいふ。

彼は下の二地の淨を成就すればなり。

【本論】[七二]三を成就する者とは、識無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は下三地の淨を成就すればなり。

【本論】四を成就する者とは、無所有處の愛を盡くすものをいふ。

彼は具さに四地の淨を成就す。所以は前說の如し。

【本論】[七三]無漏の三無色に於ては、成就せざるなり。

彼に見道無きが故に。

【本論】[七四]隨信行の如く、隨法行も亦、爾り。

此の二補特伽羅は、若しくは道も、若しくは地も、若しくは定も、若しくは離染も、若しくは所依も、皆異ならずして、唯、[七五]根のみを異にするが故に。

【本論】[七六]信勝解は味相應の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、色の愛を盡くすものをいふ。

一を成就する者とは、遍淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

二を成就する者とは、極光淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

三を成就する者とは、梵世の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

四を成就する者とは、梵世の愛を未だ盡くさゞるものをいふなり。

彼れの成就と及びその所以とは、皆前說の如し。

【七二】以下の本文は發智は之を省略せり。

【七三】隨信行は無漏の無色を成就せず。

【七四】隨法行の靜慮、無色の成就に就きて。

【七五】隨信行は鈍根、隨法行は利根なるをいふ。

【七六】信勝解の味相應の靜慮の成就に就きて。

【本論】 浄[七七]の四靜慮に於て或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、欲の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは無色界に生ずるものとをいふ。

欲愛を未だ盡くさざる者は、皆未だ得せざるが故に。無色界に生ずる者は、皆已に捨するが故に。

【本論】 一を成就する者とは、欲界に生じて欲愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは梵世に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは極光浄に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは遍浄に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは廣果に生ずるものとをいふ。

二を成就する者とは、欲界と梵世とに生じ、梵世の愛は盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは極光浄に生じて卽ち彼の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは遍浄に生じて卽ち彼愛を盡くすものとをいふ。

三を成就する者とは、欲界と梵世とに生じて極光浄の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものと、若しくは極光浄に生じて遍浄の愛を盡くすものとをいふ。

四を成就する者とは、欲界と梵世とに生じて遍浄の愛を盡くすものをいふ。

此の中、信勝解は一切の地に生ずるの義有り容く、有漏の善法は上に生ずるとき、必ず下のを捨すべきをもて、是の故に前の所説の如く作すことを得るなり。

【本論】[七八] 無漏の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。

無なりとは、欲愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

【七七】 信勝解の浄の靜慮の成就に就きて。

【七八】 信勝解の、無漏の靜慮の成就に就きて。

一を成就する者とは、欲愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、[七九]二を成就する者とは、梵世の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、三を成就する者とは、極光淨の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、四を成就する者とは、遍淨の愛を盡くすものをいふ。

此の中には、漸次に得果し、離染する者に依りて說き、或は[八〇]所得のうちの勝れたる靜慮に隨ひ、卽ち彼に依りて正性離生に入る者に依りても說くなり。若し爾らずんば、此の文は應に是の如き說を作すべからず。

所以は何ん、梵世の愛を盡くすも、而も二を成就せざるものあり、極光淨の愛を盡すも而も三を成就せざるものあり、遍淨の愛を盡すも而も四を成就せざるものあるを以ての故に。何ものか是れなりや。謂く、[八一]有るは梵世乃至遍淨の染を離れて初靜慮乃至第三靜慮に依りて正性離生に入るものの道類智に至る時、無漏の二乃至四の靜慮を成就せざるものあるが故に。或は此の所說の道類智の時、二乃至四を成就せずと雖も、而も此より後、久しからずして定んで成ずるが故に、爾の時に於ても、亦、成就すと說く。謂く、道類智の後、久しからずして必ず勝果道を起す時、卽ち彼を修するが故に。

【本論】[八二]味相應の四無色に於て、或は一・二・三・四を成就す。[八三]一を成就する者とは、無所有處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、乃至四を成就する者とは、空無邊處の愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

[八四]淨の四無色に於ては、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。[八五]無なりとは、欲色界に生じて、色愛を未だ盡くさゞるものをいひ、一を成就する者とは、欲・色界に生じ

【七九】以下の本文は、四者云云迄發智は之を「乃至」の語にて省略せり。

【八〇】所得のうち勝れたる靜慮云云とは、正性離生に入るに際し、從前得せる靜慮中の最上のものに依りて、正性離生に入るものとの意なり例せば極光淨の愛を盡せしものは、已に淨の第三靜慮を得するが故に、其の所得の第三靜慮に依りて、正性離性に入れば、本論所說の如く、三の無漏の靜慮を成就すればなり。

【八一】例せば梵世の染を離れしものが、淨の初靜慮に依りて正性離生に入り、道類智に達せし刹那の如き、彼は未だ無漏の靜慮を起す時間を有せず、乃至遍淨の染を離れしものが、初三靜慮の何れかに依りて正性離生に入りて道類智に至りし瞬間には未だ無漏の四靜慮を得する時を有せず。尙又、此の道類智を得せし第十六刹那以後に、久しからずして勝果道を起して此等の二乃至四の無漏の靜慮を修する時、爾時初めて、二乃至第四靜慮を成就すと說くが故に、前の場合には、之等を成就するとは云はずとなり。

【八二】信勝解の味相應の四無色の成就に就きて。

【八三】以下淨の四無色の直前

て色愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは空無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは識無邊處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは無所有處に生じて卽ち彼の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは非想非々想處に生ずるものをいふ。

二を成就する者とは、欲・色界と、空無邊處とに生じて空無邊處の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは識無邊處に生じて卽ち彼の愛を盡くすも上の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは無所有處に生じて卽ち彼の愛を盡くすものをいふ。

三を成就する者とは、欲・色界と、空無邊處とに生じて、識無邊處の愛を盡し、上の愛を未だ盡くさゞるもの、若しくは識無邊處に生じて無所有處の愛を盡くすものをいふ。

四を成就する者とは、欲・色界と空無邊處とに生じて無所有處の愛を盡くすものをいふなり。

此の中の廣釋は靜慮中の如く應に知るべし。

【本論】[八六]無漏の三無色に於ては、或は無なり、或は一・二・三を成就す。

無なりとは、色愛を未だ盡くさゞるものをいひ、一を成就する者とは、色愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、[八七]二を成就する者とは、空無邊處の愛を盡くすも、上の愛を未だ盡くさゞるものをいひ、三を成就する者とは、識無邊處の愛を盡くすものをいふなり。

迄の本文は、婆沙は之を省略せるにより、發智より補譯し置く。

【八四】信勝解の淨の四無色の成就に就きて。

【八五】以下の本文は婆沙之を全部乃至廣說の語を以て省略せり。

【八六】信勝解の無漏の三無色の成就に就きて。

【八七】現存の大正本の發智論は「二を成就す……云々」を「乃至」の二字によりて省略せり。但し、正語藏の發智論は、婆沙の如し。

此の中も亦、漸次に得果し離染する者に依りて說けり。若し爾らずんば、此の文は應に是の如き說を作すべからず。所以は何ん、色愛を盡して而も一を成就せざるものもあり、空無邊處の愛を盡くして而も二を成就せざるものもあり、識無邊處の愛を盡くして而も三を成就せしざるものもあるを以ての故に。何ものが是れなりや。謂く、[八八]色界乃至識無邊處の染を離れて正性離生に入るものの道類智に至る時、無漏の無色を成就せざるもの有るが故に、或は彼は久しからずして必ず勝果道を起して卽ち彼を成就するが故に、爾の時に於ても亦、成就すと說けばなり。

【本論】[八九]信勝解の如く、見至も亦、爾り。

此の二の補特伽羅の、若しくは道、若しくは地、若しくは定、若しくは離染、若しくは所依は、皆異ならず、唯、根のみ異なるが故に。

【本論】[九〇]身證は味相應の四靜慮に於て、皆、成就せず。淨の四靜慮に於て、或は無なり、或は一・二・三・四を成就するなり。[九一]無なりとは非想非々想處に生ずるものをいひ、一を成就する者とは廣果に生ずるものをいひ、[九二]乃至、四を成就する者とは欲界と梵世とに生ずるものをいふ。

無漏の四靜漏に於ては皆成就す。

[九三]味相應の四無色に於ては、[九四]一を成就するも、三を成就せず。

淨の四無色に於ては、或は一、或は四を成就す。一を成就する者とは非想非々想處に生ずるものをいひ、四を成就する者とは欲・色界に生ずるものをいふ。

無漏の三無色に於ては皆成就す。

[九五]慧解脫は味相應の四靜慮に於て皆成就せず。

【八八】以下の意味に就きては「信勝解の無漏の靜慮の成就に就きて」の項下の註を參照すべし。

【八九】見至の靜慮及び無色の成就に就きて。

【九〇】身證の味相應・淨・無漏の靜慮の成就に就きて。

【九一】以下「無漏の四靜慮…」の直前まで、婆沙は省略せり。

【九二】大正本の發智が「乃至」と言へるを、聖語藏の發智は「二者、謂生遍淨、三者、謂生極光淨」と言へり。

【九三】身證の味相應等の無色の成就に就きて。

【九四】一とは非想非々想處の味相應を成就するなり。未だ有頂の染を離れざるが故に。

【九五】慧解脫の味相應等の靜慮と無色との成就に就きて。

淨の四靜慮に於ては、或は無なり、或は一・二・三・四を成就す。[九六]無なりとは無色界に生ずるものをいひ、一を成就する者とは廣果に生ずるものをいひ、[九七]乃至、四を成就する者とは欲界と梵世とに生ずるものをいふ。

無漏の四靜慮に於ては皆成就す。

味相應の四無色に於ては、皆成就せず。

淨の四無色に於て、或は一・二・三・四を成就す。[九八]一を成就する者とは、非想非々想處に生ずるものをいひ、[九九]乃至、四を成就する者とは、欲・色界と空無邊處とに生ずるものをいふ。

無漏の三無色に於ては、皆成就するなり。

[一〇〇]倶解脱は、味相應の四靜慮に於ては皆成就せず。淨の四靜慮に於ては或は無なり、或は一・二・三・四を成就するなり。[一〇一]無なりとは非想非々想處に生ずるものをいひ、一を成就するものとは廣果に生ずるものをいひ、[一〇二]乃至、四を成就する者とは欲界と梵世に生ずるものをいふ。

無漏の四靜慮に於ては、皆成就す。

味相應の四無色に於ては、皆成就せず。

淨の四無色に於ては、或は一、或は四を成就す。一を成就する者とは、非想非々想處に生ずるものをいひ、四を成就する者とは、欲・色界に生ずるものをいふ。

無漏の三無色に於ては皆成就するなり。

【九六】以下の本文は婆沙は之を省略せり。
【九七】「乃至」の文は聖語藏の發智にては「二者謂生遍淨、三者謂生極光淨」の十三字とせり。
【九八】以下の本文は婆沙論は之を省略せり。
【九九】「乃至」の文を、聖語藏の發智論は「二者謂無所有處、三者謂生識無邊處」といへり。
【一〇〇】倶解脱の味相應等の靜慮と無色との成就に就きて。
【一〇一】以下の本文は婆沙は之を省略せり。
【一〇二】「乃至」の文は、聖語藏の發智は、「二者謂生遍淨、三者謂生極光淨」とせり。

此の中の廣釋は前の如く應に知るべし。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百六十八

卷の第百六十九（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之四）

第十四節[一]　味相應と淨と無漏との四靜慮相互の成就不成就の七句分別

【本論】[二]頗し味相應の四靜慮を成就するも、淨のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、有り。謂く、欲愛を未だ盡くさゞるものをいふ。

彼は四靜慮に於ける所有の善法を皆未だ得せざるが故に。淨と無漏とのは無し。卽ち此を以ての故に味相應の四靜慮を成就するなり。

【本論】[三]頗し淨の四靜慮は成就するも、味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、有り。異生の欲界と梵世とに生ずるものにして色愛を盡すものをいふ。

異生の故に、無漏のは無く、色愛を盡すが故に、味相應のは無し。欲界と梵世とに生じて色愛を盡すが故に、淨の四靜慮を成就するなり。

【本論】[四]頗し無漏の四靜慮を成就するも、味相應のは非らず、淨のは非らざるものありや。答ふ、有り、聖者の無色界に生ずるものをいふ。

聖者にして彼に生ずるを以ての故に無漏の四靜慮を成就するも、卽ち彼處に生ずるを以ての故に、味相應と淨との靜慮は無きなり。

[五]問ふ、若し爾らば、色愛を盡して、未至定が初靜慮と靜慮中間とに依りて正性離生に入るもの、或は練根して見至と作るもの、彼が得果し已りて勝果道を起さずして命終し無色界に生ずるとき、彼は皆、無漏の上三靜慮を成就せざらんに、何が故に四と說けるや。[六]有るが說く、「此は漸次の得果

【一】本節に發智頌文の「成不」論中の第三段の前半として、味相應等の三種の四靜慮の相互成就關係を七句に分ちて先づ論究し、次に其の不成就關係を同じく七句に分ちて明かにする段なり。此の七句の形式に就きては本卷の「註九」に於て示すが如し。

【二】味相應の四靜慮を成就するも淨と無漏とのは非らざるもの。成就論の七句中の第一句なり。

【三】淨の四靜慮は成就するも味相應と無漏とのは非らざるもの。此れ成就論七句中の第二句なり。

【四】無漏の四靜慮を成就するも、味相應と淨とのは非らざるもの。此は成就論の第三句なり。

【五】問意は、聖者の無色界に生ずる者は無漏の四靜慮を成就すと直前の發智本論に言ひしが、然し、次の如き二の場合には無漏の上三靜慮は成就せざるに非ずやと言ふなり。其の中の第一は、色愛を盡して、未至定か中間定か初靜慮かに依りて正性離生に入り道類智に達して不還果を得せし者が直ちに命終し、無色界に生ぜんに、其の時初靜慮のみ無漏は得すべきも、上三靜慮の無漏を起す機會無かるべけれ

者に依りて說くも、餘に依らざるが故なり」と。有るが說く、「彼の正性離生に入る者が不還果を得し已れば、必ず勝果道を起して、無漏の四靜慮を修し、然る後に上に生ず。[七] 若し爾らずんば、應に聖者の廣果以上に生ずるものに樂根を成就せざるものも有るべけん。[八] 若し爾らば便ち十門の所說に違はん。

其の信勝解が練根して見至となる者につきては、有るが說く、「彼は得果し已れば亦、必ず勝果道を起し——前說の如く——無漏の四靜慮を修し、然る後命終して無色界に生ずればなり」と。有るが說く、「彼は練根時にも卽ち亦、上の無漏の靜慮を修す」と。是の故に過無きなり。

【本論】[九] 頗し淨と無漏との四靜慮を成就するも、味相應のは非らざるものありや。

答ふ、有り。聖者の欲界と梵世とに生じて色愛を盡すものをいふ。

[一〇] 問ふ、若し色愛を盡せしものが未至定に依りて正性離生に入る十五心の頃は無漏の靜慮を成就せず、道類智に至るとき、但、一のみを成就し、卽ち彼が乃至、第三靜慮に依りて正性離生に入る十六心の頃は、但、三のみを成就するに、何が故に四と說けるや。答ふ、有るが說く、「此の中には、漸次に得果し離染する者に依りて說けばなり」と。有るが說く、「彼が得果し已れば久しからずして必ず勝果道を起して現前して、上の無漏を修するをもて、是の故に十六心の時に於ては未だ成就せずと雖も、必ず當に得すべきが故に、亦、成就すと說けるなり」と。

【本論】[一一] 頗し餘の二の四靜慮或は三を成就するもの有りや。答ふ、無し。

謂く、味相應の四靜慮を成就する者は、必ず四の淨、四の無漏を成就せざるが故に。

【本論】[一二] 頗し味相應の四靜慮を成就せざるものにして、淨のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、有り、聖者の欲界と梵世とに生ずるものにして色愛を盡せ

ば、從つて上三靜慮の無漏を、此の聖者は成就すと言ひ得ざらんとなり。第二は色愛を盡せし信勝解にして若し、上地に依りて不還果を得せしものが下地に依りて轉根する場合、例せば第四靜慮に依りて不還果を得せしものが、初靜慮等の三地に依りて練根せし場合、彼の六地の無漏を捨して、唯三地（未至・初靜慮・靜慮中間）の無漏のみを得するも、共に、上三地の無漏法を得せず。從つて彼が、このまゝ勝果道を起さず命終して無色界に生ずる場合には、上三地の無漏は成就することとなからんとなり。（此の中練根の條につきては、婆沙第六十七卷參照のこと）

【六】以下答へとして、問の二個の夫々に對して、夫々二說を擧ぐ。

先づ、第一の場合に對しての大意を擧げれば、第一說者は、問者は不漸次者の場合に就きて問難を起せるも、發智論は漸次者に依りて說けるものなれば、過無しとするもの、第二說者は、正性離生に入り、不還果を得するものは、漸次者なりとも不漸次者なりとも、必ず勝果道を起して無漏の四靜慮を起して命終するをもて上三靜慮の無漏のをも成就し

じものをいふ。

此は前の[一三]成就中の第六句の釋の如し。

【本論】[一四]頗し淨の四靜慮を成就せざるものにして、味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、無し。

[一五]頗し無漏の四靜慮を成就せざるものにして、味相應のは非らず、淨のは非らざるものの有りや。答ふ、無し。

此は皆、[一六]前の成就中の無とする所の第四・第五句の釋の如し。

【本論】[一七]頗し味相應と淨との四靜慮を成就せざるものにして、無漏のは非らざるものの有りや。答ふ、有り、聖者の無色界に生ずるものをいふ。

此の前の成就中の第三句の釋の如し。

【本論】[一八]頗し味相應と無漏との四靜慮を成就せざるものにして、淨のは非らざるもののありや。答ふ、有り、異生の欲界と梵世とに生ずるものにして、色愛を盡せしものをいふ。

此は前の成就中の第二句の釋の如し。

【本論】[一九]頗し淨と無漏との四靜慮を成就せざるものにして、味相應のは非らざるもののありや。答ふ、有り、欲愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は前の成就中の初句の釋の如し。

【本論】[二〇]頗し味相應と淨と無漏との四靜慮を成就せざるものありや。答ふ、有り。異生にして無色界に生ずるものをいふ。

得となり。

【七】若し爾らずんば云云とは、若し色愛を盡して未至定等の三地に依りて正性離生に入り、不還果を得せしものに勝果道を起さずして命終し上に生じ、無漏の上三靜慮を得せざるものありとせば、彼等の中少くとも第四靜慮以上に生ずる者は樂根を成就することなきことゝなり、從つて以下にとく十門所說の「聖者の上に生ずるものは、樂根を成就す」といふに違はんとなり。

【八】若し爾らば、十門の所說の「十門の所說」とは、發智論結蘊第二中、十門納息第四之二、(大正二六、自九四七、上)に、「樂根は遍淨以下のものと、及び聖者にして上に生ずるものとが成就す云云と言ふをさす。

【九】淨と無漏との四靜慮を成就するも、味相應のは非らざるもの。

此の發智論の文は、恰も、成就論七句中第四句の如く考へらるゝも、これを阿毘曇八犍度論第二十七卷(大正二六、頁八九七、中)に依るに、正しく、第六句に相當す。

此の點を特に明かにせんが爲め、今左に八犍度論の、この頗問の七句を全引せし置くべし。

謂く異生の故に無漏の四靜慮は無く、無色界に生ずるが故に、味のと淨のとは無ければなり。

二一 第十五節　味相應と淨と無漏との四無色の相互成就・不成就の七句分別

【本論】二二 頗し味相應の四無色を成就するものにして、淨のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、有り。色愛を未だ盡さゞるものをいふ。

彼は四無色の所有の善法に於て皆、未だ得せざるが故に、淨と無漏とのは無し。即ち此を以つての故に味相應の四無色を成就するなり。

【本論】二三 頗し淨と無漏との四無色を成就するものにして、味相應のは非らざるものありや。答ふ、有り。欲・色界と空無邊處とに生ずる阿羅漢をいふ。

阿羅漢の故に味相應のは無く、彼の地に生ずるが故に具さに四の淨と三の無漏とのを成就すればなり。

【本論】二四 頗し餘のを成就するものありや。答ふ、無し。

此の中、第二句の唯、四の淨の無色のみを成就する者の無きは、二五 必ず無漏と味との隨一、或は倶を有するを以ての故なり。第三句の唯、三の無漏のをのみ成就する者の無きは、必ず淨のを有するを以ての故なり。第四句の四の味と淨とを成就するも無漏のは非らざるものといふと、又、第五句の四の味と三の無漏とを成就するも、淨のは非らざるものといふのとの無きは、四の味のを成就する時は、必ず四の淨、或は三の無漏のを成就せざるを以ての故なり。即ち此の義に由りて、第七句も亦、無きなり。

【本論】二六 頗し味相應の四無色を成就せざるものにして、淨のは非らず、無漏のは非らざるものありや。答ふ、有り、欲色界と空無邊處とに生ずる阿羅漢をいふ。

(第一句) 頗し味相應の四禪を成就するも、淨のに非らず、無漏のに非ざるものありや、答へて曰く有り、欲界の愛を未だ盡くさざるものをいふ。(第二句) 淨の(四禪)を成就するも、味相應のは非らず、無漏のは非らざるものありや、答へて曰く、有り、凡夫人の欲界若しくは梵天の上に生じて色愛を盡すものをいふ。(第三句) 無漏を成就するも、味相應のは非らず、淨のは非らざるものありや。答へて曰く、有り、無垢の人の無色界に生ずるものなり。(第四句) 味相應のと淨のとの(四禪)を成就するも、無漏のは非らざるものありや、答へて曰、無きなり。(第五句) 味相應と無漏との(四禪)を成就するも、淨のは非らざるものありや、答へて曰く、無きなり。(第六句) 淨と無漏とのを成就するも、味相應のは非らざるものありや。答へて曰く、有り、無垢の人の欲界若しくは梵天の上に生じて色愛を盡くすものなり。(第七句) 味相應と淨と無漏との(四禪)を成就するものありや。答へて曰く。無きなりと。

此は前の成就中の第六句の釋の如し。

【本論】[二八]頗し淨と無漏との四無色を成就せざるものにして、味相應のは非らざるものありや。答ふ、有り、色愛を未だ盡さゞるものをいふ。

此は前の成就中の初句の釋の如し。

【本論】[二九]頗し餘を成就せざるもの有りや。答ふ、無し。

此の中、唯、四の淨をのみ成就せずといふ(第二句)の無きは、彼は必ず亦、無漏のをも成就せさるを以ての故なり。唯、三の無漏のをのみ成就せずといふ(第三句)の無きは、成就中に無とする所の第四句の釋の如し。四の味と淨とのを成就せざるものにして、無漏は非らずといふ(第四句)の無きは、成就中に無とする所の第三句の釋の如し。四の味と三の無漏とを成就せざるものにして淨は非らずといふ(第五句)の無きは、成就中に無とする所の第二句の釋の如し。一切皆成就せざるものといふ(第七句)の無きは、三の中に於ける隨一或は二は必ず成就するを以ての故なり。

[三〇]此の靜慮と無色との成就と不成就との中、具さに成就するものを成就すと名け、具さに成就せさるものを、成就に非ずと名け、及び具さに成就せざるものを不成就と名け、具さに成就する者を不成就に非ずと名くること、應に知るべきなり。

[三一]第十六節　味相應と淨と無漏との四靜慮の得・捨に關する七句分別

【本論】[三二]頗し味相應の四靜慮を得するも淨は非らず、無漏は非らざることありや。

答ふ、有り、謂く、色愛を盡せしもの丶欲界の纏を起して退する時と、若しくは無色界より歿して欲界に生ずる時となり。

此の中、退する者は異生と及び聖者とに通ず。或は學、或は無學が彼の纏を起す時、具さに四の

以上の七句中、第四句と第五句と第七句とは共に、無きが故に、發智は之を省略し、次下に「餘の二或は三を云云」とまとめて說けるなり。以下之に準じて推知すべし。

【二〇】以下の問意の起る所以に就きては、本節〔註五〕を參照すべし。

【二一】味相應と淨との四靜慮を成就するもの無し等に就きて。

此は、〔註九〕に論示せしが如く、「第四句の「味相應と淨との二の四靜慮を成就するものと、第五句の味と無漏との二の四靜慮を成就するものとをここに、餘の二を成就するものといひ、第七句の味相應と淨と無漏との三の四靜慮を成就するものを、ここに、或は三を成就するものと言へるなり。而も、此の三種の句の場合は、皆無きが故に、茲に、まとめて無しと言へるなり。

【二二】味相應の四靜慮は不成就にして淨と無漏とは非ざるもの。

こは不成就論の七句中の第一句なり。

【二三】〔註九〕の項を參照せよ。

【二四】淨の四靜慮は不成就にして、味相應と無漏とは非らざるもの。

こは、不成就論七句中の第三

味のを得すも、淨と無漏とのは非らず。生ずる者は、唯、異生のみにして、結生の時に於て、具さに四の味のを得するも、淨と無漏とのは非らず。

【本論】三三 頗し淨の四靜慮を得するも、味相應のは非らず、無漏のは非らざることありや。答ふ、無し。

三四 頗し無漏の四靜慮を得するも、味相應のは非らず、淨のは非らざることありや。答ふ、有り、謂く、第四靜慮に依りて正性離生に入るときと、若しくは阿羅漢果を得するときとなり。

此の中、正性離生に入るの時とは、苦法忍の起る時をいふ。爾の時、無漏の四靜慮は先に無くして得するも、味のは非らず、淨のも非らざるなり。阿羅漢を得する時とは、盡智の起る時をいふ。爾の時、無漏の四靜慮は、皆捨して得するも、味のは非らず、淨のは非らざるなり。淨の四靜慮は爾の時亦、得する者も有りと雖も、然も其の種類は先に有りて捨せず、今は但、更に少分のみを得するをもて、淨の四靜慮に於て、一も得すと名くるもの無し。何ぞ況んや四をや。是の故に、味のは非らず、淨のも非らずと說けるなり。有るが說く、「此は無色界に生じて阿羅漢果を得するものに依りて說けるなり」と。問ふ、學が練根する時も、亦、無漏の四靜慮を皆捨して得すること有るに、何が故に說かざるや。答ふ、應に說くべくして、而も說かざるは、當に知るべし此の義有餘なることを。有るが說く、「此の中には、略して初と後とを擧げて以て中間をも顯すが故に、具さに說かざるなり」と。有るが說く、「彼の所捨と所得とは、倶に是れ學の類にして、全く別類のものに非ざるをもて、是を以て說かざるなり。此に由りて亦、無學の練根をも說かず」と。

【本論】三五 頗し餘を得すること有りや。答ふ、無し。

句なり。

【一五】 無漏の四靜慮は不成就にして、味相應と淨とは非らざるもの。これは、不成就論、七句中の第三句なり。

【一六】 〔註九〕と〔註一一〕との項を參照せよ。

【一七】 味相應と淨との四靜慮は不成就にして、無漏のは非らざるもの。これは、不成就論七句中の第四句なり。

【一八】 味相應と無漏との四靜慮は不成就にして、淨のは非らざるもの。これは、不成就論七句中の第五句なり。

【一九】 淨と無漏との四靜慮は不成就にして、味相應のは非らざるもの。これは、不成就論の七句中の第六句なり。

【二〇】 味相應・淨・無漏の三種の靜慮の不成就なるもの。これは、不成就論七句中の第七句なり。

【二一】 本節は發智頌文の「成不」論第三段の後半として、味相應等の四無色の相互の成就の關係を七句に分ちて先づ究明し、次に、其の相互不成就の關係を同じく七句にて分別する段なり。更に、前節と本節とに於ける成就と不成就

此の中、第二句の唯、四の淨のみを得するやといふもの無きと、及び第六句の四の淨と無漏とを得するも、味のは非らざるものありやといふと無きは、[三六]倶時に四の淨を得すること有ること無きが故なり。問ふ、第四靜慮に依る見道の三類智の時と、及び阿羅漢果を得する時とは、豈に具さに四の淨と及び無漏とのを得するに非ずや。何が故に說かざるや。答ふ、彼は其の時に於て、淨の四靜慮に於て皆、先に得して捨せず。今、更に少分を得すと雖も、猶、淨の四靜慮に於て、一も得すと名くるもの無し。況んや復、四をや。是の故に說かざるなり。第四句の四の味と淨とのは得するも無漏のは非らずといふものの無きと、及び第五句の四の味と無漏とのを得するも、淨のは非らずといふものの無きとは、四の味のを得する時には、必ず四の淨のを、或は四の無漏のを得せざるを以ての故なり。卽ち此の義に由るが故に、亦、第七句も無きなり。

【本論】[三七]頗し味相應の四靜慮を捨するも、淨のは非らず、無漏のは非らざることありや。答ふ、無きなり。

倶時に四地の染を離るゝこと有ること無きが故なり。

【本論】[三八]頗し淨の四靜慮を捨するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざることありや。答ふ、有り。謂く、異生にして遍淨の愛を盡せしものが、欲界の纒を起して退する時と、若しくは欲界と梵世とより歿して無色界に生ずる時となり。

此の中、無色界に生ずるものは、異生と及び聖者とに通ず。

【本論】[三九]頗し淨と無漏との四靜慮を捨するも、味相應のは非らざることありや。答ふ、有り。謂く、聖者にして遍淨の愛を盡せしものが、欲界の纒を起して退する時なり。

との意味に就きて最後に明かにする所あり。因みに、此の七句分別の形式に就きては〔註九〕に準ず。

【三二】味相應の四無色を成就するも、淨と無漏とのは非らざるもの。味等の四無色の相互成就論七句中の第一句。

【三三】淨と無漏との四無色を成就するも味相應のは非らざるもの。これ味等の四無色成就論七句中の第六句なり。

【三四】淨の四無色のみを成就する者無し等の五句に就きて。此の中の餘とは四無色成就論七句中の第二句と第三句と第四句と第五句と及び第七句とを指す。

【三五】淨の四無色を成就する者は必ず、欲・色界又は空無邊處に生ずる者にして、無所有處の愛を盡すものならざるべからず、而して若し異生なれば、有頂の味相應のを成就すべく、有學の聖者なれば、無漏の三無色と味相應の有頂との倶を成就すべく、無學の聖者なれば、必ず無漏のを成就すべきが故に、ここに淨の四無色を成就するものは必ず、無漏と味との隨一か、又は倶を成就すと言へるなり。

四〇 頗し餘を捨するもの有りや。答ふ、無し。

此の中、第三句の唯、四靜慮の無漏のをのみ捨すといふものの無きは、四一 退して捨する時には、或は全く捨するに非ざるを以ての故に、或は彼の時、還つて卽ち得するが故に、或は淨のを兼捨するが故なり。四二 得果にて捨する時は還つて卽ち得するが故なり。第四・第五・第七句の無きは、俱時に、四の味のを斷ずること有ること無きが故なり。

四三 第十七節　味相應と淨と無漏との四無色の得捨に關する七句分別

【本論】四四 頗し味相應の四無色を得するも、淨のも非らず、無漏のも非らざることありや。答ふ、有り。謂く、阿羅漢が欲・色界の纒を起して退する時なり。

爾の時、具さに四の味のを得するも、淨と無漏とのは非らざればなり。

【本論】四五 頗し無漏の三無色を得するも、味相應のは非らず、淨のも非らざること有りや。答ふ、有り、謂く、阿羅漢果を得する時なり。

こは四六 前の靜慮中の釋の如し。

【本論】四七 頗し餘を得すること有りや。答ふ、無し。

此の中、第二句の唯、四の淨のをのみ得するといふものゝ無きは、俱時に四の淨を得すること有ること無きが故なり。第四・第五・第七句の無きは、四の味のを得する時は、必ず四の淨と三の無漏とを得せざるを以ての故なり。第六句の四の淨と三の無漏とを得するものにして、味相應のは非らずといふものゝ無きは、四八 三の無漏のを得する時に於て、亦、少分の淨のを得すと雖も、而も得すと名けざるを以ての故なること、具さには前釋の如し。

【本論】四九 頗し味相應の四無色を捨するも、淨のは非らず、無漏のも非らざること有

【三六】 **味相應の四無色は不成就にして、淨と無漏とは非らざるもの。** こは、味等の四無色の不成就論七句中の第一句なり。

【三七】 此の成就中とは、四無色の成就論中の第六句をさす、以下これに準ず。

【三八】 **淨と無漏との四無色は不成就にして、味相應のは非らざるもの。** こは、味等の四無色不成就論七句中の第六句なり。

【三九】 **淨の四無色のみ不成就なるもの無し等に就きて。** 此の中の餘とは、味等の四無色の不成就論七句中の、第二・三・四・五・七の五句を指す。

【三〇】 **前節と本節とに於ける成就不成就の意味。**

【三一】 本節は、發智頌文の「得捨」問題中の、味相應等の四靜慮の得と捨とに關する七句分別をなす段なり。尙、七句分別の形式に就きては［註九］を見よ。

【三二】 **味相應は得するも淨と無漏とは非らざるもの。** こは、味等の四靜慮を得するに就きての七句中の第一句なり。

【三三】 **淨の四靜慮を得するも、味相應のと無漏のとは非らざるもの。** こは、味等の四靜慮を得するに就きての七句中の第二句な

りや。答ふ、無し。

倶時に四地の染を離るゝこと無きを以ての故なり。

【本論】[五〇]頗し淨の四無色を捨するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざること有りや。答ふ、有り。謂く、異生の無所有處の愛を盡せしものゝ欲・色界の纏を起して退する時なり。

頗し淨と[五一]無漏との四無色を捨するも、味相應のは非らざること有りや。答ふ、有り。謂く、聖者の無所有處の愛を盡せしものゝ欲・色界の纏を起して退する時なり。

[五二]頗し餘を捨すること有りや。答ふ、無し。

此の中、第三句の唯、三の無漏のをのみ捨するといふものゝ無きは、靜慮中の說の如し。第四・第五・第七句の無きは、倶時に四の味のを斷ずるもの無きを以ての故なり。

[五三]此の靜慮と無色との得と及び捨との中に於ては、全得のものを得と名け、全不得のものを得に非ずと名け、全捨のものを捨と名け、全不捨のものを捨に非ずと名くること、應に知るべきなり。

[五四]第十八節　味相應と淨と無漏との四靜慮、四無色の退に關する七句分別

【本論】[五五]頗し味相應の四靜慮を退するも、淨のは非らず、無漏のも非らざることありや。答ふ、無きなり。

功德の法に於ては退あるも、過失法に於ては非らざるを以ての故に。亦、倶時に四の味のを捨すること無きが故に。

【本論】[五六]頗し淨の四靜慮を退するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざることありや。答ふ、有り。謂く、異生の遍淨の愛を盡せしものゝ、欲界の纏を起して退する

り。因みに、以下の本文の「頗し淨の…………より答ふ無なり」迄は婆沙は全然これを省略せり。依りて發智よりこれを補へり。

【三四】無漏の四靜慮を得するも、味と淨とは非らざるもの。四靜慮を得するに就きての七句中の第三句なり。

【三五】味と淨との四靜慮を得するもの無し等につきて。此の中、本文中の餘とは、味相應等の四靜慮を得するに就きての七句分別中の、第二・四・五・六・七の五句を含めり。

【三六】有部は離染、得果の頓得を許さず、凡て漸得となすが故なり。

【三七】味相應の四靜慮を捨するも、淨と無漏とのは非らざるもの。これは、四靜慮の捨に就きての七句分別中の第一句なり。

【三八】淨の四靜慮は捨するも、味と無漏とのは非らざるもの。これは、四靜慮の捨に就きての七句分別中の第二句なり。

【三九】淨と無漏との四靜慮を捨するも、味相應のは非らざるもの。これは、四靜慮の捨につきての七句中の第六句なり。

【四〇】無漏の四靜慮のみを捨するもの無し等に就きて。この中、餘とは、四靜慮の捨

時なり。

五七 頗し淨と無漏との四靜慮を退するも、味相應のは非らざることありや。答ふ、有り。謂く、聖者の遍淨の愛を盡せしもの丶、欲界の纏を起して退する時なり。

五八 頗し餘を退すること有りや。答ふ、無し。

此の中、第三句の唯、無漏の四靜慮をのみ退すといふもの丶無きは、或は淨のと倶に退するが故に、或は全退に非さるが故に、或は退する時、還つて彼の地のを得するが故に。第四・第五・第七句の無きは、味のに於ては退すること無きが故に、唯、四の無漏のをのみ退することも無きが故なり。

【本論】五九 頗し味相應の四無色を退するも、淨のは非らず、無漏のも非らざることありや。答ふ、無し。

前說の如し。

【本論】六〇 頗し淨の四無色を退するも、味相應のは非らず、無漏のも非らざること有りや。答ふ、有り。謂く、異生の無所有處の愛を盡せしものが、欲・色界の纏を起して退する時なり。

六一 頗し淨と無漏との四無色を退するも、味相應のは非らざること有りや。答ふ、有り、謂く、聖者の無所有處の愛を盡せしものが、欲・色界の纏を起して退する時なり。

六二 頗し餘のを退すること有りや。答ふ、無し。

此の中、第三句の唯、無漏の三無色をのみ退するといふことの無きは、或は淨のと倶にして退するが故に、或は全退に非ざるが故なり。第四・第五・第七句の無きは、靜慮中の說の如きなり。

六三 第十九節 淨と無漏との靜慮等の退と、得捨に關する種々なる場合の論究

に就きての、第三・四・五・七の四句を含む。

【四二】 無漏の四靜慮を退して捨する者は、欲界の纏生ならざる人趣の聖者にして、而も、色界の染を離れしものに限る。隨つて其の場合を類別して擧ぐれば、

(一)阿羅漢が、空無邊處乃至有頂の纏々起して退し不還果となる場合、

(二)阿羅漢が、欲界の纏を起して退し、預流又は一來位となる場合、

(三)色染を盡せし不還が、欲界の纏を起して退する場合盡なり。

以上の中、第一の場合は、羅漢果に屬する無漏の四靜慮を捨するも、還つて不還果に屬するそれを得するを以て、全く捨するにも非ず、或は彼の時、還つて卽ち得すると言ひ得べく、又、第二と第三との場合は、無漏の四靜慮を捨するも、同時に、淨の四靜慮をも捨することゝなりて、何れも、無漏の四靜慮のみを捨すと言ひ得る場合なきなり。

【四三】 得果にて捨する時は卽ち得すとは、已に色染を離れし不還者は、勿論無漏の四靜慮を成就するも、彼が、阿羅漢果を得する時は、之を捨するも、而も阿羅漢果に攝する

六四 問ふ、頗し無漏の靜慮を退するも、淨のは非らざることありや。答ふ、有り、謂く、學者の無色の纏を起して退する時なり。爾の時、彼の對治の無漏の靜慮を退するも、淨のは非らざるが故に。

問ふ、頗し無色の纏を起さずして無漏の靜慮を退し、淨のは非らざることありや。答ふ、有り、謂く、無學が練根して未だ第九解脫道位に至らざるとき、煩惱を起さずして而も所得の無間、解脫を退する時なり。

六五 問ふ、頗し纏を起さずして而も無漏の靜慮を退し、淨のは非らざること有りや。答ふ、有り、即ち前の所說と、及び學が練根して未だ見至に至らざる位に煩惱を起さずして而も所得の無間・解脫道を退する時なり。

六六 問ふ、頗し七地所攝の無漏の功德を退して、而も淨のは非らざること有りや。答ふ、有り、謂く、少分なり。非想非非想處の染を離れて、還た彼の地の所斷の品の纏を起して退する時なり。

六七 問ふ、頗し唯、無漏の靜慮のみを捨して、而も淨と無漏とのを得すること有りや。答ふ、有り、謂く、阿羅漢果を得する時なり。

六八 問ふ、頗し淨と無漏との靜慮を捨して、唯、無漏ののみを得すること有りや。答ふ、有り。謂く、阿羅漢が無色の纏を起して退する時なり。

六九 問ふ、頗し無漏の靜慮と淨のと與に倶時に得しつゝ、而も別に捨すること有りや。答ふ、有り、謂く、阿羅漢果を得する時と、及び靜慮に依りて不還果を得するときと、並びに學者の練根する時となり。

七〇 問ふ、頗し淨の靜慮と無漏のと與に倶時に得しつゝ、而も別に捨すること有りや。答ふ、有り、謂く、七一 聖者が自地の染を離るゝと、及び上地に生ずるとの時なり。

七二 問ふ、頗し淨と無漏との靜慮を別時に得し、倶時に捨すること有りや。答ふ、有り、謂く、七三 聖者

無漏の四靜慮を得すればなり。

【四三】本節は、發智頌文の「得捨」問題中の、味相應等の四無色の得と捨とに關する七句分別を消す段なり。

【四四】味相應の四無色を得するも、淨と無漏とのは非らざるもの。

こは、味等の四無色の成就論七句分中の第一句なり。

【四五】無漏の三無色を得するも、味と淨とのは非らざるもの。

こは、味等の四無色の成就論七句中の第三句なり。

【四六】即ち、盡智の起る時なり、爾の時、劣果に攝する無漏の三無色を捨して、羅漢果に攝する無漏の三無色を得するなり、淨のは、その時、先有にして捨せず、今少分を得するのみなるをもつて、淨の四無色に於ては得と名けざるなり。

【四七】淨の四無色をのみ得するもの無し等に就きて。

此の中、餘とは、四無色の成就論七句中の第二句と第四・五・六・七の五句をさす。

【四八】例せば、無所有處の染を離れて、正性離性に入る者は無漏の三無色を得するも、淨のは先に有りて捨せず、今、更に少分の淨のをも得するものなるが故に、ここに淨のを

の已に自地の染を離れしものが、下地の纏を起して退する時なり。

[七四]問ふ、頗し淨と無漏との靜慮を倶時に得し、倶時に捨することありや。答ふ、有り、謂く、聖者にして已に下地の染を離れしものが、下地の纏を起して退する時なり。

[七五]靜慮につきて問へるが如く、是の如く、無色につきても亦、應に准じて問ふべし。

第二十節[七六] 六十五等至の幾が自地乃至一切地を緣ずるや

[七七]復次に、前の所說の如く、等至には略して二十三種有り。謂く、靜慮に十二有り、即ち四の味相應と四の淨と四の無漏となり。無色には十一あり、即ち四の味相應と四の淨と三の無漏となり。此の二十三を若し廣く建立せば、[七八]六十五等至を成す。謂く、前の二十三に、四無量と四無礙解と八解脫と八勝處と十遍處と、六通と無諍と願智との所依たるものとなり。

[七九]問ふ、此の六十五の幾が唯、自地のみを緣ずるや。幾が唯、下地のみを緣ずるや。幾が自地と及び下地とを緣ずるや。幾が自地と及び上地とを緣ずるや。幾が一切地を緣ずるや。答ふ、十等至は、唯、自地のみを緣ず。謂く、[八〇]八の味相應と及び空・識無邊處遍處となり。二十四等至は唯、下地のみを緣ず。謂く[八一]四無量と初三解脫と八勝處と前八遍處及び無諍となり。或は有（もろびと）の無諍をして欲・色界を緣ぜしめんと欲するものは、無諍を除くといふ。七等至は、自地と及び下地とを緣ず。謂く、[八二]法と詞との二無礙解と[八三]五通との所依たるものなり。九等至は自地と及び上地とを緣ず。謂く、淨と無漏との三無色と、及び下三無色解脫となり。此は[八四]有漏を緣ずるものに依りて說けるなり。十二等至は一切地を緣ず、謂く、淨と無漏との四靜慮と、[八五]義と辯との二無礙解と漏盡通と、[八六]願智との所依たるものとなり。此は亦、但、有漏を緣ずるものに依つてのみ說けり。若し通じて無漏を緣ずるものに依りて說けば、則ち二十三等至の一切地を緣ずるものあり。謂く、即ち[八七]前の十二に十一の無色を加ふ。謂く、淨と無漏との無色と及び無色解脫となり。

得するとはいはずとなり。

【四九】味相應の四無色を捨するも淨と無漏とのは非らざるもの。
こは、四無色の捨に關する七句分別中の第一句なり。

【五〇】淨の四無色を捨するも、味と無漏とのは非らざるもの。
こは、四無色の捨に關する七句分別中の第二句なり。

【五一】淨と無漏との四無色を捨するも、味のは非らざるもの。
こは、四無色の捨に關する七句分別中の第六句なり。

【五二】無漏の四無色のみを捨するも無し等に就きて。
此の本文中の、餘とは、四無色の捨に關する七句分別中の、第三・四・五・七の四句を含む。

【五三】本節と前節とに於ける得と捨との意味。

【五四】本節は、發智頌文の「退」論にして、即ち、味相應等の四靜慮と四無色との退に關する七句分別を明にする段なり。

【五五】味相應の四靜慮を退するも、淨と無漏とのは非らざるもの。
四靜慮の退に關する七句分別中の第一句なり。

【五六】淨の四靜慮を退するも、味と無漏とのは非らざるもの。

第二十一節[八八]　等至にして八等至を因緣と爲すものと等無間緣と爲すものとの關係論

[八九]問ふ、若し等至が、隨つて何の味相應の靜慮を以て因と爲すとも、卽ち彼を以て等無間と爲すや。設し等至が、隨つて何の味相應の靜慮を以て等無間緣と爲すとも、卽ち彼を以て因と爲すや、答ふ、諸の等至が、隨つて彼の味相應の靜慮を以て因と爲すとも、亦、卽ち彼を以て等無間と爲すなり。有る等至は、彼の味相應の靜慮を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因とは爲さざるものあり。中に於て、[九〇]若し等至にして味相應の初靜慮を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものには十六有り。謂く、淨の初靜慮と[九一]四無量と初二解脫と前四勝處と、五通の所依たるものとなり。若し等至にして味相應の第二靜慮を以て等無間と爲して、而も彼を以て因と爲さざるものには十七有り、謂く、淨の第二靜慮と四無量と初二解脫と前四勝處と五通の所依たるものと、及び淨の初靜慮となり。若し等至にして味相應の第三靜慮を以て等無間と爲して而も彼を以て因と爲さざるものには十有り。謂く、淨の第三靜慮と三無量と五通の所依たるものと、及び淨の第二靜慮となり。若し等至にして味相應の第四靜慮を以て等無間と爲し、而も彼を以て因と爲さざるものに二十三有り。謂く、淨の第四靜慮と三無量と淨解脫と前四勝處と前八遍處と五通の所依たるものと、及び淨の第三靜慮となり。

[九二]問ふ、若し等至にして隨つて何の味相應の無色を以て因と爲すとも、卽ち彼を以て等無間と爲すや。設し等至にして隨つて何の味相應の無色を以て等無間と爲すとも、卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は、隨つて彼の味相應の無色を以て因と爲せば、亦、卽ち彼を以て等無間と爲す。[九三]有る等至は、彼の味相應の無色を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものあり。中に於て、若し等至にして味相應の空無邊處を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに、四有り、謂く、淨の空無邊處と卽ち彼の解脫と、卽ち彼の遍處と、及び淨の第四靜慮となり。若し等至にし

こは、四靜慮の退に關する七句分別中の第二句なり。

【五七】淨と無漏との四靜慮を退するも、味のは非らざるもの。こは、四靜慮の退に關する七句分別中の第六句なり。

【五八】無漏の四靜慮のみを退するもの無し等に就きて。此の中、本文の餘とは、四靜慮の捨に關する七句分別中、第三句と、第四・五・七句との四句を含む。

【五九】味相應の四無色を退するも、淨と無漏とのは非らざるもの。こは、味相應の四無色の退に關する七句分別中の、第一句なり。

【六〇】淨の四無色を退するも、味と無漏とのは非らざるもの。こは、四無色の退に關する七句分別中の第二句。

【六一】淨と無漏との四無色を退するも、味相應のは非らざるもの。こは、四無色の退に關する七句分別中の第六句なり。

【六二】無漏の三無色のみを退するもの無し等に就きて。この中、本文の餘とは、四無色の退に關する七句分別の中の、第三・四・五・七句を含む。

【六三】本節以下、第二十六節迄は、發智論より言へば、い

て味相應の識無邊處を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに五有り。謂く、淨の識無邊處と卽ち彼の解脫と卽ち彼の遍處と、及び淨の空無邊處と卽ち彼の解脫となり。若し等至にして味相應の無所有處を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに四有り、謂く、淨の無所有處と卽ち彼の解脫と及び淨の識無邊處と卽ち彼の解脫となり。若し等至にして味相應の非想非非想處を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに四有り、謂く、淨の非想非非想處と卽ち彼の解脫と及び淨の無所有處と卽ち彼の解脫となり。

[九四] 問ふ、若し等至にして隨つて何の淨の靜慮を以て因と爲すも、卽ち彼を以て等無間と爲すや、設し等至にして、隨つて何の淨の靜慮を以て等無間と爲すも、卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は、隨つて彼の淨の靜慮を以て因と爲せば、亦、卽ち彼を以て等無間と爲すなり。[九五] 有る等至は彼の淨の靜慮を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものあり。中に於て、若し等至にして淨の初靜慮を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに六有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との第二と第三との靜慮となり。若し等至にして淨の第二靜慮を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに八有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との初と第三と第四との靜慮となり。若し等至にして淨の第三靜慮を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに十一有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との初と第二と第四との靜慮と、淨と無漏との空無邊處と卽ち彼の解脫となり。若し等至にして、淨の第四靜慮を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに十二有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との第二・第三靜慮と、淨と無漏との空・識無邊處と、卽ち[九六] 彼の解脫となり。

[九七] 問ふ、若し等至にして隨つて何の淨の無色を以て因と爲すとも、卽ち彼を以て等無間と爲すや。設

は≻附論にして、本節は先づ無漏と淨との靜慮、及び、七地の功德の退に就きての特殊の場合を論究し、次に、無漏と淨との靜慮の得と捨との種々なる場合に就きて論究する段なり。

【六四】 無漏の靜慮を退するも、淨のは非らざることありやに就きて。

此に以下、大體二の場合あり、卽ち一に纏を起して退する時と二に纏を起さざるも、練根時第九解脫道に未だ至らずして退する時となり。

【六五】 纏を起さずして無漏の靜慮のみを退する場合。

【六六】 七地所攝の無漏の功德を退し、淨のを退せざる場合。

【六七】 無漏の靜慮のみを捨して、淨と無漏とを得する場合。

【六八】 淨と無漏との靜慮を捨して、無漏のをのみ得する場合。

【六九】 無漏の靜慮を淨のと與に俱時に得しつつ別時に捨する場合。

こは、無漏のは、得果と練根と退捨とのときのみ捨すること及び、淨のは、少分得することあるを心得えてかゝれば解し易からん。

【七〇】 淨の靜慮を無漏のと與に俱時に得しつつ、別捨する場合。

し等至にして、隨つて何の淨の無色を以て等無間と爲すも卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は、隨つて彼の淨の無色を以て因と爲せば、亦、卽ち彼を以て等無間と爲すなり。九八有る等至は、彼の淨の無色を以て等無間と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものあり。中に於て、若し等至にして淨の空無邊處を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに十二有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との第三・第四靜慮と識無邊處と無所有處と、卽ち彼の二處の解脫となり。若し等至にして淨の識無邊處を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに、十二有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との第四靜慮と、空無邊處と無所有處と、卽ち彼の二處の解脫と、淨の非想非非想處と、卽ち彼の解脫となり。若し等至にして淨の無所有處を以て等無間と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに十有り。謂く、自地の味相應のと無漏のと、及び淨と無漏との空・識無邊處と、卽ち彼の解脫と、淨の非想非非想處と、卽ち彼の解脫となり。若し等至にして淨の非想非非想處を以て等無間と爲すも 而も彼を以て因と爲さざるものに七有り。謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との識無邊處と無所有處と、卽ち彼の二處の解脫となり。

九九問ふ、若し等至にして隨つて何の無漏の靜慮を以て因と爲すも、卽ち彼を以て等無間と爲すや。設し、等至にして隨つて何の無漏の靜慮を以て等無間と爲すも、卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、一一の無漏の靜慮に依りて、皆應に四句を作すべし。

一〇〇無漏の初靜慮に依りて四句を作せば、

（一）有る等至は無漏の初靜慮を以て因と爲すも、等無間に非ざるものあり。此に七有り、謂く、無漏の第四靜慮と三無色と及び三無色解脫となり。（二）有る等至は無漏の初靜慮を以て等無間と爲すも、因には非ざるものあり。此に十九有り。謂く、淨の初と第二と第三との靜慮と、四無量と初

【七一】　こは、淨の卽ち有漏の法は、界地を越ゆると衆同分を捨するとにも共に捨するも、無漏のは然らざることを心得てかかれば解し易し。

【七二】　淨と無漏との靜慮を別時に得し、俱捨する場合。

【七三】　退の有るは、欲界の人趣にして、而も鈍根者にあり、其の中、經世の聖者には無く、亦、欲界を離れ乃至無所有處の染を離れしものの、後に正性離生に入りて得果せしものには下地の纏を起して退することなし、故に此の場合に退を起すものとは、欲界の鈍根の聖者にして而も漸次者の場合に限る。

【七四】　淨と無漏との靜慮を俱時に得し俱時に捨するものに就きて。

【七五】　無色の淨と無漏との退と得捨等の諸種の問題に就きて。

【七六】　本節には、前所述の味と淨と無漏との四靜慮と、味と淨との四無色と、無漏の下三無色との二十三種と、四無量等の四十二等至との六十五等至の幾が、自地、下地、上地、一切地を緣ずるやを論及する段なり。

【七七】　特に等至の二十三種。

【七八】　特に等至の六十五種。

【七九】　六十五等至の幾が、自

二解脫と前四勝處と、二無礙解と四通との所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の初靜慮を以て因とも爲し、亦、等無間とも爲すものあり、此に七有り、謂く、無漏の初と第二と第三との靜慮と、二無礙解と他心通と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は、無漏の初靜慮を以て因とも爲さず、亦、等無間にもあらざるものあり。此に三十二有り、謂く、八の味相應のと、淨の第四靜慮と四無色と、[一〇一]三解脫と[一〇二]後四勝處と十遍處と、無諍と願智との所依たるものとなり。

[一〇三]無漏の第二靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第二靜慮を以て因と作すも等無間に非ざるものあり、此に六有り、謂く、無漏の三無色と、及び三無色の解脫となり。(二)有る等至は無漏の第二靜慮を以て等無間と爲すも、因に非ざるものあり、此に十九有り。謂く、淨の四靜慮と四無量と初二解脫と前四勝處と、[一〇四]法無礙解と[一〇五]四通との所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の第二靜慮を以て因とも爲し、亦、等無間ともなすものあり、此に八有り、謂く、無漏の四靜慮と、二無礙解と他心通と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の第二靜慮を以て因とも爲さず、亦、等無間にも非ざるものあり。此に三十二有り、謂く、八の味相應のと淨の四無色と三解脫と後四勝處と十遍處と、詞無礙解と無諍と願智との所依たるものとなり。

[一〇六]無漏の第三靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第三靜慮を以て因と爲すも等無間に非ざるものあり。此に四有り、謂く、無漏の識無邊處と無所有處と、即ち彼の二處の解脫となり。(二)有る等至は無漏の第三靜慮を以て等無間と爲すも因に非ざるものあり、此に十三有り。謂く、淨の四靜慮と空無邊處と三無量と、法無礙解と四通との所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の第三靜慮を以て因とも亦、等無間とも爲すものあり。此に十一有り、謂く、無漏の四靜慮と空無邊處と、即ち彼の解脫と、[一〇七]二無礙解

地のみ、乃至一切地を緣ずるや。

此は、(一)六十五等至の幾が自地のみを緣じ、(二)幾が下地のみを緣じ、(三)幾が自地と下地とを緣じ、(四)幾が自地と上地とを緣じ、(五)幾が一切地を緣ずるやの五問を詳論するにあり。

【八〇】一切の味相應の定は唯自地の有漏法のみを緣ず、下を緣ぜざるは、已に下の染を離るゝが故に。上を緣ぜざるは、自地に味著し愛し、未だ厭を起さざるが故なり。空・識二邊處は分り易し。

【八一】四無量等は色界定地に在るに四無量は欲界の有情のみを緣じ、初三解脫は欲界の色處を緣じ、八勝處と前八遍處とは皆欲界の一切の色處を緣じ、無淨智も亦欲界中の煩惱のみを緣ずればなり。

【八二】法無礙解と詞無礙解との所依たる地は、欲界と初靜慮との二地なり。勿論此の中前者には、此の外に、欲界と四靜慮との五地に在りとする說もあり、而して、法無礙解の所緣は、名句文身なるをもて、とは、欲界と初靜慮との名・句・文身を緣じ、次に詞無礙解の所緣は言詞なるを以て、これ亦、欲界と初靜慮との言詞を緣ずるが故に、共に、そ

と他心通と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の第三靜慮を以て因とも爲さず、亦、等無間にも非ざるものあり、此に三十八有り、謂く、八の味相應のと、上の三の淨の無色と、喜無量と[一〇八]五解脫と八勝處と十遍處と、詞無礙解と無諍と願智との所依たるものとなり。

一〇九 無漏の第四靜慮に依りて第四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第四靜慮を以て因と爲すも等無間には非ざるものあり。此に三有り、謂く、無漏の初靜慮と無所有處と及び無所有處解脫となり。(二)有る等至は無漏の第四靜慮を以て等無間と爲すも因には非ざるものあり、此に二十八有り。謂く、淨の第二と第三と第四との靜慮と空無邊處と識無邊處と、三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處と、法無礙解と四通と無諍と願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の第四靜慮を以て因とも亦、等無間とも爲すものあり、此に十一有り、謂く、無漏の第二と第三と第四との靜慮と、空・識無邊處と、即ち彼の解脫と、二無礙解と他心通と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る至等は無漏の第四靜慮を以て因とも爲さず、亦、等無間にも非ざるものあり。此に二十三あり。謂く、八の味相應のと、淨の初靜慮と無所有處と非想非非想處と、喜無量と四解脫と前四勝處と、後二遍處と詞無礙解の所依たるものとなり。

一一〇 問ふ、若し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て因と爲すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。設し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て因と爲すや。答ふ、一一の無漏の無色に依りて、皆、應に四句を作すべし。

一一一 無漏の空無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の空無邊處を以て因と爲すも、等無間に非ざるものあり、此に三有り、謂く、無漏の初と第二との靜慮と、及び他心通の所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の空無邊處を

の所依たるものに自地と下地とを緣ずることとなるなり。(婆沙百八十卷參照)。

【八三】 五通とは、漏神通を除く神境・天眼・天耳・他心智・宿住隨念智證通を言ふ。此等は四靜慮地に在りて、よく欲色界を緣ずるが故によく自地と下地とを緣ずといへるなり。漏盡通を除くは、こは、一切地に在りて一切を緣ずるが故なり。(婆沙百四十一卷參照)

【八四】 淨と無漏との三無色の根本定と、下三無色解脫とは、下地の諸の有漏法を緣ぜず。故に、ここに有漏を緣ずるものに依りて說くといへるなり。倘、此の中、根本定と特に規定せるは、無色の近分定に、下地を緣ずることあるが故なり。

【八五】 義と辯との二無礙解の有漏なるものは欲界と未至と靜慮中間と四靜慮と四無色との十一地に在りて、前者は一切法、又は所詮の義を緣じ、後者は、正理に應ずる無滯礙の說と及び自在の定と慧との二道を緣ずるものなるをもて、共に上と自と下との地を緣ずといふなり。

【八六】 願智は無諍智の如く、第四靜慮を所依とし、世俗智を自性となすものなるも、無諍と異りて、遍く一切法を緣

以て等無間と爲すも一因に非ざるものあり、此に六有り。謂く淨の第三・第四靜慮と下三無色と、及び空無邊處遍處となり。(三)有る等至は無漏の空無邊處を以て因とも亦、等無間とも爲すものあり。此に十一有り、謂く、無漏の第三と第四との靜慮と三無色と、及び下三無色解脱と二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の空無邊處を以て因と爲すにも非ず、亦、等無間にも非ざるものあり。此に四十五有り、謂く、八の味相應のと、淨の初と第二との靜慮と非想非非想處と、四無量と五解脱と八勝處と九遍處と、一無礙解と四通と無諍と願智との所依たるものとなり。

二二 無漏の識無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の識無邊處を以て因と爲すも、等無間には非ざるものあり、此に四有り、謂く、無漏の初と第二と第三との靜慮と、他心通の所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の識無邊處を以て等無間と爲すも、因には非ざるものあり。此に七有り、謂く、淨の第四靜慮と四無色と、非想非非想處解脱と識無邊處遍處となり。(三)有る等至は無漏の識無邊處を以て因とも亦、等無間とも爲すものあり。此に十有り、謂く、無漏の第四靜慮と三無色と、及び下三無色解脱と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は、無漏の識無邊處を以て因とも爲さず亦、等無間にも非ざるものあり。此に四十四有り。謂く、八の味相應と、淨の初と第二と第三との靜慮と、四無量と四解脱と八勝處と九遍處と、二無礙解と四通と無諍と願智との所依たるものとなり。

二三 無漏の無所有處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の無所有處を以て因と爲すも、等無間には非ざるものあり。此に五有り、謂く、無漏の四靜慮と、及び他心通の所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の無所有處を以て等無間と爲すも、因には非ざるものあり。此に五有り、謂く、淨の四無色と、及び非想非非想處解脱となり。(三)有る等至は無漏の無所有處を以て因とも亦、等無間とも爲すものあり。此に九有り、

ずるなり。

【八七】前の十二の中、義と辯との二無礙解の無漏なるものは、未至と靜慮中間と四靜慮と三無色との九地にのみあるも、一切法を緣ずる點異りなきなり。

【八八】本節は、六十五等至の中、味相應等の四靜慮の一一、味相應等の四無色の一一を因緣と爲すものと、等無間緣と爲すものとの相互關係を論究する段なり。

【八九】等至にして味相の應靜慮を因緣と爲すものと、等無間緣と爲すものとの關係、順前句をなせり。

【九〇】以下の議論は、婆沙第百百六十五卷の、八等至相互の四緣係關を論ずる中の、味相應の一靜慮は、(1)同地の味相應と、(2)同地の淨靜慮と、(3)次下の淨靜慮との與めにのみ等無間となるも、餘の與めには非らず、亦、(1)染汚法卽ち味相應は、善法卽ち淨と無漏との與めに、種子法の如くなるに非ず、(2)有漏法は、亦、無漏法の與めに、種子法の如くなるに非ざるが故に、(3)界地を異にすれば法の因果斷ずるが故に、及び異類の法は種子に非ざるが故は、因緣となるに非ずといふ理由を念頭に置けば、解し易し。(婆沙百

謂く、無漏の三無色と、下三無色解脱と、[一二四]二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は、無漏の無所有處を以て因とも爲さず、亦、等無間にも非ざるものあり、此に四十六有り、謂く、八の味相應のと、淨の四靜慮と、四無量と四解脱と八勝處と十遍處と、二無礙解と四通と無諍と願智との所依たるものとなり。

[一二五]第二十二節　等至にして八等至を因緣と爲すものと所緣と爲すものとの關係に就きて

[一二六]問ふ、若し等至にして隨つて何の味相應の靜慮を以て因と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の味相應の靜慮を以て所緣と爲せば、即ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は隨つて何の味相應の靜慮を以て因と爲すも、亦、即ち彼を以て所緣と爲すなり。[一二七]有る等至は彼の味相應の靜慮を以て所緣と爲すも、而も彼を以て因と爲すにあらざるものあり。中に於て、若し等至にして味相應の初靜慮を以て所緣と爲すも而も因には非ざるものに、十三有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と、[一二八]義無礙解と[一二九]三通と願智との所依たるものとなり。或は有の無諍も亦、色界を緣ぜしめんと欲するもの、彼は說く、「十四有り。前のに無諍を加ふるなり」と。如是說者はいふ、「初說を善と爲す」と。

味相應の初靜慮の如く、味相應の第二・第三・第四靜慮も亦、爾り。

[一三〇]問ふ、若し等至にして、隨つて何の味相應の無色を以て因と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の味相應の無色を以て所緣と爲すも、即ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は、隨つて彼の味相應の無色を以て因と爲すも亦、即ち彼を以て所緣と爲すなり。有る等至は彼の味相應の無色を以て所緣と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものあり。[一三一]中に於て、若し等至にして味相應の空無邊處を以て所緣と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに、十五有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものと、淨と無漏との空無邊處と即ち

六十五卷を參照すべし)

【九一】 四無量の中、喜受は初二靜慮に在り、餘の三は六地に在り、初二解脱と前四勝處とは共に、初二靜慮に在り、五通も亦、四根本靜慮に在るを以て、今は、其の中此等の初靜慮に在るもののみをさす。是等は、皆善又は無記にして、善なる靜に依るが故に、味相應の初靜慮の等無間となるも、因緣に非ざるものといへるなり。以下之に準じて知れ。

【九二】 **等至にして味相應の無色を以て因緣と爲すものと、等無間緣と爲すものとの關係。**

【九三】 以下の諸文は、味相應の一無色は、自地の無色の味相應と、自地と次下地の無色又は靜慮との淨の與めに等無間と爲ること、及び、染法又は有漏は不染法又は、無漏法の與めに因緣に爲らず、又、異類界地を越すものと、及び、異類の法とには因緣とならざる理を念頭に置きて考察せば、分明ならん。

【九四】 **等至にして、淨の靜慮を以て因と爲すものと、等無間緣と爲すものとの關係。**

【九五】 以下の諸文は、淨の等至は、自地の淨の與めにのみ因緣となること、及び、淨の

彼の解脱と漏處となり。若し等至にして味相應の識無邊處を以て所縁と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに十八有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、義無礙辯と漏盡通と願智との所依たるものと、淨と無漏との空・識無邊處と、即ち彼の解脱と、識無邊處漏處となり。若し等至にして味相應の無所有處を以て所縁と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに二十有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と、義無礙辯と漏盡通と願智との所依たるものと、淨と無漏との下三無色と、及び下三無色解脱となり。若し等至にして、味相應の非想非非想處を以て所縁と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものに二十二有り。謂く、即ち前の二十に、淨の非想非非想處と及び彼の解脱とを加ふるなり。

淨と無漏との空無邊處との與めに等無間縁と爲り、第四靜慮となれば、自地の淨と味相應と、無漏の上三靜慮と、淨の第二・第三靜慮と、淨と無漏との初二無色との與めに等無間縁となるなり。以下之の理に依りて考ふべし。

【九六】彼の解脱とは、空無邊處解脱と識無邊處解脱との二なり。

【九七】等至にして淨の無色を以て因と爲すものと等無間と爲すものの關係。

これも亦、順前句をなす。

【九八】以下の文は、淨の無色は、自地の淨の與めにのみ、因縁と爲ること、並びに、若し空無邊處の淨のなれば、自地の淨と無漏と味相應と、淨と無漏との第三・第四靜慮と識無邊處と無所有處との與めに等無間縁と爲り、識無邊處の淨のなれば、自地の淨と無漏と味相應と、淨と無漏との第四靜慮と空無邊處と無所有處と、淨の非想非非想處との與めに等無間縁と爲り、無所有處の淨のとなれば、自地の淨と無漏と味相應と、無漏の三無色と淨の下二無色と非想非非想處との與めに等無間縁と爲り、非想非非想處の淨のなれば、自地の淨と味相應と、淨と無漏との識無邊處と無所有處との與めに等無間と爲ることとを知りて理解すべきなり。

【九九】等地にして無漏の靜慮を因縁となすものと、等無間となすものとの關係。

以下四靜慮の無漏に就きて一一皆四句分別を以て明せり。

【一〇〇】無漏の初靜慮に依る四句分別に就きて——

以下の四句分別は無漏の靜慮は一切皆無漏の四靜慮の無漏の三無色との與めに、凡て因となり、次に無漏の靜慮の中、無漏の初靜慮は、無漏と淨との下三靜慮の與めに等無間と爲り、無漏の第二靜慮は、一切の無漏と淨との靜慮の與めに等無間と爲り、無漏の第三靜慮は、無漏と淨との四靜慮と空無邊處との與めに等無間と爲り、無漏の第四靜慮は、無漏と淨との上三靜慮と下二無色との與めに等無間縁と爲ることを知れば、推知し易し。

尙、此の中、各等至中に在る諸功德は、等至に準じて、亦、等無間縁となること、前の如し。

【一〇一】此の三解脱とは、第四靜慮に在る第三解脱と、非想非非想地に在る非想非非想處

初靜慮なれば、(1)自地の淨と(2)自地の無漏と、(3)自地の味相應と、(4)淨と無漏との第二第三靜慮との與めに等無間となり、第二靜慮のなれば、自地の淨と、味相應と、一切の無漏の靜慮と、淨の初と第三と第四との靜慮との與めに等無間と爲り、淨の第三靜慮のなれば、自地の淨と味相應と一切の無漏の靜慮と淨の初と第二と第四との靜慮と、及び、

解脱と、想受滅解脱とをさす。前二解脱は、初二靜慮にあるを以て、無漏の初靜慮の與めて等無間縁たり得、又、下三無色解脱には無漏なるものもあるを以て、無漏の初靜慮の與めに、因たればなり。而して、今は有漏の下三無色解脱につきては論ぜざるなり。

【一〇二】無諍と願智とは共に第四靜慮に在り、後四勝處と前八遍處とは共に第四靜慮に在り、後二遍處は、下二無色の淨なるを其の自性となせばなり。

【一〇三】等至にして無漏の第二靜慮を因縁と爲すものと等無間と爲すものと四句分別——

【一〇四】茲に説く法無礙辯は、欲界と四靜慮とに在りとの五地説か、之に未至定と中間定とを加へたる七地に在りとの有説かに據るもの。

以下に說く法無礙解の地は之に準ず。

【一〇五】四通とは、神境・天眼・天耳・宿住隨念智證通をいふ。共に四根本地にあるをもて等無間となるも、有漏なれば、因とはならず。

【一〇六】等至にして、無漏の第三靜慮を因となすものと、等無間緣となすものとの四句分別——

【一〇七】二無礙解とは、義と辯との二無礙解なり。此の二には未至・靜慮中間・四靜慮・三無色に在りて、法・類・滅・智・盡智、無漏智をも性とするを以て、ここに無漏の第三靜慮を因とも、等無間ともなすと言へるなり。

【一〇八】五解脫とは、初三解脫と、後二解脫となり。

【一〇九】等至にして、無漏の第四靜慮を以て因と爲すものと等無間と爲すものとの四句分別——

【一一〇】等至にして、無漏の無色を因緣と爲すものと、等無間緣と爲すものとの關係。三の無漏の無色の一一に就きて、四句分別をなすこと、無漏の靜慮に就きて說けるが如し。

以下の四句分別は、無漏の無色は、無漏の三無色と無漏の四靜慮との與めに因と爲り、亦、無漏の空無邊處は、無漏と淨との下三無色と後二靜慮との與めに等無間緣となり、無漏の識無邊處は、無漏と淨との第四靜慮と下三無色と、淨の第四無色との與めに等無間緣となり、無漏の無所有處は、無漏と淨との三無色と、淨の第四無色との與めに等無間緣と爲ることを知りて、推知すべし。

【一一一】等至にして、無漏の空無邊處を因と爲すものと、等無間と爲すものとの四句分別——

【一一二】等至にして、無漏の識無邊處を以て因と爲すものと、等無間となすものとの四句分別——

【一一三】等至にして、無漏の無所有處を以て因と爲すものと、等無間と爲すものとの四句分別——

【一一四】義と辯との二無礙解なり。

【一一五】以下は、六十五等至の中、味相應と淨と無漏との四靜慮と四無色との何れかを因緣と爲すものと、所緣緣と爲すものとの相互關係を論求する段なるも、本節は、別巻の都合上、其の中の、一部分たる、味相應の四靜慮と四無色との一一を因緣と爲すものと、所緣緣と爲すものとの關係のみを論及せり。

【一一六】等至にして、味相應の靜慮を以て因緣と爲すものと所緣緣と爲すものとの關係。
順前句をなす。

【一一七】以下特に、等至にして、味相應の靜慮を所緣と爲すも、因と爲さざるものに就きて。

【一一八】以下の文は、味相應の靜慮は、自地の味相應にのみ緣と爲り、又、自地の味相應と、淨と無漏との四靜慮の與めに、共に所緣と爲ることを知りて推知すべし。

【一一九】四無礙解共に善法なるが故に因と爲らず、其の中、義無礙解のみが所緣緣と爲るといふは、法無礙解は、名・句・文身を緣じ、詞無礙解は言詞を緣じ、辯無礙解は道及び說を緣ずるも、定を緣ぜざるに、義無礙解のみは、一切法を緣ずるが故なり。（婆沙百八十卷）

【一二〇】三通とは、他心智通と宿住隨念智通と漏盡通となり。此等は、色界の心心所を皆緣ずるも、他の三通は、欲色界の色法をのみ緣ずるが故に、之を除く。
願智は一切法を緣ずること、前に已に述べしが如し。

【一二一】等至にして、味相應の無色を以て因緣と爲すものと、所緣緣となすものとの關係。
これも亦、順前句をなす。
以下の文は、
味相應の無色は、自地の味相應の與めに因緣と爲り、空無邊處の味相應は、自地の味相應と、淨と無漏との四靜慮と空無邊處との與めに所緣となり、味の識無邊處は、自地の味相應と、淨と無漏との下二無色と四靜慮との與めに所緣と爲り、味の無所有處は、自地の味相應と、淨と無漏との下三無色と四靜慮との與めに所緣と爲り、味の非想非非想處は、自地の味相應と、淨と無漏との四靜慮と三無色と自地の淨との與めに所緣と爲ることを知りて推知すべし。

【一二二】以下、特に等至にして、味の無色を所緣と爲すも、因と爲さざるもの。

阿毘達磨大毘婆沙論巻第百六十九

巻の第百七十（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之五）

一 第二十三節　等至にして、八等至を因縁と爲するものと、所縁縁と爲すものとの關係論（續き）

二 問ふ、若し等至にして、隨つて、何の淨の靜慮を以て因と爲すものなれば、卽ち彼を以て所縁と爲すや。設し等至にして、隨つて何の淨の靜慮を以て所縁と爲すものなれば、卽ち彼を以て因とも爲すや。答ふ、一一の淨の靜慮に依りて皆、應に四句を作すべし。

三 淨の初靜慮に依りて四句を作せば、

（一）有る等至は淨の初靜慮を以て因と爲すも、而も所縁となすに非ざるものあり。此に十五有り。謂く 四 四無量と二解脫と四勝處と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。（二）有る等至は淨の初靜慮を以て所縁と爲すも而も因となすに非ざるものあり、此に九有り、謂く、味相應の初靜慮と淨の上三靜慮と無漏の四靜慮と、願智の所依たるもの 五 となり。（三）有る等至は淨の初靜慮を以て因とも爲し、亦、所縁とも作すもあり、此に六有り、謂く、淨の初靜慮と、六 二無礙解と三通との所依たるものとなり。（四）有る等至は淨の初靜慮を以て因とも爲さず、亦、所縁ともなさざるものあり、此に三十五有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、後の四勝處と六解脫と十遍處と、無諍の所依たるものとなり。

七 淨の第二靜慮に依りて四句を作せば、

（一）有る等至は淨の第二靜慮を以て因と爲すも、而も所縁となすに非ざるものあり、此に十四有り、謂く、四無量と二解脫と四勝處と、法無礙解と三通との所依たるものとなり。（二）有る等至は

【一】本節は、全然前節の續きにして、淨と無漏との靜慮と無色とが、因縁と爲る等至と、所縁々と爲る等至との相互關係を論ずる段なり。

【二】**等至にして、淨の靜慮を以て因となすものと所縁と爲すものとの關係。**此の關係は一一皆四句分別を以て明す。此の四句分別に就きては、淨の等至は、自地の淨の與めにのみ因縁と爲ること、及び、淨の等至は、自地の味相應と淨と無漏との四靜慮との與めに所縁と爲ることを知りて推知すべし。

【三】等至にして、淨の初靜慮を以て因と爲すものと、所縁と爲すものとの四句分別―

【四】四無量等は何れも、淨の初靜慮中にも在り、從つて淨の初靜慮に因たるも、而も、四無量等の所縁は、凡て、色法なるが故に、等至を所縁とせざるなり。尙、此の中、二無礙解とは、法と詞となり、三通とは、天眼と、天耳と、神境智との三なり。以下之に準ず。

【五】此の中、義無礙解を說かざるは、義無礙解の所縁は、所詮の義なりとする說をとるも、一切法を縁ずとの有說を取らざるによるならん。

【六】二無礙解とは、義と辯

淨の第二靜慮を以て所緣と爲すも而も因となすに非ざるものあり。此に九有り。謂く、味相應の八第二靜慮と、淨の初と第三と第四との靜慮と、無漏の四靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の第二靜慮を因とも爲し、亦、所緣とも作すものあり。此に六有り。謂く、淨の第二靜慮と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第二靜慮を以て因とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり。此に三十六有り。謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、後四勝處と六解脱と十遍處と、無諍と詞無礙解との所依たるものとなり。

九 淨の第三靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の第三靜慮を以て因と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり、此に七有り、謂く、一〇 三無量と、法無礙解と三通との所依たるものとなり。(二)有る等至は淨の第三靜慮を以て所緣と爲すも、而も因となすに非ざるものあり。此に九有り。謂く、自地の味相應のと、淨の初と第二と第四との靜慮と、無漏の四靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は靜の第三靜慮を以て因とも爲し亦、所緣とも作すものあり、此に六有り、謂く、淨の第三靜慮と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第三靜慮を以て因とも爲さず亦、所緣となすにも非ざるものあり。此に四十三有り。謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、喜無量と八勝處と八解脱と十遍處と、無諍と詞無礙解との所依たるものとなり。

一一 淨の第四靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の第四靜慮を以て因と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり、此に二十一有り。謂く、三無量と淨解脱と後四勝處と前八遍處と、法無礙解と無淨と三通との所依たるものとなり。(二)有る等至は淨の第四靜慮を以て所緣と爲すも而も因となすに非ざるものあり、此に八有り、謂く、味相應の第四靜慮と、淨の下三靜慮と、無漏の四靜慮となり。(三)有る等至は淨の第四靜慮

とにして、三通とは、他心智通と宿住隨念智通と、漏盡智通との三なり。此等の中、他心智通は、欲色界の心々所法又は不繫の心々所法を緣じ、宿住念隨智通は欲色界の五蘊の何れをも緣じ、漏盡智通は一切法を緣ずればなり。以下之に準ず。

【七】 等至にして、淨の第二靜慮を因と爲すものと、所緣と爲すものとの四句分別――

【八】 大正本に第一靜慮とあるも、三本宮本には第二とあり、且つ、法相上も第二ならざるを得ざるが故に、かく訂正せり。

【九】 等至にして、淨の第三靜慮を因と爲すものと、所緣と爲すものとの四句分別――

【一〇】 喜無量を除く。

【一一】 等至にして、淨の第四靜慮を因と爲すものと、所緣と爲すものとの四句分別――

を以て因とも爲し、亦、所縁とも作すものあり、此に七有り、謂く、淨の第四靜慮と、二無礙解と三通と願智との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第四靜慮を以て因とも爲さず亦、所縁となすにも非ざるものあり、此に二十九有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、喜無量と七解脱と前四勝處と後二遍處と、詞無礙解の所依たるものとなり。

[一二]問ふ、若し等至にして、隨つて何の淨の無色を以て因と爲すも、卽ち彼を以て所縁と爲すや。設し、等至にして、隨つて何の淨の無色を以て所縁と爲すとも、卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、下三淨無色は、若し等至が隨つて彼を以て因と爲せば、亦、卽ち彼を以て所縁と爲すなり。有る等至は彼を以て所縁と爲すも而も彼を以て因と爲さざるものあり。淨の非想非非想處につきては應に四句を作すべし。

中に於て、[一三]若し等至にして、淨の空無邊處を以て所縁と爲すも而も彼を以て因と爲すにあらざるものあり。此に十一有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と、自地の味相應のと、無漏のと、願智の所依たるものとなり。若し等至にして、淨の識無邊處を以て所縁と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものあり、此に十四有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、無漏の初二無色と、淨の空無邊處と、卽ち彼の解脱と、自地の味相應のと、願智の所依たるとなり。若し等至にして淨の無所有處を以て所縁と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものあり、此に十七有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、無漏の三無色と、淨の初二無色と、及び初二無色解脱と、自地の味相應のと、願智の所依たるものとなり。

[一四]淨の非想非非想處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の非想非非想處を以て因と爲すも、而も所縁となすに非ざるものあり、此に一有り、謂く、[一五]滅想受解脱なり。(二)有る等至にして、淨の非想非非想處を以て所縁と爲すも而も因

【一二】等至にして、淨の無色を以て因と爲すものと、所縁と爲すものとの關係。

以下の文は、淨の無色は、自地の淨のみの與めに因縁となり、淨の空無邊處は、自地の味相應と淨と無漏と、及び淨と無漏との四靜慮との與めに所縁となり、淨の識無邊處は、自地の味相應と淨と無漏と、及び淨と無漏との四靜慮と空無邊處との與めに所縁となり、淨の無所有處は、自地の味と淨と無漏と、淨と無漏との四靜慮と下二無色との與めに所縁と爲り、淨の非想非々想處は、自地の味と淨と、淨と無漏との四靜慮と下三無色との與めに所縁となるが故に、此等のことを知りて、了解すべし。

【一三】特に等至にして、下三無色を所縁と爲すも因と爲さざるものに就きて、

【一四】等至にして、淨の非想非々想處を以て因と爲すものと所縁と爲すものとの四句分別

【一五】滅想受解脱は非想非々想處に在るも、此の解脱には所縁無きが故に、有頂を因とは爲すも、所縁と爲さざるなり。

となすに非ざるものあり、此に十九有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と三無色と、及び三無色解脱と、自地の味相應のと、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の非想非非想處を以て因とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に五有り、謂く、淨の非想非非想處と、卽ち彼の解脱と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の非想非非想處を以て因とも爲さず亦、所緣となすにも非ざるものあり。此に四十有り。謂く、七の味相應のと、四無量と初三解脱と八勝處と十遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

[一六]問ふ、若し等至にして、隨つて何の無漏の靜慮を以て因と爲すも、卽ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の無漏の靜慮を以て所緣と爲すとも、卽ち彼を以て因と爲すや。答ふ、諸の等至は隨つて何の無漏の靜慮を以て因と爲すとも、亦、卽ち彼を以て所緣と爲すなり。[一七]有る等至は彼の無漏の靜慮を以て所緣と爲すも、而も彼を以と因となすに非ざるものあり。

中に於て、若し等至にして無漏の初靜慮を以て所緣と爲すも、而も彼を以て因と爲さざるものに十有り。謂く、淨の四靜慮と、四無色と、非想非非想處解脱と[一八]願智の所依たるものとなり。

無漏の初靜慮の如く、無漏の第二・第三・第四靜慮も亦、爾り。

[一九]問ふ、若し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て因と爲すも、卽ち彼を以て所緣とも爲すや。設し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て所緣と爲すも、卽ち彼を以て因とも爲すや。答ふ、一一の無漏の無色に依りて皆應に四句を作すべし。

無漏の空無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の空無邊處を以て因と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり。此に一有り、謂く他心通の所依たるものなり。(二)有る等至は無漏の空無邊處を以て所緣と爲すも、而も因となすに非ざるものあり、此に十有り、謂く、淨の四靜慮と四無色と、非想非非想處解脱と、願智

【一六】等至にして、無漏の靜慮を以て因と爲すものと、所緣となすものとの關係。

【一七】以下の文は、無漏の靜慮は、一切の無漏の靜慮と無色との與めに因緣と爲ること、及び無漏の靜慮は、淨と無漏との一切の靜慮と無色との與めに所緣と爲ることを知りて、了解すべし。

【一八】願智の所依たる等至が、無漏の等至を因緣とせざるは、願智は世俗智なるを以て、其の所依の定も亦、無漏定に非ざればなり。

【一九】等至にして、無漏の無色を以て因緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係。以下の文は、無漏の無色は、一切の無漏の靜慮と無色との與めにのみ因と爲ること、及び、無漏の無色は、自地の味と淨と無漏との四靜慮と無色との與めに凡て所緣々たることを理解せば、解し易し。而も、其の一一の無色に就ては、四句分別をなせり。

の所依たるものとなり。(三)有る等至にして無漏の空無邊處を以て因とも爲し亦、所緣とも作すものあり。此に十三有り、謂く、無漏の四靜慮と三無色と、下三無色解脫と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の空無邊處を以て因とも爲さず、亦、所緣となすにも非ざるものあり、此に四十一有り、謂く、八の味相應と、四無量と四解脫と八勝處と十遍處と、二無礙解と無諍と四通との所依たるものとなり。

無漏の空無邊處の如く、無漏の識無邊處と無所有處とも亦、爾り。

第二十四節[二〇]　等至にして、八等至を等無間緣と爲すものと所緣緣と爲すものとの關係

[二一] 問ふ、若し等至にして、隨つて何の味相應の靜慮を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の味相應の靜慮を以て所緣と爲すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、一一の味相應の靜慮に依りて皆應に四句を作すべし。

[二二] 味相應の初靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至にして味相應の初靜慮を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり。此に十三有り、謂く、四無量と初二解脫と前四勝處と、[二三]三通の所依たるものとなり。(二)有る等至は味相應の初靜慮を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり。此に十有り、謂く、淨の上三靜慮と無漏の四靜慮と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は味相應の初靜慮を以て等無間とも爲し亦、所緣とも作すものあり、此に四有り、謂く、自地の味相應のと淨のと、[二四]二通の所依たるものとなり。(四)有る等至は味相應の初靜慮を以て等無間とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に三十八有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と無漏の三無色と、六解脫と後四勝處と十遍處と、無諍と三無礙解との所依たるものとなり。

【二〇】本節は、六十五等至の中、味相應と淨と無漏との四靜慮と四無色との中の何れかを等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの相互關係を論究する段なり。

【二一】**等至にして、味相應の靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係。**味相應の靜慮が、等至の與めに等無間緣となると及び、所緣々となるとには、寬狹の異りあるを以て、以下一一四句分別せり。此の中、味相應の靜慮が等至の與めに等無間緣となる場合と、所緣々と爲る場合とに就きては、等至にして「味相應等の靜慮を因緣となすものと等無間緣と爲すものとの關係」論中、及び「等至にして、味相應等の靜慮を因緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係」論中に明せり。就きて見るべし。

【二二】等至にして、味相應の初靜慮を以て、等無間緣と爲すものと、所緣々となすものとの四句分別――

【二三】三通とは神境、天眼、天耳通なり。以下之に準ず。

【二四】二通とは宿住、他心通なり以下之に準ず。

二五 味相應の第二靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は味相應の第二靜慮を以て等無間と爲すも而も、所緣となすに非ざるものあり。此に十三有り、謂く、四無量と初二解脫と前四勝處と、三通の所依たるものとなり。(二)有る等至は味相應の第二靜慮を以て所緣と爲すも而も無等間となすに非ざるものあり、此に九有り、謂く、淨の上二靜慮と無漏の四靜慮と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は味相應の第二靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に五有り、謂く、自地の味相應のと、淨の初二靜慮と、二通の所依たるものとなり。(四)有る等至は味相應の第二靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に三十八有り。謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、六解脫と後四勝處と、十遍處と、無諍と三無礙解との所依たるものとなり。

二六 味相應の第三靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は味相應の第三靜慮を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり、此に六有り、謂く、三無量と三通の所依たるものとなり。(二)有る等至は味相應の第三靜慮を以て所緣と爲すも而も等無間となすに非ざるものあり。此に九有り。謂く、淨の二靜慮と、無漏の四靜慮と、義無礙と漏盡通と願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は味相應の第三靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり。此に五有り、謂く、自地の味相應のと、淨の第二・第三靜慮と、二通の所依たるものとなり。(四)有る等至は味相應の第三靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に四十五有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、喜無量と八解脫と八勝處と十遍處と、無諍と三無礙解との所依たるものとなり。

二七 味相應の第四靜慮に依りて四句を作せば、

【二五】等至にして、味相應の第二靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

【二六】等至にして、味相應の第三靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

【二七】等至にして、味相應の第四靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

(一)有る等至は味相應の第四靜慮を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり。此に十九有り。謂く、三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處と、三通の所依たるものとなり。(二)有る等至は味相應の第四靜慮を以て所緣と爲すも而も等無間となすに非ざるものなり。此に九有り。謂く、淨の二靜慮と、無漏の四靜慮と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は味相應の第四靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に五有り、謂く、自地の味相應のと、淨の第三・第四靜慮と、二通の所依たるものとなり。(四)有る等至は味相應の第四靜慮處を以て等無間とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり。此に三十二有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、喜無量と七解脫と前四勝處と後二遍處と、無諍と三無礙解との所依たるものとなり。

二八 問ふ、若し等至にして、隨つて何の味相應の無色を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の味相應の無色を以て所緣と爲すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、諸の等至は、隨つて何の味相應の無色を以て等無間と爲すも、亦、即ち彼を以て所緣と爲すなり。有る等至は彼の味相應の無色を以て所緣と爲すも、而も彼を以て等無間となすに非ざるものあり。

二九 中に於て、若し等至にして味相應の空無邊處を以て所緣と爲すも、而も彼を以て等無間と爲さざるものに十一有り。謂く、淨の三靜慮と、無漏の四靜慮と、自地の無漏のと、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。若し等至にして味相應の識無邊處を以て所緣と爲すも、而も彼を以て等無間と爲さざるものに、十三有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、無漏の初二無色と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。若し等至にして味相應の無所有處を以て所緣と爲すも、而も彼を以て等無間と爲さざるものに十六有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、淨の空無邊處

【二八】等至にして、味相應の無色を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係。

以下の文は、前來の等至にして、味相應の無色を以て因緣と爲すものと、等無間緣と爲すものとの關係及び、因緣と爲すものと所緣々と爲すものとの關係論を參照して考ふべし。

【二九】以下特に、等至にして味相應の無色を所緣々と爲すも、等無間緣となさざるもの、

と、即ち彼の解脫と、無漏の三無色と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。若し等至にして、味相應の非想非々想處を以て所縁と爲すも、而も彼を以て等無間と爲さゞるものに十八有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、初二淨無色と、即ち彼の解脫と、無漏の三無色と、義無礙解と漏盡通と願智との所依たるものとなり。

三〇 問ふ、若し等至にして、隨つて何の淨の靜慮を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て所縁と爲すや。設し等至にして、隨つて何の淨の靜慮を以て所縁と爲すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、一一の淨の靜慮に依りて皆應に四句を作すべし。

三一 淨の初靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の初靜慮を以て等無間と爲すも、而も所縁と爲すに非ざるものあり、此に十五有り、謂く、四無量と初二解脫と前四勝處と、三二 二無礙解と三通との所依たるものとなり。(二)有る等至は淨の初靜慮を以て所縁と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に三有り、謂く、淨と無漏との第四靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の初靜慮を以て等無間とも爲し、亦所縁とも作すものあり、此に 三三 十二有り、謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との初三靜慮と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の初靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所縁ともなすに非ざるもの有り、此に三十五有り、謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、六解脫と四勝處と十遍處と、無諍の所依たるものとなり。

三四 淨の第二靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の第二靜慮を以て等無間と爲すも、而も所縁となすに非ざるものあり、此に十四有り、謂く、四無量と初二解脫と前四勝處と、法無礙解と三通との所依たるものとなり。(二)有る等至は淨の第二靜慮を以て所縁と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に一有り、謂

【三〇】 **等至にして、淨の靜慮を以て等無間緣と爲すものと所縁々と爲すものとの關係。** これも亦、一一皆四句分別をなせり。

【三一】 等至にして、淨の初靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所縁々と爲すものとの四句分別――

【三二】 此の二無礙解とは、法と詞となり。

【三三】 大正本は十三とあるも、聖語藏本には十二とあり、今は後者に隨つて、十二と訂正せり。

【三四】 等至にして、淨の第二靜慮を以て等無間緣と爲すものと所縁々と爲すものとの四句分別――

く、願智の所依たるものなり。(三)有る等至は淨の第二靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所縁とも作すものあり、此に十四有り。謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との四靜慮と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第二靜慮を以て等無間とも爲さず亦、所縁ともなすに非ざるものあり。此に三十[三五]六有り。謂く、七の味相應と、淨の四無色と、無漏の三無色と、六解脫と四勝處と十遍處と、無諍と詞無礙解との所依たるものとなり。

[三六]淨の第三靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の第三靜慮を以て等無間と爲すも而も所縁となすにあらざるものあり、此に十有り。謂く、三無量と、淨と無漏との空無邊處と、即ち彼の解脫と、法無礙解と三通との所依たるものとなり。(二)有る等至は淨の第三靜慮を以て所縁と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に一有り、謂く、願智の所依たるものをいふ。(三)有る等至は淨の第三靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所縁とも作すものあり、此に十四有り、謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との四靜慮と、二無礙解と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第三靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所縁ともなすに非ざるものあり、此に四十有り。謂く、七の味相應と、淨の上三無色と、無漏の上二無色と、喜無量と七解脫と八勝處と十遍處と、無諍と詞無礙解との所依たるものとなり。

[三七]淨の第四靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の第四靜慮を以て等無間と爲すも、而も所縁となすに非ざるものあり、此に二十七有り、謂く、三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處と、無諍と法無礙解と三通との所依たるものと、淨と無漏との初二無色と、即ち彼の解脫となり。(二)有る等至は淨の第四靜慮を以て所縁と爲すも而も等無間となすに非ざるものあり、此に二有り、謂く、淨と無漏との初靜慮なり。(三)有る等至は淨の第四靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所縁とも作すものあり、此に十三有り、謂く、

【三五】大正本には六は五とあるも、三本、宮本、聖語藏本に依りて六と改む。

【三六】等至にして、淨の第三靜慮を以て等無間緣とするものと、所縁々と爲すものとの四句分別——

【三七】等至にして、淨の第四靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所縁々と爲すものとの四句分別——

自地の味相應のと、及び淨と無漏との上三靜慮と、二無礙解と願智と三通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の第四靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすにも非ざるものあり、此に二十三有り、謂く、七の味相應と、淨の上二無色と、無漏の上の一無色と、喜無量と五解脫と前四勝處と後二遍處と、詞無礙解の所依たるものとなり。

三八 問ふ、若し等至にして隨つて、何の淨の無色を以て等無間と爲すも、卽ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして隨つて、何の淨の無色を以て所緣と爲すとも、卽ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、一一の淨の無色に依り皆、應に四句を作すべし。

三九 淨の空無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の空無邊處を以て等無間と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり。此に六有り。謂く、淨と無漏との識無邊處と無所有處と、卽ち彼の解脫とをいふ。(二)有る等至は淨の空無邊處を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり。此に五有り、謂く、淨と無漏との初と第二との靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の空無邊處を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり。此に十二有り、謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との上二靜慮と空無邊處と、卽ち彼の解脫と遍處と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は、淨の空無邊處を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすに非ざるものあり。此に四十二有り。謂く、七の味相應と、淨の非想非々相處と四無量と四〇五解脫と八勝處と九遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

四一 淨の識無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の識無邊處を以て等無間と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり、此に五有り。謂く、淨と無漏との無所有處と、淨の非想非々想處と、及び彼の二解脫となり。(二)有る等

【三八】等至にして、淨の無色を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係。これも亦、一一四句分別を爲せり。

【三九】等至にして、淨の空無邊處を等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

【四〇】初二解脫と、無所有處解脫と、非想非々想處解脫と想滅受解脫となり。

【四一】等至にして、淨の識無邊處を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

至は淨の識無邊處を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に七有り。謂く淨と無漏との初三靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の識無邊處を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり。此に十三有り、謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との第四靜慮と、初二無色と、及び初二無色解脫と、識無邊處遍處と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は、淨の識無邊處を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に四十有り。謂く、七の味相應と、四無量と四解脫と八勝處と九遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

〔四二〕淨の無所有處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は、淨の無所有處を以て等無間と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり。此に二有り、謂く、淨の非想非々想處と、卽ち彼の解脫となり。(二)有る等至は淨の無所有處を以て所緣と爲すも而も等無間となすに非ざるものあり。此に九有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、願智の所依なるものとなり。(三)有る等至は、淨の無所有處を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に十三有り、謂く、自地の味相應のと、及び淨と無漏との初三無色と、卽ち彼の三解脫と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の無所有處を以て等無間とも爲さず亦、所緣となすにも非ざるものあり、此に四十一有り、謂く、七の味相應と、四無量と四解脫と八勝處と十遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

〔四三〕淨の非想非々想處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は淨の非想非々想處を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり、此に一有り、謂く、滅想受解脫なり。(二)有る等至は淨の非想非々想處を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に十二有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と空無邊處と、及び空無邊

〔四二〕等至にして、淨の無所有處を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別——

〔四三〕等至にして、淨の非想非々想處を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別——

處解脫と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は淨の非想非々想處を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり。此に十二有り。謂く、自地の味相應のと、及び淨の上三無色と、即ち彼の三解脫と、無漏の上二無色と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は淨の非想非々想處を以て等無間とも爲さず、亦、所緣となすにも非さるものあり、此に四十有り、謂く、七の味相應と、四無量と三解脫と八勝處と十遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

四四 問ふ、若し等至にして、隨つて何の無漏の靜慮を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして隨つて、何の無漏の靜慮を以て所緣と爲すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、一一の無漏の靜慮に依りて、皆應に四句を作すべし。

四五 無漏の初靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の初靜慮を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非さるものあり、此に十六有り、謂く、四六 四無量と初二解脫と前四勝處と、二無礙解と四通との所依たるもとのなり。(二)有る等至は無漏の初靜慮を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に十四有り、謂く、淨と無漏との第四靜慮と、淨の四無色と、無漏の三無色と、四無色解脫と、願智との所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の初靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に十有り、謂く、淨と無漏との初三靜慮と、二無礙解と二通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の初靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所緣となすに非さるものあり。此に二十五有り。謂く、八の味相應と、二解脫と、後四勝處と十遍處と、無諍の所依たるものとなり。

四七 無漏の第二靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第二靜慮を以て等無間と爲すも、而も所緣となすに非さるものあり。此に

【四四】等至にして、無漏の靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係。此も亦、一一四句分別をなす。

【四五】等至にして、無漏の初靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別——

【四六】四通とは、神境と天眼と天耳と宿住隨念との四通なり。之等は皆、有漏法を所緣と爲せばなり。

【四七】等至にして、無漏の第二靜慮を以て等無間緣と爲すものと所緣々と爲すものとの四句分別——

十五有り、謂く、四無量と初二解脱と前四勝處と、法無礙解と四通との所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の第二靜慮を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に十二有り、謂く、淨の四無色と、無漏の三無色と、四無色解脱と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の第二靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に十二有り。謂く、淨と無漏との四靜慮と、二無礙解と二通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の第二靜慮を以て等無間とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり。此に二十六有り。謂く、八の味相應と、二解脱と後四勝處と十遍處と、無諍と詞無礙解との所依たるものとなり。

四八 無漏の第三靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第三靜慮を以て等無間と爲すも、而も所緣となすに非ざるものあり。此に八有り。謂く、三無量と、法無礙解と四通との所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の第三靜慮を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に九有り、謂く、淨の上三無色と、卽ち彼の三解脱と、無漏の上二無色と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の第三靜慮を以て等無間とも爲し亦、所緣とも作すものあり、此に十五有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、空無邊處と及び空無邊處解脱と、二無礙解と二通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の第三靜慮を以て等無間とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に三十三有り。謂く、八の味相應と、喜無量と四解脱と八勝處と十遍處と無諍と、詞無礙解との所依たるものとなり。

四九 無漏の第四靜慮に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の第四靜慮を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり、此に二十二有り、謂く、三無量と淨解脱と後四勝處と、前八遍處と法無礙解と無諍と四通との所依たるものとなり。(二)有る等至は無漏の第四靜慮を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、

【四八】等至にして、無漏の第三靜慮を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別——

【四九】等至にして、無漏の第四靜慮を以て、等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別——

此に七有り、謂く、淨と無漏との初靜慮と、淨の上二無色と、及び彼の二解脱と、[五〇]無漏の上一無色となり。(三)有る等至は無漏の第四靜慮を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に十七有り、謂く、淨と無漏との上三靜慮と初二無色と、及び初二無色解脱と、二無礙解と二通と願智との所依たるとなり。(四)有る等至は無漏の第四靜慮を以て等無間とも爲さず、亦、所緣ともなすに非ざるものあり。此に十九有り、謂く、八の味相應と、喜無量と三解脱と前四勝處と後二遍處と、詞無礙解の所依たるものとなり。

[五一]問ふ、若し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て等無間と爲すも、即ち彼を以て所緣と爲すや。設し等至にして、隨つて何の無漏の無色を以て所緣と作すも、即ち彼を以て等無間と爲すや。答ふ、無漏の初二無色に依りては各々應に四句を作すべく、無漏の後の一無色に依りては應に順前句を作すべし。

[五二]無漏の空無邊處に依りて四句を作せば、

(一)有る等至は無漏の空無邊處を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり、此に一有り、謂く、空無邊處遍處をいふ。(二)有る等至は無漏の空無邊處を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に七有り、謂く、淨と無漏との初二靜慮と、淨の非想非々想處と及び彼の解脱と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は無漏の空無邊處を以て等無間とも爲し、亦、所緣とも作すものあり、此に十六有り、謂く、淨と無漏との後二靜慮と初三無色と、即ち彼の解脱と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の空無邊處を以て等無間とも爲さず亦、所緣ともなすに非ざるものあり、此に四十一あり、謂く、八の味相應と、四無量と四解脱と八勝處と九遍處と、二無礙解と無諍と五通との所依たるものとなり。

[五三]無漏の識無邊處に依りて四句を作せば、

【五〇】無漏の無所有處なり。

【五一】等至にして、無漏の無色を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの關係、これは下二無色の一一に就きて、四句分別を作すも、上の一無色は順前句をなす。

【五二】等至にして、無漏の空無邊處を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

【五三】等至にして、無漏の識無邊處を以て等無間緣と爲すものと、所緣々と爲すものとの四句分別――

(一)有る等至は、無漏の識無邊處を以て等無間と爲すも而も所緣となすに非ざるものあり。此に一有り、謂く、識無遍處邊處をいふ。(二)有る等至は無漏の識無邊處を以て所緣と爲すも、而も等無間となすに非ざるものあり、此に七有り。謂く、淨と無漏との初三靜慮と、願智の所依たるものとなり。(三)有る等至は、無漏の識無邊處を以て等無間とも爲し亦、所緣とも作すものあり。此に十六有り、謂く、淨と無漏との第四靜慮と、下三無色と、淨の非想非々想處と、四無色解脫と、二無礙解と漏盡通との所依たるものとなり。(四)有る等至は無漏の識無邊處を以て等無間と爲すにも非ず亦、所緣となすにも非ざるものあり、此に四十一有り、謂く、八の味相應と、四無量と四解脫と八勝處と九遍處と、二無礙解と五通と無諍との所依たるものとなり。

[五四] 無漏の無所有處に依りて順前句を作せば、謂く、若し等至にして無漏の無所有處を以て等無間と爲せば、亦、即ち彼を以て所緣とも爲すなり。有る等至は無漏の無所有處を以て所緣と爲すも、而も彼を以て等無間と爲さざるものあり、此に九有り、謂く、淨と無漏との四靜慮と、願智の所依たるものとなり。

[五五] 第二十五節　種々なる場合に於ける等至の得・捨に就きて

[五六] 問ふ、頗し有る一等至が現在前する時、三十三等至は捨して得せず、八等至は得して捨せず、二等至は亦は捨し亦は得し、二等至は少分捨して少分得し、少分捨せず得せず、十三等至は少分捨して得せず、少分捨せず得せず、七等至は捨するにも非ず得するにも非ざるものありや。答ふ、有り、謂く、慧解脫阿羅漢が味相應の初靜慮を起して退する爾の時、六十五等至中に於て、三十三は捨して得せず。謂く、淨と無漏との上三靜慮と、淨と無漏との無色と、[五七]五解脫と後四勝處と十遍處と、漏盡通の所依たるものとなり。八は得して捨せずとは、味相應の靜慮と無色とをいふ。二は亦は捨し亦は得すとは、無漏と淨との初靜慮をいふ。無學の初靜慮と及び上の所修のとを捨して、學のと

【五四】 等至にして、無漏の無所有處を以て等無間緣を爲すものと所緣々と爲すものとの關係――

【五五】 本節は本章第十九節に於ける靜慮と無色との得捨論の續行と見るべきものにして、(一)慧解脫が味相應の初靜慮を起して退する場合の、六十五等至の中の得と捨とに就きて論じ、次に、(二)滅盡解脫を得する時と、(三)羅漢が願智を得する時と、(四)遍淨より歿して廣果に生ずる時との等至の得捨に就きて明にする段なり。

【五六】 **慧解脫が味相應の初靜慮を起して退する時の六十五等至の中の得捨に就きて、**

【五七】 五解脫とは、第三淨解脫乃至第七非想非々想處解脫なり。滅想受解脫は慧解脫羅漢は未だ得せざるが故に捨せざるなり。

及び[五八]退分のとを得するが故に。二の少分は捨し、少分は得し、少分は捨せず得せずといふにつきては、謂く、有の亦、無漏の宿住隨念智通をも有らしめんと欲する者、彼に依りて此の問答を作すを得可し、「謂く、宿住隨念智通と他心智通とは爾の時、少分を捨す。即ち一切の無學の上地の有漏のと、及び無學位等の所修のものとなり。初靜慮の有漏のものは少分得す、即ち初靜慮の學のなり。少分は捨せず得せずとは、即ち[五九]初靜慮の餘の有漏のものをいふと」。若し有の宿住隨念智通をして唯、有漏ならしめんと欲するもの、彼に依りては、應に此の問答を作すべからず。宿住隨念智通は爾の時、但、少分捨すること有り、及び少分は捨せず得せざるを以ての故に。十三の少分は捨して得せず、少分は捨せず得せずといふうち、四無量と初二解脫と前四勝處と、三通の所依たるものとなり。即ち上地の一切と、及び自地の無學位等の所修のものとは捨して得せず。餘の自地のものは、捨せず得せざるなり。七は捨するに非ず、得するに非ずとは、四無礙解と無諍と願智との所依なるものと、滅盡解脫とをいふ。本、未だ得せざるを以ての故に。

[六〇]問ふ、一等至を得して所捨無きものありや。答ふ、有り、謂く、滅盡解脫を得する時なり。

[六一]問ふ、頗し頓に六等至を得して所捨無きもの有りや。答ふ、有り、阿羅漢が初めて願智を起す時、頓に六等至を得するをいふ。謂く、四無礙解と無諍と願智との所依たるものをいふ。

[六二]問ふ、頗し一等至を捨して而も所得無きもの有りや。答ふ、有り、遍淨より歿して廣果に生ずる時、淨の第三靜慮を捨するも而も所得無きをいふ。

[六三]第二十六節　三乘各自は六十五等至中の幾を成就するや

[六四]問ふ、四向四果の補特伽羅が、六十五等至に於て、誰か幾を成就し、幾を成就せざるや。答ふ、預流向は八を成就す——謂く、八の味相應のなり——。餘は成就せざるなり。預流向の如く、預流果と一來向と一來果とも亦、爾り。[六五]不還向は極少なるは八——前說の如し——を成就す。即ち漸

【五八】順退分の初靜慮のこと。

【五九】即ち俱解脫羅漢の得する有漏の初靜慮の二通なり。こは慧解脫は未だ得せざるが故に。

【六〇】滅盡解脫を得する時の、等至の捨に就きて、

【六一】羅漢が初めて願智を起す時の等至の得捨に就きて、

【六二】遍淨より歿して廣果に生ずる時の等至の得捨に就きて、

【六三】本節は、癖聞即ち四向四果の補特伽羅の一一は六十五等至中の幾を成就するや、獨覺と佛陀とは幾を成就するや等を論究する段なり。

【六四】四向四果の補特伽羅は六十五等至の幾を成就するやに就きて、

【六五】不還向の極少なるもの即ち漸次者とは、一來果が、更に勝果道を起して、欲三品の修惑の斷を修するより、最後の一品の九無間道八解脫道までのものをいふ。

【六六】或は一二の味を減ず云云と言ふ中、一を減じて一を增すとは初靜慮より沒し極光淨に生じて、而も、彼の愛未だ盡きざる不還者の場合の如し。彼は、味相應の初靜慮を減じ、第二靜慮の淨を增すな

次者なり。極多は四十七を成就す、即ち已に無所有處の染を離れて、第四靜慮に依りて正性離性に入る者なり。謂く、淨と無漏との四靜慮と、淨の四無色と、味相應の非想非々想處と、四無量と、七解脫と、八勝處と十遍處と、五通の所依なるものとを成就するなり。不還果の極多なるは、不還向の說の如し。極少なるは二十五を成就す。謂く、八の味相應のと、淨と無漏との初靜慮と、四無量と初二解脫と、前四勝處と、五通の所依たるものとなり。[六六]或は一二の味のを減じて、一二の淨のを增すも、皆亦、二十五なり。阿羅漢向の極少なるは、十三を成就す。即ち非想非々想處に生じて、滅盡解脫を得せざるものなり。謂く、無漏の四靜慮と三無色と、味相應と淨との非想非々處と、四解脫となり。若し無所有處に生じて未だ自地の染を離れざるものなれば、亦、十三を成就す。[六七]一の味のを增して、一の解脫を減ずるをいふ。極多なるは五十一を成就す。即ち欲界と梵世とに生ずる身證にして、一の味のと、八の淨のと、七の無漏のと、四無量と八解脫と八勝處と十遍處と、五通の所依たるものとを成就するをいふなり。阿羅漢果の極少なるは、十三を成就す、即ち非想非々想處に生ずる慧解脫阿羅漢にして、七の無漏のと、一の淨のと、四解脫と、漏盡通の所依たるものとを成就するをいふ。極多なるは、五十七を成就す。即ち謂く、無礙解と無諍と願智とを得したるものは、唯、八の味相應を除き、餘は皆具有するなり。[六八]佛は定んで五十七を成就し、獨覺の中、部行の者のは欲界の聲聞の如く、麟角喩の者は佛の如し。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百七十

り。而も彼は、依然として二十五を成就すとは、初靜慮の味と淨との二を越ゆるが故に捨するも、第二靜慮の淨と無漏との二を成就するが故に、成就する等至の數には、變りなきなり。次に二の味を減じ、二の淨を增すも、二十五を成就すといふは、極光淨の愛を盡すも、上の愛未だ盡きざるものが、初靜慮に依りて正性離生に入りて道類智に至る刹那の如し。彼は此の時、初と第二との靜慮の味を捨し、第二と第三との淨を得するが故なり。即ち其の時、不還果なりと雖も、第二第三靜慮の無漏なるものを成就すとは稱せず。後、久しからずして勝果道を起せしとき、この二無漏を成就すと說くが故に（婆沙百六十八卷、信勝解の無漏の靜慮の成就不成就の項を參照すべし）。

【六七】こは、右の非想非々想處に生ぜる羅漢向の成就する十三に、無所有處の味を增し、其の中より、非想非々想處解脫を減ずるをいふ、此の外、有頂の淨を減ずるも、無所有處の淨を增すが故に、此には淨の增減を說かざるなり。

【六八】**佛と獨覺とは六十五等至の幾を成就するかに就きて、**

卷の第百七十一（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之六）

第二十七節[一]　味相應と淨と無漏との四靜慮の頓得・頓捨と漸得・漸捨とに就きて

【本論】[二]頗し味相應の四靜慮を頓に得すること有りや。答ふ、有り。謂く、色愛を盡せしものが、欲界と梵世との纏を起して退せし時、若しくは無色界より歿して欲界と梵世とに生ぜし時なり。

[三]問ふ、何が故に、復此の論を作すや。答ふ、前に得、捨を明すと雖も、而も未だ漸と頓とを分別せざるをもて、今、漸と頓との差別を顯示せんとし、又、復、前には味等の三種を以て相對し分別せしも、今は中に於て唯、自類のみを明かんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

頓とは倶時をいひ、漸とは先後をいふ。此の中、[四]味相應の四靜慮は二時に於て頓に得することを顯すなり。謂く退する時と生ずる時となり。退するときとは色愛の盡より退するときをいひ、生ずるときとは無色より歿して生ずるときをいふ。彼が欲界と梵世との纏を起して退するとき、及び欲界と梵世とに生ずる時には、四の味相應のを倶時に得するが故に。

【本論】[五]頗し味相應の四靜慮にして頓に捨すること有りや。答ふ、無し。倶時に能く四地の染を離るゝこと無きを以ての故に。

【本論】[六]頗し味相應の四靜慮を漸に得すること有りや。答ふ、有り。此も亦、二時に漸に得す。謂く、退するときと及び生ずるときとなり。退するときとは色愛の盡より、次第に下の一一の靜慮の纏を起して退する時をいひ、生ずるときとは、無色より歿して次第に

【一】 本節は發智頌文の「頓漸」論中の前半なる、四靜慮の頓得と頓捨、漸得と漸捨の問題を、味相應と淨と無漏との各々に就きて論述する段なり。

【二】 味相應の四靜慮を頓に得すること有りや、

【三】 論起の緣由。味相應等の八等至の自類の漸得と頓得との差別を明にせんが爲めなり。

【四】 特に味相應の四靜慮頓得の二時に就きて、退時と生時となり。

【五】 味相應の四靜慮の頓捨は無し、

【六】 味相應の四靜慮の漸得に就きて、退時と生時となり。

下の一一の靜慮地に生ずる時をいふ。彼は四の味相應に於て漸次にして而して得すればなり。

【本論】 [七]頗し味相應の四靜慮を漸捨すること有りや。答ふ、有り。

必ず先に初靜慮の染を離れ、乃至後に第四靜慮の染を離るゝを以ての故に。

【本論】 [八]頗し淨の四靜慮を頓に得すること有りや。答ふ、無し。

先に淨の四靜慮を成就せずして今倶時に得すること無きを以ての故に。

【本論】 頗し淨の四靜慮を頓に捨すること有りや。答ふ、有り。謂く、遍淨の愛を盡せしものが、欲界の纒を起して退する時と、若しくは欲界と梵世とより歿して無色界に生ずる時となり。

此の中には、淨の四靜慮は二時に於て頓に捨することを顯すなり、退時と 界地を越ゆる時とをいふ。應に准じて配綴すべし。

【本論】 [九]頗し淨の四靜慮を漸に得すること有りや。答ふ、有り。

謂く、先に欲界の染を離るゝ時、初靜慮の淨を得し、乃至、後第三靜慮の染を離るゝ時、第四靜慮のを得するが故に。無色界より歿して次第に下の四靜慮に生ずる時も亦、漸に得すと名くと雖も、而も一を得し一を捨するが故に、此の所說に非ず。

【本論】 頗し淨の四靜慮を漸に捨すること有りや。答ふ、有り。

此は亦、二時に漸に捨するなり。謂く、退時と、界地を越ゆる時となり、退するときは、漸次に下地の纒を起して退する時をいひ、界地を越ゆるときとは、下より漸次に上地に生ずる時をいふ。上の靜慮より次第に下の靜慮地に生ずる時も亦、漸に捨すと名くと雖も、而も一を捨し一を得するが故に、此の所說に非ず。

【七】 味相應の四靜慮の漸捨に就きて、

【八】 淨の四靜慮の頓得と頓捨とに就きて、

【九】 淨の四靜慮の漸得と漸捨とに就きて、

【本論】[10]頗し無漏の四靜慮を頓に得すること有りや。答ふ、有り。謂く、[11]第四靜慮に依り正性離生に入るときと、若しくは阿羅漢果を得する時となり。

有餘は此に於て阿羅漢果を得する時を說かず。先の學位に於て已に無漏の四靜慮を得するを以ての故に。然れども此に於て應に阿羅漢果を得するを說くべし、學の所得は皆捨して、今は頓に無學のを得するを以ての故に。

【本論】頗し無漏の四靜慮を頓に捨すること有りや。答ふ、有り。謂く、聖者の遍淨の愛を盡せしものが欲界の纒を起して退する時なり。

得果のときと練根のときと及び卽ち[12]彼が欲界の纒を起さずして退する時とは亦、頓に無漏の四靜慮を捨すること有りと雖も、而も卽時に還た得するをもて、是の故に說かざるなり。

【本論】[13]頗し無漏の四靜慮を漸に得すること有りや。答ふ、有り。

聖者が下地の染を離るゝときと、及び[14]勝果道を起すこと有る時とには、漸次に得するを以ての故に。

【本論】頗し無漏の四靜慮を漸に捨すること有りや。答ふ、有り。

聖者の遍淨の愛を盡せしものが、漸次に下地の纒を起して退する時、漸に無漏の四靜慮を捨するを以ての故に。

【本論】[15]頗し味相應の四無色を頓に得すること有りや。答ふ、有り。

謂く、阿羅漢が欲・色界と空無邊處との纒を起して退する時なり。此の中には、[16]生ずる時の得、有り容きこと無し。

【本論】頗し味相應の四無色を頓に捨すること有りや。答ふ、無し。

【一〇】無漏の四靜慮の頓得と頓捨とに就きて、

【一一】第四靜慮に依り正性離生に入るときは異生位に色界染を離れしものの第四靜慮に依りて正性離生に入り、苦類智忍位に達せし時なり。

【一二】阿羅漢が、有頂乃至空無邊處の纒を起して退する時の如し。彼は、無學位の無漏の四靜慮を頓に捨するも、學位のを頓得するが故なり。

【一三】無漏の四靜慮の漸得と漸捨とに就きて、

【一四】勝果道を起す時とは、色染を離れしものが、初靜慮に依りて正性離生に入る時、先づ無漏の初靜慮を得し、道類智に達して後、久しからずして勝果道を起して、漸次に、無漏の上三靜慮を修得するが如き場合を言ふ。

【一五】味相應の四無色の頓得と頓捨とに就きて、

【一六】味相應の四無色を全捨せしもの卽ち阿羅漢のみ、又、頓に得することあるに、阿羅漢にして、再生すること無ければなり。

前釋の如し。

第二十八節　味相應と淨と無漏との四無色の頓得・頓捨・漸得・漸捨に就きて[一七]

【本論】[一八]頗し味相應の四無色を漸に得すること有りや。答ふ、有り。

此の中、若し退する時には四に於て漸に得すること有り、生ずる時には三に於て漸に得すること有り。

【本論】頗し味相應の四無色に於て漸に捨すること有りや。答ふ、有り。

前釋の如し。

【本論】[一九]頗し淨の四無色に於て頓に得すること有りや。答ふ、無し。

先に淨の四無色を成就せずして、今倶時に得すること無きを以ての故に。

問ふ、得果と練根との時、淨の四靜慮と四無色とに於て、皆頓に修すること有るに、何が故に前の靜慮中と、及び此の無色とにて、皆、無しと答ふるや。答ふ、彼等は皆、先に有りて捨せず、今は但、更に少分を得するが故に、此の中の所說に、得するの義、無きなり。

【本論】頗し淨の四無色を頓に捨すること有りや。答ふ、有り、謂く、無所有處の愛を盡せしものが、欲・色界の纒を起して退する時なり。

此の中、界地を越へて捨すること有り容き（うべき）こと無し。

【本論】[二〇]頗し淨の四無色を漸に得すること有りや。答ふ、有り。

[二一]前釋の如し。

【本論】頗し淨の四無色を漸に捨すること有りや。答ふ、有り。

此の中、退する時は、四に於て漸に捨すること有り、[二二]地を越ゆる時は三に於て漸に捨すること有

【一七】本節は、發智頌文の「頓漸」論中の後半にして、即ち、四無色の頓得と頓捨、漸得と漸捨を味等の三種の一一に就き論究する段なり。

【一八】味相應の四無色の漸得と漸捨とに就きて、

【一九】淨の四無色の頓得と頓捨とに就きて、

【二〇】淨の四無色の漸得と漸捨とに就きて、

【二一】先に色染を離れし時、空無邊處の淨なるを得し、乃至無所有處の染を離るる時、非想非非想處の淨なる得するなり。

【二二】空無邊處より歿して識無邊處に生じ、乃至、無所有處より歿して非想非非想處に生ずる時、漸に、下地の淨を捨するも、非想非非想處より歿して上地に生ずるの義無きが故に、此の一地の淨を地を越すことに依りて捨するの義無きなり。

り。

【本論】[二三]頗し無漏の三無色を頓に得すること有りや。答ふ、有り。謂く、阿羅漢果を得する時なり。

無學の練根の時、亦、頓に得すと雖も、而も別の類に非ざるをもて、是の故に說かざるなり。又、彼をも亦、阿羅漢果を得する時と名くるが故に、別說せざるなり。

【本論】頗し無漏の三無色を頓に捨すること有りや。答ふ、有り。謂く、聖者の識無邊處の愛を盡せしものが、欲色界の纒を起して退する時なり。

所釋は前の如し。

[二四]【本論】頗し無漏の三無色を漸に得すること有りや。答ふ、有り。

下地の染を離るゝときと、及び勝果道を起すこと有る時とに、漸次に得すること有るを以ての故に。

【本論】頗し無漏の三無色を漸に捨すること有りや。答ふ、有り。

聖者の識無邊處の愛を盡せしものが、漸次に下地の纒を起して退する時、漸に無漏の三無色を捨するを以ての故に。

[二五]第二十九節　身語の表・無表は何の定に依りて滅するやの論究

【本論】[二六]身語の表と無表とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、身語の表は、初靜慮或は未至定に依りて滅し、身・語の無表は四靜慮或は未至に依りて滅するなり。

[二七]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、表と無表との業は實有に非ずと說く者の意を止めて、表と無表との業は皆是れ實有なることを明さんが爲めなり。又、身・語の表業は乃至第四靜慮にあ

[二三] 無漏の三無色の頓得と頓捨とに就きて、

[二四] 無漏の三無色の漸得と漸捨とに就きて、

[二五] 本節は、發智頌文中、「滅依定」論の八問題中の、第一として、身語の表と身語の無表とは、何の定に依りて滅するやを、身語の表と無表との分別等を明かにしつゝ、論述するなり。

[二六] 身・語の表と無表とは何の定に依りて滅するや。

[二七] 論起の所以。論起の所以として、二あり、一は、表・無表業の實有なることを主張せんが爲め、二は、身語の表業は、初靜慮までであり、無表業は第四靜慮まで在ることを顯さんが爲めなり。

り、無表業は乃至有頂にありと說くを遮して、今、身・語の表は乃至梵世にまであり、無表は乃至第四靜慮まであること顯さんと欲するが爲めの故に、斯の論を作すなり。

二八 問ふ、何が故に、上三靜慮に身・語の表業無きや。答ふ、身・語の表業は尋・伺の所等起なるをもて、若し地に尋・伺を得べくんば、則ち身・語の表業有り。故に契經に言く、「尋・伺し已りて語るものにして、尋・伺せざるには非ず、身表も亦、應に尋・伺し已りて作すべく、尋・伺せざるには非ざるなり」と。上三靜慮には尋・伺滅するが故に、身・語の表無きなり。

二九 問ふ、何が故に、上地には尋・伺無きや。答ふ、尋・伺は麤動にして寂靜にあらざるに、上地は微細にして寂靜なるが故なり。

三〇 問ふ、何が故に、身・語の無表は、唯、第四靜慮に至るのみにして、上地に非ざるや。答ふ、善の無表業は不善の無表を對治するが故なり。不善の無表の有るは、唯、欲界にのみ在り。無色界は欲界より四遠にて遠ざかるが故に、彼には身・語の無表有らず。復說者有り、「色界乃至第四靜慮は、皆能く欲界の惡業を厭惡するも、上地は爾らざればなり」と。有るが說く、「無表は色身と大種とに依るに、彼の無色には、色身及び大種無きが故に、亦、無表も無きなり」と。

三一 此の中、身・語の表業に、善なると不善なると、無記なると有り。

不善なるは欲界繫にして、未至定に依りて滅す。

善なると無記なるとは、欲界と初靜慮との繫にして、欲界繫なるは未至定に依りて滅するも、初靜慮の繫なるは、未至定・初靜慮・靜慮中間・第二靜慮の近分に依りて滅す。未至の言は八の近分と及び靜慮中間とに通ず。皆、根本定に至るに非ざるを以ての故に。

三二 然も此の中所說の定につきては、有るが說く、「無漏定に依りて說く」と。有るが說く、「有漏と無漏との定に依りて說く」と。若し無漏定に依ると說く說者は、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜

【二八】 特に、身・語の表業が、上三靜慮に無き所以、尋・伺無きが故なり。

【二九】 特に、上地に尋・伺無き所以。尋・伺は麤動なるが故なり。

【三〇】 身・語の無表が第四靜慮迄在りて上地に無き所以。これの理由に、以下三說を擧ぐ。

【三一】 身・語の表業の善等の三種と、定に依る彼の滅に就きて、

【三二】 特に、此の中所說の定の有漏無漏に就きて、

慮中間とを顯す」〔三三〕と。若し有漏と無漏との定に依ると說く說者は、彼は說く、「未至の言は未至定と靜慮中間と及び第二靜慮の近分とを顯す」と。

〔三四〕又、此の中所說の、滅につきては、有るが說く、「通じて種類の滅に依りて說く」と。有るが說く、「唯、究竟の滅のみに依りて說く」と。若し通じて種類の滅に依りて說くとする說者は、彼は說く、「此の中の未至の言は三地を攝し、未至定の中に於て有漏と無漏とのを攝す。此は能く欲界と初靜慮との繫の身・語表を滅するを以ての故に」と。若し唯、究竟の滅にのみ依りて說くとする說者は、彼は說く、「未至の言は、亦、三地をも攝するも、未至定の中に於ては唯、無漏ののみを攝す。此は能く初靜慮繫の身・語表を滅するを以ての故に」と。此に由るが故に、身・語表は初或は未至に依りて滅すと說けるなり。

〔三五〕身・語の無表には、善なると不善なるとあり。

不善なるものは、欲界繫にしてこは未至定に依りて滅す。善なるものには、欲界と四靜慮との繫なると不繫なるとあり。欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、初靜慮繫なるは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至第四靜慮繫なるは、四靜慮と未至定と靜慮中間と及び空無邊處の近分とに依りて滅す。

然も此の中所說の定につきてとは、若し無漏定に依りて說くとする說者は、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間とを顯す」と。若し有漏と無漏との定に依りて說くとする說者は、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と及び上の四近分とを顯す」と。

又、此の中、所說の滅につきては、若し種類の滅に依りて說くとする說者は、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の四近分とを攝し、未至定中に於ては有漏と無漏とを攝す。此に依りて能く欲界繫と乃至第四靜慮繫との身・語の無表を滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて說くと

【三三】靜慮の中、無漏なるは、根本四靜慮と、未至と靜慮中間との六地のみにして、其の他の近分定は有漏なればなり。

【三四】特に、本文中の滅の二義卽ち種類滅と究竟滅に就きて、種類滅とは、三界繫の法の中例せば、第二靜慮地のものなれば、第三靜慮の近分に依りて之を滅するも而も、第三靜慮の近分に依りては、唯、第二靜慮繫なるもののみを滅するのみにして、乃至非想非非想處繫なるを滅すること能はず。而も、これも亦、滅の種類に相違無きが故に、こゝにこれを種類滅と言ふ。此を一般的に言へば、有漏の近分定と無漏定とによりて分分に滅する場合をいふ。之に對して究竟滅とは、無漏の未至定なれば、單體をに分分の滅のみならず、乃至有頂地の繫迄も、この定に依りて總じて滅す、卽ち全究竟して滅するを究竟滅といふ。而も無漏定に依りてのみ究竟滅あるなり。以下の本文は、種類滅に依りて滅すと說くと解するも、究竟滅に依りて滅すと說くと解するも、差支へなきが故に、婆沙論師には恒に此の二種の滅を以て解せり。

する說者は、彼は說く、「未至の言は唯、未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とのみを攝し、未至定中に於ては、唯、無漏ののみを攝す、此に依りて能く、第四靜慮繫の身・語の無表を滅するが故に」と。

此に由るが故に、身・語の無表は、四或は未至に依りて滅すと說けるなり。

表と無表との業につきて廣說すること[三六]業蘊の如し。

第三十節[三七]　三惡行・三妙行・三不善根・三善根は何の定に依りて滅するやに就きて

【本論】 三惡行と三妙行と三不善根と三善根は、何の定に依りて滅するや。答ふ、**未至に依るなり。**

此の中の、三惡行は欲界繫なるをもて、未至定に依りて滅す。

身語の二妙行は、欲界と四靜慮との繫と及び不繫とにして、欲界繫なるは未至定に依りて滅し、初靜慮繫なるは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至、第四靜慮繫なるは、四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊の近分とに依りて滅す。

意妙行は九地の繫及び不繫にして、欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、初靜慮繫なるは、初靜慮と未至定と靜慮中間を第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至無所有處の繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間と非想非々想處の近分とに依りて滅し、非想非非想處の繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中にては、三惡行の近對治として、三妙行を說くに依るが故に、但、未至に依りて滅すとのみ言へるなり。

三不善根は欲界繫なるをもて、未至定に依りて滅す。三善根は、九地の繫及び不繫にして、所依の定によりて滅すること、意妙行につきて說けるが如し。此の中、亦、三不善根の近對治として三

【三五】身・語の無表の不善と、定に依る彼等の滅に就きて、

【三六】業蘊第四中、表無表納息第四、婆沙第百二十二卷(毘曇部十三、頁一二六)を見よ。

【三七】本論は發智頌文「滅依定」八門中の第二なる三惡行等の一一が何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

善根を説くに依るが故に、亦、但、未至に依りて滅すとのみ言へるなり。

三惡行乃至三善根につきては、[三八]業蘊等に廣說するが如し。

[三九]第三十一節　四非聖語と四聖語、及び四生と四種入胎と四識住とは總じて何の定に依りて滅するやに就きて

【本論】四非聖語と四聖語と四生と四種入胎と四識住とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、四非聖語と四聖語と胎・卵・濕生と四種入胎とは未至定に依り、化生と後三識住とは、七或は未至に依り、色識住は四或は未至に依りて滅す。

[四〇]第三十二節　特に四非聖語及び四聖語論と、定に依る彼等の滅に就きて

[四一]四非聖語とは、謂く、不見を見と言ふと、不聞を聞と言ふと、不覺を覺と言ふと、不知を知と言ふとなり。

[四二]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、契經の義を分別せんと欲するが爲めの故なり。[四三]契經に説くが如し。「四非聖語とは謂く、不見を見と言ふ、乃至廣說」と。契經に是の説を作すと雖も、而も廣く分別せず。契經は是れ此の論の所依の根本なるをもて、彼に說かざる所のものを、今應に分別すべきが故に、斯の論を作すなり。

[四四]云何が不見を見に言ふは非聖語なりや。答ふ、眼の所得に非ず。眼識の所了に非さるを非所見と名け、此の非所見を說きて不見と名くるなり。若し見ざる所に於て不見の想轉ずる有るに、他が問ひて言はく、汝は是の事に於て曾て見しや不やと。彼れ或は自の爲めに、或は他の爲めに、或は名利の爲めに、便ち此の想、此の忍、此の欲を覆ひて、答へて、我れ見ると言はゞ、是れを、不見を見と言ふ非聖語と名くるなり。

[四五]復、此の類有りて、見に於て不見の想轉じつゝ而も見と言ふも、非聖語を成ずるなり。問ふ、何

【三八】業蘊第四中、惡行納息第一、婆沙第百十二卷、頁三一〇以下及び、毘曇部十二、業蘊第四中、邪語納息第二、婆沙百十七卷、毘曇部十三、頁一八以下參照のこと、

【三九】本節は、發智頌文の「滅依定」八問中の第三として、四非聖語等が何の定に依りて滅するやを總括して明す段なり。

【四〇】本節以下本卷の終り迄は、前節の各論とも稱すべきものにして、本節は四非聖語と四聖語との一般論をなしつつ、これ等が、何の定に依りて滅するやを明す段なり。

【四一】**四非聖語の名目に就きて、**以下、婆沙論には、四非聖語に四種類を說けり。第一種は、ここにとく、不見を見と言ふ非聖語等の四、第二種は、見に於て、不見の想を轉じつつ而も見と言ふ非聖語等の四、第三種は見を不見と言ふ非聖語等の四、第四種は不見に於て見想を轉じつつ而も不見なりと言ふ、非聖語等の四なり。これを八種又は十六種の非聖語と言ふ。

【四二】論起の所以——

【四三】契經とは（D. N. 33. 1. 1. の Saṅgīti suttanta に、）四聖言（Cattāro anariya-voh-

が故に復、此を說くや。答ふ、希有の事を顯さんが爲めの故なり。說くが如し、「頗し見に於て見と言ふも、亦、不見に於て見と言ふが如く、非聖語を成ずるもの有りや。答ふ、有り、謂く、一あるが如し、所見の事に於て不見の想轉ずるに、他が問ひて言く、汝は是の事に於て曾て見しや不やと。彼れ或は自の爲めに、或は他の爲めに、或は名利の爲めに、便ち此の想、此の忍、此の欲を覆ひて、答へて我れ見ると言はゞ、彼は爾の時に於て、不見を見と言ふが如く、非聖語を成ずるをもて、是も亦、名けて不見を見と言ふ非聖語と爲すなり」と。

不見を見と言ふ非聖語を廣說せしが如く、是の如く、不聞を聞といひ、不覺を覺と言ひ、不知を知と言ふの非聖語も廣說せば、亦、爾るなり。

四六 復、四の非聖語有り。謂く、見を不見と言ふと、聞を不聞と言ふと、覺を不覺と言ふと、知を不知と言ふとなり。

云何が見を不見と言ふは非聖語なりや。答ふ、若し眼の所得にして眼識の所了ならば、說きて所見と名け、此の所見を說きて見と名く。若し所見に於て見想の轉ずること有るに、他が問ひて、汝は是の事に於て曾て見しや不やといはんに、彼れ或は自の爲めに、或は他の爲めに、或は名利の爲めに、便ち此の想、此の忍、此の欲を覆ひて、答へて不見と言はば、是れを見を不見と言ふ非聖語と名くるなり。

四七 復、此の類有り、不見に於て見想を轉じつゝ而も不見と言ふは、非聖語を成ずるなり。問ふ、何が故に復、此を說くや。答ふ、希有の事を顯さんが爲めの故なり。說くが如し、「頗し不見に於て不見と言ふも亦、見に於て不見と言ふが如く、非聖語を成ずるものありや。答ふ、有り、謂く、一あるが如し、見ざる所の事に於て見想轉ずるに、他が問ひて、汝は是の事に於て曾て見しや不やと言はんに、彼れ或は自の爲めに、或は他の爲めに、或は名利の爲めに、便ち此の想、此の忍、此の欲

---

ariā) として、
(1) (adiṭṭhe diṭṭha-vāditā)
(2) (assute suta-vāditā)
(3) (amute muta-vāditā)
(4) (aviññāte aviññāta-vād=itā)
とあり。長阿含、第八、衆集經、(大正一、頁五〇、中)參照。

【四四】 不見を見と言ふこと等が非聖語なる所以——

【四五】 見に於て不見の想を轉じつゝ而も見と言ふこと等の四非聖語、——

【四六】 見を不見と言ふこと等の四非聖語。
此の四非聖語に就きては、(D. N. 33. 1. 11)に
(1) diṭṭhe adiṭṭha-vāditā (2) su=te assuta-vādtā (3)mute amutavāditā (4)viññāte avi=ññāta-vādiitā
とあり。

【四七】 不見に於て見想を轉じつゝ而も不見と言ふこと等の四非聖語。

を覆ひて、答へて不見と言はゞ、彼は爾の時に於て、見を不見と言ふが如く、非聖語を成ずるをもて、是も亦、名けて見を不見と言ふ非聖語を成ずなり」と。見を不見と言ふ非聖法を廣說するが如く、是の如く、聞を不聞と言ひ、覺を不覺と言ひ、知を不知と言ふの非聖語を廣說するも亦、爾るなり。

[四八]問ふ、是の如き所說によれば、便ち八非聖語、或は十六非聖語有るに、何が故に但、四とのみ說けるや。答ふ、所依の事には唯、四有るのみなるを以ての故なり。謂く、一切の非聖語は、皆、見と聞と覺と知との事に依りて起るが故に、唯、四とのみ說くなり。復次に、「略するが故に四と說くも、廣げれば則ち八或は十六有るなり。復次に、總の故に四と說くも、別なれば則ち八或は十六有るなり。總と別との如く、是の如く、不分別と分別、不遍言と遍言、無異言と有異言、頌說と漸說とも、應に知るべし亦、爾ることを。

[四九]問ふ、非聖語は何を以て自性と爲すや。答ふ、虛誑語を以て自性と爲すなり。問ふ、何が故に、此の語を非聖と名くるや。答ふ、不善を以ての故に非聖と名く。復次に、[五〇]非聖の相續中に於て、現前するが故に、非聖と名く。復次に、非聖の成就する所なるが故に非聖と名く。復次に、非聖の所說なるが故に非聖と名く。復次に、非聖は此に由りて非聖の名を得するが故に、非聖と名く。[五一]集異門足論に說く、「何が故に、非聖と名くるや。答ふ、此に由りて、能く不可愛・不可憙・不可樂・不悅意・不如意の果を引くが故に、非聖と名く。此は等流果を顯すなり。復次に、此に由りて能く不可愛・不可意・不可樂・不悅意・不如意の異熟を招くが故に、非聖と名く。此は異熟果を顯すなり」と。

[五二]此の非聖語は、或は不律儀の所攝なり、或は非律儀非不律儀の所攝にして、是の業道は唯、不善のみなり。

[五三]問ふ、頗し非聖語にして業道に非ず、是れ無記にして色界繫なるものありや。答ふ、有り、[五四]大

【四八】八又は十六非聖語を擧に四非聖語とのみ說く所以。八非聖語とは、不見を見と言ふこと等の四と、見を不見と言ふこと等の四とを合するもの、十六非聖語とは、右の兩者の類としての各〻四を前八に合するをいふ。

【四九】非聖語の自性及び名義

【五〇】非聖とは、不善をなすもの、を言ふか？

【五一】集異門足論の二種の四非聖語と及び、二種の四聖言とは、第十卷（大正、二六、頁四一〇、中以下）にあるも、玆に引用する如き文、見當らず。

【五二】非聖語と不律儀・非律儀非不律儀と並びに業道との關係。

【五三】非聖語と、非聖語に非ざる覆想の言と、羅漢等の倒事の言等との差別、

【五四】大梵王と馬勝苾芻の問答に關しては、婆沙第百二十九卷、（毘曇部十三、頁二七九以下）にあり。就きて見るべし。

梵王が馬勝苾芻に對する所説の語等の如し。彼は亦、非聖語と名くと雖も、然も此の中の非聖語の攝には非ず。此の中の所説の事は、或は顚倒なり。或は不顚倒なるも、而も想は必ず顚倒なるを以ての故に。

阿羅漢と獨覺等にも亦、不見を見と言ふ等の事有るも、而も亦、是れ非聖語の攝には非ず、覆想の説には[illegible]ざるを以ての故に。杭を見て人と想ひて、人を見ると説くが如し。又、[五五]尊者目蓮が、當に男を生ずべしと記せしに、而も後に女を生ぜしが如く、又、我れ無所有處定に住するに[五六]曼陀枳尼(Mandākinī)池中に多くの龍象有りて振鼻し哮吼せるを聞くと言ふが如き、應に知るべし、彼の説は皆妄語には非ざることを。事は倒なりと雖も、而も想には倒無きを以ての故に。唯、佛世尊にのみ是の如き錯謬の所説有ること無し。一切の無知の習を永拔するが故に。現前に三世の境を了達するが故に。

[五七]四聖語とは、謂く、不見を不見と言ふと、不聞を不聞と言ふと、不覺を不覺と言ふと、不知を不知に言ふとなり。

[五八]問ふ、何が故に、復、此の論を作すや。答ふ、契經の義を分別せんと欲するが爲めの故なり。[五九]契經に説くが如し、「四聖語は、不見を不見と言ふと――乃至廣説――」と。契經は是の説を作すと雖も、而も廣く分別せざるをもて、今、分別せんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[六〇]云何が不見を不見と言ふ聖語なりや。答ふ、不見の義は、前釋の如し。若し見ざる所に於て不見の想轉ずるもの有るに、他が問ひて、汝は是の事に於て曾て見しや不やと言ふに、彼は自らの爲めにせず、他の爲めにせず、名利の爲めにせずして、卽時に如實に、此の想、此の忍、此の欲を覆はずして、答へて見ずと言ふ。是を不見を不見と言ふ聖語と名くるなり。

[六一]復、此の類有り。見に於て不見の想を轉じて而して不見と言ふも、聖語を成ずるなり。

【五五】尊者目連の以下の語が非聖語に非ざるは不見に於て見の想、を轉じ而して見と言ふこと等の四聖語に屬するが爲めなるべし。

【五六】曼陀枳尼池とは、漫陀耆尼とも、曼陀吉尼等とも音譯さる。ヒマヴアンタ(Himavanta)の七湖中の一湖なり。因みに、大正本には、曼陀枳尼とあるも枳には、康熙字典を見るも「き」の音なし。故に今は、宮内省本に從ひて、曼陀枳尼と改めたり。

【五七】**四聖語の名目に就きて、**この四聖語に就きても、亦、以下四種類を說く、第一、不見を不見と言ふ聖語等の四、第二、見に於て不見の想を轉じ不見と言ふ聖語等の四、第三、見に於て見と言ふ聖語等の四、第四、不見に於て見の想を轉じて、見と言ふ聖語等の四なり。

【五八】論起の緣由――

【五九】契經は、(D. N. 33. 1. 11)に、

(一) aditthe adittha-vāditā

(二) assute assuta-vāditā

(三) amute amuta-vāditā

(四) aviññāte aviññāta-vāditā

とあり。

【六〇】**不見を不見と言ふこと**

問ふ、何が故に、復、此を說くや。答ふ、希有の事を顯さんが爲めの故なり。說くが如し、「頗し見に於て不見と言ふも、亦、不見に於て不見と言ふが如く、聖語を成ずること有りや。答ふ、有り。謂く、一有るが如し、所見の事に於て不見の想轉ずるに、他が問ひて、汝は是の事に於て曾て見しや不やと言ふに、彼は自らの爲めにせず、他の爲めにせず、名利の爲めにせずして、即時に如實に此の想、此の忍、此の欲を覆はずして、答へて見ずと言ふ。彼れ爾の時に於て、不見に於て不見と言ひて聖語を成ずるが如く、是も亦、名けて不見を不見と言ふ聖語と爲すなり」と。不見を不見と言ふ聖語を廣說するが如く、是の如く、不聞を不聞と言ひ、不覺を不覺と言ひ、不知を不知と言ふ聖語を廣說することも亦、爾るなり。

[六二]復、四聖語有り。謂く、見を見と言ふと、聞を聞と言ふと、覺を覺と言ふと、知を知と言ふとなり。

云何が見を見と言ふ聖語なりや。答ふ、見の義は前釋の如し。若し所見の事に於て見の想の轉ずること有るに、他が問ひて、汝は是の事に於て曾て見しや不やと言ふに、彼は自らの爲めにせず、他の爲めにせず、名利の爲めにずして、即時に如實に此の想、此の忍、此の欲を覆はずして、答へて我れ見ると言ふ。是を見を見と言ふ聖語と名くるなり。

[六三]復、此の類有り、不見に於て見の想を轉じて而して見と言ふも聖語を成ずることあり。

問ふ、何が故に復、此を說くや。答ふ、希有の事を顯さんが爲めの故なり。說くが如し、「頗し不見に於て見と言ふも亦、見に於て見と言ふが如く聖語を成ずること有りや。答ふ、有り。謂く、一あるが如し。見ざる所の事に於て、見の想が轉ずるに、他が問ふて、汝は曾て是の事に於て見しや不やと言ふに、彼は自らの爲めにせず、他の爲めにせず、名利の爲めにせずして、即時に如實に、此の想、此の忍、此の欲を覆はずして、答へて我れ見ると言ふ。彼れ爾の時に於て、見に於て見と

等が聖語なる所以、

[六一] 見に於て不見の想を轉じて不見と言ふこと等の四聖語。

[六二] 見を見と言ふこと等の四聖語。此の四聖語に就きては、(D.N. 33. 1. 11)に、
(一) diṭṭhe diṭṭha-vāditā
(二) sute suta-vāditā
(三) mute muta-vāditā
(四) viññāte viññāta-vāditā
とあり。

[六三] 不見に於て見の想を轉じて而も見と言ふ等の四聖語、

言ひて聖法を成ずるが如く、是れも亦、名けて見を見と言ふ聖語を成ずるなり」と。

見を見と言ふ聖語を廣說するが如く、是の如く、聞を聞といひ、覺を覺と言ひ、知を知と言ふ聖語を廣說するも、亦、爾り。

六四 問ふ、是の如き所說によれば、便ち八聖語或は十六聖語有るに、何が故に但、四とのみ說けるや。答ふ、所依の事に唯、四のみ有るを以ての故なり。謂く、一切の聖語は、皆、見と聞と覺と知との事に依りて起るが故に、唯、四のみを說くなり。復次に、略の故に四と說くも、廣げれば則ち八或は十六有るなり。復次に、總の故に四と說くも、別なれば則ち八或は十六と有るなり。總と別との如く、是の如く、不分別と分別、不遍言と遍言、無異言と有異言、頓說と漸說とも、應に知るべし、亦、爾ることを。

六五 問ふ、聖語は何を以て自性と爲すや。答ふ、實語を自性と爲す。

問ふ、何が故に此の語を聖と名くるや。答ふ、善を以ての故に聖と名く。復次に、聖者の相續中に現前するが故に、聖と名く。復次に、聖者の成就する所のものなるが故に聖と名く。復次に、聖者の所說なるが故に聖と名く。復次に、聖者は此に依りて聖の名を得するが故に、聖と名く。六六 集異門に說く、「何が故に聖と名くるや。答ふ、此に由りて能く可愛・可意・可樂・悅意・如意の果を引くが故に、聖と名く、此は等流果を顯すなり。復次に、此に由りて能く可愛・可意・可樂・悅意・如意の異熟を招くが故に、聖と名く。此は異熟果を顯すなり」と。

六七 此の聖語は、或は律儀の所攝なり、或は非律儀非不律儀の所攝にして、是の業道は、唯、是れ善のみなり。

六八 四の非聖語は、唯、欲界繫のみにして、未至定に依りて滅す。

四聖語は欲界と初靜慮との繫なり。欲界繫なるは未至定に依りて滅し、初靜慮繫なるは、初靜慮・

【六四】八又は十六聖語を單に四聖語とのみ說ける所以。

【六五】聖語の自性に就きて、

【六六】現存の集異門足論には、四聖語を說く文は、第十巻にあるも、以下の引用文の如きは、其處に見出さず。

【六七】聖語と律儀・非律儀非不律儀と業道との關係。

【六八】四非聖語と四聖語との各自は何の定に依りて滅するやに就きて、

未至定・慮靜中間・第二慮靜の近分に依りて滅す。

然も此の中には、四の非聖語の近對治として四聖語を説くに依るが故に、但、未至に依りて滅すとのみ言へるなり。

第三十三節　特に、四生は何の定に依りて滅するやに就きて[六九]

四生中、胎と卵と濕との生は、唯、欲界繫のみなるが故に、未至定に依りて滅す。化生は七或は未至に依りて滅す。謂く、化生は九地の繫なり。欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、初慮靜繫なるは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至非想非非想處繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

[七〇]然も此の中の所説の定につきては、若し無漏定に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、「未至の言は、未至定と靜慮中間とを顯す」と。若し有漏と無漏との定に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の七近分とを顯す」と。

[七一]又、此の中、所説の滅につきては、若し種類の滅に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の七近分とを攝し、未至定中に於ては有漏のと無漏のとを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至、非想非非想處繫の化生を滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、未至の言は唯、未至定と靜慮中間とのみを[七二]攝し、未至定中に於ては、唯、無漏のもののみを攝す。此に依りて能く非想非非想處繫の化生を滅するが故に」と。

此に由るが故に、化生は七或は未至に依りて滅すと説けるなり。

四生につきては、[七三]大種蘊に廣説するが如し。

[七四]第三十四節　特に、四種入胎論と、定に依る彼等の滅に就きて

[七五]四種の入胎とは、有るは不正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものあり、是は第一入

【六九】本節は、第三十一節に對する各論として、四生各自が、何の定に依りて滅するやを論ずるにあり。

【七〇】本論所説中の定の有漏無漏に就きて、——

【七一】本論所説中の滅の二義に就きて、——

【七二】大正本に攝は説とあるも三本宮本に從つて、攝と訂正せり。

【七三】茲に大種蘊とあるも、大種蘊第五中、大種納息第一の婆沙の註譯中に、四生と四食との關係を説く段あるも詳しからず。最も詳細に四生に就きて闡説するは、寧ろ業蘊第四中、害生納息第三、即ち婆沙第百二十卷第十節（毘曇部十三、頁九一）以下なり就いて見るべし。

【七四】本節は、第三十一節に對する各論として、四種入胎一般論を詳論して、彼の各自が何の定に依りて滅するやを論究する段なり、

【七五】四種入胎の名目、

胎なり。有るは正知して母胎に入り、不正知にして住し、不正知にして出づるものあり、是は第二入胎なり。有るは正知して母胎に入り、亦、正知して住し、不正知にして出づるものあり。是は第三入胎なり。有るは正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものあり、是は第四入胎なり。

[七六]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、契經の義を分別せんと欲するが爲めの故なり。[七七]契經に說くが如し。「四種の母胎に入るもの有り、乃至廣說」と。契經は是の說を作すと雖も、而も廣く分別せず。契經は是れ此の論の所依の根本なるをもて、彼に說かざるものは、今、之を說かんと欲するが故に、斯の論を作すなり。

[七八]云何が不正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものなりや。答ふ、此に二種有り。謂く、薄福者が入胎する時に於ては、顚倒の想と顚倒の勝解とを起し、天は陰慘にして寒切風雨し、多人鬪亂し大衆聚集すると見、便ち念ず、「我れは今且く、是の如き草棘叢中に入り、或は稠林間の草窟葉窟に入り、或は是の如き牆間の樹下に[七九]往いて、以て、風雨及び諸の喧亂を避けん」と。念じ已りて卽ち身は其の中に往くと見る。彼が胎に住する時も、亦、是の如き倒想の勝解を起す。謂く、我は今、是の如き叢林の草窟・葉窟・牆間の樹下に住して、須臾止息せりと。彼が胎を出づる時も亦、是の如き倒想の勝解有り。謂く、我は今、是の如き叢林の草窟、葉窟を出づ、或は牆間の樹下を捨して去らんと。

若し福德者が胎に入る時に於ては、亦、顚倒の想と顚倒の勝解とを起し、天は陰慘にして寒切風雨し、多人鬧亂し大衆聚集すと見て、便ち念ず、「我は應に此の園苑或は林間に入り、或は殿堂に昇り、或は樓閣に登り、以て風雨及び諸の鬧亂を避けん」と。念じ已り卽ち身は園中に入り、乃至閣に登ると見る。胎に住する時に於ても、亦、是の如き倒想の勝解を起す。謂く、我は今、是の如き園苑、花林、堂閣に住して跏趺して坐すと。胎を出づる時に於ても、亦、是の如き倒想の勝解あり。

【七六】論起の緣由、

【七七】契經とは、D. N. 28, Sampasādaniya suttanta に、四種入胎 (catasso gabbhāvakkantiyo)として、

(一) ekacco asampajāno c'evamātu kucchiṃ okkamati, asampajāno mātu Kucchismiṃ ṭhāti, asampajānomātu kucchismā nikkhamati.（或る人は、全く不正知にて、母胎に入り、不正知にて母胎に於て住し、不正知にて母胎より出づ）

(二) ekacco sampajāno pi kho mātu kucchim okkamati, asampajāno mātu kucchismiṃ ṭhāti, asampajāno mātu kucchismā nikkhamati（或人は亦、正知にて、實に母胎に入り、不正知にて母胎に於て住し、不正知にて、母胎より出づ）

(三) ekacco sampajāno mātu kucchiṃ okkamati, sampajāno mātu kucchismiṃ ṭhāti, asampajāno mātu kucchismā nikkhamati.（或る人は、正知にて、母胎に入り、正知にて母胎に於て住し、不正知にて、母胎より出づ）

(四) ekacco sampajāno c'eva mātu-kucchiṃ okkamati, sampajāno mātu kucchismiṃ

謂く、我は今、是の如き園苑を出で、乃至、樓閣より下らんと。是を、第一の、不正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものと名く。

八〇 云何が正知にして母胎に入り、不正知にして住し、不正知にして出づるものとなりや。答ふ、多福者あり、母胎に入る時、顚倒の想、顚倒の勝解を起さずして、能く自ら我は今、母胎に入ると了知するも、彼は胎に住し、胎より出づるとき便ち不正知なること、前の廣說の如し。是を第二の、正知にして母胎に入るも、不正知にして住し、不正知にして出づるものと名く。

八一 云何が正知にして母胎に入り亦、正知にして住し、不正知にして出づるものなりや。答ふ、多福者有り、母胎に入り、母胎に住する時に於ては、皆、顚倒の想、顚倒の勝解を起さずして、能く自ら我は今、母胎に入り、我は今、母胎に住すと了知するも、然も出づる時に於ては、便ち不正知なること、廣くは前說の如し。是を、第三の正知にして母胎に入り、亦、正知にして住し、不正知にして出づるものと名く。

八二 云何が正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものなりや。答ふ、多福者有り。母胎に入る時と母胎に住する時と、母胎を出づる時とに、皆、顚倒の想と顚倒の勝解とを起さずして、能く自ら我は今、母胎に入り、我は今母胎に住し、我は今母胎より出づと了知す。是を第四の正知にして母胎に入り、住し出づるも亦、爾るものと名くるなり。

八三 問ふ、何の入胎は、是れ誰なりや。答ふ、有るが說く、第四の入胎は菩薩をいひ、第三の入胎は獨覺をいひ、第二の入胎は輪王をいひ、第一の入胎は餘の有情をいふ」と。有るが說く、「第四の入胎は菩薩をいひ、第三の入胎は、獨覺をいひ、第二の入胎は波羅蜜多(Pāramitā)の聲聞をいひ、第一の入胎は餘の有情をいふ」と。有るが說く、「第四の入胎は菩薩をいひ、第三の入胎は獨覺をいひ、第二の入胎は預流と一來とをいひ、第一の入胎は餘の有情をいふ」と。有るが說く、『諸の有情中の

---

tthati, sampajāno mātu kucchismā nikkhamati（或る人は、正知にて母胎に入り、正知にて母胎に於て住し、正知にて、母胎より出づ）とあり。長阿含、第十二卷、自歡喜經、（大正一、頁七七、上）參照。

【七八】**不正知にて母胎に入り、住し出づるものに就きて。**これ第一種入胎にして、これには薄福者の場合と、福德者の場合との二種あり。

【七九】往は大正本に住とあるも、三本宮本は往とあり、今は後者に從ひて訂正せり。

【八〇】**正知にて、母胎に入るも、不正知にて住し、出づるもの、**これ第二種入胎なり。

【八一】**正知にて、母胎に入り且つ住するも、不正知にて出づるもの**　是れ第三の入胎なり。

【八二】**正知にて、母胎に入り、住し、出づるもの、**是れ第四の入胎なり。

【八三】**四種入胎の人分別、特に菩薩の入胎に就きて、**以下六種の異說を擧ぐ、而も此を大別すれば、二種となる。其の中、第一種は、四種入胎中の、第四種のを菩薩及び、菩薩の如き人の入胎とし、第

(一)有るは妙智を求め、業も亦、清淨なるものあり、(二)有るは妙智を求むるも、而も業の不淨のものあり、(三)有るは業は淸淨なるも、而も智を求めざるものあり、(四)有るは智をも求めず、業も亦、不淨なるものあり。初めの有情は、最後の入胎を作し、第二の有情は第三の入胎を作し、第三の有情は第二の入胎を作し、最後の有情は最初の入胎を作すなり。謂く、初めの有情が母胎に入る時は、母腹は安靜にして諸の嬈觸を離れ、母胎に住する時は、胎藏寛博にして清淨無惱なり、母胎を出づる時は、産門開舒して迫迮に遭はず。故に入と住と出とに皆、失念せざるなり。第二の有情は胎に入る時と及び胎に住する時に於ては、前の如く安穩にして失念せざるも、但、出づる時、産門狹小にして迫迮を被むるが故に、卽便ち失念するなり。第三の有情は、胎に入る時に於ては、亦、嬈觸無きこと前の如くして安穩なるをもて失念せざるも、然も胎に住する時には、胎藏窄隘にして、雜穢に惱まされ、及び胎を出づる時には、産門狹小にして、極めて迫迮さるるが故に、住と出とに於ては、俱に失念せしめらる。第四の有情は、母胎に入る時、母腹が喧動し、驚恐不安なり。及び住と出との時も、前の如く逼惱するが故に、三時に於て、皆、失念せしめらるゝなり」と。復次に、此の四種の入胎は皆、菩薩をいふ。中に於て、有るが說く、「第四の入胎は、是れ第三[八四]阿僧企耶の菩薩なり。第三の入胎は、是れ第二阿僧企耶の菩薩なり、第二の入胎は是れ初阿僧企耶の菩薩なり、第一の入胎は、是れ此の前の菩薩なり」と。有るが說く、「第四の入胎は是れ最後身の菩薩にして、覩史多天(Tuṣitadeva)より歿して淨飯王の宮に下生せし時をいひ、第三の入胎は是れ一生所繫の菩薩にして、當に贍部洲より歿して覩史多天に生ぜし時をいひ、第二の入胎は是れ次いで此の前生の菩薩にして、所從より歿して贍部洲の迦葉波佛の法中に生じて梵行を修せし時をいひ、第一の入胎は、此の前の菩薩をいふ」と。評して曰く、應に是の如き說を作すべからず。菩薩は九十一劫より來(このかた)、常に宿命を憶するに、死有・中有・生有・本有に於て、常に倒想無く、失念せざるを以て

三のを獨覺及び、獨覺の如き人の入胎とし、第二のを聲聞又は輪王の如き人々の入胎とし、第一のを凡夫、又は前三種の入胎者以外の有情等の入胎となす說にして、初めの四說は是れなり。第二種は、これ凡て、菩薩の入胎を指すとするものにして、最後の二說は之なり。此の中、婆沙評家は、菩薩には九十一劫この來、失念無く、顚倒の想も起すこと無きが故に、前の四說の如きを善しとすと評取せり。

【八四】阿僧企耶(Asaṃkhya)とは、無數と譯ぜらる。數位をいへば、一に零を五十一附したるに相當す。

の故に。此の因緣に由るをもて、前說を善と爲すなり」と。

八五 問ふ、諸の結生位には、必ず染心を起す。一切の染心は皆、不正知と相應するに、云何が正知にして母胎に入ると說くことを得んや。答ふ、所說の正知とは顚倒の想と、顚倒の勝義無きとをいひ、要ずしも、無明と相應せざるが故に、名けて正知と爲すには非ず。然も菩薩は結生の時に於て、亦、自體愛と父母愛とを起すが故に、亦、染心有るなり。八六 問ふ、若し爾らば、餘の有情と何の異り有りや。答ふ、餘の有情が將に入胎せんとする時には、父を父に非ずと想ひ、母を母に非ずと想ふが如く、此の如きに由るが故に、男なれば則ち父に於て恚を生じ、母に於て愛を生じ、顚倒の想を起して、母と會すと謂ひ、女なれば則ち母に於て恚を生じ、父に於て愛を生じ、顚倒の想を起して、父と會すと謂ふ。此の倒想に由りて便ち結生するも、菩薩は爾らず。將に入胎せんとする時、父に於て父と想ひ、母に於て母と想ひ、我は彼等に依るが故に、後蘊を增長し、當に贍部洲中に於て、尊勝の報を受け、此に依りて阿耨多羅三藐三菩提(Anuttarasamyaksaṃbodhi)を證得し、諸の有情の與めに饒益の事を作すべしと、是の念を作し已りて、便ち父母に於て、等しく親愛を生じ、此に由りて結生す。是の故に、正知とは、倒想無きをいひ、要ずしも染無きには非ず。

八七 此の四種の入胎は唯、欲界繫のみなるをもて、是の故に但、未至定に依りて滅するなり。

八八 第三十五節　四識住各自は何の定に依りて滅するやに就きて

四識住中、八九 後の三識住は、七或は未至に依りて滅す。謂く、後の三識住は九地の繫なり。欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、初靜慮繫なるは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至、非想非非想處繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

九〇 然も此の中、所說の定につきては、若し無漏定に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は未至定と靜慮中間とを顯す」と。若し有漏と無漏との定に依りて說くとする說者なれば、彼

【八五】 入胎時の正知と結生時の染心との關係、

【八六】 特に菩薩と餘の有情との結生時の染心の相違に就きて、

【八七】 四種入胎の定に依る滅に就きて、

【八八】 本節は、第三十一節に對する各論として、四識住の一一が何の定に依りて滅するやを明す段なり。

【八九】 後三識住は何の定に依りて、滅するやに就きて、四識色住とは、一、色隨識住、二、受隨識住、三、想隨識住、四、行隨識住なり。尙詳しくは婆沙百三十七卷(毘曇部十四、頁五二以下)及び、倶舍第八卷を參照せよ。

【九〇】 本文所說の定の有漏無漏に就きて、――

は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の七近分とを顯す」と。

[九一]又、此の中、所說の滅につきては、若し種類に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間を上の七近分とを攝し、未至定中に於て、有漏と無漏とのを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至非想非非想處繫の後三識住を滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて說くとするものなれば、彼は[九二]說く「未至の言は、未至定と靜慮中間とを攝し、未至定中に於ては、唯、無漏のみを攝す。此に依りて能く非想非非想處繫の後三識住を滅するが故に」と。

此に由るが故に、七或は未至に依りて滅すと言ふなり。

[九三]色の識住は、四或は未至に依りて滅す。謂く、色識住は五地の繫なり。欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、乃至第四靜慮繫なるは、四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とに依りて滅するなり。

然も、此の中、所說の定につきては、有るが說く、「無漏定に依りて說く」と。有るが說く、「有漏と無漏との定に依りて說く」と。其の所應に隨ふこと、前の分別の如し。

又、此の中、所說の滅につきては、若し種類の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の四近分とを攝し、未至定中に於ては、有漏と無漏とのを攝す。此に依りて、能く欲界繫乃至第四靜慮繫の色識住を滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と、空無邊處の近分とを攝す。此に依りて能く第四靜慮繫の色識住を滅するが故に」と。

此に由るが故に、四或は未至に依りて滅すと言ふ。

四識住につきて廣說せば、[九四]大種蘊の如し。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百七十一

【九一】本文所說の滅の二義に就きて、——

【九二】說の字は、大正本には無きも、三本宮本にはあるを以て、今は、後者を撰べり。

【九三】四識住中の色識住は何の定に依りて滅するやに就きて、

【九四】大種蘊第五中、具見納息、婆沙第百三十七卷第十四節以下を指す。

卷の第百七十二（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之七）

第三十六節[一]　五蘊・五取蘊・五趣・五妙欲・五學處は、總じて何の定に依りて滅するやに就きて

【本論】　五蘊と五取蘊と五趣と五妙欲と五學處とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、色蘊と色取蘊とは、四或は未至に依り、四蘊と四取蘊と天趣とは、七或は未至に依り、餘の四趣と五妙欲と五學處とは未至に依りて滅す。

第三十七節[二]　特に、五蘊と五取蘊及び定に依る彼等個個の滅に就きて

此の中の、五蘊と五取蘊とにつきて廣說すること[三]十門納息の如し。

[四]然も色蘊は五地の繫及び不繫にして、色取蘊は唯、五地のみの繫なり。此は倶に四或は未至に依りて滅す。謂く、欲界繫のものは未至定に依りて滅し、乃至第四靜慮繫のものは、四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とに依りて滅す。

[五]然も此の中の所說の定につきては、有るが如く、「無漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と。こは前の分別の如し。

所說の滅につきては、若し此は種類の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の四近分とを攝し、未至定中に於ては、有漏と無漏とのを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至第四靜慮繫の色蘊と色取蘊とを滅するが故に」と。若し此は究竟の滅に依りて說くとする說者　れば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とを攝し、未至定

【一】本節は、發智頌文「滅依定」八問中の第四として、五蘊等が何の定に依りて滅するやを總括して明示する段なり。

【二】本節は、前節に對する各論の一として、特に、五蘊と五取蘊との一一が何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【三】十門納息の中、五蘊に就きては、婆沙第七十四卷、（毘曇部十、頁二二六以下）に詳說し、次に五取蘊に就きては、婆沙第七十五卷（毘曇部十、頁二二七以下）に詳論せり。

【四】色蘊と色取蘊とは何の定に依りて滅するやに就きて。

【五】本文所說の定と滅との二異釋に就きては、前の如し、以下も亦、之に準ず。

中に於ては、唯、無漏のをのみ攝す。此に依りて能く第四靜慮の色蘊と色取蘊とを滅するが故に」と。

此に由るが故に、四或は未至に依りて滅すと說くなり。

[6]四蘊は九地の繫及び不繫にして、四取蘊は九地の繫なり。此は俱に七或は未至に依りて滅す。謂く、欲界繫のは未至定に依りて滅し、乃至非想非非想處繫のは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中、所說の定につきては、有るが說く、「無漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と。これも亦、前の分別の如し。

所說の滅につきては、若し此は種類の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の七近分とを攝し、未至定中に於ては有漏と無漏とのを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至非想非非想處繫の四蘊と四取蘊とを滅するが故に」と。若し此は究竟の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間とを攝し、未至定中に於ては、唯、無漏のをのみ攝す。此に依りて能く非想非非想處繫の四蘊と四取蘊とを滅するが故に」と。

此に由るが故に、七或は未至に依りて滅すと言ふなり。

第三十八節　五趣の總論[7]

[8]五趣とは、捺落迦と傍生と鬼と人と天との趣をいふ。

[9]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、契經の義を分別せんと欲するが爲めの故なり。[10]契經に說くが如し、「五趣とは地獄趣乃至天趣をいふ」と。契經は是の說を作すと雖も、而も廣く分別せず。契經は是れ此の論の所依の根本なるをもて、彼が說かざる所のものを、今應に分別すべきが故に、斯の論を作すなり。

【六】無色の四蘊及び四取蘊は何の定に依りて滅するやに就きて。

【七】本節以下、第四十四節迄は、第三十六節に對する各論にして、先づ五趣論一般の自性名義等を論究する段なり。

【八】五趣に就きて。
五趣(Pañca gatiya)又は五道とは、
(一)捺落迦(naraka gati)は那落迦趣とも音譯し、地獄趣と意譯す。
(二)畜生趣(tiryañc'a gati)
(三)餓鬼趣(preta-gati)
(四)人趣(manusya gati)
(五)天趣(deva gati)
なり。尙、此の外に阿修羅(asura)を加えて第六趣又は第六道となすこともあり。

【九】論起の所以。

【一〇】契經とは、佛說大集法門經卷下(大正一、頁二二三一、中を參照せよ。

[一一]問ふ、趣の體性は是れ何ぞや、無記と爲んや、三種と爲んや。若し無記なれば、[一二]品類足論を當に云何が通ずべきや。彼に說くが如し、「五趣は一切の隨眠に隨增さる」と。[一三]若し三種なれば、云何が諸趣は相雜亂せざるや。謂く、地獄趣は、乃至他化自在天の業と煩惱とを成就し、乃至、他化自在天は、乃至地獄趣の業と煩惱とを成就するが故に。答ふ、應に是の說を作すべし、趣の體は唯、是れ無覆無記なりと。問ふ、若し爾らば、則ち諸趣は相雜亂せざるも、然も品類足の說を當に云何が通ずべきや。答ふ、彼の文は、應に、四趣は是れ欲界の遍行と及び修所斷との隨眠が隨增し、天趣は是れ三界の遍行と及び修所斷との隨眠が隨增すと說くべし。而も此の說を作さざるは、當に知るべし、此は誦者の錯誤なりと。有るが說く、「彼の品類足論は、通じて五趣の眷屬を說くなり。謂く、結生位の五部の煩惱の相應の心なり。彼の心は是れ一切の隨眠に隨增さるゝが故に」と。有るが說く、「趣の體は善と染と無記とに通ず」と。問ふ、若し爾らば、則ち品類足の說は善通するも、云何が諸趣は相雜亂せざるや。答ふ、若し成就を以てすれば則ち雜亂有るも、若し現行を以てすれば、則ち雜亂無きなり。謂く、地獄趣は、地獄趣の業と煩惱とに於ては成就もし亦、現行もするも、乃至他化自在天の業と煩惱とに於ては成就はするも現行せず。乃至他化自在天は、他化自在天の業と煩惱とに於ては成就もし亦、現行もするも、乃至地獄趣の業と煩惱とに於ては、成就するも現行せざるを以て、是の故に、諸趣に雜亂の過無きなり」と。

評して曰く、應に趣の體は唯、是れ無覆無記なりと說くべし。云何が然りと知るやといふに、契經中の如し。「尊者舍利子は是の言を作す、若し地獄の諸漏が現在前する時、造作し增長せば、地獄の受業に順じ、彼の[一四]身・語・意は曲・穢・濁するが故に、[一五]㮈落迦の中に於て、五蘊の異熟を受く。異熟が起り已れば㮈落迦と名く。此の五蘊を除きて、彼の㮈落迦は都て不可得なり。乃至天趣につきて說くも亦、是の如し」と。此に由るが故に、趣の體は唯、是れ無覆無記なることを知るなり。

【一一】趣の體性は無覆無記なりや三性に通ずるや。以下、趣の體性に就きて、無覆無記なりとする說と、五趣の體は、善・惡・無記の三性に通ずとする說との二說ある中、婆沙評家は、前說を正說とせり。

【一二】現存の品類足論第九卷(大正二六、頁七三〇上)には、「地獄趣十八界、十二處、五蘊ノ攝、七智知。除二類・滅・道智一。六識識。欲界一切隨眠隨增。傍生趣・鬼趣・人趣亦爾。天趣十八界、十二處、五蘊攝、八智知。除二滅道智一。六識識。三界一切隨眠隨增」とありて、次下に婆沙の有說が是正すべしとする文と同一文となり居れり。而も、其の次に引用せらるゝ品類足論の文に就きては、婆沙の有說が、再び是正すべしと說く文と一致せず、史料論上注意すべき點なりとす。

【一三】趣が善なりと言ふ時には、趣自體が一切の善の業等をも含み、惡といふときは、一切の惡業等をも含むを以て、若し、五趣の趣の體が、皆、善、惡、無記の三種に通ずとせば、惡趣も、善趣の善業と煩

[16]問ふ、已に趣の體は唯、是れ無覆無記なることを知れり。中に於て、但、是れ異熟のみなりとせんや、但、是れ長養にも通ずとせんや。若し但、是れ異熟のみなりとせば、[17]品類足の説を當に云何んが通ずべきや。彼に説くが如し、「五趣は五蘊・十二處・十八界に攝す」と。聲處と聲界とは異熟に非ざるが故に。若し長養にも通ずとせば、則ち趣の體が雜亂す。人趣の中にても、亦、能く色界の長養の諸根と大種とを引起するを以ての故に。答ふ、應に是の説を作すべし、諸趣の體性は唯、是れ異熟のみなりと。問ふ、品類足の説を當に云何んが通ずべきや。答ふ、彼の文は應に説くべし、五趣は五蘊と十一處と十七界との少分を攝す」と。而も是の説を作さざるは、當に知るべし是れ誦者の錯謬なることを。有るが説く、「彼の論は通じて、五趣の眷屬と、五趣を感ずる業と、及び能防護とを説き、唯、趣のみを説くに非ざるをもて、是の故に過無きなり。然も煩惱に由りて界に差別有り、異熟の蘊に由りて趣に差別有るをもて、是の故に、趣の體は唯、是れ異熟のみなり」と。

[18]問ふ、何が故に趣と名け、趣とは是れ何の義なりや。答ふ、所往の義は是れ趣の義なり。是れ諸の有情の應に往くべき所、應に生ずべき所にして、結生する處なるが故に、趣と名くるなり。

第三十九節　[19]㮈落迦趣に就きて

已に總じて諸趣を説けり、彼の一一の異相を今當に説くべし。

[20]云何が㮈落迦趣なりや。答ふ、諸の㮈落迦の一類の伴侶の衆同分と[21]依得と事得と處得と、及び已生の㮈落迦の無覆無記の色・受・想・行・識と、是を㮈落迦趣と名く。此の中、一類の伴侶の衆同分といふ言は、彼の衆同分を顯し、依得と事得と處得との言は、彼の界と蘊と處との得を顯す。及び已生の㮈落迦の無覆無記の色・受・想・行・識の言は、彼の自體は是れ異熟にして、餘に非ざることを顯す。

惱とを成就すると言ふべく、善趣も亦、惡趣の惡業と煩惱とを成就することゝなりて、趣の區別無きに至らんとなり。

【一四】 身・語・意の曲、穢、濁とは(一)身曲・身穢・身濁と、(二)語曲・語穢・語濁と、(三)意曲・意穢・意濁とにして、曲とは諂をいひ、穢とは瞋をいひ、濁とは、貪をいふなり。詳しくは、婆沙第百十七卷、(毘曇部十三、頁一八)を參照せよ。

【一五】 㮈は大正本に捺とあるも、後は皆㮈とあるを以て、特に㮈と改めて下に順ぜり。

【一六】 **趣の體性の異熟長養分別。**

【一七】 品類足論の文に就きては本卷註十二を見よ。

【一八】 **趣の名と義とに就きて。**

【一九】 本節は、特に五趣中の一たる地獄の一般論を明にする段なり。

【二〇】 **㮈落迦趣の定義。**

【二一】 依得等に就きては、品類足論第一卷に據るに、依得とは所依處を得するを言ひ、事得とは其等の諸の蘊を得するをいひ、處得とは、同じく内の六處、外の六處等を得するをいふ。

三*問ふ、何が故に、彼の趣を捺落迦(naraka)と名くるや。答ふ、是れ捺落迦の所趣の處なるが故に、捺落迦を以て所有と爲すが故に、捺落迦と名け、彼の諸の有情に悦び無く、愛無く、味無く、利無く、喜樂無きが故に、捺落迦と名くるなり。或は說者有り「彼れは先時、增上の暴惡なる身・語・意の惡行を造作し增長するに由り、彼に往き彼に生じ、彼の生をして相續せしむるが故に、捺落迦と名くるなり」と。有るが說く、「捺落迦とは、是れ假名・假想・名施設・想施設なり。一切の名と想とは欲に隨つて立て、必ずしも義の如くにはあらざればなり」と。有るが說く、「彼の趣は、卑下なるを以ての故に、捺落迦と名く、謂く、五趣の中、卑下なること彼の趣の如き者有ること無ければなり」と。有るが說く、「彼の趣は顚墜するを以ての故に、捺落迦と名く。有る頌の言の如し。

地獄に顚墜するときは　足は上にして頭は下なり。
諸仙の寂を樂しみ、　苦行を修するを毀謗するに由る。

と」と。有るが說く、「三三捺落は人に名け、迦は名けて惡と爲す。惡人は彼處に生ずるが故に捺落迦と名くるなり」と。有るが說く、「落迦は可樂と名け、捺は是れ不の義なり。彼の處は樂しむ可からざるが故に、捺落迦と名くるなり」と。有るが說く、「落迦を喜樂と名け、捺は是れ壞の義なり。彼の處は喜樂を壞するが故に、捺落迦と名くるなり」と。有るが說く、「落迦」を歸趣と名け、捺は是れ無の義なり。彼の處の有情は重苦に逼られて歸趣無きが故に捺落迦と名くるなり」と。有るが說く、「落迦を救濟と名け、捺は是れ無の義なり、彼の處の有情は衆苦に逼めらるるも救濟者無きが故に、捺落迦と名くるなり」と。

二四問ふ、何が故に、彼の趣の最下にして最大なるものを無間と名くるや。答ふ、彼は是れ假名・假想・名施設・想施設なり。一切の名と想とは、欲に隨つて而して立つるも、必ずしも義の如くにはあらず。彼の處を或は百釘釘身とも名け、或は六苦觸處とも名け、或は自受苦受とも名け、或は無間

【三三】 捺落迦と名くる所以。

* 以下、捺落迦(naraka)と言ふ語に關する言語學的分折に依る五種の說明に關しては、其の原語、必ずしも明かならざるも、一應妥當と思はるゝ、ものを揭げ置くべし。

(1) 捺落は人と名け、迦は名けて惡と爲す……とは、捺落(nara)＋迦(ka)なるべし。ka, kā-, kad-, ku-等は、「惡」「甚」等の prefix として屢ゝ用ひらるゝが故に。

(2) 落迦を可樂と名け、捺は是れ不の義なり…は、捺(na不)＋落迦(rakta 可樂の意)なるべし。

(3) 落迦を喜樂と名け、捺は是れ壞の義なりとは、捺(naś-)＋落迦(rakta 又は ra-kti ?)なるべし。

(4) 落迦を歸趣と名け、捺は是れ無の義なりとは、(na)＋r or √rch にて na＋rcchati に屬する語なるべし、Nirukta I. 11. に naraka の語源を說明して、nyaraka となり、更に之を nicairgamana とせり。nyaraka なる語は、普通見當あたらざれど、ni＋araka (√r)を豫想するを得るが故に、茲に於ても、araka の如き形を考へたるか。尙、漢譯に、泥梨、又は泥梨耶、泥羅夜等と譯ずる所に從へば nia

とも名く。亦、有間なりと雖も、無間と假設するなり。有るが說く、「彼の處にては恒に苦受を受けて、喜樂の間無きが故に、無間と名くるなり」と。問ふ、餘の地獄中にも、豈に歌舞・飮食有りて喜樂の異熟を受けんや。故に無間と名けざらんや。答ふ、餘の地獄中にも、異熟の喜樂なるもの無しと雖も、而も等流の喜樂有るなり。[二四]施設論に說くが如し、「等活地獄中に、時有りて涼風に吹かれて血肉を還つて生ずるあり、時有りて聲を出して等活と唱言するに、彼の諸の有情は欻然として還た活くるなり」と。唯、是の如き血肉の生ずる時と、及び還た活くる時とに於て、暫く喜樂を生ずるも、苦受を間つるが故に、無間とは名けざるなりと。有るが說く、「衆多の有情の惡業を造作するもの相續いて彼に生じ彼の處所を滿すが故に、無間と名くるなり」と。評して曰く、應に是の說を作すべからず、餘の地獄に生ずるものは多く、無間に生ずる者は少ければなり。所以は何ん。上品の身・語・意の惡業を造作し增長して、乃ち彼處に生ずるを以てなり。有情の上品の惡業を造作し增長して彼處に生ずる者は少く、中・下品の惡業を造作し增長して餘の地獄に生ずるものは多きこと、恰も上品の善業を造作し增長して有頂に生ずる者は[二五]少く、中・下品の善業を造作し增長して餘處に生ずる者は多きが如くなるが故に。應に是の說を作すべし、增上の不善業を造作し增長することに由りて、彼に生ずるとき所得の身形廣大にして、一一の有情は多の處所に據るも、中に間隙無きが故に、無間と名くるなり。

[二六]問ふ、地獄は何處に在りや。答ふ、多分は此の贍部洲の下に在り。

[二七]云何が安立するや。答ふ、有るが說く、「此の洲より下・四萬踰繕那にして無間地獄の底に至る。無間地獄の縱・廣さ・高下は各〻二萬踰繕那にして、次上のは、一萬九千踰繕那なり。中に餘の七地獄を安立す。謂く、次上に極熱地獄有り、次上に熱地獄有り、次上に大嘷叫地獄有り、次上に嘷叫地獄有り、次上に衆合地獄有り、次上に黑繩地獄有り、次上に等活地獄有り、此の七地獄の一一の

十ヘ｜より nir+aya を考へたるに非ずやとも思はる。(5) 落迦を救濟と名け、捺は是れ無の義なりとは、捺(na)+(落迦 rakṣā 救濟)なるべし。

【二三】捺落迦の中最下にして最大なるを無間地獄と名くる所以。　以下、無間地獄と名くる所以に就きて、諸の異說あるも、婆沙評家の說は、增上の不善業を造作し增長することに由りて、彼の地獄に生ずる有情所得の身形は廣大なるをもて、一一の有情が多くの處所に依據するも、而も、處所狹隘にして其の間、間隙なきが故に「無間地獄と名く」と言ふべしとなり。

【二四】　現存の漢譯施設論中には、見當らず、此の中の等活地獄(saṃjīva)は、又舊譯にては更活とも飜ぜらる。

【二五】　大正本には少は小とあるも三本・宮本に據りて、少と改めたり。

【二六】地獄の存在する處所に就きて。

【二七】諸の地獄の位置と種類とに就きて。　以下、八熱地獄の位置に就きて三種の異說あり。因みに、倶舍論に由るに、地獄に二種あり、第一は、八熱

縱と廣さとは萬踰繕那なり。次上に餘り一千踰繕那有り。五百踰繕那は是れ白墡、五百踰繕那は是れ泥なり。

有るが說く、「此の洲より下、四萬踰繕那にして無間地獄あり。此の無間地獄の縱と廣さと高下とは各々二萬踰繕那にして、次上のは三萬五千踰繕那有りて、餘の七地獄を安立す。一一の縱と廣さと高下とは、各々五千踰繕那なり。次上に餘り五千踰繕那あり。千踰繕那は青色の土、千踰繕那は黃色の土、千踰繕那は赤色の土、千踰繕那那は白色の土、五百踰繕[二八]那は白墡、五百踰繕那は是れ泥なり」と。有るが說く、「無間地獄は中央に在りて、餘の七地獄が此を周迴圍遶すること、今の聚落が大城を圍遶するが如し」と。問ふ、若し爾らば[二九]施設論の說を當に云何が通ずべきや。彼に說くが如し、「贍部洲は周圍六千踰繕那、三踰繕那半なるに、一一の地獄は其の量廣大なり。云何んが此の洲の下に於て相容受することを得んや。有る頌の言の如し。

熱鐵の地は血の如し、　猛火は恒に洞然たり、
多百の踰繕那のあいだ、　周遍く焰、交徹す

と。答ふ、此の贍部洲の上は尖なるも、下は闊きこと猶し穀聚の如くなるが故に、容受することを得るなり。此に由りて經中に、四大海は漸く入れば漸く深しと說けり。

[三〇]又、一一の大地獄に十六增有り。謂く、各々に四門有り、一一の門外に各々[三一]四增有り、一に煻煨增、謂く此の增の內には煻煨ありて膝を沒す。二に屍糞增、謂く、此の增の內には屍と糞と泥とが滿つるなり。三に鋒刄增、謂く、此の增の內には復三種有り、一に刀刄路、謂く、此の中に於ては、刀刄を仰けに布き以て道路と爲す。二に劍葉林、謂く、此の林の上にては純ら銛利なる劍刄を以て葉と爲す。三に鐵刺林、謂く、此の林の上には利なる鐵刺の長さ十六指のものあり。刀刄路等の三種に殊り有りと雖も、而も鐵枝たること同じきが故に、一の增に攝するなり。四に烈河增、謂く、此

地獄にして、とはこゝに擧ぐるものなり。

(1) 無間地獄。即ち阿鼻者(avīci)

(2) 極熱(pratāpana)地獄。

(3) 炎熱(tapana)地獄。

(4) 大叫(mahāraurava)地獄。

(5) 號叫(raurava)地獄。

(6) 衆合(saṃghāta)地獄。

(7) 黑繩(kālasūtra)地獄。

(8) 等活(saṃjīva)地獄。

なり。

而も、此の八大地獄の四面に四門あり、この四門の外側に各々四處の增(utsada)と稱する地獄の眷屬の處あり。この增に就きては、次に述するが如し。

第二種は八寒地獄と稱するものにして、とは、八熱地獄の傍に在りといはる。此處に於ては、有情は嚴寒に逼められて、身と聲とを變ずるに至るを以て、八寒地獄の各自の名は、それに由りて附せらるといふ。八寒地獄とは、

(1) 頞部陀(arbuda) 譯して皰と稱す、嚴寒身に逼りて其の身に皰を生ずればなり。

(2) 尼剌部陀(nirarbuda) 譯して皰裂と稱す。嚴寒の爲め、身の皰裂くればなり。

(3) 頞哳吒(aṭaṭa) 之れ苦に堪えずして、發する聲なり。

(4) 臛々婆(hahava) 同じく苦しむの聲。

の增の內には熱鹹水あり。[三二]この十六增と本地獄とを并せて以て十七と爲す。是の如き八大地獄は、諸の眷屬を并せて、便ち一百三十六所有り。是の故に經には、一百三十六の㮈落迦有りと說くなり。

[三三]問ふ、何が故に、眷屬の地獄を說きて名けて增と爲すや。答ふ、有るが說く、「本地獄中にては一種の苦具ありて諸の有情を治するに、此の眷屬中にては種種の苦具ありて諸の有情を治するが故に、名けて增と爲す。是の故に[三四]天使經に說く、「眷屬の地獄中には、種種の苦具以て有罪者を治すと」と。有るが說く、『此は是れ苦をも受くること增す處なるが故に說きて增と名くるなり。謂く、本地獄中にて逼切せられ已りて、復、此の處に於て重ねて苦に遭ふが故にして、多種の苦具あるをもて增と名くるの謂には非ず。本地獄中にも亦、多くの苦具あるが故に。[三五]施設論に「眷屬地獄中には唯、一種の煻煨等有り」と說くが故に』と。

[三六]問ふ、諸の地獄の卒は、是れ有情數なりとせんや、非有情數なりや。若し是れ有情數なれば、彼は多くの惡を造るに、復、何處に於て、異熟を受くるや。若し非有情數なれば、[三七]大德法善現の頌を當に云何が通ずべきや。彼に說くが如し。

心、常に忿恚を懷き、　好んで諸の惡業を集め
他の苦しむを見て悅を生ずるものは、　死して琰魔の卒と作る

と。有るが說く、「是れ有情數なり」と。問ふ、彼は多く惡を造るに、復、何處に於て異熟を受くるや。答ふ、卽ち彼の地獄に於て受く、彼の中には尙、無間業等の極重の異熟をすら容るるを以てなり。況んや復、此を容れざらんや」と。有るが說く、「此は是れ非有情數なり。諸の罪者の業の增上力に由りて、非有情數をして有情に似せて現ぜしめ、諸の苦具を以て其の身を殘害せしむ」と。問ふ、若し爾らば、大德法善現の頌を當に云何が通ずべきや。答ふ、此は必ずしも通ずるを須ひず、素怛纜・毘奈耶・阿毘達磨の所說に非ざるを以てなり。但、是れ文頌の造制のみなり、夫れ文頌を造りて

(5) 虎々婆(huhuva) 同じく苦しむの聲。
(6) 嗢鉢羅(utpala) 譯して青蓮華といふ嚴寒の爲め、身變じて折裂すること、青蓮華の如しと。
(7) 鉢特摩(padma) 譯して紅蓮華といふ。嚴寒の爲め、身變じて折裂すること、紅蓮華の如しと。
(8) 摩訶鉢特摩(mahāpadma) 譯して、大紅蓮華といふ。嚴寒の爲め、身の折裂すること大紅蓮華の如しと。(倶舍第十一卷參照)

【二八】 那は大正本に邪とあるも、こは誤植なり。
【二九】 本文引用の如きは、現存の漢譯施設論中に見當らず。
【三〇】 **一一の地獄の十六の增に就きて。**
【三一】 四增とは
(一)煻煨增(kukūla)、こは舊には熱灰園と譯ず、煻煨とは熱灰(アッペヒ)のこと。
(二)屍糞增(kuṇapa)、舊には死屍園と譯ず。
(三)鋒刃增(asidhāra)、舊には刃路園と譯ず。
此の增中には、亦、三種あり。
(1) 刀刃路(kṣuradhāra-mārga)舊には、刀刃園と譯ず。
(2) 劍葉林(asipattravana)
(3) 鐵刺林(ayaḥśālmalīvana)

或は增し或は減ずるも、必ずしも義の如くにはあらず。何ぞ通ずるを須ひんや。若し必ず通ぜんことを欲するならば、彼に別意有り、謂く、若し鐵鎖を以て、初めて地獄に生ずる有情を繫縛して、琰魔(yama)王所に往くものは是れ有情數なるも、若し種種の苦具を以て地獄中に於ける有情を害するものは、是れ非有情數なり。大德は有情數に依りて是の如き說を作せしなり。

三八 瞻部洲の下に大地獄あり、瞻部洲の上にも亦、邊地獄と及び獨地獄有り、或は谷の中に在り、或は山の上に在り、或は曠野に在り、或は空中に在り。餘の三洲に於ては唯、邊地獄と獨地獄のみあるも、大地獄無し。所以は何ん。唯、瞻部洲の人のみ造善猛利にして、彼は惡業を作すことも亦、復、猛利なるに、餘洲は非らざるが故なり。

有るが說く、「北拘盧洲には亦、邊地獄等無し、是は淳淨業の果を受くる處なるが故に」と。問ふ、若し餘の洲に大地獄無くんば、彼の諸の有情の無間業を造る斷善根のもの等は、當に何處に於て異熟を受くるべきや。答ふ、卽ち此の瞻部洲下の大地獄に於て受くるなり。

三九 問ふ、地獄の有情の其の形は云何ん。答ふ、其の形は人の如し。

問ふ、語言は云何ん。答ふ、彼の初生の時は、皆聖語を作すも、後、苦を受くる時には種種苦痛を受くるの聲を出すと雖も、乃至一言の了す可きもの有ること無し。唯、斫刺破裂の聲のみ有るなり。

四〇 第四十節　傍生趣に就きて

四一 云何が傍生趣なりや。答ふ、諸の傍生の一類の伴侶の衆同分と、依得と事得と、處得と及び已生の傍生の無覆無記の色・受・想・行・識とを、是を傍生趣と名くるなり。解釋すること前の如し。

四二 問ふ、何が故に、彼の趣を傍生と名くるや。答ふ、其の形傍なるが故に、行も亦、傍なり。行傍なるを以ての故に、形も亦、傍なり。是の故に傍生と名くるなり。有るが說く、「傍生とは是れ假名・

(四)列河增(kṣāranadī)、

【三三】 特に百三十六種落迦・

【三三】 眷屬の地獄を增と爲す所以。

【三四】 天使經は、中阿含、第十二卷、天使經(Devadūta sutta)(大正一、頁五〇五上)に、(一)峰巖地獄、(二)糞屎地獄、(三)鐵𨦟林大地獄、(四)灰河等にて、衆生の人間たりし時、父母に孝ならず、沙門梵志を尊敬することを知らず、如實を行ぜず、福業を作さず、後世の罪を畏れざるものゝ、極苦を受くる樣を敍述せり。倘、增一阿含第二十四卷第四經(大正二、頁六七四中)を參照すべし。

【三五】 本文所引の文も、現存漢譯施設論中には無し。

【三六】 地獄の卒は、有情數なりや、非有情數なりや。

これに有情數なりとする說と、非有情數なりとする說と二說あるも、婆沙師の決判なし。

【三七】 大德、法善現は卽ち達磨蘇部底(Dharmika-subhūti)にして、又、法須菩提ともいふ。

【三八】 時に、四大洲上の邊地獄、獨地獄に就きて、

瞻部洲には、前の大地獄と、この二地獄とは倶にあるも、餘の三洲には、大地獄なし。

【三九】 地獄の有情の形容、語

假想・名施設・想施設なり。一切の名と想とは欲に隨つて立つるものなるをもて、必ずしも義の如くならず」と。有るが説く、「彼の諸の有情は、增上なる愚癡の身・語・意の惡行を造作し增長するに由りて、彼に往き、彼に生じ、彼の生をして相續せしむるが故に、傍生趣と名くるなり」と。有るが説く、「彼の趣は闇鈍なるが故に傍生と名く。闇鈍とは卽ち是れ無智なり。一切の趣中、無智なること彼の趣に如くものは有ること無し」と。[四三]有るが説く、「諸處に流遍するが故に傍生と名く。謂く、此は遍く五趣に於て皆有り。㮈落迦中には無足の者有り、[四四]孃矩吒虫等の如し。二足の者あり、[四五]鐵嘴鳥等の如し。四足の者有り、[四六]黑駮狗等の如し。多足の者あり、百足等の如し。鬼趣中に於て、無足の者あり、毒蛇等の如し。二足の者あり、烏鵄等の如し。四足の者有り、狐・狸・象・馬等の如し、多足の者あり、六足・百足等の如し。人趣の三洲中に於ては、無足の者あり、一切の腹行虫の如し。二足の者あり、鴻雁等の如し。四足の者あり、象馬等の如し。多足の者あり、百足等の如し。北拘盧洲中に於ては、二足の者あり、鴻雁等の如し。四足の者あり、象馬等の如し。無足のもの及び多足のもの有ること無し。彼は是れ無惱害の業の果を受くる處なるが故なり。四大王衆天と及び三十三天との中には、二足の者あり、妙色鳥の如し。四足の者あり、象馬等の如し。餘が無きことは前釋の如し。[四七]上の四天中には唯、二足の者のみあり、妙色鳥等の如し。餘の皆、無きは、空居の天處は轉た勝妙なるが故なり。

問ふ、彼處に若し象馬等無くんば、何を以て乘と爲すや。亦、聞く、彼の天も象馬等に乘ると。云何が無しと言ふや。答ふ、彼の諸天の福業力に由るが故に、非有情數をもて象馬等の形と作して而して御乘と僞して以て自ら娛樂するなり。

一九 問ふ、傍生は本、何處に住するや。答ふ、本の所住處は大海中に在りしに、後時に流轉して、諸趣に遍在せしなり。

畜に就きて。

【四〇】本節は、五趣中の傍生趣卽ち畜生趣の一般論をなす段なり。

【四一】傍生趣の定義。

【四二】傍生趣と名くる所以。諸種の畜生動物等を傍生趣(tiryañca)と言ふ。

【四三】特に、五趣に遍在する傍生の種類に就きて。

【四四】孃矩吒虫(nyaṅkuṭā)とは、玄奘は倶舍論に孃矩吒虫と譯ず。地獄の十六增中の第二の屍糞增に居す。觜(クチバシ)の利なること針の如く、身は白くして、頭は黑し針口虫ともいふ。有情が彼處に遊ぶとき、皆此の虫の爲めに、皮も骨も破られ、其の髓を啣食せらるといふ。

【四五】鐵嘴鳥(ayastuṇḍā vāyasa.)とは、鐵の嘴を有する烏にして、地獄第三增中の鐵刺林中に居し、有情の眼睛又は心肝を採り啄み、爭ひ競ふて食ふといふ。

【四六】黑駮狗(śyāmala-śabala śvāna)とは、烏駮狗とも譯ず。くろまだらなる狗にして、こは、第三增中の劍葉林に居し、劍葉にて零落せしめられたる有情の骨肉をむさぼり食ふもの。

【四七】空居天中に、象馬等の無きこと、及び其の所以。

[四八]問ふ、其の形は云何ん。答ふ、多分は傍側なるも、亦、堅るものあり。[五〇]緊棕落・畢舍遮・醯盧索迦等の如し。

[五一]問ふ、語言は云何ん。答ふ、劫の初成時には、皆聖語を作すも、後、飲食と時分と有情との不平等なるを以ての故に、及び諂誑増上するが故に、便ち種種の語有り。乃ち言ふこと能はざるもの有るに至るなり。

[五二]第四十一節　特に、鬼趣に就きて

[五三]云何んが鬼趣なりや。答ふ、諸の鬼の一類の伴侶の衆同分と……乃至廣說。

[五四]問ふ、何が故に彼の趣を閉戾多（preta）と名くるや。答ふ、施設論に說く、「今時の鬼世界の王を琰魔と名くるが如し。是の如く、劫の初成時に、鬼世界の王あり、[五五]粃多と名く。是の故に、彼に往き彼に生ずる諸の有情類を皆、閉戾多と名く。卽ち是れ粃多界中所有の義なり。是れより以後皆、是の名を立つるなり」と。有るが說く、「閉戾多とは是れ假名・假想……乃至廣說」と。有るが說く、「増上なる慳貪の身・語・意の惡行を造作し増長するに由りて、彼に往き彼に生じて、彼の生をして相續せしむるが故に、鬼趣と名くるなり」と。有る說く、「飢渴増すが故に、鬼と名く。彼は飢渴を感ずるの業を積集するに由りて、百千歲を經るも水の名を聞かず。豈に能く見ることを得んや。況んや復、觸ることを得んや。或は、腹の大なること山の如く、咽は針孔の如くなるもの有るをもて、飲食に遇ふと雖も、而も受くること能はざるなり」と。有るが說く、「驅役せらるるが故に鬼と名く。恒に諸天の爲めに處處に驅役されて、常に馳走するが故に」と。有るが說く、「多くを希望するが故に、鬼と名く。謂く、五趣の中、他の有情より希望多き者、此に過ぐるもの無きが故に。

此の因緣に由るが故に、鬼趣と名くるなり。

[五六]問ふ、鬼は何處に住するや。答ふ、贍部洲の下、五百踰繕那に琰魔王界有り。是は一切の鬼の本

【四八】傍生本來の住處に就きて。

【四九】傍生の形態。

【五〇】緊棕落（Kinnara）は、これを羅什は人非人と譯す。人に似て、而も頭上に角を有す。歌神なりといふ。畢舍遮（piśāca）とは、毘舍遮とも云ふ。但し、一般には、これは食肉鬼とて、餓鬼の一種中に加えらる。

【五一】傍生趣の語言。

【五二】本節は、諸趣中の、特に鬼趣卽ち餓鬼趣一般に就きて、明にする段なり。

【五三】鬼趣の定義。

【五四】鬼趣を閉戾多と名くる所以。

【五五】粃多（Pitā）は比多とも音譯す。元來父（pitṛ）のことなれども、引いて父一般卽ち父祖の意となり、更に人が死して鬼となるといはるゝ所より、餓鬼の總名として閉戾多と同樣に使用せらるゝに至りしものと思はる。

【五六】鬼の住所。本住所は、四洲と欲天中の地居の二天とに居す。

の所住處なり。彼より流轉して、亦、餘處にも在るに至る。[五七]此の洲中に於ては二種の鬼有り。一に有威德にして、二に無威德なり。有威德なるは、或は花の林、果の林、種々の樹上など好んで山林中に住し、亦、宮殿の空中に在る者在り、乃至、或は餘の清淨處に住するものありて、諸の福樂を受くるなり。無威德の者は、或は廁溷・糞壤・水竇・坑塹の中に住し、乃至或は種種の雜穢なる諸の不淨處に住し、薄福貧窮にして飢渴に苦しめらるるなり。

東毘提訶と西瞿陀尼にも亦、此の二有り。

北俱盧洲には唯、大威德者のみ有り。有るが說く、「全く無し。諸の鬼趣は慳貪の感ずる所なるに、北俱盧洲は、是れを攝受さるゝこと無き有情の生ずる處なるを以ての故なり。

四大王衆天及び三十三天の中、[五八]唯、大威德の鬼のみ有りて、諸天衆の與めに門を守り、防邏となり、導從し、給使す。

有るが說く、「此の贍部洲の西に於て五百の鬼有り。渚に兩行して住するなり。兩行の渚中に於て五百の城あり。二百五十城には有威德の鬼住し、二百五十城には無威德の鬼住せり。是の故に昔し[五九]轉輪王有り、爾彌と名く。御者摩怛梨に告げて曰く、吾れ遊觀せんと欲す。汝、車を引きて此の道より去り、我をして、渚の有情の善惡の果を受くるを見せしむべしと。時に摩怛梨は卽ち王の教への如く、車を引きて二渚中に從ひて過ぐ。時に王は、彼の有威德の鬼の首に花鬘を冠し、身に天衣を著し、甘美の食を食することと猶し天子の如く、象馬車に乘じて各ゝ遊戲するを見、無威德の鬼の頭髮蓬亂し裸形にして衣無く、顏色枯粹し、髮を以て自ら覆ひ、瓦器を執持して乞匃を行ずるを見、見已りて深く善惡業の果を信ぜり」と。

[六〇]問ふ、鬼趣の形狀は云何ん。答ふ、多分に人の如し、亦、傍者も有り、或は面が猪に似、或は種々の餘の惡禽獸に似るものあり、今の壁上に彩畫して作す所の如し。

【五七】特に、二種の鬼に就きて。一、有威德なると、二、無威德なると、なり。

【五八】大正本には唯は雖とあるも此は誤植なり。

【五九】轉輪王爾彌又は儞爾或は尼彌(Nimi)のことは。M. N. 83 Mahādeva sutta. vol II. p. 79. に出づるも、以下の物語りは無し、但し、帝釋天が、御者摩怛梨又は摩兜麗(Mātali)に命じて、爾彌を三十三天に迎へしむるの事を敍せり。

【六〇】鬼趣の形狀。

六一 問ふ、語言は云何ん。答ふ、劫の初成時には、皆聖語をなせしも、後時には隨處に種々の言を作せり。或は說者有り、「隨つて何の處より命終して此に生ずるも、即ち彼の形を作し、即ち彼の語を作す」と。評して曰く、應に是の說を作すべからず、若し無色界より歿して此の趣に來生せば、無形にして無言なる可けんや。應に是の說を作すべし。所生の處に隨つて、形も言も亦、爾りと。

六二 第四十二節　特に、人趣に就きて

六三 云何が人趣なりや。答ふ、人の一類の伴侶の衆同分と……乃至廣說。

六四 問ふ、何が故に此の趣を末奴沙(Manusya)と名くるや。答ふ、昔、轉輪王有り、六五 曼馱多と名く、諸人に告げて曰く、汝等、所作有らんと欲すれば、應に先づ思惟し、稱量し觀察すべしと。爾の時より諸人は即ち王の敎への如く、所作すること有らんと欲すれば、皆先に思惟し稱量し觀察して、便ち種々の工巧業處に於て、而も善巧なることを得たり。能く意を用つて所作の事を思惟し觀察せしを以ての故に、末奴沙と名けしなり。是れより以來斯の號を傳立せしなり。先に未だ此を末奴沙と號せざる時には、六六 人は或は相呼びて以て雲頸と爲し、或は多羅脛と名け、或は底落迦と名け、或は阿沙茶と名けしなり。有るが說く、「末奴沙とは是れ假名・假想——乃至廣說」と。有るが說く、「先に下の身・語・意の妙行を造作し增長して、彼に往き彼に生じ、彼の生をして相續せしむるが故に、人趣と名くるなり」と。有るが說く、「憍慢多きが故に人と名く。五趣中に於て憍慢多き者、人に如くもの無きを以ての故に」と。有るが說く、「能く意を寂靜にするが故に人と名く。五趣中、能く意を寂靜にするものにして、人に如くもの無きを以ての故に。六七 契經に說く、「人に三事ゝ諸天に勝るゝこと有り。一、勇猛なること、二、憶念すること、三、梵行することとなり。勇猛なることとは、謂く、當の果を見ずして而も能く諸の苦行を修するが故に。憶念することとは、能く久時の所作、所說等の事を分明了了に憶念するをいふ。梵行することとは、能く初めて順解脫分、順決擇分等の殊勝の善根を

【六一】 鬼趣の語言。

【六二】 本節は、五趣中の、特に人趣一般に就きて明にする段なり。

【六三】 人趣の定義。

【六四】 人趣を末奴沙と名くる所以。末奴沙(manuṣya)は √man (考ふる想像する)を其の語根とす。

【六五】 曼馱多(Māndhāta)のことに就きては、毘曇部十二、頁三〇「註六八」を參照すべし。蓋し俱舍論八卷には、王が、布殺陀王(Upoṣadha)の頂の顚より生ずとの傳說に據りて、彼を濕生の人の例とせり。

【六七】 人を末奴沙(manuṣya)と稱する語の生ずる以前には、人の性質、特徵等に依りて以下の如く種々に呼びたるならん、

(1) 雲頸と呼ぶとは、abhra-grīva (頭が雲まで達する程、丈高き人の義) に相當するか。

(2) 又、底落迦は ṭeraka 或は ṭerākṣa (目凹下)か。

(3) 人を多羅脛といふは、tāla-jaṅgha なるべし、此の語は、Pāṇini VI. 2. 14. に對する Kāśikāvṛtti に出づ (脛の長きこと tāla 樹の如き人を言ふ)。

(4) 阿沙茶は aṣāḍha (克服されざるものとの意なり)。

種え、及び能く別解脫戒を受持するをいふ』と。

此の因緣を以ての故に、人趣と名くるなり。

六八 問ふ、人は何處に住するや。答ふ、四大洲に住す。謂く、贍部洲と毘提訶洲と瞿陀尼洲と拘盧洲となり。亦、八の中洲に住す。何等をか八と爲すや。謂く、拘盧洲に二の眷屬有り、一に矩拉婆洲、二に憍拉婆洲なり。毘提訶洲にも二の眷屬有り。一に提訶洲 二に蘇提訶洲なり。瞿陀尼洲にも二の眷屬あり、一に舍搋洲、二に嗢怛羅漫怛里拏洲なり。贍部洲にも、二の眷屬あり。一に遮末羅洲、二に筏羅遮末邏洲なり。此の八洲の人の形は短小にして、此の方の侏儒の如し。有るが說く、「七洲は是れ人の所住なるも、遮末羅洲は唯、羅刹娑(Rākṣasa)のみ居る」と。有るが說く、「此に說く所の八は、卽ち是れ四大洲の異名なり。一一の洲には皆二の異名あるを以ての故に」と。如是說者はいふ。「應に初說の如くなるべし」と。

六九 此の八洲の一一に復、五百の小洲あり。以て眷屬と爲す。中に於て、或は人の住するあり、或は非人の住するあり、或は空なるものあり。

七〇 問ふ、人趣の形貌は云何ん。答ふ、其の形、上立す。然も贍部洲の人の面は車の箱の如く、毘提訶の人の面は半月の如く、瞿陀人の面は滿月の如く、拘盧洲の人の面は、方池の如し。

七一 問ふ、語言は云何ん。答ふ、世界の初成時には一切皆聖語を作せしも、後、飲食と時分と有情と不平等を以ての故にと、及び諂誑が增上するが故に、便ち種々の語有り、乃至、言ふこと能はざるもの有り。

七二 第四十三節 天趣に就きて(附、阿素洛論)

七三 云何が天趣なりや。答ふ、天の一類の伴侶の……乃至廣說。

七四 問ふ、何が故に、彼の趣を天と名くるや。答ふ 諸趣中に於て彼の趣は最勝・最樂・最善・最妙・最

【六七】 特に、人には諸天に勝る三事ありとの有說。

【六八】 人の住處としての四大洲と八中洲。四大洲には各々眷屬として二の中洲を有すと言ふ。卽ち其の中、拘盧洲卽ち北俱盧洲(Uttarakuru-dvipa)には、一、矩拉犨洲(Kurava)と二に憍拉婆洲(kaurava)とあり。毘提訶洲卽ち東勝身洲(Pūrva videha-dvipa)には、一、提訶洲(Deha)と二、蘇提訶洲・俱舍論には毘訶洲(Videha)とあり、瞿陀尼沙卽ち西牛貨洲(Avaragodāniya dvipa)には、一、舍搋(シヤチヤ)洲(Śāṭhā)と。二、嗢怛羅漫怛里拏渕(ウタラマンタリヌ)洲(Uttaramantriṇa)とあり。贍部洲卽ち南贍部洲(Jambu-dvipa)には、一、遮末羅洲(Cāmara)と、二に筏羅遮末邏洲(Avaracāmara)とありと言ふ。

【六九】 八洲附屬の五百の小洲に就きて。

【七〇】 人趣の形貌に就きて。

【七一】 人趣の語言。

【七三】 本節は、五趣中の、特に天趣に就きて論究すると共に、往々、天趣と間違へられ易き阿素洛に就きて明かにする段なり。

高なるが故に、天趣と名くるなり。有るが說く、「先に上の身・語・意の妙行を造作し增長して、彼に往き彼に生じ、彼の生をして相續せしむるが故に天趣と名く」と。有るが說く、「天とは是れ假名・假想――乃至廣說」と。有るが說く、「光明增すが故に天と名く。彼の自然の身光が恒に照らして晝夜等しきを以ての故に」と。聲論者は說く、「能く照らすが故に天と名く。現に勝果を以て、先時の所修の因を照了するを以ての故に」と。復次に、戲樂するが故に天と名く。恒に遊戲して勝樂を受くるを以ての故に。

〔七五〕問ふ、諸天は何處に住在するや。答ふ、四大王衆天は、七金山と及び妙高山の四層級上と并びに日月星中とに住し、三十三天は妙高山頂に住し、夜摩乃至色究竟天は皆空中に在り、密雲は地の如し。各ゝ宮殿有りて、中に居止せり。その差別を廣說せば〔七六〕大種蘊に說けるが如し。

〔七七〕無色界天は、形色無きが故に、別の住處も無し。

〔七八〕問ふ、諸の天の形相は云何ん。答ふ、其の形は上立す。

〔七九〕問ふ、語言は云何ん。答ふ、皆聖語を作す。

已に五趣の一一の差別を說けり。彼の中に於て、阿素洛(Asura)有り。今當に說くべし。謂く、有餘部はいふ、「阿素洛を立て、第六趣と爲す」と。彼は應に是の說を作すべからず。契經には唯、五趣有りとのみ說くが故に。

〔八〇〕問ふ、何が故に阿素洛と名くるや。答ふ、〔八一〕素洛とは是れ天なるに、彼は天に非ざるが故に、阿素洛と名く。復次に、素洛を端政と名く。彼は端政に非ざるが故に阿素洛と名く。彼は諸天を憎嫉して、所得の身形をして不端政ならしめしを以ての故に。復次に、素洛を同類と名く。彼は先に天と相近くして住せしに、然も類同じからざるが故に、阿素洛と名く。謂く、世界の初成時に、諸の阿素洛は先に蘇迷盧(Sumeru)の頂に住せしに、後に極光淨天の壽盡き業盡き福盡きること有るが故

【七三】**天趣の定義。**

【七四】**天趣と名くる所以。**以下、天趣(deva gati)と名くる所以に就きて種々の異說をあぐ。

【七五】**諸天の住處に就きて。**

【七六】大種蘊第五中、綠納息、第二、婆沙第百三十三卷、(毘曇部十三、頁三六八)第二十一節及び第二十二節の成劫に就きての項を參照せよ。

【七七】**特に、無色界天の住處。**別の住處なきなり。

【七八】**天の形相及び語言に就きて。**

【七九】**阿素洛に就きて。**

匿素洛を立てゝ第六趣となす說あるも、評者は之を取らず。

【八〇】**阿素洛と名くる所以及び、その天よりの退避。**

【八一】以下は阿素洛(Asura)の語の言語的分析によりて意味を見出さんとするものなり。此の中の

(1)素洛は天(sura)なりといふは一般用ひらるゝ所。

(2)素洛を端政と名くといふ素洛は、(surūpa)か、又は(su-rūpa)か、

(3)素洛を同類と名くといふ素洛は(samānasura)か?

に、彼の天より歿して是の中に來生するに、[82]勝妙宮殿が自然にして出づるをもて、諸の阿素洛は心に嫉恚を生じ卽便ち之を避く。此の後、復、第二天の生ずる有るに、彼は更に處を移す。是の如く乃至三十三天が、妙高山の頂きに遍く次第して住するに、彼は極めて瞋恚して卽便ち退下す。然も諸天衆は初生時に於て、咸く之を指して、此は我が類に非ず、此は我が類に非ずと言ふ。斯に由りて展轉して非同類と名くるなり。復、嫉恚を生ずるに由るが故に、形端政ならず。卽ち此を以ての故に、非端政とも名くるなり。

[83]問ふ、諸の阿素洛は退して何處に住するや。答ふ、有るが說く、「妙高山中に空缺處有り、寶を覆ふ器の如し。其の中に城有り、是れ彼の住する所なり」と。問ふ、何が故に經に、「阿素洛の云く、我が所住の海は同一鹹味なりと」と說けるや。答ふ、彼の所部村落は鹹海中に住するも、而も阿素[84]洛王は彼の山內に住すればなり。有るが說く、「大鹹海中の金輪上に於て大金臺有り、高さと廣さは各々五百踰繕那なり。臺上に城有り、是れ彼の住する所なり。問ふ、若し爾らば、何が故に[85]施設論に、「內海の諸龍は、阿素洛軍が、金・銀・吠琉璃(Vaiḍūrya)頗胝迦(Sphaṭika)の鎧を著し、金銀等の種々の器仗を執りて、阿素洛城より出づるを見て、便ち諸天に告ぐ」と說けるや。答ふ、天は、諸龍の金山上に在るものを以て守邏と爲す。彼れ時に遙かに大鹹海中の阿素洛の軍が城より出づるを見て、便ち天衆に告げしなり。三十三天が四妙苑――謂く、衆車と麁惡と雜林と喜林となり――を有するが如く、阿素洛王も亦、四苑を有す。一を慶悅と名け、二を歡喜と名け、三を極喜と名け、四を可愛と名く。三十三天は[86]波利夜怛羅樹を有するが如く、阿素洛王も亦、[87]質怛羅波吒梨樹を有す。三十三天が帝釋を主と爲すが如く、諸の阿素洛も[88]毘摩質怛羅を主と爲す。

[89]問ふ、阿素洛の其の形云何ん。答ふ、其の形は上立なり。

問ふ、語言は云何ん。答ふ、皆、聖語を作す。

【八二】勝妙宮殿とは、帝釋の住む殊勝殿(Vaijayanta prāsāda)のことなり。

【八三】阿素洛の退後の住處。

【八四】洛は大正本に落とあるも宮本三本に洛とあり。

【八五】現存の漢譯施設論には之を欠く。

【八六】波利夜怛羅樹(Pārijāta)は圓生樹とも衆天所集大香樹とも意譯さる、詳しくは、婆沙第百三十三卷、(毘曇部十二、頁三七三)參照すべし。

【八七】質怛羅波吒梨樹とは、灰綵樹(Citrapāṭala)のこと。

【八八】毘摩質怛羅(Vemacitra)は、淨心とも呼ばる。卽ち帝釋天の夫人設芝の父とせらる。

【八九】阿素洛の形容及び語言。

[九〇]問ふ、諸の阿素洛は何の趣の所攝なりや。答ふ、有るが說く、「是れ天趣の攝なり」と。問ふ、若し爾らば、何が故に正性離生に入ること能はざるや。答ふ、諂曲に覆はるるが故なり。其の事は云何ん。答ふ、彼は常に、佛は諸天に朋黨すと疑ふ。若し佛が其の爲めに四念住を說けば、彼は是の念を爲す。「佛は我等の爲めに四念住を說くをもて、必ず諸天の爲めには五念住を說くべし」と。乃至若し佛が爲めに三十七助道法を說けば、彼は是の念を作す、佛は我等の爲めに三十七を說くをもて、必ず諸天の爲めに三十八を說くべしと。是の如き諂曲の心の爲めに覆はるゝを以ての故に、正性離生に入ること能はざるなり。復次に、正性離生に入ること能はざるを以ての故に、便ち惡趣の所攝なりとは謂ふべからず。諸の[九一]達絮、及び[九二]篾戾車人の如きは亦、正性離生に入ること能はざるも、而も惡趣の所攝には非ざるが如く、彼も亦、應に爾るべければなり。如是說者はいふ、「是は鬼趣の攝なり」と。問ふ、若し爾らば、何が故に經に「帝釋が毘摩質怛羅阿素洛王に語りて、汝は本是れ此處の天なりきと言へり」と說けるや。答ふ、帝釋は應に、汝は本是れ此の處の鬼なりきと言ふべきなり。而も天と言ひしは、婦公を尊敬せしを以ての故に、此の愛語を作せしなり。又[九三]設芝をして聞かしめて歡喜を生ぜしめしなり。[九四]問ふ、若し是れ鬼ならば、何を以て諸天と交親するや。答ふ、諸天は美色を貪るが故にして、族姓の爲めならざればなり。恰も設芝阿素洛女は端政無比なりしかば、是の故に帝釋が納めて以て妻と爲せしが如く、亦、[九五]大樹緊捺洛王の女は名けて奪意と爲し、端政無雙なりしに、是れは傍生趣の攝なりと雖も、而も蘇迷王太子の蘇達那菩薩が求娉して妻と爲せしが如く、此も亦、是の如きなり。

[九六]問ふ、何を以て復、能く天と鬪戰するや。答ふ、亦、劣者は勝者と共に諍ふこと有り、奴が主と鬪ひ、狗が人と鬪ふが如し。

[九七]第四十四節　一般民間信仰の諸神の五趣分別と、五趣の定に依る說に就きて

【九〇】**阿素洛は何の趣の所攝なりや。**

【九一】達絮(Dasyu)とは四姓以外の野蠻人にして、禮儀を知らざること、禽獸の如しと言はるゝ人種をさし、又、盜財、侵略人のことをも言ふ。

【九二】篾戾車(Mleccha)は非アーリヤ人にして、極めて未開にして下賤なる種族をさし、又は、斷善根の如き人をも意味することあり、

【九三】設芝(Śacī)は、阿素洛王、毘摩質怛羅の娘にして、帝釋天の夫人なり。

【九四】**特に、阿素洛が諸天と交親する所以。**

【九五】大樹緊捺洛王とは、飜譯名義大集に據るにDrumakiṃpararāja なるべし。Divyāvadāna pp. 435 ff に據るに、般遮羅(Uttarapañcāla)國のハスチナープトラ(Hastināpura)に都せる大財(Mahādhana)王の子、蘇達那(Sudhana,(Mahā vastu. II. pp. 94—115 に據れば、Sudhanu)が、奪意又は 意(Manoharā)と稱する、緊捺洛女(Kiṃnarī) を妻とせり云云の物語りあり。尙、根本說一切有部毘奈耶藥事第十三卷に據るに蘇達那太子卽ち善財は佛陀の前生の人とせり。以下の物語りは、之に相當す

九八 問ふ、亦、人の承事する所を以て天と爲すものあり。九九 筏栗達那神・旃稚迦神・旃荼履迦神・布刺拏跋達羅神・摩尼跋達羅神・訶利底神・末度塞建陀神等の如き、是れ天趣と爲んや、鬼趣と爲んや。若し是れ天趣なれば、何が故に人の精氣を奪ひ、亦、人の命を斷ち、人の祠祀を受ぐるや。諸天は人の飲食を觀ずること猶し糞穢の如く、食餐を以て香美と爲すべからざるを以ての故に、若し是れ鬼趣なれば、訶利底神所說の頌を云何が通ずるや。彼に說くが如し。

可愛よ、汝應に默すべし、　一〇〇 嗢怛羅も亦、爾るべし、
我れ若し見諦する時、　亦、汝等をして見せしめん

と。末度塞建陀神の所說を復、云何が通せんや。彼に說くが如し、「長者よ、怖るゝこと勿れ、長者よ怖るゝこと勿れ、我が次前の生を末度塞建陀と名け。長者と常に親友たり、今、四大王衆天中に生じ、恒に此の始縛迦門上に住して、人衆を守護するなり」と。

答ふ、有るが說く、「彼は是れ天趣なり」と。問ふ、若し爾らば、何が故に人の精氣を奪ひ、亦、人命を斷ち、人の祠祀を受くるや。答ふ、彼には是の事無し。但、彼に領せらるる鬼神が人の精氣を奪ふ等の事有るのみと。如是說者はいふ、「彼は是れ鬼趣なり」と。問ふ、訶利底神の頌を當に云何が通ずべきや。答ふ、彼は諦に於て愚なるをもて實に見ること能はず。而も深信を以ての故に、此の言を發せしなり。又、爾の時に於て、四諦を說くを聞きて增上慢を起し、見諦を生ずと想ふが故に、是の說を作せしなり。問ふ、末度塞建陀の所說を復云何が通ずるや。答ふ、彼は趣に於て愚なるをもて實には辯ずること能はざるも、自ら高きを以ての故に、我れ天に生ずと說けるなり。恰も、今の富人が僕隷の邊に向ひて自ら高貴なりと稱するが如く、彼も亦、是の如きなり。又、彼は四大王衆天に承事して、而して自身を以て攝して事ふる所と同じとするを以ての故に是の說を作せり。一〇一 諸の地に依りて住する神の 一〇二 鳩畔茶・藥叉・邏利娑・羯吒布怛那等の如きは、皆、鬼趣の攝なり。若

るか、何等究すへし。

【九六】 阿素洛が天と關ふ所以。

【九七】 本節は、先に五趣を詳論したる序いでに、先づ一般民間信仰の對象たる、天神又は地神と考へらるゝものの性質を檢討して五趣分別をなし、後に、總じて五趣各自は何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【九八】 一般民間信仰の天の諸神とその五趣分別。

以下、之等の天と爲す神々を天趣となす有說あるも、婆沙評家は之を取らずして、これ皆、鬼趣の攝なりとす。

【九九】 以下、天の神々と考へらるゝものに就きては、精確なる所不明なるも參考の爲め思ひつくまゝに、原語をあてはむれば、次の如し。

(1)筏栗達神(Vardhana ?)
(2)旃雅迦神(Śāntika ?)
(3)旃荼履迦(Caṇḍālika ?)
(4)布刺黎跋達羅神(Pūrṇabhadra)
(5)摩尼跋達羅神 (Maṇibhadra)
(6)訶利底神(Hāriti)
(7)末度塞建陀神 (Madhuskandha ?)

【一〇〇】 嗢怛羅(Uttarā)は、プナッス(Punabbasu)夜叉の妹のことか。

【一〇一】 地に依りて住する神々

しくは、緊婆落・畢舎遮・醯盧索迦・婆路尼・折羅頗勒窶羅等は、皆傍生趣の攝なり。彼の形は上立なりと雖も、而も猶、傍生の相有り、謂く、或は有るは耳尖り、或は有るは角を載き、或は險仗を執り、或は諸の鳥獸の頭を作し、或は傍生の蹄具を作せり。是の故に、皆是れ傍生趣の攝たるなり。

[一〇三]此の中、前の四趣は唯、欲界繋なるが故に、未至定に依りて滅し、天趣は七或は未至に依りて滅す。然も天趣は九地の繋なり。欲界繋なるは未至定に依りて滅し、乃至非想非非想處繋なるは七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中、所説の定につきては、有るが説く、「無漏のなり」と。有るが説く、「有漏と無漏とのなり」と。前の分別の如し。

所説の滅につきては、若し此は種類の滅に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、「未至の言は未至定と靜慮中間と上の七近分とを攝し、未至定中に於ては、有漏のと無漏のとを攝す。此に依りて能く欲界繋乃至非想非非想處繋の天趣を滅するが故に」と。若し此は究竟の滅に依りて説くとする説者なれば、彼は説く、「未至の言は未至定と靜慮中間とを攝し、未至定中に於ては、唯、無漏のをのみ攝す。此に依りて能く非想非非想處繋の天趣を滅するが故に」と。

此に由るが故に、七或は未至に依りて滅すと言へるなり。

阿毘達磨大毘婆沙論巻第百七十二

の五趣分別。

【一〇二】以下の神々の名に不詳のもの少なからざるも、又、參考のため其の原語を掲げ置かん。鬼趣として、
(一)鳩畔荼(Kumbhaṇḍa)
(二)藥叉(Yakṣa)
(三)邏刹娑(Rākṣasa)
(四)羯吒布怛那(Kaṭapūtana)
次の傍生趣の攝のものとして、
(一)緊捺落(Kiṃnara)
(二)畢舎遮(Piśāca)
(三)醯盧索迦(Hiraṇya-śāsaka ?)
(四)婆路尼(Bharaṇi ?)
(五)折羅頗勒窶羅(Sailavalkala ?)
なるべし。

【一〇三】五趣各自は何の定に依りて滅するやに就きて。

巻の第百七十三（第七編　定蘊）

（定蘊第七中、攝納息第三之八）

[一]第四十五節　特に、五妙欲論と、定に依る彼の滅に就きて

[二]五妙欲とは、謂く、眼の所識の、可愛・可憙・可樂・如意なるものにして、能く欲を引き染著さる可き色、乃至、身の所識の可愛・可憙・可樂・如意なるものにして、能く欲を引き染著さる可き觸なり。

[三]問ふ、何が故に此の論を作すや。答ふ、契經の義を分別せんと欲するが爲めの故なり。[四]契經に說くが如し、「眼の所識の可愛・可憙……乃至廣說」と。契經は是の說を作すと雖も、而も廣く分別せず。契經は是れ此の論の所依の根本なるをもて、彼に說かざる所のものを、今應に之を說くべきが故に、斯の論を作すなり。

[五]云何んが眼の所識の色の妙欲なりや。答ふ、若し色にして欲界の眼觸所生の愛の所緣の境をいふ。

云何んが耳の所識の聲の妙欲なりや。答ふ、若し聲にして欲界の耳觸所生の愛の所緣の境をいふ。

云何が鼻の所識の香の妙欲なりや。答ふ、若し香にして鼻觸所生の愛の所緣の境をいふ。

云何が舌の所識の味の妙欲なりや。答ふ、若し味にして舌觸所生の愛の所緣の境をいふ。

云何が身の所識の觸の妙欲なりや。答ふ、若し觸にして欲界の身觸所生の愛の所緣の境をいふ。

[六]問ふ、意の所識の法を何が故に、妙欲と立てざるや。答ふ、皆、是れ愛の所緣なれば、妙欲と立つるも、意の所識の法には非愛の所緣も有るが故に、妙欲と立てざるなり。復次に、若し法にして二種の愛の所緣のものなれば妙欲と立つ。謂く、眼觸所生の愛と意觸所生の愛、乃至、身觸所生の愛と意觸所生の愛となり。意の所識の法は、但、一種の愛の所緣たり、謂く、意觸所生の愛なり。是の故に妙欲と立てざるなり。問ふ、若し爾らば、初靜慮の色・聲・觸は應に妙欲と立つべし、亦、二種の

【一】本節は、本章第三十六節に對する各論として、五妙欲一般論をなし、次に其の一一が何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【二】**五妙欲の定義。** 五妙欲（Pañca kāmaguṇā）とは、（一）(Cakkhu-viññeyyā-rūpā iṭṭhā kantā manāpā piya-rūpā kāmūpasaṃhitā rajanīyā）眼にて認知せらるゝ諸の色の、望ましく、意に契ひ、意を樂しましむる、愛らしき、諸の色にして、欲を伴ひ、染著を起すもの（以下の國譯は之に準ずべし）（二）(Sota-viññeyyā saddā…）（三）（Ghāna-viññeyyā gandhā…）（四）（Jihvā-viññeyyā rasā）（五）（Kāya-viññeyyā phoṭṭhabbā iṭṭhā kantā manāpā piyarūpā kāmūpasaṃhitā rajanīyā）（D.N. 33. Saṅgīti-suttanta. vol III. p. 234）

【三】**論起の緣由。**

【四】契經に就きては前引を參照すべし。

【五】**五妙欲各自の自性。**

【六】**意の所識の法を妙欲と立てざる所以** 以下、意の所識の法を妙欲と立てざる所以を明すと同時

愛の所緣と爲るが故に。答ふ、若し法にして二種の愛の所緣と爲りて、而も彼の愛が是れ不善なるものなれば、妙欲と立つるも、初靜慮の色・聲・觸は二種の愛の所緣と爲ると雖も、而も彼の愛は是れ無記なるが故に、妙欲と立てざるなり。不善と無記との如く、欲愛と色愛とにつきて說くも亦、爾り。有るが說く、「若し法にして二種の愛の所緣と爲り、而も是れ婬の因緣となる愛なれば、妙欲と立つるも、初靜慮の色・聲・觸は、二種の愛の所緣と爲ると雖も、而も、婬の因緣となる愛に非ざるが故に、妙欲と立てず。是の義を以ての故に、意の所識の法は妙欲を立てざるなり。復次に、若し法にして、是れ共に受用する所のものなれば、妙欲と立つ、卽ち女の相續は男の受用する所、男の相續は、女の受用する所等の如し。意の所識の法は、其の受用に非ざるが故に、妙欲と立てず。復次に、若し法體の相が麁顯にして多く愛を生ずる者なれば、妙欲と立つるも、意の所識の法は、體相微細にして、多く愛を生ずるに非ざるが故に、妙欲と立てざるなり。

(七)已に自性を說けり、所以を今當に說くべし。

問ふ、何が故に、妙欲と名くるや。答ふ、此の欲は妙なるが故に、名けて妙欲と爲す。問ふ、此は皆有漏にして、諸の過失多きに、何の功德有りてか說きて名けて妙と爲すや。答ふ、此の中にも亦、少分の功德あり、謂く、能く喜樂を生ずるをもて、是の故に妙と云ふ。復次に、諸欲のうち下賤にして而も欲に耽る者が、分別し增益し、取して淨妙と爲すが故に說きて妙と爲す。復次に、諸欲のうち欲貪を稱可する者の意の故に說きて妙と爲す。復次に、諸欲のうち是れ耽欲者が保護し希尙するが故に說きて妙と爲す。復次に、此は能く貪欲の愛味に隨順し增長するが故に說きて妙と爲す。尊者妙音說きて曰く、「此は是れ愚夫が妙の想を起す處なるが故に、名けて妙と爲す」と。尊者世友說きて曰く、「此は是れ諸の習欲者の所愛・所喜・所樂・所求の故に、妙欲と名く」と。尊者覺天說きて曰く、「諸欲は勝義の妙に非ずと雖も、而も是れ世俗の妙なり。究竟の妙に非ずと雖も、而も是れ暫

に、妙欲と立つる所以をも明せり。今、此を約言せば、妙欲と立つる法は、
(1)眼觸所生の愛と意觸所生の愛の如く、二種の愛の而も不善の所緣たること、
(2)婬の因緣と爲る愛の所緣たること、
(3)他と共に受用する對境たるべきこと、
を條件とする。意の所識の法は之と異なるを以て妙欲と立てずとなり。

【七】妙欲と名くる所以　以下欲界の眼等の五觸所生の愛の所緣の境の如きは、有漏なるに、特に五妙欲と稱する所以を尋求せり。

時の妙なり。謂く能く少時、喜樂を引生して諸苦を息むるが故に」と。大德說きて曰く、「諸欲のうち下劣なるも而も淨妙に似るものなるが故に、說きて妙と爲す、此の因緣に由るが故に妙欲と名くるなり」と。

八 契經に說くが如し、「具壽迦莫迦が佛所に往至し、佛足を頂禮して佛に白して言く、世尊よ、佛は常に欲を說く。欲は何の事を顯すと爲すや。佛の言く、欲とは卽ち五妙欲なり。何等かを五と爲すや。謂く、眼の所識の可愛・可喜・可樂・如意にして、能く欲を引き、染著さる可き色……乃至廣說」と。

九 問ふ、勝義の欲とは愛を謂ふに、何が故に世尊は色等を說きて欲と名くるや。答ふ、是は欲の具なるが故に欲と名く。樂具を樂と名け、垢具を垢と名け、漏具を漏と名くるが如く、此も亦、是の如きなり。

一〇 問ふ、何を以て勝義の欲は唯、是れ愛のみなりと知ることを得るや。答ふ、一一 阿笈摩(Agama)に由るが故なり。尊者舍利子が伽他を說きて言ふが如し。

「世の諸の妙境は眞の欲には非ず、　眞欲は人の分別する貪をいふ
妙境は本の如く世間に住するに、　智者は中に於て已に欲を除くなり」

と。爾の時、一の邪命外道の遠からずして住するもの有り、卽時に頌を以て舍利子に詰りて言く、

「若し世の妙境は眞の欲に非ず、　欲は是れ人の分別の貪なりと說かば
苾芻は應に受欲人と名くべし、　惡分別を起して尋思するが故に」

と。時に舍利子は外道に報じて言く、「惡の尋思を起すを實に受欲と名く」と。復、外道の爲めに伽他を說きて言く、

「若し世の妙境が是れ眞の欲にして、　欲は人の分別の貪に非ずと說かば

【八】 五妙欲に關する契經の文と、其の解釋、

【九】 特に色等を妙欲と稱する所以

【一〇】 特に、勝義の欲は、愛のみと言ふに就きて。こは、前問を受けて、其の意を明すものにして、いはゞ、因論生論なり。

【一一】 阿笈摩に就きては、雜阿含第十八卷、弟子所說誦第四品中に、外道の出家たる、閻浮車(Jambukhādaka)と舍利弗との問答あり。其の中の一節に、「閻浮車、問二舍利弗一、所謂欲者云何爲レ欲。舍利弗曰「欲者、謂眼所識色、可愛、樂、念、染著色…。閻浮車此功德非レ欲。但、覺想思惟者。是時、舍利弗、卽說レ偈言非二彼愛欲使一世間種々色唯、有覺想者是則士夫欲彼諸種種色常在二於世間一調二伏愛欲心一、是則黠慧者とあるを參照せよ、因みに、此の巴利尼柯耶の相應文を缺く。(大正二、頁一二七、中)

汝の師は應に受欲人と名くべし。恒に可意の妙色を觀るが故に」と。時に彼の外道默して報ゆること能はず」と。故に知る、實の欲は是れ愛にして境に非ざることを。

〔二二〕契經中に說く、「欲生に三有り、一に諸の有情の現前の諸妙欲の境を受くることを樂しむものあり。彼は是の現前の欲境中に於て自在にして轉ず、謂く人と及び天の一分となり。人とは全にして人趣を攝す、天の一分とは〔二三〕下の四天をいふ。二に諸の有情の自ら化せる諸の妙欲の境を受くることを樂しむものあり、彼は自ら化せし妙欲の境中に於て自在にして轉ず。謂く、第五の樂變化天なり。三に諸の有情の他の化せし諸の妙欲の境を受くることを樂しむものあり、彼は他の化せし妙欲の境中に於て、自在にして轉ず。謂く、第六の他化自在天なり」と。

〔二四〕問ふ、何に依りて此の三欲生を建立するや。答ふ、受に依りて現前の欲境を生ずるが如くなるが故に、第一を立て、受に依りて自ら化せし欲境を樂しむ如くなるが故に第二を立て、受に依りて他の化せし欲境を樂しむ如くなるが故に第三を立つるなり。

〔二五〕問ふ、何が故に、人及び前の四天衆を合して欲生と立て、後の二天衆を各別に建立するや。答ふ、人と及び前の四天との煩惱とは麁にして、後の二天の煩惱は細なり。復次に、〔二六〕人及び前の四天の煩惱は利にして、後の二天の煩惱は數（はやき）なり。復次に、人及び前の四天の煩惱は重にして、後の二天の煩惱は輕なり。是の故に、人と及び前の四天とを總じて立て、後の二天を別立するなり。有るが說く、「人及び前の四天の境は熾盛ならず、後の二天の境界は熾盛なり。復次に、人及び前四天の境は豐盈ならざるに、後の二天の境界は豐盈なり。復次に、人及び前四天の境は淨妙ならざるに、後二天の境界は淨妙なり。復次に、人及び前四天の境は心を奪はれざるに、後二天の境界は心を奪ふ。復次に、人及び前四天の境は諸根を醉悶せしむること能はざるに、後の二天の境界は、能く諸根をし

【二二】特に、三欲生に就きて因みに、長阿含、第八、衆集經、（大正一、頁五〇、下）に、「復、有三三法一、謂、三欲生本。一者、由二現欲一、生二人天一二者、由二化欲一生二化自在天一三者、由二他化欲一、生二他自在天一」の文あり。尙、D.N. 33. Saṅgīti suttanta にある、三欲生（Tīṇi kāmupapattiyo）を參照せよ。

【二三】下の四天とは、四天王衆天と、三十三天と、夜摩天と、覩吉多天との欲天なり。

【二四】三欲生を建立する所以。

【二五】人と欲の下四天とを合立して欲生とし、他の二天を別に欲生と立つる所以。以下、人と下の四の欲天とを合立して、一の欲生を立て、上の二欲天を別立する所以を說くと共に、前五處と、後の二處との煩惱の相違を明にせり。

【二六】例せば、婆沙第十三卷の如是說者の說に據るに、人及び、欲天中の下の四天とは、婬事を行ずるに肉體的接觸をなす時間を要するに、欲天中の上二天の中、樂變化天は、歡笑（ホホヱム）間、他化自在天は、相顧眄するが如き間に婬事を成ずと言ふが如し。

て酔悶せしむ。是の故に、人及び前四天を合立して立て、後の二天を別立するなり」と。有るが說く、「人及び前の四天は、離欲道を去ること遠く、婬事息み難きをもて、是の故に合立し、後の二天は離欲道を去ること近く、婬事息み易きをもて、是の故に別立するなり」と。有るが說く、「人及び前の四天は相觸れて婬を成ずるをもて、是の故に合立し、第五天は共笑して婬を成じ、第六天は相視て婬を成ずるが故に、各、別立するなり」と。此は喩に依りて、婬事の時量の差別を顯して說くこと、前已に辯ずるが如し。有るが說く、「人及び前の四天は、同じく自然に生ずる境を受用することを樂しむが故に合して一と立て、第五天衆は獨り、自の所化の境を受用することを樂しみ、第六天衆は獨り、他の所化の境を受用することを樂しむが故に、各〻一と立つるなり」と。

一七 此の五妙欲は、唯、欲界繫のみなるをもて、是の故に、但、未至定のみに依りて滅す。

一八 第四十六節　特に、五學處と、定に依る彼の滅に就きて

一九 五學處とは、離斷生命と、離不與取と、離欲邪行と、離虛誑語と、離飲諸酒とをいふ。此の五につきて廣說すること二〇 業蘊の如し。

二一 皆、欲界繫なるが故に、唯、未至定のみに依りて滅するなり。

二二 第四十七節　六內處等の種種の六法門は何の定に依りて滅するやに就きての論究

【本論】 二三 六內處と六外處と六識身と六觸身と六受身と六想身と六思身と六愛身とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、五內處と色と聲と觸との外處とは、四或は未至に依りて滅す。意內處と法外處と意識身と、及び彼と相應する觸と受と想と思と愛との身とは、七或は未至に依り、香・味外處と鼻・舌識身と及び彼と相應する觸と受と想・と思と愛との身とは、未至に依り、眼・耳・身識身と及び彼と相應する觸と受と想と思

【一七】 **特に、五妙欲の定に依る滅に就きて、**

【一八】 本節は、第三十六節に對する各論として、五學處の一一が何の定に依りて滅するやを論示する段なり。

【一九】 **五學處の名目。**

【二〇】 業蘊、第四中、表無表納息、第四、婆沙第百二十三卷、第十節、（毘曇部十三、頁一七〇以下）を參照すべし。

【二一】 **五學處は何の定に依りて滅するや。**

【二二】 本節は、發智頌文の「滅依定」八問中の、第五として、六法門の一一が何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【二三】 **總じて諸六法門の定に依る、滅に就きて、**

六內處、六外處等の諸の六法門に就きては、婆沙は諸處に散說するも、今は、便宜上、茲に擧ぐるものを概括して表示し置かん。

（一）六內處とは、(1)眼內處乃至(6)意內處、

（二）六外處とは、(1)色外處乃至(6)法外處、

（三）六識身とは、(1)眼識身乃至(6)意識身、

（四）六觸身とは、(1)眼觸身乃至(6)意觸身、

（五）六受身とは、(1)眼觸所生受身、乃至(6)意觸所生受身、

と愛との身とは、初或は未至に依りて滅す。――

二四 問ふ、何が故に、此に於て六法に依りて論を作すや。答ふ、彼の作論者の意欲爾るが故なり。彼の意に随つて作論するも、但、法相に違はずんば、便ち責むべからず。復次に、作論者の意を問ふべからず。此は是れ契經の所説なるが故に。佛は經中に於て二五處處に此の諸の六法門を説くも、而も廣く分別せず。契經は是れ此の論の所依の根本なるをもて、彼に分別せざる所のものを、今應に分別すべきが故に、斯の論を作すなり。

二六 問ふ、作論者の意は置く、卽ち佛は經中、何が故に此の六法門を説けるや。答ふ、有るが説く、『五蘊と及び彼の因とを顯さんが爲めの故なり。謂く、若し前の五內處と前の五外處と及び法處の一分とを説けば、則ち色蘊を顯し、若し六受身及び法處の一分を説けば則ち受蘊を顯し、若し六想身及び法處の一分を説けば則ち想蘊を顯し、若し六觸身及び法處の一分を説けば則ち行蘊を顯し、若し六識身及び意處を説けば則ち識蘊を顯し、若し六思身と六愛身とを説けば、則ち五蘊の因を顯すなり。契經に説くが如し、「業は生の因たり、愛は起の因たり、生起するは卽ち是れ所得の五蘊なり」と』と。有るが説く、「業と煩惱と苦との三種の集を顯さんが爲めの故なり。謂く、若し六思身を説けば、則ち業の集を顯し、若し六愛身を説けば則ち煩惱の集を顯し、若し餘の六を説けば則ち苦集を顯す。業等の三の集を顯す爲めの如く、是の如く業等の三生と業等の三道とを顯さんが爲めなることも、應に知るべし亦、爾ることを」と。

諸の六法の自性等は二七雜蘊等に巳に説けり。

二八 然も、前の五內處と及び色と聲と觸との外處とは、皆五地の繫なるが故に、四或は未至に依りて滅す。

中に於て欲界繫のものは未至定に依りて滅し、乃至第四靜慮繫のものは、四靜慮と未至定と靜慮

(六) 六想身とは、(1)眼觸所生想身、乃至(6)意觸所生想身、

(七) 六思身とは、(1)眼觸所生思身乃至(6)意觸所生思身、

(八) 六愛身とは、(1)眼觸所生愛身、乃至(6)意觸所生愛身、此等に關する詳細に就きては、集異門足論第十五卷、の初頭を參照すべし。

【二四】 論起の緣由。

【二五】 例せば、雜阿含、卷第十三、第三百四經、(大正二、頁八六) 及び、中阿含第二十一卷、第八十六經、說處經、(大正一、頁五六二、上)これに加ふるに、長阿含、第八卷衆集經、(大正一、頁五一下)等の如し。

【二六】 佛が、六法門を說ける所以。

【二七】 茲には雜蘊等とあるも、寧ろこは、結蘊に說けり。卽ち、六愛身に就きては、結蘊第二中、不善納息第一婆沙第四十九卷(毘曇部九、頁一五六以下)に、六內、外處に就きては、結蘊第二中、十門納息、婆沙第七十三卷(毘曇部十、頁二五〇以下)に、六愛身、六想身、六思身、六識身等に就きては、結蘊第二中十門納息第四、婆沙第七十四卷、(毘曇部、十、頁二六八、以下)に說けり。

【二八】 特に、前五內處と、色、

中間と空無邊處の近分とに依りて滅す。

然も此の中、所說の定につきては、有るが說く、「無漏定に依りて說く」と。有るが說く、「有漏と無漏との定に依りて說く」と。こは前の分別の如し。

所說の滅につきては、若し種類の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は未至定と靜慮中間と上の四の近分とを攝し、未至定中に於ては有漏のと無漏のとを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至第四靜慮繫の五內處と及び色と聲と觸との外處とを滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とを攝し、未至定中に於ては、唯、無漏のをのみ攝す。此に依りて能く第四靜慮繫の五內處と及び色と聲と觸との外處とを滅するが故に」と。

此に由るが故に、四或は未至に依りて滅すと言へるなり。

二九 意內處と法外處と意識身と及び彼と相應する觸と受と想と思と愛との身とは、皆、九地の繫なると及び不繫なると有り。彼の九地の繫なるは七或は未至に依りて滅す。

中に於て、欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、乃至非想非非想處繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中、所說の定につきては、有るが說く、「無漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と、こは前の分別の如し。

所說の滅とは、若し種類の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は、未至定と靜慮中間と上の七近分とを攝す、未至定中に於ては有漏と無漏とのを攝す。此に依りて能く欲界繫乃至非想非非想處繫の意處等を滅するが故に」と。若し究竟の滅に依りて說くとする說者なれば、彼は說く、「未至の言は未至定と靜慮中間とを攝し、未至定中に於ては唯、無漏のをのみ攝す。此に

聲、觸處との定に依る滅。

【二九】 特に、意處と法處、意識身と、此と相應する觸、等の定に依る滅に就きて、

依りて能く非想非非想處繫の意處等を滅するが故に」と。

此に由るが故に、七或は未至に依りて滅すと言へるなり。

[三〇] 香と味との外處と、鼻・舌識身と及び彼と相應する觸と受と想と思と愛との身とは、皆欲界繫なるが故に、唯、未至定に依りてのみ滅す。

[三一] 眼・耳・身識身と及び彼と相應する觸と受と想と思と愛との身とは、皆二地の繫なるが故に、初或は未至に依りて滅す。

中に於て欲界繫のものは未至定に依りて滅し、初靜慮繫のものは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅す。

然も此の中、所說の定につきては、有るが說く、「無漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と。こは前の分別の如し。

所說の滅につきて、有るが如く、「種類の滅に依りて說く」と。有るが說く、「究竟の滅に依りて說く」と。其の所應に隨ふこと亦、前の分別の如し。

此に由るが故に、初或は未至に依りて滅すと言へるなり。

[三二] 第四十八節　七識住・八世法・九有情居・十業道は總じて何の定に依りて滅するやに就きての論究

【本論】 七識住と八世法と九有情居と十業道とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、初識住と八世法と初有情居と十業道とは、未至に依りて滅し、第二の識住と有情居とは、初或は未至に依り、第三の識住と有情居とは、二或は未至に依り、第四の識住と第五の有情居は、四或は未至に依り、第五識住と第六有情居とは、五或は未至に依り、第六識住と第七有情居とは、六或は未至に依り、

[三〇] 特に、香味處と、鼻舌識身と、此と相應する觸等の定に依る滅に就きて、

[三一] 特に、眼・耳・身識身と此と相應するの觸等の定に依る滅

[三二] 本節は、發智頌文の「滅依定」八門中の第六として、七識住等は、何の定に依りて滅するやを總括して明す段なり。

第七識住と、第八・第九有情居とは、七或は未至に依りて滅するなり。

[三三]第四十九節　特に、七識住各自は何の定に依りて滅するやに就きて

七識住につきては、[三四]大種蘊に廣說するが如し。中に於て、初識住は唯、欲界繫のみなるが故に、但、未至定のみに依りて滅す。第二識住は初靜慮繫なるが故に、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅す。第三識住は第二靜慮繫なるが故に、初二靜慮と未至定と靜慮中間と第三靜慮の近分とに依りて滅す。第四識住は第三靜慮繫なるが故に、初三靜慮と未至定と靜慮中間と第四靜慮の近分とに依りて滅す。第五識住は空無邊處繫なるが故に、五根本と未至定と靜慮中間と識無邊處の近分とに依りて滅す。第六識住は識無邊處繫なるが故に、六根本と未至定と靜慮中間と無所有處の近分とに依りて滅す。第七識住は無所有處繫なるが故に、七根本と未至定と靜慮中間と非想非非想處の近分とに依りて滅す。

然も此の中、所說の定につきては、有るが說く、「有漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と。こは前の分別の如し。所說の滅につきては、此の中には、種類の滅と究竟の滅との二說の差別有ること無し。各ゝ但、是れ一地の繫なるを以ての故に。

[三五]第五十節　特に、八世法と、定に依る彼の滅に就きて

[三六]八世法とは、一に利、二に無利、三に譽、四に非譽、五に讃、六に毀、七に樂、八に苦なり。

[三七]問ふ、何が故に、此の論を作すや。答ふ、他の宗を止めて己が義を顯さんと欲するが故なり。謂く、分別論者と大衆部の師とが執す、「佛の生身は是れ無漏法なり」と。彼は何が故に是の說を作すやといふに、契經に依るが故なり。[三八]契經に說くが如し、「如來は世に生じ世に住し、世間に出現するも、世法の染する所とならず」と。彼は此に依るが故に、佛の生身は是れ無漏法なりと說くなり。又、彼は說きて言く、「佛は一切の煩惱幷びに習氣を皆永斷するが故に、云何が生身は當に是れ有漏

【三三】本節は、第四十八節に對する各論として、七識住の一一は何の定に依りて滅するやを論究する段なり。

【三四】大種蘊第五中、具見納息第三、婆沙第百三十七、毘曇部十四、頁五五、以下）參照。

【三五】本節は、第四十八節に對する各論として、特に八世法一般論を詳述し、更に、其等は、何の定に依りて滅するやを明示する段なり。

【三六】**八世法の名目。** 八世法 (aṣṭau lokadharmāḥ) は、
(一) 利 (lābha)
(二) 無利 (alābha)
(三) 譽 (yaśa)
(四) 非譽 (ayaśa)
(五) 讃 (praśaṃsā)
(六) 毀 (nindā)
(七) 樂 (sukha)
(八) 苦 (duḥkha)
なり。何 D.n. 33. Saṅgīti suttanta. vol. III. p. 286. を參照すべし。

【三七】**論起の所以としての佛生身有漏法說の主張。** 分別說部と大衆部との、佛の生身は、無漏法なりと執するを止め、佛の生身は唯有漏法なることを顯示せんが爲めなり。

【三八】**分別論者等の、如來の**

なるべきや」と。彼の意を止め、佛の生身は但、是れ有漏にして無漏法に非ざることを顯さんが爲めの故に、斯の論を作すなり。

三九 問ふ、云何が佛の生身は但、是れ有漏法なりと知るや。答ふ、契經に說くが如し、「苾芻よ、當に知るべし、無明に覆はれ、愛結に繫せらるるをもて、愚夫は有識の身を感得す。聰明なるものも亦然り」と。佛の生身は既に是れ無明と愛との果なるが故に、無漏法に非ずと知るなり。又、契經に說く、「十處と二の少分とは是れ有漏なり」と。此に由るが故に、佛の生身は定んで是れ有漏なりと知るなり。若し佛の生身が是れ無漏なれば、四〇 無比女は貪を生ずべからず、央掘利魔羅は瞋を生ずべからず、鄔盧頻螺迦葉波は癡を生ずべからず、傲慢波羅門は慢を生ずからず、佛の生身は他の貪・瞋・癡・慢を生ずるを以ての故に、定んで是れ有漏なりと知るなり。

四一 問ふ、若し爾らば、彼の所引の經を當に云何が通ずべきや。答ふ、彼の經は密意をもて、佛の法身を說けるなり。謂く、如來が世に生じ世に住すとは、佛の生身の世に出現するを說き、世法の染する所とならずとは、佛の法身を說くなり。復次に、世法とは卽ち世の八法なり。如來は世の八法の染する所とならざるが故なり。而も世法に染せずと言ふは、無漏たりとの謂ひには非ず。謂く、世の八法は世間の有情に隨順し、世間の有情は亦、世の八法に隨順す。世の八法は如來に隨順するも、如來は世の八法に隨順せず。故に如來は世法の染する所に非ざるなり。復次に、如來は世の八法を離るるが故に、不染と言ふも、無漏たりとの謂ひには非ざるなり。

四二 問ふ、如來にも亦、世の八法有るに、何が故に離ると言ふや。利有りとは、四三 鄔揭羅長者が、一日中に於て三百千の衣服を以て佛に施し、四四 時縛迦醫王等八十人が一日の中に於て、各々佛に百千雙の
四五 憍舍耶衣を奉りしが如し。利無しとは、佛が一時、衣を著し鉢を持して 四六 婆羅婆羅門村に入りて乞食せしに、空鉢にて入りて空鉢にて出でしが如し。譽有りとは、佛の初生の時、名が他化自在天に

生身無漏法說の經證、
【三九】 特に、有部宗が如來生身有漏法說をなす所以。
【四〇】 無比女（Anupamā）央掘利魔羅（Aṅgulimāla）鄔盧頻螺迦葉波（Uruvilvākāśyapa）傲慢波羅門（Mānastabdha）等が、佛陀の生身に對して、夫々の煩惱を起せしことに就きては、已に、婆沙卷第四十四（毘曇部九、頁五四）卷第七十六等明せり。就きて見るべし。
【四一】 分別論者等の佛生身無漏法說の經證の會通、とは密意なりと言ふにあり。
【四二】 如來は八世法を有するも而も離ると稱せらるる理由。
【四三】 以下の鄔揭羅（Ugra）長者（又は勇猛長者又は勇長者）戰遮、孫陀利、跋毘隨闍等に就きては、已に婆沙、第四十四卷（毘曇部八、頁五四註）に說けり。
【四四】 時縛迦（Jīvaka）は精しくは、Jīvaka-komārabhṛtya と稱し、單に耆婆とも音譯され、童子醫王、壽命童子などとも稱せらるゝ提婆が佛身血を出せし時、佛を治療せし醫者なり。
【四五】 憍舍耶（Kauśeya）は、又、憍奢耶、高世耶、等と音譯する。絹衣のことにして、

至り、阿耨多羅三藐三菩提を得せし時、名が色究竟天に至り、轉法輪の時、名が梵天に至るをいふ。非譽とは、佛が一日[四七]戰遮婆羅門の誹謗に遭ひ、又、一時に於て孫陀利女に因りて惡聲が十六大國に聞ゆるが如し。毀有りとは、跋羅惰闍惡口婆羅門が五百の頌を以て現前に佛を罵りしが如し。讃有りとは、卽ち彼の婆羅門が彼は先に罵りしと雖も、佛の容色の異らざりしを以ての故に、便ち淨信を生じ、復、五百の頌を以て現前に佛を讃し、尊者舍利子が衆多の頌を以て、現前に佛の無量の功德を讃し、尊者阿難陀が衆多の頌を以て、現前に佛の希有の妙法を讃せしが如く、是の如く、[四八]鄔波離・婆耆奢・尼羅部底等の諸大論師が、皆百千の伽陀を以て現前に佛を讃せしが如し。樂有りとは、佛は殊勝なる身心の受の樂と及び輕安の樂とを有すること、一切の有情の及ぶこと能はざる所なるをいふ。苦有りとは、世尊にも亦、背痛・頭痛有り、[四九]朅地羅の刺が足を傷け、及び迸り出る石が指を傷けて血を出せしことあるをいふ。是の如き法は世尊も皆有するに、何が故に離ると言ふや。答ふ、彼等は皆佛をして染を生ぜしむること能はざるが故に名けて離ると爲すなり。謂く、佛世尊は利等の四法に遭ふと雖も、而も心高ぶらず、無利等の四法に遭ふと雖も、而も心下らず。又、利等の四法に遭ふと雖も而も心歡ばず、無利等の四法に遭ふと雖も、而も心、慼ひず、又、利等の四法に遭ふと雖も、而も心染せざるが故に喜を生じ、無利等の四法に遭ふと雖も、心に憎むが故に憂を生ぜず。又、利等の四法に遭ふと雖も、而も愛を生ぜず、無利等の四法に遭ふと雖も、而も恚を生ぜず。譬へば妙高山王は金輪上に住するをもて、八方の猛風も傾動すること能はざるが如く、世尊も亦、爾り、戒の金輪上に安住するをもて、世間の八風の動かすこと能はざる所なり。是の故に名けて、世法の染汚する所とならずと爲すも、生身は是れ無漏なりとの謂ひには非ず。故に說きて不染と爲すなり。

[五〇]問ふ、如來は一切の煩惱と幷びに習氣とに於て皆已に永斷するに、云何が當に是れ有漏なりと說

野蠶の繭より取りたる糸にて作りたる衣なり。

【四六】 娑羅 (Sāla)

【四七】 戰遮(ciñcā)波羅門と、孫陀利 (Sundarī)と跋羅惰闍(Bhāradvāja) 惡口波羅門と、とに就きて、婆沙第四十四卷、(毘曇部九、頁五四)に已に出づ。

【四八】 婆沙第四十四卷及第七十六卷には、鄔波離 (Upāli)と婆耆奢(Vaṅgīsa) とは、鄔波離と論力外道とあり、論力は、舊譯第二十四卷には、婆祇奢とあるも、同一人か否か尙、研究を要す。婆耆奢が佛を讃せしに就きては雜阿含第四十五卷、一千二百十八經、(大正二、頁三三二、上)を見よ。尙、尼羅部底は不明なり。

【四九】 朅地羅 (Khadira) は檐木のこと、慧琳音義第十五(大正五四、頁三九八上)によるにこは毒樹なりともいふ。因みに、大正本には、朅地羅は、朅他羅とあるも、三本、宮本共に朅地羅とあり。

【五〇】 特に、如來は煩惱習氣を永斷するに有漏なりと爲す所以。

くべきや。答ふ、自身中の諸漏は永斷すと雖も、而も能く他の身の漏を增長するが故に、又、先時に諸漏より生ぜしが故に、說きて有漏と爲すなり。此の故に他の宗を止めて己が義を顯さんが爲めの故に、而して斯の論を作すなり。

[五一]此の中、利となる者に二種あり、一に有命、二に無命なり。有命の利とは、象・馬・牛・羊・妻子・僮僕等を得るをいひ、無命の利とは、金・銀等の寶・衣服等の物を得るをいふ。無利とは即ち前二種の利を得ざるをいふ。譽とは不現前の讃美をいひ、非譽とは不現前の毀呰をいふ。讃とは現前の讃美をいひ、毀とは現前の毀呰をいふ。樂とは欲界の身心の樂をいふ。有るが說く、「唯、五識と相應する樂のみを取る」と。苦とは欲界の身心の苦をいふ 有るが說く、「唯、五識と相應する苦のみを取る」と。

[五二]問ふ、此の八世の法は、幾界・幾處・幾蘊の所攝なりや。答ふ、有命の利は、十七界・十一處・五蘊の所攝にして、聲を除く。聲は恒に有るに非ざるが故に、即ち身に屬するが故に。無命の利は四界・四處・一蘊の所攝にして、色と香と味と觸との界と處と、色蘊とをいふ。無利と譽と非譽と讃と毀と樂と苦とは、二界・二處・三蘊の所攝にして、聲と法との界と處と、色と受と行との蘊とをいふ。此の中、無利は法界・法處・行蘊の所攝なり、無利は是れ不成就なるを以ての故に。譽と非譽と讃と毀とは、聲界・聲處・色蘊の所攝なり。樂と苦とは、法界・法處・受蘊の所攝なり。若し總じて八世法を說けば、則ち十八界・十二處・五蘊の所攝なり。有るが說く、「利と無利とは、倶に十八界・十二處・五蘊の所攝なり、所得と及び所不得とは倶に十八界等に通ずるを以ての故に。餘は前說の如し」と。有るが說く、「利と無利とは倶に、法界・法處・行蘊の所攝なり、利と無利との用は成就と不成就との性を以て體と爲すが故に。餘は前說の如し」と。

[五三]問ふ、何が故に、此の八を說きて世法と名くるや。答ふ、世間の有情の隨順する所なるが故に、

【五一】八世法各個の說明。

【五二】八世法各自の、界・處・蘊、分別。

【五三】此の八を世法と名くる所以。

名けて世法と爲すなり。世間の有情は若し利等の四法に遭へば、其の心則ち高ぶり、若し無利等の四法に遭へば、其の心則ち下る。又、若し利等の四法に遭へば、心則ち歡びを生じ、若し無利等の四法に遭へば、心則ち慼を生ず。又、若し利等の四法に遭へば、心則ち染むが故に、喜を生じ、若し無利等の四法に遭へば、心則ち憎むが故に、憂を生ず。又、若し利等の四法に遭へば、心則ち愛を生じ、若し無利等の四法に遭へば、心則ち恚を生ず。故に此の八種を名けて世法と爲すなり。如來は此に於て心隨順せざるが故に、世法の染する所とならずと說くなり。

五四 問ふ、聲聞と獨覺とも、愛と恚とを斷ずるが故に亦、是の如き八法に隨順せざるに、何が故に說かざるや。答ふ、彼は不定なるが故なり。謂く、不染なる有り、不動法者の如し。或は復、染なる有り、退法等の如し。復次に、五五 二乘には猶、相似の法有るが故なり。謂く、阿羅漢は愛と恚とを斷ずと雖も、而も愛と恚との相似の餘習有り、二阿羅漢の俱に是れ不時解脫のものあり。同じく一處に止まるに、一は則ち多く敬養と名稱とを得、一は則ち得ざるに、彼の得るものは、便ち自ら高ぶるに似、喜愛有るが如く、彼の得ざるものは、便ち自ら下するに似、憂慼有るものの如し。故に世法に染せずと爲すと說かざるなり。五六 唯、佛のみ、愛と恚との習氣を永拔するをもて、假使、一切の有情が皆勝利と恭敬と名譽とを得るに、如來が一毫の分をも得ずとも、終に自ら下すことも憂慼に似るも無く、反つて慶悅を生ず。假使、佛は、獨り、一切の勝利と恭敬と名譽とを得るに、諸餘の有情には一毫の分も無くとも、終に自ら高ぶることも喜愛の如き相も無く、反つて慈愍を生ずるが故に、佛のみ獨り世法に染せずと稱するなり。又、佛世尊は利を得するも高ぶらざるは、慢の習を斷ずるが故なり。利無きも下らざるは樂を遠離するが故なり、譽を得するも歡ばざるは愛の習を斷ずるが故に、譽に非ざるも慼ひざるは無畏を得するが故に、讃めらるるも喜を生ぜざるは憍の習を斷ずるが故に、毀せらるるも憂を生ぜざるは空三摩地に住するが故に、樂にも愛を生ぜざるは無願三摩地に

【五四】二乘も、亦愛と恚とを斷ずるに而も世法に染せずと說かざる所以。
以下、獨覺と聲聞との無學と如來との相違をも述ぶ。

【五五】 特に、二乘には相似の世法有るに就きて、——

【五六】特に、佛にのみは相似の世法も無し。

住するが故に、苦にも恚を生ぜざるは、無相三摩地に住するが故なり。

[五七]此の八世法は唯、欲界繫のみなるが故に、但、未至定にのみ依りて滅するなり。

[五八]第五十一節　特に、九有情居と十業道とは何の定に依りて滅するやに就きて

九有情居を廣說すること[五九]大種蘊の如し。

[六〇]中に於て七種の滅の義は、七識住の說の如し。第五有情居は第四靜慮繫なるが故に、四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊の近分とに依りて滅す。第九有情居は非想非非想處繫なるが故に、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中の所說の定につきては、有るが說く、「無漏のなり」と。有るが說く、「有漏と無漏とのなり」と。こは前の分別の如し。

此の中には、亦、種類の滅と究竟の滅との二說の差別無し。各ゝ但、是れ一地のみの繫なるを以ての故に。

十業道を廣說すること[六一]業蘊の如し。

[六二]中に於て、十不善業道は、唯、欲界繫のみなるが故に、但、未至定のみに依りて滅す。前の七善業道は五地の繫と及び不繫となり。欲界繫のものは未至定に依りて滅し、乃至第四靜慮繫のものは四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とに依りて滅す。後の三善業道は九地の繫と及び不繫となり。欲界繫のものは未至定に依りて滅し、乃至非想非非想處繫のものは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も此の中には、不善業道の近對治なる欲界の善業道に依りて說くが故に、但、未至定に依りて滅すとのみ言へるなり。

【五七】特に、八世法の定に依る滅に就きて。

【五八】本節は、第四十八節に對する各論として、特に九有情居と、十善業道と、十不善業道の一一が何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【五九】大種蘊第五中、具見納息第三、婆沙第百三十七卷、(毘曇部十四、頁五九以下)參照すべし。

【六〇】特に、九有情居各自の定に依る滅に就きて。

【六一】業蘊、第四中、惡行納息、第一、婆沙第百十三卷(毘曇部十三、頁三二九以下)を參照せよ。

【六二】十不善業道と、十善業道との各自を滅する定に就きて。

[六三] 第五十二節　四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處は何の定に依りて滅するやに就きて

【本論】[六四] 四靜慮と四無量と四無色と八解脫と八勝處と十遍處とは何の定に依りて滅するや。答ふ、初靜慮は初或は未至に依りて滅し、第二靜慮と喜無量と初二解脫と前四勝處とは、二或は未至に依り、第三靜慮は三或は未至に依り、第四靜慮と三無量と淨解脫と後四勝處と前八遍處とは、四或は未至に依り、空無邊處と及び彼の解脫と遍處とは、五或は未至に依り、識無邊處と及び彼の解脫と遍處とは、六或は未至に依り、後の二無色と後三解脫とは、七或は未至に依りて、滅するなり。

此の中の、四靜慮と乃至十遍處とにつきては、[六五] 餘處に廣說するが如し。

[六六] 其の四靜慮は各〻自地の繫のと及び不繫のとなり。自地の繫なるは、各〻自と下との根本地と未至定と靜慮中間と及び次上の近分とに依りて滅す。

然も所說の定の有漏と無漏とのにつきては、前の分別の如し。

所說の滅につきては、此の中に、種類の滅と究竟の滅との二說の差別有ること無し。各〻、但、是れ一地のみの繫なるを以ての故に。

[六七] 四無量中の、喜無量は、初二靜慮繫なるが故に、二或は未至に依りて滅するなり。餘の三無量は四地の繫なるが故に、四或は未至に依りて滅す、中に於ける差別は、應に隨ふこと前の如し。

然も所說の定の有漏のと無漏のとにつきては、前の分別の如し。

所說の滅につきては、有るが說く、「種類の滅に依りて說く」と。有るが說く、「究竟の滅に依りて說く」と。此等は其の所應に從ふこと前の分別の如し。

【六三】本節は、發智頌文の、「滅依定」八問中の第七として、四靜慮等の一一が、何の定に依りて滅するやを明にする段なり。

【六四】**總じて四靜慮乃至、十遍處の定に依る滅。**

【六五】餘處とは、結蘊第二中、十門納息第四、即ち婆沙第八十卷初頭より、第八十五卷に至る間等に詳論するを指す。

【六六】**四靜慮各自の定に依る滅に就きて。**

【六七】**四無量各自の定に依る滅に就きて、**

然も未至定中に於ては、皆、唯、無漏のみを攝すること應に知るべきなり。

六八 四無色中の前三無色は、各ゝ自地繫のと及び不繫となり。自地の繫なるは、各ゝ自と下との根本地と未至定と靜慮中間と及び次上の近分とに依りて滅す。後の一無色は、唯、自地の繫のみ有り、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。

然も所説の定の有漏のと無漏のとにつきては、前の分別の如きも、後の一無色に於ては、唯、應に無漏定に依りてのみと説くべし。

所説の滅につきては、此の中にも亦、種類の滅と究竟の滅との二説の差別無し。亦、各ゝ唯、是れ一地のみの繫なるが故に。

六九 八解脫中の初二解脫は、喜無量の説の如く、下三無色解脫は下三無色の説の如く、後の二解脫は、第四無色の説の如し。淨解脫は第四靜慮地の繫なるが故に、四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊處の近分とに依りて滅す。

此の中所説の定と及び所説の滅とは、皆第四靜慮の説の如し。

七〇 八勝處中の前四勝處は初めの二解脫の説の如し。後の四勝處は淨解脫の説の如し。

七一 十遍處中、前八遍處は後四勝處の説の如し。空無邊處遍處は唯、自地の繫のみなるが故に、五根本と未至定と靜慮中間と識無邊處の近分とに依りて滅す。識無邊處遍處も亦、唯、自地の繫のみなるが故に、六根本と未至定と靜慮中間と無所有處の近分とに依りて滅す。

然も此の中、所説の定につきての有漏と無漏とは、前の分別の如し。

所説の滅にも亦、種類の滅と究竟の滅との二説の差別無し。亦、各ゝ唯、是れ自地の繫のみなるが故に。

七二 第五十三節　他心智と世俗智とは何の定に依りて滅するに就きて

【六八】四無色各自の、定に依る滅に就きて、

【六九】八解脫各自の、定に依る滅に就きて、

【七〇】八勝處各自の、定に依る滅に就きて、

【七一】十遍處各自の、定に依る滅に就きて、

【七二】本節は、發智頌文の「滅依定」八間中の最後間として、他心智と世俗智とが何の定に依りて滅するやを其一二の場合につきて論究する段なり。

【本論】[七三]他心智と世俗智とは、何の定に依りて滅するや。答ふ、他心智は四或は未至に依りて滅し、世俗智は七或は未至に依りて滅するなり。

此の中、他心智と世俗智とに就きては、[七四]餘處に廣說するが如し。

[七五]然も他心智は四地の繫と及び不繫となり。初靜慮繫のは、初靜慮と未至定と靜慮中間と第二靜慮の近分とに依りて滅し、乃至第四靜慮繫のは四靜慮と未至定と靜慮中間と空無邊處の近分のとに依りて滅す。

然も此の中の所說の定につきての有漏と無漏とは前の分別の如し。

所說の滅につきては、有るが說く、「種類の滅に依りて說く」と。有るが說く、「究竟の滅に依りて說く」と、此等も亦、所應に隨ふこと、前の分別の如し。

[七六]世俗智は九地の繫なり。欲界繫なるは、未至定に依りて滅し、乃至非想非非想處繫なるは、七根本と未至定と靜慮中間とに依りて滅す。然も此の中、所說の定と及び所說の滅とにつきては、皆所應に隨ふこと、前の分別の如し。此に由るが故に、七或は未至に依り滅すと言ふなり。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第百七十三 終

【七三】總じて他心智と世俗智との定に依る滅。

【七四】餘處といふ中、世俗智に就きては、特に智蘊第三、修智納息第四卽ち婆沙百〇六卷（毘曇部十二、頁一三三）の八智各論の節中の、世俗智に關する項と、又、學支納息の婆沙第九十七卷（毘曇部十一、頁三四三）の世俗の正見と正智との項等を參照すべし。又、他心智に就きては、特に、右の八智各論中の他心智に關する項の外、第九十九卷（毘曇部十二）他心智論に詳し。

【七五】特に、他心智の地繫分別と、其の定に依る滅に就きて。

【七六】特に、世俗智の地繫分別と、その定に依る滅に就きて。

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月二十日發行
昭和十二年五月五日再版

國譯一切經　毘曇部十五

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝・三九四四番

製本所　　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 8786